

拓殖大学大学院 言語教育研究科

言語教育学専攻 博士論文

日本語における「ほめ」表現に関する通時的研究

2018 年 3 月

指導教授：阿久津 智教授

畢 文涛

目 次

第1章 序論

1.1 研究の背景	4
1.2 研究の目的	6

第2章 先行研究

2.1 「ほめ」に関する主な研究	7
2.2 「ほめ」の定義に関する先行研究	10
2.3 「ほめ」の分類に関する先行研究	14
2.4 「ほめ」の機能に関する先行研究	17
2.5 「ほめ」とポライトネスに関する先行研究	18
2.6 先行研究から見た課題	22

第3章 「ほめ」に関する調査の概要

3.1 調査の目的	23
3.2 調査の対象	23
3.3 調査の方法	27

第4章 「ほめ」に関する調査の結果

4.1 結果の概要	29
4.2 用例の分析	29
4.2.1 奈良時代の用例	29
4.2.2 平安時代の用例	31
4.2.3 鎌倉時代の用例	42
4.2.4 室町時代の用例	52
4.2.5 江戸時代の用例	62
4.2.6 明治時代の用例	72
4.2.7 大正時代の用例	79

4.2.8 昭和時代の用例	86
---------------	----

第5章 「ほめ」に関する考察

5.1 「ほめ」の表現	94
5.1.1 「ほめ」の表現の分類基準	95
5.1.2 資料に現れた「ほめ」の表現	97
5.1.3 「ほめ」の表現の分類結果	102
5.1.4 「ほめ」の表現に関する考察	105
5.2 「ほめ」の人間関係	107
5.2.1 「ほめ」の人間関係の分類基準	107
5.2.2 資料に現れた「ほめ」の人間関係	109
5.2.3 「ほめ」の人間関係の分類結果	114
5.2.4 「ほめ」の人間関係に関する考察	123
5.3 「ほめ」の対象	
5.3.1 「ほめ」の対象の分類基準	126
5.3.2 資料に現れた「ほめ」の対象	129
5.3.3 「ほめ」の対象の分類結果	139
5.3.4 「ほめ」の対象に関する考察	146
5.4 「ほめ」に対する返答	149
5.4.1 「ほめ」に対する返答の分類基準	149
5.4.2 資料に現れた「ほめ」に対する返答	152
5.4.3 「ほめ」に対する返答の分類結果	157
5.4.4 「ほめ」に対する返答に関する考察	159

第6章 結論

6.1 調査結果・分析・考察のまとめ	161
6.2 「ほめ」に関する結論	166
6.3 今後の課題	168

参考引用文献·····	170
謝辞·····	174
参考資料 I ·····	175
参考資料 II ·····	215

第1章 序論

1.1 研究の背景

人は相手との円滑なコミュニケーションを維持するため、様々な「言語行為」を行っている。この言語行為とは、言語行為論の用語であり、言語行為論では、言葉を口に出して言うことが行為を行うこと（言語行為）であるとする。言語行為論は、英国の哲学者オースティン J.L. (Austin) によって最初に提唱された哲学の名称から来ている。小泉（2001）は言語行為（Speech Act）の研究は、語用論及び言語哲学の研究分野の一つであると述べている。

言語行為は、いくつかに分類される。オースティン(Austin1962)は、意味機能論の立場から、あらゆる言語行為（発話行為）^{注1}を、「発語行為」(locutionary act)、「発語内行為」(illocutionary act)、「発語媒介行為」(perlocutionary act)の3つに分類している。サール(Searle1969)は、オースティン(Austin)が、事実確認型発話と行為遂行型発話を区別したことをうけて、言語行為（発話行為）を「発話行為」(utterance act)、「命題行為」(propositional act)、「発語内行為」(illocutionary act)、「発語媒介行為」(perlocutionary act)の4つに分類した。また、サール(Searle1979)は、発語内行為を「断定型」（言明、主張など）、「行為拘束型」（約束、保証など）、「行為指示型」（要求、質問、指令など）、「表出型」（感謝、謝罪、祝福、褒めなど）、「宣言型」（辞任、承認、除名など）の5つに分類した。これとは別に、伍（2006）は、言語行為を「平叙・依頼・命令・感謝・謝る・祝う・挨拶・拒否・ほめる・別れる」などに分類している^{注2}。これらの分類では、本稿で扱う「ほめる」という行為を言語行為の一つと見なしている。「ほめ」は、どの言語社会においても、大きな役割を果たしていると思われる。

「ほめ」は、相手のよいところに関心を表し、肯定的に評価する言語行為である。一步進んで言えば、相手ともっと親しくなり、好意を持ってもらいたいという、人間関係において基本的であり、かつ良心的な言動である。Manes（1983）は「「ほめる」という行為は、話者とその相手が連帯感を確立する又は強化する機能を持ち、その機能を妨げる誤解や不和を起こさないようある形式が働く」と述べている。しかし、「ほ

め」は、形式化された表現を持たず、自由に多様な表現が使われている。また、「ほめ」に関しては、言語社会の間で、その評価と認識に大きなずれが存在し、言語接触過程において様々な誤解や摩擦を引き起こすことも少なくないようである。これに関連して、たとえば、中国留学生が日本人の先生の講義を受けて、とても勉強になったと感じて、先生の講義をほめる場合、先生に「先生の授業はとてもよかったです。」とか「とてもすばらしい授業でした。」と言う場合があるだろう。一方、日本語母語話者は「先生のおかげで、いろいろ勉強になりました。」などと言うであろう。守屋他（2003）は「ねぎらい・いたわり・与益・許可与え・ほめ」の発話行為は、本来は上位者が下位の立場の者かあるいは全く同等の相手にのみ向けることができるものであるという。これによれば、「先生の授業はとてもよかったです。」のような発話行為は、プラスの評価であっても、上位者に対しては不適切な表現となる。日本語の学習者が先生に感謝の気持ちを率直に伝えようと思っても、かえって、日本人の先生を不愉快な気持ちにさせ、悪印象を与えてしまう結果になる場合もある。このように、「ほめ」は、適切に用いられれば、コミュニケーションの最上の潤滑油になる可能性を秘めているが、場合によっては、逆に摩擦の原因になってしまう可能性もないわけではない。

「ほめ」は円滑な人間関係の構築、維持する言葉として、さまざまな場面で用いられる。「ほめ」表現は、あらゆる言語の中に存在している重要な社会言語現象であり、感謝、謝罪、依頼表現などと同じように日常生活の中で、頻繁に行われている言語表現の一つである。「ほめ」表現の機能は、Manes(1983)が指摘したように、「社会関係の創造・保持という対人交流上の主機能を持ち、社会的潤滑油として作用している」^{注3}という大事なストラテジーの一つである。人間の生存している環境の中で、コミュニケーションをスムーズに進め、よりよい人間関係を作ったり、維持したりするには、「ほめ」表現はなくてはならないものである。また、日本は縦社会の構造といわれ、上下関係を考えて生きていかなければならず、その関係をスムーズにすることは大事なことになっている。話し手と聞き手の立場の差は両者のコミュニケーション・スタイルに影響を与える。したがって、「ほめ」表現の使用にもその影響があるに違いない。

1.2 研究目的

本稿では、古代から近現代までの日本語における「ほめ」表現について、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の作品の中の「ほめ」表現に焦点を当て、分析・考察するものである。その表現形式、人間関係、対象、返答の考察を通じて、「ほめ」表現の様相を通時的に明らかにすることを目的とする。特に、古代から近現代までの「ほめ」と「現代」の話し言葉の「ほめ」とを比べることで、「ほめ」の時代的な変化を探りたい。

第2章 先行研究

2.1 「ほめ」に関する主な研究

1990年代に入ってから、日本語教育や社会言語学の分野で言語行動に関する研究が多くなされてきた。「ほめ」表現の研究を会話分析の分野にもっとも早く取り込んだのは欧米の言語学者である。主な研究は、Wolfson(1983)、Barnlund&Araki(1985)、Holmes(1986、1988)、Herbert(1989)であるが、1980年代の後半からは日本でも「ほめ」が注目され、90年代以降、それについての研究がだんだん盛んになってきた。主な研究は、横田(1985)、熊取谷(1989)、丸山(1996)、川口他(1996)、寺尾(1996)、平田(1999)、大野(2002、2003、2007、2010)、古川(2003)、山路(2005)、金(2012)などである。まず、本稿に関わる主な先行研究を紹介したい。

Wolfson(1983)によれば、アメリカ文化圏における「ほめ」は、ほぼ親密な間柄、同等的な地位や年齢において頻繁に行われる。また、地位や年齢が同等でない際には、目上から目下へ、年配から若者へ行われる「ほめ」が多い。また、Wolfson(1983)は、米語にある「ほめ」の対象を外見と能力に、また、外見を主要対象にわけ、また、「ほめ」には、お祝い、謝罪、感謝、和らげた批判などの機能もあると説明している。

Barnlund&Araki(1985)は、日本人とアメリカ人のほめる行為とその返答についての比較調査を行った。結果として、アメリカ人がほめられたことをそのまま受け入れ、説明を加えて話を続けるケースが多かったのに対して、日本人はほめられたことの正当性に疑問を投げかけ、ついで笑ったり何も言わなかったり、否定したりするケースが多いと指摘している。

Holmes(1986、1988)は、「ほめ」の対象に対する分析を通して、人々が主に所持物、外見、能力、性格についてほめることを明らかにした。特に、多くの女性は外見をほめる傾向があるが、男性はあまりほめないことや、男性同士において所持物をほめることはFTA(インポライトネスにおける根源的なフェイス侵害行為)になる恐れがあると指摘した。また、能力に関しては、男性がよくほめ、性格については男女共にあまりほめないと述べている。

Herbert(1989)は、「ほめ」の対象は、ある社会がどのような対象物に肯定的価値

をおいているのかを反映していると述べている。

横田 (1985) は、本人と家族がほめられたときの返答スタイルについて、日本語と英語で比較調査を実施し、返答を肯定、回避、否定の三つに分類した。そして、日本人でもアメリカ人でも、多くの人が肯定、否定或いは回避の言葉の後ろに、さらにいくつかの文を付け加えていることを明らかにしている。

熊取谷 (1989) は、日本語の「ほめ」対象について、①才能・知識・技術、②容姿・服装・所持品、③努力、④性格の 4 カテゴリーを挙げている。さらに、「ほめ」の機能を、①社会関係の創造・保持のため、②後続する反論、批評などを和らげるため、③会話開始の表現、④皮肉、⑤後続する依頼を成功させるため、という五つにまとめている。

丸山 (1996) は、大学生を調査対象に、日本人のほめ行動について、会話者の性別、「ほめ」の対象となる事柄、ほめ手と受け手の地位（主に学年差）、「ほめ」の返答、「ほめ」の文型の観点から分析を行い、ほめ行動の特徴を明らかにした。つまり、丸山は、性差や地位差を「ほめ」に影響する要因として、「ほめ」や「ほめ」の返答を考察した。

川口他 (1996) は、待遇表現における「ほめ」を、①特に「相手」を意識することなく、自己の感情・認識などを表出すること自体を意図した「自己表出表現」、②自己の感情・認識、知識・情報などが「相手」に理解されることを意図した「理解要請表現」、③自己の感情・認識などに基づく「表現内容」が「相手」に理解されるだけでなく、それによって「相手」あるいは「自分」（またはその「両者」）が何らかの行動を起こし、その行動で「表現内容」が実現されることを意図した「行動展開表現」の 3 種に分類して、さらに話し手の表現意図によって、「ほめ」を「実質ほめ」と「形式ほめ」に分類して論じている。

寺尾 (1996) は、テレビのトーク番組と日常会話からの聞き取りを調査対象をとし、ほめ言葉への返答スタイルの特徴を分析した。直接的な打ち消しの返答は典型的スタイルではないこと、「日本的な謙譲の美德」が様々な表現の中で発揮されていることにも言及した。

平田 (1999) は、日本人母語話者を対象とし、ほめ言葉への返答について調査を行った。返答の仕方がどのように分類されるのか、年齢・地位・性別により返答の仕方にどの

ような差異が生じるのか、日本語教育現場にどのように応用できるのかを考察した。

古川（2003）は、書き言葉データを用いて、「対人関係」「ほめの対象」「ほめの基準」という三つの要因から「ほめ」の特徴を分析した。その結果、上から下への「ほめ」を行う場合が、対等の場合と下から上への場合より多いこと、上下関係より相手との親しさが優先されること、また対象としては行動・態度が多く用いられると報告している。

山路（2005）は、「ほめ」表現を相手を評価する発話として、発話意図（親和的意図か攻撃的意図か）、伝達内容（実際に伝えようとしている評価が肯定的か否定的か）、発話内容（形式上の評価が肯定的か否定的か）という三方面から整理している。

近年、「ほめ」についてもっとも多く、多方面から総合的研究をしたのは、大野（2002、2003、2007、2010）と金（2005、2012）である。

大野（2002、2007）は、「ほめ」の機能を対人的機能と談話構成に関する機能の2種類に分類した上で、対人的機能を、情報伝達、相手への働きかけ、人間関係の確立、維持・強化という四つに、談話構成に関する機能を、談話開始・終了、話題転換、相手に対する談話従事への促進表現・主体の積極的な談話従事の表明、という三つに分けている。

大野（2003）は、「ほめ」の対象を、「外見、持ち物、内面（才能・達成、性格・行動、人全体、その他）、作品、家族、その他」の九つに分類している。その結果、人間関係に関わらず、「性格・行動」や「作品」、「才能・達成」が対象になりやすい傾向があると指摘している。

大野（2010）は、シナリオの発話資料を用い、日本語の談話における目上に対する「ほめ」と「謙遜」の多角的な分析によって、両言語行動における「働きかけ」と「わきまえ」の実態と、相互の関連性の一端を明らかにしている。

金（2005）は、日本と韓国の大学生同士の会話を録音し、「ほめ」に関するやり取りを文字化したデータを分析して、「ほめ」の対象を中心に、その共通点と相違点を明らかにした。その結果、日韓の大学生にとっては「遂行」がほめやすい対象であること、「外見」が日本語より韓国語で多く使われるという違いが見られる。これも両国の文化価値観を理解するのに役に立つことも報告されている。

金（2012）は、日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究を詳しく行った。対照

研究・談話研究・ポライトネス理論などの理論の背景を概観した上に、文字化した日韓の会話データと「ほめ談話」を分析し、「ほめ」表現、ほめられる具体的な対象、ほめられたときの反応、さらにほめの談話の流れを分析し、日本語と韓国語の会話に見られる「ほめ」言語行動の類似点と相違点を明らかにしている。

2.2 「ほめ」の定義に関する先行研究

「ほめ」をいかに定義するかは、「ほめ」を研究する際に、非常に基礎的かつ重要な問題となる。「ほめる」という言葉の意味について、代表的な辞書を調べてみると、次のような意味説明が出ている。

(一) 『日本国語大辞典』第二版

ほ・める【誉・褒】〔他マ下一〕

- ① 祝う。祝福する。ことほぐ。*万葉-二〇・四三四二「真木柱（まけばしら）宝米（ほめ）て造れる殿の如いませ母刀自面変（おめがは）りせずく坂田部首麻呂」
- ② 高い評価を与え、はえあるようにいう。たたえる。称賛する。
- ③ 感心する。感嘆する。

(二) 『広辞苑』第六版

【ほめる】〔他下一〕（ホは穂（秀）。傑出して秀れていると認める意）

- ① 祝う。ことほぐ。祝福する。万葉集（20）「真木柱ほめて 造れる殿のごといませ母刀自面かはりせず」
- ② 物事を評価し、よしとしてその気持を表す。たたえる。賞賛する。天草本平家物語「清盛これを聞いて、ようこそしたれとほめられた」。「子供をほめる」

(三) 『大辞林』第三版

ほ・める【▽誉める・褒める】（動マ下一）

- ① 高く評価していると、口に出して言う。たたえる。「よく頑張ったとー・められる」「上手な字だとみんながー・める」
- ② 祝う。祝福する。〔「ほめる」という動詞は、目上の人に対しては用いることができない。それに対して「たたえる」は文章語的で、ある人が社会的に見て好ましいことをした場合に、目上にも目下にも使えるが、自分の家庭内の人には使いにくい〕

(四) 『大辞泉』第二版

ほ・める【褒める／▽誉める・】（動マ下一）

- ① 人のしたこと・行いをすぐれていると評価して、そのことを言う。たたえる。「勇気ある行動をー・める」「手放しでー・める」
- ② 祝う。ことほぐ。

(五) 『新明解国語辞典』第七版

ほめる【誉める】（他下一）

〔長所・りっぱな行い・努力した点などを認めて〕良く言う。反そしる・けなす〔ほめるとも書く〕

(六) 『明鏡国語辞典』第二版

ほめる【褒める（誉める・称める・賞める）】（他下一）

相手の行為・業績などをすぐれたものとして評価し、そのことを口に出して言う。ほめたたえる。

「先生が生徒をほめる」、「子供の作文をほめる」

以上をまとめてみると、「ほめる」の意味特徴は、(1) 対象を評価する、(2) それを口に出して言う、という結論を出すことができると思われる。「ほめ」には複数の要因が絡んでいることが容易に推測されるが、実際にいくつの要因が「ほめ」に関係し、それがどういった時に「ほめ」になるのかということは、どの辞書でもまった

く触れられていない。

一方、これまでの研究では、何をもって「ほめ」とするのが明らかでない。先行研究の中で「ほめ」の定義を試みているのは、Holmes(1988)、小玉(1996)、古川(2003)、大野(2010)、金(2012)である。

「ほめ」の定義について、Holmes(1988)は以下のように述べている。

A compliment is a speech act which explicitly or implicitly attributes credit to someone other than the speaker, usually the person addressed, for some "good" (possession, characteristic, skill, etc.) which is positively valued by the speaker and hearer.

(Holmes, 1988:446)

これによると、「ほめる」とは、話し手のみがプラスに評価するものではなく、話し手、聞き手の両方がその価値を認めるものを対象とする。さらに、ほめる表現においては、明示的、暗示的な場合があるとしている。

しかし、この定義では、挨拶との区別があいまいである。いわゆる社交辞令といわれる「ほめ」を、挨拶とどう区別するのかという点が明確でない。また、この定義にある「話し手以外の誰かに対して、ほとんどの場合聞き手であるが」では、ほめる行為の及ぶ相手の範囲が広すぎるという問題がある。

この点を考慮に入れ、小玉(1996)は次のように定義し直している。

ほめるという言語行為は、話し手が聞き手あるいは聞き手の家族やそれに類する者に関して「よい」と認める様々なものに対して、聞き手を心地よくさせることを前提に、明示的あるいは暗示的に、肯定的な評価を与える行為である。

(小玉, 1996:61)

小玉(1996)の定義は、Holmes(1988)の定義に基づき、日本語母語話者のよく見られる家族へのほめを考慮に入れた上で、「ほめ」を話し手が聞き手あるいは聞き手の家族やそれに類する者に関して、「よい」と認める様々なものに対して、聞き手を心

地よくさせることを前提に、明示的あるいは暗示的に、肯定的な評価を与える行為ととらえている。Holmes(1988)の定義に比べ、ほめる相手をより明確にしておき、さらに、言語形式だけでほめを判断するのではなく、機能的な面も視野に入れているという特徴を持つ。「ほめ」の基本的機能が、話し手と聞き手の友好関係を築き保つことや、連帯感を強化することに大きく関係していることも分かる。

また、書き言葉を対象に「ほめ」表現を分析している古川(2003)は、小玉(1996)と違った立場を取り、「第三者ほめ」も含めて、「ほめ」を次のように定義している。

ほめとは、ほめの対象にほめ手が価値付けをすることにより、ほめの対象や、対象にかかわりのある人、もの、ことの価値を上げる言語行為である。

(古川, 2003:34)

古川(2003)は、ほめ手の目の前にいない人物に対する「ほめ」については第三者に対する広い意味での「ほめ」と捉える。この定義は、ほめをほめ手の価値付けに基づくものとし、また、対象の価値を上げる言語行為と定めた点で、前2者の定義より厳密になっている。

それ以外に、大野(2010)、金(2012)は以下のように述べている。

相手自身、あるいは相手に関連する「良い」と認めうるものごとについて、明示的あるいは暗示的に肯定評価を与えることによって、相手への好感情を表す言語行動。

(大野, 2010:337)

「ほめ」には「誰についてほめを行うか」という「ほめの相手」、「何についてほめを行うか」という「ほめの対象」、「ほめをどう実現するか」という「ほめの表現」、「なぜほめを行うか」という「ほめの意図」の四つの要素から「ほめの判断基準」を抽出し、「ほめ」は、話し手が聞き手を心地よくさせることを意図し、聞き手あるいは聞き手に関わりのある人、物、ことに関して「良い」と認める様々なものに対して、直接あるいは間接的に、肯定的な価値があると伝え

る言語行動である。

(金, 2012:43)

これらの定義を見ると、「ほめ」に関する主な研究では、「目上から目下へ」という関係に限定せずに、「ほめ」を「相手に肯定評価を与える」、「相手への好感情の伝え」と定義していることがわかる。これは日常生活で言う「ほめ」よりも広い。

以上のような「ほめ」の定義に従い、いくつかの要素を考慮に入れて、「ほめ」を認定する必要があると思われる。

- ① 「ほめ」の相手：聞き手。
- ② 「ほめ」の対象：聞き手にかかわりのある人/物/ことのうち、ほめ手が評価するもの。
- ③ 「ほめ」の意図：聞き手を心地よくさせる。
- ④ 「ほめ」の方法：肯定的な評価語あり（明示的ほめ）、肯定的な評価語なし（暗示的ほめ）

本稿は、以上の標準に拠って、「ほめ」の定義を以下のように定める。

「ほめ」は、話し手が聞き手を心地よくさせるために、聞き手に関わる人、物、ことなどに対して、明示的または暗示的に肯定的に評価する言語行動である。

2.3 「ほめ」の分類に関する先行研究

川口他（1996）は、言語表現行為をその表現意図から、「1. 自己表出表現、2. 理解要請表現、3. 行動展開表現」に分けている。「ほめること」は、表現内容が理解されることを表現意図とするタイプとして、理解要請表現に分類されるが、これはさらに、話し手の意図を基準として、理解要請表現の下位分類である「感情、意思伝え」に属する「実質ほめ」と、「表現形式伝え」に属する「形式ほめ」とに分けられている。そして、「実質ほめ」と「形式ほめ」の相違点を考察するために、ほめ行為を「待遇表現」として捉え、「相手」、「場」、「内容」、「表現方法」、「表現意図」の側面から検討している。

このうち、「実質ほめ」は、ほめ対象について心から高い評価をしたい時のほめで

ある。例えば、親や先生が運動会で頑張って走った子供に「よく走ったね」と言うような場合である。これは、本当にほめたくて、その気持ちを相手に伝えようとするほめ行為であるため、「理解要請表現」の中の「感情・意志伝え」に分類されるが、この行為の相手は親しい同年輩の人、後輩、部下、家族などに限られる。「実質ほめ」は、相手の能力や趣味などの評価にもつながるため、「実質ほめ」ができるのは、指導者や監督、ある分野のプロなどに限られる。

この「実質的ほめ」に関して、川口他（1996）は、次のような例で説明を加えている。留学生が日本人の先生に「先生は授業が上手ですね」と言うのは不適當だが、中国人留学生が日本人の先生に「先生は中国語がお上手ですね」と言うことは可能である。これは、中国人留学生が中国語のネイティブとして中国語の知識を持っているので、「目上を評価してはいけない」という制限が働かなくなるためであるという。

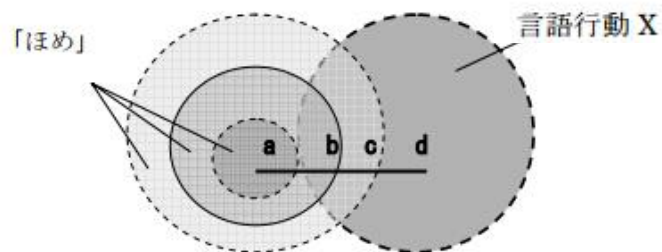
「実質的ほめ」に対して、「形式ほめ」は、ほめることを目的としたものではなく、別の意図でほめ発話行為である。これは、「実質ほめ」のような本心からのほめではなく、コミュニケーションを円滑に行うための手段の一つとして行われる。「形式ほめ」は目上の人にも使用可能であり、その場合は敬意を表明するような働きをすることになる。前に挙げた生徒から先生に対する「大変勉強になりました」という表現は、たとえ勉強にならなかった場合にも、先生へのお礼、一種の尊敬を表す表現としては使用でき、先生とのコミュニケーションを円滑にさせることができる。^{注3}

川口他（1996）による「ほめること」に関する「表現意図」からの考察は、熊取谷（1989）の述べた「ほめ行為の機能とは良好な人間関係を作り出すか維持することである」という点と基本的に一致するが、「実質ほめ」と「形式ほめ」との区別を議論のための枠組みとして提出した点が新しい。さらに、この枠組みは、どのようにほめ行為を行い、どのようにほめ行為に対応していけば、どのような人間関係が創出され、それがどのように維持されていくかといった構造を示すことを可能にした。これは、「ほめ」を「依頼」や「忠告」などの表現と関連させて、待遇表現全体の中に位置づけることを可能にするものと言えよう。

山路（2005）は、「ほめ」とその対極である「けなし」を「相手を評価する発話」とし、「発話意図」（親和的意図か攻撃的意図か）、「伝達内容」（実際に伝えようとしている評価が肯定的か否定的か）と「発話内容」（形式上の評価が肯定的か否定的か）

の三つの軸によって、ほめ発話行為とそれに隣接する言語行動とを分類・整理した。それは、「親和的意図による明示的肯定的評価、親和的意図による否定的評価を装った肯定的評価、親和的意図による肯定的評価を装った否定的評価、親和的意図による否定的評価、攻撃的意図による肯定的評価、攻撃的意図による否定的評価を装った肯定的評価、攻撃的意図による肯定的評価を装った否定的評価、攻撃的意図による否定的評価」という八つに分類される。

大野(2010)は、日本語の談話における、目上に対する「働きかけ」と「わきまえ」としての「ほめ」について考察を行い、「ほめ」に関わる表現を次のように分類している。



- a 評価語による「ほめ」
- b 評価語による言語行動 X
- c 言語行動 X の表現形式による「ほめ」
- d 言語行動 X の表現形式による言語行動 X

a は、相手の行為に対する、評価語を使用した明示的なほめである。例えば、相手が相手自身の部屋をきれいに掃除したことに対し、「きれいになった」、「頑張って掃除したね」と評価する場合である。

b は、表現上はほめと同じく評価語を用いるが、ほめ以外の言語行動として認識される場合である。例えば、自分の部屋を掃除してくれた相手に「きれいになった」と言う場合は、評価語が使用されているが、「ほめ」以外の言語行動（この場合は感謝）として認識される。

c は、ある言語行動 X（大野によれば、事実指摘、羨望、感情、感謝、ねぎらい、

祝賀)の表現形式を用いて暗示的に相手をほめる場合である。例えば、小学校で漢字を間違えた児童に教師が「それは違うけれど、そういう違いはとても大事だね。おかげでみんなが気を付けられる。どうもありがとう」と言う場合は、感謝表現を述べることにより相手を間接的にほめている。

d は、ある言語行動Xが、単に本来の言語行動Xとして認識される場合である。例えば、自分の部屋を掃除してくれた相手に「ありがとう」と言う場合は、単なる感謝として認識される。

本稿では、特に「ほめ」の分類を行わずに、「ほめ」について分析・考察していく。

2.4 「ほめ」の機能に関する先行研究

「ほめ」の機能について、各研究者によって様々なレベルで論じられている。

Manes(1983)が指摘したように、「社会関係の創造・保持という対人交流上の主機能を持ち、社会的潤滑油として作用している」^{注4}という大事なストラテジーの一つである。小玉(1996)、古川(2003)、を参考にすると、「ほめ」は相手に関する何らかの対象について肯定的評価を行ない、相手を気持ちよくさせるものであると説明できる。

しかし、Holmes(1986)は、「ほめ」の機能について、相手に肯定的な評価を与えることによって友好的な関係を築き保つこと、話し手と聞き手との連帯感を強化する一方、潜在的に相手のフェースを脅かす恐れもあると述べている。古川(2010)も、実際に用いられるほめの中には、むしろその反対に働くことも、反対を意図して用いられることもある。つまり、皮肉や嫌みなど、一見「ほめ」をよそおいつつ、本来はまったく逆の方向を意図する「ほめ」であると指摘している。具体的な分類は以下のとおりである。

- <肯定的なもの> 励まし、慰め、感謝、好悪の表現(「好」に傾く)、あいさつ・会話のきっかけ・相手への関心を示す/関係を強化する
- <肯定的でないもの> 間接命令、FTA 軽減、FTA、追従・へつらい、お世辞、皮肉、嫌み

また、大野（2007）は、「ほめ」の機能を対人的機能と談話構成に関する機能との2種類に分類している。対人的機能の詳細は、以下のとおりである。

	プラス機能	マイナス機能	その他
一次機能	肯定評価、事実指摘、好感情伝達 羨望、感謝、ねぎらい、祝賀 励まし、株を上げる、挨拶、相づち、 負担和らげ	皮肉 批判 負担増大	ワキの相手 へのメッセ ージ
二次機能	良い気分にする 表現主体に好意をもたせる →コミュニケーション、人間関係の 円滑化、やる気をおこさせる	嫌な気分にする	

しかしながら、実際の文脈における個々の直接的な機能がどうあれ、最も基本的な「ほめ」の機能は、対人関係において相手との親密な関係を強化する社会的潤滑油の働きということで見解の一致が見られる。

2.5 「ほめ」とポライトネスに関する先行研究

ポライトネスに関する諸説の中でも、最も影響力を持っているのは、Brown and Levinson（以下、B&L1987）のポライトネス理論である。この理論には、「フェイス（face）」という概念が存在する。これは Goffman（1967）によって提唱された概念である。

フェイスという言葉は、ある接触のあいだに彼がとっていたと他の人々が考える立場によって、事実上みずから主張する積極的な社会的価値、と定義することができる。フェイスとは、承認された社会的属性という形で描かれた自己イメージ—それは、人が自己を良く見せることによって自分の職業や宗教について体裁を

作る場合のように、他の人々も共有するかもしれないイメージであるけれどもーのことである。

広瀬・安江訳（1986:92）

この Goffman（1967）の提唱するフェイスという概念と基礎に、B&L（1987）は人と人との関わり合いに関して、ポジティブ・フェイス（positive face）とネガティブ・フェイス（negative face）という 2 種類に分類して、このフェイスを脅かさないように配慮して円滑なコミュニケーションを維持していこうとする言語行動がポライトネスであると指摘している。宇佐美他（2001）はポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスをそれぞれ以下のように説明している。

「ポジティブ・フェイス」とは、他者に理解されたい、好かれたい、仲間だとみなされたい、つまり、「他者に近づきたい」という「プラス方向への欲求」である。一方、「ネガティブ・フェイス」は、他者に邪魔されたり、立ち入られたくない、つまり、「他者と一定の距離を置きたい」、ここから先へは踏み込んでほしくないという「マイナス方向に関わる欲求」として捉えられる。

宇佐美他（2001:68-72）

また、B&L（1987）は話し手と聞き手との関係からポジティブ・ポライトネスの 15 個のストラテジーを以下の三つのカテゴリーに、そしてネガティブ・ポライトネスの 10 個のストラテジーを以下の五つのカテゴリーに分類している。

ポジティブ・ポライトネスの三つのカテゴリー：

A : Claim common ground（お互いの共通の基盤を示せ）

ストラテジー 1-8

Strategy1 : Notice, attend to H(his interests, wants, needs, goods)

（聞き手の興味、欲求、必要、持ち物に注目する）

Strategy2 : Exaggerate(interest, approval, sympathy with H)

（聞き手に対する興味、称賛、共感を誇張する）

Strategy3 : Intensify interest to H (聞き手の興味を強調する)

Strategy4 : Use in-group identity makers

(内集団であることを示す標識を用いる)

Strategy5 : Seek agreement (一致を求める)

Strategy6 : Avoid disagreement (不一致を避ける)

Strategy7 : Presuppose/ raise/ assert common ground

(共通の立場を仮定する、持ち出す、主張する)

Strategy8 : Jokes (冗談を言う)

B : Convey that S and H are cooperators (自分と相手は協力関係にあることを伝えよ)

ストラテジー 9-14

Strategy9 : Assert/ presuppose S' s knowledge of and concern for H' s wants

(聞き手の欲求について、知識や関心を主張する／仮定する)

Strategy10 : Offer, promise (申し出、約束)

Strategy11 : Be optimistic (楽観的である)

Strategy12 : Include both S and H in the activity

(ともに行動することにする)

Strategy13 : Give (or ask for) reasons (理由を与える)

Strategy14 : Assume or assert reciprocity (相互関係を仮定する)

C : Fulfill H' s want for some X (ある X に対する相手の欲求を満足させよ)

ストラテジー 15

Strategy15 : Give Gifts to H (goods, sympathy, understanding, cooperation)

(聞き手に贈り物 (物や共感、理解や協力など) をする)

ネガティブ・ポライトネスの五つのカテゴリー :

A : Be indirect (間接的に言え)

ストラテジー 1

Strategy1 : Be conventionally indirect (慣例的な間接表現の使用)

B : Don' t presume / assume (推定・想定するな)

ストラテジー 2

Strategy2 : Question, hedge (疑問形や垣根表現の使用)

C : Don' t coerce H (相手に強制するな)

ストラテジー 3-5

Strategy3 : Be pessimistic (悲観的な態度を示す)

Strategy4 : Minimize the imposition, Rx (相手へ負荷を最小限にする)

Strategy5 : Give deference (敬意を払う)

D : Communicate S' s want to not impinge on H (相手を侵害しない意思を持つことを伝えよ)

ストラテジー 6-9

Strategy6 : Apologize (謝罪する)

Strategy7 : Impersonalize S and H (話し手と聞き手を非人称化する)

Strategy8 : State the FTA as a general rule (FTA を一般規則として述べる)

Strategy9 : Nominalize (名詞化する)

E : Redress other wants of H' s (相手のほかの欲求を補償せよ)

ストラテジー10

Strategy10 : Go on record as incurring a debt, or as not indebting H

(相手に借りを負うこと、相手に借りを負わせないことを明言する)

日本語訳 : 笹川 (1999 : 156-160)

吉成 (2008 : 99-102)

「ほめ」は、他者に承認されたいというポジティブ・フェイスに配慮したストラテジーの一種で、そのストラテジー1 と 2 に当たると考えられる。その例を挙げる。

Strategy1 : Notice, attend to H(his interests, wants, needs, goods)

(a) Goodness, you cut your hair!

(b) What a beautiful vase this is!

B&L (1987 : 103)

例文からわかるように、相手の変化や持ち物に気づき言及することは、しばしば「ほめる」という言語行為につながる。さらに、Strategy2 では強調したイントネーションを伴う発話を例に挙げている (B&L1987)。

Strategy2 : Exaggerate (interest, approval, sympathy with H)

(a) What a fantastic garden you have!

B&L (1987 : 104)

以上の Strategy1 と Strategy2 により、「ほめ」はポジティブ・ポライトネスの中でも最も顕著なストラテジーだと考えられる。

2.6 先行研究から見た課題

日本語における「ほめ」に関する先行研究に着目すると、対象、表現、機能、人間関係、返答などを中心に検討する研究が多く見られる。

これらの研究により、「ほめ」の対象、表現、機能、人間関係、返答に見られる日本語的ストラテジーなどがかなり明らかにされているが、用例に基づいて分析する実証的な研究は、現在のところ、古川 (2003) 以外、あまり行われていない。古川 (2003) は 1998 年 12 月～2006 年 6 月の朝日新聞の朝刊・夕刊、および時事関係の記事を主に扱う雑誌『AERA』、『新潮文庫』を使用し、「ほめ」表現を分析したが、現代語以外のものについては対象としていない。

そこで、本稿は、古代から近現代までの日本語における「ほめ」について、用例に基づいて、その表現形式、人間関係、対象、返答について、考察する。ここでは、時代を①古代、②中世、③近世、④近現代の四つに分類し、「ほめ」表現の様相を通時的に明らかにし、「ほめ」の時代的な変化を探りたい。

第3章「ほめ」に関する調査の概要

3.1 調査の目的

本稿は、古代から近現代までの日本語における「ほめ」について、その表現形式、人間関係、対象、返答についての考察を通じて、「ほめ」表現の様相を通時的に明らかにすることを目的とする。特に、古代から近現代までの「ほめ」と「現代」の話し言葉の「ほめ」とを比べることで、「ほめ」の時代的な変化を探りたい。

3.2 調査の対象

本調査では、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の作品を資料に、その中に現れる「ほめ」表現をデータとする。『新編日本古典文学全集』（全88巻）は、記紀・万葉などの古代文学から、源氏物語などの中古文学、平家物語などの中世文学、そして近松・西鶴などの近世文学まで、珠玉の名作を集めた古典文学集である。『青空文庫』は、明治から昭和初期の文学作品が大部分を占め、日本を代表する文豪、森鷗外や夏目漱石、芥川龍之介、太宰治などの1万点以上の作品が収録されている。

本稿で基準とする時代区分は下記のとおりである。

古代：西暦710年-1185年（主に奈良・平安時代）

中世：西暦1185年-1573年（主に鎌倉・南北朝・室町時代）

近世：西暦1573年-1868年（主に安土桃山・江戸時代）

近現代：西暦1868年-現在（主に明治・大正・昭和・平成時代）

区分	時代	用例数	出典
古代 (110)	奈良時代	12	『逸文（風土記）』『古事記』『日本書紀』『萬葉集』
	平安時代	98	『源氏物語』『枕草子』『紫式部日記』『狭衣物語』『大鏡』『落窪物語』『今昔物語集』『梁塵秘抄』

			『日本霊異記』『古今和歌集』『土佐日記』『伊勢物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『うつほ物語』『栄花物語』『とりかへばや物語』『堤中納言物語』
中世 (89)	鎌倉時代	52	『沙石集』『無名草子』『宇治拾遺物語』『正法眼蔵随聞記』『十訓抄』『徒然草』『平家物語』『中世和歌集』『平治物語』『松浦宮物語』『曾我物語』『中世日記紀行集』『保元物語』
	室町時代	37	『義経記』『近世俳句集』『太平記』『狂言集』『筑波問答（連歌論集）』『謡曲集』『連歌集』『室町物語草子集』『風姿花伝（能楽論集）』
近世 (163)	江戸時代	163	『日本漢詩集』『近世俳文集』『近世和歌集』『近世随想集』『松尾芭蕉集』『滑稽本』『東海道中膝栗毛』『近世説美少年録』『仮名草子集』『浮世草子集』『俳論集』『井原西鶴集』『近松門左衛門集』『浄瑠璃集』『川柳』『狂歌』『洒落本』『英草紙』『雨月物語』『春雨物語』『人情本』
近代 (177)	明治時代	33	『幽霊塔』『箸』『無惨』『入社の際』『吾輩は猫である』『女難』『旧主人』『千里駒後日譚』『五大堂』『たけくらべ』『五重塔』『風流仏』『血の文字』『為文学者経』『大つごもり』『野路の菊』『誰が罪』
	大正時代	47	『九谷焼』『どんたく 絵入り小唄集』『青いボタン』『見て過ぎた女』『遺書の一部より』『淡島椿岳—過渡期の文化が産出した画界のハイブリッド—』『ゼンマイの戯れ（映画脚本）』『由布院行』『北斎と幽霊』『内気な娘とお転婆娘』『赤格子九郎右衛門の娘』『二葉亭余談』『貝殻追放 012 向不見の強味』『茶話』『地獄変』『小坂部姫』『泣き笑ひ』『葉』

			<p>と幹』『時計のない村』『子を奪う』『つばきの下のすみれ』『童子』『鳴雪自叙伝』『（大杉栄、伊藤野枝訳）科学の不思議 アンリイ・ファブル』『木綿以前の事』『くろん坊』『名人地獄』『トントンピーピ』『闇夜の梅 三遊亭圓朝』『真景累ヶ淵 三遊亭圓朝』『松の操美人の生理 俠骨今に馨く賊胆猶お腥し 三遊亭圓朝』『大阪の宿』『朝起の人達』『不肖の兄』『或良人の惨敗』『街の子』</p>
	昭和時代 (戦前)	97	<p>『富嶽百景』『怪塔王』『五葉の松』『鏡餅』『空中墳墓』『思い出の記』『業平文治漂流奇談』『正雪の二代目』『早春箋』『根岸お行の松 因果塚の由来』『華厳滝』『名人長二』『菊模様皿山奇談 三遊亭圓朝』『苦心の学友』『露伴の出世咄』『墨汁一滴』『怪談牡丹灯籠 怪談牡丹灯籠 三遊亭圓朝』『毛の指環』『竹取物語』『幕末維新懷古談』『禁断の死針』『（三上於菟吉訳）グロリア・スコット号 コナンドイル』『赤い旗』『子供・子供・子供 のモスクワ』『盲目物語』『鰻に呪われた男』『狂人日記』『思ひ出』『みみずのたはこと』『（中原中也訳）ランボオ詩集《学校時代の詩》』『死人の手』『丹下左膳 日光の巻』『眞間名所』『雪之丞変化』『文楽座の人形芝居』『地球図』『旧聞日本橋』『チンコッきり』『源泉小学校』『原つばの子供会』『碧眼托鉢 馬をさへ眺むる雪の朝かな』『怪人二十面相』『深夜の市長』『剣侠』『風俗時評』『夜明け前 第二部下』『マクシム・ゴーリキイの発展の特質』『マクシム・ゴーリキイによって描かれた婦人』『木の祭り』『母子叙情』『小さな年ちゃん』『檜の若葉』『東海道五十三次』『一步前進</p>

			<p>二歩退却』『ツーン湖のほとり』『新書太閤記 第六分冊』『かぶと虫』『最後の胡弓弾き』『翻訳遅疑の説』『婦人と文学』『列のころ』『このごろ』『日本名婦伝 大楠公夫人』『夫婦善哉』『宝永噴火』『オリンポスの果実』『今日の生活と文化の問題』『南画を描く話』『鴻ノ巣女房』『地軸作戦——金博士シリーズ・9——』『木曾の一平』『千里眼その他』『植物記』『鳥右エ門諸国をめぐる』</p>
現代 (192)	昭和時代 (戦後) 平成時代	192	<p>『花燭』『胡堂百話』『獄中への手紙』『福沢諭吉ペンは剣よりも強し』『連環記』『つめたい メロン』『おじいさんが捨てたら』『おさん』『お蝶夫人』『道標』『二つの庭』『パンドラの匣』『水と砂』『綺堂むかし語り』『豚吉とヒョロ子』『小熊秀雄全集』『與謝野晶子訳 紫式部『源氏物語』『次郎物語』『宇宙戦隊』『対州風聞書』『大脳手術』『夢は呼び交す——黙子覚書——』『行為の価値』『正木不如丘』『斜陽』『備忘録』『浪』『若草物語』『天草の春』『偽りのない文化を』『青銅の魔人』『晶子鑑賞』『勝負師』『(楠山正雄訳) 美し姫と怪獣』『或る女 1 (前編)』『或る女 2 (後編)』『愛と認識との出発』『安吾巷談 07 熱海復興』『巷談師』『無法者』『埋もれた日本——キリシタン渡来文化前後における日本の思想的状況——』『私の履歴書』『十二支考鼠に関する民俗と信念』『私の小売商道』『Sの背中』『転校』『犬物語』『心霊殺人事件』『古事記物語』『「日本石器時代提要」のこと』『人魚のひいさま』『マクシム・ゴーリキイの伝記』『わが町』『牧野富太郎自叙伝 第二部 混混録』『押入れ随筆』『番町皿屋敷』『淪</p>

			落』『妾の半生涯』『にゆう』『閉戸閑詠』『現代 訳論語』『釜ヶ崎』『交遊断片』『顎十郎捕物帳』 『倫敦消息』『舞姫』『澄江堂雑記』『海野十三敗 戦日記』『法然行伝』『三浦老人昔話』『初看板』 『新釈諸国噺』『正義と微笑』『かの女の朝』『惜 別』『ろまん燈籠』『風の便り』『神州瀕瀕城』『青 春の逆説』『大菩薩峠』『一枚絵の女』『駄馬と百 姓』『獵師と菓屋の話』『僕は兄さんだ』『片目の ごあいさつ』『灰色の記憶』『華々しき瞬間』『（実 吉捷郎訳）神の剣』『ペンネンネンネン・ネネ ムの伝記』『五〇年代の文学とそこにある問題』『一 片の石』『桑中喜語』『芽生』『右門捕物帖』『東 西伊呂波短歌評釈』『小犬と太郎さん』『骨を削り つつ歩む——文壇苦行記——』『半七捕物帳』『長 塚節歌集』『弟子』『恩を返す話』『忠直卿行状記』 『野道』『愚の旗』
--	--	--	--

3.3 調査の方法

本稿では、『新編日本古典文学全集』（JapanKnowledge を利用）、『青空文庫』を用いて、「とほめ」、「と褒め」、「と誉め」、「ほめ」、「褒め」、「誉め」、「称め」、「賞め」で全文検索し、用例を抽出する。また、『新編日本古典文学全集』では、上述のほかに、「ほむ」、「とほむ」、「褒申」、「誉申」、「賞申」、「称申」、「褒ま」、「誉ま」、「賞ま」、「称ま」、「褒も」、「誉も」、「賞も」、「称も」でも全文検索し用例を抽出する。

これらの文学作品中に使われている「ほめ」表現は、当時の「ほめ」の使用状況を反映していると考えられる。

これらの作品を扱うに当たり、いくつか注意しなければならない点がある。作品中の出来事が作品成立時の出来事として語られているとは限らない。作品中の談話は、現実

の会話を写し取ったものではない。とはいえ、文学作品には、会話参加者間の人間関係や発話に至るまでの状況、発話をもたらす効果など、自然会話からは採取しにくい情報を得ることができるというメリットがあると思われる。また、これらの作品の中で使われている「ほめ」表現は、当時の「ほめ」の使用状況をいくぶんなりとも反映しているものと考えられる。

第4章 「ほめ」に関する調査の結果

4.1 結果の概要

両資料の「ほめ」表現の用例の総数は731である。『新編日本古典文学全集』からは、361の用例が採取された。『青空文庫』からは、370の用例が採取された。

4.2 用例の分析

人間関係

関係（不特定の人がほめる場合、人が物をほめる場合は、「不問」とした）

性別（特定できない場合は、「不明」または「不問」とした。人が物をほめる場合は明示しない）

4.2.1 奈良時代の用例

①天皇、勅して問ひたまはく「あ、誰そ」とのりたまふ。五十跡手、奏して曰はく「高麗の国の意呂山に天ゆ降り来し日杵の苗裔なる五十跡手、是なり」とまをす。天皇、ここに五十跡手を誉めたまひて曰はく「恪かも。伊蘇志と謂ふ」とのたまふ。五十跡手の本つ土を恪勤の国と謂ひ、今怡土の郡と謂ふは訛るなり。
[現代語訳]

天皇は自ら「あ、お前は誰か」とお尋ねになられた。五十跡手は「朝鮮の意呂山に天降って来た天の日杵の子孫である五十跡手である」とお応えした。天皇はそこで五十跡手に「イソシかも（忠実なことだ）」「「恪」をイソシと言う」とお褒めになられた。これによって、五十跡手の住んでいた所を恪勤の国と言うようになり、現在、怡土郡と言っているのはそれが訛ったものである。

作者未詳「逸文（風土記）」

（〈筑前の国〉 瀬夫能泉〔甲類〕 P.541）

奈良～平安時代（713年より編纂開始）

これは、天皇が、返事してくれた五十跡手の忠実なことをほめる場面の用例である。

表現	恪かも。
人間関係	上→下、男→男
対象	天皇→五十跡手
返答	なし

②遂に菟田の下県に達る。因りて其の至れる処を号けて菟田の穿邑と曰ふ。穿邑、此には于介知能務羅と云ふ。時に勅して日臣命を誉めて曰はく、「汝、忠にして且勇あり。加能く導の功有り。是を以ちて、汝が名を改め道臣と為む」とのたまふ。

[現代語訳]

そうしてついに菟田の下県に到着した。道を穿ちながら進んだのでその地を名付けて菟田の穿邑〔「穿邑」はここではウカチノムラという〕という。天皇は勅して日臣命を褒賞されて、「お前は忠誠にして武勇の臣である。またよく先導の功績があった。これからは、お前の名を改めて道臣としよう」と仰せられた。

舎人親王ほか編「日本書紀」

(巻第三(扉) 神日本磐余彦天皇 神武天皇 P. 205)

奈良時代(720年成立)

これは、天皇が、日臣命について忠誠にして武勇、それに先導の功績もあったことをほめ、名を道臣命に改めさせた場面の用例である。

表現	汝、忠にして且勇あり。加能く導の功有り。是を以ちて、汝が名を改め道臣と為む
人間関係	上→下、男→男
対象	天皇→日臣命

返答	なし
----	----

4.2.2 平安時代の用例

①法幢は高く立ち、蟠足は八方にひらめけり。恵船は軽く汎びて、帆影は九天に扇げり。瑞応の華は競ひて国邑に開けり。善悪の報は現にして吉凶を誌示せり。故にみ号を勝宝応真聖武大上天皇と称めたてまつる。

[現代語訳]

また、寺院の旗じるしは高く立ち、風にはためいて八方にひるがえり、経典をのせた船は軽やかに浮び、帆は風をはらみ大空をあおいでいた。善兆によって咲く花は国中に競い開いた。善悪の行いは、この世で吉凶禍福となって現れた。このようなわけでこの天皇を、勝宝応真聖武大上天皇とたたえ申しあげるのである。

景戒「日本霊異記」

(日本国現報善悪霊異記 中巻 序 諾楽の右京の薬師寺の沙門景戒録す

P. 116)

平安時代 (822年ごろ成立)

これは、世間が、善悪の行いが、この世で吉凶禍福となって現れたことによって、天皇のことを勝宝応真聖武大上天皇とほめたたえる場面の用例である。ここの人間関係については、「称めたてまつる」は謙譲語であり、身分が下の人は身分が上の人をほめている。

表現	勝宝応真聖武大上天皇
人間関係	下→上、不問→男
対象	世間→天皇
返答	なし

②かくて年かへりて、朔日の御装束、色よりはじめて、いと清らにし出でたまへれば、<いとよし>と思して、着てあるきたまふ。御母北の方の見たまひて、

「あなうつくし。いとよくしたまふ人にこそものしたまひけれ。内裏の御方などの御大事あらむには、聞えつべかめり。針目などの、いと思ふやうにあり」と誉めたまふ。司召に中将になりたまひて、三位したまひて、おぼえまさりたまふべし。

[現代語訳]

こうして新年を迎え、参内のご装束は色合せをはじめとして、はなはだ美しく仕立てあげなされたので、少将は、＜たいそう結構だ＞とお思いになって、着てまわりなさる。少将の母北の方がご覧になって、「まあ立派なこと。たいそう上手にお仕立てなさる人でいらっしゃることですね。宮中の女御様などの大切な場合があった時には、仕立てをお願い申しあげたいですね。針目などは理想どおりです」とおほめになる。春の除目で少将は中将におなりになり、位も三位におなりになって、帝のご寵愛がひとしおまさっていらっしゃるようだ。

作者未詳「落窪物語」

(落窪物語 卷之二(扉)〔三〇〕少将一家の様子——少将、三位中将になる P.167)

平安時代(10世紀末ごろ成立)

これは、少将の母が、姫君の裁縫が少将の衣束を理想どおりに甚だ美しく上手に仕立てたことをほめる場面の用例である。

表現	あなうつくし。いとよくしたまふ人にこそものしたまひけれ。 内裏の御方などの御大事あらむには、聞えつべかめり。針目 などの、いと思ふやうにあり
人間関係	上→下、女→女
対象	少将の母→姫君の裁縫
返答	なし

③かの北の方、これをいみじき宝に思ひて、これがことにつけて、わが妻を懲ぜしぞかしと思ふに、いと捨てさせまほしきぞかし。中将かく言ふを、見るやうぞあらむとて、時々返りごとせさせたまふに頼みをかけて、三の君をただ離れに

離れゆく。「よし」と誉めし装束も、すぢかひ、あやしげにし出づれば、いとどかこつけて腹を立ちて、しかけたる衣どもも着で、「こは何わざしたるぞ。いよく縫ひし人は、いづち往にしぞ」と腹立てば、三の君、「男につきて往にしぞ」といらへたまへば、「なぞの男につくべきぞ。ただにぞ出でにけむ。

[現代語訳]

中将はく例の中納言の北の方が蔵人の少将を大切な宝と思って、この人の衣装の仕立てにこと寄せて、わが妻を苛めたのだなあ>と思うと、どうしても蔵人の少将に三の君を捨てさせたく思うのである。中将がこう言うので、母北の方は「蔵人の少将は見どころある人だろう」と、時々中の君にお手紙の返事をおさせなさるので、蔵人の少将はこの縁談に望みを託して、三の君からどんどん離れていく。以前に、「上手にできた」とほめた中納言邸で用意してくれる衣装も、近ごろでは、ゆがんで不格好に仕立て上げるので、ますますそれにかこつけ腹を立て、でき上がって衣桁に掛けておいた着物なども投げ捨てて「これはどうしたのだ。縫った女房はどこへ行ったのだ」と立腹すると、三の君が、「男ができて、邸を出て行ってしまいました」とお答えになると、「なんで男ができたものか。この邸にいたくなくてただ一人で出て行ったのだろう。

作者未詳「落窪物語」

(落窪物語 卷之二(扉) [三一] 蔵人の少将、三の君から離れ始める P.168)

平安時代(10世紀末ごろ成立)

これは、少将が、中納言邸で衣装を縫ってくれた女房の才能をほめたことにふれている場面の用例である。

表現	よし
人間関係	上→下、男→女
対象	少将→女房が縫った装束
返答	なし

④あたら御さまを、かくてつくづくとおはしますこそ、あいなけれ。四の君も

くまた御婿どりしたまはむ>と設けたまふめり。北の方の御心にまかせて、のべしじめしたまふ」「めでたきや。誰をか取りたまふ」とのたまへば、「左大将殿の左近の少将とか。かたちはいと清げにおはするうちに、『ただ今なり出でたまひなむ』と人々誉む。帝も時めかしおぼす。御妻はなし。いとよき人の御婿なり。

『<いかでこのわたりにもがな>と思ふ』と、おとども常にのたまふとて、北の方急ぎに急ぎたまひて、四の君の御乳母、かの殿なりける人を知りたりけるを、よろこびたまひて、さざめき騒ぎたまひて、文やらせたまふめり」と言へば、「いとうれしく。さて」と言ひて、いとよくほほゑみたるまみ、口つきの、灯のあかきに映えて、にほひたるものから、恥づかしげなり。

[現代語訳]

あなた様がこんなにすばらしいご様子なのに、こうやっても寂しげでいらっしゃるのはおいたわしいことでございますね。四の君もくまたお婿様をお迎えになろう>と、ご準備をなされているようです。北の方のお気持まかせて、勝手なことをなさっていらっしゃる」と言う。「それはおめでたいことね。どなたをお迎えなさるのですか」とおっしゃると、「左大将様の若様の左近の少将とか承っております。ご器量はたいそうご立派でいらっしゃるうえに、『たった今にもご出世あそばすだろう』と、人々がほめています。帝もご寵愛なされています。奥様はございません。女性にとって非常にすばらしい婿君様です。『<どうかしてこの家の婿君に迎えたいなあ>と思う』と、お殿様もいつもおっしゃっているということで、北の方も非常にお急ぎになって、四の君様の御乳母が左大将殿に仕えている女房と懇意なのを、都合がよいとお喜びになって、大騒ぎなさせて、手紙を贈らせあそばしたようですよ」と言うと、姫君は「まったく喜ばしいことね。それで」と言って、たいそう気持よくほほえまれた目つきや口つきが、灯火の明るい光に照り映えて、美しいのに、さらに見ている者が恥ずかしいと思うほど、気高さがある。

作者未詳「落窪物語」

(落窪物語 卷之一(扉) [三五] 女房少納言、姫君に弁の少将の噂話をする P. 89)

平安時代(10世紀末ごろ成立)

これは、人々が、左近の少将の近々出世することを推測してほめている場面の用例である。

表現	ただ今なり出でたまひなむ
人間関係	上下関係不問、不問→男
対象	人々→左近の少将
返答	なし

⑤「この男はみづからまゐらむとするを、昼はかたちわろしとてまゐらぬなめり」と、いみじうをかしげに書いたまへり。御前にまゐりて御覧ぜさすれば、「めでたくも書きたるかな。をかしくしたり」などほめさせたまひて、解文は取らせたまひつ。「返事いかがすべからむ。この餅餠持て来るには、物などや取らすらむ。知りたらむ人もがな」と言ふを聞しめして、「惟仲が声のしつるを。呼びて問へ」とのたまはすれば、端に出でて、「左大弁に物聞えむ」と、侍して呼ばせれば、いとよくうるはしくて来たり。

[現代語訳]

「この下男は自分自身で参上しようとするのですけれど、昼は顔がみっともないと言って参上しないようです」と、たいへん美しく見える筆跡でお書きになってある。中宮様の御前に参上して御覧に入れると、「なんとすばらしく、書いてあることでしょう。おもしろい趣向がこらしてある」などとおほめあそばされて、その解文はお手もとにお取りあそばされてしまった。「返事はどうしたらよいのかしら。この餅餠を持って来る時には、使いに禄など与えるのだろうか。知っている人がいるといいのに」と言うのを中宮様がお聞きあそばして、「惟仲の声がしたけれど。呼んで聞いてごらん」と仰せあそばすので、部屋の端に出て、わたしは「左大弁にお話し申しあげたい」と、侍をして呼ばせると、たいへん威儀を正してやって来た。

清少納言「枕草子」

(一二七 二月、官の司に P. 239)

平安時代（1001年ごろ成立）

これは、中宮が、下男が書いた立て文の素晴らしさと面白い趣向をおほめになる場面の用例である。

表現	めでたくも書きたるかな。をかしくしたり
人間関係	上→下、男→男
対象	中宮→下男が書いた立て文
返答	なし

⑥「この君の、昨日今日の児と思ひしを、かくおとなびてとぶらひたまふこと。
容貌のいともきよなるに添へて、心さへこそ人にはことに生ひ出でたまへれ」
とほめきこえたまふを、若き人々は笑ひきこゆ。こなたにも 対面したまふをり
は、女五の宮「この大臣の、かくいとねむごろに聞こえたまふめるを、何か、い
ま始めたる御心ざしにもあらず。故宮も、筋異になりたまひて、え見たてまつり
たまはぬ嘆きをしたまひては、思ひたちしことをあながちにもて離れたまひしこ
となどのたまひ出でつつ、悔しげにこそ思したりしをりをりありしか。

[現代語訳]

「この君が、つい昨日今日まで子供と思っておりましたものを、こうも一人前
になられて、お見舞くださるのですね。お顔だちがなんとも美しいうえに、気だ
てまでも人よりはすぐれてご成人なさったことです」とおほめ申されるのを、若
い女房たちは笑い申しあげている。宮は、前斎院の姫君にお会いになる折には、
「この大臣が、こうしてほんとに熱心にお手紙をさしあげておられるようですが、
いえなに、これは今に始まったご執心ではないのです。亡き父宮も、あのお方が
他家の婿におなりになったので、こちらでお世話申すこともできなくなったとお
嘆きになっては、『せっかく自分がそのつもりでいたものを、姫君ご本人が強情
にもとりあわれなかったためだ』などとたびたび仰せ出されて、いかにも残念が
っておいでの折々がありました。

紫式部「少女（源氏物語）」

（源氏物語（扉） 少女（扉） 「少女」巻名・梗概 〔一〕源氏、朝顔の姫

これは、年上の女五の宮が、年下の源氏が昔より一人前になり、美貌の上に優れた気立てで立派な成人になったことをほめる場面の用例である。この人間関係については、「ほめきこえたまふ」は謙譲語であり、身分が下の人が身分が上の人をほめている。

表現	この君の、昨日今日の児と思ひしを、かくおとなびてとぶらひたまふこと。容貌のいともきよらなるに添へて、心さへこそ人にはことに生ひ出でたまへれ
人間関係	下→上、女→男
対象	女五の宮→源氏
返答	なし

⑦さがなく、事がましきも、しばしはなまむつかしう、わづらはしきやうに憚らるることあれど、それにしも従ひはつまじきわざなれば、事の乱れ出で来ぬる後、我も人も憎げにあきたしや。なほ南の殿の御心用ゐこそ、さまさまにありがたう、さてはこの御方の御心などこそは、めでたきものには見たてまつりはてはべりぬれ」など、ほめきこえたまへば、笑ひたまひて、花散里「ものの例に引き出でたまふほどに、身の人わろきおぼえこそあらはれぬべう。さてをかしきことは、院の、みづからの御癖をば人知らぬやうに、いささかあだあだしき御心づかひをば大事と思ひて、戒め申したまふ、後言にも聞こえたまふめるこそ、さかしだつ人の己が上知らぬやうにおぼえはべれ」とのたまへば。

[現代語訳]

口やかましくて事を荒だてがちなのも、しばらくの間は何やらうるさく面倒なものですから、つい遠慮されるものですが、いつまでも言いなりになっているわけにもいかないことです。何か一悶着でも起るとなると、こちら相手もお互いに憎らしく、愛想も尽きるものです。やはり南の御殿の紫の上のお心づかいこそ何かにつけてまたとなくご立派ですし、それからまたこちら様のお心がけが、

つくづくおみごとなものと拝見しております」などとおほめ申されるので、上は苦笑なさって、「なんぞ引合いにしてくださっては、この私の体裁のわるい評判が表に出てしまいます。それはともかく、おもしろいことには、院がご自分のお癖をどなたも知らないかのように棚上げなさって、ほんの少しばかりあなたに浮気めいたおふるまいがみえると、大騒ぎなさって、ご意見を申されたり、陰口にも申されるようですが、とにかく賢ぶる人が自分のこととなると何も分らないものだという気がいたします」とおっしゃるので。

紫式部「夕霧（源氏物語）」

（夕霧（扉） 「夕霧」 卷名・梗概 〔二九〕 夕霧六条院にいたり、花散里・源氏と対面 P. 470)

平安時代（1001～10年ごろ成立）

これは、夕霧が、花散里の立派なお気遣いや見事な心掛けをほめる場面の用例である。この人間関係については、「ほめきこえたまへば」は謙譲語であり、身分がの人が身分が上の人をほめている。

表現	なほ南の殿の御心用ゐこそ、さまざまにありがたう、さてはこの御方の御心などこそは、めでたきものには見たてまつりはてはべりぬれ
人間関係	下→上、男→女
対象	夕霧→花散里、紫の上
返答	なし

⑧入道「さらに、背きにし世の中もとり返し思ひ出でぬべくはべり。後の世に願ひはべる所のありさまも、思うたまへやらるる夜のさまかな」と泣く泣くめできこゆ。わが御心にも、をりをりの御遊び、その人かの人のかの琴笛、もしは声の出でしさま、時々につけて世にめでられたまひしありさま、帝よりはじめたてまつりて、もてかしづきあがめたてまつりたまひしを、人の上もわが御身のありさまも思ひ出でられて、夢の心地したまふままに、掻き鳴らしたまへる声も心すごく

聞こゆ。

[現代語訳]

入道は、「ひとたび捨ててしまいました俗世間のことも、あらためて昔に返って思い出されそうでございます。来世で生れ変りたいと願っております極楽の有様を、しぜんと想像せずにはいられませんような今宵の風情でございます」と、感涙を流しておほめ申しあげる。君ご自身のお気持ちにも、折々の音楽のお遊びや、その人この人の琴笛の音、あるいは謡いぶり、またその時々につけて世人の賞賛を集められたご自身の有様——帝をはじめ申して、多くの人からたいせつに扱われ、敬われておいでになったことなどを、人々のこともわが身の有様も思い出さずにはいらっしやれなくて、まるで夢のようなお気持ちになれるままに、琴をかき鳴らしておいでになると、その音色も恐ろしいまでに冴えまさって聞えるのである。

紫式部「明石（源氏物語）」

（明石（扉） 「明石」巻名・梗概 〔八〕初夏の月夜、源氏琴を弾き、入道
と語る P. 240）

平安時代（1001～10年ごろ成立）

これは、入道が、源氏の琴の音を聞きながら、俗世間を捨てたのに、昔のことが蘇えり、また極楽を想像するような気分になったことをほめる場面の用例である。

表現	さらに、背きにし世の中もとり返し思ひ出でぬべくはべり。 後の世に願ひはべる所のありさまも、思うたまへやらるる夜のさまかな
人間関係	下→上、男→男
対象	入道→源氏の琴の音
返答	なし

⑨みな異ものは声やめつるを、これにのみめでたと思ひて、母尼「たけふ、ちちりちちり、たりたんな」など、搔き返しはやりかに弾きたる、言葉ども、わ

りなく古めきたり。中将「いとをかしう、今の世に聞こえぬ言葉こそは弾きたまひけれ」とほむれば、耳ほのぼのしく、かたはらなる人に問ひ聞きて、母尼「今様の若き人は、かやうなることをぞ好まれざりける。ここに月ごろものしたまふめる姫君、容貌はいときよらにもものしたまふめれど、もはら、かかるあだわざなどしたまはず、埋もれてなんものしたまふめる」と、われ賢にうちあざ笑ひて語るを、尼君などはかたはらいたしと思す。

[現代語訳]

ほかの楽器はみな鳴りをひそめてしまったのを、自分の弾奏にばかり感じ入っていると思い込んで、「たけふ、ちちりちちり、たりたんな」などとかき返し急調子で弾いている、その歌詞のどれもがむやみに古めかしい。中将が、「じつにおもしろく、当世ではあまり聞かれない歌をお弾きになりましたな」とほめると、大尼君は耳も遠いので、そばにいる人に聞き返して、「当世の若い人はこうした音楽はたしなまれないのですね。ここにこのところいらっしゃるらしい姫君も、ご器量はほんとおきれいのようだけれど、まったくこういうむだな遊び事などなさらずに、引きこもったままでおられるようです」と、自分だけがえらそうにして声高に笑いながら話しているのを、娘の尼君などはそばではらはらしていらっしゃる。

紫式部「手習（源氏物語）」

（〔一六〕母尼和琴を得意げに弾き、一座興ざめる P. 321）

平安時代（1001～10年ごろ成立）

これは、中将が、大尼君の演奏の面白さやめったに聞かれないことをほめる場面の用例であり、中将のほめに対して、年上の大尼がえらそうに返答する場面である。

表現	いとをかしう、今の世に聞こえぬ言葉こそは弾きたまひけれ
人間関係	上→下、男→女
対象	中将→大尼君
返答	今様の若き人は、かやうなることをぞ好まれざりける。ここに月ごろものしたまふめる姫君、容貌はいときよらにもものし

	たまふめれど、もはら、かかるあだわざなどしたまはず、埋 もれてなんものしたまふめる
--	--

⑩それをも知らで、里にある女房丹波、夢に見るやうは、法住寺の広所にて、我が歌をうたひけるを、五條尼、白き薄衣に、足を裏みて参りて、障子のうちに居て、さしむかひて、「この御歌を聞きに参りたる」とて、世に愛でて、我も付けてうたひて、「足柄など、つねにも候はぬ。この節どものめでたさよ」と誉め入りて、長歌を聞きて、「これはいかがとおぼつかなく思ひ候ひつるに、めでたさよ。これを承り候へば、身もすずしく、うれしき」と見て、両三日ありて、かく見え候ひつる由を、女房参りて申す。さは聞きけるにや。

[現代語訳]

このことを知らずに、里に居た女房の丹波が、夢に見たことには、法住寺の広御所で、私（院）が歌を歌っていたのを、五条の尼（乙前）が白い薄衣に足をつつんでやって来て、障子の中に居て、こちらを向いて、「この御歌を聞きに参りました」と言っ、この上なく賞美して、自分も声を添えて歌い、「足柄など、いつもお聞きしたのに比べて、またとないくらいみごとな出来ばえだこと」とほめにほめて、長歌を聞いて、「これはどうかと心もとなく思っていました、本当に素晴らしいことよ。これをうけたまわりましたので、体もさわやかになり、うれしい」と言ったと夢に見た。その後二、三日経って、このように見たことを、その女房が私のところへ来て報告した。この夢のように乙前は私の歌を聞いたのであろうか。

後白河法皇「梁塵秘抄」

（梁塵秘抄口伝集（扉） 梁塵秘抄口伝集 卷第十 [九] 乙前の死去前後と、
没後の供養 P. 359)

平安時代（12世紀後半成立）

これは、五條尼（乙前）が、わざわざ「我」（院）が歌っているのを聞きに来て、いつも聞いた歌と比べて見事な出来栄えだとほめている場面の用例である。

表現	足柄など、つねにも候はぬ。この節どものめでたさよ
人間関係	下→上、女→男
対象	五條尼（乙前）→私
返答	なし

4.2.3 鎌倉時代の用例

①三河、ちつとも傾かず、鎧踏んばり、つい立ち上がり、左の手にては鞍の前輪をかかへ、右の手にては抜丸と云ふ太刀を抜き、熊手の柄をぞ切りてける。熊手引きける男は、仰けに転ぶ。三河守は、つと延びにけり。熊手は甲に止まりけり。見物の上下、これを見て、「あ、切りたり。いしう切りたり」と、誉めぬ者こそなかりけれ。三河守も、既に討たれぬべく見えけるに、通り合ひて、戦ふ者ども誰々。

「現代語訳」

三河守頼盛は、中御門を東の方へ引き退いたのを、鎌田の下男が、腹巻姿で熊手を持っていたが、「これは手柄をたてるにはよさそうな敵」とばかり頼盛目がけて走り寄り、甲に熊手を投げ懸けて、かけ声かけながら引っぱった。しかし、三河守は少しも引きずられず、鎧ふんばり立ち上がって、左の手で鞍の前輪をかかえこみ、右の手では抜丸という太刀を抜いて、熊手の柄を切った。熊手を引いていた男はあおむけにころんだ。三河守は素早く逃げのびた。熊手は甲にくっついたままであった。見物の人は皆、「あ、切ったぞ。みごとに切ったものよ」と、ほめない者はいなかった。

作者未詳「平治物語」

（平治物語 上（扉） 待賢門の軍の事 P.456）

鎌倉時代初期～中期

これは、見物の人が、三河守がみごとに熊手を切ったことをほめる場面の用例である。

表現	あ、切りたり。いしう切りたり
人間関係	上下関係不問、不問→男

対象	見物の人→三河守
返答	なし

②「遅し遅し」と言ひゐたる程に、やりつる童、木の枝に荒巻二つ結びつけて持て来たり。「いとかしこく、あはれ、飛ぶがごと走りてまうで来たる童かな」とほめて、取りてまな板の上にうち置きて、ことごとしく大鯉作らんやうに左右の袖つくろひ、くくりひき結び、片膝立て、今片膝伏せて、いみじくつきづきしくみなして、

[現代文訳]

「遅い、遅い」と言っているうちに、使いにやった童が、木の枝に荒巻二つを結んで持って来た。「偉い、偉い、ほんとうに、飛ぶように走って行って来たなあ」とほめて、荒巻を受け取り、まな板の上に置いて、大げさに大鯉でも料理するように、左右の袖を取りつくろい、括りのひもを引き締め、片膝を立て、もう一方の膝は伏せて、いかにも大鯉の料理に似合わしげな恰好をして、

作者未詳「宇治拾遺物語」

(宇治拾遺物語(扉) 宇治拾遺物語 序 宇治拾遺物語 巻第二 五 用経、
荒巻の事 23 P.74)

鎌倉時代(1213～21年ごろ成立)

これは、用経が、木の枝を持って来た童のスピードの速さをほめる場面の用例である。

表現	いとかしこく、あはれ、飛ぶがごと走りてまうで来たる童かな
人間関係	上→下、男→男
対象	用経→童
返答	なし

③殿御覧じて、「今一度北へ渡れ」と仰せありければ、また北へ渡りぬ。さてあるべきならねば、また南へ帰り渡るに、この度は兼行さきに南へ渡りぬ。「次

に武正渡らんずらん」と人々待つ程に、「いかにいかに」と待ちけるに、幔の上より冠の巾子ばかり見えて南へ渡りけるを、人々、「なほずちなき者の心際なり」とほめけりとか。

[現代文訳]

殿が御覧になって、「もう一度北へ渡れ」と仰せがあったので、また北へと通って行った。そのままでいられないので、また南へ帰って来ると、今度は兼行が先に南へと通って行った。次に武正が通るだろうと人々が待っていると、武正はややしばらく現れない。「どうしたのか」と思ううちに、向こうに引いてあるまん幕よりも東の方を通るのであった。みな「どうしたか、どうしたか」と待っていた時に、まん幕の上から冠の巾子だけが見えて南へ過ぎて行ったが、人々はそれを、「たぐいなく気の利いた心遣いである」とほめ合ったという。

作者未詳「宇治拾遺物語」

(宇治拾遺物語 卷第十五 三 賀茂祭の帰り武正、兼行、御覧の事 188

P. 465)

鎌倉時代(1213～21年ごろ成立)

これは、人々が、武正のたぐいなく気が利いた心遣いをほめ合った場面の用例である。

表現	なほずちなき者の心際なり
人間関係	上下関係不問、不問→男
対象	人々→武正
返答	なし

④行き着きけるままに、とかくの事もいはず、もとより見馴れなどしたらんにてだに、疎からん程はさやあるべき、従者などにせんやうに、着たりける水干のあやしげなりけるが、ほころび絶えたるを切懸の上より投げこして、高やかに、「これがほころび縫ひておこせよ」といひければ、程もなく投げ返したりければ、「物縫はせ事さすと聞くが、げにとく縫ひておこせたる女人かな」と荒らかなる声してほめて、取りて見るに、ほころびは縫はで、みちのくに紙の文をそのほころびのもと

に結びつけて、投げ返したるなりけり。

[現代語訳]

郡司の家に行き着いたが、そのまま女には何の挨拶の言葉もかけない。もともとよく知っているような間柄でさえ、まださほど打ち解けてもいない間はそんなふうにしてよいはずはないのに、まるで従者などにでもさせるように、着ていた粗末な水干の縫目のほころびたのを、切懸塀の上から投げやって、声高に、「このほころびを縫ってよこせ」と言うと、まもなく投げ返してきた。「縫物をさせていると聞いていたが、なるほど手早く縫ってよこす、手の利く女かな」と、声高らかにほめたて取り上げて見ると、ほころびは縫わず、陸奥国紙に書いた手紙を、そのほころびのもとに結びつけて、投げ返してきたのだった。

作者未詳「宇治拾遺物語」

(宇治拾遺物語 卷第七 二 播磨守為家の侍佐多の事 93 P.229)

鎌倉時代(1213～21 年ごろ成立)

これは、佐多が、女が縫目のほころびを手早く縫ってよこすさまの、手の利くことをほめた場面の用例である。

表現	物縫はせ事さすと聞くが、げにとく縫ひておこせたる女人かな
人間関係	上→下、男→女
対象	佐多→女人
返答	なし

⑤道式成、源満、則員、殊に的弓の上手なり。その時聞えありて、鳥羽院位の御時の滝口に、三人ながら召されぬ。試みあるに、大方一度もはづさず。これをもてなし興ぜさせ給ふ。ある時三尺五寸の的を賜びて、「これが第二の黒み、射落して持て参れ」と仰せあり。巳の時に賜りて未の時に射落して参れり。いたつき三人の中に三手なり。矢取りて、矢取の帰らんを待たば、程経ぬべしとて、残りの輩、我と矢を走り立ちて取り取りして、立ちかはり立ちかはり射る程に、未

の時の半らばかりに、第二の黒みを射めぐらして、射落して持て参れりけり。「これすでに養由がごとし」と時の人ほめののしりけるとかや。

[現代文訳]

宮道式成、源満、則員は、ことのほかに的弓の名手であると、そのころ評判が高かったので、鳥羽院御在位の御時の滝口の武士に三人とも召し出された。試射の際には、およそ一度もはずしたことがない。院はこの三人を相手にして興じられていた。ある時、三尺五寸の的を賜って、「この第二の輪の黒い部分を射落して持ってまいれ」と仰せられた。三人は午前十時に賜って、午後二時ごろに射落して参上した。すなわち練習用の矢は三人に対して三対であったので、「矢取りの者が矢を取って帰るのを待っていたら、時間がたってしまうだろう」と、残りの者は自分で走り出して矢を取り、そうして順々に取って、入れ代り立ち代り射るうちに、ちょうど午後二時ごろに第二の黒い部分を射めぐらして、射落して持参したのであった。「これはまるで養由のようだ」と、当時の人はほめそやしたという。

作者未詳「宇治拾遺物語」

(宇治拾遺物語 卷第七 七 式成、満、則員等三人滝口弓芸の事 98 P.247)

鎌倉時代(1213～21年ごろ成立)

これは、当時の人が、道式成、源満、則員の弓芸は中国春秋時代の弓の名人、養由のようだとほめる場面の用例である。

表現	これすでに養由がごとし
人間関係	上下関係不問、不問→男
対象	当時の人→道式成、源満、則員
返答	なし

⑥我が師の、「女人の傍らへ寄る事なかれ」とのたまひしにと思ひて、五台山へ帰りて、女のありつるやうを比丘に語り申して、「されども、耳にも聞き入れずして帰りぬ」と申しければ、「いみじくしたり。その女は文殊の化して、汝が

心を見給ふにこそあるなれ」とてほめ給ひける。さる程に、童は法華經を一部読み終へにけり。

[現代語訳]

「自分の師が、『女人のそばへ寄るな』とおっしゃったのだから」と思って、五台山へ帰って、女の先ほどの様子を比丘に語って、「それでも、耳を貸さずに帰りました」と申しあげると、比丘は、「よくやった。その女は文殊が身を変えて、おまえの心を試して御覧になったのだ」と言って、おほめになった。

作者未詳「宇治拾遺物語」

(宇治拾遺物語 卷第十四 一 海雲比丘の弟子童の事 175 P. 429)

鎌倉時代(1213～21年ごろ成立)

これは、比丘が、童子が女の試練を乗り越えられたことをほめる場面の用例である。

表現	いみじくしたり。その女は文殊の化して、汝が心を見給ふにこそあるなれ
人間関係	上→下、男→男
対象	比丘→童子
返答	なし

⑦そののち、検非違所の書生を、実検使にさしつかはすによりて、基衡、力及ばず。泣く泣く季春ならびに子息、舎弟等、五人が頸を切りてけり。さてこそ、国司しづまりにけれ。国のものどもいひけるは、「季春が命を助けむために、国司に送るところのもの、一万両の金をさきとして、多くの財なり。ほとんど当国の一任の土貢にもすぐれたり。これを見入れ給はず、女にもかたさらずして、つひにためしを立て給へる国司の憲法、たとへを知らず」とぞ、ほめののしりける。かかりければ、国しかしながらなびきたがひて、思ふさまに行ひけり。吏務の感応、前々の国司よりも、こよなうおもかりけり。

[現代語訳]

その後、検非違所の書生を実検の使者として差し向けてきたので、基衡はどうすることもできず、泣く泣く季春および子息、その弟たち五人の首を刎ねた。こうしてやっと、国司師綱の怒りはおさまったという。国の者たちが言うには、「季春の命を助けるために、国司の所に贈った品物は、一万両の金を始めとして、多数の財宝である。その数量は陸奥の国国司の全任期間のすべての貢納物をほとんど超えている。これだけの財宝にも見向きもされず、女の哀訴にも心を寄せず、最後まで範を立てられた国司の公正さは立派で、何と評してよいかわからない」と口々に褒めたたえた。このようなことがあって、国中すべて靡き従い、思う通りの政を行った。国衙の庁務は、前々の国司の時よりもはるかに重々しく受けとめられていった。

作者未詳「十訓抄」

(第十 才芸を庶幾すべき事 十ノ七十四 陸奥守師綱、信夫郡で合戦 P.479)

鎌倉時代 (1252年成立)

これは、国司が、自分のところに贈られてきた膨大な数の財宝に対して心を動かさず、最後まで範を立てている立派な姿勢に対して、国の者たちがそれをほめたたえる場面の用例である。

表現	季春が命を助けむために、国司に送るところのもの、一万両の金をさきとして、多くの財なり。ほとんど当国の一任の土貢にもすぐれたり。これを見入れ給はず、女にもかたさらずして、つひにためしを立て給へる国司の憲法、たとへを知らず
人間関係	下→上、不問→男
対象	国の者たち→国司
返答	なし

⑧時人、いみじきをこのためしにいひけるを、顕隆卿聞きて、「こやつは必ず冥加あるべきものなり。人の罪蒙るべきことの、罪を知りて、みづから、をこのものとなれる、やんごとなき思ひはかりなり」とぞほめられける。まことに久しく君に

仕へ奉りて、ことなかりけり。

[現代文訳]

さて、その時、人々は仏師某のことを、どうしようもないろくでなしの話だと噂していたのだけれども、藤原（葉室）顕隆卿はそれを聞いて、「いやいや、こいつは必ず神仏の御加護のあるやつだぞ。誰かが罰を蒙りそうだと、処罰の件を聞き知って、自分からわざと間抜けのふりをしたのだ。見事な気の回し方だ」と褒められたということだ。はたして、その言葉通りにこの者は、長く院に仕えてつつがなかったという。

作者未詳「十訓抄」

（第十 才芸を庶幾すべき事 十ノ七十七 法勝寺、九重塔の贗の金物 P.487）

鎌倉時代（1252年成立）

これは、顕隆卿が、仏師某のみごとな気の回し方をほめる場面の用例である。

表現	こやつは必ず冥加あるべきものなり。人の罪蒙るべきことの、罪を知りて、みづから、をこのものとなれる、やんごとなき思ひはかりなり
人間関係	上→下、男→男
対象	顕隆卿→仏師某
返答	なし

⑨われ、その能ありと思へども、人々にゆるされ、世に所置かるほどの身ならずして、人のしわざも、ほめむとせむことをも、いささか用意すべきものなり。三河守知房所詠の歌を、伊家弁、感歎して、「優によみ給へり」といひけるを、知房、腹立して、「詩を作ることはかたきにあらず。和歌のかたは、すこぶるかれに劣れり。これによりて、かくのごとくいはるる。もつとも奇怪なり。今よりのち、和歌をよむべからず」といひけり。優の詞も、ことによりて斟酌すべきにや。これはまされるが、申しほむるをだに、かくとがめけり。いはむや、劣らむ身にて褒美、なかなか、かたはらいたかるべし。よく心得て、心操をもてしづむべきなり。

「現代文訳」

自分では、それには能力も実力もあるのだと思っ
ていても、人から認められ、世間でも一目置かれるほどの立場に至っていないのならば、他人の行動を褒めたりすることは、いささか注意すべきである。三河守藤原知房の詠んだ歌を、右中弁藤原伊家が感激して「本当に素晴らしい歌だ」と褒めたことがあった。ところが、知房はそれを聞いて腹を立てた。「漢詩を作ることでは、あの男は私の敵では決してない。しかし、和歌については、たいそう私は後れをとっている。それだからあんなことを言われてしまうのだ。どう考えても我慢できないことだ。もうこれからは一切、和歌を詠むつもりはない」と言ったという。褒める言葉でも、事柄によっては気をつけた方がよいようだ。この話のように、力の上の人が褒めたのでさえ、こんなふうに文句がつけられたのである。いわんや、力の未熟な者が褒めたりすることは、はたで聞いていても、とても心配になってくる。よくよくこのことを心得て、心遣いを慎重にするべきである。

作者未詳「十訓抄」

(十訓抄 上(扉) 第一 人に恵を施すべき事 一ノ五十七 伊家、知房の
歌を賞賛 P.105)

鎌倉時代(1252年成立)

これは、右中弁藤原伊家が、三河守藤原知房の詠んだ歌の素晴らしさをほめる場面の用例であり、それに対して、三河守藤原知房が不満を抱いて返答する場面である。

表現	優によりみ給へり
人間関係	対等、男→男
対象	右中弁藤原伊家→三河守藤原知房
返答	詩を作ることはかたきにあらず。和歌のかたは、すこぶるか れに劣れり。これによりて、かくのごとくいはるる。もつとも 奇怪なり。今よりのち、和歌をよむべからず

⑩この女房、本より芙蓉の眸、丹花の唇、宿殖徳本の容、見る人、心も移りぬべく、衆人愛敬の装ひ、あたりも輝くばかりなり。装束を刷ひ、我に劣らぬ女房三十二人を引き具し、同じ色の装束にて御前に参りつつ、女房たちには酌取らせ、我が身は鎌倉殿の左の御座に直りつつ、酒を勧め奉る。御前伺候の侍どもも、「あつぱれ女房かな」とぞ褒め合ひける。日も晩傾になりければ、女房は御暇申して御前を立つ。鎌倉殿、「男となりて国を持つべくは、これほどの女こそあらまほしけれ。頼朝が北条の御上をこそ男の詮の名誉の手本とは日本国の侍どもも申し合ひけるに、なほ立ちまさる者かな。心憎き宇都宮かな」と仰せられて、

[現代語訳]

この女房は、もともと蓮の花のように清らかで涼しげな目もと、赤い花のような唇、前世に善根を積んだことによる美貌を持ち、見る人は思いを寄せ、多くの人に愛される美しい装いは、あたりも輝くほどである。装束を整え、自分に見劣りしない女房三十二人を引き連れ、同じ色の装束で鎌倉殿の御前に参上し、女房たちには酌をさせ、我が身は鎌倉殿の左の席に座って、酒をお勧め申しあげる。お側に控えていた侍たちも、「立派な女房だ」と褒め合った。夕方になったので、女房はお暇を申しあげて御前を退く。鎌倉殿は、「男となって国を保とうとするならば、このような妻を持ちたいものよ。頼朝の北条の妻こそ男にとっての最高の名誉の手本と、日本国の侍たちは語り合っているが、政子にもまさる女房であることよ。ねたましいほどの宇都宮の幸せよ」とおっしゃって、

作者未詳「曾我物語」

(曾我物語 卷第六(扉) [三] 頼朝、宇都宮の女房を讃える P. 209)

鎌倉末期～南北朝時代

これは、侍どもが、美貌、美装、容姿端麗な女房が御前に参上するところを見て感心してほめ合った場面の用例である。

表現	あつぱれ女房かな
人間関係	下→上、男→女
対象	侍ども→宇都宮の女房

返答	なし
----	----

4.2.4 室町時代の用例

①都には、頼光、保昌、鬼の頸持たせて上り給ふと聞えしかば、郎等どもは申すに及ばず、聞き及ぶ程の人々は、みな迎ひに参らぬはなし。大名たちは申すに及ばず、都入りは、一万騎とぞ聞えし。天子を始め参らせて、万民に至るまで、今に始めぬことなれども、この度、国土の大事、万民の歎きをやめ、君の御憤をもやすめ奉るのみならず、その身の高名、譬へを取るに並びなしと、誉めぬ人こそなかりけれ。

[現代文訳]

都では、頼光と保昌とが、鬼の首をもたせて上京されるとうわさされたので、家来どもはいうまでもなく、聞き知るかぎりの人々は、だれもみな迎えに参らない者はいない。大名たちはいうまでもなく、一行が都にはいるにあたって、一万騎の者が集まったということであった。天皇をはじめ奉り、多くの人民にいたるまで、今に始まったことではないが、このたびは、この一国の危機をすくい、多くの人々の悲しみを絶やして、帝のお怒りをもおしずめ申しあげるだけではなく、自身の武功も、何かにたとえようとしても並ぶものがないというので、ほめない人はいなかった。

作者未詳「室町物語草子集」

(酒伝童子絵(扉) 酒伝童子絵 P.321)

南北朝時代前期～江戸時代初期

これは、人々が、頼光、保昌の武功のたぐいなき強さをほめる場面の用例である。

表現	その身の高名、譬へを取るに並びなし
人間関係	上下関係不問、不問→男
対象	人々→頼光、保昌
返答	なし

②頼光、かねて宣旨を蒙り給ひしに、氏神八幡宮に参り、このことを祈り申さる。余の人々も、「神明の加護ならでは、深く頼むことなしと、祈り申ししにより、高名の誉、末代に残れり。ありがたし」とぞ申しける。また、晴明がト筮正しきこと、昔より今に至るまで、希代の相人ありがたしと、上一人より下万民、誉め歎ばぬはなかりけり。ある人申しけるは、「一条院は、弥勒の化現にてましまし、頼光はまた、毘沙門の化身なり。帝は、仏法を広め、衆生を済度せんがため、頼光は、仏法怨敵を防ぎ、国家を守護せんために化現して、武家の棟梁たり。しかしながら、大悲の誓として、群生拔済のため、ありがたきことどもなり。酒伝童子は、第六天の魔王なり。明君の威法をおとしめ、仏法のために讐敵となりて、鬼神の寿量を感じり。これらの次第、みな聖教に説くところなり」。

[現代語訳]

頼光は、さきに天皇の仰せごとをお受けなされた時に、氏神の八幡宮に参って、このことをお祈り申しあげた。ほかの人々も、「神のお助けのほかには、深く頼りにするものはないと、お祈り申しあげたので、武功の名誉が、末の世まで伝えられる。めったにないことだ」と申ししていた。また、晴明の占いの正しいことも、昔から今に至るまで、世にもまれな人相見はめったにいないと、上は天皇から下は庶民まで、よろこんで誉めないものはいなかった。ある人が、「一条天皇は、弥勒菩薩の姿を変えてあらわれたものでいらっしゃる、頼光は、毘沙門天の姿を変えてあらわれたものである。天皇は、仏の教えをひろめ、多くの生物を救って悟りに導くために、頼光は、仏の教えをさまたげる敵を防いで、国家を守るために姿を変えてあらわれて、武家のかしらとなっている。ことごとく、仏のあわれみによる誓いとして、すべての生物の苦を去って難を救うためであって、めったにないことである。酒伝童子は、第六天の魔王である。賢明な君主のおごそかなおきてを見くだし、仏の教えにとっては敵となって、恐ろしい鬼神の寿命の数を得ている。これらの事情は、すべて仏の教えに説くところである」と申した。

作者未詳「室町物語草子集」

(酒伝童子絵(扉) 酒伝童子絵 P.324)

南北朝時代前期～江戸時代初期

これは、天皇から庶民までは晴明が占いが正しくできる才能をほめる場面の用例である。

表現	希代の相人ありがたし
人間関係	上下関係不問、不問→男
対象	上一人より下万民→晴明
返答	なし

③この三尊、あるいは僧形に現じ、あるいは俗体に変じて、大師を礼し奉りて、
「十方大菩薩、愍衆故行道、応生恭敬心、是則我大師」と讃め玉ふ。大師大きに
礼敬し玉ひて、「願はくはその御名を聞かん」と問ひ玉ふに、三尊答へて曰く、
「豎の三点に横の一点を加へ、横の三点に豎の一点を添ふ。我内には円宗の教法
を守り、外には済度の方便を助けんために、この山に来たれり』と答へ玉ふ。

[現代文訳]

この三尊は僧の形で現れたり、俗人の姿に身を変えたりして大師を礼拝なさつて、
『求法者たちは世の人々を憐れんで十方に世間を遊行する。これらすべての人は私の先生であると、賢者は敬う心をもって師事すべきである』と、たたえられたのです。大師は三尊を大いに敬われ、『お名前を聞かせてください』と尋ねると、三尊は、『縦の三点に横の一点を加え、横の三点に縦の一点を足す。私は心には天台の教法を守り、外に対しては人々を救う手助けになろうと、この山に来たのです』とお答えになりました。

作者未詳「太平記」

(太平記 卷第十八(扉) 比叡山開闢の事 P. 484)

南北朝時代(1368～75年ごろ成立)

これは、三尊が、大師の世の人々を憐れんで十方に世間を遊行することを敬い、ほめる場面の用例であり、それに対して、大師が三尊の名前を聞く場面である。

表現	十方大菩薩、愍衆故行道、応生恭敬心、是則我大師
人間関係	下→上、不問→男
対象	三尊→大師
返答	願はくはその御名を聞かん

④「さては三川殿討たれ玉ひにけり。落ちては誰がために命を惜しむべき」とて、ただ一人天神松原より引き返し、敵の方へ箭二筋三筋射懸けつつ、追腹切つて失せにけり。「ありがたかりし行跡かな。危ふきを見てだにも命を至すは少なきに、適遁れたる命を、後の名を惜しんで命を棄てければ、類少なき勇志かな」と讃めぬ物こそなかりける。その外の兵どもは、親討たるけれども子は知らず、主討死すれども郎従は助けず、物具を棄て弓を杖に突き、夜中に京へ逃げ上る。見苦しかりし有様なり。

[現代文訳]

「すると、三河守殿は討たれなされたのだな。逃げ延びたとて、誰のために命を惜しむ必要があるか」と、たった一人で天神松原から引き返し、敵の方へ矢を二本三本と射かけながらも、主人の後を追って腹を切って果てたのであった。「めったにない見事なふるまいだなあ。危険にさらされるのを見ていても、命を投げ出す者は少ないのに、運よく死を免れた命を、後世の名誉を重んじて命を捨てたのだから、類少ない勇士であるなあ」と、彼の死を褒めない者はいなかった。そのほかの武士たちは、親が討たれても子がかまわずに逃げ、主人が討死しても家来はこれを救うことをせず、鎧兜を捨て、弓を杖に使って、夜中に京へ逃げ帰った。見るに堪えない有様であった。

作者未詳「太平記」

(太平記 卷第二十五(扉) 山名時氏住吉合戦の事 P.232)

南北朝時代(1368～75年ごろ成立)

これは、ほめ手が、類少ない勇士である小林大炊亮が危険にさらされるにもかかわらず、命を捨てる覚悟をし、見事に振る舞ったことをほめる場面の用例である。

表現	ありがたかりし行跡かな。危ふきを見てだにも命を至すは少なきに、適遁れたる命を、後の名を惜しんで命を棄てければ、類少なき勇志かな
人間関係	上下関係不問、不問→男
対象	人々→小林大炊亮
返答	なし

⑤嶋津、門前よりこの馬にひたと打ち乗つて、動々路懸けに歩ませて、由井の浜の浦風に濃い紅の大笠注を吹きそらせて、三物・四物取り付けて、当りを払つて馳せ向ひければ、数万の軍勢これをみて、「誠に一騎当千の兵なり、この間執事の重恩を与へて、傍若無人に振る舞ひせられたるも理かな」と、私語きて、讃めぬ物こそなかりけれ。義貞の兵これを見て、「あはれ敵や」と匍りければ、栗生・篠塚・矢部・堀口・由良・長浜を始めとして、大力の覚え取つたる悪物ども、我先にかの武者と組んで勝負を決せんと、馬を進めて相近づく。

[現代文訳]

島津は、相模入道の館の門前からこの名馬にひらりと飛び乗り、馬蹄の音を荒々しく響かせ、由比ガ浜の浦風に真紅の大笠符をなびかせて、三つ物・四つ物の武具に身を固め、威風あたりを払う勢いで馳せ向つたので、数万の軍勢がこの様子を見て、「本当に一騎当千の兵だ。これまで執事殿がたいそう可愛がって、わがまま勝手にふるまわせていたのも、もっともだなあ」とささやいて、褒めない者はいなかった。義貞方の兵たちもこれを見て、「あつばれな敵よ」と騒ぎたてたので、栗生・篠塚・矢部・堀口・由良・長浜を始めとして、大力の評判をとっている荒武者たちが、我先にあの武者と組んで勝負をつけようと、馬を進めて近づいた。

作者未詳「太平記」

(太平記 卷第十(扉) 関東氏族並びに家僕等打死の事 P. 507)

南北朝時代(1368～75年ごろ成立)

これは、数万の軍勢が、嶋津四郎の一騎当千のところを見てほめる場面の用例であ

る。

表現	誠に一騎当千の兵なり、この間執事の重恩を与へて、傍若無人に振る舞ひせられたるも理かな
人間関係	人間関係不問、男→男
対象	数万の軍勢→嶋津四郎
返答	なし

⑥ここに播磨国の住人に、野中八郎貞国といひける者これを見て、「知らであらんは力なし。御方の兵舟に乗りおくれて、敵に打たれんとするを面りに見ながら、助けぬといふ事やあるべき、この舟こぎ反せ。中村助けん」といひけれども、人あへて耳にも聞き入れず。貞国大きに忿つて、人のさしける櫓を引き奪つて、逆櫓にたて、自ら舟押し反し、遠浅より下り立つて、ただ一人中村が前へ歩み行く。城の兵どもこれを見て、「手負うて引きかねたる物は、如何様宗徒の人なればこそ、これを打たせじと、遥かに引きたる敵どもは、また返し合はすらん。下り合うて、首を取らん」とて、十二、三人が程、中村が後へ走り懸かりけるを、貞国少しも騒がず、長刀の石付取り延べ、向ふ敵一人もろ膝薙ぎて切り居ゑ、その頸を取つて鋒に貫き、中村を肩に引きかけて、閑かに舟に乗りければ、敵も御方もこれを見て、「あはれ剛の者かな」と、誉めぬ人こそなかりけれ。

[現代文訳]

このときに、播磨国の住人で野中八郎貞国という武士がこれを見て、「知らないでいるときは仕方がない。けれども味方の兵が船に乗り遅れて、敵に打たれようとしているのを目のあたりに見ながら、助けないという法があろうか。この船を漕ぎ戻せ。中村を助けよう」と言ったけれども、誰もまったく聞き入れなかった。貞国はたいそう怒って、人がさしていた櫓を無理やり奪って逆櫓に立てて、自分で船を押し戻し、遠浅の地点から海におり立つて、たった一人で中村の前へ歩み寄った。城の中の兵たちはこれを見て、「傷を負って戻ることができなかった者はきっと重要な人だからこそ、これを討たせまいと、ずっと彼方まで戻った敵たちがまた引き返して来たのだろう。浜へおりて行って首を取ろう」と、十二、

三人ほど、中村の背後へ走りかかってきたのを、貞国は少しも騒がず、長刀の石突きを伸ばして、向ってきた敵の一人を両膝横ざまに切って、その首を取って切っ先に貫き、中村に肩を貸して静かに船に乗り込んだので、敵も味方もこれを見て、「ああ、勇者よ」と、褒めない人はいなかった。

作者未詳「太平記」

(太平記 卷第十七(扉) 金崎の城攻める事 P.416)

南北朝時代(1368～75年ごろ成立)

これは、人々が、貞国の勇者らしい行動を見てほめる場面の用例である。

表現	あはれ剛の者かな
人間関係	上下関係不問、不問→男
対象	人々→貞国
返答	なし

⑦かかるところに、左馬頭の敗軍の中より、大高左馬助重政、遙かにこれを見て馬を馳せ寄せ、弓手にゆらりと下り立つて、「あな惨しの只今の御翔候ふや。昔の和泉・朝夷もこれにはよも勝り候はじ」と、覲面に誉め奉つて、「早この馬に召され候へ」と申しければ、左馬頭放ち打跨に飛び乗つて、鞍壺に直り様に、「平家重衡の侍に後藤兵衛が主の馬に乗つて逃げたりけんには替りたる御翔かな。今こそ誠に大高の名は相応して候へ」と、互いに誉めぞ返されける。

[現代語訳]

そうこうしているうちに、左馬頭の敗軍の兵の中から、大高左馬助重政が、はるか遠くから左馬頭の様子を見て、馬を駆って近づき、左側にゆらりと下りたつて、「ああ何というご立派な、ただ今のおふるまいでございましょう。昔の和泉小太郎・朝比奈三郎も、これ以上ではけっしてありますまい」と、面と向って褒め申しあげ、「早くこの馬にお乗りください」と申した。そこで左馬頭は、ぱつとまたがるように飛び乗って、鞍壺に座り直りながら、「平家の重衡の家来であ

った後藤兵衛が、主君の馬に乗って逃げてしまったのとは、打って変ったおふるまいだなあ。今のふるまいこそ、まさに大高という名にふさわしいものだ」と、互いに褒め返しなされたのである。

作者未詳「太平記」

(太平記 卷第三十九(扉) 鎌倉基氏と宇都宮と合戦の事 P. 381)

南北朝時代(1368～75年ごろ成立)

これは、大高左馬助重政が、左馬頭の立派な振る舞いをほめる場面の用例であり、それに対して、左馬頭が大高左馬助重政の振る舞いを褒め返す場面である。

表現	あな惨しの只今の御翔候ふや。昔の和泉・朝夷もこれにはよも勝り候はじ
人間関係	下→上、男→男
対象	大高左馬助重政→左馬頭
返答	平家重衡の侍に後藤兵衛が主の馬に乗って逃げたりけんには替りたる御翔かな。今こ。今こそ誠に大高の名は相応して候へ

⑧殊に十六人まで御入り候へば、尋ね申さでは渡し申すまじく候」由荒らかに申しければ、武蔵坊渡し守を睨みつつ、「さりとも、この北陸道にて、羽黒の讃岐阿闍梨見知らぬ者やあるべき」と言ひければ、中乗りしたる男、弁慶をつくづくとまぼり、「実に実に見参らせたる様に候。一昨年も三十講の御幣とて、申し下し給ひし御坊にてましますや」と申しければ、弁慶力を得て、「さてもかしこく見覚えられたり。あら恐ろしの人や」と褒めける。渡し守の権頭、「小賢しき事申すかな。さ様に見知りたらば、御辺渡し候へ」と申せば、弁慶、「そもそも判官殿よと知りたらば、確かに指して宣へ」と言ひければ、「正しくあの客僧こそ判官殿にておはしけれ」と指してぞ申しける。

[現代語訳]

とくに十六人もおいでということになれば、お尋ねしないではお渡しすることはできません」という旨を、荒々しく言った。そこで武蔵坊は渡し守を睨みつけながら、「それにしても、この北陸道で、羽黒の讃岐阿闍梨を見知っていない者があろうか」と言うと、船の真ん中に乗っていた男が弁慶の顔をじっと熟視し、「本当に、お見かけしたような気がする。一昨年も三十講の御幣とって、お授けくださった御坊でいらっしゃいますか」と言ったので、弁慶も元気づき、「それはよくも覚えていてくださったものよ。ああえらい人よ」と褒めあげた。渡し守の権頭が、「小生意気なことを言う奴よ。そんなに顔見知りなら、お前が渡してやれ」と言ったので、弁慶は、「いったい、判官殿だとわかっているのなら、はっきりと指さしてそう言われよ」と言うと、「間違いなく、あの山伏が判官殿でおありだ」と指をさして言った。

作者未詳「義経記」

(巻第七目録 梗概 如意の渡にて義経を弁慶打ち奉る事 P. 421)

室町時代前期～中期

これは、弁慶が、船の真ん中に乗っていた男が自分を見かけたことがあると言ったことをほめる場面の用例である。

表現	さてもかしこく見覚えられたり。あら恐ろしの人や
人間関係	上→下、男→男
対象	弁慶→中乗りしたる男
返答	なし

⑨清和天皇の御末、鎌倉殿の御弟にて渡らせ給へば、これこそ身にとりては面目と思ひ候ひしか。今かかるべしと予ては夢にも争でか知り候ふべき」と申しければ、人々これを聞きて、「勸学院の雀は蒙求を轉るといしう申したるものかな」とぞ褒めける。「さて九郎が子を妊じたる事はいかに」。「それは世に隠れなき事にて候へば、陳じ申すに及ばず。来月には御産にて候ふべし」とぞ申しける。

[現代語訳]

清和天皇の御末裔、鎌倉殿の御弟でいらっしゃることとて、これこそ私どもにとっては名誉なことと思っておりました。それが今こんな身の上になろうなどは、以前はどうして夢にも知ることができたでございましょうか」と言っただので、人々はこれを聞いて、「勸学院の雀は『蒙求』を囀るとは、なるほどよくも言っただものよ」と言って、禅師の答えを褒めた。「ところで、九郎の子を懐妊したというが、それはどうなのか」。「それは世間でもよく知っていることでございますから、今さら隠し立て申し上げるまでもございません。来月には出産いたすことになりましょう」と言った。

作者未詳「義経記」

(巻第六目録 静鎌倉へ下る事 P.342)

室町時代前期～中期

これは、人々が、禅師の答えをほめる場面の用例である。

表現	勸学院の雀は蒙求を囀るといいう申したるものかな
人間関係	下→上、不問→男
対象	人々→禅師の答え
返答	なし

⑩か様に出で立ち給ひて、灯火をかかげて、武蔵坊をば傍らに置き、北の御方の手を取り給ひて、あなたこなたを歩ませ奉りて、「義経山伏に似たるや、人は稚児に似たるや」とぞ仰せられける。弁慶申しけるは、「君は鞍馬におはしまししかば、山伏にも馴れさせ給ふらんは申すに及ばず。北の御方は何時習はせ給はねども、少しも稚児に違はせ給ひ候はず」とぞ褒め感じ参らせたる。

[現代文訳]

このように装束をお整えになると、判官は灯火をかき立てて、武蔵坊を側近くに控えさせ、北の方の手をお取りになって、あちらこちらお歩かせになりながら、「義経は山伏に似ているか、この人は稚児に似ているか」とおっしゃった。弁慶はこれを聞いて、「殿は鞍馬においでになりましたから、山伏にも慣れていらっしゃるの

は当然のこととござる。奥方様はいつお習いになったというのでもないのに、ちつとも稚児とお違いになりません」と、感嘆してお褒め申し上げた。

作者未詳「義経記」

(巻第七目録 判官北国落の事 P. 386)

室町時代前期～中期

これは、弁慶が、君（義経）の山伏の装束とともに、北の方の稚児の装束が似合っていることをほめる場面の用例である。

表現	君は鞍馬におはしまししかば、山伏にも馴れさせ給ふらんは申すに及ばず。北の御方は何時習はせ給はねども、少しも稚児に違はせ給ひ候はず
人間関係	下→上、男→男
対象	弁慶→君、北の方
返答	なし

4.2.5 江戸時代の用例

①恠畏つて、四海浪を独吟にうたひおさむれば、年寄きげんよく、「どうでも十助は器用な。第一声がようて」とほめられければ、徳左衛門せいて来て、「徳三郎、十助に負けな。肴に鑓をどりして、町中の目をおどろかせ」と、みずから台所にかけてある櫻欄帯取つて来て、我が子にかたげさせ、尻もつまげてとらし、「ずいぶんあちをやつて、親の名まであげてくれよ」と、
[現代語訳]

「十助よ、肴にめでたく小謡をうたえ」と、浄閑のいいつけに、せがれは居ずまいを正して、四海波を一人でうたい納めると、町年寄は機嫌よく、「何といつても十助は器用なことだ。第一に声がよくてたいしたものだ」とほめられた。そこで徳左衛門は負けまいとあせって、「徳三郎よ、十助に負けるな。肴に槍踊りをして、町中の人をびっくりさせろ」と、自分で台所に掛けてあるしゅろぼうきを取って来て、わが子にかつがせ、尻もはしょってやって、「精いっぱいうまくやって、親ま

でほめられるほどにしてくれよ」と、

江島其磧、八文字自笑

「浮世親仁形気（浮世草子集）」

（浮世親仁形気 三之巻 （1）踊を楽しむ子自慢の親父 P. 496）

江戸時代初期～中期

これは、年寄が、十助の歌の器用さをほめる場面の用例である。

表現	どうしても十助は器用な。第一声がようて
人間関係	上→下、男→男
対象	年寄→十助
返答	なし

②しかれ共、あとかたもなきいつはりなれば、誠がつゐにあらはれて、ざんげんのしわざとしりにける。新右衛門後悔して、又よびむかへんとて、わがあやまりなるよしいひつかはしければ、女ぼう返事に、秋風の人の心につたならば実のらぬさきにいねといわざるとかやうによみおこせて、ふたたびかへらざりける。それより、「女ぼうのなさけたぐひなく、いさぎよきふるまひは、かへりてまさりけり」と、ほめぬものなかりしとなん。ある人かたり侍り。

[現代語訳]

しかし、根も葉もない作り事なので、妻の誠がついに明らかになり、讒言のしわざと知った。新右衛門は後悔して、また呼び返そうとして、自分の間違いである旨を、女房に言い遣わしたところ、女房の返事に、秋風の……（秋風があなたの心に立ったならば、実らないうちに、去ねと、なぜ言わないのか）と、このように詠んでよこして、二度と帰らなかった。それから、「女房の情けは比べものがなく、いさぎよいふるまいは、かえって新右衛門よりすぐれている」と、ほめない者はなかったと、ある人が語りました。

作者未詳「一休ばなし（仮名草子集）」

（一休ばなし巻之三目録 二 新右衛門が女房の事 P. 295）

これは、人々が、女房の振る舞いは新右衛門より優れているとほめる場面の用例である。

表現	女ぼうのなさけたぐひなく、いさぎよきふるまひは、かへりてまさりけり
人間関係	不問、不問→女
対象	人々→女房
返答	なし

③うたうて引くを、それをも心をとめて聞かず、小歌の半ばに末社に咄し掛け、
「きのふの和布苅の脇は高安はだし」とほめ、「この中の古歌を大納言殿におたづね申したが、拙者きいた通り、在原の元方に極まりた」など、いたり物語ふたつみつ、かしらにそそらずして、万事おとしつけて居たる客には、太夫気をのまれて、我と身にたしなみ心の出来て、その男する程の事かしこく見えておそろしく、位とる事は脇になりて、機嫌をとる事になりぬ。

[現代文訳]

歌って弾くのを、気を入れて聞こうともせず、小唄の途中で太鼓持に話をしかけ、
「昨日の能の『和布苅』の脇役は脇師の高安はだした」とほめ、「この間の古歌を大納言殿にお尋ね申したが、やはりわしの聞いたとおり、在原元方だった」などと気のきいた風流な話を二つ三つして、初めから落ち着きはらって、万事どっしり構えているお客には、太夫も圧倒されて、我と我が身を慎む心が生れ、その客のすることは何でも賢く見えて、恐ろしくなり、太夫らしく構えることは二の次になって、男の機嫌をとるようになるものです。

井原西鶴「好色一代女（井原西鶴集）」

（好色一代女（扉） 絵入 好色一代女 一（扉） 巻一 あらまし 淫婦の美
 形 P.422）

江戸時代中期

これは、客が、脇役の才能は脇師の高安はだしだとほめる場面の用例である。

表現	きのふの和布苅の脇は高安はだし
人間関係	上→下、男→男
対象	客→脇
返答	なし

④「さても申したり」と讃めける詞の下より、色香のふかき桜は顔にあらはるる若女方、幕切つて見えそむるより、「いよう / \、千さま、千之助様、万人の中にも又とござるまい。今の世の人殺しめ、生きながら墓へやらるるは」と、舞台裏までひびきわたり、諸人の声やう / \ 囃方片扇をあげて静めければ、仕出し舞台なかば近く、鳥足の高木履、その身は紙子にさま / \ の切り接ぎ憎からぬ模様、

[現代文訳]

「さてさて、見事な口上だ」と、見物人がほめていると、深い色香の顔にあらわれた若女方が、幕を押し分けて舞台に姿を見せた。「いよう、いよう、千様、千之助様、万人の中にも二人とござるまい。今の世の人殺しめ、生きたままで墓場へやられるわい」というほめ声が、舞台裏まで響き渡った。その見物の騒ぎを、囃方が半開きの扇を上げてしずめると、新趣向の付け舞台の真中近くに、千之助は鳥足の高下駄をはき、いろいろな紙を切り継ぎにしたおもしろい模様の紙子を着て進み出た。

井原西鶴「男色大鑑（井原西鶴集）」

（本朝若風俗 男色大鑑 絵入 六（扉） 卷六 あらまし P. 500）

江戸時代中期

これは、見物人が、松本文左衛門の見事な口上をほめている場面の用例である。

表現	さても申したり
----	---------

人間関係	上下関係不問、不問→男
対象	見物人→松本文左衛門
返答	なし

⑤折節、天井板に音ありて、黒き物落ちかかる所を、大助、脇差を抜き打ちに、何かはしらず少し手ごたへせしに、灯寄せてみれば、その長一尺四、五寸ばかりの百足を、二つに切り放ち、いまだ動くを取りあつめて、塵塚に捨てさせける。久四郎、横手を打って、「さても早業、古への田原藤太が、勢田の橋は磯なり。沖浪殿の今宵の御手柄、眼前に、これは / \」とほめければ、大助も興に乗じ、「天晴れこの男、古今居合の名人なり。はやい所を御目にかけた」と、ざつと笑うてすましける。

[現代語訳]

折から天井板に音がして、何か黒い物が落ちかかってくるのを、大助は脇差で抜き打ちに斬り払った。何かえたいは知れないが、少し手ごたえがあったので、灯火を引き寄せて見ると、その丈一尺四、五寸ほどの百足が二つに斬られていた。まだ動いているのを取り集めて、塵塚に捨てさせた。久四郎は横手を打って、「さても早業、古の田原藤太の瀬田の橋での働きも、これに比べては物の数ではない。沖浪殿の今宵のお手柄、目のあたりに拝見した、これはこれは」と言って褒めた。大助も興に乗じて、「あっぱれ、この男、古今の居合の名人だ。素早いところをお目にかけた」と、あっさり笑って済ました。

井原西鶴「武道伝来記（井原西鶴集）」

（諸国敵討 武道伝来記 七 絵入（扉） 卷七 あらまし 第三 新田原藤太

P. 265)

江戸時代中期

これは、久四郎が、大助（沖浪殿）が手早く百足を斬り払った早業をほめる場面の用例であり、それに対して、大助が興に乗じて返答する場面である。

表現	さても早業、古への田原藤太が、勢田の橋は磯なり。沖浪殿
----	-----------------------------

	の今宵の御手柄、眼前に、これは / \
人間関係	対等、男→男
対象	久四郎→大助
返答	あっぱれ、この男、古今居合の名人なり。はやい所を御目にかけた

⑥久馬平声を掛け、サアこれまではしふせたり。これからはお侍衆に振る舞ひ申す。一箸づゝあそばせと、どつと笑へば。勝舟、諸岩、藤太入道、百島大夫。然らばお辞儀申さぬと、思ひ / \ に切り伏せ / \、づだ / \ に切つて捨て。いつに変わぬ久馬殿、お手柄候とほめければ、あのおつしやますことわいのと、会釈してこそ入りにけれ。

[現代文訳]

久馬平が声をかけ、「サアここまではやつつけた。この後はお侍たちにお任せします。一箸ずつおつつきなされ」と、どつと笑うと、勝舟、諸岩、藤太入道、百島大夫らは、「それならご遠慮なしに」と、思い思いに切り伏せ切り掛け、ずたずたに切り捨てて、「いつも変りのない久馬平殿のお手柄ですぞ」とほめると、「あんなことおっしゃいますことよ」と、お辞儀して入っていった。

近松門左衛門「用明天王職人鑑（近松門左衛門集）」

（第五 大江山山麓土城の場 〔四五〕王子の最期 P. 155）

江戸時代中期

これは、侍たちが、久馬平の手柄をほめる場面の用例であり、それに対して、久馬平が謙遜して返答する場面である。

表現	いつに変わぬ久馬殿、お手柄候
人間関係	下→上、男→男
対象	お侍衆→久馬平
返答	あのおつしやますことわいの

⑦またや再び悪性ごと。ふつゝと思ひ切りましたと、涙を流し言ひければ。オゝでかしやつた、でかしやつた。それがそなたの身の果報と。みな／＼喜びほめにけり。親方も機嫌を直し。さすが男ぢや、満足した。この上ながら、こちの心の落ち着くため。誓文の証拠にと、三尺ばかりの棹鉄の。夕日のごとく焼けたるを、鉄鋏にて引き出し。鉄床にどうど直し。これはこの度禁中様、お内侍所の釘下地。
[現代文訳]

もう二度と女郎狂い、きっぱりと思ひ切りました」と、涙を流して言うたので、内「オオでかしやつた、でかしやつた。それがそなたの身の仕合せ」と、皆々喜んでほめたのであった。親方も機嫌をなおし、「さすが男じゃ、満足した。この上ながら、こっちの心が落ち着くため、誓文の証拠に」と、三尺ばかりの棒鉄の、夕日のように焼けたのを鉄鋏で引き出し、鉄床にどんと移して、「これはこのたび禁中様、お内侍所の釘の下拵え。

近松門左衛門「心中刃は氷の朔日（近松門左衛門集）」
（上之巻 備後町鍛冶屋の場 〔九〕親方の腹立ち P. 257）

江戸時代中期

これは、皆が、平兵衛がよくやり遂げたことをほめる場面の用例である。

表現	オゝでかしやつた、でかしやつた。それがそなたの身の果報
人間関係	上下関係不問、不問→男
対象	みな→平兵衛
返答	なし

⑧各々、機嫌を伺ひける。女中たち口々に、これは／＼御両所のいかい骨折り、
ことにこの雪細工、兎の耳がきつい手際、オゝしをり殿の言はしやる通り、束帯
姿のこの人形、奇麗なことぢやないかいなうと、誉めそやされて両人は、おとなげなくも出かし顔。蝦夷子につこと打ち笑み給ひ。ホゝ玄蕃、弥藤次、できた／＼。イザ酌取れと余念なくキン廻る盃、養老の。尽きぬ泉のそこはかと、案内も

なく広庭伝ひ.

[現代文訳]

後に荒巻弥藤次が台に乗せた雪人形を持ち、それぞれ機嫌を伺った。女中たちは口々に、「これはこれはお二人のたいそうなお働き。特にこの雪細工は、兎の耳がすばらしいできばえじゃ」「オオしをり殿の言われる通り、束帯姿のこの人形はきれいなことじゃないかいのう」と誉めそやされて、二人は大人げなくも自慢顔である。蝦夷子はにっこり笑いながら、「ホホ玄蕃、弥藤次、でかした、でかした。イザ酌を取れ」と、一心に盃が回っているところへ、養老の尽きない泉の底ではないが、はっきりとした案内もなく、広庭を伝って。

近松半二、松田ばく、栄善平、近松東南、三好松洛（後見）「妹背山婦女庭訓
(浄瑠璃集)」

(第一 蝦夷子館の場 [七] 雪見の酒宴 P. 326)

江戸時代中期

これは、女中たちが、二人（玄蕃、弥藤次）の工夫した雪人形の素晴らしい出来栄えをほめる場面の用例である。

表現	これは / \ 御両所のいかい骨折り. ことにこの雪細工、兎の耳がきつい手際. オ、しをり殿の言はしやる通り. 束帯姿のこの人形. 奇麗なことぢやないかいなう
人間関係	下→上、女→男
対象	女中たち→二人
返答	なし

⑨それの。格別よい子になりやつた。嘘ならその鏡を見や。親の目は鼻眞目、他人が証拠。万来いよ。飯炊きの杉も、ちやつと来て。おきくが髪付見てくれい。あい / \ と走り出で、これは / \ 。奥様いかいお上手。額付、髪付で。下地のよいお顔が、なほ美しうならしやんして。女子でさへ心気が湧く。裸身をむつくり

と、抱いて寝たいと褒むるもあり。杉がはたと手を色打つて、アゝさうぢや。日頃の不審が今晴れた。わしが鏡で顔を見て、生地は随分よけれども。人が惚れぬ、異なことと思うたが、髪の結ひやうばつかりで、あつたらこの身が埋れ木ぢや。

[現代文訳]

「それぞれ、特別よい子になった。嘘と思うなら、その鏡を見てごらん。親の目は鼻目、他人が証人、万来いよ、飯炊きの杉も、早く来て、おきくの髪かたちを見ておくれ」「あいあい」と、走り来て、「これはこれは、奥様たいへんお上手、額つき髪かたちで、もともとよい顔が、いっそう美しくなれまして、女でさえ心がひかれる。裸の体をむっくりと抱いて寝たい」と褒める者もいる。杉ははたと手を打って、「アアそうだ、日ごろの疑問がいまわかった。わたしが鏡で顔を見て、下地はずいぶんよいのだが人が惚れぬは変なことと思っていたが、髪の結ひ方ばっかりで、もったいないこの身を埋れ木にしていた。

近松門左衛門「鑑の権三重帷子（近松門左衛門集）」

（上巻 浅香市之進屋敷の場 〔六〕髪梳き P. 597）

江戸時代中期

これは、人が、奥様の髪形作りの上手さをほめる場面の用例である。

表現	これは / \ . 奥様いかいお上手。額付、髪付で、下地のよい顔が、なほ美しうならしやんして、女子でさへ心気が湧く。裸身をむっくりと、抱いて寝たい
人間関係	下→上、女→女
対象	女中→奥様、子
返答	なし

⑩「爾らんには安堵たり。就きて亦情願あり、両賢兄の仙丹は、効験己も知る所、いかで少許賜らば、白打角力の上に就きて、未然の怪我を防ぐべし。いかで / \」と乞求れば、季彦と八重作も、共侶に称赞ホメソヤして、「彼仙丹の神妙なる、己等が身に取りて、起死再生といひつべし。角力白打を嗜者、貯禄て身を

放さずば、人を救ひ己を救ふ、神仏の擁護にも、優て憑しかりぬべし」と誉れば
樅二郎「然なり」と答て、「己彼仙丹を、聊なりとも得たらんには、不断この身
を放つことなく、角力の場に蒞日は、裸体ハダカミの準備に最小なる、貝に移し
て髻の裏に、蔵めてもて急用に充ん。両賢兄饒し給はずや」

[現代語訳]

「それならば安心した。それにつき、別に願いがある。お二方の仙薬は、効き目は
私も知るとおりだが、どうか少々なりとも下さるならば、柔術・相撲の場合におい
て、あらかじめけがを防ぐだろう。どうか、どうか」と頼み求めると、季彦も八重
作も、揃って褒めそやして、「あの仙薬がよく効くことは、私たちの体にとっても、
起死回生のものと言えます。相撲・柔術を好む者が、持っていて身から離さなけれ
ば、人をも自分をも救い、神仏の守護にも優って、頼もしいことでしょう」と褒め
る。樅二郎は、「そうだ」と答えて、「私があの仙薬を、些少でも手にしたならば、
平生、身から離すことはなく、相撲の土俵に出る日には、裸身の時の用意として、
小さな貝に入れて、髻の中にしまって、危急の際に用いよう。お二方、お許し下さ
らないか」

曲亭（滝沢）馬琴「近世説美少年録」

（新局玉石童子訓 卷二十四 第五十四回 渾不似を弁じて防守宿を移す 小

雪太名を窃て巧に悪を資く P. 435）

江戸時代後期（1829～32年成立）

これは、季彦と八重作が、両賢兄の仙丹は自分の体によく効くだけでなく、相撲・
柔術を好む者にとっても手離せないものだとほめる場面の用例である。

表現	彼仙丹の神妙なる、己等が身に取りて、起死再生といひつべし。 角力白打を嗜者、貯禄て身を放さずば、人を救ひ己を救ふ、神 仏の擁護にも、優て憑しかりぬべし
人間関係	対等、男→男
対象	季彦と八重作→両賢兄の仙丹
返答	なし

4.2.6 明治時代の用例

①遂に三歳の秋より引き取って膝下に育れば、少しは紛れて貧家に温き太陽のあたる如く淋しき中にも貴き笑の唇に動きしが、さりとは此子の愛らしきを見様とも仕玉わざるか帰家れざるつれなさ、子供心にも親は恋しければこそ、父様御帰りになった時は斯して為る者ぞと教えし御辞誼の仕様能く覚えて、起居動作のしとやかさ、能く仕付たと誉らるゝ日を待て居るに、何処の竜宮へ行かれて乙姫の傍にでも居らるゝ事ぞと、少しは邪推の恠気萌すも我を忘れられしより子を忘れられし所には起る事、正しき女にも切なき情なるに、天道怪しくも是を恵まず。

幸田露伴「風流仏」

1889（明治22）年9月

これは、父親が、子供が身に付けた礼儀に対して感心してほめる場面の用例である。

表現	能く仕付た
人間関係	上→下、男→男
対象	父→子供
返答	なし

②十兵衛も先刻に来て同じ事を云ふて帰つたは、彼も可愛い男ではないか、のう源太、可愛がつて遣れ可愛がつて遣れ、と心あり気に云はるゝ言葉を源太早くも合点して、ゑゝ可愛がつて遣りますとも、といと清しげに答れば、上人満面皺にして悦び玉ひつ、好いは好いは、嗚呼気味のよい男児ぢやな、と真から底から褒美られて、勿体なさはありながら源太おもはず頭をあげ、お蔭で男児になれましたか、と一語に無限の感慨を含めて喜ぶ男泣き。既此時に十兵衛が仕事に助力せん心の、世に美しくも湧たるなるべし。

幸田露伴「五重塔」

1891（明治24）年11月～1892（明治25）年4月

これは、上人が、源太の清清しく答えてくれた様子を見てほめる場面の用例であり、それに対して、源太が謙遜してお礼を言って返答する場面である。

表現	好いは好いは、嗚呼気味のよい男児ぢやな
人間関係	上→下、男→男
対象	上人→源太
返答	お蔭で男児になりましたか

③お前の祭の姿は大層よく似合つて浦山しかつた、私も男だとあんな風がして見たい、誰れのよりも宜く見えたと賞められて、何だ己れなんぞ、お前こそ美しいや、廓内の大巻さんよりも奇麗だと皆がいふよ、お前が姉であつたら己れはどんなに肩身が広かろう、何処へゆくにも追従て行つて大威張りに威張るがな、一人も兄弟が無いから仕方が無い、ねへ美登利さん今度一処に写真を取らないか、我れは祭りの時の姿で、お前は透綾のあら縞で意気な形をして、水道尻の加藤でうつさう、龍華寺の奴が浦山しがるやうに、本当だぜ彼奴はきつと怒るよ、真青に成つて怒るよ、にゑ肝だからね、赤くはならない、それとも笑ふかしら、笑はれても構はない、大きく取つて看板に出たら宜いな、お前は嫌やかへ、嫌やのやうな顔だものと恨めるもをかし、変な顔にうつるとお前に嫌らはれるからとて美登利ふき出して、高笑ひの美音に御機嫌や直りし。

樋口一葉「たけくらべ」

1895（明治28）年1～3、8、11、12月、1896（明治29）年1月

これは、美登利が、信如の祭りの姿の美しさをほめる場面の用例であり、それに対して、信如が謙遜して褒め返す場面である。

表現	お前の祭の姿は大層よく似合つて浦山しかつた、私も男だと
----	-----------------------------

	あんな風がして見たい、誰れのよりも宜く見えた
人間関係	対等、女→男
対象	美登利→信如
返答	何だ己れなんぞ、お前こそ美しいや、廓内の大巻さんよりも奇麗だと皆がいふよ、お前が姉であつたら己れはどんなに肩身が広かろう、何処へゆくにも追従て行つて大威張りに威張るがな、一人も兄弟が無いから仕方が無い

④下るには棧橋もなし困つて居ると久太夫が碇を向の岸へ投げ上げ綱を伝つて岸へ上り、荷物など皆な一人で世話して仕舞ひました。龍馬が大さう喜んで、お龍よ橋本の仕事は実に潔ひ、己れの抱へる者は皆なコンな者だと褒めて居りました。

榎崎龍、川田雪山「千里駒後日譚」

1899（明治32）年11月4、5、7～10日

これは、龍馬が、橋本久太夫の仕事の立派さをほめる場面の用例である。

表現	お龍よ橋本の仕事は実に潔ひ、己れの抱へる者は皆なコンな者だ
人間関係	上→下、男→男
対象	龍馬→橋本久太夫
返答	なし

⑤証人として第一に呼び出されたのが余の叔父だ、叔父は堀の底を探つては何うだと言ひ出した発頭人である為、何故に堀の底へ目を附けたかとの廉を問われるのだ、次が高輪田、次が根西夫人、次が秀子、最後が余と云う順序である、余は是等の人々が検査官の問いに対し、何の様に答えたか勿論知る事は出来ぬけれど、後で聞いた所に由れば、叔父は「此の死骸を誰と見るや」との問いに「先の養女お浦と認める」と答え高輪田は「首のない屍骸ゆえ誰とも認める事は出来ま

せん」と少し理窟っぽく答え、「然らば此の死骸に附いて居る衣服其の他の品物に見覚えはないか」と問われ、「品物は悉く見覚えが有ります」とてお浦が失踪の当日身に着けて居た品だと答えたので、極めて明瞭な答えだと褒められた相だ、根西夫人も、秀子も、余の叔父と同様に、死骸は勿論お浦の死骸だと云い、品物にも覚えがあるとて有りの儘を答えたが、検査官は殊に秀子には目を附けて、猶彼の異様な手袋の事を問うた、秀子は少しも隠さずに、其の手袋は自分の物で、お浦が失踪の当日自分の手から取ったのだと云い、お浦が此の家の書斎で消滅する様に居なくなった次第も云い、猶問われて自分とお浦と喧嘩した事も云った、唯、喧嘩の原因だけは、何と問われても云わず、単に「お認めに任せます」と云うたので、検査官は多分嫉妬の為だろうと云い、全く秀子を嫌疑者とするに足ると思ひ詰め、陪審員なども、殆ど最早此の上を詮索するに及ばぬとまで細語いたと云う事だ。

黒岩涙香「幽霊塔」

1901（明治34）年

これは、検査官が、高輪田が明瞭に答えてくれたことをほめる場面の用例である。

表現	極めて明瞭な答えだ
人間関係	上→下、男→男
対象	検査官→高輪田
返答	なし

⑥姿は異って居るけれど確かに此の看護人は先にお浦の事件にも関係した探偵森主水である。余は彼の目の底に一種の慧敏な光が有るので見て取った。彼は名を指されて痛く驚いたが強いて空とぼけもせぬ。忽ち笑って「イヤ姿を変えるのは私の不得手では有りますが、けれど素人に見現わされたは二十年来初めてです。貴方の眼力には驚きました」と褒める様に云い、直ぐに調子を変えて「所で私へのお話とは何事です」と軽く問うた。余は何事も腹藏なく打ち明け呉れと頼んで置いて、爾して何故に秀子へ恐ろしい嫌疑が掛かったかと詳しく聞いたが、成る

ほど仔細を聞けば尤もな所も有る。

黒岩涙香「幽霊塔」

1901（明治34）年

これは、探偵（森主水）が、初めて素人（余）に見現わされたこと、いわゆる素人（余）が眼力を持っていることをほめる場面の用例である。

表現	イヤ姿を変えるのは私の不得手では有りますが、けれど素人に見現わされたは二十年来初めてです。貴方の眼力には驚きました
人間関係	対等、男→男
対象	森主水→余
返答	なし

⑦それに長屋中、皆な私を可愛がってくれまして、おとなしい方だよい方だ、珍しい堅人だと褒めてくれるのでございます。ですからお俊ばかりでなくお神さんたちが頼みもせぬ用を達してくれるのでございます。ところがおかしいのはお俊がこれを焼いて、何を私がついているによけいな世話だと、お神さんたちの目の前でいやな顔をする、それをお神さんたちはなお面白半分に私の世話を焼いたこともありました、けれども、それでもってお俊と私の仲を長屋の者が疑ぐるかというに決してそうでなく、てんで私をば木か金で作ったもののようになお無類の堅人だと信じていたのでございます。けれどもお俊の方はそれほどの信用はないのです。ですからお俊さんは少し怪しいが、とても物にはならぬなど、明らかに私に向って言った山の神さえいたのでございます。

国木田独歩「女難」

1903（明治36）年12月

これは、皆が、「私」のことをおとなしく、よい方であり、珍しい堅人だとほめる場面の用例である。

表現	おとなしい方だよい方だ、珍しい堅人だ
人間関係	上下関係不問、不問→男
対象	皆→私
返答	なし

⑧「人迹の稀なはんまり大袈裟だね」と主人が抗議を申し込むと「蝸牛の庵も仰山だよ。床の間なしの四畳半くらいにしておく方が写生的で面白い」と迷亭君も苦情を持ち出した。

東風君だけは「事実はどうでも言語が詩的で感じがいい」と褒めた。

独仙君は真面目な顔で「そんな所に住んでいては学校へ通うのが大変だろう。何里くらいあるんですか」と聞いた。

「学校まではたった四五丁です。元来学校からして寒村にあるんですから……」

「それじゃ学生はその辺にだいぶ宿をとってるんでしょう」と独仙君はなかなか承知しない。

「ええ、たいていな百姓家には一人や二人は必ずいます」

「それで人迹稀なんですか」と正面攻撃を喰わせる。

夏目漱石「吾輩は猫である」

1905（明治38）年1月～8月

これは、東風君が、寒月君が選んだ住まいの場所をほめる場面の用例である。

表現	事実はどうでも言語が詩的で感じがいい
人間関係	対等、男→男
対象	東風君→寒月君
返答	なし

⑨主人は細君をそれほど重んじてはいないが、ただ以上の点をおおいに敬している。「おまえは、とくな性だ」とほめてる。細君も笑って、「とくな性ではあ

りませんよ、はじめから損をあきらめてるから、とくのように見えるのでしょう」という。

伊藤左千夫「箸」

1909（明治42）年10月1日

これは、主人が、細君のとくな性格をほめ、それに対して、細君がほめられる性格ではないと返答した場面の用例である。

表現	おまえは、とくな性だ
人間関係	対等、男→女
対象	主人→細君
返答	とくな性ではありませんよ、はじめから損をあきらめてるから、とくのように見えるのでしょう

⑩乳を受け取って瀧しにかけた細君も、きれの上にほこりが無いのにおどろいて、「なるほど、花前はしぼるのがじょうずだ」と主人のところへ顔をだしてほめる。花前は色も動きはしない。もとより一言ものをいうのでない。主人や細君とはなんらの交渉もないふうで、つぎの黒白まだらの牛にかかった。主人は兼吉をよんで、いましぼるからこの牛に飼い葉をやれと命じた。花前はしぼりバケツを左に持ちながら、右手で乳牛の肩のへんをなでて、バアバアとやさしく二、三度声をかける。

伊藤左千夫「箸」

1909（明治42）年10月1日

これは、細君が、上手に乳搾りができた花前のことをほめる場面の用例である。

表現	なるほど、花前はしぼるのがじょうずだ
人間関係	上→下、女→男
対象	細君→花前
返答	なし

4.2.7 大正時代の用例

①もう殺すかとおもふたら

殺しもせいでたちとまり

「どこへおじやる」ときくゆゑに

つつみかくさずいひますと

「よいお子たち」とほめながら

峠をおりてゆきました。

乳母はきいて大笑ひ

「なんの賊などでませうぞ」

それは木樵でありました。

竹久夢二「どんたく 絵入り小唄集」

1913（大正2）年11月

これは、山賊（木樵）が、私と姉のことをほめる場面の用例である。

表現	よいお子たち
人間関係	対等、男→男・女
対象	山賊（木樵）→私と姉
返答	なし

②衣服にもやはり無頓着であつた。煙草が好きで、いつでも煙管の羅宇の破れたのに紙を巻いてジウジウ吸っていたが、いよいよ胭脂が溜って吸口まで滲み出して来ると、締めてるメレンスの帯を引裂いて掃除するのが癖で、段々引裂かれて半分近くまでも斜に削掛のように総が下つてゐる帯を平気で締めていた。実業熱が長じて待合入りを初めてから俄かにめかし出したが、或る時羽織を新調したから見てくれと斜子の紋付を出して見せた。かなり目方のある斜子であつたが、絵甲斐機の胴裏が如何にも貧弱で見窄らしかつたので、「この胴裏じゃ表が泣く、最少し気張れば

宜かった」というと「何故、昔から羽織の裏は甲斐機に定ってるじゃないか、」と澄ました顔をしていた。それから、「この頃は二子の裏にさえ甲斐機を付ける。斜子の羽織の胴裏が絵甲斐機じゃア郡役所の書記か小学校の先生染みていて、待合入りをする旦那の估券に触る。思切って緞子か繻珍に換え給え、」（その頃羽二重はマダ流行らなかった。）という、「緞子か繻珍？——そりゃア華族様の事ッた、」と頗る不平な顔をして取合わなかった。丁度同じ頃、その頃流行った黒無地のセルに三紋を平縫いにした単羽織を能く着ていたので、「大分渋いものを拵えたネ、」と褒めると、「この位なものは知ってるサ、」と頗る得々としていた。

内田魯庵「二葉亭余談」

1916（大正5）年3月5日

これは、「私」が、二葉亭が当時流行っていた単羽織を着ていたことをほめ、それに對して、二葉亭が得意がっている様子で返答した場面である。

表現	大分渋いものを拵えたネ、
人間関係	対等、男→男
対象	私→二葉亭
返答	この位なものは知ってるサ、

③私はその御言を伺ひますと、虫の知らせか、何となく凄じい気が致しました。實際又大殿様の御容子も、御口の端には白く泡がたまつて居りますし、御眉のあたりにはびく／＼と電が走つて居りますし、まるで良秀のもの狂ひに御染みなすつたのかと思ふ程、唯ならなかつたのでございます。それがちよいと言を御切りになると、すぐ又何かが爆ぜたやうな勢ひで、止め度なく喉を鳴らして御笑ひになりながら、「檳榔毛の車にも火をかけよう。又その中にはあでやかな女を一人、上の装をさせて乗せて遣はさう。炎と黒煙とに攻められて、車の中の女が、悶え死をする——それを描かうと思ひつuitのは、流石に天下第一の絵師ぢや。褒めてとらす。おゝ、褒めてとらすぞ。」大殿様の御言葉を聞きますと、良秀は急に色を失つて喘ぐやうに唯、唇ばかり動して居りましたが、やがて体中の筋が緩んだやうに、べたりと畳

へ両手をつくと、「難有い仕合でございます。」と、聞えるか聞えないかわからない程低い声で、丁寧に御礼を申し上げました。

芥川龍之介「地獄変」

1918（大正7）年7月8日

これは、大殿様が、天下第一の絵師、良秀の素晴らしい発想をほめ、それに対して、良秀がお礼を言って返答する場面である。

表現	…流石に天下第一の絵師ぢや。褒めてとらす。おゝ、褒めてとらすぞ。
人間関係	上→下、男→男
対象	大殿様→良秀
返答	難有い仕合でございます。

④一毫さんは、私の中学時代に死んだ。先年国へ帰った時、三方硝子戸の室には、中学の先生とかいう、若夫婦が間借りをしていた。おばあさんが、久しぶりなので喜んで、大きくなったと褒めてくれた。秋塘さんはまだ元気だった。関羽鬚がちつとも白くなっていなかった。そして、玉質焼は益々進歩して、渋味のある立派なものになっていた。まだ改良と工夫とを怠っていないのだと見える。

中谷宇吉郎「九谷焼」

1924（大正13）年11月21日

これは、おばあさんが、久々に会った「私」（孫）が大きくなったことをほめる場面である。

表現	大きくなった
人間関係	上→下、女→男
対象	おばあさん→私
返答	なし

⑤長年八時に起きて九時過ぎにアタフタと役所へ駆けつける私には、暗い中に起きることは全く新しい経験だった。屋敷町は人っ子一人通らない。坂を下りた時巡査に行き会ったばかりだった。

「もし」と呼び止められたのは意外だったが、

「何です？」と訊くと、

「あゝ、あなたですか、お早い散歩ですな」と褒めてくれた。電車通りへ出ても店は未だ皆閉まっていて、看板ばかりが目につく。御註文通り芝公園へ行って丸山へ登ったけれど、日の出には少し間があった。矢張り早い人もあるもので、老人が一人やって来た。

「お早いことでございますな」

と私の太いステッキにお辞儀をして直ぐに下りて行ってしまった。

佐々木邦「朝起の人達」

1925（大正14）年11月

これは、巡査が、「私」が早い時間で散歩することをほめる場面の用例である。

表現	あゝ、あなたですか、お早い散歩ですな
人間関係	上→下、男→男
対象	巡査→私
返答	なし

⑥しかし、彼れは親しい態度を執ることはなかつたが、ある日の晚餐の座で、老婢は、

「あの方は氣象のさつぱりしたいい娘さんですね。」と褒めて、縁談を求めてゐるやうなことをも話した。

「しかし、あのくらゐな女はいくらでもあるだらう。」日比野は、老婢の心を察して簡単にさう答へた。

正宗白鳥「見て過ぎた女」

1926（大正15）年2月1日

これは、老婢が、縁談を求め、妻君の妹の気立てをほめる場面の用例である。

表現	あの方は氣象のさつぱりしたいい娘さんですね。
人間関係	下→上、女→女
対象	老婢→妻君の妹
返答	なし

⑦「私は腹が立ちましたわ。こんなことをしているならと思って直ぐ羽織を拵えたんですが、未だ虫が治まりませんから、帯も一本買いましたわ。両方で丁度碁盤ぐらいです。あなたが白状なすったから、私も白状致しますわ」

「お前もナカ／＼隅へは置けないんだね」

と鳥居氏は抛ろなく夫人の手腕を褒めた。

「でも、私は良心がありますわ。始終気が咎めていたんですもの」

「何うだか？」

「それはあなたが御自分のお心に引き較べて仰有ることよ。あなたぐらい図々しい人はありませんわ」

佐々木邦「或良人の惨敗」

1926（大正15）年2月

これは、鳥居氏が、夫人の手腕をほめる場面の用例であり、それに対して、夫人が否定して手腕をそんなに使っていないと返答した場面である。

表現	お前もナカ／＼隅へは置けないんだね
人間関係	対等、男→女
対象	鳥居氏→夫人
返答	でも、私は良心がありますわ。始終気が咎めていたんですもの

⑧つつましく箸を運んでゐる娘の姿が、華やかな婚礼姿になつて眼の前に浮ぶ。そして、その傍に並んで坐つてゐる新郎の姿、これはまた、役所の同僚、安田なのである。すると、何時の間にか、平造の眼の前には、今日、上役がカレンダーを見て、発明の才があると褒めた、あの時の光景がありありと浮んで来る。平造は、はつと、我に帰る。誇らしげに、一同を眺めまわす。——おれが、今に、どんなえらいことをしてかすか、まあ、見とれ。妻と娘とは、あつけに取られて、平造の顔を見る。

岸田國士「ゼンマイの戯れ（映画脚本）」

1926（大正15）年7月1日

これは、上役が、カレンダーを作った平造の発明の才能をほめる場面の用例である。

表現	発明の才がある
人間関係	上→下、男→男
対象	上役→平造
返答	なし

⑨母「まだお前が十五六の時分に逢った切りで、それから三年振で今日逢うと、一寸見では話も出来ない位見忘れる様に大きく成ったのう、人の噂に大層働きの好い芸者になったとは聞いたが、お前は一体親孝行で母を大事にしたが、旦那様もお前は感心だ、あゝいう芸者などには似合わぬ者とお誉めなすったが、是も孝行の徳だ、私は又斯んな姿になるまで零落しました」

兼「もう唯今お嬢様にも左様申すので、何うかして何処に入らっしゃるか知れ無い訳もあるまいと尋ねましても何うしても知れませんで、慥か何時ぞや三田に入らっしゃる様子を聞きましたが」

鈴木行三校訂「松の操美人の生理 俠骨今に馨く賊胆猶お腥し 三遊亭圓朝」

1926（大正15）年

これは、旦那様が、親孝行を大事にしている兼のことをほめたことを伝えている場面の用例である。

表現	あゝいう芸者などには似合わぬ者
人間関係	上→下、男→女
対象	旦那様→兼
返答	なし

⑩春太郎は、学校へゆく道で考えました。早く雪が降ってくれるといいな。そしてクリスマスの晩になるといいな。だけど、ジャッキイはどうだろう。あれからすっかり幸福になったかしら。まだあの大きなズボンをはいて、ロンドンの街を歩いているのじゃないかしら。ぼくもロンドンへゆきたいな。お姉さんが死んでしまったら、ぼくお姉様のヴァイオリンを貰おうや。そして、クリスマスの晩、ロンドンの街を歩くんだ。そうすると大きな、玩具屋があつて、その飾窓に、テディ熊がいるだろう。「おい危い」で、空には星が、きらきら光っていて、袋を持たないサンタクロスのお爺さんがやってくる。ジャッキイがヴァイオリンをひいているのを、お爺さんがききながら、「うまい、うまい。ジャッキイは、今に大音楽家になるぞ」そう言ってほめました。

きっと、ぼくは大音楽家になるだろう。そして、ぼくのお父様も大音楽家なんだ。おや、おや。ぼくのお父様は、会社へ出ているんだっけ、

「カン、カン、カン」

「カン、カン、カン」

その時、春太郎は、いつの間にか、学校の前へ来ていました。

竹久夢二「街の子」

1926（大正15）年12月

これは、お爺さんが、ジャッキイが上手にヴァイオリンをひいているのを聞いてほめる場面（ジャッキイの想像）の用例である。

表現	うまい、うまい。ジャッキイは、今に大音楽家になるぞ
----	---------------------------

人間関係	上→下、男→男
対象	お爺さん→ジャッキイ
返答	なし

4.2.8 昭和時代の用例

①照彦様が再三直されて国語の読み方をおわった時、「有本さん、ご苦労でございます。頭のわるい子ですから、特別にお骨が折れましょう」と奥様は先生をねぎらうつもりでおっしゃった。「エヘン」と安斉先生が咳ばらいをした。「どういたしまして。内藤君、今のところを読んでごらんなさい」と有本先生が命じた。正三君がスラスラと読みおわるのを待っていたように、奥様は、「よくおできでございます。照彦とはまったく違います」とほめた。「どういたしまして」「いいえ。照彦や、おまえは内藤さんの二倍も三倍もやらなければだめですよ。頭のわるい分を勉強で取りかえすのです」「エヘン」「ゆだんをしてはなりませんよ。人よりも頭のわるいことを始終わすれないようにしましてね」「エヘンエヘンエヘン」と安斉先生は続けさまだった。

佐々木邦「苦心の学友」

1927（昭和2）年10月号～1929（昭和4）年12月号

これは、奥様が、正三がスラスラと読むことをほめる場面の用例であり、それに対して、正三が謙遜して返答する場面である。

表現	よくおできでございます。照彦とはまったく違います
人間関係	上→下、女→男
対象	奥様→正三
返答	どういたしまして

②百合子に『レーンコートを持って、停車場まで姉ちゃんを迎へに行けるか』と聞いてみる。行けるといふ。尤毎日学校へ通つてゐる道だ。『そりや偉い。糸子姉

ちやんは雨具なしで下館から来るのだからね。妹が姉を迎へに行くつて、立派な事だ』とほめると、レインコートを頭からすつぽり被つて、姉のを脇にかかへて、雨の中を出て行つた。あとから妻を見にやる。『もう半分道行きましたよ、せつせと、勇んで』夜、電燈の下で三人の子と遊ぶ。

横瀬夜雨「五葉の松」

1934（昭和9）年

これは、「私」（父）が、下の娘（百合子）が上の娘（糸子）を迎えに行くことをほめる場面の用例である。

表現	そりや偉い。糸子姉ちやんは雨具なしで下館から来るのだからね。妹が姉を迎へに行くつて、立派な事だ
人間関係	上→下、男→女
対象	私→百合子
返答	なし

③「ああ、そうですか。ぼく、先生の助手の小林っていうんです。」帽子をとつて、おじぎをしますと、辻野氏はいっそうにこやかな顔になって、「ああ、きみの名は聞いていますよ。じつは、いつか新聞に出た写真で、きみの顔を見おぼえていたものだから、こうして声をかけたのですよ。二十面相との一騎うちはみごとでしたねえ。きみの人気はたいしたものですよ。わたしのうちの子どもたちも大の小林ファンです。ハハハ……。」と、しきりにほめたてるのです。小林君は少しはずかしくなつて、パツと顔を赤くしないではいられませんでした。

「二十面相といえは、修善寺では明智さんの名まえをかたったりして、ずいぶん思いきつたまねをするね。それに、けさの新聞では、いよいよ国立博物館をおそふのだっていうじゃないか。じつに警察をばかにしきつた、あきれた態度だ。けっしてうっちゃつてはおけませんよ。あいつをたたきつぶすためだけでも、明智さんが帰つてこられるのを、ぼくは待ちかねていたんだ。」

「ええ、ぼくもそうなんです。ぼく、いっしょうけんめいやってみましたけれど、

とても、ぼくの力にはおよばないのです。先生にかたき討うちをしてほしいと思って、待ちかねていたんです。」

「きみが持っている新聞は、けさの？」

「ええ、そうです。博物館をおそうっていう予告状ののっている新聞です。」

小林君はそういいながら、その記事ののっている個所をひろげて見せました。

江戸川乱歩「怪人二十面相」

1936（昭和 11）年 1 月号～12 月号

これは、辻野氏が、小林君が見事に二十面相との一騎うちをし、且つ大した人気であることをほめる場面の用例である。

表現	二十面相との一騎うちはみごとでしたねえ。きみの人気はたいしたものですよ。わたしのうちの子どもたちも大の小林ファンです。ハハハ……。
人間関係	上→下、男→男
対象	辻野氏→小林君
返答	なし

④七千メートルの高空！

いまや偵察機は、怪塔ロケットにおいつきそうです。

霧はもちろんのこと、雲もなくなりました。ひろびろとした空です。地球はどこかへいってしまいました。下には蒲団の綿のような密雲が、どこまでもひろがっています。

「おい青江。貴様、とうとうがんばったな。えらいぞ」

と、兵曹長がはじめてちょっとほめた。

「ま、まだであります」

青江三空曹は、どなりかえました。

海野十三「怪塔王」

1938（昭和 13）年 4 月 8 日～12 月 4 日

これは、兵曹長が、青江の頑張った姿をほめる場面の用例であり、それに対して、蒼江がまだ自分の力は足りないと返答する場面である。

表現	おい青江。貴様、とうとうがんばったな。えらいぞ
人間関係	上→下、男→男
対象	兵曹長→青江
返答	ま、まだであります

⑤さすがに少し恥ずかしい気もしたが、度胸をきめて、一組頼むことにした。大分経ってから、平井さんがやっと出来ましたと言って、その判を持って来てくれた。早速拝見すると、大変よい出来で、特にそのうちの一つがひどく気に入ったので、御礼を言った。そうしたら平井さんが大変喜んで「実は私もこの方は近来にない出来だと思っていたんです。この判の味が分るようなら、先生もなかなか眼があります」と褒めてくれた。そして「僕は滅多に人に頼まないのだが、一つ何か絵を描いて、この判を押してもらいたいが」ということになった。それではと、速座に雪の絵を描いた。

中谷宇吉郎「南画を描く話」

1941（昭和 16）年 7 月 1 日

これは、平井さんが、私の見る目があることをほめる場面の用例である。

表現	実は私もこの方は近来にない出来だと思っていたんです。この判の味が分るようなら、先生もなかなか眼があります
人間関係	対等、男→男
対象	平井さん→私
返答	なし

⑥校長の言葉は、ほんの二三分で終わった。そうした場合、事実とちがった月並

の讃辞をのべたてるようなことは、これまで校長の決してやらないことだったが、宝鏡先生についても、校長は、ただ次のようなことを述べたきりだった。「先生が御在任中、ただの一時間も授業を休まれないで、諸君の教育に当って下すったことは感謝にたえない。これは、先生の御健康のたまものであるが、また私事をもって公事をおろそかにされない先生の御精神が然らしめたものだと思う。私は、それを先生が本校に遺された最大の教訓として、諸君と共に有りがたくおうけしたいと思う。」次郎は、宝鏡先生がそれだけでも校長にほめてもらったことが、何かうれしかった。しかし、とりわけ彼の心にしみたのは、校長がそのあとにのべた言葉だった。「諸君は、今後、いつ先生と再会の期があるかわからないが、一たび結ばれた師弟の縁は永久に消えるものではない。それは親子の縁が永久であるのと同様である。諸君が将来、社会的にどんな高い地位につこうと、或はその反対に、どんな逆境に沈もうと、宝鏡先生はやはり諸君の先生として、諸君を見て下さるだろう。私は、諸君が将来どこかで先生の膝下に参じ、過去の思い出を語りあい、更に何かとお教えを乞う機会があることを確信する。」次郎は、変に悲しいような気持になって、首を垂れた。

下村湖人「次郎物語 第三部」

1965（昭和 40）年 7 月 30 日

これは、校長先生が、宝鏡先生が在任中の仕事ぶり及び公私とも真面目で奉仕する精神をほめる場面の用例である。

表現	先生が御在任中、ただの一時間も授業を休まれないで、諸君の教育に当って下すったことは感謝にたえない。これは、先生の御健康のたまものであるが、また私事をもって公事をおろそかにされない先生の御精神が然らしめたものだと思う。私は、それを先生が本校に遺された最大の教訓として、諸君と共に有りがたくおうけしたいと思う。
人間関係	上→下、男→男
対象	校長→宝鏡先生

返答	なし
----	----

⑦女中は、「何しるでえ！」と大声で叫んで立ち上り、けもののような醜い表情をして私を睨み、「あてにならねえ。非常時だに。」と言いました。私は肝のつぶれるほどに驚倒し、それから、不愉快になりました。「自惚れちゃいけない。誰が君なんかに本気で恋をするものか。」と私も、がらりと態度を改めて言っていました。「ためしてみたのだ。むかし坂田藤十郎という偉い役者がいてね、」と説明しかけたら、また大きな声で、「いい加減言うじゃあ。寄るな！ 寄るな！」とわめいて両手を胸に当て、ひとりで身悶えするのですが、なんとも、まずい形でした。私は酔いも醒め、すっかりまじめな気持になってしまって、「誰も君に寄りやしないじゃないか。坐り給え。僕が悪かったよ。銃後の女性は皆、君のようにしっかりしていなければいけないね。」などと言ってほめてやりましたが、女中は、いかにも私を軽蔑し果てたというように、フンと言って、襟を掻き合せ、澄まして部屋から出て行きました。私は残ったお酒をぐいぐい呑み、ひとりでごはんをよそって食べましたが、実にばからしい気持でした。

太宰治「風の便り」

1975（昭和 50）年 6 月から 1976（昭和 51）年 6 月

これは、「私」が、女中のしっかりしている様子をほめる場面の用例であり、それに対して、女中が私の機嫌をとる下心に気づき、軽蔑して返答する場面である。

表現	銃後の女性皆、君のようにしっかりしていなければいけない。
人間関係	上→下、男→女
対象	私→女中
返答	フン

⑧それから、町へ出て、電車を見ました。

「チンチン、ゴーゴー。」といって、赤ちゃんは、いつまでも帰ろうとはしま

せんでした。義ちゃんは、早くお家へ帰ってご本が見たくなりました。やがて、帰ってから、赤ちゃんが、義ちゃんの大事なおもちゃや、ご本をいじっても、いままでのように怒らずに、笑って見ていましたから、

「なんて、義ちゃんは、いいお兄さんでしょう。」と、お母さんは、おほめになりました。

「そうだ、僕は兄さんだもの。」と、義ちゃんは、はじめて強く心に思いました。

小川未明「僕は兄さんだ」

1977（昭和52）年8月10日

これは、母親が、義ちゃんの優しさをほめる場面の用例であり、それに対して、義ちゃんがお母さんのほめを素直に受け入れて返答する場面である。

表現	なんて、義ちゃんは、いいお兄さんでしょう。
人間関係	上→下、女→男
対象	お母さん→義ちゃん
返答	そうだ、僕は兄さんだもの。

⑨平田は、北京で頭一つ叩かれては五円借りて歩いている由。この平田がナウカのあった頃かいた「囚われた大地」という小説を、房雄はトルストイの作品に匹敵するとほめました。木星社に居た人。ですから私は評論集のときから知っていたから、「あなたもわるい時世に生れて、あんな小説をトルストイの云々ともち上げられる大不幸にめぐり合うのだから、しっかりしなさい」と云ったことがありました。

宮本百合子「獄中への手紙 07」

1979（昭和54）年10月20日

これは、房雄が、平田の作品の素晴らしさをほめる場面の用例である。

表現	トルストイの作品に匹敵する
人間関係	対等、男→男
対象	房雄→平田
返答	なし

⑩先生がさしだした本を、諭吉はしばらくみていましたが、やがてよみはじめました。これまでに勉強したことをおもいだしながら、日本語にほんやくしていきましました。「ほほう。本場の長崎で勉強しただけあって、きみは、よみかたがうまい。」とほめてくれたので、諭吉がおもわずにつっこりしますと、「だが、どうも、きみは正式な勉強をしてないようだね。土台がしっかりしていない。外国語のいみをたたくくみとるには、文法、つまりことばのきまり、やくそくだね、それをよくしっていなければいけない。文法は文章の土台だ。きみは、文法を、あたらしく第一歩からやりなおすひつようがあるね。」といわれ、がっかりしてしまいました。

高山毅「福沢諭吉 ペンは剣よりも強し」

1981（昭和 56）年 11 月 19 日

これは、先生が長崎で勉強してきた諭吉の読み方をほめる場面の用例である。

表現	ほほう。本場の長崎で勉強しただけあって、きみは、よみかたがうまい。
人間関係	上→下、男→男
対象	先生→諭吉
返答	なし

第5章 「ほめ」に関する考察

第5章では、収集した「ほめ」の用例について、表現、人間関係、対象、返答の四つの面から分析を行う。そのそれぞれについて、具体的な内容を分析し、考察を行う。

5.1 「ほめ」の表現

本節では、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の作品の中ではどのような表現を用いてほめが行われるかを分析する。

作品に現れた主な「ほめ」の表現

古代	貞かに、恪、忠にして且勇あり、加能く導の功有り、いそしきわけ、うつくし、いとよくしたまふ、よし、かたちよし、いとよし、面目あり、めったにないもの、人前の人間、めでたく、いみじうなつかしう、すぐれたり、なつかしき、いとかしこく、いとをかしう、今の世に聞こえぬ言葉、よき、眼は芙蓉に似たり、胸は玉に似たり、あなめでた、ゆるに など
中世	いしうしたり、いとかしこく、よろしく、いみじき、文殊、逸物、やんごとなき、優によみ給へり、珍しく、尊く、善し、あつぱれ、面白い、類少なき、人間第一、節を守り義を重んずる忠貞、一騎当千、剛の者、楽党、早く上がり、功入り、若やぎ など
近世	文殊、器用、つよい、天晴、いさぎよき、見事、賢人、よい、慇懃、貴人、御手柄、一番、巧い、適男、やさしき、能い、健気、日本一の名人様、達者、まめ、奇麗、美しい、お上手、天下一、明敏 など
近現代	よい、才子、伶俐者、第一容貌、うまい、天晴れ、確かに美人、極めて明瞭、感心、小器用、おとなしい、珍しい堅人、えらい、豪い、大した女、無類、やさしい、立派、美しい、上手、極上々、流石に天下第一、忠義、親切、面白い、珍しい、うつくしい、あざやか、傑作、一番、綺麗、大出来、名画、いい度胸、淑やか、可愛らしい、隅へは置けない、頼もしい、感服、見事、翻天妙手、親孝行、オシイー、巧い、上達、日本一の若者、

	役に立った、艶々してきた、すぐれていた、理想的、素晴らしい、まじめ、強い、有為多望、偉大、無双、壮んなり、素直、大したお腕前、鋭敏、脱俗、聖人、気前がいい、正直、お利巧者、いい人相、仁人、健気 など
--	---

5.1.1 「ほめ」の表現の分類基準

「ほめ」はコード化された言語行為ではないため、その表現形式は非常に多岐にわたる。そのため、「ほめ」を表現形式としてまとめることは、なかなか困難である。

小玉（1993）は、SD法（意味微分法）によって、ほめる時に頻出する形容詞の意味分析を行った。分析した形容詞は、英語、日本語のほめ行為によく使われている言葉で、たとえば、日本語のものでは、「きれい、かわいい、やさしい、すごい、いい」などである。

熊取谷（1989）は、「ほめ」の主な表現形式を考察して、

1. 「対象物+形容詞」（「そのセーターいいね」、「昨日の歌すごくよかったよ」）、
2. 「形容詞+対象物」（「わあ、かわいいイヤリング」など）、
3. 「対象物+好み」（「私、そのスカーフ好き」など）

の三つの型がほめ行為の慣用形式の大半を占めると述べている。

この三つの表現形式について、岡本（2007）では、「対象物+形容詞」と「形容詞+対象物」などの表現は、対象の価値や印象を判断して評するものであり、これらの表現はもともとほめ機能を持っているため、コンテキスト抜きでもプラス評価とは判断できるが、「対象物+好み」などの表現は、個人的嗜好という点で、より主観的であり、一般的あるいは客観的な評価基準に縛られない点で使用範囲も広がるため、ほかの評価語を使ったものとは異質だとしている。

また、金（2012）は、①肯定的評価語のみ使用（典型的なほめ表現として、肯定的評価語だけを用いる表現である）、②肯定的評価語の使用+他の情報（肯定的評価語を用いるが、その前後にそれに関連する他の情報を加える）、③肯定的評価語の不使用（肯定的評価語は用いないがほめに関連する情報を伝えることで相手をほめる）の三つに分けている。相手をほめるときには「かわいい、すごい、さすが、きれいだ」などのような肯定的な評価語がよく使われるが、実際の用例を見ると、肯定的な評価語とともに詳し

い説明をしたり、または肯定的な評価語を用いずに、ほめ対象に関する情報だけを述べたり、ほめ手自身の感情を伝えたりするだけで間接的にほめることもありうる。本稿は金（2012）の分類を借り、「ほめ」の表現形式を分類することにする。

以下、「ほめ」の表現の特徴を実例とともに検討してから、用例におけるほめの表現の全体的な分析結果を述べる。

ただし、収集した用例のうち、「ほめ」の表現なし、ほめ手不問、性別不問などの例文は分析の対象外となっている。また、ほめ手が明確的に男女二人の場合、各性別の用例数の中に入れる。

<研究対象外の例>

- ① 姫君は、年ごろ聞こえわたりたまふ御心ばへの世の人に似ぬを、なのめならむにてだにあり、ましてかうしもいかで、と御心とまりけり。いとど近くて見えむまでは思しよらず。若き人々は、聞きにくきまでめできこえあへり。

[現代語訳]

姫君は、何年となくずっとお便りをお寄せ申していらっしゃる君のお気持ちが常の人とは格別なのを、相手が平凡な男だったとしても情にほだされることもあるうに、まして、どうしてこうまでも、とお心を動かされるのだった。それでも、今まで以上に近しくてお目にかかろうというお気持ちにまではおなりにならない。おそばの若い女房たちは、聞き苦しいくらいに君をおほめ申しあげている。

紫式部「葵（源氏物語）」

- ② その芝居が万事とどこおりなく運んで、みんなからも大出来と褒められて、約束の五十両を貰って、三八はいい心持で引き退ったのですが、ここに又一つの面倒が起きました。

岡本綺堂「半七捕物帳 63 川越次郎兵衛」

- ③ 「芸術家の方も自重しませんと……。終戦後のわれわれの恥を云えば、作家の態度が、一種のセンセーショナリズムをねらうみたいになってしまつてね。人の魂に小さな声で囁きかけてゆくのでは駄目で、往来の真ン中で、わあッと

大声をあげる式でないと、声が聴えないのです。そのかわり大きな声をたくさん出せばいいわけです。明治以来こんなことは、はじめてでしょう。こんなに作家が大声をあげれば、あぶく銭がとれるのも、初めてのことでしょう。」

「菊池寛と大臣の台所の費用が同じだと云って、文士も偉くなったとほめられたものでしたが、今は大臣以上ですからね、大きな声を出しさえすれば……。」

宮本百合子「五〇年代の文学とそこにある問題」

こちらの例は、①では「ほめ」の表現がなく、②③ではほめ手が誰か、性別がどちらかは明確に判断できない。このような用例は今回の分析対象から外した。

分析対象としたものは、収集した 731 例のうち、ほめ内容（表現）が文脈から確実に判断できる 369 例である。そのうち、ほめ手の性別が文脈から明らかにわかる用例は 363 例である。この両者を分析対象とする。

5.1.2 資料に現れた「ほめ」の表現

まず、①肯定的評価語（を含む表現）のみ使用、②肯定的評価語（を含む表現）の使用+他の情報、③肯定的評価語（を含む表現）の不使用の三つに分けて、「ほめ」の表現の例を挙げる。

① 肯定的な評価語（を含む表現）を使用するほめ

『新編日本古典文学全集』からの用例

一ノ五十七 伊家、知房の歌を賞賛 われ、その能ありと思へども、人々にゆるされ、世に所置かるほどの身ならずして、人のしわざも、ほめむとせむことをも、いささか用意すべきものなり。三河守知房所詠の歌を、伊家弁、感歎して、「優によみ給へり」といひけるを、知房、腹立して、「詩を作ることはかたきにあらず。和歌のかたは、すこぶるかれに劣れり。これによりて、かくのごとくいはるる。もつとも奇怪なり。今よりのち、和歌をよむべからず」といひけり。優の詞も、ことによりて斟酌すべきにや。これはまされるが、申しほむるをだに、

かくとがめけり。いはむや、劣らむ身にて褒美、なかなか、かたはらいたかるべし。よく心得て、心操をもてしづむべきなり。

[現代語訳]

自分では、それには能力も実力もあるのだと思っていでも、人から認められ、世間でも一目置かれるほどの立場に至っていないのならば、他人の行動を褒めたりすることは、いささか注意すべきである。三河守藤原知房の詠んだ歌を、右中弁藤原伊家が感激して「本当に素晴らしい歌だ」と褒めたことがあった。ところが、知房はそれを聞いて腹を立てた。「漢詩を作ることでは、あの男は私の敵では決してない。しかし、和歌については、たいそう私は後れをとっている。それだからあんなことを言われてしまうのだ。どう考えても我慢できないことだ。もうこれからは一切、和歌を詠むつもりはない」と言ったという。褒める言葉でも、事柄によっては気をつけた方がよいようだ。この話のように、力の上の人が褒めたのでさえ、こんなふうに文句がつけられたのである。いわんや、力の未熟な者が褒めたりすることは、はたで聞いていても、とても心配になってくる。よくよくこのことを心得て、心遣いを慎重にするべきである。

作者未詳「十訓抄」

(十訓抄 上(扉) 第一 人に恵を施すべき事 一ノ五十七 伊家、知房

の歌を賞賛 P. 105)

鎌倉時代(1252年成立)

『青空文庫』からの用例

六歳の時、幼稚園に入りました。幼稚園で「君が代」をうたいましたら、植村くに子先生が「まあ、環ちゃんはなんて可愛い、美しい声でお上手にうたうんでしよう」と大変褒めて下さいまして、特別にいろいろの唱歌を教えて下さって、御自分でヴァイオリンで伴奏をして、私を方々へつれて行っては唱歌をうたわせました。

吉本明光編 三浦環「お蝶夫人」

1947(昭和22)年5月10日

『新編日本古典文学全集』の用例は、右中弁藤原伊家が三河守藤原知房の詠んだ歌

について評価している場面である。ほめ手である右中弁藤原伊家が三河守藤原知房の詠んだ歌に感激し、「優によみ給へり」と、歌声の素晴らしさをほめている。一方、『青空文庫』の用例は、植村くに子先生が環ちゃんの歌声について話をしている場面である。ほめ手である植村くに子先生は環ちゃんが歌った「君が代」を聞いてから、「まあ、環ちゃんはなんて可愛い、美しい声でお上手にうたうんでしょう」と、歌声の上手さをほめている。「優に」「可愛い」「美しい」「上手」などの表現は、相手の行動や、能力などを「よい」と評価する、典型的な肯定的評価語といえる。このように、相手に関連する対象について肯定的な意味を持つ評価語を用いて述べることは、直接的な相手への褒めになる場合が多い。

② 肯定的な評価語（を含む表現）の使用+他の情報で表すほめ

『新編日本古典文学全集』からの用例

「さばかりになりなむには、ものの恥しらでありなむ。かしこく申したまへる、いとよきこと」と、口々ほめ聞こえしこそ、なかなかにおぼえはべりしか。大門にてとらへたりし人は、式部大夫源政成が父なり。さばかり優におはしけん御末こそ、少しはかばかしき人なけれ。

[現代語訳]

世間の人々が、「そんなに落ちぶれてしまったからには、恥も外聞もなく押し通すほうがよい。姫君はうまく直訴なされた、まったく大したものだ」と、口々におほめ申しましたが、それはかえってどうかと思われました。ところで、大門で姫君を引き留めた人は、式部大夫源政成の父（経任）です」「あれほどすぐれていらっしゃった小一条のおとど（師尹）のご子孫には、いささかしっかりした人がおりません。

作者未詳「大鏡」

（大鏡 天 〔八七〕 済時の子女たち、所領回復を道長に愁訴 P.145）

平安時代（1086～1123 年ごろ成立）

『青空文庫』からの用例

台を短くした灯を置いて二人で見ておいでになったが、「よくこんないろいろなふうにお書きになれたものですね。近ごろの人はほんのこの一部分の仕事をするのに骨を折っているという形ですね」などと源氏はおほめしていた。この二種の物は宮から源氏へ御寄贈になった。「女の子を持っていたとしましても、たいしてこうした物の価値のわからないような子には残してやりたくない気のある物ですからね。それに私には娘もありませんから、お手もとへ置いていただいたほうがよい」などと宮はお言いになったのである。源氏は侍従へ唐本のりっぱなのを沈の木の箱に入れたものへ高麗笛を添えて贈った。

與謝野晶子訳 紫式部「源氏物語 梅が枝」

1994（平成6）年6月15日

『新編日本古典文学全集』の用例は、ほめる根拠とも言える、具体的な情報である「さばかりになちなむには、ものの恥しらでありなむ。」と述べながら、肯定的な評価語（を含む表現）の「かしこく申したまへる、いとよきこと」を用いてほめている例である。一方、『青空文庫』の用例は、ほめる根拠とも言える、具体的な情報である「近ごろの人はほんのこの一部分の仕事をするのに骨を折っているという形ですね」と添えながら、肯定的な評価語（を含む表現）の「よくこんないろいろなふうにお書きになれたものですね。」を用いてほめている例である。

このような、いわゆる肯定的な評価語の使用とともに、その前後に「ほかの情報」を用いて表現されるほめは、より具体的で、説明的だと言える。そのため、当該のほめがより説得力のあるものとして、相手に伝えられると考えられる。

③ 肯定的な評価語のないほめ

『新編日本古典文学全集』からの用例

「しにんし」が歌の、「ほととる行者」の句に、小大進ことにめでたくうたひて、「また承らむ」と申す。ある人、またうたふ。「それも、かくこの句をば、えうたひ候はぬものを」と申すを、季時、小大進がめでたさ、節のたがはぬさま、「また承らむ」と申してかく感じ申す由、色代して誉めののしる。この小大進、

うたはする歌をば、ことに妙にうたはせて聞きしなり。

[現代語訳]

「しにんし」の歌の「ほととる行者」の句についても、小大進が特に立派に歌って、「また、うけたまわりたいものです」と申す。ある人がまた歌う。「それも、このようにはこの句を歌うことができませんのに」と言うのを、季時は、小大進のみごとさや節の違わない様子、「またお聞きしたい」と言って、このように感心して言うことを、賛辞を呈して声高にほめちぎる。この小大進は、歌わせる歌を、自分は控えめにし、相手がひきたつようにし向けて、よく聞いたのであった。

後白河法皇「梁塵秘抄」

(梁塵秘抄口伝集 卷第十 [五] 乙前と、さほのあこ丸・小大進 P. 352)

平安時代(12世紀後半成立)

『青空文庫』からの用例

丁謂は蘇州長州の人、少い時孫何と同じく文を袖にして王禹偁に謁したら、王は其文を見て大に驚き、唐の韓愈、柳宗元の後三百年にして始めて此作あり、と褒めたという。当時孫・丁と称されたということだが、孫、丁の名は少し後に出了た欧陽修・王安石・三蘇の名に掩われて、今は知る者も少い。

幸田露伴「連環記」

1978(昭和53)年7月18日

『新編日本古典文学全集』の用例は、ほめ手である季時が、小大進の歌のみごとさや節の違わない様子を見て「また承らむ」とほめた用例である。「立派」や「みごと」などの直接的なほめ言葉を用いて相手をほめるのではなく、感心して「またお聞きしたい」というような要望を持ち出すことで、相手の歌を肯定的に評価していると読み取れる例である。一方、『青空文庫』の用例は、ほめ手である王禹偁が、丁謂の文章を目にして驚いて、「唐の韓愈、柳宗元の後三百年にして始めて此作あり」とほめた用例である。これも、明示的なほめ言葉を用いて相手をほめるのではなく、文学大家の名前を提示し、その後の三百年にして始めてこれらの大家と並べられるような名作が出来上がったと

伝えることで、相手の文章を肯定的に評価していると読み取れる例である。

5.1.3 「ほめ」の表現の分類結果

まず、分析対象の用例に現れたすべての「ほめ」を上記の三つに分け、時代別に分類すると表5-1のようになる。

表5-1 用例における「ほめ」の表現

	古代		中世		近世		近現代	
	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%
①肯定的評価語のみ使用	26	54.17	21	44.68	53	56.38	255	69.11
②肯定的評価語の使用+他の情報	19	39.58	17	36.17	19	20.21	74	20.05
③肯定的評価語の不使用	3	6.25	9	19.15	22	23.41	40	10.84
合計	48	100.00	47	100.00	94	100.00	369	100.00

表5-1に示したように、「①肯定的評価語のみ使用」は、古代では全体の54.17%（26例）、中世では全体の44.68%（21例）、近世では全体の56.38%（53例）、近現代では全体の69.11%（255例）で、近現代においてより高い割合を占めている。次に、「②肯定的評価語の使用+他の情報」は、古代では全体の39.58%（19例）、中世では全体の36.17%（17例）、近世では全体の20.21%（19例）、近現代では全体の20.05%（74例）で、古代に若干多く見られる。また、「③肯定的評価語の不使用」は、古代では全体の6.25%（3例）、中世では全体の19.15%（9例）、近世では全体の23.41%（22例）、近現代では全体の10.84%（40例）で、近世において多く用いられていることがわかる。

表5-1の結果から、「肯定的評価語」を用いる①と②を合わせると、古代93.75%、中世80.85%、近世76.59%、近現代89.16%で、各時代とも全体のほぼ8割～9割と圧倒的に使用頻度が高いことがわかる。このことから、「肯定的評価語」の使用は、各時代においてほめを表す典型的なスタイルであり、時代を超越したものであることがわかる。

一方、「肯定的評価語の不使用」の結果を見ると、古代6.25%、中世19.15%、近世23.41%、近現代10.84%で、どの時代でも肯定的な評価語を使用せずに、人をほめることもある程度行われていることがわかる。

次に、古代、中世、近世、近現代の各時代における「ほめ」の表現について、どのような男女差があるかを分析してみよう。

表5-2 古代における「ほめ」表現形式の男女別の使用状況

古 代	男性		女性		例数 合計
	例数	%	例数	%	
①肯定的評価語のみ使用	8	44.45	2	25.00	10
②肯定的評価語の使用+他の情報	8	44.45	6	75.00	14
③肯定的評価語の不使用	2	11.10	0	0	2
合 計	18	100.00	8	100.00	26

表5-2からわかるように、古代の用例では、「①肯定的評価語のみ使用」の割合は、男性（44.45%）が女性（25.00%）より高い。「②肯定的評価語の使用+他の情報」は、女性（75.00%）が男性（44.45%）より高い。また、「③肯定的評価語の不使用」は男性（11.10%）、女性（0%）ともに低い割合を示している。

表5-3 中世における「ほめ」表現形式の男女別の使用状況

中 世	男性		女性		例数 合計
	例数	%	例数	%	
①肯定的評価語のみ使用	9	42.86	0	0	9
②肯定的評価語の使用+他の情報	11	52.38	1	100	12
③肯定的評価語の不使用	1	4.76	0	0	1
合 計	21	100.00	1	100.00	22

表5-3からわかるように、中世の用例では、女性の用例が1例しかいないため、男性との比較ができない。

表5-4 近世における「ほめ」表現形式の男女別の使用状況

近 世	男性		女性		例数
	例数	%	例数	%	合計
①肯定的評価語のみ使用	27	52.94	4	66.67	31
②肯定的評価語の使用+他の情報	12	23.53	2	33.33	24
③肯定的評価語の不使用	12	23.53	0	0	12
合計	51	100.00	6	100.00	57

表5-4からわかるように、近世の用例では、「①肯定的評価語のみ使用」の割合は、女性（66.67%）が男性（52.94%）よりやや高い。「②肯定的評価語の使用+他の情報」も、女性（33.33%）が男性（23.53%）より高く、①とほぼ同じような結果を見せている。また、「③肯定的評価語の不使用」は男性（23.53%）が女性（0%）を上回っている。

表5-5 近現代における「ほめ」表現形式の男女別の使用状況

近現代	男性		女性		例数
	例数	%	例数	%	合計
①肯定的評価語のみ使用	115	58.38	48	78.69	163
②肯定的評価語の使用+他の情報	60	30.46	5	8.20	65
③肯定的評価語の不使用	22	11.16	8	13.11	30
合計	197	100.00	61	100.00	258

表5-5からわかるように、近現代の用例では、「①肯定的評価語のみ使用」の割合は、女性（78.69%）が男性（58.38%）より高い。一方、「②肯定的評価語の使用+他の情報」は、男性（30.46%）が女性（8.20%）より圧倒的に高い。また、「③肯定的評価語の不使用」は、女性（13.11%）が男性（11.16%）をわずかながら上回っている。

5.1.4 「ほめ」の表現に関する考察

本節では、「ほめ」の表現を取り上げ、会話の中ではどのような表現を用いてほめが行われるかを分析した。『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の用例に現れる古代から近現代まで「ほめ」の表現を、日本語の「ほめ」に用いられる三つの表現形式に分け、統計をとると、ほめ手の性別に関わらず、「肯定的評価語」を用いることで「ほめ」を行う場合が多いことがわかる。

「①肯定的評価語のみ使用」は、金（2012）の現代語会話の分析の結果では、「ほめ」の表現における男女差については、女性が男性より肯定的評価語のみを使用する傾向が強いとなっている。これに対し、本稿の分析では、古代と中世においては用例数が少ないが、男性が女性より「肯定的評価語のみ使用」の頻度が高いという傾向が見られる。一方、近世と近現代においては、用例数が増加し、「肯定的評価語のみ使用」の使用率は、女性が男性より若干上回ることがわかった。ここにおいては、金の研究の結論と一致するところが見られる。

「②肯定的評価語の使用+他の情報」は、金（2012）の現代語会話の分析の結果では、男性が肯定的評価語の使用に他の情報も付け加える表現を女性より多用している。これに対し、本稿の分析では、古代、中世、近世においては用例数が少ないが、女性が男性より「肯定的評価語の使用+他の情報」の使用頻度が高いという傾向が見られる。一方、近現代の用例を見ると、用例数が大幅に増え、使用率では男性が女性より高い割合を占めるという結果を見せている。この結果も金の研究の結論と一致するところになっている。

「③肯定的評価語の不使用」は、金（2012）の現代語会話の分析の結果では、男女ともに肯定的評価語を用いないほめはあまり行われないう結果になっている。これに対し、本稿の分析では、古代、中世、近世のいずれの時代でも用例は少ないが、特に、女性の用例は0であり、古い時代は評価語を使用しない「ほめ」はあまり行われなかったことが読み取れ、金の研究の結果とほぼつながっている。一方、近現代の用例を見ると、用例数がやや増え、女性の使用割合が男性を上回っていることがわかる。わずかではあるが、各時代の用例を見ると、肯定的評価語を使用せず、間接的・暗示的にほめている

表現が様々な方法で現れていることが見られる。この調査結果を金の研究の結論に比べると、現代語においては、肯定的評価語を用いないほめは、日常会話より、小説などの文学作品に多く見られるのではないかと思われる。

5.2 「ほめ」の人間関係

「ほめ」についての先行研究を見ると、大体性別、対象、表現形式、返答などの角度から「ほめ」の分析を行っている。ところで、「ほめ」は友好的な人間関係を築く為に行われる言語行為のため、人間関係が「ほめ」に無視できない影響を与えていると言える。「ほめ」は、相手との社会的関係や親密さにより、異なる様相を呈する。したがって、「ほめ」の人間関係を研究することは「ほめ」の研究の重要な要素だと考えられる。

本節では、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の作品の「ほめ」表現における人間関係を分析する。

5.2.1 「ほめ」の人間関係の分類基準

Brown and Levinson (1987) は、「「ほめ」は基本的にポジティブ・ポライトネスであり、社会的潤滑油と看做される一方、FTA(Face Threatening Act)相手のフェイスを脅かす行為、フェイス侵害行為・対面脅威行為)が内在するものとして位置づけているように、親しい関係ではない相手からの「ほめ」や地位が低いとみなしている者からの「ほめ」は不適切に行われると深刻なFTAとなりかねない」と指摘している。日本語に関する先行研究では、「ほめ」は基本的に社会的力関係で上から下の者へ行われると捉えるものが多い(野元1996)。

社会的力関係による上から下へのほめが日本社会で「ほめ」の典型であるとするなら、そこにはほかの関係のもとでの「ほめ」、つまり双方の間に優劣・高下などの差のない関係のほめ、下から上へのほめなどと比べ、何らかの際立った特徴が観察され则认为るのが妥当であろう。その際立ちによって、われわれは上から下へのほめをほかのものから直感的に区別するようになったと考えられるからである。

本節では、ほめ手と受け手の社会地位を総合的に考慮した上で、収集した 731 の「ほめ」表現を、等しい人間関係か等しくない人間関係かで、「上下「ほめ」」(立場が上の者から立場が下の者へのほめ)、「対等「ほめ」」、「下上「ほめ」」(立場が下の者から立場が上の者へのほめ)の 3 種類に分類することにする。上下関係の認定については、年齢差・専門性など複数の要因が考えられるが、古川(2003)は、対

人関係を上下関係（社会的力関係）と親疎関係（社会的距離）に分類し、「社会的力関係に基づき上から下へ行われる「ほめ」を「上下ほめ」、対等の関係にある場合を「対等ほめ」、下から上への「ほめ」を「下上ほめ」と区別した。」としている。

本稿は、古川（2003）の対人関係の分類標準に従い、上下、対等、下上関係と、男女性差を分析の視点とし、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』に現れた古代から近現代までの作品における「ほめ」の分析を行う。人間関係の認定については、年齢の上下、社会的地位の上下、身分の上下、経験の長短による先輩・後輩関係、親子などの親族関係を基準にして、上下か対等か下上かを認定する。本稿は、会話分析などで行われるほめ手と受け手における立場の入れかわりには注目しない。また、収集した用例において上下関係が明白に判断できない例文は、分析対象外（人間関係不問）とし、分析対象から外すことにする。

<分析対象外の例>

①そんな場合、さあ、さあ、と気軽に座蒲団をすすめる男は、男爵でなかった。
よく思い切って訪ねて来て呉れましたね、とほめながらお茶を注いでやる別の男は、これも男爵でなかった。君の眼は、嘘つきの眼ですね、と突然言ってその新来の客を驚愕させる瘦やせた男は、これも男爵でなかった。それでは男爵はどこにいるか。

太宰治「花燭」

②「三毛」はいろいろの点において「玉」とはまさに対蹠的の性質をもった雌猫であった。だれからもきれいとほめられる容貌と毛皮をもって、敏捷で典雅な举止を示すと同時に、神経質な気むずかしさをもっていた。もちろん家族の皆からかわいがられ、あらゆる猫へのごちそうと言えはこの三毛のためにのみ設けられた。せっかく与える魚肉でも少し古ければ香をかいだままで口をつけない。

寺田寅彦「備忘録」

③地図のここかしこは破れて、虫に食われた孔がそちこちにちらばっていた。シロオテはその図を暫く眺めてから、これは七十余年まえに作られたものであつ

て、いまでは、むこうの国でも得がたい好地図である、とほめた。ロオマンはどこであるか、と白石も膝をすすめて尋ねた。

太宰治「地球図」

④でも、私が涙をこぼしたら、みんなはきっとそんなに私が喜ぶことをかえって気の毒に思うだろうと思って、あんまりうれしくて恥しい恥しいと云って気持ちを自分で持かえました。みんなは、生れかわって一つの人にしては発育が良いとほめて、お杯をあげてくれました。その杯のひとつみの中のひとつが、私達御秘蔵の真丸のもので、そのつれの杯をあげながら、私は、あのまん丸の杯が、矢張りキラキラ光りながら私のために上げられているのを感じました。

宮本百合子「獄中への手紙 10」

これらの例を見ると、①では人間関係が分からない、②では受け手が人間ではなく動物である、③では受け手が人間ではなく物である、④ではほめ手は「みんな」で、上下関係が特定できない。このような用例は今回の分析対象からは外した。

分析対象としたものは、収集した 731 例のうち、ほめ手と受け手や、上下関係が文脈から確実に判断できる 468 例である。上下関係の認定については、上に述べたように、ここでは、年齢の上下、社会的地位の上下、身分の上下、経験の長短による先輩・後輩関係、親子などの親族関係を基に行った。

5.2.2 資料に現れた「ほめ」の人間関係

ここでは、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』から典型的な用例をピックアップし、古代から近現代までの「ほめ」における人間関係を検証する。

① 上から下への「ほめ」

『新編日本古典文学全集』からの用例

かの北の方、これをいみじき宝に思ひて、これがことにつけて、わが妻を懲ぜ

しぞかしと思ふに、いと捨てさせまほしきぞかし。中将かく言ふを、見るやうぞあらむとて、時々返りごとせさせたまふに頼みをかけて、三の君をただ離れに離れゆく。「よし」と誉めし装束も、すぢかひ、あやしげにし出づれば、いとどここつけて腹を立ちて、しかけたる衣どもも着で、「こは何わざしたるぞ。いとよく縫ひし人は、いづち往にしぞ」と腹立てば、三の君、「男につきて往にしぞ」といらへたまへば、「なぞの男につくべきぞ。ただにぞ出でにけむ。

[現代語訳]

中将は<例の中納言の北の方が蔵人の少将を大切な宝と思って、この人の衣装の仕立てにこと寄せて、わが妻を苛めたのだなあ>と思うと、どうしても蔵人の少将に三の君を捨てさせたく思うのである。中将がこう言うので、母北の方は「蔵人の少将は見どころある人だろう」と、時々中の君にお手紙の返事をおさせなするので、蔵人の少将はこの縁談に望みを託して、三の君からどんどん離れていく。以前に、「上手にできた」とほめた中納言邸で用意してくれる衣装も、近ごろでは、ゆがんで不格好に仕立て上げるので、ますますそれにかこつけ腹を立て、でき上がって衣桁に掛けておいた着物なども投げ捨てて「これはどうしたのだ。縫った女房はどこへ行ったのだ」と立腹すると、三の君が、「男ができて、邸を出て行ってしまいました」とお答えになると、「なんで男ができたものか。この邸にいたくなくてただ一人で出て行ったのだろう。

作者未詳「落窪物語」

(落窪物語 卷之二(扉)〔三一〕蔵人の少将、三の君から離れ始める P.168)

平安時代(10世紀末ごろ成立)

『青空文庫』からの用例

春太郎は、学校へゆく道で考えました。早く雪が降ってくれるといいな。そしてクリスマスの晩になるといいな。だけど、ジャッキイはどうしたろう。あれからすっかり幸福になったかしら。まだあの大きなズボンをはいて、ロンドンの街を歩いているのじゃないかしら。ぼくもロンドンへゆきたいな。お姉さんが死んでしまったら、ぼくお姉様のヴァイオリンを貰おうや。そして、クリスマスの晩、ロンドンの街を歩くんだ。そうすると大きな、玩具屋があつて、そこの飾窓に、

テディ熊がいるだろう。「おい危い」で、空には星が、きらきら光っていて、袋を持たないサンタクロスのお爺さんがやってくる。ジャッキイがヴァイオリンをひいているのを、お爺さんがききながら、「うまい、うまい。ジャッキイは、今に大音楽家になるぞ」そう言ってほめました。

きっと、ぼくは大音楽家になるだろう。そして、ぼくのお父様も大音楽家なんだ。おや、おや。ぼくのお父様は、会社へ出ているんだっけ、

「カン、カン、カン」

「カン、カン、カン」

その時、春太郎は、いつの間にか、学校の前へ来ていました。

竹久夢二「街の子」

1926（大正15）年12月

『新編日本古典文学全集』の用例は、受け手（衣装を縫った女房）の上手に仕上げた衣装を社会的に上位にあるほめ手（少将）がほめている場面で、「よし」が、社会的に上位の者から下位の者に向けて使われている。一方、『青空文庫』の用例は、年上で、世の中で尊敬されるような存在であるほめ手（サンタクロスのお爺さん）が、受け手（ジャッキイ）がヴァイオリンをひいているところをほめている場面である。「うまい、うまい。」という言葉で子供をほめることは、結果として労いや励ましにつながるものと思われる。

② 対等な関係の「ほめ」

『新編日本古典文学全集』からの用例

少将、几帳おしやりて、「をかしく物聞きよく言ひつる人かな。かたちも清げなり」と見つるほどに、交野の少将を、「かたちよし」と、誉め聞かせたてまつりつるにこそ、見まうくなりぬれ。さもえいらへたまはで、こなたを見おこせたまひて、心もとなげに口づくろひしたまへるかな。

[現代語訳]

少将は几帳を横の方にどけて「おもしろく聞きづらいところなく上手に話をす

る女房だなあ。容貌もきれいだ」と覗き見しているうちに、交野の少将（弁の少将）を「容貌がすばらしい」とほめて姫君に聞かせ申しあげたので、少納言の顔を見るのがいやになってしまった。あなたはご返事をなさらないで、私の隠れている方を恨みがましくご覧になって、じれったいかのように、言葉をつくろっていらっしゃいましたね。

作者未詳「落窪物語」

（落窪物語 卷之一（扉） 〔三六〕少将、弁の少将に嫉妬、しきりに弁明する

P. 93）

平安時代（10世紀末ごろ成立）

『青空文庫』からの用例

九郎助に限らず、以前あんなに私を気前がいいの、正直だの、たのもしいだのと褒めていた遊び仲間たちも、どうした事でしょう、私が出家したら、ぱったり何もお便りを下さらず、もう私が何もあの人たちのお役に立たない身の上になったから、それにくると背を向けたというわけなのではないでしょうか、それにしても、あまり露骨でむごいじゃありませんか。こんなに皆から爪はじきされるとは心外です。

太宰治「新釈諸国噺」

1972（昭和47）年3月21日

『新編日本古典文学全集』の用例は、ほめ手（少将）が受け手（交野の少将）の外見をほめている場面である。ここでは、ほめ手が受け手に対するほめを第三者に聞かせ、良い印象を与えようとして、失敗している。一方、『青空文庫』の用例は、昔は今と違い、ほめ手（遊び仲間たち）が受け手（わたし）のことをほめていたことを述べる場面である。この二つの例からは、「ほめ」の影響が場合によって異なることがうかがえる。

③ 下から上への「ほめ」

『新編日本古典文学全集』からの用例

美作の三位など、「またよき人あまた見たてまつれど、この御前たちのやうな

るはおはしまさざりき。一条院の女二の宮、故女院におはしまししかば見たてまつりし、それぞいとをかしげにおはしまししかども、この二所の御やうには、えおはしまさず」など、けちえんに褒めまうしたまふさま、ほこりかに愛敬づきたまへり。大宮よさり上らせたまひて、中の戸あけて御対面あるほど、いとやすらかに疎からず、めでたき御あはひなり。

[現代語訳]

美作の三位などは、「ほかに高貴な方々をたくさんお見あげ申したけれど、この姫宮たちのような方々はいらっしゃらなかった。一条院の女二の宮（嬬子内親王）が、故女院（詮子）のもとにいらっしゃったのでお見あげ申したが、その宮はまことに可愛らしい感じのお方でいらっしゃったけれど、とてもこのお二方のようにはいらっしゃいませんでした」などと、派手にはっきりとお褒め申しあげる様子は、いかにも得意そうで情味をたたえる魅力がおりである。大宮（威子）は、夜になって参られて、中の戸をあけてのご対面であるが、その御有様は、まことにわざとらしくなくご親密で、結構な御仲らいである。

作者未詳「栄花物語」

（栄花物語（扉） 卷第三十一 殿上の花見（扉） 梗概 殿上の花見 P. 221）

平安時代（正編1028～34年ごろ成立、続編1092～1107年ごろ成立）

「青空文庫」からの用例

椿岳は奇才縦横円転滑脱で、誰にでもお愛想をいった。決して人を外らさなかった。召使いの奉公人にまでも如才なくお世辞を振播いて、「家の旦那さんぐらいお世辞の上手な人はない」と奉公人から褒められたそう。伊藤八兵衛に用いられたのはこの円転滑脱な奇才で、油会所の外交役となってから益々練磨された。晩年変態生活を送った頃は年と共にいよいよ益々老熟して誰とでも如才なく交際し、初対面の人に対してすらも百年の友のように打解けて、苟にも不快の感を与えるような顔を決してしなかったそう。

内田魯庵「淡島椿岳——過渡期の文化が産出した画界のハイブリッド——」

1916（大正5）年3月

『新編日本古典文学全集』の用例は、社会的地位が下であるほめ手（美作の三位）が社会地位が上である受け手（姫宮（章子内親王・馨子内親王））の外見を今まで見たことがないとほめる場面である。一方、『青空文庫』の用例は、召使いであるほめ手（奉公人）が目上の受け手（家の旦那さん）のお世辞が上手なところをほめている場面である。このように、目上の人に対してほめ言葉を述べたほうがいいこともあり、場合によっては、目上への「ほめ」は、地位が下にある人にとって「しないで済ませることができない義務」となる場合もあるように思われる。

5.2.3 「ほめ」の人間関係の分類結果

分析対象の用例に現れたすべての「ほめ」を上記の三つに分け、時代別に分類すると表5-6のようになる。

表5-6 用例における「ほめ」の人間関係

	古代		中世		近世		近現代	
	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%
① 上下「ほめ」	37	51.39	28	59.57	54	53.47	167	67.34
② 対等「ほめ」	6	8.33	3	6.38	27	26.73	52	20.96
③ 下上「ほめ」	29	40.28	16	34.05	20	19.80	29	11.70
合計	72	100.00	47	100.00	101	100.00	248	100.00

表5-6に示したように、①上下「ほめ」は、古代では全体の51.39%（37例）、中世では全体の59.57%（28例）、近世では全体の53.47%（54例）、近現代では全体の67.34%（167例）で、いずれの時代でも5割を超えているが、近現代が最も高い割合を示している。次に、②対等「ほめ」は、古代では全体の8.33%（6例）、中世では全体の6.38%（3例）、近世では全体の26.73%（27例）、近現代では全体の20.96%（52例）で、古代と中世とが1割に満たないのに対し、近世と近現代では2割を超えている。また、③下上「ほめ」は、古代では全体の40.28%（29例）、中世では全体の34.05%（16例）、近世では全体の19.80%（20例）、近現代では全体の11.70%（29例）で、近世と近現代で

は2割に満たないのに対し、古代と中世はいずれも3割を超え、古代で圧倒的に多く用いられていることがわかる。

表5-6の結果から、人間関係における差のある「ほめ」を用いる①と③を合わせると、古代91.67%、中世93.62%、近世73.27%、近現代79.04%で、各時代とも全体の7割を超え、圧倒的に多いという結果を見せている。このことから、人間関係に差のある「ほめ」が、各時代とも典型的なほめ方であり、時代を超越したものであることがわかる。一方、対等な関係の「ほめ」は、古代8.33%、中世6.38%、近世26.73%、近現代20.96%で、全体として割合は高くないが、特に古代と中世の割合は10%以下であり、古い時代では社会的地位が同じである関係においては、ほめ行為はあまり行われていなかったことがうかがえる。

次に、古代、中世、近世、近現代の作品の会話における「ほめ」について、「ほめ」表現の出現頻度に男女差があるかどうか分析してみる。ここでは、ほめ手に男性が多いか女性が多いか、受け手に男性が多いか女性が多いか、という観点から、男女差について見ていく。これを見るに当たっては、簡便な手法として、期待値を利用する。期待値は、統計的手法であるカイ二乗検定の基になるものであるが、ここでは、具体的・直接的でよりわかりやすい期待値を使うことにする。実測値と期待値との間に差が見られれば、何かしらの差があるということになる。たとえば、期待値に比べて、実測値が低ければ、「少ない」ということになり、期待値に比べて、実測値が高ければ、「多い」ということになる。ほかに、男女差を見るには、男性から男性へのほめが多いか、男性から女性へのほめが多いか、女性から女性へのほめが多いか、女性から男性へのほめが多いか、という観点などもあるが、これについては、差が見られたものについてのみ、ふれておく。

表5-7 古代における「ほめ」人間関係に男女別の使用状況

古代	ほめ手→受け	例数	%
① 上下「ほめ」	男→男	19	63.34
	男→女	9	30.00
	女→女	1	3.33

	女→男	1	3.33
	小計	30	100.00
② 対等「ほめ」	男→男	3	75.00
	男→女	1	25.00
	女→女	0	0.00
	女→男	0	0.00
	小計	4	100.00
③ 下上「ほめ」	男→男	4	21.05
	男→女	3	15.79
	女→女	4	21.05
	女→男	8	42.11
	小計	19	100.00

表5-7から次のことがわかる。古代の用例の上下「ほめ」については、全部で30回の「ほめ」のうち、男性がほめ手の「ほめ」は28回で、女性がほめ手の「ほめ」は2回である。一方、男性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は20回で、女性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は10回である。ここで、それぞれの期待値（少数点以下四捨五入）を計算すると、男性がほめ手の「ほめ」の期待値は24回、女性がほめ手の「ほめ」の期待値は6回、男性が受け手の「ほめ」の期待値は24回で、女性が受け手の「ほめ」の期待値は6回である。ここから、期待値に比べて、実測値では、男性がほめ手の「ほめ」が多く、女性がほめ手の「ほめ」が少なく、男性が受け手の「ほめ」が少なく、女性が受け手の「ほめ」が多いということがいえる。つまり、古代の上下「ほめ」については、男性がほめることが多く、女性がほめられることが多いということになる。

対等「ほめ」については、全部で4回の「ほめ」のうち、男性がほめ手の「ほめ」は4回で、女性がほめ手の「ほめ」は0回である。一方、男性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は3回で、女性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は1回である。ここで、それぞれの期待値（少数点以下四捨五入）を計算すると、男性がほめ手の「ほめ」の期待値は3回、女性がほめ手の「ほめ」の期待値は0回、男性が受け手の「ほめ」の期待値は1回で、女性が受け手の「ほめ」の期待値は0回である。つまり、実測値と期待値とが同じであ

り、古代の対等「ほめ」には、男女に差が見られないということになる。

下上「ほめ」については、全部で19回の「ほめ」のうち、男性がほめ手の「ほめ」は7回で、女性がほめ手の「ほめ」は12回である。一方、男性が受け手の（ほめられた）

「ほめ」は12回で、女性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は7回である。ここで、それぞれの期待値（少数点以下四捨五入）を計算すると、男性がほめ手の「ほめ」の期待値は10回、女性がほめ手の「ほめ」の期待値は10回、男性が受け手の「ほめ」の期待値は10回で、女性が受け手の「ほめ」の期待値は10回である。ここから、期待値に比べて、実測値では、男性がほめ手の「ほめ」が少なく、女性がほめ手の「ほめ」が多く、男性が受け手の「ほめ」が多く、女性が受け手の「ほめ」が少ないということがいえる。つまり、古代の下上「ほめ」については、女性がほめることが多く、男性がほめられることが多いということになる。

表5-8 中世における「ほめ」人間関係に男女別の使用状況

中世	ほめ手→受け手	例数	%
① 上下「ほめ」	男→男	16	84.21
	男→女	2	10.53
	女→女	1	5.26
	女→男	0	0.00
	小計	19	100.00
② 対等「ほめ」	男→男	1	100
	男→女	0	0.00
	女→女	0	0.00
	女→男	0	0.00
	小計	1	100.00
③ 下上「ほめ」	男→男	4	57.14
	男→女	2	28.57
	女→女	0	0.00
	女→男	1	14.29

	小計	7	100.00
--	----	---	--------

表5-8から次のことがわかる。中世の用例の上下「ほめ」については、全部で19回の「ほめ」のうち、男性がほめ手の「ほめ」は18回で、女性がほめ手の「ほめ」は1回である。一方、男性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は16回で、女性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は3回である。ここで、それぞれの期待値（少数点以下四捨五入）を計算すると、男性がほめ手の「ほめ」の期待値は17回、女性がほめ手の「ほめ」の期待値は2回、男性が受け手の「ほめ」の期待値は17回で、女性が受け手の「ほめ」の期待値は2回である。ここから、期待値に比べて、実測値では、男性がほめ手の「ほめ」がやや多く、女性がほめ手の「ほめ」がやや少なく、男性が受け手の「ほめ」がやや少なく、女性が受け手の「ほめ」がやや多いということがいえる。つまり、中世の上下「ほめ」については、男性がほめることがやや多く、女性がほめられることがやや多いということになる。

対等「ほめ」については、全部で1回しか用例がなく、確かなことは何も言えない。

下上「ほめ」については、全部で7回の「ほめ」のうち、男性がほめ手の「ほめ」は6回で、女性がほめ手の「ほめ」は1回である。一方、男性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は5回で、女性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は2回である。ここで、それぞれの期待値（少数点以下四捨五入）を計算すると、男性がほめ手の「ほめ」の期待値は6回、女性がほめ手の「ほめ」の期待値は2回、男性が受け手の「ほめ」の期待値は6回で、女性が受け手の「ほめ」の期待値は2回である。ここから、期待値に比べて、実測値では、男性がほめ手の「ほめ」が同じ、女性がほめ手の「ほめ」がやや少なく、男性が受け手の「ほめ」がやや少なく、女性が受け手の「ほめ」が同じということがいえる。つまり、中世の下上「ほめ」については、男女に差がほとんど見られないということになる。

なお、中世の上下「ほめ」には、男性から男性への「ほめ」、男性から女性への「ほめ」、女性から女性への「ほめ」、女性から男性への「ほめ」、の間に差が見られた。それぞれの数（実測値）は、男性から男性への「ほめ」16回、男性から女性への「ほめ」2回、女性から女性への「ほめ」0回、女性から男性への「ほめ」1回であるが、期待値は、男性から男性への「ほめ」15回、男性から女性への「ほめ」3回、女性から女性へ

の「ほめ」1回、女性から男性への「ほめ」0回であり、期待値に比べて、実測値では、男性から男性への「ほめ」がやや多く、男性から女性への「ほめ」がやや少なく、女性から女性への「ほめ」がやや多く、女性から男性への「ほめ」がやや少ないということがいえる。つまり、中世の上下「ほめ」については、同性間の「ほめ」がやや多いということになる。

表5-9 近世における「ほめ」人間関係に男女別の使用状況

近世	ほめ手→受け手	例数	%
① 上下「ほめ」	男→男	23	67.65
	男→女	6	17.65
	女→女	1	2.94
	女→男	4	11.76
	小計	34	100.00
② 対等「ほめ」	男→男	14	66.67
	男→女	6	28.57
	女→女	0	0.00
	女→男	1	4.76
	小計	21	100.00
③ 下上「ほめ」	男→男	7	53.85
	男→女	2	15.38
	女→女	1	7.69
	女→男	3	23.08
	小計	13	100.00

表5-9から次のことがわかる。近世の用例の上下「ほめ」については、全部で34回の「ほめ」のうち、男性がほめ手の「ほめ」は29回で、女性がほめ手の「ほめ」は5回である。一方、男性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は27回で、女性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は7回である。ここで、それぞれの期待値（少数点以下四捨五入）を

計算すると、男性がほめ手の「ほめ」の期待値は28回、女性がほめ手の「ほめ」の期待値は6回、男性が受け手の「ほめ」の期待値は28回で、女性が受け手の「ほめ」の期待値は6回である。ここから、期待値に比べて、実測値では、男性がほめ手の「ほめ」がやや多く、女性がほめ手の「ほめ」がやや少なく、男性が受け手の「ほめ」がやや少なく、女性が受け手の「ほめ」がやや多いということがいえる。つまり、近世の上下「ほめ」については、男性がほめることがやや多く、女性がほめられることがやや多いということになる。

対等「ほめ」については、全部で21回の「ほめ」のうち、男性がほめ手の「ほめ」は20回で、女性がほめ手の「ほめ」は1回である。一方、男性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は15回で、女性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は6回である。ここで、それぞれの期待値（少数点以下四捨五入）を計算すると、男性がほめ手の「ほめ」の期待値は18回、女性がほめ手の「ほめ」の期待値は4回、男性が受け手の「ほめ」の期待値は18回で、女性が受け手の「ほめ」の期待値は4回である。ここから、期待値に比べて、実測値では、男性がほめ手の「ほめ」が多く、女性がほめ手の「ほめ」が少なく、男性が受け手の「ほめ」が少なく、女性が受け手の「ほめ」が多いということがいえる。つまり、近世の対等「ほめ」については、男性がほめることが多く、女性がほめられることが多いということになる。

下上「ほめ」については、全部で13回の「ほめ」のうち、男性がほめ手の「ほめ」は9回で、女性がほめ手の「ほめ」は4回である。一方、男性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は10回で、女性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は3回である。ここで、それぞれの期待値（少数点以下四捨五入）を計算すると、男性がほめ手の「ほめ」の期待値は10回、女性がほめ手の「ほめ」の期待値は4回、男性が受け手の「ほめ」の期待値は10回で、女性が受け手の「ほめ」の期待値は4回である。ここから、期待値に比べて、実測値では、男性がほめ手の「ほめ」がやや少なく、女性がほめ手の「ほめ」が同じで、男性が受け手の「ほめ」が同じで、女性が受け手の「ほめ」がやや少ないということがいえる。つまり、近世の下上「ほめ」については、男女に差がほとんど見られないということになる。

表5-10 近現代における「ほめ」人間関係に男女別の使用状況

近現代	ほめ手→受け手	例数	%
① 上下「ほめ」	男→男	89	60.54
	男→女	26	17.69
	女→女	13	8.84
	女→男	19	12.93
	小計	147	100.00
② 対等「ほめ」	男→男	26	53.06
	男→女	13	26.53
	女→女	3	6.12
	女→男	7	14.29
	小計	49	100.00
③ 下上「ほめ」	男→男	10	45.45
	男→女	0	0.00
	女→女	3	13.64
	女→男	9	40.91
	小計	22	100.00

表5-10から次のことがわかる。近現代の用例の上下「ほめ」については、全部で147回の「ほめ」のうち、男性がほめ手の「ほめ」は115回で、女性がほめ手の「ほめ」は32回である。一方、男性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は108回で、女性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は39回である。ここで、それぞれの期待値（少数点以下四捨五入）を計算すると、男性がほめ手の「ほめ」の期待値は112回、女性がほめ手の「ほめ」の期待値は36回、男性が受け手の「ほめ」の期待値は112回で、女性が受け手の「ほめ」の期待値36回である。ここから、期待値に比べて、実測値では、男性がほめ手の「ほめ」がやや多く、女性がほめ手の「ほめ」がやや少なく、男性が受け手の「ほめ」がやや少なく、女性が受け手の「ほめ」がやや多いということがいえる。つまり、近現代の上下「ほめ」については、男性がほめることがやや多く、女性がほめられることがやや多いということになる。

対等「ほめ」については、全部で49回の「ほめ」のうち、男性がほめ手の「ほめ」は39回で、女性がほめ手の「ほめ」は10回である。一方、男性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は33回で、女性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は16回である。ここで、それぞれの期待値（少数点以下四捨五入）を計算すると、男性がほめ手の「ほめ」の期待値は36回、女性がほめ手の「ほめ」の期待値は13回、男性が受け手の「ほめ」の期待値は36回で、女性が受け手の「ほめ」の期待値は13回である。ここから、期待値に比べて、実測値では、男性がほめ手の「ほめ」が多く、女性がほめ手の「ほめ」が少なく、男性が受け手の「ほめ」が少なく、女性が受け手の「ほめ」が多いということがいえる。つまり、近現代の対等「ほめ」については、男性がほめることが多く、女性がほめられることが多いということになる。

下上「ほめ」については、全部で22回の「ほめ」のうち、男性がほめ手の「ほめ」は10回で、女性がほめ手の「ほめ」は12回である。一方、男性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は19回で、女性が受け手の（ほめられた）「ほめ」は3回である。ここで、それぞれの期待値（少数点以下四捨五入）を計算すると、男性がほめ手の「ほめ」の期待値は15回、女性がほめ手の「ほめ」の期待値は8回、男性が受け手の「ほめ」の期待値は15回で、女性が受け手の「ほめ」の期待値は8回である。ここから、期待値に比べて、実測値では、男性がほめ手の「ほめ」が少なく、女性がほめ手の「ほめ」が多く、男性が受け手の「ほめ」が多く、女性が受け手の「ほめ」が少ないということがいえる。つまり、近現代の下上「ほめ」については、女性がほめることが多く、男性がほめられることが多いということになる。

なお、近現代の上下「ほめ」には、男性から男性への「ほめ」、男性から女性への「ほめ」、女性から女性への「ほめ」、女性から男性への「ほめ」、の間に差が見られた。それぞれの数（実測値）は、男性から男性への「ほめ」89回、男性から女性への「ほめ」26回、女性から女性への「ほめ」13回、女性から男性への「ほめ」19回であるが、期待値は、男性から男性への「ほめ」84回、男性から女性への「ほめ」31回、女性から女性への「ほめ」24回、女性から男性への「ほめ」8回であり、期待値に比べて、実測値では、男性から男性への「ほめ」が多く、男性から女性への「ほめ」が少なく、女性から女性への「ほめ」が多く、女性から男性への「ほめ」が少ないということがいえる。つまり、近現代の上下「ほめ」については、同性間の「ほめ」がやや多いということにな

る。

また、近現代の下上「ほめ」には、男性から男性への「ほめ」、男性から女性への「ほめ」、女性から女性への「ほめ」、女性から男性への「ほめ」、の間に差が見られた。それぞれの数（実測値）は、男性から男性への「ほめ」10回、男性から女性への「ほめ」0回、女性から女性への「ほめ」3回、女性から男性への「ほめ」9回であるが、期待値は、男性から男性への「ほめ」9回、男性から女性への「ほめ」1回、女性から女性への「ほめ」2回、女性から男性への「ほめ」10回であり、期待値に比べて、実測値では、男性から男性への「ほめ」がやや多く、男性から女性への「ほめ」がやや少なく、女性から女性への「ほめ」がやや多く、女性から男性への「ほめ」がやや少ないということがいえる。つまり、近現代の下上「ほめ」については、同性間の「ほめ」がやや多いということになる。

5.2.4 「ほめ」の人間関係に関する考察

本節では、「ほめ」の人間関係を取り上げ、作品の会話の中ではどのような人間関係においてほめが行われるかを分析した。まず『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の用例に現れる古代から近現代まで「ほめ」を、人間関係によって三つに分け、分析した。

①上下「ほめ」については、古川（2003）の現代語書き言葉の分析の結果では、「ほめ」は社会的力関係において上から下へ行われる場合が多いとされる。これに対し、本稿の分析結果からは、時代及びほめ手の性別に関わらず、上下「ほめ」が行われる場合が多いことがわかる。これは、古川の研究の結論と一致する。人間関係について男女別の視点から各時代の用例をさらに分析すると、古代から近世の上下「ほめ」については、男性がほめることがやや多く、女性がほめられることがやや多い。そして、近現代においては、女性がほめる用例数が増加したが、比率的には男性がほめる使用率は相変わらず高い。更に、中世と近現代において、同性間の「ほめ」がやや多い傾向が見られる。Holmes（1985）によれば、女性は「情緒的」また「社会的」の役割においてよく相手を「ほめる」が、男性は「指示的」または「有益的」の役割において「ほめる」という。女性は「ほめ」行動で人間関係を円滑に進めるための手段として活用していることを確

信しているようである。つまり、「ほめ」言葉は、多くの女性にとって人間関係を円滑に進めるための潤滑油だと考えられているという。また、瀬田・木田（2008）は、次のように指摘している。一般的傾向として、「ほめ」行動は、女性に「本能的」に備わっている行動であるため、当然女性はそのような行動をとり、女性にとって「ほめる」行動は、「抵抗なく」できる自然な行動ではないかと指摘している。しかし、本稿の分析から、男性も古代から近現代において、「ほめる」ことに「抵抗」がなく、「ほめる」行動を自然に行うことができることがうかがえる。

②対等「ほめ」については、Holmes(1988)は「ほめる場面は主に同等な社会的な関係においてあらわれる」と指摘し、丸山(1996)も「ほめは、ほめ手と受け手の地位が等しい場合のほうが、両者の地位が異なる場合よりも、より頻繁に発生している」と指摘している。古川（2003）の現代語書き言葉の分析の結果では、「ほめ」は社会的力関係において対等の関係でもかなり行われていること、上下「ほめ」と比べると疎の関係でも起こりやすく、対象が多岐に渡り、個人的基準に基づいてほめることが多いとなっている。これに対し、本稿の分析では、時代及びほめ手の性別に関わらず、対等「ほめ」を用いることで「ほめ」を行う場合が、上下「ほめ」、下上「ほめ」と比べると、低い割合を占めていた。これは、Holmes、丸山、古川の研究結論と一致しない。時代別、男女別に分析すると、古代においては男女に差が見られなかった。一方、中世においては、全部で1例しか用例がなく、確かなことは何もいえない。近世、近現代の用例を見ると、対等「ほめ」の用例数は増えているが、男女別で分析すると、男性がほめることが多く、女性がほめられることが多い。

③下上「ほめ」は、Mizutanai&Mizutanai(1984)は「日本語では、目上の人に対しては直接的な評価をすることを避ける」と指摘している。古川（2003）の現代語書き言葉の分析の結果では、「下上ほめ」はめったに行われませんが、行われる場合は個人的基準に基づく場合が多いという結果になっている。これに対し、本稿の分析では、古代、中世、近世、近現代いずれの時代でも用例は多く見られる。特に、古代と近現代の用例は大体同じ割合であり、古代における下上「ほめ」は全体の4割を占めている。その結果はMizutanai&Mizutanai、古川の研究結果とは一致しない。「ほめ」は社会的に上の立場のものから下の立場のものへ行われるとは必ずしも言えないということがわかる。一方、男女別で分析すると、古代と近現代では、女性がほめることが多く、男性がほめられる

ことが多いことから、男性より女性のほうが下から上を気軽にほめるようである。この結論は、Holmes、瀬田・木田とほぼ一致している。一方、中世と近世では、男女に差がほとんど見られない。そして、近現代の下上「ほめ」については、同性間の「ほめ」がやや多い傾向が見られる。また、データから見れば、下にいる女性、或いは男性が地位の高い男性をほめる割合が地位の高い女性をほめる割合より高い。ここから、下にいる女性、或いは男性が自分より地位の高い女性をほめるときには、気配りが必要かとも思われる。また、地位が、女性と男性の「ほめ」の使用に幾分影響を与えるらしいこともうかがえる。

5.3 「ほめ」の対象

本節では、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の作品の「ほめ」表現において、何についてほめが行われるかを分析する。

5.3.1 「ほめ」の対象の分類基準

「ほめ」の基本的な対人機能は、相手を快い気持ちにさせることであるので、相手の何をほめるのが重要である。論理的には、人々は話を交わす時、相手が有するものすべてをほめる可能性があり、「ほめ」対象は豊かだと考えられる。Wolfson (1983) は米語での「ほめ」の対象項目は、外見（所持品を含む）と能力（技術、才能、人格、嗜好を含む）が2大主要項目であると述べている。

Holmes (1988) や丸山 (1996) は、「ほめ」の対象を「所持物、外見、能力、性格」の四つに分類している。熊取谷 (1989) は、①才能・知識・技術、②容姿・服装・所持品、③努力、④性格の4カテゴリーをあげている。

古川 (2003) は、「「ほめ」の対象が受け手に関するものである場合、対人関係同様、対象の不適切な選択も相手にとってのFTA（インポライトネスにおける根源的なフェイス侵害行為）となりうる」と述べて、「容姿、性格・属性、能力、行動・態度、関係ある人、服装・装飾、作品」の七つに分類している。この研究は書き言葉データを分析したため、「ほめ」の対象の分類に「作品」が含まれる。

大野 (2003) は、一時的か恒常的かといった観点を加えて、「外見、持ち物、内面（才能・達成、性格・行動、人全体、その他）、作品、家族、その他」の九つに分類している。

金 (2012) は、丸山 (1996) を検討したうえで、「外見、能力、性格」の項目をより細分化し、具体的には、所持物・外見・外見の変化・才能・遂行・性格・行動の七つの分類を設定した。

本稿は、以上の先行研究に基づき、「ほめ」の対象を①所持物、②外見、③能力、④性格・人柄、⑤行動・態度、⑥状態の六つに分類することにする。

上記の分類は、以下のようにまとめられる。

	分類内容
Wolfson (1983)	外見（所持品を含む）、能力（技術、才能、人格、嗜好を含む）
Holmes (1988) 丸山 (1996)	所持物、外見、能力、性格
古川 (2003)	容姿、性格・属性、能力、行動・態度、関係ある人、服装・装飾、作品
大野 (2003)	外見、持ち物、内面（才能・達成、性格・行動、人全体、その他）、作品、家族、その他
金 (2012)	所持物、外見、外見の変化、才能、遂行、性格、行動
本稿の分類	所持物、外見、能力、性格・人柄、行動・態度、状態

以下、「ほめ」の対象の特徴を実例とともに検討してから、用例におけるほめの対象に関する全体的な分析結果を述べる。

ただし、収集した用例のうち、「「ほめ」の対象なし」（いわゆる「ほめ」対象の持ち主が明確ではない）の例文は分析の対象外となっている。

<研究対象外の例>

- ① 娘さんは、興奮して頬をまつかにしてみた。だまつて空を指さした。見ると、雪。はつと思つた。富士に雪が降つたのだ。山頂が、まつしろに、光りかがやいてゐた。御坂の富士も、ばかにできないぞと思つた。

「いいね。」とほめてやると、娘さんは得意さうに、
「すばらしいでせう？」といい言葉使つて、「御坂の富士は、これでも、だめ？」としやがんで言つた。私が、かねがね、こんな富士は俗でだめだ、と教へてゐたので、娘さんは、内心しよげてゐたのかも知れない。

太宰治「富嶽百景」

こちらの例は、「ほめ」の対象は「富士山」となり、持ち主が明確に判断できない。このような用例は今回の分析対象から外した。

また、「ほめ」の対象が明確に複数の場合、各対象の用例数の中に入れる。

<研究対象の例>

② 老人、「まことにあなめでたの物の香や。京人はなほいところみやびかにいまめかしけれ。天下にいみじきことと思したりしかど、東国にてかかる薫物の香は、え合はせ出でたまはざりきかし。この尼君は、住まひかくかすかにおはすれど、装束のあらまほしく、鈍色、青鈍といへど、いときよらにぞあるや」などほめゐたり。あなたの簀子より童来て、「御湯などまゐらせたまへ」ととて、折敷どももとりつづきてさし入る。

[現代語訳]

年配の女房が、「本当になんとも結構なお香の薫りですこと。京の人はやはり風流で当世風なのですね。わたしどもの奥方はご自身ではこの世いちばんの上手とお思いでいらっしゃったけれど、東国ではこんな結構な薫物の香はとても調合なさることはおできになりませんでした。この尼君は、お住いはこうしてごくひそやかでいらっしゃるけれど、お召物は申し分なく、鈍色、青鈍色ときまったものでもほんとにきれいにしてい

紫式部「宿木（源氏物語）」

こちらの例は、「ほめ」の対象が、「なほいところみやびかにいまめかしけれ」（⑥状態）、「装束のあらまほしく、鈍色、青鈍といへど、いときよらにぞあるや」（②外見）など複数あることが明確に判断できる。このような用例は今回の対象分析のそれぞれの用例となっている。

分析対象としたものは、収集した 731 例のうち、ほめの対象が文脈から確実に判断できる用例 667 例である。そのうち、ほめ手の性別が文脈から明らかにわかる用例は 416 例であり、ほめの表現が文脈から明白に判断できる用例は 535 例である。

5.3.2 資料に現れた「ほめ」の対象

本稿で設定する「ほめ」の対象とその定義を示した上で、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の作品の中のそれぞれの例を挙げる。

「ほめ」の対象の定義

ほめの対象	定義
① 所持物	相手が持っている、また身につけている物理的なもの。 (作品と贈り物と財産も含める)
② 外見	外から見た人の姿、容貌のうち、変わらない、生まれつきの顔や体型などの容貌、または一時的に変化した顔や体型などの容貌。
③ 能力	あるものを成し遂げることができるかどうかという観点からみた、その人の総合的な力および素質や才能を用いて何かに達したということ。
④ 性格・人柄	各個人に特有の、ある程度持続的な感情・意志の面での傾向や性質そのもの、またはその人に備わっている品格。
⑤ 行動・態度	行動のしかたに現れる、その人に固有の感情・意志の傾向あるいは何かをしようとして、実際に体を動かすこと。
⑥ 状態	各個人の身の上につく後天的な条件。 (例えば、年齢、心身状態、就職先、生活状態、運勢、名誉、ステータスなど)

1 「所持物」

「所持物」とは、相手が持っている、また身につけている物理的なもの（作品と贈り物と財産も含める）のことである。

『新編日本古典文学全集』からの用例

「この男はみづからまゐらむとするを、昼はかたちわろしとてまゐらぬなめり」と、いみじうをかしげに書いたまへり。御前にまゐりて御覧ぜさすれば、「めで

たくも書きたるかな。をかしくしたり」などほめさせたまひて、解文は取らせたまひつ。「返事いかがすべからむ。この餅餤持て来るには、物などや取らすらむ。知りたらむ人もがな」と言ふを聞しめして、「惟仲が声のしつるを。呼びて問へ」とのたまはすれば、端に出でて、「左大弁に物聞えむ」と、侍して呼ばせれば、いとよくうるはしくて来たり。

[現代語訳]

「この下男は自分自身で参上しようとするのですけれど、昼は顔がみっともないと言って参上しないようです」と、たいへん美しく見える筆跡でお書きになっている。中宮様の御前に参上して御覧に入れると、「なんとすばらしく、書いてあることでしょう。おもしろい趣向がこらしてある」などとおほめあそばされて、その解文はお手もとにお取りあそばされてしまった。「返事はどうしたらよいのかしら。この餅餤を持って来る時には、使いに禄など与えるのだろうか。知っている人がいるといいのに」と言うのを中宮様がお聞きあそばして、「惟仲の声がしたけれど。呼んで聞いてごらん」と仰せあそばすので、部屋の端に出て、わたしは「左大弁にお話し申しあげたい」と、侍をして呼ばせると、たいへん威儀を正してやって来た。

清少納言「枕草子」

(一二七 二月、官の司に P. 239)

平安時代（1001年ごろ成立）

上では、ほめ手の中宮様が解文の筆跡を見てそれをほめている。

ほめ表現	「めでたくも書きたるかな。をかしくしたり」
------	-----------------------

『青空文庫』からの用例

昼間のいろいろなことであんなに伸子を傷つけた、そのひととは思えないうれしさのあふれた眼つきで、多計代は大きい白い枕の上で、頭をあっちに動かして、いくらか汗っぽい下の娘の十三歳の顔を眺め、こんどは頭をこっちに向けて、さっぱりしたうちにも、表情の成熟して来ている三十歳の伸子の顔を見た。そして、伸子がきかえた薄黄色地に小花模様の両腕の出る寝間着を、「かわいくて、いい

こと」とほめた。「それにしても、よく吉見さんが伸ちゃんを一人でよこしたね」そんなことを云っている多計代はほとんどあどけないようで、一つ枕の上に並んだ多計代の髪が前髪をつめられ、八分どおり白くなっていることも、そこに不手際黒チックが塗られていることも、伸子の心を動かすのだった。

宮本百合子「道標」

1947（昭和22）年10月号～1948（昭和23）年8月号

上では、ほめ手の多計代が伸子の寝間着をほめている。

ほめ表現	「かわいくて、いいこと」
------	--------------

2「外見」

「外見」とは、外から見た人の姿、容貌のうち、変わらない、生まれつきの顔や体型などの容貌、または一時的に変化した顔や体型などの容貌のことである。

『新編日本古典文学全集』からの用例

御門「いみじう興ありけることかな。かの国には、女すぐれたるなるべし。楊貴妃、王昭君、李夫人など言ひて、あがりての世にもあまたありけり。上陽宮にながめたる女も、『眼は芙蓉に似たり、胸は玉に似たり』と誉めたり。男は、いとかばかり名を伝へたるやある」と問ひ給へば、中納言「昔、河陽県にはべりけむ潘岳といひはべりける人などこそ、名を伝へはべり。隣なる女、これを思ひかけて、三年まで見はべりけるを、潘岳はえ知らずはべりける。このころもぞ、京の中に、容面けしうはあらぬ人人はんべりしかど、この見給へし女房たちには、ならぶべきはさぶらはざりき。いみじき楊貴妃、王昭君なども、ただうるはしうさぶらひけるなんめり。

[現代語訳]

御門は「たいそう興味をそそられたことだなあ。あの国では女がぬきんでいてのにちがいない。楊貴妃、王昭君、李夫人などと言って、遡った上代にも多くいたのだったよ。上陽宮でもの思いに耽っている女も、『眼は芙蓉に似たり、胸は玉に似たり』と誉め称えている。男では、本当にこれほど評判を残している者

はいるのか」とお聞きになるので、中納言は、「昔、河陽県にありましたという
 潘岳と言いました人などが評判を残しております。隣に住む女が、この男に思い
 を懸けて、三年までも目をつけておりましたのに、潘岳は気づくことができな
 かったのですよ。私がいた頃のことですが、唐土の京の中で、容貌がまんざらお
 かしくはない女たちはおりましたけれど、この拝見しました女房たちに肩を並べ
 られそうな者はおりませんでした。大変な評判の楊貴妃、王昭君なども、絵で見
 ての通り、ただ端麗でおりましたようです。

作者未詳「浜松中納言物語」

(浜松中納言物語 卷第三(扉) 卷第三 梗概 [二五] 中納言、唐后を賞
 讃するが、真実は語らない P.267)

平安時代(1062年ごろ成立)

上では、不特定のほめ手が女性の眼と胸の美しさをほめている。

ほめ表現	「眼は芙蓉に似たり、胸は玉に似たり」
------	--------------------

『青空文庫』からの用例

二夜くらいつづけて外泊すると、さすがに夫も、一夜は自分のうちに寝ます。
 夕食がすんでから夫は、子供たちと縁側で遊び、子供たちにさえ卑屈なおあいそ
 みたいな事を言い、ことし生れた一ばん下の女の子をへたな手つきで抱き上げて、
「ふとっていまちねえ、べっぴんちゃんてちねえ。」とほめて、私がつい何の気
 なしに、「可愛いでしょう？子供を見てると、ながいきしたいとお思いにならない
 い？」

太宰治「おさん」

1975(昭和50)年6月～1976(昭和51)年6月

上では、ほめ手の夫が今年生まれた一番下の女の子の体型と顔の綺麗さをほめている。

ほめ表現	「ふとっていまちねえ、べっぴんちゃんてちねえ。」
------	--------------------------

3「能力」

「能力」とは、あるものを成し遂げることができるかどうかという観点からみた、その人の総合的な力および素質や才能を用いて何かに達したということである。

『新編日本古典文学全集』からの用例

あれに見えたる松の葉隠れに、残る雪にまがひの白鷺、矢つぽ御望み次第に、射落として見せ申さん」と、引きしぼりてはなつ矢、真ただ中を射抜いて、「先づは御手柄」と、褒めし言葉の下に、あまり矢、向ひの尾に遊びし、大石半九郎が右の肩骨より心もとまで、篋深に、たちまち絶入して倒れ、所あしければ、はや事切れける。

「現代語訳」

あそこに見える松の葉隠れに、残雪に見まがうような白鷺がいる。あれを、ねらい所はお望み次第に、射落として見せよう」と言って、弓を引きしぼって放つと、矢は見事に白鷺の真中を射通した。「まずはお手柄」と、新四郎が褒め終わらないうちに、白鷺を射た勢いのついた矢が、向こうの山裾に遊んでいた大石半九郎の右の肩骨から胸元まで、矢の柄も深く貫いた。半九郎はたちまち気絶して倒れたが、その当たり所が悪かったので、はや死んでしまった。

井原西鶴「武道伝来記（井原西鶴集）」

江戸時代中期

上では、ほめ手の新四郎が見事に白鷺の真中を射通した与七郎の才能をほめている。

ほめ表現	「先づは御手柄」
------	----------

『青空文庫』からの用例

照彦様が再三直されて国語の読み方をおわった時、「有本さん、ご苦労でございます。頭のわるい子ですから、特別にお骨が折れましょう」と奥様は先生をねぎらうつもりでおっしゃった。「エヘン」と安斉先生が咳ばらいをした。「どういたしまして。内藤君、今のところを読んでごらんなさい」と有本先生が命じた。正三君がスラスラと読みおわるのを待っていたように、奥様は、「よくおできでございます。照彦とはまったく違います」とほめた。「どういたしまして」「い

いえ。照彦や、おまえは内藤さんの二倍も三倍もやらなければだめですよ。頭のわるい分を勉強で取りかえすのです」「エヘン」「ゆだんをしてはなりませんよ。人よりも頭のわるいことを始終わすれないようにしましてね」「エヘンエヘンエヘン」と安斉先生は続けさまたった。

佐々木邦「苦心の学友」

1927（昭和2）年10月号～1929（昭和4）年12月号

上では、ほめ手の奥様が正三君のスラスラと読み終わった能力をほめている。

ほめ表現	「よくおできでございます。照彦とはまったく違います」
------	----------------------------

4「性格・人柄」

「性格・人柄」とは、各個人に特有の、ある程度持続的な感情・意志の面での傾向や性質そのもの、またはその人に備わっている品格のことである。

『新編日本古典文学全集』からの用例

それも恨みも昔中にて、今は鳴るとも響くとも、まゝよおのれが尾上の松、鐘の供養に参るらん、これはこの国の傍らに、下衆奉公の勤めをいたす飯たきの女にて候ふ、下世はさま／＼の中にも宮仕へ程辛いものあらばこそ、主に売つたる身と思へば、昼は日がな一日、手足の乾くひまもなく、働けば働く程、休めとも言はばこそ、誉めそやされてあの女子は、律儀者で達者で、心のまめなまめ者よ。豆腐売りが通るは、そりや夕飯を、やう／＼しまうて洗足すりや、はや入相のかねつける間もあるにこそ。

[現代語訳]

それも恨めしいとは昔のこと、今は鳴るのも響くのも勝手におしよ、私は動じないよ。むしろ鐘の供養に参りましょう。これはこの国の隅っこで下女奉公の勤めを致します飯炊きの女でございます。世の中はいろいろ、中でも奉公ほど辛いものはありましようか。主人に売った体と思うと、昼は一日中手足の乾く間もないほど働き、働けば働くほど休めとも言わず、あの女子は義理固く丈夫で、よく気のつく真面目な者と誉められ煽てられ、豆腐売りが通るぞ、それ夕飯の仕度を。

夕飯が終って洗足すれば、もはや夕暮の鐘が鳴り、御歯黒をつける暇もなく、部屋の隅に行って眠ろうとすると、夜食の用意をしろと言う。

近松門左衛門「用明天王職人鑑（近松門左衛門集）」
（第三 播州尾上の浜辺の場 〔二三〕下女の参会 P.114）

江戸時代中期

上では、周りの人が飯たきの女の義理固く、気のつく真面目な性格をほめている。

ほめ表現	律儀者で達者で、心のまめなまめ者よ。
------	--------------------

『青空文庫』からの用例

その女中さんが、あとで、先生はやさしいよいおかただとほめておりましたそうですよ。そして、よいおかただけれど……と言葉尻を濁すので、よく聞いてみますと、たった一ついやなことがある、と申したそうです。先生がいつまでもお酒をあがっていらっしゃるので、部屋に引っこんでいると、いきなり部屋の襖をあけて、もう寝たのかいと中をお覗きなさることがあるし、それから、酔っ払って肩をお揉ませなさることがある。それが、とてもいやだった。そう申したそうですよ。

豊島与志雄 「無法者」

1951（昭和26）年1月

上では、ほめ手の女中が志村先生の優しさをほめている。

ほめ表現	先生はやさしいよいおかただ
------	---------------

5「行動・態度」

「行動・態度」とは、行動のしかたに現れる、その人に固有の感情・意志の傾向、あるいは何かをしようとして、実際に体を動かすことである。

『新編日本古典文学全集』からの用例

三河、ちつとも傾かず、鐙踏んばり、つい立ち上がり、左の手にては鞍の前輪

をかかへ、右の手にては抜丸と云ふ太刀を抜き、熊手の柄をぞ切りてける。熊手引きける男は、仰けに転ぶ。三河守は、つと延びにけり。熊手は甲に止まりけり。見物の上下、これを見て、「あ、切りたり。いしう切りたり」と、誉めぬ者こそなかりけれ。三河守も、既に討たれぬべく見えけるに、通り合ひて、戦ふ者ども誰々。

[現代語訳]

三河守頼盛は、中御門を東の方へ引き退いたのを、鎌田の下男が、腹巻姿で熊手を持っていたが、「これは手柄をたてるにはよさそうな敵」とばかり頼盛目がけて走り寄り、甲に熊手を投げ懸けて、かけ声かけながら引っぱった。しかし、三河守は少しも引きずられず、鎧ふんばり立ち上がって、左の手で鞍の前輪をかかえこみ、右の手では抜丸という太刀を抜いて、熊手の柄を切った。熊手を引いていた男はあおむけにころんだ。三河守は素早く逃げのびた。熊手は甲にくっついたままであった。見物の人は皆、「あ、切ったぞ。みごとに切ったものよ」と、ほめない者はいなかった。

作者未詳「平治物語」

(平治物語 上(扉) 待賢門の軍の事 P.456)

鎌倉時代初期～中期

上では、ほめ手の見物の人が三河守の見事に熊手の柄を切った行動をほめている。

ほめ表現	「あ、切りたり。いしう切りたり」
------	------------------

『青空文庫』からの用例

百合子に『レーンコートを持つて、停車場まで姉ちゃんを迎へに行けるか』と聞いてみる。行けるといふ。尤毎日学校へ通つてゐる道だ。『そりや偉い。糸子姉ちゃんも雨具なしで下館から来るのだからね。妹が姉を迎へに行くつて、立派な事だ』とほめると、レーンコートを頭からすつぽり被つて、姉のを脇にかかへて、雨の中を出て行つた。あとから妻を見にやる。『もう半分道行きましたよ、せつせと、勇んで』夜、電燈の下で三人の子と遊ぶ。

横瀬夜雨 「五葉の松」

上では、ほめ手の「私」が、下の娘の百合子が雨の中、姉を迎えに行こうとする態度と行動をほめている。

ほめ表現	『そりや偉い。糸子姉ちゃんは雨具なしで下館から来るのだからね。 妹が姉を迎へに行くつて、立派な事だ』
------	---

6「状態」

「状態」とは、各個人の身の上についた後天的な条件（例えば、年齢、心身状態、就職先、生活状態、運勢、名誉、ステータスなど）である。

『新編日本古典文学全集』からの用例

あたは御さまを、かくてつくづくとおはしますこそ、あいなけれ。四の君もくまた御婿どりしたまはむ>と設けたまふめり。北の方の御心にまかせて、のべしじめしたまふ」「めでたきや。誰をか取りたまふ」とのたまへば、「左大将殿の左近の少将とか。かたちはいと清げにおはするうちに、『ただ今なり出でたまひなむ』と人々誉む。帝も時めかしおぼす。御妻はなし。いとよき人の御婿なり。

『<いかでこのわたりにもがな>と思ふ』と、おとども常にのたまふとて、北の方急ぎに急ぎたまひて、四の君の御乳母、かの殿なりける人を知りたりけるを、よろこびたまひて、さざめき騒ぎたまひて、文やらせたまふめり」と言へば、「いとうれしく。さて」と言ひて、いとよくほほゑみたるまみ、口つきの、灯のあかきに映えて、にほひたるものから、恥づかしげなり。

[現代語訳]

あなた様がこんなにすばらしいご様子なのに、こうやってももの寂しげでいらっしゃるのはいたわしいことでございますね。四の君もくまたお婿様をお迎えになろう>と、ご準備をなされているようです。北の方のお気持まかせて、勝手なことをなさっていらっしゃる」と言う。「それはおめでたいことね。どなたをお迎えなさるのですか」とおっしゃると、「左大将様の若様の左近の少将とか承っております。ご器量はたいそうご立派でいらっしゃるうえに、『たった今にもご

出世あそばすだろう』と、人々がほめています。帝もご寵愛なされています。奥様はございません。女性にとって非常にすばらしい婿君様です。『<どうかしてこの家の婿君に迎えたいなあ>と思う』と、お殿様もいつもおっしゃっているということで、北の方も非常にお急ぎになって、四の君様の御乳母が左大将殿に仕えている女房と懇意なのを、都合がよいとお喜びになって、大騒ぎなさって、手紙を贈らせあそばしたようですよ」と言うと、姫君は「まったく喜ばしいことね。それで」と言って、たいそう気持よくほほえまれた目つきや口つきが、灯火の明るい光に照り映えて、美しいのに、さらに見ている者が恥ずかしいと思うほど、気高さがある。

作者未詳「落窪物語」

(落窪物語 卷之一(扉) 〔三五〕女房少納言、姫君に弁の少将の噂話をする P.89)

平安時代(10世紀末ごろ成立)

上では、ほめ手の人々が左近の少将が出世しそうだという状態をほめている。

ほめ表現	『ただ今なり出でたまひなむ』
------	----------------

『青空文庫』からの用例

でも、私が涙をこぼしたら、みんなはきっとそんなに私が喜ぶことをかえって気の毒に思うだろうと思って、あんまりうれしくて恥しい恥しいと云って気持を自分で持かえました。みんなは、生れかわって一つの人にしては発育が良いとほめて、お杯をあげてくれました。その杯のひとつみの中の 하나가、私達御秘蔵の真丸のもので、そのつれの杯をあげながら、私は、あのまん丸の杯が、矢張りキラキラ光りながら私のために上げられているのを感じました。

宮本百合子「獄中への手紙 10 一九四三年(昭和十八年)」

1981(昭和56)年

上では、ほめ手のみんなが私の今の心身状態をほめている。

ほめ表現	生れかわって一つの人にしては発育が良い
------	---------------------

5.3.3 「ほめ」の対象の分類結果

まず、分析対象の用例に現れたすべての「ほめ」を上記の六つに分け、時代別に分類すると、表5-11のようになる。

表5-11 用例における「ほめ」の対象

	古代		中世		近世		近現代		例数 合計
	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%	
① 所持物	11	11.96	11	12.79	26	17.22	49	14.50	97
② 外見	15	16.30	8	9.30	15	9.93	43	12.72	81
③ 能力	26	28.26	25	29.07	50	33.11	102	30.18	203
④ 性格・人柄	15	16.30	5	5.81	19	12.58	51	15.09	90
⑤ 行動・態度	15	16.30	33	38.37	26	17.22	72	21.30	146
⑥ 状態	10	10.87	4	4.65	15	9.93	21	6.21	50
合計	92	100.00	86	100.00	151	100.00	338	100.00	667

表5-11に示したように、「①所持物」は、古代では全体の11.96%（11例）、中世では全体の12.79%（11例）、近世では全体の17.22%（26例）、近現代では全体の14.50%（49例）で、近世においてより高い割合を占めている。次に、「②外見」は、古代では全体の16.30%（15例）、中世では全体の9.30%（8例）、近世では全体の9.93%（15例）、近現代では全体の12.72%（43例）で、古代で若干多く見られる。また、「③能力」は、古代では全体の28.26%（26例）、中世では全体の29.07%（25例）、近世では全体の33.11%（50例）、近現代では全体の30.18%（102例）で、近世において多く用いられていることがわかる。そして、「④性格・人柄」は、古代では全体の16.30%（15例）、中世では全体の5.81%（5例）、近世では全体の12.58%（19例）、近現代では全体の15.09%（51例）で、古代においてより高い割合を占めている。さらに、「⑤行動・態度」は、古代では全体の16.30%（15例）、中世では全体の38.37%（33例）、近世では全体の17.22%（26例）、近現代では全体の21.30%（72例）で、中世に若干多く見ら

れる。最後に、「⑥状態」は、古代では全体の10.87%（10例）、中世では全体の4.65%（4例）、近世では全体の9.93%（15例）、近現代では全体の6.21%（21例）で、古代において多く用いられていることがわかる。

表5-11の結果から、「③能力」を「ほめ」対象とする用例の割合が、古代28.26%、中世29.07%、近世33.11%、近現代30.18%で、いずれの時代でも全体のほぼ3割を占め、使用頻度が高いことがわかる。このことから、「③能力」を「ほめ」対象とする表現が、各時代においてほめを表す典型的なスタイルであり、時代を超越したものであることがわかる。一方、「⑥状態」を「ほめ」対象とするものは、古代10.87%、中世4.65%、近世9.93%、近現代6.21%で、どの時代でも全体のほぼ1割以下であることから、「⑥状態」は、時代にかかわらず、「ほめ」対象とするものは少なく、典型的なスタイルではないことがわかる。

次に、古代、中世、近世、近現代の各時代における「ほめ」の対象について、男女差があるかどうかを分析してみよう。

表5-12 古代における「ほめ」対象の男女別の使用状況

古 代	男性		女性		例数 合計
	例数	%	例数	%	
① 所持物	5	12.50	0	0	5
② 外見	5	12.50	4	25.00	9
③ 能力	17	42.50	3	18.75	20
④ 性格・人柄	7	17.50	3	18.75	10
⑤ 行動・態度	5	12.50	3	18.75	8
⑥ 状態	1	2.50	3	18.75	4
合 計	40	100.00	16	100.00	56

表5-12からわかるように、古代の用例では、「①所持物」の割合は、男性（12.50%）、女性（0%）ともに低い割合を示している。「②外見」は、女性（25.00%）が男性（12.50%）より高い。「③能力」は、男性（42.50%）が女性（18.75%）より高い。また、「④性

格・人柄」は、女性（18.75％）が男性（17.50％）よりやや高い。「⑤行動・態度」は、女性（18.75％）が男性（12.50％）より若干高い。「⑥状態」は、女性（18.75％）が男性（2.50％）より多用していることがわかる。

表5-13 中世における「ほめ」対象の男女別の使用状況

中 世	男性		女性		例数
	例数	%	例数	%	合計
① 所持物	4	12.90	1	33.33	5
② 外見	5	16.13	1	33.33	6
③ 能力	10	32.26	1	33.33	11
④ 性格・人柄	1	3.23	0	0	1
⑤ 行動・態度	10	32.26	0	0	10
⑥ 状態	1	3.23	0	0	1
合 計	31	100.00	3	100.00	34

表5-13からわかるように、中世の用例では、「①所持物」は、女性（33.33％）が男性（12.90％）より多く使用することがわかる。同じく「②外見」は、女性（33.33％）が男性（16.13％）より高い。そして、「③能力」は、女性（33.33％）が男性（32.26％）よりやや高い。また、「④性格・人柄」は、女性（0％）、男性（3.23％）ともに低い割合を示している。「⑤行動・態度」は、男性（32.26％）が女性（0％）より圧倒的に高い。一方、「⑥状態」は、男性（18.75％）、女性（0％）ともに低い割合を示している。

表5-14 近世における「ほめ」対象の男女別の使用状況

近 世	男性		女性		例数
	例数	%	例数	%	合計
① 所持物	17	21.79	1	11.11	18
② 外見	10	12.82	1	11.11	11
③ 能力	28	35.90	4	44.44	32

④ 性格・人柄	8	10.26	3	33.33	11
⑤ 行動・態度	10	12.82	0	0	10
⑥ 状態	5	6.41	0	0	5
合 計	78	100.00	9	100.00	87

表5-14からわかるように、近世の用例では、「①所持物」は、男性（21.79%）が女性（11.11%）より多く使用することがわかる。同じく、「②外見」は、男性（12.82%）が女性（11.11%）よりやや高い。そして、「③能力」は、女性（44.44%）が男性（35.90%）よりやや高い。同じく、「④性格・人柄」は、女性（33.33%）が男性（10.26%）より高い割合を示している。「⑤行動・態度」は、男性（12.82%）、女性（0%）、「⑥状態」は、男性（6.41%）、女性（0%）で、ともに低い割合を示している。

表5-15 近現代における「ほめ」対象の男女別の使用状況

近現代	男性		女性		例数 合計
	例数	%	例数	%	
① 所持物	26	14.53	12	20.00	38
② 外見	21	11.73	7	11.67	28
③ 能力	59	32.96	18	30.00	77
④ 性格・人柄	26	14.53	10	16.67	36
⑤ 行動・態度	35	19.55	10	16.67	45
⑥ 状態	12	6.70	3	5.00	15
合 計	179	100.00	60	100.00	239

表5-15からわかるように、近現代の用例では、「①所持物」は、女性（20.00%）が男性（14.53%）よりやや多く使用することがわかる。「②外見」は、女性（11.67%）が男性（11.73%）よりやや低い。一方、「③能力」は、男性（32.96%）が女性（30.00%）よりやや高い。そして、「④性格・人柄」は、女性（16.67%）が男性（14.53%）よりやや高い割合を示している。「⑤行動・態度」は、男性（19.55%）が女性（16.67%）

より若干高い。「⑥状態」は、男性（6.70％）が女性（5.00％）よりやや高いが、両方ともに低い割合を示している。

ここで、古代、中世、近世、近現代の各時代における「ほめ」の対象と「ほめ」表現とにはどのような関連があるのかを分析してみよう。「ほめ」表現は、5.1で分析したように、①「肯定的評価語のみ使用」、②「肯定的評価語の使用+他の情報」、③「肯定的評価語の不使用」の三つに分類してある。なお、以下の表と図の中に記される「評価語」とは「肯定的評価語」の意味で用いられている。

表5-16古代における「ほめ」対象と「ほめ」の表現の使用状況

対象 \ 表現	① 評価語のみ使用		② 評価語+他の情報		③ 評価語の不使用	
	例数	%	例数	%	例数	%
① 所持物	1	4.00	1	4.76	1	33.33
② 外見	4	16.00	2	9.52	0	0
③ 能力	8	32.00	9	42.86	1	33.33
④ 性格・人柄	6	24.00	4	19.05	0	0
⑤ 行動・態度	3	12.00	3	14.29	1	33.33
⑥ 状態	3	12.00	2	9.52	0	0
合計	25	100.00	21	100.00	3	100.00

表5-16に示したように、古代では、「ほめ」の表現における「ほめ」対象の全体的な結果において、「評価語の使用」、つまり「評価語のみ使用」と「評価語+他の情報」を合わせたものは、①所持物8.76%、②外見25.52%、③能力74.86%、④性格・人柄43.05%、⑤行動・態度26.29%、⑥状態21.52%となり、「能力」において、評価語の使用率が圧倒的に高い。一方、「評価語の不使用」は、①所持物33.33%、②外見0%、③能力33.33%、④性格・人柄0%、⑤行動・態度33.33%、⑥状態0%となり、評価語の不使用は、「所持物」、「能力」、「行動・態度」においてほぼ同じような比率で現れたことがわかる。

表5-17中世における「ほめ」対象と「ほめ」の表現の使用状況

対象 \ 表現	① 評価語のみ使用		② 評価語+他の情報		③ 評価語の不使用	
	例数	%	例数	%	例数	%
① 所持物	1	4.55	2	10.53	0	0
② 外見	4	18.18	2	10.53	0	0
③ 能力	8	36.36	6	31.58	4	44.44
④ 性格・人柄	1	4.55	2	10.53	1	11.11
⑤ 行動・態度	7	31.82	7	36.84	3	33.33
⑥ 状態	1	4.55	0	0	1	11.11
合計	22	100.00	19	100.00	9	100.00

表5-17に示したように、中世では、ほめの表現における「ほめ」対象の全体的な結果において、「評価語の使用」、つまり「評価語のみ使用」と「評価語+他の情報」を合わせたものは、①所持物15.08%、②外見28.71%、③能力67.94%、④性格・人柄15.08%、⑤行動・態度68.66%、⑥状態4.55%となり、「能力」と「行動・態度」において、評価語の使用率が高いことがわかる。一方、「評価語の不使用」は、①所持物0%、②外見0%、③能力44.44%、④性格・人柄11.11%、⑤行動・態度33.33%、⑥状態11.11%となり、評価語の不使用は、「能力」、「性格・人柄」、「行動・態度」、「状態」に現れ、「能力」において「評価語の不使用」の割合が一番高いことがわかる。

表5-18近世における「ほめ」対象と「ほめ」の表現の使用状況

対象 \ 表現	① 評価語のみ使用		② 評価語+他の情報		③ 評価語の不使用	
	例数	%	例数	%	例数	%
① 所持物	6	10.91	2	10.53	7	29.17
② 外見	5	9.09	1	5.26	5	20.83
③ 能力	20	36.36	9	47.37	5	20.83
④ 性格・人柄	9	16.36	3	15.79	4	16.67
⑤ 行動・態度	11	20.00	2	10.53	0	0

⑥ 状態	4	7.27	2	10.53	3	12.50
合計	55	100.00	19	100.00	24	100.00

表5-18に示したように、近世では、ほめの表現における「ほめ」対象の全体的な結果において、「評価語の使用」、つまり「評価語のみ使用」と「評価語+他の情報」を合わせたものは、①所持物21.44%、②外見14.35%、③能力83.73%、④性格・人柄32.15%、⑤行動・態度30.53%、⑥状態17.80%となり、「能力」において、評価語の使用率が圧倒的に高い。一方、「評価語の不使用」は、①所持物29.17%、②外見20.83%、③能力20.83%、④性格・人柄16.67%、⑤行動・態度0%、⑥状態12.50%となり、評価語の不使用は、「行動・態度」以外の「ほめ」対象に現れ、「所持物」において「評価語の不使用」の割合が一番高いことがわかる。

表5-19近現代における「ほめ」対象と「ほめ」の表現の使用状況

対象 \ 表現	① 評価語のみ使用		② 評価語+他の情報		③ 評価語の不使用	
	例数	%	例数	%	例数	%
① 所持物	35	14.83	6	8.45	8	25.81
② 外見	32	13.56	8	11.27	3	9.68
③ 能力	70	29.66	27	38.03	5	16.13
④ 性格・人柄	39	16.53	8	11.27	4	12.90
⑤ 行動・態度	49	20.76	17	23.94	6	19.35
⑥ 状態	11	4.66	5	7.04	5	16.13
合計	236	100.00	71	100.00	31	100.00

表5-19に示したように、近現代では、ほめの表現における「ほめ」対象の全体的な結果において、「評価語の使用」、つまり「評価語のみ使用」と「評価語+他の情報」を合わせたものは、①所持物23.28%、②外見24.83%、③能力67.69%、④性格・人柄27.80%、⑤行動・態度44.70%、⑥状態11.70%となり、「能力」において、評価語の使用率が圧倒的に高い。一方、「評価語の不使用」は、①所持物25.81%、②外見9.68%、③能力

16.13%、④性格・人柄12.90%、⑤行動・態度19.35%、⑥状態16.13%となり、すべての「ほめ」対象に現れ、「所持物」において「評価語の不使用」の割合が一番高いことがわかる。

5.3.4 「ほめ」の対象に関する考察

本節では、「ほめ」の対象を取り上げ、作品の中でどのような対象に対してほめが行われているかを分析した。『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の用例に現れた古代から近現代まで「ほめ」の対象を、六つに分け、集計すると、ほめ手の性別に関わらず、「能力」について「ほめ」を行う場合が多いことがわかる。

「①所持物」については、金（2012）の現代語会話の分析の結果では、「所持物」へのほめの割合は1割前後であり、女性のほうが男性より「所持物」を多くほめている。ほめの対象と表現との関連では、「所持物」をほめる際は、9割以上で評価語を用いている。Holmes(1986、1988)は、「ほめ」の対象に対する分析を通して、男性同士において所持物をほめることはFTA（インポライトネスにおける根源的なフェイス侵害行為）になる恐れがあると指摘している。

これに対し、本稿の調査結果では、いずれの時代でも、「所持物」へのほめの割合が1割以上現れた。ほめの対象における男女差を見ると、古代と近世において、男性のほうが女性より「所持物」へのほめの頻度が高い。これは、金の研究の結論と一致しない点である。一方、中世と近現代においては、「所持物」へのほめ率は、女性が男性よりやや高かった。これは、金の研究結果と一致している。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、「所持物」をほめる場合、中世以外においては、「評価語の使用」の割合が2割前後であり、「評価語の不使用」の割合は3割前後となっており、「評価語の使用」が「評価語の不使用」の割合より低いことがわかる。この結果も、金の研究の結論と一致しない。

「②外見」については、Holmes(1986、1988)は、「ほめ」の対象に対する分析を通して、多くの女性は外見をほめる傾向があると指摘している。金（2012）の現代語会話の分析の結果では、女性のほうが男性より多く「外見」をほめることも明らかになった。「ほめ」の対象と表現との関連を見ると、すべて「評価語のみ使用」となっている。

これに対し、本稿の分析では、古代と中世においては、女性が男性より「外見」へのほめの頻度が高い。これは、Holmesと金の研究の結論と一致する。一方、近世と近現代においては、男性が女性より「外見」へのほめの頻度が高い。これは、Holmesと金の研究の結論と一致しない。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、「外見」をほめる場合、古代と中世はすべての用例が「評価語の使用」となるが、そのうちには「評価語のみ使用」のほかに、「評価語+他の情報」の使用も見られ、この点は、金の研究の結論と一致しない。一方、近世と近現代では、「評価語の使用」のほかに、「評価語の不使用」も現れており、これは金の研究の結論と一致しない。

「③能力」は、Holmes(1986、1988)は、「ほめ」の対象に対する分析を通して、能力に関しては、男性がよくほめるとしている。金(2012)の現代語会話の分析では、「能力」は「遂行」となっている。日本語では「遂行」、「行動」が最も高い頻度で現れ、「遂行」では「評価語のみ使用(6割)：評価語+他の情報(2割)：評価語の不使用(2割)」の割合であることを明らかにしている。

これに対し、本稿の調査結果では、全体として、「能力」は203例で、3割以上占めており、最も高い頻度で現れている。この点は、金の研究と一致している。男女差を見ると、古代と近現代において、男性が女性より「能力」へのほめの頻度が高い。これはHolmesの研究結果と一致している。一方、中世と近世においては、女性が男性より「能力」へのほめの頻度が高く、Holmesの結論とは異なっている。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、「能力」をほめる場合、いずれの時代においても、「評価語の使用」の頻度が「評価語の不使用」より高い。これは金の研究の結論と一致する。そして、中世以外においては、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より低く、これは、金の研究の結論と一致しない。

「④性格・人柄」については、金(2012)の現代語会話の分析の結果では、「性格」のほめは少ない。Holmesの研究結果では、「性格」については、男女共にあまりほめないという結論が出されている。

これに対し、本稿の調査結果では、全体として、「性格・人柄」(90例、13%)は割合が低いものの、「外見」(81例、12%)、「状態」(50例、7%)より例数が多い。これは金とHolmesの結論とは一致しない。男女差を見ると、中世以外において、女性のほうが男性より「性格・人柄」へのほめの頻度が高い。また、ほめの対象と表現との関

連を見ると、「性格・人柄」をほめる場合、すべての時代で「評価語の使用」の頻度が「評価語の不使用」より高い。そして、中世以外においては、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より高い。

「⑤行動・態度」については、大野（2010）の研究で、恒常的であれ一時的であれ、行動や作品といった実際の過程や達成等に価値を認めやすいという結論が出されている。金（2012）の現代語会話の分析の結果では、日本語では、「ほめ」の対象として、「遂行」、「行動」が最も高い頻度で現れている。男女差を見ると、男性のほうが「行動」をより多くほめている。また、日本語では、「行動」へのほめに評価語を多用している。古川（2013）の研究の結論でも、ほめる対象として、「行動」、「態度」が多いことが報告されている。

これに対し、本稿の調査結果では、全体として、「行動・態度」の例数は146例で、全体の約22%を占めており、「能力」の次に高い頻度で現れている。これは大野、金、古川の結論とほぼ一致している。男女差を見ると、古代以外において、男性が女性より「行動・態度」へのほめの頻度が高い。これは、金の研究結果とほぼ一致している。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、「行動・態度」をほめる場合、「評価語の使用」の頻度が「評価語の不使用」より高い。これは金の研究結果とほぼ一致している。そして、古代、中世以外において、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より低い。

「⑥状態」については、いずれの先行研究の文献にも、明確な結果が出されていないが、本稿の調査結果では、男女差を見ると、古代以外において、男性が女性より「状態」へのほめの頻度が高い。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、「状態」をほめる場合、中世以外において、「評価語の使用」の頻度が「評価語の不使用」より高い。一方、中世においては、「評価語の不使用」の頻度が「評価語の使用」より高い。そして、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より高い。

5.4 「ほめ」に対する返答

本節では、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の作品の中では「ほめ」の返答について分析する。

5.4.1 「ほめ」に対する返答の分類基準

横田（1985）、はほめられた状況を提示して、どのように返答するか質問紙（自由記述型）に記入してもらう方法で、本人と家族がほめられたときの返答スタイルに関する調査を日本語と英語でを実施し、その返答を肯定、回避、否定の三つに分類した。

寺尾（1996）は、テレビのトーク番組と日常会話を調査対象をとし、ほめ言葉への返答を「受け入れ」「打消し」「その他」に分類し、さらにこの三つを13種類に細分化している。具体的には以下のように分けている。

- A 受け入れ
 - (A) -1 賛同の発言
 - (A) -2 感謝・喜び
 - (A) -3 控えめな同意・微笑
 - (A) -4 ほめ返し
- B 打消し
 - (B) -1 不賛成の発言、しぐさ・自分に不利な情報の提示
 - (B) -2 的確さへの疑問（例「そうかなあ」）
 - (B) -3 意図への疑い（例「またまたお世辞言って」）
- C その他
 - (C) -1 シフト（他の人のおかげとする）
 - (C) -2 情報的コメント
 - (C) -3 無視・話を逸らす
 - (C) -4 会話の流れに沿って話が逸れる
 - (C) -5 ほめ言葉の内容の確認
 - (C) -6 冗談・おどけ・照れ

平田（1999）は、返答の仕方がどのように分類されるのか、ほめる側と受ける側の年齢

や両者の関係、性別により返答の仕方に差異が生じるのか、日本語教育現場にどのように応用できるのかを模索した。平田は、返答について、以下のように分類している。

- A 否定
 - (A) -1 打ち消す
 - (A) -2 打ち消す+ほめ返す
- B 肯定
 - (B) -1 同意する
 - (B) -2 感謝・喜びを表わす
- C その他
 - (C) -1 不利な情報を追加し、ほめを軽減する
 - (C) -2 そのまま会話を続行し、情報を追加する
 - (C) -3 疑問を投げかける
 - (C) -4 笑う

小池（2000）は日本文化におけるほめ言葉への返答に焦点を絞り、その副次文化的差異を探究した。小池は、横田と寺尾の研究を土台にして、各研究の下位分類を参考に、返答を否定的返答、肯定的返答、中立的返答に分けた。詳細は以下のとおりである。

- A 否定
 - (A) -1 否定、謙遜
 - (A) -2 怒る
- B 肯定
 - (B) -1 礼を言う
 - (B) -2 得意げに
 - (B) -3 肯定的説明
 - (B) -4 肯定的確認
 - (B) -5 照れる
 - (B) -6 ほめ返す
- C 中立
 - (C) -1 普通のことである
 - (C) -2 単に説明する
 - (C) -3 何も言わない
 - (C) -4 半信半疑

(C) -5 ほめへの疑問

(C) -6 そのほか

金 (2012) は、談話レベルで、日本語話者と韓国語話者の自然会話における「ほめに対する返答」を分析し、実際の会話で一つのほめに「肯定」・「否定」・「回避」のうちの一つだけではなくて、二つ以上の返答を使うことも考慮に入れて、「複合」の種類を加えた。詳細は以下のとおりである。

- A 肯定
 - (A) -1 受け入れ (喜び・感謝など)
 - (A) -2 同意 (賛同の発言、同意のほめなど)
 - (A) -3 自慢 (自画自賛、当然など)
- B 回避
 - (B) -1 肯定的 (情報・説明、第三者へのほめ、冗談、照れ・笑いなど)
 - (B) -2 中立的 (ほめ内容の確認)
 - (B) -3 否定的 (無応答、話が逸れる、話を逸らすなど)
- C 否定
 - (C) -1 積極的 (不賛成の発言など)
 - (C) -2 消極的 (控えめな不同意など)
- D 複合
 - (D) -1 無変化 (肯定→肯定、回避→回避、否定→否定)
 - (D) -2 肯定方向への変化 (回避→肯定、否定→肯定、否定→回避)
 - (D) -3 否定方向への変化 (肯定→回避、肯定→否定、回避→否定)
 - (D) -4 その他 (回避→肯定→回避、否定→肯定→否定)

これまでの先行研究には、三つのスタイルに分けて研究してきたものが多い。本稿も大区分として、横田 (1985) の分類を借り、「ほめ」表現に対する返答を「肯定的返答」、「否定的返答」、と「回避的返答」の三つに分類することにする。本稿で設定する「ほめ」の返答とその定義は以下のようなものである。

A 肯定的返答：ほめの内容を肯定し、ほめを直接的に受け入れている返答。

(例：ありがとう・うん・はい・ええ・そうなど)

B 否定的返答：ほめの内容を受け入れない返答。

(例：そんなことない・いえいえ・本当ですか・僕は別になど)

C 回避的返答：ほめの内容を肯定するか否定するかは表現しないで、ほめを直接的には受け入れていない返答。

(例：返事をしない・照れ・笑い・話を逸らすなど)

分析対象としたものは、収集した 731 例のうち、「ほめ」に対する返答の内容が文脈から確実に判断できる 62 例である。

5.4.2 資料に現れた「ほめ」に対する返答

まず、A「肯定的返答」、B「否定的返答」、C「回避的返答」の三つに分けて、「ほめ」の返答の例を挙げる。

A「肯定的返答」

① 『新編日本古典文学全集』からの用例

かかるところに、左馬頭の敗軍の中より、大高左馬助重政、遙かにこれを見て馬を馳せ寄せ、弓手にゆらりと下り立つて、「あな侈しの只今の御翔候ふや。昔の和泉・朝夷もこれにはよも勝り候はじ」と、覲面に誉め奉つて、「早この馬に召され候へ」と申しければ、左馬頭放ち打跨に飛び乗つて、鞍壺に直り様に、「平家重衡の侍に後藤兵衛が主の馬に乗つて逃げたりけんには替りたる御翔かな。今こ。今こそ誠に大高の名は相応して候へ」と、互いに誉めぞ返されける。

[現代語訳]

そうこうしているうちに、左馬頭の敗軍の兵の中から、大高左馬助重政が、はるか遠くから左馬頭の様子を見て、馬を駆って近づき、左側にゆらりと下りたつて、「ああ何というご立派な、ただ今のおふるまいでございましょう。昔の和泉小太郎・朝比奈三郎も、これ以上ではけっしてありますまい」と、面と向って褒め申しあげ、「早くこの馬にお乗りください」と申した。そこで左馬頭は、ぱっとまたが

るように飛び乗って、鞍壺に座り直りながら、「平家の重衡の家来であった後藤兵衛が、主君の馬に乗って逃げてしまったのとは、打って変ったおふるまいだなあ。今のふるまいこそ、まさに大高という名にふさわしいものだ」と、互いに褒め返しなされたのである。

作者未詳「太平記」

(太平記 卷第三十九(扉) 鎌倉基氏と宇都宮と合戦の事 P.381)

南北朝時代(1368～75年ごろ成立)

②『青空文庫』からの用例

諭吉は、大阪の適塾で、医学や物理の本をみたことはありますが、まだ築城書をみたことはありません。それに、ペリーがきてからは、日本国じゅうで、海のみもりや、陸の城づくりの話で大さわぎをしているときでしたから、諭吉は、いっそうこの本をよんでみたくなりました。しかし、かせといったところで、かしてくるはずはありません。でも、うまくおだてたら、ひよっとしたら、という考えがうかんだので、「いや、これは、まったくすばらしい本です。それを二十三両でお買いになったなんて、ほんとうにほりだしものです。オランダ語の勉強がうんとすすまれたから、こういうほりだしものをみつけられたんですね、きっと。わたしなどには、一年や二年でよみとおせるものではございません。けれども、せめて、絵図ともくじだけでも、一とおりはいけんしたいものですが、いかがでしょう、四、五日、かしていただけませんか。」 おもいきって、こう、きいてみました。すると、壱岐は、ほめられたのが、よほどうれしかったとみえて、「ああ、いいとも。四、五日でよいなら、もっていきなさい。」といいました。よろこんだ諭吉は、壱岐の気持ちがかかわらぬうちにと、原書をだいじにかかえて、いそいで家にかえってきました。

高山毅「福沢諭吉 ペンは剣よりも強し」

1981(昭和56)年11月19日

『新編日本古典文学全集』の用例は、大高左馬助重政が左馬頭の振る舞いをほめ、左馬頭がそれに対してほめ返す場面である。一方、『青空文庫』の用例は、諭吉は壱岐が

持っている本の内容をほめ、壱岐がそのほめに同意し、諭吉が本を借りられた場面である。

B「否定的返答」

①『新編日本古典文学全集』からの用例

さがなく、事がましきも、しばしはなまむつかしう、わづらはしきやうに憚らることあれど、それにしも従ひはつまじきわざなれば、事の乱れ出で来ぬる後、我も人も憎げにあきたしや。なほ南の殿の御心用ゐこそ、さまざまにありがたう、さてはこの御方の御心などこそは、めでたきものには見たてまつりはてはべりぬれ」など、ほめきこえたまへば、笑ひたまひて、花散里「ものの例に引き出でたまふほどに、身の人わろきおぼえこそあらはれぬべう。さてをかしきことは、院の、みづからの御癖をば人知らぬやうに、いささかあだあだしき御心づかひをば大事と思ひて、戒め申したまふ、後言にも聞こえたまふめるこそ、さかしだつ人の己が上知らぬやうにおぼえはべれ」とのたまへば。

[現代語訳]

口やかましくて事を荒だてがちなもの、しばらくの間は何やらうるさく面倒なものですから、つい遠慮されるものですが、いつまでも言いなりになっているわけにもいかないことです。何か一悶着でも起るとなると、こちら相手もお互いに憎らしく、愛想も尽きるものです。やはり南の御殿の紫の上のお心づかいこそ何かにつけてまたとなくご立派ですし、それからまたこちら様のお心がけが、つくづくおみごとなものと拝見しております」などとおほめ申されるので、上は苦笑なさって、「なんぞ引合いにしてくださっては、この私の体裁のわるい評判が表に出てしまいます。それはともかく、おもしろいことには、院がご自分のお癖をどなたも知らないかのように棚上げなさって、ほんの少しばかりあなたに浮気めいたおふるまいがみえると、大騒ぎなさって、ご意見を申されたり、陰口にも申されるようですが、とかく賢ぶる人が自分のこととなると何も分らないものだという気がいたします」とおっしゃるので。

紫式部「夕霧（源氏物語）」

(夕霧 (扉) 「夕霧」 卷名・梗概 [二九] 夕霧六条院にいたり、花散里・源
氏と対面 P. 470)

平安時代 (1001～10年ごろ成立)

②『青空文庫』からの用例

七千メートルの高空！いまや偵察機は、怪塔ロケットにおいつきそうです。霧は
もちろんのこと、雲もなくなりました。ひろびろとした空です。地球はどこかへ
いってしまいました。下には蒲団の綿のような密雲が、どこまでもひろがってい
ます。

「おい青江。貴様、とうとうがんばったな。えらいぞ」と、兵曹長がはじめてち
よっとほめた。

「ま、まだであります」青江三空曹は、どなりかえしました。

海野十三「怪塔王」

1938 (昭和 13) 年

『新編日本古典文学全集』の用例は、夕霧のほめに対して、花散里がその内容を直接
に否定する場面である。一方、『青空文庫』の用例は、兵曹長のほめに対して、青江三
空曹が謙遜して否定する場面である。

C「回避的返答」

①『新編日本古典文学全集』からの用例

この三尊、あるいは僧形に現じ、あるいは俗体に変じて、大師を礼し奉りて、「十
方大菩薩、愍衆故行道、応生恭敬心、是則我大師」と讃め玉ふ。大師大きに礼敬し
玉ひて、「願はくはその御名を聞かん」と問ひ玉ふに、三尊答へて曰く、「豎の三
点に横の一点を加へ、横の三点に豎の一点を添ふ。我内には円宗の教法を守り、外
には済度の方便を助けんために、この山に来たれり』と答へ玉ふ。

[現代語訳]

この三尊は僧の形で現れたり、俗人の姿に身を変えたりして大師を礼拝なさって、

『求法者たちは世の人々を憐れんで十方に世間を遊行する。これらすべての人は私の先生であると、賢者は敬う心をもって師事すべきである』と、たたえられたのです。大師は三尊を大いに敬われ、『お名前を聞かせてください』と尋ねると、三尊は、『縦の三点に横の一点を加え、横の三点に縦の一点を足す。私は心には天台の教法を守り、外に対しては人々を救う手助けになろうと、この山に来たのです』とお答えになりました。

作者未詳「太平記」

(太平記 卷第十八(扉) 比叡山開闢の事 P.484)

南北朝時代(1368～75年ごろ成立)

②『青空文庫』からの用例

「ああ、そうですか。ぼく、先生の助手の小林っていうんです。」帽子をとって、おじぎをしますと、辻野氏はいっそうにこやかな顔になって、「ああ、きみの名は聞いていますよ。じつは、いつか新聞に出た写真で、きみの顔を見おぼえていたものだから、こうして声をかけたのですよ。二十面相との一騎うちはみごとでしたねえ。きみの人気はたいしたものですよ。わたしのうちの子どもたちも大の小林ファンです。ハハハ……。」と、しきりにほめたててののです。小林君は少しはずかしくなって、パッと顔を赤くしないではいられませんでした。

「二十面相といえば、修善寺では明智さんの名まえをかたったりして、ずいぶん思いきったまねをするね。それに、けさの新聞では、いよいよ国立博物館をおそうのだからというじゃないか。じつに警察をばかにしきった、あきれた態度だ。けっしてうちやっちはおけませんよ。あいつをたたきつぶすためだけでも、明智さんが帰ってこられるのを、ぼくは待ちかねていたんだ。」

「ええ、ぼくもそうなんです。ぼく、いっしょうけんめいやってみましたけれど、とても、ぼくの力にはおよばないのです。先生にかたき討うちをしてほしいと思って、待ちかねていたんです。」

「きみが持っている新聞は、けさの？」

「ええ、そうです。博物館をおそうっていう予告状ののっている新聞です。」

小林君はそういいながら、その記事ののっている個所をひろげて見せました。

『新編日本古典文学全集』の用例は、三尊のほめに対して、大師がその内容を直接に表現しないで、話を逸らす場面である。一方、『青空文庫』の用例は、辻野氏のほめに対して、小林君が明確的に返事しなく、照れる表情だけを表す場面である。

5.4.3 「ほめ」に対する返答の分類結果

まず、分析対象の用例に現れたすべての「ほめ」を上記の三つに分け、時代別に分類すると表5-20のようになる。

表5-20 用例における「ほめ」の返答

	古代		中世		近世		近現代		合計
	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%	
A 肯定的返答	2	33.33	0	0.00	6	50.00	14	33.33	22
B 否定的返答	3	50.00	2	100.00	5	41.67	22	52.38	32
C 回避的返答	1	16.67	0	0.00	1	8.33	6	14.29	8
合計	6	100.00	2	100.00	12	100.00	42	100.00	62

表5-20に示したように、「A肯定的返答」は、古代では全体の33.33%（2例）、中世では当該用例なし、近世では全体の50%（6例）、近現代では全体の33.33%（14例）である。次に、「B否定的返答」は、古代では全体の50%（3例）、中世では全体の100%（2例）、近世では全体の41.67%（5例）、近現代では全体の52.38%（22例）である、また、「C回避的返答」は、古代では全体の16.67%（1例）、中世では当該用例なし、近世では全体の8.33%（1例）、近現代では全体の14.29%（6例）である。

いずれも用例数が少なく、特に中世においては、返答の現れた例は合計で2例しかなく、確かなことは言いにくいだが、各時代を合わせると、「A肯定的返答」35.48%（22

例)、「B否定的返答」51.61% (32例) 「C回避的返答」12.91% (8例) となり、「B否定的返答」の使用が、ほめに対する返答として、時代を超越した一つの典型的なパターンだということは言えそうである。一方、「C回避的返答」は、どの時代でもあまり現れておらず、あるいは、これは文学作品には現れにくいのかかもしれない。

また、各時代のうち、古代から近世までについては、当該用例の数が極めて少なく、更なる調査によって収集する必要があると思われるが、今回の研究では筆者が収集した限られた用例を基に分析していることをお断りしておく。以下、近現代の用例のみを用いて分析する。

近現代における「ほめ」の返答と「ほめ」の人間関係にはいかなる関連があるのかを分析してみよう。「ほめ」人間関係は、5.2で分析したように、①上下、②対等、③下上の三つに分類してある。

表5-21 近現代における「ほめ」返答と「ほめ」の人間関係の使用状況

対象 \ 表現	① 上下		② 対等		③ 下上	
	例数	%	例数	%	例数	%
A肯定的返答	9	29.03	3	37.50	2	100.00
B否定的返答	17	54.84	5	62.50	0	0.00
C回避的返答	5	16.13	0	0.00	0	0.00
合計	31	100.00	8	100.00	2	100.00

表5-21からわかるように、近現代の用例では、上下「ほめ」については、31例のうち、肯定的返答が29.03% (9例)、否定的返答が54.84% (17例)、回避的返答が16.13% (5例) (表5-20では6例となっているが、これは人間関係が不明の1例を含んでいる) であることから、近現代においては、上からの「ほめ」に対しては、それを肯定するより、謙遜して否定するケースが一番多いと言える。

対等「ほめ」については、8例のうち、肯定的返答が37.50% (3例)、否定的返答が62.50% (5例)、回避的返答が用例なしであることから、これも、否定的返答が多いと言える。

また、下上「ほめ」については、用例が2回しかなく、何も確かなことは言えない。

次に、近現代における「ほめ」の返答と「ほめ」表現にはいかなる関連があるのかを分析してみよう。「ほめ」表現は、5.1で分析したように、①「肯定的評価語のみ使用」、②「肯定的評価語の使用+他の情報」、③「肯定的評価語の不使用」の三つに分類してある。なお、以下の表の中に記される「評価語」とは「肯定的評価語」の意味で用いられている。

表5-22 近現代における「ほめ」返答と「ほめ」の表現の使用状況

対象 \ 表現	① 評価語のみ使用		② 評価語+他の情報		③ 評価語の不使用	
	例数	%	例数	%	例数	%
A 肯定的返答	10	43.48	2	14.29	2	40.00
B 否定的返答	10	43.48	10	71.42	2	40.00
C 回避的返答	3	13.04	2	14.29	1	20.00
合計	23	100.00	14	100.00	5	100.00

表5-22からわかるように、近現代の用例では、「①肯定的評価語のみ使用」については、肯定的返答（43.48%）と否定的返答（43.48%）が同じ割合で、回避的返答（13.04%）は少ない。「②肯定的評価語の使用+他の情報」については、否定的返答（71.42%）の割合が圧倒的に高く、肯定的返答（14.29%）と回避的返答（14.29%）は少ない。また、「③肯定的評価語の不使用」については、肯定的返答（40.00%）と否定的返答（40.00%）が同じ割合で、回避的返答（20.00%）は少ない。

5.4.4 「ほめ」に対する返答に関する考察

本節では、「ほめ」の返答を取り上げ、文学作品の中ではどのような返答を用いてほめが行われるかを分析した。『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の用例に現れる古代から近現代まで「ほめ」の返答を、三つの形式に分け、集計すると、ほめ手の社会地位に関わらず、「否定的返答」を用いることで「ほめ」への返答を行う場合

が多いが、これは、金（2012）の現代語会話の分析の結果や大野（2010）の研究の結論とは一致しない。

以下、近現代における「ほめ」の返答に関する考察を中心に述べる。

時代別に見ると、全体として、「B 否定的返答」が最も多く（「A 肯定的返答」より多く）現れている。近現代に限っても、用例の少ない下上「ほめ」はさておき、上下「ほめ」と対等「ほめ」に対する返答（下から上への返答、または、対等の間における返答）においては、「B 否定的返答」が最も多く現れている。これについて、寺尾（1996）は、直接的な打ち消しの返答は典型的スタイルではないことと指摘しているが、これは、本稿の調査結果と一致しない。なお、近現代の作品に現れた「B 否定的返答」と「A 肯定的返答」における表現については、「評価語の使用」が「評価語の不使用」より多く、また、「評価語+他の情報」より「評価語のみ使用」のほうが多くなっている。

一方、「C 回避的返答」については、いずれの時代においても用例が少ないが、近現代に限っていえば、「C 回避的返答」である 5 例すべてが上下「ほめ」に対する返答（下から上への返答）になっている。大野（2010）は、目上に対する応答型は、回避型が多かったと指摘しているが、これは、本稿の近現代の調査結果とやや一致している。なお、「C 回避的返答」における表現については、用例が少ないため、確かなことは言えない。

第6章 結論

6.1 調査結果・分析・考察のまとめ

前章において、「ほめ」の表現形式、人間関係、対象、返答の四つの面から分析・考察した「ほめ」の用例について、まず、時代別（古代、中世、近世、近現代）にその結果をまとめる。

古代

「ほめ」の表現

- 「①肯定的評価語のみ使用」については、男性が女性より割合が高い。
- 「②肯定的評価語の使用+他の情報」については、女性が男性より割合が高い。
- 「③肯定的評価語の不使用」については、用例が少なく、古い時代は評価語を使用しないものは、「ほめ」とは認められていなかったとも考えられる。

「ほめ」の人間関係

- ①上下「ほめ」については、男性がほめることがやや多く、女性がほめられることがやや多い。
- ②対等「ほめ」については、男女に差が見られない。
- ③下上「ほめ」については、女性がほめることが多く、男性がほめられることが多い。

「ほめ」の対象

- 「ほめ」の対象で多いのは、「能力」である。
- ①「所持物」については、男性のほうが女性よりほめ手になる割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の不使用」の割合が「評価語の使用」より高い。
 - ②「外見」については、女性のほうが男性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、すべての用例が「評価語の使用」であるが、そのうちには「評価語のみ使用」のほかに、「評価語+他の情報」の使用も見られる。
 - ③「能力」については、男性のほうが女性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現

との関連を見ると、「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。また、「評価語+他の情報」の割合が「評価語のみ使用」より高い。

④「性格・人柄」については、女性のほうが男性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。そして、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より高い。

⑤「行動・態度」については、男性のほうが女性よりほめの割合が低い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の不使用」の割合が「評価語の使用」より高い。そして、「評価語+他の情報」の割合が「評価語のみ使用」より高い。

⑥「状態」については、女性のほうが男性よりほめの割合が高い。

「ほめ」の返答

「C否定的返答」が、最も多く用いられている。

中世

「ほめ」の表現

「①肯定的評価語のみ使用」については、男性が女性より割合が高い。

「②肯定的評価語の使用+他の情報」については、女性が男性より割合が高い。

「③肯定的評価語の不使用」については、用例が少なく、古い時代は評価語を使用しないものは、「ほめ」とは認められていなかったとも考えられる。

「ほめ」の人間関係

①上下「ほめ」については、男性がほめることがやや多く、女性がほめられることがやや多い。また、同性間の「ほめ」がやや多い。

②対等「ほめ」については、全部で1回しか用例がなく、確かなことは何もいえない。

③下上「ほめ」については、男女に差がほとんど見られない。

「ほめ」の対象

「ほめ」の対象で多いのは、「行動・態度」である。

①「所持物」については、女性のほうが男性よりほめ手になる割合が高い。また、ほ

めの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」が「評価語の不使用」の割合より高い。

②「外見」については、女性のほうが男性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、すべての用例が「評価語の使用」であるが、そのうちには「評価語のみ使用」のほかに、「評価語+他の情報」の使用も見られる。

③「能力」については、女性のほうが男性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。

④「性格・人柄」については、男性のほうが女性よりへのほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。そのうち、「評価語+他の情報」の割合が「評価語のみ使用」より高い。

⑤「行動・態度」については、男性のほうが女性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。そのうち、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より低い。

⑥「状態」については、男性のほうが女性よりほめの割合が高い。

「ほめ」の返答

「B否定的返答」が、多く用いられている。

近世

「ほめ」の表現

「①肯定的評価語のみ使用」については、女性が男性より若干割合が高い。

「②肯定的評価語の使用+他の情報」については、女性が男性より割合が高い。

「③肯定的評価語の不使用」については、用例が少なく、古い時代は評価語を使用しないものは、「ほめ」とは認められていなかったとも考えられる。

「ほめ」の人間関係

①上下「ほめ」については、男性がほめることがやや多く、女性がほめられることがやや多い。

②対等「ほめ」については、男性がほめることが多く、女性がほめられることが多い。

③下上「ほめ」については、男女に差がほとんど見られない。

「ほめ」の対象

「ほめ」の対象で多いのは、「能力」である。

①「所持物」については、男性のほうが女性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」が「評価語の不使用」の割合より低い。

②「外見」については、男性のほうが女性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」のほかに、「評価語の不使用」も現れている。

③「能力」については、女性のほうが男性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」の頻度が「評価語の不使用」より高い。そのうち、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より低い。

④「性格・人柄」については、女性のほうが男性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。そのうち、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より高い。

⑤「行動・態度」については、男性のほうが女性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。そのうち、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より高い。

⑥「状態」については、男性のほうが女性よりほめの割合が高い。

「ほめ」の返答

「A肯定的返答」が、最も多く用いられている。

近現代

「ほめ」の表現

「①肯定的評価語のみ使用」については、女性が男性より若干割合が高い。

「②肯定的評価語の使用+他の情報」については、男性が女性より割合が高い。

「③肯定的評価語の不使用」については、女性が男性より割合が高い。

「ほめ」の人間関係

①上下「ほめ」については、男性がほめる割合が高い。また、同性間の「ほめ」がやや多い。

②対等「ほめ」については、男性がほめることが多く、女性がほめられることが多い。

③下上「ほめ」については、女性がほめることが多く、男性がほめられることが多い。また、同性間の「ほめ」がやや多い。

「ほめ」の対象

「ほめ」の対象で多いのは、「能力」である。

①「所持物」については、女性のほうが男性よりほめの割合がやや高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」が「評価語の不使用」の割合より低い。

②「外見」については、男性のほうが女性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」のほかに、「評価語の不使用」も現れている。

③「能力」については、男性のほうが女性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。そのうち、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より低い。

④「性格・人柄」については、女性のほうが男性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。そのうち、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より高い。

⑤「行動・態度」については、男性のほうが女性よりほめの割合が高い。ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。そのうち、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より低い。

⑥「状態」については、男性のほうが女性よりほめの割合が高い。

「ほめ」の返答

時代別に見ると、全体として、「B 否定的返答」が最も多く（「A 肯定的返答」より多く）現れている。近現代に限っても、用例の少ない下上「ほめ」はさておき、上下「ほめ」と対等「ほめ」に対する返答（下から上への返答、または、対等の間における返答）においては、「B 否定的返答」が最も多く現れている。なお、近現代の作品に現れた「B 否定的返答」と「A 肯定的返答」における表現については、「評価語の使

用」が「評価語の不使用」より多く、また、「評価語+他の情報」より「評価語のみ使用」のほうが多くなっている。

一方、「C 回避的返答」については、いずれの時代においても用例が少ないが、近現代に限っていえば、「C 回避的返答」である 5 例すべてが上下「ほめ」に対する返答（下から上への返答）になっている。「C 回避的返答」における表現については、用例が少ないため、確かなことは言えない。

6.2 「ほめ」に関する結論

日本語における「ほめ」の表現形式、人間関係、対象、返答について、結論を述べる。

「ほめ」の表現

「肯定的評価語」を用いることで「ほめ」を行う場合が多い。

時代別、男女別に見ると、「肯定的評価語のみ使用」については、古代と中世においては、男性が女性より割合が高く、近世と近現代においては、女性が男性より割合が若干高い。

また、「肯定的評価語の使用+他の情報」については、古代、中世、近世においては、女性が男性より割合が高く、近現代においては、男性が女性より割合が高い。

そして、「肯定的評価語の不使用」については、古代、中世、近世ともに用例が少なく、古い時代は評価語を使用しないものは、「ほめ」とは認められていなかったとも考えられる。ただし、わずかではあるが、各時代の用例に、肯定的評価語を使用せず、間接的・暗示的にほめる表現が様々な形で現れている。近現代においては、女性が男性より割合が高い。

「ほめ」の人間関係

上下「ほめ」が行われる場合が多いが、下上「ほめ」も多く見られる。対等「ほめ」は、上下「ほめ」、下上「ほめ」と比べると、使用が少ない。

時代別に見ると、上下「ほめ」については、古代から近現代まで、男性がほめることがやや多く、女性がほめられることがやや多い。また、中世と近現代においては、同性

間の「ほめ」がやや多い。

対等「ほめ」については、古代においては、男女に差が見られないが、中世においては、用例が1例しかなく、確かなことは何も言えない。近世、近現代においては、男性がほめることが多く、女性がほめられることが多い。

下上「ほめ」については、古代と近現代では、女性がほめることが多く、男性がほめられることが多い。一方、中世と近世では、男女に差がほとんど見られない。また、近現代では、同性間の「ほめ」がやや多い。

「ほめ」の対象

ほめ手の性別に関わらず、「能力」について「ほめ」を行う場合が多い。

「①所持物」については、いずれの時代でも、「③」、「⑤」に次いで高い割合で現れた。ほめの対象における男女差を見ると、古代と近世において、男性のほうが女性より「所持物」へのほめ手になる割合が高い。一方、中世と近現代においては、女性のほうが男性よりやや高い。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、中世以外においては、「評価語の不使用」が「評価語の使用」の割合より高い。

「②外見」については、古代と中世においては、女性のほうが男性よりほめ手になる割合が高い。一方、近世と近現代においては、男性のほうが女性よりほめの割合が高い。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、古代と中世はすべての用例が「評価語の使用」となるが、そのうちには「評価語のみ使用」のほかに、「評価語+他の情報」の使用も見られる。一方、近世と近現代では、「評価語の使用」のほかに、「評価語の不使用」も現れている。

「③能力」は、全体として、最も高い割合で現れている。男女差を見ると、古代と近現代においては、男性のほうが女性よりほめ手になる割合が高い。一方、中世と近世においては、女性のほうが男性よりほめの割合が高い。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、いずれの時代においても、「評価語の使用」の頻度が「評価語の不使用」より高い。そして、古代以外においては、「評価語+他の情報」の割合が「評価語のみ使用」より高い。

「④性格・人柄」については、全体として、割合が低いものの、「外見」、「状態」より例数が多い。男女差を見ると、中世以外において、女性のほうが男性よりほめ手に

なる割合が高い。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、すべての時代で「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。そして、中世以外においては、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より高い。

「⑤行動・態度」については、全体として、「能力」の次に高い割合で現れている。男女差を見ると、古代以外において、男性のほうが女性よりほめ手になる割合が高い。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。そして、近世、近現代以外において、「評価語+他の情報」の割合が「評価語のみ使用」より高い。

「⑥状態」については、男女差を見ると、古代以外において、男性のほうが女性よりほめ手になる割合が高い。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、古代、近世と近現代において、「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。一方、中世と近現代においては、「評価語の不使用」の割合が「評価語の使用」より高い。そして、古代と中世では、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より高い。一方、近世と近現代においては、「評価語+他の情報」の割合が「評価語のみ使用」より高い。

以上から、次のことがいえる。「外見」、「能力」、「性格・人柄」、「行動・態度」、「状態」については、「評価語の使用」が多いが、「所持物」については、「評価語の不使用」が多い。また、「行動・態度」、「状態」については、特に近現代において、「評価語+他の情報」の使用が多い。

「ほめ」の返答

ほめ手の社会地位に関わらず、「B否定的返答」を用いることで「ほめ」を行う場合が多い。一方、「C回避的返答」はどの時代でも少ない。

6.3 今後の課題

本稿では、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の作品から抽出した731件の「ほめ」用例を分析し、「ほめ」表現の通時性を考察した。その結果、従来の先行研究で述べられていることを検証できただけでなく、若干新たな発見もできたと思う。ただし、用例の収集に不足があった恐れもある。

「ほめ」の用例を収集するにあたっては、どのような場合を「ほめ」とするかに関して、調査者の恣意的な判断になる恐れがあり、それを避けるために、本稿では、「ほめ」、「とほめ」、「褒め」、「と褒め」、「誉め」、「と誉め」などの明確的な表現形を用いて、「ほめ」の用例を抽出した。しかし、この方法で抽出した用例は、「ほめ」の用例の小部分に過ぎない可能性があり、あるいは、「ほめ」の返答の用例が少なく、「ほめ」の返答の特徴を全体的に捉えにくいということなどは、ここに起因するのかもしれない。今後、別の方法でも用例を収集し、今回得た論点を再検討していきたい。

また、日本語以外の言語における「ほめ」の表現、例えば中国語の「ほめ」の表現には日本語とどのような違いがあるのか、などということも、今後の「ほめ」研究の課題の一つとしていきたい。

注

1. 小泉（2001）によれば、「言語行為」は「発話行為」とも言われる。
2. これは、伍（2006）からの翻訳である（原文は中国語）。
3. この段落は、叶（2014）が述べていることをまとめたものである。
4. Manes, J. (1983:pp.96-102)

辞書

『日本国語大辞典』（2001）第二版 小学館
『広辞苑』（2008）第六版 岩波書店
『大辞林』（2006）第三版 三省堂
『大辞泉』（2012）第二版 小学館
『新明解国語辞典』（2011）第七版 三省堂
『明鏡国語辞典』（2010）第二版 大修館書店

参考文献

<英語>

- Austin, J. L. (1962) *How to Things with Words*. Oxford University Press.
(坂本百大訳 (1978) 『言語と行為』 大修館書店)
- Barnlund, D., & Araki, S. (1985). Intercultural encounters: The management of compliments by Japanese and Americans. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 1, 9-26.
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness-Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Goffman, E. (1967) *Interaction Ritual Essays in Face-to-face Behavior*. ALDINE Publishing Company. (広瀬英彦・安江孝司訳 (1986) 『儀礼としての相互行為』 法政大学出版局pp. 92)

- Herbert, (1989) R.K. *Ethnography of English Compliments and Compliment Responses: a Contrastive Sketch* in W. Oleksy (ed). *Contrastive Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins,
- Holmes, J. (1985). *Women, Men, and Politeness*. London: Longman
- Holmes, J. (1986). Compliments and Compliment Responses in New Zealand English. *Anthropological Linguistics*, 28(4) . 485-508
- Holmes, J. (1988). Paying Compliments: A Sex-preferential Politeness Strategy. *Journal of Pragmatics*. 12:445-465
- Manes, J. (1983) Compliment: a Mirror of Cultural Values. In N. Wolfson & E. Judd (Eds.), *Sociolinguistics and language acquisition*. Newbury House.
- Mizutani, O. and N. Mizutani (1984) *Nihongo Notes*(6): Situational Japanese 1. The Japan Times. Tokyo.
- Searle, J. R. (1969) *Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (坂本百大・土屋俊訳 (1986) 『言語行為：言語哲学への試論』 勁草書房)
- Searle, J. R. (1979) *Expression and Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wolfson, N. (1983) An Empirically Based Analysis of Complimenting in American English. In N. wolfson & E. Judd (Eds.), *Sociolinguistics and Language acquisition*. MA: Newbury House, 82-95

<日本語>

- 字佐美まゆみ・坂本俊生・滝浦真人・橋元良明(2001) 「ポライトネスのためのキーワード集」 『月刊言語』 第30巻第12号(特集〈敬意〉はどこから来るか)、大修館書店 pp. 68-72
- 大野敬代(2002) 「politeness ストラテジーとしての「ほめ」とその後続要素について」 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』 第9号 早稲田大学大学院教育学研究科
- 大野敬代(2003) 「人間関係からみた『ほめ』とその工夫について—シナリオにおけ

- る『働きかけ表現』として」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』第10号
—2 早稲田大学大学院教育学研究科 pp. 337-346
- 大野敬代 (2007) 「「ほめ意図表現」の枠組みと機能」『早稲田日本語研究』16 早稲
田大学日本語学会 pp. 109-120
- 大野敬代 (2010) 日本語談話における「働きかけ」と「わきまえ」の研究: 目上に対す
る「ほめ」と「謙遜」の分析を中心に 早稲田大学大学院教育学研究科博士論文
- 岡本真一郎 (2007) 『ことばのコミュニケーション-対人関係のレトリック』ナカニシヤ
- 川口義一・蒲谷宏・坂本恵 (1996) 「待遇表現としてのほめ」『日本語学』15-5 明
治書院 pp. 13-22
- 金庚芬 (2005). 会話に見られる「ほめ」の対象に関する日韓対照研究 日本語教育 124
pp. 13-22
- 金庚芬 (2012) 『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』ひつじ書房
- 熊取谷哲夫 (1989) 「日本語における誉めの表現形式と談話構造」『言語習得及び異
文化適応の理論的、実践的研究 (2)』広島大学教育学部日本語教育学科 pp. 97-108
- 小池浩子 (2000) 「「ほめ」への返答に関する副次文化的比較: 対人関係別, 性別, 世代間」
『信州大学教育学部紀要』100 pp. 47-55
- 小泉保 (2001) 『入門 語用論研究—理論と応用』研究社
- 小玉安恵 (1993) 「ほめ言葉にみる日米の社会文化的価値観-外見のトピックを中心に」
『言語文化と日本語教育』第6号 お茶の水女子大学 pp. 22-35
- 伍鉄平 (2006) 『普通語学概要』高等教育出版社
- 笹川洋子 (1999) 『アジア社会における依頼のポライトネス』「親和国文」33号
pp. 154-181
- 瀬田幸人・木田祥恵 (2008) 「積極的ポライトネスにおける「ほめる」行為—ジェンダ
ーの視点から」『岡山大学教育学部研究収録』第137号 pp. 103-104
- 寺尾留美 (1996) 「ほめことばへの返答スタイル」『日本語学』第5号 明治書院
pp. 81-88
- 野元菊雄 (1996) 「ほめるという言語行動」『日本語学』15-5 明治書院
- 平田真美 (1999) 「ほめ言葉への返答」『横浜国立大学留学生センター紀要』第6
号 pp. 38-47

- 古川由里子（2003）「書き言葉データにおける＜対者ほめ＞の特徴—対人関係から見た「ほめ」の分析」『日本語教育』117 日本語教育学会 pp. 33-42
- 古川由里子（2010）「「ほめ」が皮肉や嫌みになる場合」『日本語・日本文化』36 大阪大学日本語日本文化教育センター pp. 45-57
- 丸山明代（1996）「男と女とほめ—大学キャンパスにおけるほめ行動の社会言語学的分析—」『日本語学』15-5 明治書院 pp. 68-80
- 守屋三千代・姫野伴子・新屋映子・陳淑梅（2003～2004）「配慮表現からみた日本語」『月刊日本語』2003年4月号～2004年3月号 アルク
- 山路奈保子（2005）「日本語の談話における「ほめ」の機能」『韓日言語文化研究』5号
- 叶永会（2014）「先行研究における「ほめ」の扱いについて」『言語と文明』12巻 麗澤大学大学院言語教育研究科 pp. 161-167
- 吉成祐子（2008）「間接的なく申し出>表現に関する語用論的研究」神戸大学文化学研究科博士論文
- 横田淳子（1985）「ほめられた時の返答における母国語からの社会言語学的転移」『日本語教育』58 日本語教育学会 pp. 203-223

謝 辞

本論文は筆者が拓殖大学大学院言語教育研究科言語教育学専攻博士後期課程に在籍中の研究成果をまとめたものです。本研究を遂行するにあたり、多くの方々にお世話になり、ここに深く感謝の意を表します。

指導教授である阿久津智先生には、在学期間中長きにわたり様々な面でお世話になり、特に本論文作成中、終始適切な助言を賜り、厳しく温かいご指導と激励を戴きました。ここに、改めて先生に心から深く感謝の意を表します。最後になりましたが、これまで温かい目で見守ってくれた研究室の同期・後輩の皆様や家族へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞とさせていただきます。

参考資料 I

『新編日本古典文学全集』

番号	出典 (書名、作品名、巻・章・段、ページ数)	成立/発行年	文章の種類(小説(一人称・三人称)／ノンフィクション等)	表現	①肯定的評価語のみ使用 ②肯定的評価語の使用+他の情報 ③肯定的評価語の不使用	人間関係 関係(不特定の人がほめる場合、「不問」とした) 性別(特定できない場合は、「不明」または「不問」とした。ものことは明示せず)	対象 ①所持物 ②外見 ③能力 ④性格人柄 ⑤行動態度 ⑥状態	返答 A肯定的返答 B否定的返答 C回避的返答	本文
1	作者未詳「古事記」 (景行天皇 〔八〕酒折宮 P.229)	奈良時代(712年成立)	歴史書(三人称)	なし	なし	倭建命→老人 上下 男→男	③	なし	〔八〕酒折宮 即ち、其の国より甲斐に越え出でて、酒折宮に坐しし時に、歌ひて曰はく、新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる爾くて、其の御火焼の老人、御歌に続きて、歌ひて曰はく、日々並べて 夜には九夜 日には十日を是を以て、其の老人を誉めて、即ち東国造を給ひき。 訳文:〔八〕そのまま、その東の国から甲斐に越え出て、酒折宮にいらっしゃった時に、倭建命が歌っているには、新治……(新治や筑波の地を過ぎて幾夜寝たのか)と歌った。すると、その警護のためにかがり火をたく老人が、御歌に続きて、歌っているには、日々並べて……(日数を重ねて、夜で九夜、昼で十日でございますよ)と歌った。 そこで、その老人をほめて、すぐさま東国造をお与えになった。
2	作者未詳「古事記」 (雄略天皇 〔九〕三重の采女 P.353)	奈良時代(712年成立)	歴史書(三人称)	なし	なし	天皇→三重の嫔 上下 男→女	③	なし	其の花 倭の…(大和のこの高いところに の 照り坐す 高光る 日の御子に 豊御酒 献らせ 事の 語り言も 是をば即ち、天皇の歌ひて曰はく、百石城の 大宮人は 鶺鴒 領巾取り懸けて 鶺鴒 尾行き合へ 庭雀 群集り居て 今日もかも 酒水漬くらし 高光る 日の宮人 事の語り言も 是をば此の三つの歌は、天語歌ぞ。故、此の豊樂に、其の三重の嫔を誉めて、多たの祿を給ひき。 訳文:その歌にいう、倭の……(大和のこの高いところにある市よ、小高い市の丘にある新嘗の御殿のそばに生い立っている、葉の広い神聖な椿、その葉のように、ゆったりとしていらっしゃり、その花のように、照り輝いていらっしゃる、〈高光る〉日の神の御子よ、お酒を召し上がってくださいませ。できごとの語り伝えでもこのことを同じように伝えていきます)天皇もすぐに歌っているには、百石城の……(〈百石城の〉大宮人たちは、朝のように、領巾をかけて、鶺鴒が尾を振るように、長い裾をひいて行き交い、庭の雀のように大勢集り群がっていて、今日もまあ酒盛りをしているらしい、〈高光る〉日の宮人たちは。できごとの語り伝えでもこのことを同じように伝えていきます)この三つの歌は、天語り歌である。それで、この酒宴では、その三重の采女をほめて、たくさんの品物を賜わった。
3	作者未詳「古事記」 (顕宗天皇 〔一〕置目の老嫗 P.363)	奈良時代(712年成立)	歴史書(三人称)	見しことを失れず、貞かに其の地を知れる	②	天皇→老女 上下 男→女	③	なし	爾くして、民を起して土を掘り、其の御骨を求めき。即ち、其の御骨を獲て、其の蚊屋野の東の山に、御陵を作りて葬りて、韓袋が子等を以て、其の御陵を守らしめき。然くして後に、其の御骨を持ちよりき。故、還りより坐して、其の老嫗を召して、其の、見しことを失れず、貞かに其の地を知れるを誉めて、名を賜ひて置目老嫗と号けき。仍ち、宮の内に召し入れて、教く広く慈しび賜ひき。 訳文:そこで、人民を集めて土を掘り返し、そのご遺骨を探し求めた。ただちにそのご遺骨を手に入れて、その蚊屋野の東の山に御陵を造って葬り、韓袋の子孫にその御陵を守らせた。そうして後、そのご遺骨を持って河内へ帰り上った。さて、帰り上られて、その老女を召し出し、老女が見たことを忘れず、しっかりとその場所を知っていたことをほめ、名を賜わり、置目老嫗と名付けた。そのまま宮の内に召し入れて、手厚くもてなしなされた。
4	作者未詳「逸文(風土記)」 (〔筑前の国〕瀬夫能泉〔甲類〕 P.541)	奈良～平安時代(713年より編纂開始)	官撰地方誌(一人称)	格かも。伊蘇志と謂ふ	①	天皇→五十跡手 上下 男→男	④	なし	天皇、勅して問ひたまはく「あ、誰そ」とのりたまふ。五十跡手、奏して曰はく「高麗の国の意呂山に天ゆ降り来し日杵の苗裔なる五十跡手、是なり」とまをす。天皇、ここに五十跡手を誉めたまひて曰はく「格かも。伊蘇志と謂ふ」とのたまふ。五十跡手の本つ土を恪勤の国と謂ひ、今怡士の郡と謂ふは詠るなり。 訳文:天皇は自ら「あ、お前は誰か」とお尋ねになられた。五十跡手は「朝鮮の意呂山に天降って来た天の日杵の子孫である五十跡手である」とお応えした。天皇はそこで五十跡手に「イソシかも(忠実なことだ)」「格」をイソシと言う」とお褒めになられた。これによって、五十跡手の住んでいた所を恪勤の国と言うようになり、現在、怡土郡と言っているのはそれが訛ったものである。
5	舍人親王ほか編「日本書紀」 (日本書紀 巻第三(扉) 神日本磐余彦天皇 神武天皇 〔六〕大和の平定 P.227)	奈良時代(720年成立)	編年体の歴史書(三人称)	なし	なし	天皇→部氏の遠祖 上下 男→男	③	なし	饒速日命、本より天神の懸懸に唯天孫のみに是をしたまふといふことを知れり。且、夫の長髓彦の素性復很りて、教ふるに天人の際を以ちてすべからざるを見て、乃ち殺して其の衆を帥ゐて帰順ひぬ。帥ゐて帰順ひぬ。天皇、素より饒速日命は是天より降れる者といふことを聞しめて、今し果して忠効を立てしかば、褒めて寵みたまふ。此物部氏が遠祖なり。 訳文:饒速日命は、もともと天神が深く心にかけて天孫だけに味方しておられることを知っていた。また、長髓彦の性質はねじけ曲っており、神と人との区別を教えても到底理解しそうなないことを見てとって、ついに殺害し、その軍勢を率いて帰順した。天皇は初めから饒速日命は天降った神であることを承知しておられ、今、はたして忠誠の功を立てたので、これを褒賞して寵愛された。これは物部氏の遠祖である。
6	舍人親王ほか編「日本書紀」 (弘計天皇 顕宗天皇 〔五〕置目老嫗 P.247)	奈良時代(720年成立)	編年体の歴史書(三人称)	なし	なし	小櫛→善行 上下 男→不問	⑤	なし	小櫛、謝りて曰さく、「山官、宿より願し」とまをす。乃ち山官に拝して、改めて姓を山部連の氏と賜ひ、吉備臣を以ちて副とし、山守部を以ちて民としたまふ。善を褒め功を顕し、恩を酬いて厚を答へたまひ、寵愛殊絶れ、富能く備ふひと莫し。 訳文:小櫛は畏つて、「もともと山官を願っておりました」と申しあげた。さっそく山官に任じ、改めて姓を山部連の氏と与えられ、吉備臣を副官とし、山守部を民とされた。善行を褒めて功績を明らかにし、恩義に報いて厚遇し、寵愛はことのほか深く、その富は並ぶ者がないほどであった。
7	舍人親王ほか編「日本書紀」 (日本書紀 巻第二十七(扉) 天命開別天皇 天智天皇 〔二〕帰国した百済王豊璋、新羅による侵害 P.254)	奈良時代(720年成立)	編年体の歴史書(三人称)	なし	なし	宣勅→福信 上下 男→男	③	なし	五月に、大將軍大錦中阿曇比邇夫連等、船師一百七十艘を率て、豊璋等を百済国に送り、勅を宣りて、豊璋等を以ちて其の位を継がしむ。又、金策を福信に予ひて、其の背を撫で、褒めて爵祿賜ふ。時に豊璋等と福信と、稽首みて勅を受け、衆、為に涕を流す。六月の己未の朔にして丙戌に、百済、達率万智等を遣して、進調り獻物る。冬十二月の丙戌の朔に、百済王豊璋、其の臣佐平福信等、狹井連名を闕せり。 訳文:五月に、大將軍大錦中阿曇比邇夫連らが船軍百七十艘を率いて、豊璋らを百済国に送り届け、宣勅によって豊璋らに百済王の位を継承させた。また金策を福信に与え、その背を撫でて褒めて爵と祿とを与えた。その時、豊璋らと福信とは拝礼して勅を承り、人々は涙を流した。六月の己未朔の丙戌(二十八日)に、百済は達率万智らを派遣して朝貢し物を献上した。冬十二月の丙戌朔(一日)に、百済王豊璋、その臣佐平福信らは、狹井連〔名を欠く〕。
8	舍人親王ほか編「日本書紀」 (日本書紀 巻第三十(扉) 高天原広野姫天皇 持統天皇 〔八〕頻りなる吉野行幸、新宮の整地、軍事整備 P.540)	奈良時代(720年成立)	編年体の歴史書(三人称)	なし	なし	天皇→蚊屋忌寸木間の役の功 上下 男→男	⑥	なし	辛卯に、多武嶺に幸す。壬辰に、車駕、宮に還りたまふ。丙申に、清御原天皇の為に、無遮大会を内裏に設く。繫囚は悉に原し還る。壬寅に、直広参を以ちて、蚊屋忌寸木間に贈ひ、并せて賜物を賜ふ。以ちて壬申の年の役の功を褒めたまふとなり。冬十月の丁巳の朔にして戊午に、詔したまはく、「今年より、親王より始めて下進位に至るまでに、儲くる兵を觀さむ。淨冠より進冠に至るまでは、人ごとに甲一領・大刀一口・弓一張・矢一具・鞆一枚・鞍馬、勳冠より進冠に至るまでは、人ごとに大刀一口・弓一張・矢一具・鞆一枚、如此預め備へよ」とのたまふ。 訳文:辛卯(五日)に、多武嶺に行幸された。壬辰(六日)に、天皇は宮殿に帰還なさった。丙申(十日)に、清御原天皇(天武天皇)のために、無遮大会を宮中で営んだ。囚人は、全員赦免し解放した。壬寅(十六日)に、直広参を蚊屋忌寸木間に追贈し、併せて賜物を賜った。そうして壬申の年の戦役での功績を褒賞されたのである。冬十月の丁巳朔の戊午(二日)に、詔して、「今年から、親王を初めとして、下は進位に至るまで、装備している武器を検閲する。淨冠から直冠までは、一人一人に甲一領・大刀一口・弓一張・矢一具・鞆一枚・鞍を置いた馬、また勳冠から進冠までは、一人一人に大刀一口・弓一張・矢一具・鞆一枚、これらをあらかじめ準備せよ」と仰せられた。
9	舍人親王ほか編「日本書紀」 (巻第三(扉) 神日本磐余彦天皇 神武天皇 P.205)	奈良時代(720年成立)	編年体の歴史書(三人称)	汝、忠にして且勇あり。加能く導の功有り。是を以ちて、汝が名を改め道臣と為む	②	天皇→道臣命 上下 男→男	③④	なし	遂に菟田の下県に達る。因りて其の至れる処を号けて菟田の穿邑と曰ふ。穿邑、此には千介知能務羅と云ふ。時に勅して日臣命を誉めて曰はく、「汝、忠にして且勇あり。加能く導の功有り。是を以て、汝が名を改め道臣と為む」とのたまふ。 訳文:そうしてついに菟田の下県に到着した。道を穿ちながら進んだのでその地を名付けて菟田の穿邑〔「穿邑」はここではウカチノムラという〕という。天皇は勅して日臣命を褒賞されて、「お前は忠誠にして武勇の臣である。またよく先導の功績があった。これからは、お前の名を改めて道臣としよう」と仰せられた。

10	<p>舍人親王ほか編「日本書紀」 (巻第二十八(扉) 天淳中原瀛真人天皇 上 天武天皇 〔五〕大海人皇子野上行宮で作戦の 大号令 P.323)</p>	奈良時代(720年成立)	編年体の歴史書(三人称)	なし	なし	天皇→高市皇子 上下 男→男	⑤	なし	<p>爰に天皇、誉めたまひて、手を携ひ背を撫でて曰はく、「慎め、不可怠」とのたまふ。因りて鞍馬を賜ひ、悉に軍事を授けたまふ。皇子、和甞に還る。天皇、茲に、行宮を野上に興して居します。</p> <p>訳文:ここに天皇は高市皇子をお褒めになり、手を取り背を撫でて、「慎重にふるまえ、決して油断してはならない」と仰せられた。そうして鞍をつけた馬を与え、軍事の権限をことごとく委ねられた。皇子は和甞に帰った。そこで天皇は野上に行宮を造ってご滞在になった。</p>
11	<p>作者未詳「萬葉集」 (萬葉集巻第二十(扉) 山村に幸行しし時の歌二首 P.391)</p>	奈良時代(759年以降成立)	歌集(三人称)	なし	なし	不問→真木柱 不問 不問→もの	なし	なし	<p>真木柱 ほめて進れる 殿のごと いませ母刀自 面変はりせず</p> <p>訳文:真木柱を 祝って建てた 宮殿のように堅固に あってくだされ母上 お顔も変らずに</p>
12	<p>作者未詳「萬葉集」 (萬葉集巻第四 P.372)</p>	奈良時代(759年以降成立)	歌集(三人称)	いそしきわけ	①	不問→私 上下 不問→男	⑤	なし	<p>黒木取り 草も刈りつつ 仕へめど いそしきわけと 褒めむともあらず(一に云ふ、「仕ふとも」)</p> <p>訳文:▼黒木を伐り 草まで刈って 手伝いたいけれど まめなやつよと 褒めてくださると思えません(また「手伝つても」)</p>
13	<p>景戒「日本霊異記」 (日本国現報善惡霊異記 中巻 序 諸薬の右京の薬師寺の沙門景戒録す P.116)</p>	平安時代(822年ごろ成立)	フィクション(三人称)	勝宝応真聖武大上天皇	①	人々→天皇 下上 不問→男	⑥	なし	<p>法幢は高く堅ちて、蟠足は八方にひらめけり。惠船は軽く汎びて、帆影は九天に扇げり。瑞応の華は競ひて国邑に開けり。善惡の報は現にして吉凶を誌示せり。故にみ号を勝宝応真聖武大上天皇と称めたまつる。</p> <p>訳文:また、寺院の旗じるしは高く立ち、風にはためて八方にひるがえり、經典をのせた船は軽やかに浮び、帆は風をはらみ大空をあおいでいた。善兆によって咲く花は国中に競い開いた。善惡の行いは、この世で吉凶禍福となって現れた。このようなわけでこの天皇を、勝宝応真聖武大上天皇とたたえ申しあげるのである。</p>
14	<p>景戒「日本霊異記」 (日本国現報善惡霊異記 中巻 智者の変化の聖人を誂り妬みて、現に閻羅の關に至り、地獄の苦を受けし縁 第七 P.139)</p>	平安時代(822年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	天皇→行基 上下 男→男	③	なし	<p>天平の十六年の甲申の冬の十一月に大僧正に任ぜらる。是に智光法師、嫉妬の心を発して非りて曰はく、「吾は是れ智人なり。行基は是れ沙弥なり。何の故にか天皇、吾が智を齒へたまはずして、唯し沙弥をのみ誉めて用ゐたまふ。」といふ。時を恨み、鋤田寺に罷りて住む。條に痢病を得、一月許経。</p> <p>訳文:天平十六年の冬十一月、行基は大僧正に任ぜられた。すると智光法師は嫉妬の心を起し、非難して、「わたしは智者である。行基はただの未熟な僧である。なんの理由で天皇はわたしの智をお認めにならないで、ただ行基ばかりをほめ重用なさるのだらう」と言った。智光は、時勢を恨み、鋤田寺に退いて住んだ。すると突然下痢を起し、一か月ばかり病み続けた。</p>
15	<p>景戒「日本霊異記」 (日本国現報善惡霊異記 中巻 智者の変化の聖人を誂り妬みて、現に閻羅の關に至り、地獄の苦を受けし縁 第七 P.143)</p>	平安時代(822年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	天皇→行基 上下 男→男	③	なし	<p>光、発露懺悔して曰はく、「智光、菩薩のみ所に、誂り妬む心を致して、是の言を作せり。『光は古徳の大僧、加以智光は生知れり。行基沙弥は浅識の人にして、具戒を受けず。何の故にか天皇、唯行基をのみ誉めて智光を捨てたまふ。』といひき。口業の罪に由りて、閻羅王、我を召して鉄銅の柱を抱かしむ。</p> <p>訳文:智光は自分の犯した恥を打ち明け、懺悔して、「わたし智光は菩薩に対してそしり嫉妬する心で、『智光は古くより徳を修めた高僧、そればかりかわたしは生れながらにして智者です。行基僧は浅学のもで、僧や尼たちの守るべき訓戒も受けていません。それなのに何ゆえあって天皇は行基ばかりをほめ、智光をお捨てなさったのでございます』などと言いました。こうした悪口を言ったことばの罪により、閻魔大王はわたしを召して、鉄・銅の柱を抱かせました。</p>
16	<p>景戒「日本霊異記」 (日本国現報善惡霊異記 中巻 せふの神王のこむらの光を放ち、奇しき表を示して現報を得し縁 第二十一 P.183)</p>	平安時代(822年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	天皇→金鷲 上下 男→男	⑤	なし	<p>行者を召して詔りたまはく、「何事をか求めむと欲ふ」とのたまふ。答へて曰さく、「出家して仏法を修学せむことを欲ふ」とまうす。勅して得度を許したまひ、金鷲を名とせり。彼の行を誉めて、四事を供するに、乏しき時無し。世の人其の行を美め讃へて、金鷲菩薩と称ふ。彼の光を放ちし執金剛神の像は、今、東大寺の講堂の北の戸に立てり。</p> <p>訳文:行者は、「出家して仏法を学びたいと願っております」とお答えした。天皇は勅を下して出家を許され、金鷲と名のらせた。しかも特に彼の修行をほめられ、衣服・飲食などの四つの供養に、何の不足もないようにされた。当時の人びとも彼の行いをほめたたえて、金鷲菩薩とあがめた。あの光を放った執金剛神の像は、今も東大寺の講堂の北の入口に立っている</p>
17	<p>紀貫之、紀友則、壬生忠岑ほか編「古今和歌集」 (古今和歌集(扉) (仮名序) 〔三〕和歌の姿 P.22)</p>	平安時代(913年ごろ成立)	和歌集(三人称)	なし	なし	不問→世 不問 不問	なし	なし	<p>六つには、いはひ歌。この殿はむべも富みけり三枝のみつばよつばに殿づくりせりといへるなるべし。これは、世をほめて神に告ぐるなり。この歌、いはひ歌とは見えずなむある。春日野に若菜摘みつつ万世をいはふ心は神ぞ知るらむこれらや、すこしかなふべからむ。おほよそ、六種に分れむことは、えあるまじきことになむ。</p> <p>訳文:第六は「いわい歌」で、次のものなどでありましょう。この殿は……(なるほど、この御殿は豊かに宮んでいる。棟が三つにも四つにも分れるような建築の仕方である)この歌は、世を賛美し神に告知するものである。右の例歌は「いわい歌」の性格を持つとは思われない。春日野に……(春日野で若菜を摘んで万世の繁栄を願う心を、神様はきっとご覧くださるであらう)こんな歌なら少しは通しているだろうか。大体、歌が六種類に分れるということがありそうもないことなのである。</p>
18	<p>紀貫之「土佐日記」 (土佐日記旅程地図・土佐日記の記す旅程 一 船路なれど馬のはなむけ 〔一〕離別―心ある人々との別れ P.16)</p>	平安時代(935年ごろ成立)	日記(一人称)	なし	なし	不問→八木のやすのり 不問 不問→男	④	なし	<p>これぞ、たたはしきやうにて、馬のはなむけしたる。守がらにやあらむ、国人の心の常として、いまはとて見えざんなるを、心ある者は、恥ぢずになむ来ける。これは、物によりて褒むるにしもあらず。二十四日。講師、馬のはなむけしに出でませり。ありとある上、下、重まで酔ひ痴れて、一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。</p> <p>訳文:それなのにこの人が、立派な態度で、餞別をする。前国司の人柄のせいであらうか、任国の人々の気持の常として、もういまさら(去り行く人)に用はないとして来ないものなのに、誠の心ある者は、まわりに気兼ねせずに来たのである。これは、もらった物によって褒めるわけではない。二十四日。国分寺の僧殿が、わざわざ餞別に來なされた。そこに居合せた身分の上の者も、下の者も、子供までもが(振舞に便乗して)酔っ払って、一という文字すら知らない者が、(千鳥足になって)その足をまあ、十という文字に踏んで遊ぶ。</p>
19	<p>作者未詳「伊勢物語」 (八十一 塙電 P.182)</p>	平安時代(10世紀中ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	人々→御殿 下上 不問→男	①	なし	<p>むかし、左のおほいまうぎみいまそがりけり。賀茂河のほとりに、六条わたりに、家をおもしろく造りて、すみたまひけり。十月のつごもりがた、菊の花うつろひさかりなるに、もみちのちぐさに見ゆるをり、親王たちおはしませて、夜ひと夜、酒飲みし遊びて、夜明けてゆくほどに、この殿のおもしろきをほむる歌よむ。そこにありけるかたあおきな、板敷のしたにはひ歩きて、人にみなよませはててよめる。</p> <p>訳文:昔、左大臣がおいでになった。賀茂河のほとり、六条辺りに、家をたいそう趣深く造って、お住みになった。十月の末ごろ、菊の花が薄紅色に染り美しさが盛りであるうえ、紅葉が薄くさまざまに見える折、親王たちをお招きして、一晩中、酒を飲み、うたや音楽を楽しんで、夜がだんだん明けてゆくところに、人々は、この御殿が風趣あるのを賞美する歌を詠じた。そこに居合せたこじき翁が、板敷の床の下の座にうろうろして、人々がみな詠み終るのを待って、こう詠んだ。</p>
20	<p>作者未詳「国譲 下(うつほ物語)」 (〔二一〕仲忠、女一の宮と語り、水尾行きを告げる P.297)</p>	平安時代(969～1011年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	右大将→按察使の君 下上 男→女	④	なし	<p>大将殿ののたまふ、仲忠「水尾へまかるなり。御消息やある」。按察使、「かく現れて侍りとて、恥ぢはべなるものを」と聞こゆれば、大将、仲忠「よにさもあらじ。いとよく褒めきこえむとす」とのたまふ。いぬ宮をかしげにて、一人立ちし、歩み始めたまふほどなり。</p> <p>訳文:右大将殿がおっしゃることは、「水尾に行つてまいります。お言伝がございますか」。按察使、「こうして私がまた人前に現れましたことを、兄は氣まずく思っているようですから」とお答え申し上げると、右大将、「まさか、そんなことはございませんまい」。とてもよく、あなたのことをおほめしておきましよう」とおっしゃる。いぬ宮は、かわいらしいご様子で、一人で立つてよりちよ歩きをしはじめたところである。</p>

21	作者未詳「俊蔭(うつほ物語)」 〔〔四三〕仲忠元服 帝、往時を回想、琴の伝承を問う P.107〕	平安時代(969～1011年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	上達部、親王たち→仲忠 上下 男→男	②③	なし	この仲忠、帝も春宮も、片時罷でさせず、召し使はせ給ふ。琴は、さる世の一なれば、たふたふにせねど、異遊びは、仲頼、行正 が手を伝へし物の音なれど、この師の手にも似ず、物より殊に抜け出でて、「いつこより、誰が手を伝へけるぞ」とのみ聞こえたり。容より始め、交じらひたる様など、もどかし所なく、才々しく、目も及ばずすぐれ出でたれば、上達部、親王たちより始め奉り、妻め愛で給ふ。 訳文：一方この仲忠のほうは、帝も東宮もすっかりお気に入りられて、少しの間でも退出をお許しにならず、おそばにお仕えさになる。琴の手は天下第一の名手であるから、軽々しくは弾かないが、ほかの楽器は、仲頼や行政の手を伝授されたものだけれど、その演奏は、これらの師の手にも似ず、誰よりも格段に勝って、どこから誰の手を伝えたのかとばかり、すばらしく聞える。容貌をはじめとして、宮仕えぶりなど非の打ちどころもなく、才気があって、すばらしく傑出しているので、上達部や親王たちをはじめて、口をきわめて賞賛する。
22	作者未詳「蔵開 上(うつほ物語)」 〔〔三四〕女御、更衣たち、仲忠について噂をする P.434〕	平安時代(969～1011年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	人→男皇子たち 下上 不問→男	②	なし	人々「仁寿殿の女御の、思ふやうにめでたき人なり。宮仕へは、同じき帝と聞こゆれど、上に限りなく時めかされたてまつりたり。娘は、かく世に類なき人に、二つなく思はせたり。めでたし。男皇子たちは、いとうつくしげにかたちよく、人に褒められつつあまた持たり。ただ、后に据ゑ、坊に据ゑあずといふばかりにこそはあめれ」。 訳文：「仁寿殿の女御は、理想的ですばらしい人です。宮仕えにおいては、同じ帝にお仕えしているといっても、帝に限りなく寵愛をお受けになっていらっしゃる。娘は、この世にまたとない人に一途に思われています。すばらしいことです。所生の男皇子たちも、とてもかわいらしく容姿もよく、人にほめられるような方々が大量いらっしゃる。ただ后に立ち、東宮に立つ方がいなかったというだけ不足のようです」。
23	作者未詳「蔵開 中(うつほ物語)」 〔〔一三〕仲忠、俊蔭の詩文を読む 帝、東宮に訓戒 P.479〕	平安時代(969～1011年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	世の人→東宮 下上 不問→男	⑤	なし	人の国にも、最愛の妻持たる王ぞ、そしり取りたるめる。さいはるる人持たまへれば、戒めきこゆるなり。わきでも、ここによき女の限り集へたれど、え褒められずなりぬるや」。宮、東宮「かしこにこそ侍るめれ。ことばも惜しますののしることは、ほかにはえ侍らじ」と聞こえたまふほどに、明け離れぬ。 訳文：よその国でも、寵愛した妻を持っていた王が、世の非難を受けたようだ。あなたにもそういわれる人がいらっしゃるので、このように戒めを申しあげるのだよ。とりわけ、宮中にすばらしい女ばかりを集めたけれど、そんなわけでほめられなくなってしまうことですよ」。東宮、「それは藤壺におる者が原因でございましょう。世間が言葉を尽して非難する対象は、ほかにはございませうい」などと申しあげるうちに、夜が明けた。
24	作者未詳「国譲 下(うつほ物語)」 〔〔五九〕詩宴、仲忠講師をつとめ、賛嘆される P.390〕	平安時代(969～1011年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	近衛府の官人→見苦しくない人 上下 男→男	②	なし	午の二点ばかりに、擬生の男どもに、御題ども賜ふに、難くもあらず。五位、六位なり。あらはなる所に候ひ、近衛府の官人ども、左、右に候ひ、そなたに居たり。近く参りて仕うまつらせたまふ。探舘賜はる人の目安きをば褒めたまふ。見苦しきをば笑はせたまへば、聴しつつ、天下の失礼を仕うまつり合へり。 訳文：午の二刻ばかりに、文章擬生の男たちに詩題などをお与えになられたところ、そう難題というでもない、五位、六位の者たちである。屋外に伺候し、近衛府の官人たちが左右に分けて伺候している、そちらのほうに控えている。御前近く進ませ探題をおさせになる。探舘を賜る人で、見苦しくない人に対してはおほめになった。見苦しい者に対しては笑われたので、氣後れしてひどい失態をおかす者もあった。
25	作者未詳「国譲 下(うつほ物語)」 〔〔五九〕詩宴、仲忠講師をつとめ、賛嘆される P.392〕	平安時代(969～1011年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	皆→右大將の詩 不問 不問→男(もの)	①	なし	やむごとなき詩どもをば、誦ぜさせたまふ。大將の詩を、みな帝たち誦じたまふ。かはらせ参る。新中納言、いみじう褒めらる。右大弁、かはらせ参る。 訳文：優れた詩などがあれば、吟じさせなさる。右大將の作られた詩を、みな院たちは吟詠なさる。右大將に御酒がすすめられる。新中納言はたいそうなおほめをいただく。右大弁は新中納言に杯をさしあげる。
26	作者未詳「蔵開 上(うつほ物語)」 〔〔二五〕仲忠と女一の宮、藤壺や仁寿殿の噂をする P.403〕	平安時代(969～1011年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	女一の宮→里人である母上 下上 女→女	⑥	なし	〔二五〕仲忠と女一の宮、藤壺や仁寿殿の噂をする 中納言、宮に、仲忠「いみじうもののいふものかな。わいても里人をほむるぞ空目なる。藤壺の御方まかでたまはば、必ず見せたまへ。典侍のいひつることまことかと、見比べたてまつらむ」。宮、女一宮「まことぞ。いとよくものいふ姥。この君は見るままによくなりまさり、われは日々にあやしくぞなるや。むかしだにこよなかりたり」。 訳文：中納言は女一の宮に、「ひどくおしゃべりなことだな。とりわけ、里人である母上をほめるのは見当ちがいです。藤壺の御方がこちらに退出されたときには、必ずお見せください。典侍のいったことが本当かどうか、見比べ申しあげましょう。宮、「本当のことです。ほんとうにおしゃべりなお婆さんですこと。あのお方は見るにつれてどんどんお美しくなり、私は日々衰えております。昔でさえ、雲泥の差がございましたのに」。
27	作者未詳「落窪物語」 (落窪物語 巻之二(扉)〔三〇〕少将一家の様子——少将、三位中将になる P.167)	平安時代(10世紀末ごろ成立)	フィクション(三人称)	あなうつくし。いとよくしたまふ人にこそものしたまひけれ。内裏の御方などの御大事あらむには、聞えつべかめり。針目などの、いと思ふやうにあり	②	少将の母→姫君の裁縫 上下 女→女	③	なし	かくて年かへりて、朔日の御装束、色よりはじめて、いと清らにし出でしたまへれば、くいとよし>と思ひて、着てあるきたまふ。御母北の方の見たまひて、「あなうつくし。いとよくしたまふ人にこそものしたまひけれ。内裏の御方などの御大事あらむには、聞えつべかめり。針目などの、いと思ふやうにあり」と誉めたまふ。司召に中将になりたまひて、三位したまひて、おほえまさりたまふべし。 訳文：こうして新年を迎え、参内のご装束は色合せをはじめとして、はなはだ美しく仕立てあげなされたので、少将は、<たいそう結構だ>と思ひになって、着てまわりなさる。少将の母北の方がご覧になって、「まあ立派なこと。たいそう上手にお仕立てなされる人でいらっしゃるのですね。宮中の女御様などの大切な場合があった時には、仕立てをお願い申し上げたいですね。針目などは理想とおりです」とおほめになる。春の除目で少将は中将におなりになり、位も三位におなりになって、帝のご寵愛がひとしおまさっていらっしゃるようだ。
28	作者未詳「落窪物語」 (落窪物語 巻之二(扉)〔三一〕蔵人の少将、三の君から離れ始める P.168)	平安時代(10世紀末ごろ成立)	フィクション(三人称)	よし	①	少将→女房が縫った装束 上下 男→女(もの)	①	なし	かの北の方、これをいみじき宝に思ひて、これがことにつけて、わが妻を懲ぜしぞかしと思ふに、いと捨てさせまほしきぞかし。中将かく言ふを、見るやうぞあらむとて、時々返りことせさせたまふに頼みをかけて、三の君をただ離れに離れゆく、「よし」と誓めし装束も、すぢかひ、あやしげにし出づれば、いとどこかこつけて腹を立ちて、しかけたる衣どもも着て、「こは何わざしたるぞ。いとよく縫ひし人は、いつち往にしぞ」と腹立てば、三の君、「男につきて往にしぞ」といらへたまへば、「なぞの男につくべきぞ。ただにぞ出でにけむ」。 訳文：中将はく例の中納言の北の方が蔵人の少将を大切な宝と思って、この人の衣装の仕立てにこと寄せて、わが妻を苛めたのだなあ>と思うと、どうしても蔵人の少将に三の君を捨てさせたかと思うのである。中将がかう言うので、母北の方は「蔵人の少将は見どころある人だろう」と、時々中の君にお手紙の返事をおさせなさるので、蔵人の少将はこの縁談に望みを託して、三の君からどんどん離れていく。以前に、「上手にできた」とほめた中納言邸で用意してくれる衣装も、近ごろでは、ゆがんで不格好に仕立て上げるので、ますますそれにかこつけ腹を立て、でき上がって衣桁に掛けておいた着物なども投げ捨てて「これはどうしたのだ。縫った女房はどこへ行ったのだ」と立腹すると、三の君が、「男ができて、邸を出て行ってしまいました」とお答えになると、「なんで男ができたものか。この邸にいたくなくてただ一人で出て行ったのだろう。
29	作者未詳「落窪物語」 (落窪物語 巻之一(扉)〔三六〕少将、弁の少将に嫉妬、しきりに弁明する P.93)	平安時代(10世紀末ごろ成立)	フィクション(三人称)	かたちよし	①	少将→交野の少将 対等 男→男	②	なし	〔三六〕少将、弁の少将に嫉妬、しきりに弁明する 少将、几帳おしやりて、「<をかしく物聞きよく言ひつる人かな。かたちも清けなり>と見つるほどに、交野の少将を、<かたちよし>と、誉め聞かせたてまつりつるにこそ、見まうくなりぬれ。さもいらへたまはで、こなたを見おこせたまひて、心もとなげに口つくりしたまへるかな。 訳文：〔三六〕少将は几帳を横の方にどけて「くおもしろく聞きづらいたくろなく上手に話をする女房だなあ。容貌もきれいだ」と覗き見しているうちに、交野の少将(弁の少将)を<容貌がすばらしい>とほめて姫君に聞かせ申したので、少納言の顔を見るのがいやになってしまった。あなたはご返事をなさらないで、私の隠れている方を恨みがましくご覧になって、じれったいかのように、言葉をつくらっていらっしゃいましたね。
30	作者未詳「落窪物語」 (落窪物語 巻之二(扉)〔二一〕面白の駒、少将に代って四の君と結婚 P.154)	平安時代(10世紀末ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	世間の人→少輔 不問 不問→男	なし	なし	中納言殿には、その日になって、しつらひたまふこと限りなし。<今日>と言へば、少将、兵部のもとへ、「かの聞こえしことは今宵なり。戌の刻ばかりにおはせよ」とのたまへば、「ここにも、しか思ひはべり」と言へり。父に、「かうかう」と言ひければ、ひが痴者、<便なからむ>とも思はで、「らうありて、人に誉められたまふことはよもあしからじ。はやう行け」とて、装束のこといそぎ出だし立てたりければ、うちさうぞきて往にけり。 訳文：中納言邸では、結婚の当日になると、用意万端が整えられる。<いよいよ今日だ>というので少将は少輔のもとへ「先日申しあげた結婚のことは今夜です。夜の八時前後に中納言邸へおいでなさい」とおっしゃると、少輔は「私もそのつもりです」と言った。少輔が父親に「こうこうです」と話すと、ひねくれた愚か者の治部卿は、<自分の子が皆に馬鹿にされてかわいそうだ>とも思わず、「苦労してあなたが世間の人にほめられなされることは、よもや悪いことではあるまい。早く行きなさい」と言って、衣装の支度を急いでして出でてやったので、少輔は着飾って出て行った。

31	<p>作者未詳「落窪物語」 （落窪物語 巻之二（扉）〔二二〕面白の駒の滑稽な後朝の文 P.155）</p>	平安時代（10世紀末ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	①	人→少輔の鼻 不問 不問→男	②	なし	<p>少将、くいかならむ>と思ひやられてをかしければ、女君に、「中納言殿には、昨夜婿どりしたまひにけり」「誰ぞ」とのたまへば、「まろが叔父にて、治部卿なる人の手児、兵部の少輔、かたちいとよく、鼻いとをかしげなるを婿どりたまへる」とのたまへば、女君、「ことに人のとりわきて警めぬ所よ」と笑ひたまへば、「なにか。すぐれてをかしげなる所を聞こゆるぞかし。今見たまひてむ」とて、侍に出でたまひて、少輔のがり文やりたまふ。</p> <p>訳文：少将は、<少輔はどうであらうか>と想像されておかしいので、女君に「中納言邸では昨晚、四の君に婿をお取りになりましたよ」と言う。「相手はどなたですか」と尋ねなせるので、少将は「私の叔父で、治部卿である人の秘蔵っ子で兵部の少輔という人です。はなはだ美男子で、特に鼻がたいそう立派な方を婿にお取りになったのですよ」とおっしゃると、姫君は「鼻なんて人の格別ほめたいところね」と言って、お笑いになるので、「どうして笑う。四の君の婿君のすぐれて立派なところを申しあげているんだよ。そのうちにあなたも婿殿をご覧になるでしょう」と言って、供人の詰所に出かけて行かれて、少輔のもとに手紙をお遣りになる。</p>
32	<p>作者未詳「落窪物語」 （落窪物語 巻之二（扉）〔二九〕二条邸のにぎわい——侍女たち集まる P.167）</p>	平安時代（10世紀末ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	世間の人→少将 不問 不問→男	②	なし	<p>女二所、大君は女御、男は、太郎はこの少将、二郎は侍従にて、遊びをのみしたまふ。三郎は童にて殿上したまふ。児におはしけるより、この少将を、世になくかなうしたてまつりたまふに、人に誉められ、帝もよき人に思し召したれば、ましていかならむことをしたまへりとも、のたまふまじ。</p> <p>訳文：姫君お二人、長女は女御、男の子は長男がこの少将で、次男は侍従で音楽ばかりを熱心になさる。三男はまだ子供で、殿上童をなさっている。ご幼少でいらした時から、この少将を、父の大將は世に類なくかわいいものと取り扱い申しなさるうえに、世間の人にほめたたえられ、帝もすばらしい人物だとご寵遇なさっていらっしゃるの、いうまでもなく父大將は少将がどんなことをなさろうとも、とやかおっしゃるまい。</p>
33	<p>作者未詳「落窪物語」 （落窪物語 巻之二（扉）〔三八〕女房少納言、中納言邸の様子を話す P.183）</p>	平安時代（10世紀末ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	女君の夫→婿君 上下 男→男	②	なし	<p>かの典薬がいらへしこと語れば、衛門いみじく笑ふ。「北の方、この度の御婿どりの恥がましきこと、宿世にやおはしけむ、いつしかといふやうに孕みたまへれば、心地よげに見えたまひしし北の方も、思ひまつはれてなむおほすめる」「四の君の御入は、あやしきことかな。これにはいみじう警めたまふめるものを。『鼻こそ中にをかしげにてある』とこそ言はるめれ」とのたまへば、少納言、「嘲弄し聞こえさせたまへるなり。御鼻なむ、中にすぐれて見苦しうおはする。鼻うち仰ぎいらさずて、穴の大きなことは、左右に對建て、寝殿も造りつべく」など言へば、</p> <p>訳文：例の典薬助の返事を話すと、衛門も大笑いをする。少納言は「北の方がこのたびの四の君と面白の駒との結婚は、外聞の悪いことと思っていられちゃったのですが、前世の因縁があったのでございましょうか、いつの間にもやらご懐妊なさったので、以前は得意げにみえていらしやった北の方も思案にくれていらしやるようです」と言うと、女君は、「四の君のお婿様の件は変なことですね。私の夫は婿君をたいそううめていらしやったようですのに。中将様は『鼻は中でも特にご立派だ』とおっしゃっておられたようです」とおっしゃるので、少納言は、「中将様はあなたをからかかっておっしゃるのですよ。お鼻は中でも格別にみっともなくていらしやる。鼻が上向いてふくれ動き、穴の大きいことは左右に對の屋を建て、中に寝殿まで連れそうですよ」などと言うと、</p>
34	<p>作者未詳「落窪物語」 （落窪物語 巻之一（扉）〔九〕中納言、姫君の服装を見ていとおしむ P.27）</p>	平安時代（10世紀末ごろ成立）	フィクション（三人称）	この装束ども、いとよし。よく縫ひおほせたり	①	蔵人の少将→落窪の君 上下 男→女	③	なし	<p>くいかにせまし>と思ふに、く少うれし>と思ふぞ、心地の屈しきたるにや。この婿の君は、あしきこともかしがましく言ひ、よきことをばちえんに警むる心ざまなれば、「この装束ども、いとよし。よく縫ひおほせたり」と警むれば、御達、北の方に、「かくなむ」と聞こゆれば、「あなかま、落窪の君に聞かすな。心おこりせむものぞ。かやうの者は、屈せさせてあるぞよき。それをさいはひにて、人にも用あるぞよき。それをさいはひにて、人にも用あれむものぞ」</p> <p>訳文：<これからどうしよう>と心配していたので、く少うれしい>と思うのも、気持が卑屈になりすぎているのだろうか。蔵人の少将は、悪いこともうさく言ひ、よいこともはっきりとほめる性格なので、「この装束などは、たいそうよくできた。うまく縫ひ上げてある」とほめるので、女房たちが、北の方に、「こうおっしゃっていました」と申しあげると、北の方は「ああやかしい。そんなことを落窪の君に聞かせるな。得意がるからね。ああいう者は卑屈にさせておくのがよい。それが身の幸いで、他人に重宝がられるものです」</p>
35	<p>作者未詳「落窪物語」 （落窪物語 巻之一（扉）〔三五〕女房少納言、姫君に弁の少将の噂話をする P.89）</p>	平安時代（10世紀末ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	①	人々→左近の少将 不問 不問→男	⑥	なし	<p>あたら御さまを、かくてつくづくとおはしますこそ、あいなけれ。四の君もくまた御婿どりしたまはむ>と設けたまふめり。北の方の御心にまかせて、のべしめしたまふ」」めでたきや。誰をか取りますふ。」とのたまへば、「左大將殿の左近の少将とか。かたちはいと清げにおはするうちに、『ただ今なり出でたまひなむ』と人々警む。帝も時めかしおぼす。御妻はなし。いとよき人の御婿なり。『くいかでこのわたりにもがな>と思ふと、おとども常々にのたまふとて、北の方急ぎに急ぎたまひて、四の君の御乳母、かの殿なりける人を知りたりけるを、よろこびたまひて、さざめき騒ぎたまひて、文やらせたまふめり」と言へば、「いとうれし。さて」と言ひて、いとよくほゑみたるまみ、口つきの、灯のあかきに映えて、にほひたるものから、恥づかしげなり。</p> <p>訳文：あなた様がこんなにすばらしいご様子なのに、こうやってもの寂しげでいらしやるのはおいわしいこととございませぬ。四の君もくまたお婿様をお迎えになろう>と、ご準備をなされているようです。北の方のお気持もかせて、勝手なことをなさっていらしやると言う。「それはおめでたいことね。どなたをお迎えなさるのですか」とおっしゃると、「左大將様の若様の左近の少将と承っております。ご器量はたいそうご立派でいらしやるうえに、『たった今にもご出世あそばさすだろう』と、人々がほめています。帝もご寵愛なされています。奥様はございません。女性にとつて非常にすばらしい婿君様です。『くどうかしてこの家の婿君に迎えたいなあ>と思う』と、お殿様もいつもおっしゃっているということで、北の方も非常にお急ぎになって、四の君様の御乳母が左大將殿に仕えている女房と悪意なのを、都合がよいとお喜びになって、大騒ぎなさって、手紙を贈らせあそばしたようです」と言うと、姫君は「まったく喜ばしいことね。それで」と言って、たいそう気持よくほえまれた目つきや口つきが、灯火の明るい光に照り映えて、美しいのに、さらに見ている者が恥づかしいと思うほど、気高さがある。</p>
36	<p>作者未詳「落窪物語」 （落窪物語 巻之三（扉）〔二九〕法華八講が終り、中納言、大いに喜ぶ P.265）</p>	平安時代（10世紀末ごろ成立）	フィクション（三人称）	いみじう老いのさいはひ、面目ありける人かな	①	人々→中納言様 下上 不問→男	⑥	なし	<p>日ごろの中に今日なむ、くいと猛に物入りたらむ>と見えける。やんごとなき上達部の持てめぐりたまふを見る人々、「いみじう老いのさいはひ、面目ありける人かな」と警む。「なほ人はよからむ女をこそ、神仏に申して、持たらめ」と言ひあへり。かくて九日、いどいといかめしう果てたまふ。</p> <p>訳文：法華八講の行われた間でも、薪の行道を行う今日が、く格別豪華で莫大に費用がかかっているだろう>とみられた。高貴な上達部が棒物を持って仏前を巡行しなせるのを見物している人々は、「中納言様はたいそう年とってから幸福で面目ある人だったのだなあ」とほめる。また「やはり、親というものは、いい娘を神仏に祈願してでも持たいたいものだなあ」と言い合っていた。こうして法華八講は九日間、たいそう荘厳に完了なさる。</p>
37	<p>清少納言「枕草子」 （枕草子（扉）一六二 井は P.295）</p>	平安時代（1001年ごろ成立）	随筆（一人称）	みもひも寒し	①	不問→飛鳥井 不問 不問	なし	なし	<p>走り井は逢坂なるがをかしきなり。山の井、などさしも浅きためしになりはじめけむ。飛鳥井は「みもひも寒し」とほめたるこそをかしけれ。千貫の井。少将の井。桜井。后町の井。</p> <p>訳文：走り井は逢坂にあるのがおもしろいのだ。山の井は、なぜそんなに浅いという例になりはじめたのだろう。飛鳥井は、「みもひも寒し」と水の冷たさをほめてあるのが、おもしろい。千貫の井。少将の井。桜井。后町の井。</p>
38	<p>清少納言「枕草子」 （枕草子（扉）一二九 故殿の御ために、月ごとの十日 P.243）</p>	平安時代（1001年ごろ成立）	随筆（一人称）	なし	なし	私→頭の中将 下上 女→男	②	B	<p>「さらなり。かたかるべき事にもあらぬを、さもあらむ後には、えほめたてまつらざらむが、くちをしきなり。上の御前などにても、やくとあづかりてほめきこゆるに、いかでか。ただおぼせかし。かたはらいたく、心の鬼出で来て、言ひにくなりはべりなむ」と言へば、「などで。さる人をしもこそ、めよりほかに、ほむるたぐひあれ」とのたまへば、「それがにくからずおほえこそあらめ。男も女も、け近き人思ひ、方ひき、ほめ、人のいささかあしき事など言へば、腹立ちなどするがわびしうおぼゆるなり」と言へば、「たのもしげなの事や」とのたまふも、いとをかし。</p> <p>訳文：「言うまでもないことです。親しくなるのはむしろかしいはずのことでもありませんが、仮にそうなったあとでは、あなたさまをおほめ申し上げることができないのが、残念なのです。主上の御前などでも、私が役目のようにして、あなたさまをおほめ申し上げるのに、どうして、そんな親しい仲になれましょうか。かわいいとお思ひになってだけいてくださいまし。さもないと、いたたまれない思いで、気がとがめて、ほめことばもきつと口に出しにくくなりましうものを」と言うと、中将は「どうして。そういう人をこそ、よそ目以上に、ほめる連中がいるのだ」とおっしゃるので、「そうしたことが、私にはどうも具合悪いと感じられないのなら、それでもよいでしょうが……」。男でも女でも、近しい人を大事にし、ひいきして、ちょっとした欠点を人が言うとう、腹を立てたりなどするのが、何ともやりきれなく思われるのです」と言うと、中将は「頼りにできそうもないような言いぐさだね」とおっしゃるのも、とてもおもしろい。</p>

39	清少納言「枕草子」 (六 大進生昌が家に P.38)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	不問→生昌 上下 不問	なし	なし	一夜の事や言はむと心ときめきしつれど、「今静かに御局に候はむ」としていぬれば、帰りまゐりたるに、「さて何事ぞ」とのたまはすれば、申しつる事をさなむと答すれば、「わざと消息し、呼び出づべき事にはあらぬや。おのづから端つ方、局などにゐたらむときも言へかし」とて笑へば、「おのが心地にかしこしと思ふ人のほめたる、うれしやと思ふと、告げ聞かするならむ」とのたまはする御けしきも、いとめでたし。 訳文：先夜の来訪のことを言うのだからと胸がどきっとしたけれど、「そのうち落ちついて、ゆっくりとお部屋に伺いましょう」と言って立ち去るので、帰って御前に伺ったところ、「それで、何事だったのか」と仰せあそばすので、生昌が申したことをこれこれしかじかと申しあげると、女房たちは、「わざわざ申し入れをして、呼び出さなければならぬことではないのに。偶然端の方か部屋などに下がっている時にでも言えばよいのに」と言つて笑うので、中宮様は、「自分の気持の中ですぐれている人と思っているその人がほめたのを、そなたも多分うれしいと思うだろうというつもりで、話して聞かせたのでしょ」と仰せあそばすご様子も、たいへんすばらしい。
40	清少納言「枕草子」 (二五 人にあなづらるるもの P.68)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	自分の恋人である男性→以前 に關係のあつた女 対等 男→女	なし	なし	今まゐりのさし越えて物知り顔に教へやうなる事言ひ、うしろ見たる、いとにくし。わが知る人にてある人の、はやう見し女のことほめ言ひ出でなどするも、ほど経たることなれど、なほにくし。 訳文：新参者がもとからいる人をさし越えて、物知り顔で教えるようなことを言い、世話をやいているのは、とてもにくらいしい。今の自分の恋人である男性が、以前に關係のあつた女のことをほめて口に出して言いなどするの、それはもう、時がたつてしまつてはいるけれど、やはりにくらいしい。
41	清少納言「枕草子」 (三〇 檳榔毛は P.74)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	不問→車 不問 不問→もの	①	なし	久しう会はざりつる人の、詣で会ひたる、めづらしがりて、あ寄り、物言ひ、うなづき、をかき事など語り出でて、扇広うひろげて、口にあてて笑ひ、よく装束したる数珠がいまぐり、手まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして、車のあしよしほめそしり、なにがしにてその人のせし八講、経供養せしこと、とありしこと、かかりしこと、言ひくらべゐたるほどに、この説経の事は、聞きも入れず。 訳文：長い間会わないでいた人の、参詣に来会せたのを、珍しがつて、寄つて座り、話をし、うなずき、おもしろいことなど話し出して、扇を広ぐひろげて、口に当てて笑ひ、たくさん飾りをつけてある数珠をまさぐつて、手でいじりまわし、あちらこちらに目をやりなどして、車の悪いいをほめたりけなししたり、某の場所で何の某が行つた法華八講、経供養をしたこと、こうしたこと、ああしたことを比較してどうのこうのと、座り込んでしゃべっているうちに、この説経のことは耳に入れようとしなない。いや、なに、いつも聞くことなのだから、耳慣れて、きつと珍しくもないのであらう。
42	清少納言「枕草子」 (七二 ありがたきもの P.127)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	めつたにないもの	①	舅→姉 上下 男→男	④	なし	ありがたきもの 舅にほめらるる姉。また、姑に思はるる嫁の君。毛のよく抜くるしるがねの毛抜き。主そしらぬ従者。つゆの癖なき。かたち、心、ありさますぐれ、世に経るほど、いささかのきずなき。同じ所に住む人の、かたみに恥ぢかはし、いささかの隙なく用意したりと思ふが、つひに見えぬこそ、かたけれ。物語、集など書き写すに本に墨つけぬ。 訳文：めつたにないもの 舅にほめられる姉。また、姑にかわいがられる嫁君。毛がよく抜ける銀の毛抜き。主人の悪口を言わない従者。ほんのちよつとした癖もない人。のすきもなく氣をつけていると思う人が、結局見られない事実からすると、本当にこういう人はめつたにないのだ。物語や歌集など、書き写す時にもとの本に墨をつけないこと。
43	清少納言「枕草子」 (七八 頭中将のすずろなるそら言を聞きて P.134)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	人前の人間	①	不問→私 不問 不問→女	③	B	頭中将のすずろなるそら言を聞きて、頭中将のすずろなるそら言を聞きて、いみじう言ひおとし、「なにしに人と思ひほめけむ」など、殿上にていみじうなむのたまふと聞くにも、はづかしけれど、「まことならばこそあらめ、おのづから聞きなほしたまひてむ」と笑ひてあるに、黒戸の前などわたるにも、声などするりは、袖をふたぎてつゆ見おこせず、いみじうにくみたまへば、ともかうも言はず、見も入れて過ぐすに、二月つごもり方、いみじう雨降りてつれづれなるに、御物忌に籠りて。 訳文：頭の中将が、いいかげんなわたしに関する根も葉もないうわさ話を聞いて、わたしをひどく言いけなし、「どうして一人前の人間と思つてほめたのだろう」などと、殿上の間でわたしをひどくおっしゃる、と聞くのも、氣おくれを感じるけれど、「うわさが本当のことならともかくして、自然きつとお思い直しになるだろう」と、笑つてそのままにしていたのだが、頭の中将は黒戸の前などを通る時にも、わたしの声などがする時には、袖で顔をふさいで、全然こちらに視線を送らうともせず、ひどくおにくみになるので、わたしはどうもうこうも言わず、そちらの方には目も向けなくて過すうちに、二月の末、ひどく雨が降つて所在ない折に、宮中の御物忌に頭の中将が籠つて。
44	清少納言「枕草子」 (七八 頭中将のすずろなるそら言を聞きて P.139)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	なのめにだにあらず、	①	そこの人→私 不問 不問→女	③	C	持て来たりたびは、いかならむと胸つぶれて、まことにわるからむは、せうとのためににもわるかるべしと思ひしに、なのめにだにあらず、そこの人のほめ感じて、『せうとこち来、これ聞け』とのたまひしかば、下心地はいとうれしけれど、『さやうの方に、さらにえ候ふまじき身になむ』と申ししかば、『言加へよ、聞き知れどにはあらず。ただ人に語れとて聞かするぞ』とのたまひしになむ、すこしくちをしきせうとおぼえにはべりしかども、 訳文：二度目に返事を持って来た時は、どうなのだろうと胸がどきつとして、本当にその返事がまづかつたとしたら、このきょうだいのためにも不面目なことにはおこらないと思つたのに、一通りどころではないいたできばえて、大勢の人がほめて感心して、『きょうだいよ、こつちに来なさい。これを聞けよ』とおっしゃつたので、内心はたいへんうれしいけれど、『そうした文雅の方面には、いっこうお仲間入りできそうにない身でございます』と申しあげたところ、『批評をせよ、聞いて理解したりしろというのはない。ただ、人に吹聴しろということで聞かせるのだよ』とおっしゃつたのは、少し残念なきょうだいの評面でございましたけれども、
45	清少納言「枕草子」 (八四 めでたきもの P.167)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	不問→博士の才ある人の作品 不問 不問→男(もの)	①	なし	博士の才あるは、めでたしといふもおろかなり。顔にくげに、いと下薦なれど、やむごとなき人の御前に近づきまゐり、さべき事など問はせたまひて、御書の師にて候ふは、うらやましくめでたしこそおぼゆれ。顧文、表、物の序など作り出だしてほめらるるも、いとめでたし。 訳文：博士の才学のある人は、立派だというの一通りすぎるほどすばらしい。顔はにくらしそうであり、身分もとても低いけれども、高貴な方の御前に近く参上し、しかるべきことなどおたずねあそばされて御侍談として伺候するのは、うらやましくすばらしいものと感じられる。顧文、表、またしかるべき詩歌の序などを作り出してほめられるのも、とてもすばらしい。
46	清少納言「枕草子」 (八七 細太刀に平緒つけて、清けなるをのこ P.174)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	不問→女房の居たるさま 不問 不問→女	⑤	なし	行事の蔵人の掻練襲、物よりことにきよらに見ゆ。襦など敷きたれど、なかなかえものほり居ず、女房の居たるさま、ほめそしり、このころはこと事なかめり。 訳文：行事の蔵人の掻練襲は、何物にもましてきれいに見える。襦などが敷いてあるけれど、かえつてその上に座っていることもできず、女房が座っているありさまを、ほめたりけなしたりして、このころは他のことは念頭にないようだ。
47	清少納言「枕草子」 (九二 かたはらいたきもの P.181)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	人→わが歌 不問 不問→女(もの)	①	なし	才ある人の前にて、才なき人の、物おぼえ声に、人の名など言ひたる。ことによしとおおぼえわがが歌を人に語りて、人のほめなどしたるよし言ふも、かたはらいたし。 訳文：才学のすぐれている人の前で、才学のない人が、いかにも物を知っているような声で、古人の名など言っているの。とりわけでよいとも思われない自分の歌を人に話して、人がほめたりした次第を言うのも、聞いてはいられない感じがだ。

48	清少納言「枕草子」 (一二七 二月、官の司に P.239)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	めでたくも書きたるかな。をかしくしたり	②	中宮様→下男が書いた立て文 上下 男→男	①	なし	「この男はみづからまゐらむとするを、屋はかたちわろしとてまゐらぬなめり」と、いみじうをかしげに書いたまへり。御前にまゐりて御覽ぜさすれば、「めでたくも書きたるかな。をかしくしたり」などほめさせたまひて、解文は取らせたまひつ。「返事いかがすべからむ。この餅餠持て来るには、物などや取らずらむ。知りたらむ人もがな」と言ふを聞しめして、「惟仲が声のしつるを。呼びて問へ」とのたまはすれば、端に出て、「左大弁に物聞えむ」と、待して呼ばせたらば、いとよくうるはしく来たり。 訳文:「この下男は自分自身で参上しようとするのですけれど、屋は顔がみつともないと言って参上しないようです」と、たいへん美しく見える筆跡で書きになってある。中宮様の御前に参上して御覧に入れると、「なんとすばらしく、書いてあることでしょう。おもしろい趣向がこらしてある」などとおほめあそばされて、その解文はお手もとにお取りあそばされてしまった。「返事はどうしたらよいのかしら。この餅餠を持って来る時には、使いに禄など与えるのだろうか。知っている人がいるといいのに」と言うのを中宮様がお聞きあそばして、「惟仲の声がしたけれど。呼んで聞いてごらんと」仰せあそばすので、部屋の手端に出て、わたしは「左大弁にお話し申し上げたい」と、待をして呼ばせると、たいへん威儀を正してやって来た。
49	清少納言「枕草子」 (一三〇 頭弁の、職にまゐりたまひて P.246)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	頭弁→私 上下 男→女	なし	なし	「頭弁はいみじうほめたまふとは知りたりや。一日の文に、ありし事など語りたまふ。思ふ人の、人にほめらるるは、いみじうれしき」など、まめめしうのたまふもをかし。 訳文:「頭の弁がひどくほめていらっしゃることは知っていますか。先日わたしへの手紙に、この間のことなどを書いていらっしゃる。わたしの思いを寄せている人が、人にほめられるのは、ひどくうれしいこと」などと、いかにも真剣におっしゃるのもおもしろい。
50	清少納言「枕草子」 (一三一 五月ばかり、月もなういと暗きに P.249)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	殿上人→女房 上下 男→女	なし	なし	つとめて、いとく少納言の命婦といふが、御文まゐらせたるに、この事を啓したりければ、下なるを召して、「さる事やありし」と問はせたまへば、「知らず。何とも知らではべりしを、行成の朝臣の取りなしたるにやはべらむ」と申せば、「取りなすとも」とて、うちゑまされたまへり。誰が事を、殿上人ほめけり」など聞しめすを、さ言はるる人をまよこばせたまふもをかし。 訳文:翌朝、たいへん早く、少納言の命婦という人が、主上のお手紙を中宮様に差しあげた時に、ついでにこのことを申しあげたので、中宮様は、局におりているわたしをお呼び寄せになって、「そんなことがあったのか」とおたずねあそばすので、「存じません。何とも知らないでございましたのを、行成の朝臣がそんなふうになわざとこしらえて受け取ったのでございましょうか」と申しあげると、中宮様は、「わざとこしらえたとしても」と言つて、にこにこしておいであそばす。中宮様は、お仕える女房のだれのことをでも、殿上人がほめたとお聞きあそばすと、そう言われた人のことを、お喜びあそばすのもおもしろい。
51	清少納言「枕草子」 (二五八 うれしきもの P.388)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	人→思ふ人 不問 不問	なし	なし	遠き所はさらなり、同じ都のうちながらも隔たりて、身にやむごとく思ふ人のなやむを聞きて、いかにいかにとおぼつかなき事を嘆くに、おこたりたるよし消息聞くもいとうれし。思ふ人の、人にほめられ、やむことなき人などの、くちをしからぬものにおぼしのたまふ。 訳文:遠い所はもちろんのこと、同じ都のうちながらもでも離れていて、自分の身にとっては大切な人と思う人が病氣であるのを聞いて、どうだろうか、どうだろうかと不安な思いにため息をついている時に、快方に向っているという旨の知らせをもらったのも、とてもうれしい。自分の愛している人が、人にほめられ、高貴な方などが、まんざらでもないものにお思いになり口に出しておっしゃるの。
52	清少納言「枕草子」 (二七四 成信の中将は、入道兵部卿宮の御子にて P.426)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	人→男 不問 不問→男	なし	なし	物見知り、思ひ知りたる女の、心ありと見ゆるなどを語らひて、あまた行く所もあり、もとよりのよすがなどもあれば、しげくも見えぬを、なほさるいみじかりしをりに来たりし、など、人にも語りつがせ、ほめられむと思ふ人のしわざにや。 訳文:物事を見知り、またわきまえ知っている女で、情趣も解するとみえる、そういう女とねんごろになって、ほかにたくさん通い所もあり、また元来の本妻などもあるの、頻繁にも通つて来ないのに、やはりそんなにひどい雨の折にやって来たことよ、などと人にも語り継がせ、わが身をほめられようと思う男のすることなのであろうか。
53	清少納言「枕草子」 (二九一 よろしき男を、下衆女などのほめて P.445)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	いみじうなつかしうおはします	①	下衆女→よろしき男 下上 女→男	④	なし	よろしき男を、下衆女などのほめて、「いみじうなつかしうおはします」など言へば、やがて思ひおとされぬべし。そしらるるは、なかなかよし。下衆にほめらるるは、女だにいとわろし。また、ほむるままに言ひそこなひつるものは。 訳文:相当な身分の男を、下衆女などがほめて、「たいへん親しみの感じられる方であらう」などと言うと、人はそのままさっそくその男を軽蔑するようになってしまふにちがいない。悪口を言われるのは、かえってよい。下衆の者にほめられるのは、女でさえあまりよくない。また、下衆の者はほめるうちに、言いそこなってしまうものなのだから。
54	清少納言「枕草子」 (一二九 故殿の御ために、月ごとの十日 P.243)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	連中→そういう人 不問 不問	②	なし	上の御前などにても、やくとあづかりてほめきこゆるに、いかでか。ただおぼせかし。かたはらいたく、心の鬼出で来て、言ひにくくなりはべりなむ」と言へば、「などで。さる人をしもこそ、めよりほかに、ほむるたぐひあれ」とのたまへば、「それがにくからずおほえばこそあらめ。男も女も、け近き人思ひ、方ひき、ほめ、人のいささかあしき事など言へば、腹立ちなどするがわびしうおぼゆるなり」と言へば、「たのもしげな事や」とのたまふも、いとをかし。 訳文:主上の御前などでも、私が役目のようにして、あなたさまをおほめ申しあげるのに、どうして、そんな親しい仲になれましょうか。かわいいと思ひになつてだけいてくださいまし。さもないと、いたたまれない思ひで、気がとがめて、ほめことばもきつと口に出しにくくなりましょうものを」と言う、中將は「どうして。そういう人をこそ、よそ目以上に、ほめる連中がいるのだ」とおっしゃるので、「そうしたことが、私にはどうも具合悪いと感じられないのなら、それでもよいでしょうが……」。男でも女でも、近しい人を大事にし、ひいきして、ちょっとした欠点を人が言う、腹を立てたりなどするの、何ともやりきれなく思われるのです」と言う、中將は「頼りにできそうもないような言いぐさだねとおっしゃるのも、とてもおもしろい。
55	清少納言「枕草子」 (二四三 ことに人に知られぬもの P.376)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	言われた人→「あのおもと」「君」 を言ってくれた人 不問 不問	⑥	なし	かうおぼゆればにや、「あまり見そす」など言ふも、人わろきなるべし。殿上人、宰相などを、ただ名のる名を、いささかつつましげならず言ふは、いとかたはなるを、清うさ言はず、女房の局なる人をさへ、「あのおもと」「君」など言へば、めづらかにうれしと思ひて、ほむる事ぞいみじき。殿上人、君達、御前よりほかにては官をのみ言ふ。 訳文:こんなふうになつた人には感じられるからだろうか、人の言葉とがめをするので、「あまりおせっかいをやきすぎる」などと人が言うのも、きつと体裁が悪いからにちがいない。殿上人や参議などを、ただその実名を、少しも遠慮もなげに言うのは、ひどく聞き苦しいものであるが、はっきりとその名を言つたりしないで、女房の局に召し使われているような身分の女をまで、「あのおもと」とか「君」などと言うと、言われた人は、めったにないことであらうと思つて、そう言ってくれた人をほめることはたいへんなものである。殿上人や若君達のことを言う時は、尊いお方の御前以外では、官名だけを言う。
56	清少納言「枕草子」 (二九一 よろしき男を、下衆女などのほめて P.445)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	いみじうなつかしうおはします	①	下衆女→よろしき男 下上 女→男	④	なし	よろしき男を、下衆女などのほめて、「いみじうなつかしうおはします」など言へば、やがて思ひおとされぬべし。そしらるるは、なかなかよし。下衆にほめらるるは、女だにいとわろし。また、ほむるままに言ひそこなひつるものは。 訳文:相当な身分の男を、下衆女などがほめて、「たいへん親しみの感じられる方であらう」などと言うと、人はそのままさっそくその男を軽蔑するようになってしまふにちがいない。悪口を言われるのは、かえってよい。下衆の者にほめられるのは、女でさえあまりよくない。また、下衆の者はほめるうちに、言いそこなってしまうものなのだから。

57	清少納言「枕草子」 (一本 きよしと見ゆるものの次に この草子、目に見え心に思ふ事を P.468)	平安時代(1001年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	人→もの 不問 不問→もの	なし	なし	おほかた、これは世の中にをかしき事、人のめでたしなど思ふべき、なほ選り出でて、歌などをも、木、草、鳥、虫をも言ひ出したらばこそ、「思ふほどよりはわろし。心見えなり」とそしられめ、ただ心一つにおのづから思ふ事をたはぶれに書きつけたれば、物に立ちまじり、人並み並みなべき耳をも聞くべきものかと思ひしに、「はづかし」なんどもぞ、見る人はしたまふなれば、いとあやうしあるや。げに、そもことわり、人のにくむをよしと言ひ、ほむるをもあしと言ふ人は、心のほどこそおしはかるれ。ただ、人に見えけむぞねたき。 訳文：大体これは、世の中においておもしろいこと、人がすばらしいなどと思うはずのことについて、やはり選び出して、また、歌などについてをも、木や草や鳥や虫のことをも書き記してあるのならばこそ、「考えていたのよりはよくない。考えのほどもわかった」とそしられもしようが、そうではなくて、わたしの心の中だけで自然と考えることを、たわむれに書きつけてあるのだから、ほかの著作に立ちまじって、人並々に扱われるような評判をも聞くようなものであるはずがないと思ったのに、「読み手が気おくれするほどすばらしい」などと、読む人はおつしやるそうなので、とても奇妙な感じがする。だが、なるほどそれも道理で、人のにくむものをよいと言い、ほめるものをも悪いと言う人については、そういう人の心度がおしはかれるというものだ。だから、わたしとしてはこの草子がただ、人に見られたというのがいいまいいのだ。
58	紫式部「少女(源氏物語)」 (源氏物語(扉) 少女(扉) 「少女」巻名・梗概 〔一〕源氏、朝顔の姫君と贈答 姫君の態度 P.18)	平安時代(1001～10年ごろ成立)	フィクション(三人称)	この君の、昨日今日の児と思ひしを、かくおとなびてとぶらひたまふこと。容貌のいともきよなるに添へて、心さへこそ人にはことに生ひ出でたまへれ	②	女五の宮→源氏 下上 女→男	⑥	なし	「この君の、昨日今日の児と思ひしを、かくおとなびてとぶらひたまふこと。容貌のいともきよなるに添へて、心さへこそ人にはことに生ひ出でたまへれ」とほめきこえたまふを、若き人々は笑ひきこゆ。こなたにも 対面したまふをりは、女五の宮「この大臣の、かくいとねむごころに聞こえたまふめるを、何か、いま始めたる御心ざしにもあらず。故宮も、筋異になりたまひて、え見たまつたりたまはぬ嘆きをしたまひては、思ひたしことをあなたがちにもて離れたまひしことなどのたまひ出でつつ、悔しげにこそ思したりしをりをりありしか。 訳文：「この君が、つい昨日今日まで子供と思っておりましたものを、こうも一人前になられて、お見舞くださるのですね。お顔だちがなんとも美しいうえに、氣だてまでも人よりはすぐれてご成人なさったことです」とおほめ申されるのを、若い女房たちは笑い申しあげている。宮は、前斎院の姫君にお会いになる折には、「この大臣が、こうしてほんとに熱心にお手紙をさしあげておられるようですが、いえなに、これは今に始まったご執心ではないのです。亡き父宮も、あのお方が他家の嬢におなりになったので、こちらでお世話申すこともできなくなつたとお嘆きになっては、『せつかく自分がそのつもりでいたものを、姫君ご本人が強情にもとりあわれなかつたためだ』などとたびたび仰せ出されて、いかにも残念がつておいでの折々がありました。
59	紫式部「夕霧(源氏物語)」 (夕霧(扉) 「夕霧」巻名・梗概 〔二九〕夕霧六条院にいたり、花散里・源氏と対面 P.470)	平安時代(1001～10年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なほ南の殿の御心用ゐこそ、さまさまにありがたう、さてはこの御方の御心などこそは、めでたきものには見たてまつりはてはべりぬれ	②	夕霧→花散里、紫の上 下上 男→女	④	なし	さがなく、事がましきも、しばしはなまむつかしう、わづらはしきやうに憚らることあれど、それにしも従ひはつまじきわざなれば、事の乱れ出で来ぬる後、我も人も憎げにあきたしや。なほ南の殿の御心用ゐこそ、さまさまにありがたう、さてはこの御方の御心などこそは、めでたきものには見たてまつりはてはべりぬれ」など、ほめきこえたまへば、笑ひたまひて、花散里「ものの例に引き出でたまふほどに、身の人わろきおぼえこそあらはれぬべう。さてをかしきことは、院の、みづからの御癖をば人知らぬやうに、いさかあだあだしき御心づかひをば大事と思いて、戒め申したまふ、後言にも聞こえたまふめるこそ、さかしだつ人の己が上知らぬやうにおぼえはべれし」とのたまへば。 訳文：ロやかましくて事を荒だてがちなもの、しばらくの間は何やらうさく面倒なものですから、つい遠慮されるものですが、いつまでも言いなりになっているわけにもいかないことです。何か一悶着でも起るとなると、こちらで相手もお互いに憎らしく、愛想も尽きるものです。やはり南の御殿の紫の上のお心づかいこそ何かにつけてまたとなくご立派ですし、それからまたこちら様のお心がけが、つくづくおみごとなものと拝見しております」などとおほめ申されるので、上は苦笑なさって、「なんぞ引合ひしにくださって、この私の体裁のわるい評判が表に出します。それはともかく、おもしろいことには、院がご自分のお癖をどなたも知らないかのように棚上げなさって、ほんの少しばかりあなたに浮氣めいたおふるまいがみえると、大騒ぎなさって、ご意見を申されたり、陰口にも申されるようですが、とかく賢ぶる人が自分のこととなると何とも分らないものだという気がいたします」とおつしやるので。
60	紫式部「葵(源氏物語)」 (源氏物語(扉) 葵(扉) 「葵」巻名・梗概 〔六〕見物の人々源氏の美しさを賛嘆する P.26)	平安時代(1001～10年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	若き人々→源氏 下上 女→男	⑤	なし	姫君は、年ごろ聞こえわたりたまふ御心ばへの世の人に似ぬを、なのめならむにてににあり、ましてかうしもいかで、と御心とまりけり。いとど近くて見えむまでは思しよらず。若き人々は、聞きにききまでめできこえあへり。 訳文：姫君は、何年となくずっとお便りをお寄せ申しいらつしやる君のお気持が常の人とは格別なのを、相手が平凡な男だったとしても情にほだされることもあらうに、まして、どうしてこうまでも、とお心を動かされるのだった。それでも、今まで以上に近しくてお目にかかうというお気持にまではおなりにならない。おそばの若い女房たちは、聞き苦しいくらいに君をおほめ申しあげている。
61	紫式部「明石(源氏物語)」 (明石(扉) 「明石」巻名・梗概 〔八〕初夏の月夜、源氏琴を弾き、入道と語る P.240)	平安時代(1001～10年ごろ成立)	フィクション(三人称)	さらに、背きにし世の中もとり返し思ひ出でぬべくはべり。後の世に願ひはべる所のありさまも、思うたまへやらる夜のさまかな	③	入道→源氏の琴の音 下上 男→男	①	なし	入道「さらに、背きにし世の中もとり返し思ひ出でぬべくはべり。後の世に願ひはべる所のありさまも、思うたまへやらる夜のさまかな」と泣くめできこゆ。わが御心にも、をりをりの御遊び、その人かかの人の琴笛、もしは声の出でしま、時々につけて世にめでられたまひしありさま、帝よりはじめてまつりて、もてかしづきあがめたてまつりたまひしを、人の上もわが御身のありさまも思し出でられて、夢の心地したまふまに、掻き鳴らしたまへる声も心すぐく聞こゆ。 訳文：入道は、「ひとたび捨ててしまひました俗世間のことも、あらためて昔に返って思い出されそうでございます。来世で生れ変りたいと願っておりまづ種業の有様を、しぜんと思像せずにはいられませうな今宵の風情でございます」と、感涙を流しておほめ申しあげる。君ご自身のお気持にも、折々の音楽のお遊びや、その人この人の琴笛の音、あるいは謡いぶり、またその時々につけて世人の賞賛を集められたご自身の有様――帝をはじめ申して、多くの人からたいせつに扱われ、敬われておいでになったことなどを、人々のこともわが身の有様も思い出さずにはいらつしやれなくて、まるで夢のようなお気持になられるまに、琴をかき鳴らしておいでになると、その音色も恐ろしいまでに冴えまきまつて聞えるのである。
62	紫式部「明石(源氏物語)」 (明石(扉) 「明石」巻名・梗概 〔八〕初夏の月夜、源氏琴を弾き、入道と語る P.244)	平安時代(1001～10年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	入道→源氏の拍子・声 下上 男→男(もの)	①	なし	伊勢のなら海ねど、清き渚に見や恰はむなど、声よき人にうたはせて、我も時々拍子とりて、声うち添へたまふを、琴弾きさしつめてできこゆ。御くだものなだめづらしきまににたまあらせ。人々に酒強ひそしなどして、おのづからもの忘れしぬべき夜のさまなり。 訳文：ここは伊勢の海ではないけれども、「清き渚に見や恰はむ」などと、声の美しい人に謡わせ、君ご自身も、ときおり拍子をとって、お声を合されるので、入道はいくたびか弾く手を休めては、おほめ申しあげる。お菓子などを珍しい趣向に作ってさしあげ、お供の人々には酒を無理に勧めたりして、おのずと憂き世の思いを忘れてしまひそうな今宵の風情である。
63	紫式部「常木(源氏物語)」 (〔六〕左馬頭、夫婦間の寛容と知性を説く P.66)	平安時代(1001～10年ごろ成立)	フィクション(三人称)	心深しや	①	不問→女 不問 不問→女	⑤	なし	心ざし深からむ男をおきて、見る目の前につらきことありとも、人の心を見知らぬやうに逃げ隠れて、人をまだはし心をも見むとするほどに、長き世のもの思ひになる、いとあぢきなきことなり。『心深しや』などほめたてられて、あはれ進みぬればやがて厄になりぬかし。 訳文：けつして情愛の浅くはない男を見捨てて、たとえ当面恨めしいことがあったにしても、その男の気持が分らぬかのように逃げ隠れて、相手を困らせ、その本心を探ってみようとしているうちに、一生の後悔の種をまくことになるのは、じつにつまらぬことです。『こうまで決心なさって』などとほめたてられて、気持がつのってくると、そのまま厄になつたりします。
64	紫式部「夕顔(源氏物語)」 (〔二一〕空蟬、伊予国に下向、源氏、錢別を贈る P.195)	平安時代(1001～10年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	不問→帝の皇子 下上 不問→男	なし	なし	かやうのくくだしきことは、あなたがちに隠ろへ忍びたまひしもいとほしくてみなもらしどめたるを、など帝の皇子ならんからに、見ん人さへかたほならずものほめがちなると、作り事めきてとりずるものしたまひければなん。あまりもの言ひさがなき罪避りどころなく。 訳文：このようなくくだした煩わしい話は、君がひたすら内密にしていらつやつたのおお気の毒で、残らず書くのをさし控えていたのだけれど、帝のお子だからといって、どうして、それを知っている人までが、欠点もないかのように、とかくほめてばかりいるのかと、この物語を作りごめいていと取り沙汰する人がおありだったものだから……。あんまりおしゃべりが過ぎるというお警めは、のがれようもないことで……。
65	紫式部「賢木(源氏物語)」 (〔三二〕源氏と三位中将、文事に憂悶の情を慰める P.142)	平安時代(1001～10年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	不問→源氏の御事 下上 不問→男	なし	なし	「時ならでけき咲く花は夏の雨にしをれにけらしにほふほどなくおとろへにたるものを」と、うちさうどきて、らうがはしく聞こしめしなすを、咎め出でつつ強ひきこえたまふ。多かめりし言どもも、かうやうなるをりのまほならぬこと数々に書きつく、心地なきわざとか、貴之が諫め、たうる方にて、むつかしければとどめつ。みなこの御事をほめたる筋にのみ、大和のも唐のも作りつづけた。 訳文：時ならで……。(時季にあわずに今朝咲く花は、咲きにおう時もなく夏の雨でおれてしまつたらしい)このわたしもすっかり衰えてしまつたのに」と、それでも陽氣にふるまって、中將の歌を出ませたことをと、わざとひがんでおとりになるので、中将はそれを何度も咎めだてては、無理にお酒をおすすめ申される。人々の詠んだ歌は数多くあつたようだが、このような折のあまり上手でもないのをいくつも書きつけるのは思慮のない態度とか、貴之の戒めていることでもあり、その戒めに従うことにして、わずらわしいことなので省くことにした。誰も彼もみなこの君のことを賞賛する意味のものばかり、和歌にも漢詩にも次々と詠んでいる。

66	紫式部「朝顔（源氏物語）」	平安時代（1001～10年ごろ成立）	フィクション（三人称）	いときよらにねびまさりたまひにけるかな。童にもものしたまへりしを見たてまつりそめし時、世にかかる光の出でおはしたること驚かれはべりしを、時々見たてまつるごとに、ゆゆしくおほえはべりてなむ。内裏の上なむいとよく似たてまつらせたまへると人々聞こゆるを、さりともし劣りたまへむとこそ推しはかりはべれ	②	女五の宮一甥の源氏 上下 女→男	⑥	なし	<p>女五の宮「いときよらにねびまさりたまひにけるかな。童にもものしたまへりしを見たてまつりそめし時、世にかかる光の出でおはしたること驚かれはべりしを、時々見たてまつるごとに、ゆゆしくおほえはべりてなむ。内裏の上なむいとよく似たてまつらせたまへると人々聞こゆるを、さりともし劣りたまへむとこそ推しはかりはべれ」と、ながながと聞こえたまへば、ことにかくさし向かひて人のほめぬわざかなと、をかくし思す。源氏「山がつになりて、いたう思ひくつづればはべりし年ごろの後、こよなく衰へにてはべるものを。内裏の御容貌は、いにしへの世にも並ぶ人なくやとこそ、ありがたく見たてまつりはべれ。あやしき御推しはかりになむ」と聞こえたまふ。</p> <p>訳文：女五の宮「ほんとにご立派に成人あそばしました。まだ小さくていらっしゃったあなた様をはじめとお見受け申したとき、この世によくごこのような光り輝くばかりの方がお生れになったものと驚かすにはいられませんでしたが、ときおりお目ににかかるたびごとに、ただそら恐ろしい思いでございました。今の帝がほんとによく似通い申されると、人々がお噂申しあげてありますが、そうはいってもあなた様にはやはり見劣りあそばすことと推察しております」と、長々とお話しになるので、こうして面と向ってことさらに相手をほめそやすものでもないのに、君はおかしく思いになる。源氏「山賊となつて、すっかり難洗いたしました幾年からこのかた、すっかりやつれてしまっておりますものを。帝の御容姿は昔の世にも肩を並べる人はなからうと思われるくらい、世に類のないお方と拝見しております。とんでもないご推察というものでございます」とお申しあげになる。</p>
67	紫式部「少女（源氏物語）」 （〔二五〕五節の日 源氏、五節の君を思い歌を贈る P.62）	平安時代（1001～10年ごろ成立）	フィクション（三人称）	舞姫の容貌、大殿と大納言殿とはすぐれたりとめでのしげなることは、なほ大殿のにはえ及ぶまじかりけり。	①	人々→舞姫 不問 不問→女	③	なし	<p>五節の参る儀式は、いづれとなく心々に二なくしたまへるを、舞姫の容貌、大殿と大納言殿とはすぐれたりとめでのしげなることは、なほ大殿のにはえ及ぶまじかりけり。ものきよげにいまきめて、そのものとも見ゆまじうしたてたる様体などのありがたうをかしげなるを、かうほめらるるなめり。例の舞姫どもよりはみならずこしおとなびつつ、げに心ことなる年なり。</p> <p>訳文：五節の舞姫が参入する儀式は、それが特にというのではなく、それぞれにまたとない支度をととのえていらっしゃるが、舞姫の器量では、源氏の大臣のと按察大納言のとがぬきんでいると、人々がほめそやしている。いかにもそのとおり、二人ともまことに美しかったけれど、おっとりとしてかわいらしげな点では、やはり大臣の舞姫には及ぶべくもないのだった。どことなくきれいではなやかな感じであつて、そうした身分の娘とも見えないくらいに装いたてた姿かたちなどが類まれな美しさなので、こうも評判が高いのであろう。今年の舞姫たちは例年のよりもみな少し大人びていて、いかにも格別な年である。</p>
68	紫式部「少女（源氏物語）」 （〔二六〕夕霧、惟光の娘に消息 惟光よろこぶ P.66）	平安時代（1001～10年ごろ成立）	フィクション（三人称）	いかにうつくしき君の御され心なり。きむちらは、同じ年なれど、言ふかひなくはかなかめりかし	②	惟光→若君 下上 男→男	⑤	なし	<p>兄弟「殿の冠者の君のしかじかのたまうてたまへる」と言へば、なごりなくうち笑みて、惟光「いかにうつくしき君の御され心なり。きむちらは、同じ年なれど、言ふかひなくはかなかめりかし」などほめて、母君にも見す。惟光「この君達の、すこし人数に思しぬべからましは、宮仕よりは、奉りてまゐ。殿の御心おきてを見るに、見そめたまひてん人を、御心とは忘れたまふまじきにこそ、いと頼もしけれ。明石の入道の例にやならまし」など言へど、みないそぎたちになり。</p> <p>訳文：「殿の冠者の君がしかじかおっしゃつてお渡しになったのです」と言うので、惟光はうつて変った笑顔になって、「なんとかわいらしい若君のお戯れではないか。そなたたちは同年のくせに、どうしようもないくらい頼りないことだぞ」などと若君をほめて、母君にもこれを見せる。惟光は、「この若君が娘を少しは一人前に認めてくださるというのなら、宮仕えよりも、いっそこちらにさしあげようではないか。殿のなさることをみると、お見初めになったような人を、ご自分からはお忘れになるまいとなさる、それが、じつに頼もしいことなのだ。明石の入道の例のようにもならうものを」などと言うけれども、皆は宮仕えの支度にかかりきっていたのであつた。</p>
69	紫式部「胡蝶（源氏物語）」 （〔五〕紫の上、玉鬘に対する源氏の心を察する P.183）	平安時代（1001～10年ごろ成立）	フィクション（三人称）	あやしうなつかしき人のありさまにもあるかな。かのいにしへのは、あまりはるけどころなくぞありし。この君は、もののありさまも見知りぬべく、け近き心ざま添ひて、うしろめたからずこそ見ゆれ	②	源氏→女君 下下 男→女	④	なし	<p>源氏「あやしうなつかしき人のありさまにもあるかな。かのいにしへのは、あまりはるけどころなくぞありし。この君は、もののありさまも見知りぬべく、け近き心ざま添ひて、うしろめたからずこそ見ゆれ」などほめたまふ。ただにしも思すまじき御心さまを見知りましたまへれば、思しよりて、紫の上「ものの心得つべくはものしたまふめるを、うらなくしもちとけ頼みきこえたまふらんこそ心苦しけれ」とのたまへば、源氏「など頼もしげなくやはあるべき」と聞こえたまへば、</p> <p>訳文：源氏「不思議と親しみの持てる人柄なのです。亡くなった母君は晴れ晴れとしたところがなさすぎました。この女君は、物事もよく分りそうですし、それになつていいところもあつて、危なげのないお人のように思えます」などとおほめになる。上は、このままお見通しになれそうにもない大臣の君のご性分をよくご存じなので、さてはと感づかれて、「物事をよく見抜くことがおできのようでのに、心の底からすっかり打ち解けてあなたをお頼り申しあげていらっしゃるとはお気の毒ですわ」とおっしゃるので、「どうしてこのわたしが頼りにならないことがありますよう」と申しあげなさんと、</p>
70	紫式部「堂（源氏物語）」 （〔一〇〕源氏と紫の上、物語の功罪を論ずる P.215）	平安時代（1001～10年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	周りの人→娘 不問 不問→女	なし	なし	<p>現の人もさぞあるべかめる。人々しく立てたるおもむき異にて、よきほどに構へぬや。よしならぬ親の心とどめて生ほしたてたる人の、児めかしきを生けるしるしにて、後れたること多かるは、何わさてかしづきしぞと、親のしわざさへ思ひやらるこそいとほしけれ。げにさ言へど、その人のけはひよと見えたるは、かひあり、面だたしかし。言葉の限りまばゆくほめおきたるに、し出でたるわざ、言ひ出でたることの中に、げにと見え聞こゆることなき、いと見劣りするわざなり。すべて、よからぬ人に、いかで人ほめさせじ」など、ただこの姫君の点つかれたまふまじくとよろづに思しのたまふ。</p> <p>訳文：実際の人間も、そういうことがいえそうです。一人前にその人その人が違った主義をもっていて、ちょうど具合よくはふるまえないのです。たしなみのくはくない親がよく注意して育てあげた娘の、こせつかずおおうなのがせめてもの育てがいであつて、そのほかにはいろいろと足りないところが多いというのは、いったいどんなしつけ方をして大事に育ててきたのかと、親のやりかたまで思いやられるのもまったく気の毒なことです。なんといつても、娘を見てさすがにその人にふさわしい感じだなと思われるのは、いかにも育てがいがあるというもので、親の面目も立つものです。まわりの方が口をきわめてきまりわるいくらいにほめちぎつておいたのに、当人の行いや言葉のなかに、それを見たり聞いたりしてなるほどと感心されるようなところのないのは、まったくがっかりするものです。だいたいつまらぬ人には、どうぞして娘をほめさせたくはありませんね」などと、ひたすらにこの姫君が非難をお受けにならぬようにと、何かにつけてお心をつかわれ、また仰せになる。</p>
71	紫式部「真木柱（源氏物語）」 （〔一四〕鬘黒、式部卿宮家を訪れ、冷遇されて帰る P.378）	平安時代（1001～10年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	人→男君 不問 不問→男	なし	なし	<p>鬘黒大将「いと若々しき心地もしはべるかな。思ほし棄つまじき人々もはべればと、のどかに思ひはべりける心のおこたりを、かへすがへす聞こえてもやる方なし。今は、ただなだらかに御覧じゆるして、罪避りどころなう、世人にもことわらせてこそ、かやうにももてないまはめ」など、聞こえわづらひておはす。「姫君をだに見たてまつらむ」と聞こえたまへれど、出だしたてまつるべくもあらず。男君たち、十なるは殿上したまふ、いとうつくし。人にほめられて、容貌などようはあらねど、いとらうらうじう、ものの心やうやう知りたまへり。</p> <p>訳文：大将は、「まったく大人げないお仕打ちのようにも存ぜられます。お見捨てになれるわけもない幼い人々もおりますので、気楽にかまえておりました私の不行届きは、なんともお詫び申しあげようもございません。今は、ただ穏便にお見逃しくださいませ。この私のほうは弁解の余地もないことだと、世間の人によく納得してもらつたうえで、こうした処置をお取りになつたらと思いますが」と、言いわけに苦労していらっしゃる。「せめて姫君だけでもお会いしたい」と申しあげなされるけれど、お出し申すはずもない。男君たちの、十歳になるのは重殿上をしておられるが、それがまことにかわいらしい。評判もよくて、顔たちなどそう秀でているわけではないけれども、じつによくできていて、だんだんと物事の分別もついていらっしゃる。</p>
72	紫式部「若菜 上（源氏物語）」 （〔二七〕若宮成長し紫の上と明石の君の仲睦まじ P.111）	平安時代（1001～10年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	②	人→若宮 不問 不問→男	④	なし	<p>御方の御心おきての、らうらうじく気高くおほどかなるものの、さるべき方には卑下して、憎らにもうけはらぬなどをほめぬ人なし。対の上は、まほならねど、見えかはしたまひて、さばかりゆるしく思したりしかど、今は宮の御徳にいと睦ましくやむごとく思しなりになり。</p> <p>訳文：御方のお心用意が行き届いて、気高くおかではいらっしゃるものの、遜るべきところはちゃんと遜って、憎らしくわが物顔にふるまったりすることがないのを、ほめたたえぬ人はいない。対の上は、あらたまったほどではなくとも顔を合せになつて、あれほどにも許せないお気持ちを抱いていらっしゃつたものを、今では若宮のおかげで、まことに仲よく、たいせつなお方と思うようになっていらっしゃる。</p>
73	紫式部「御法（源氏物語）」 （〔一四〕世の人ことごとく紫の上を追慕する P.516）	平安時代（1001～10年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	世間→紫の上 不問 不問→女	④	なし	<p>「薄墨」とのたまひしよりは、いますこしこまやかにて奉れり。世の中に幸ひありめでたき人も、あいなうおほかたの世にそねまれ、よきにつけても心の限りおごりて人のため苦しき人もあるを、あやしきますですずろなる人にもうけられ、はかなくし出でたまふことも、何ごとにつけても世にほめられ、心にくく、をりふにつけつづらうらうじく、ありがたかりし人の御心ばへなりかし。</p> <p>訳文：昔、「限りあれば薄墨衣」と院はお詠みになったが、このたびは、もう少し濃い色の装服をお召しになっている。この世で幸運に恵まれたご立派な人であっても、一般の世間からはあらずがなにそねまれるものだし、または身分が高ければ、それにつけても有頂天におりたかぶつて、周囲の人を困らせる人もあるものだが、紫の上は、不思議なほどこれといつてかわりがあるでもない人にも評判がよく、なんでもない些細なことをなされるにも、万事世間からほめたえられ、場合場合に応じて奥ゆかしく行き届いて、世にまたとないお人柄だつたのである。</p>

74	紫式部「宿木(源氏物語)」 〔(四八)薫宇治へ行き、来合せた浮舟をかいま見る P.491〕	平安時代(1001～10年ごろ成立)	フィクション(三人称)	まことにあなめでたの物の香や。京人はなほいとこそみやびかにいまめかしけれ。天下にいまじきことと思したりしかど、東国にてかかる薫物の香は、え合はせ出でたまはざりかし。この尼君は、住まひかくすかにおはすれど、装束のあらまほしく、鈍色、青鈍といへど、いときよらにぞあるや	②	年配の女房→尼君 下上 女→女	②③	なし	老人、「まことにあなめでたの物の香や。京人はなほいとこそみやびかにいまめかしけれ。天下にいまじきことと思したりしかど、東国にてかかる薫物の香は、え合はせ出でたまはざりかし。この尼君は、住まひかくすかにおはすれど、装束のあらまほしく、鈍色、青鈍といへど、いときよらにぞあるや」などほめぬたり。あなたの簀子より童来て、「御湯などまゐらせたまへ」ととて、折敷などもとりつづきでさし入る。 訳文：年配の女房が、「本当になんとも結構なお香の薫りですこと。京の人はやはり風流で当世風なのですわ。わたしどもの奥方はご自身ではこの世いちばんの上手とお思いでいらっしゃるけれど、東国ではこんな結構な薫物の香はとても調合なすることはおできになりませんでした。この尼君は、お住いはこうしてごくひそやかにいらっしゃるけれど、お召物は申し分なく、鈍色、青鈍色ときまきものでもほんとにきれいにいらっっしゃいますもの」などとほめている。向こうの簀子から女童がやってきて、「御湯などさしあげてくださいまし」と言って、折敷なども次々とさし入れる。
75	紫式部「宿木(源氏物語)」 〔(四九)薫、弁の尼と対面 浮舟の容姿に感動する P.492〕	平安時代(1001～10年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	女房たち→尼君 下上 女→女	②	B	供人「御心地なやましとて、今のほどうち休ませたまへなり」と、御供の人々心しらひて言ひたりければ、この君を尋ねまほしげにのたまひしかば、かかるついでにもの言ひふれんと思ほすによりて、日暮らしたまふにや、と思ひて、かくのぞきたまふらんとは知らず、例の、御庄の預りどものまゐれる、破子や何やと、こなたにも入れたるを、東国人どもにも食はせなど、事ども行ひおきて、うち化粧じて、客人の方に来たり。ほめつる装束、げにいとかはらかにて、みめもなほよしよしきよげにぞある。弁の尼「昨日おはしつきなんと待ちきこえさせしを、などか今日も日たては」と言ふめれば、 訳文：「大儀でいらっしゃるということで、ちょうど今お寝みになっていらっしゃるようです」と、お供の人々が気をきかせて返事をしておいたので、尼君は、大将殿がこの女君に逢いたいようにいらっしゃるのだから、こうした機会になんぞお話しかけになるおつもりで、日の暮れるのを待っていらっしゃるのだらうかと思い、まさかこんなふうにごき見をしておられようとは知る由もなく――例によって御荘園の預り人たちがさしあげた破子やら何やらと、尼君のほうへも分けてやったのを東国の人たちにも食べさせるなど、あれこれものなしての指図をしておいて、自分も身じまいをとのえて客人のほうへやってきた。あの老女房のほめていた尼君の装束は、いかにもほんとにこざっぱりしていて、みめかたちなどもやはり由ありげにきちんとした感じである。 尼君は、「昨日お着きになりましたようとお待ち申しておりましたのに、どうしてまた今日、それもこんなに日がたてから」と言っているようだが、
76	紫式部「手習(源氏物語)」 〔(二〇)僧都立ち寄る 浮舟懇願して遂に出家する P.336〕	平安時代(1001～10年ごろ成立)	フィクション(三人称)	いとかしこく	①	三宝→女君 上下 不問→女	⑤	なし	あやしく、かかる容貌ありさまを、などで身をいとはしく思ひはじめたまひけん、物の怪もさこそ言ふなりしか、と思ひあはするに、さるやうこそあらめ、今までも生きたるべき人かは、あしきものの見つけそめたるに、いと恐ろしく危きことなり、と思して、僧都「とまれかくまれ、思したちてのたまふを、三宝のいとかしこくほめたまふことなり、法師にて聞こえ返すべきことならず。御忌むとは、いとやすく授けたてまつるべきを、急なることにてまかでたれば、今宵かの宮に参るべくはべり」。 訳文：僧都は、「合点のゆかぬこと、これほどの器量であり容姿に恵まれているものを、どうしてその身を厭わしく思うようになったのであろう。そういえば、物の怪もそんなことを言っていたが」と、あれこれ思い合せてみると、「それなりの子細があつてのことであらう。本来なら今まで生きていられるはずもなかった人なのだ。すでに悪い霊に目をつけられてしまったのだから、このままではまったく恐ろしく危ういことだ」とお思いになつて、「事情はどうであれ、そのように決心しておっしゃるのだから、それは御仏のいかにも殊勝なこととおほめになることですし、法師の身としても反対申すべきことではありませぬ。ご受戒のことはいはいつたてたやすくお授け申すことができますが、今日は急な御用で山を下りてまいりましたので、今晚中に一品の宮に参上しなければならぬのです。
77	紫式部「夢浮橋(源氏物語)」 〔(四)小君、僧都の紹介状を得て帰途につく P.382〕	平安時代(1001～10年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	僧都→この兄弟の童 上下 男→男	なし	なし	僧都も、げにとうなづきて、「いとど暮きこと」など聞こえたまふほどに日も暮れぬれば、中宿もいとよりかぬべけれど、うはの空にてもものしたらんこそ、なほ便なかるべけれ、と思ひわづらひて帰したまふに、この兄弟の童を、僧都、目とめてほめたまふ。薫「これにつけて、まづほのめかしたまへ」と聞こえたまへば、文書きてとらせたまふ。僧都「時々は、山におはして遊びたまへよ」と、「すずろなるやうには思すまじきゆゑもありけり」とうら語らひたまふ。この子は、心も得ぬど、文とりて御供に出づ。坂本になれば、御前の人々すこし立ちあかれて、薫「忍びやかにを」のとたまふ。 訳文：僧都も、なるほどと合点して、「それはいよいよご殊勝なことです」などと申しあげていらっしゃるうちに日も暮れてしまったので、大将は京へ帰る途中、小野に立ち寄つて宿をおとりになるのもちよど好都合のようであるけれど、しかし確かなこともまだはつきりしないままで訪ねていったりしたら、やはり具合がわるかう、と思案にあぐねた末お帰りになるが、そのとき僧都がこの弟の童に目をとめておほめになる。大将が、「この子にことづけて、とりあえず女君に私のことをそれとなくお伝えください」とお申しあげになるので、僧都は手紙を書いてこの小君にお渡しになる。そして、「とききは、この山に遊びにおいでになるがよいと、また、いわれのないことのようにはお思いになれぬわけもあるのですから」と言葉をおかけになる。この童は、なんのことも合点がゆかないけれど、手紙を受け取り、大将のお供をして出立する。坂本までやってくると、前駆の人々は少し離れ離れになり、大将は、「目立たぬようにせよ」とおっしゃる。
78	紫式部「手習(源氏物語)」 〔(一六)母尼和琴を得意げに弾き、一座興ざめる P.321〕	平安時代(1001～10年ごろ成立)	フィクション(三人称)	いとをかしう、今の世に聞こえぬ言葉こそは弾きたまひけれ	②	中将→大尼君 上下 男→女	③	A	みな異ものは声やめつるを、これにのみめでたとと思ひて、母尼「たけふ、ちりちりちり、たりたんな」など、掻き返しはやりかに弾きたる、言葉ども、わりなく古めきたり。中将「いとをかしう、今の世に聞こえぬ言葉こそは弾きたまひけれ」とほむれば、耳ほのほのしく、かたはらなる人に問ひ聞き、母尼「今様の若き人は、かやうなることをぞ好まれざりける。ここに月ごろものしたまふめる姫君、容貌はいときよらにものしたまふめれど、もはら、かかるあだわざなどしたまはず、埋もれてなんものしたまふめる」と、われ賢にうちあざ笑ひて語るを、尼君などはかたはらしいと思す。 訳文：ほかの楽器はみな鳴りをひそめてしまったのを、自分の弾奏にばかり感じ入っていると思ひ込んで、「たけふ、ちりちりちり、たりたんな」などと掻き返し急調子で弾いている。その歌詞のどれもむやみに古めかしい。中将が、「じつにおもしろく、当世ではあまり聞かれない歌をお弾きになりましたな」とほめると、大尼君は耳も遠いので、そばにいる人に聞き返して、「当世の若い人はこうした音楽はたしなまれないですね。ここにこのところいらっしやるらしい姫君も、ご器量はほんとにおきれいのようだけれど、まったくこういうむだな遊び事などなさらずに、引きこもつたままでおられるようです」と、自分だけがえらそうにして声高に笑いながら話しているのを、娘の尼君などはそばではらはらしていらっしゃる。
79	紫式部「紫式部日記」 〔(四)殿の子息三位の君 P.126〕	平安時代(1010年ごろ成立)	評論(一人称)	なし	なし	不問→男君 不問 不問→男	なし	なし	年のほどよりはいとおとなしく、心にくききまして、「人はなほ、心ばへこそ難きものなめれ」など、世の物語しめじめとおはするけはひ、をさなしと人のあなづきこゆるこそ悪しけれと、恥づかしげに見ゆ。うちとけぬほどにて、「おほかる野辺に」とうら誦じて、立ちたまひにしきまこそ、物語にほめたるをこの心地しはべりしか。 訳文：お年のわりにはずっと大人びて奥ゆかしいご様子で、「女性はやはり氣立てがよいということになると、めったにいないもののようなだね」などと、男女にまつわる話などをしんみりとしておいでになるご様子は、まだお稚いなどと、人々があなどり申しているのはほんとうにいけないことだと、こちらが恥づかしくなるほどご立派に見受けられる。あまりうちとけた話にならない程度のところで、「おおかる野辺に」とうたつてお立ちになってゆかれたさまは、それこそ物語の中でほめあげている男君そっくりのような氣持がしました。
80	紫式部「紫式部日記」 〔(四六)人々の容姿と性格 P.192〕	平安時代(1010年ごろ成立)	評論(一人称)	なし	なし	不問→五節の弁(裾) 不問 不問→女(もの)	①	なし	五節の弁といふ人はべり。平中納言の、むすめにしてかしづくと聞きはべりし人。絵にかいたる顔して、頼みたうはれたる人の、まじりいたうひきて、顔もここはやと見ゆるところなく、色白う、手つき腕つきいとをかしげに、髪は、見はじめはべりし春は、丈に一尺ばかりあまりて、ちたうおほかりげなりしが、あさましう分けたるやうに落ちて、裾もさすがにほめられず、長さはすこしあまりてはべるめり。小馬といふ人、髪いと長くはべり。むかしはよき若人、いまは琴柱ににかはさすやうにてこそ里居してはべるなれ。 訳文：五節の弁という人がおります。平中納言が養女にしていじにしていたと聞いている人です。絵に描いたような顔立をして、顔がたいそう晴ればれと広い人で、目尻がとて長く、顔もここはと目にとまるような個性はなく、色白で手つきや腕の様子は実に風情があつて、髪は私が見はじめた春には背丈に一尺ほど余つて豊かにたくさんあつたようでしたが、あきれるほど分取つたように脱げ落ちてしまつて、裾のほうもさすがにほめられたものではなく長さは丈に少し余っているようです。 小馬という人は髪がたいそう長うございました。昔は美しい若女房でしたが、今ではまるで琴柱を膠でつけたように、かたくなに実家に引っこんでいるそうです。

81	<p>紫式部「紫式部日記」 （〔四九〕わが身をかえりみて P.202）</p>	平安時代（1010年ごろ成立）	評論（一人称）	なし	なし	<p>月一昔の盛りのわが身（式部） 不問 不問一女</p>	なし	なし	<p>かく、かたがたにつけて、ひとふしの、思ひ出でらるべきことなくて、過ぎしはべりぬる人の、ことに行末のたのみもなきこそ、なぐさめ思ふかたにはべらねど、心すごうもてなす身ぞとだに思ひはべらじ。その心なほ失せぬにや、もの思ひまさる秋の夜も、はしに出でゐてながめば、いとど、月やいにしへほめてけむと、見えたる有様をもよほすやうにはべるべし。世の人の忌むといひはべる鳥をも、かならずたりはべりなむと、はばかれて、すこし奥にひき入りてぞ、さすがに心のうちにはつきせず思ひつづけられはべる。</p> <p>訳文：このようにあれこれにつけても、何一つ思い出となるようなこともなく過ぎてきました私が、ことに夫を亡くして将来の頼みもないのは、ほんとうに思い慰める方法すらありませんが、しかしせめて寂しさのあまりに心すんで自棄的なふるまいをする身だけでは、思いますまい。が、そんなすんだ気持ちがやはりなくならないのか、物思いのまさる秋の夜なども、縁近くに出て座って月を眺めながら物思いにふけっていると、いっそう、あの月が昔の盛りのわが身をほめてくれた月だったのだからと、まるで眼前の光景を誘いおこすように思われます。世間の人が忌むといひます鳥もきつと渡ってくるのだらうと憚られて、思わず奥のほうに引っ込んでみるものの、やはり心の中では次から次へとおのずからものを思い続けているのです。</p>
82	<p>作者未詳「栄花物語」 （栄花物語（扉） 巻第十六 もとのしづく（扉） 梗概 もとのしづく P.251）</p>	平安時代（正編1028～34年ごろ成立、 続編1092～1107年ごろ成立）	フィクション（三人称）	よき子を持たりけるかな	①	<p>この師たち一親ども 上下 男一不問</p>	③	なし	<p>この師たち、「それはそれ、かれはかれ」など申したまへば、その親ども召して、「よき子を持たりけるかな」と褒めのたまはせて、師たちにも、「よき弟子なり。よくくしたてたまへ」などのたまはすれば、おのおの親たちなど面目ありて思へり。</p> <p>訳文：この師の僧たちは、「それは誰の子、あれは誰の子」などと申されると、その親どもをお呼びになって、「りっぱな子を持ったものよ」と褒めて仰せになり、師の僧たちにも、「りっぱな弟子だ。十分に育てあげるように」などと仰せになるので、めいめい親たちなどは面目あることとされている。</p>
83	<p>作者未詳「栄花物語」 （栄花物語（扉） 巻第三十六 根あはせ（扉） 梗概 根あはせ P.393）</p>	平安時代（正編1028～34年ごろ成立、 続編1092～1107年ごろ成立）	フィクション（三人称）	あはれききたまへる口かな	①	<p>上達部・殿上人一源中将（頭房） 下上 男一男</p>	③	なし	<p>古きことにはとこそあれかくこそあれと、右の頭をよくいひ落したまへば、「あはれききたまへる口かな」と、上達部、殿上人ほめ申したまふ。左には内の御製ありけり。こなたかなた劣らじと定めたまふ。</p> <p>訳文：古歌にはこうである、ああであると言って、右の頭の隆俊を存分に言い負かされるので、「ああ、じつによくわるる弁舌よ」と言って、上達部・殿上人がお褒め申しあげられる。左方には帝の御製があった。右も左も劣らじ負けまいと評定なさる。</p>
84	<p>作者未詳「栄花物語」 （栄花物語（扉） 巻第十二 たまのむらぎく（扉） 梗概 たまのむらぎく P.54）</p>	平安時代（正編1028～34年ごろ成立、 続編1092～1107年ごろ成立）	フィクション（三人称）	はするほどなど、さきざきよりはこよな	①	<p>世人一帥中納言 下上 不問一男</p>	②	なし	<p>一品宮をよに心苦しう思ひきこえさせたまひながら、かうはるかに思したぬれば、宮いみじうあはれに思さるべし。源中納言によるづ宮の御事聞えつけて下りたまひぬ。あさましうあはれなる世の有様なりかし。おはするほどなど、さきざきよりはこよなしなど、人褒めきこゆるさへあはれなり。</p> <p>訳文：一品宮（脩子内親王）をたいそうおいたわしく思い申されながら、こうして遠国へと決心なさったのだから、宮としても尋常ならず悲しいお気持ちでいらっしゃるだろう。源中納言（経房）に万事一品宮の御事をお頼み申して下向なさった。たいそうにしみて悲しい世の中の有様ではある。お出かけになる、その間のご様子など、前々の有様に比べると格別というものなどと、世人がお褒め申すのさへ胸打たれることである。</p>
85	<p>作者未詳「栄花物語」 （栄花物語（扉） 巻第三十一 殿上の花見（扉） 梗概 殿上の花見 P.221）</p>	平安時代（正編1028～34年ごろ成立、 続編1092～1107年ごろ成立）	フィクション（三人称）	<p>またよき人あまた見たてまつれど、 この御前たちのやうなるはおはしまさざりき。一条院の女二の宮、故女院におはしまししかば見たてまつりし、それぞいとをかしげにおはしまししかども、この二所の御やうには、えおはしまさず</p>	②	<p>美作の三位一姫宮（章子内親王・藤子内親王） 下上 女一女</p>	②	なし	<p>美作の三位など、「またよき人あまた見たてまつれど、この御前たちのやうなるはおはしまさざりき。一条院の女二の宮、故女院におはしまししかば見たてまつりし、それぞいとをかしげにおはしまししかども、この二所の御やうには、えおはしまさず」など、けちえんに褒めまうしたまふさま、ほこりに愛敬づきたまへり。大宮よさり上らせたまひて、中の戸あけて御対面あるほど、いとやすらかに疎からず、めでたき御あはひなり。</p> <p>訳文：美作の三位などは、「ほかに高貴な方々をたくさんお見あげ申したけれど、この姫宮たちのような方々はいらっしゃらなかった。一条院の女二の宮（嬢子内親王）が、故女院（詮子）のものといらっしゃったのでお見あげ申したけれど、その宮はまことに可愛らしい感じのお方でいらっしゃったけれど、とてもこのお二方のようなようではいっしやいませんでした」などと、派手にはっきりとお褒め申しあげる様子は、いかにも得意そうで情味をたたえる魅力がおりである。大宮（威子）は、夜になって参られて、中の戸をあけてのご対面であるが、その御有様は、まことにわざとらしくなくご親密で、結構な御仲らいである。</p>
86	<p>作者未詳「栄花物語」 （巻第三 さまざまのよろこび（扉） 梗概 さまざまのよろこび P.160）</p>	平安時代（正編1028～34年ごろ成立、 続編1092～1107年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	<p>摂政殿一源兼澄 上下 男一男</p>	①	なし	<p>この舞人のなかに、六位二人あるに、蔵人左衛門尉上の判官といふ源兼澄、舞人にて土器とりたるに、摂政殿御覧じて、「まづ祝の和歌ひとつ仕うまつるべし」と仰せらるるまゝに、「宵の間に」とうちあげ申したれば、「興あり興あり、おそしおそし」と殿ばらのたまはするに、「君をし折りおきつれば」と申したり。大殿いみじう興せさせたまひて、「おそしおそし」と仰せらるれば、「まだ夜深くも思ほゆるかな」と申したれば、いみじう興じほめさせたまひて、摂政殿、柏の御衣ぬぎて賜す。</p> <p>訳文：この舞人の中に六位の者が二人いたが、その一人、蔵人左衛門尉上で上の判官といふ源兼澄が舞人として賜った盃を手にしたのを摂政殿がお目をとめられて、「何はともあれ祝の歌をお詠み申せ」と仰せになるまゝに、「よひのまに（宵のほどに）」と声をたてて申しあげると、「おもしろい、おもしろい、さあその後を」と殿方がおせきたてになるので、「君をし折りおきつれば（君の御長寿をお祈り申し上げておきましたので）」と申しあげた。大殿はたいそう興がられて、「遅いぞ、遅いぞ」と、その後を催促なるので、「まだ夜深くも思ほゆるかな（これから先の御長寿のかぎりなきことと思われますよ）」と申したので、殿はたいそう感に堪えずお褒めあそばして、お召しになっている柏を脱いでお与えになった。</p>
87	<p>作者未詳「栄花物語」 （巻第四 みはてぬゆめ（扉） 梗概 みはてぬゆめ P.222）</p>	平安時代（正編1028～34年ごろ成立、 続編1092～1107年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	<p>人一山井の大納言 不問 不問一男</p>	なし	なし	<p>〔七〇〕道頼の薨去 よろづりもあはれにいみじきことは、山井の大納言日ごろわづらひて、六月十一日にうせたまひぬ。御年二十五なり。ただ今人にほめられて、ようおはしける君なれば、今の関白殿も、この君をば故殿の子にせさせたまひしかば、われもとりわき思はんとしつものをと、口惜しう思されけり。すべてあさましう心憂き年の有様なり。これにつけても内大臣殿、世を恐ろしう思し嘆きたまふ。</p> <p>訳文：何よりもおいたわしくたいへんな出来事とて、山井の大納言（道頼）が幾日か病氣をされて、六月十一日にお亡くなりになった。御年は二十五歳である。現に誰からもほめられて評判のよいいらっしゃったお方なので、今の関白殿（道長）も、「この君を故殿（兼家）が養子にしてもらったのだから、自分も格別目をかけてあげようと思ったのに」と残念に思っているのだった。万事すべてあまりにも嘆かわしく情けない年の有様である。これにつけても、内大臣殿は世の中の成行きを恐ろしくお思いになり、お胸を痛めておいでになる。</p>
88	<p>作者未詳「栄花物語」 （巻第五 浦々の別（扉） 梗概 浦々の別 P.282）</p>	平安時代（正編1028～34年ごろ成立、 続編1092～1107年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	<p>世間一女御の御兄（少将） 不問 不問一男</p>	なし	なし	<p>粟田殿の北の方、この殿の北の方にておはす。御位もみななくなりかはせたまへるもいとあはれなり。堀河院をぞいとよく遣りたてて、今は渡りて住ませたまひける。この女御の御一つ腹の御兄も、少将にて人にほめられておはす。</p> <p>訳文：粟田殿の北の方も御位もともに右大臣のものに変わっておしまいになったのも、まことお気の毒である。右大臣は堀河院をじつに立派に造営して、今はそこに移り住んでいらっしゃるのだった。この女御のご同腹の御兄（重家）も少将で、世間では評判のよいお方である。</p>
89	<p>作者未詳「栄花物語」 （巻第十六 もとのしづく（扉） 梗概 もとのしづく P.232）</p>	平安時代（正編1028～34年ごろ成立、 続編1092～1107年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	<p>人一三昧僧都 不問 不問一男</p>	④	なし	<p>〔二七〕公季男、三昧僧都の入寂 また関院の右大臣の御子の三昧の僧都と聞ゆるもうせたまひて、大臣いみじう思し嘆かせたまふともおろかなり。同じ法師と聞ゆるなかにも、いとよくおはして、人にほめられたまひつものをも、かへすがへす心憂くあさましくあはれることどもなり。おほかたわづらふ人の多かるさまぞいみじかりける。</p> <p>訳文：また、関院の右大臣（公季）の御子の三昧の僧都と申しあげる方もお亡くなりになり、大臣がたいそうのお嘆きである、などといっても言いつくせるものではない。同じ法師と申しあげるなかでも、まことにごりっぱなお方で、人から称賛されていらっしゃるのにと、まったく情けなく嘆かわしく胸にしみて悲しいことの数々である。総じて、病みわづらう人がたくさんいる有様は尋常ならざることであった。</p>
90	<p>作者未詳「栄花物語」 （巻第十六 もとのしづく（扉） P.239）</p>	平安時代（正編1028～34年ごろ成立、 続編1092～1107年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	<p>殿の御前ら一同一講師 上下 男一男</p>	⑤	なし	<p>〔三三〕永昭の説法 事どもしたてたる際に、講師参りたり。赤色の装束いとうるはしうして、めでたくて香炉もたげて仏拝みたてまつるほど、いかなることを言ひ出でんとすらんと思えたり。高座に上りて、啓白うちして、事の趣申して、願文すこうち読みて、事の有様、経の中の心ばへ、大意、釈名、入文判釈よりして、いみじう聞きよくめづらしう言ひもていくに、殿の御前をはじめたてまつり、いみじう褒めさせたまふ。無量義経より普賢経に至るまで説きつづけたるほど女房の面目きはめ、宮の御有様めでたし。</p> <p>訳文：〔三三〕諸事の用意がすっかり整った時に、講師が参上した。赤色の装束をまことにきちんと着用して、りっぱな態度で香炉を捧げ持った仏を拝み申しあげる間、どんなことを言い出すのだからかと期待された。高座によって啓白をした後、供養の趣を申しあげ、願文をいささか読誦し、事の次第、経文の趣意――すなわち大意、釈名、入文判釈をはじめとして、たいそう耳に快く、例のない調子で言い進んでいったので、殿の御前をはじめとして、一同たいそう称賛なさる。無量義経から普賢経にいたるまで説き続けるが、その間、女房たちも最高の面目を施し、宮（妍子）の御有様もめでたい限りである。</p>

91	<p>作者未詳「夜の寝覚」 （巻一の大要——あやにくな契り——〔九〕中納言、中の君を垣間見て、美しさに驚く P.28）</p>	平安時代（1045～68年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	行頼→三の君 下上 男→女	②	なし	<p>頭つき、様体ほそやかに、しなしなく、きよなるに、髪のいとおつややかにゆるゆるとかかりて、目やすき人かな、と見ゆるに、向かひざまにて、紅か二藍かのほどなめり、いと白く透きたる好ましげなる人、すべり下りて、うちもてなしたる有様、かたち、いと気色ばみ、なつかしくなまめき、こぼれかかれる額髪の絶え間のいと白くをかしげなるほどなど、まことしく優なるものかな、と見ゆるに、箏の琴人は、長押の上にすこし引き入りて、琴は弾きやみて、それに寄りかかりて、西にかたぶくまに曇りなき月をながめたる、この居たる人々ををかしと見るにくらぶれば、むら雲のなにより望月のさやかなる光を見つけたる心地するに、あさましく見おどろきたまひぬ。「これこそは、行頼がほめつる三の君なめれ。長押の端なるは姉どもなめり。これこそ、その際のすぐれたるなめ。いかで目もあやにあらむ」とまもるに、「かたちは、やむことなきにもよらぬわざぞかし。</p> <p>訳文：髪の様子や姿がほっそりとして、気品があつて美しいうえに、髪がたいそう艶やかでゆつたりとかかり、まことに感じのよい人に見えるのだが、その人に向い合つてもう一人の女性がいる。月明りのためにはっきりはしないが、紅か二藍かといった色合の衣なのであろう、たいそう色白で透き通るような美人で、簀子の方にすべりおりて、長押に押しかかるようにして、庭の方を眺めやつては、また琵琶に極端なくらいにかがさるようにいる掻き鳴らした音色は、聞くとすぐ、その身のこなしや容姿が箏の音と重なり合つてまことに際立ち、いかにも親しみ深く物静かで、こぼれかかっている額髪の合間から見える額がたいそう白く美しい様子など、まことに整つた美人よ、と見えたが、さて、心にかける、箏の琴を弾いていたその人はと見ると、長押の上に少し奥の方に引込んで、琴は弾きやんで、そのままその琴に寄りかかつて、西に傾ぐにつれてますます澄みわたる月を眺めていたが、その群を抜く美しさ——、前の二人の女性を美しいと見た目で比べると、むら雲の中から十五夜の清らかな光を見つけたにも似た気持がするので、中納言は思いもよらない美しさに茫然として目を見張られた。「この人こそ、行頼がほめていた三の君に違いない。長押の端にいるのは姉たちだろう。これこそ、受領の家の娘として飛び抜けた美人なのだろう。そうでなくてどうしてこんなにまぶしいほど美しいことがあろう」と、じつと見つめていると、「姿かたちというものは、家柄の高さにはよらないものだ。</p>
92	<p>作者未詳「浜松中納言物語」 （浜松中納言物語 巻第三（扉） 巻第三 梗概〔二五〕中納言、唐后を賞讃するが、真実は語らない P.267）</p>	平安時代（1062年ごろ成立）	フィクション（三人称）	眼は芙蓉に似たり、胸は玉に似たり	①	不問→女 不問 不問→女	②	なし	<p>御門「いみじう興ありけることかな。かの国には、女すぐれたるなるべし。楊貴妃、王昭君、李夫人など言ひて、あがりての世にもあまたありけり。上陽宮にながめたる女も、『眼は芙蓉に似たり、胸は玉に似たり』と誉めたり。男は、いとかばかり名を伝へたるやある」と問ひ給へば、中納言「昔、河陽県にはべりけむ潘岳といひはべりける人などこそ、名を伝へはべり。隣なる女、これをも思ひかけて、三年まで見はべりけるを、潘岳はえ知らずはべりける。このころもぞ、京の中に、容面けしうはあらぬ人人はんべりしかど、この見給へし女房たちには、ならぶべきはさぶらはざりき。いみじき楊貴妃、王昭君なども、ただうるはしうさぶらひけるなめり。</p> <p>訳文：御門は「たいそう興味をそそられたことだなあ。あの国では女がぬきんでているのにちがいない。楊貴妃、王昭君、李夫人などと言って、遑つた上代にも多くいたのだったよ。上陽宮でもの思ひに耽つている女も、『眼は芙蓉に似たり、胸は玉に似たり』と誉め称えている。男では、本当にこれほど評判を残している者はいるのか」とお聞きになるので、中納言は、「昔、河陽県におりましたという潘岳と言いました人などが評判を残しております。隣に住む女が、この男に思ひを懸けて、三年までも目をつけておりましたのに、潘岳は気づくことができなかったのでしたよ。私がいた頃のことですが、唐土の京の中で、容貌がまんざらおかしくはない女たちはおりましたけれど、この拝見しました女房たちに肩を並べられそうなる者はおりませんでした。大変な評判の楊貴妃、王昭君なども、絵で見ての通り、ただ端麗でおりましたようです。</p>
93	<p>源頼国の娘の謀子内親王宣旨「狭衣物語」 （巻四（扉） 巻四 梗概〔二九一〕故式部卿の北の方、姫君の処遇に迷う P.253）</p>	平安時代（1077～81年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	大将殿→姫君 下上 男→女	④	なし	<p>〔二九一〕故式部卿の北の方、姫君の処遇に迷う 東宮には、御元服の夜参りたまひし右大臣殿の御女、麗景殿の女御一人ぞ、候ひたまふも、こよなく大人びたまひて、御遊び敵にもえあらずと思さるらん、大将殿のいたく誉めきこえたまふ姫君の御ことを、今より御心に入れさせたまへれど、まだいと待遠なるほどと聞かせたまふ、心もとなく思されける。</p> <p>訳文：〔二九一〕東宮には、御元服の夜に入内なさつた右大臣殿の娘の麗景殿の女御一人が仕えていらっしゃるのも、この上なく大人になられて、もう遊び相手としては不釣り合いに思われるのか、大将殿がたいそうお褒めになる姫君のことを、早くも氣にかけておいでになるが、まだ可成りなくて入内には間がある、とお聞きになり、早く逢いたいもの、と思つていらっしゃる。</p>
94	<p>源頼国の娘の謀子内親王宣旨「狭衣物語」 （狭衣物語（扉） 巻一（扉） 巻一 梗概〔二七〕父大臣、狭衣に女二の宮降嫁の件を督促 P.67）</p>	平安時代（1077～81年ごろ成立）	フィクション（三人称）	あなめでた	①	若き人々→狭衣 下上 女→男	④	なし	<p>狭衣「夏復せはえせものことにな。片へ涼しき風に従はんもわかるべきことかはなどかくし言ひそめけん。渡し守にや問はまし」とてうち笑ひたまへる愛敬の、さとこぼるる心地したまへるを、「あなめでた」と、若き人々しみかへり賞（め）でたてまつるに中務といふ人、「道の果てなると、嘆きし人のありしこそ、ことわりには変らね」と独りごつを後目に見やせたまひて、狭衣「いかにとや。残りゆかしき独り言かな」とのたまへば、中務「あなわびし。聞きたまひけるよ」とわぶるさまにくからず見わたしたまふ。</p> <p>訳文：君が、「夏復せは心無き者のすることとか。夏秋の行き交う空の片一方で吹くと古歌に詠まれた、涼しい風に吹かれて、夏復せを癒すのも悪くはありません。どうしてこんなことを言い始めたのでしょうか。天の川の渡し守にでも尋ねてみましょうかな」などと言って笑つていらつして、その魅力がどっと溢れ出る感じがなるのを、「なんとすてきなことと」、若い女房たちは感じ入つて賞めようと、中務という人が、「かつて『道の果てなると』、ほんのわずかでもよいからお逢いたいと詠んで嘆いた人があつたと聞くが、もっともなことに、今も変りません」と独り言を言うのを、君は流し目で見遣りなされて、「なんと言われたのか。続きを聞きたいような独り言ですね」とおっしゃるので、中務が、「あら困つたこと。聞いていらつしやつたよ」と困り果てているのを、君は好ましく思つて、そちらをご覧になる。</p>
95	<p>源頼国の娘の謀子内親王宣旨「狭衣物語」 （巻二（扉） 巻二 梗概〔一三二〕狭衣の苦悩、人々には分らず P.241）</p>	平安時代（1077～81年ごろ成立）	フィクション（三人称）	よろづにめでたき御ありさまかな。聞くことにも見たてまつるにもめづらしうのみありて	②	おとなしき人々→狭衣 下上 女→男	⑤	なし	<p>「この渡殿の障子こそ少し開きたれば、御覧じやしつらん。あさましき朝顔を」などわびあひたり。おとなしき人々は、「よろづにめでたき御ありさまかな。聞くことにも見たてまつるにもめづらしうのみありて」など、めで聞こゆ。</p> <p>訳文：「こちらの渡殿の襖が少し開いていましたから、ご覧になったのではいいでしょうか。あきれた寝起きの顔でしたので」と困りあつている。大人の女房たちは、「何をなさつてもすばらしいご様子ですねえ。お言葉を伺うにつけお姿を拝見するにつけ」と、お褒めもうしあげる。</p>
96	<p>作者未詳「大鏡」 （大鏡 天〔八七〕済時の子女たち、所領回復を道長に愁訴 P.145）</p>	平安時代（1086～1123年ごろ成立）	フィクション（三人称）	さばかりになりなむには、ものの恥しうでありなむ。かしこく申したまへる、いとよきこと	②	世間の人々→姫君 下上 不問→女	③	なし	<p>「さばかりになりなむには、ものの恥しうでありなむ。かしこく申したまへる、いとよきこと」と、口々ほめ聞こえしこそ、なかなかにおほえはべりしか。大門にてとらへたりし人は、式部大夫源政成が父なり。さばかり優におはしけん御末こそ、少しはかばかしき人なけれ。</p> <p>訳文：世間の人々が、「そんなに落ちぶれてしまったからには、恥も外聞もなく押し通すほうがよい。姫君はうまく直訴なされた、まったく大したものだ」と、口々におほめ申しましたが、それはかえつてどうかと思われました。ところで、大門で姫君を引き留めた人は、式部大夫源政成の父（経任）です」「あれほどすぐれていらつしやつた小一条のおとど（師守）のご子孫には、いささかしつかりした人がおりません。</p>
97	<p>作者未詳「大鏡」 （〔五九〕実頼の女子 敦敏少将の早世 P.100）</p>	平安時代（1086～1123年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	人→（大武の）わがすること 不問 不問→男	⑤	なし	<p>神司ども召し出だして打たせなど、よく法のごとくして掃りたまふに、つゆ怖るることなくて、すゑず糸の船にいたるまで、たひらかに上りたまひにき。わがすることを人間にほめ樂むるだに興あることにてこそあれ、まして神の御心にさまでほしく思ひむこそ、いかに御心おごりしたまひけむ。</p> <p>訳文：神社の神官たちを召し出して、その額を掲げさせるなど、方式どおりにして帰途につかれましたので、今度は、少しも心配すべきこともなく、数多くの供船にいたるまで、無事に京にお上りになりました。自分のすることを世間でほめたてくれることだけでも愉快なことなのに、ましてや神のお心に、それほどまでに懇望なされたということは、どれほど得意になられたことでしょう。</p>
98	<p>作者未詳「大鏡」 （一 太政大臣道長〔二〇八〕世次が見聞した法会 P.399）</p>	平安時代（1086～1123年ごろ成立）	フィクション（三人称）	さればよ。異人、かく思ひよりなましや。なほ、かやうの魂あることは、すぐれたる御房ぞかし	②	清照法橋→清範律師 对等 男→男	③	なし	<p>また、清範律師の、犬のために法事しける人の、講師に請ぜられていくを、清照法橋、同じほどの説法者なれば、いかがすると聞きに、頭つつみて誰ともなくて聴聞しければ、「ただ今や、過去聖堂は運台の上にてひよと吠えたまふらむ」とのたまひければ、「さればよ。異人、かく思ひよりなましや。なほ、かやうの魂あることは、すぐれたる御房ぞかし」とこそめめたまひけれ。まことにうけたまはしに、をかしうこそさぶらひしか。</p> <p>訳文：それからまた、清範律師が、亡き愛犬のために法事をした人の依頼で、その法会の講師として招かれていったことがありました。それを、清照法橋も自分と同等ぐらいの説法者ですから、どんな説法をするかしらと、それを聞くために、頭を頭巾で包み、だれとも知られぬようにして、聴聞しました。すると、「ただ今、この世を去つた聖堂は、極楽浄土の蓮の台の上でワーンとほえていらつしやるだろう」とおっしゃつたので、清照法橋は、「やはり思ったとおりだった。ほかの人はこんなふうに思いつくことができるか。やはりなんと言っても、こういう機知才覚のある点ですすぐれたお坊さんなのですわ」と言つて、お褒めになりました。実際に、私も現場でお聞きいたしましたので、おもしろうございました。</p>

99	<p>作者未詳「大鏡」 （一 太政大臣道長〔二〇八〕世次が見聞した法会 P.400）</p>	平安時代(1086～1123年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	入道殿をはじめ人々→世話役 方のとった処置 上下 男→男	③	なし	<p>後に、「北向きの座にて、いかに寒かりけむ」など、殿の間はせたまひければ、「しかしささぶらひしかば、こよなく暖まりて、寒さも忘れはべりにき」と申されければ、行事たちをいよしと思し召されたりけり。ぬるくてまありたりとも、別の勘当などあるべきにはあらねど、殿をはじめたてまつりて、人にほめられ、ゆく末にも、「さこそありけれ」と言はれたうはむは、ただなるよりは悪しからず、よきことぞかし。</p> <p>訳文：後になって、入道殿(道長)が、「北向きの座で、どんなにか寒かったろう」などとお尋ねになったところ、坊さんたちは、「これこれでごさいましたから、とてもよく暖まって、寒さも忘れてしまいました」と申されたので、世話役方のとった処置をたいへん気のきいたやり方よと、ご満足にお思いになっっていらっやいました。湯漬のぬるいままを差上げたからといって、格別のお叱りなどあるべきはずありませんが、入道殿をはじめ申しあげて、人々に褒められ、後々にまでも、「あの時はあんなだったよ」と、話の種に言われなさるといことは、何事もないよりは悪いどころではなく、すてきなことですよ。</p>
100	<p>作者未詳「大鏡」 （一 太政大臣道長〔二〇〇〕村上天皇の寛容 P.380）</p>	平安時代(1086～1123年ごろ成立)	フィクション(三人称)	ゆるになむおはします	①	世間の人→村上天皇 下上 不問→男	④	A	<p>〔二〇〇〕村上天皇の寛容 村上の帝、はた申すべきならず。「なつかしうなまめきたる方は、延喜にはまより申させたまへり」とこそ、人申すめりしか。「我をば人はいかが言ふ」など、人に間はせたまひけるに、『ゆるになむおはします』と世には申す」と奏しければ、「さては誉むるなんなり。王のきびしうなりなば、世の人のいかが堪へむ」とこそ仰せられけれ。</p> <p>訳文：〔二〇〇〕村上天皇は、これまた、何かと申しあげるまでもありません。「親しみやすく、優雅でいらっしやる面は醍醐天皇にも勝っていらっしやる」と、世間の人が申したようでした。村上天皇が、「私のことを、人々はとう評しているか」などと、人にお尋ねになりました。『『寛容でいらっしやる』と、世間では申しあげております』と奏上しますと、「それでは、褒めているのであらう。君たるものが厳し過ぎたなら、世間の人はどうして堪えられよう」と、おっしゃいました。</p>
101	<p>作者未詳「今昔物語集」 （今昔物語集 巻第二十四 本朝 世俗に付く(扉)〔底本〕実践女子大学蔵本 小野宮の大饗に九条の大臣打衣を得る語第三 P.248）</p>	平安時代(1120年以降成立)	フィクション(三人称)	打物ヲゾ	①	人→打物 上下 性別不明→もの	なし	なし	<p>而ルニ、其湿タリケル方ノ袖ノ、露水ニ濡タリトモ不見シテ、不湿方ノ袖ニ見競ケルニ、只同様ニナム打目有ケル。此ヲ見ル人、打物ヲゾ誉メ感ジケル。昔ハ打タル物モ此様ニゾ有ケル。今ノ世ニハ極テ難キ事 …</p> <p>訳文：ところで、その濡れたほうの袖は少しも水に濡れたようには見えず、濡れなかったほうの袖に比べてみても、まったく同じように打ち目が見えた。これを見た人は、この砧で打った衣のすばらしさをほめたたえた。昔は、砧で打った衣もこのようにすばらしかった。いまの世ではとてもあり得ないことである、とこう語り伝えているということだ。</p>
102	<p>作者未詳「今昔物語集」 （今昔物語集 巻第二十四 本朝 世俗に付く(扉)〔底本〕実践女子大学蔵本 百済川成と飛弾の工と挑む語第五 P.253）</p>	平安時代(1120年以降成立)	フィクション(三人称)	二人ノ者態、此ナム有ケル。	①	皆人→二人 対等 性別不明→男	③	なし	<p>二人ノ者態、此ナム有ケル。其比ノ物語ニハ万人所ニ此ヲ語テナム皆人誉ケル、トナム語り伝ヘタルトヤ。</p> <p>訳文：二人の腕前はこのようなった。当時はどこに行ってもこの語で持ちきりで、すべての人がこの二人をほめたたえた、とこう語り伝えているということだ。</p>
103	<p>作者未詳「今昔物語集」 （今昔物語集 巻第二十五 本朝 世俗に付く(扉)〔底本〕実践女子大学蔵本 平維茂が郎等殺さる語第四 P.405）</p>	平安時代(1120年以降成立)	フィクション(三人称)	此男ノ嘴ク只一人シテ、然許ノ眷属隙無ク守ル者ヲ、心ノ如ク罰子得ルハ、実ニ天道ノ許シ給フ事ナメリ、	②	人→太郎介を殺した男 不問 不問→男	③	なし	<p>然レバ、祖ノ敵キ罰事ハ、極キ兵也ト云ヘドモ、難有キ事也。其レニ、此男ノ嘴ク只一人シテ、然許ノ眷属隙無ク守ル者ヲ、心ノ如ク罰子得ルハ、実ニ天道ノ許シ給フ事ナメリ、</p> <p>訳文：思うに、親の仇討は、剛勇の士といえども、なし遂げがたいことである。それを、この男は事もあらうにたった一人で、あれほど多くの従者が油断なく警固している者を、望みどおりに討つことができたのは、まことに天のお許しがあったからだろうと人々はほめたたえた、とこう語り伝えているということだ。</p>
104	<p>作者未詳「今昔物語集」 （今昔物語集(扉) 今昔物語集 巻第二十七 本朝 霊鬼に付く(扉)〔底本〕鈴鹿本 西の京の人応天門の上に光る物を見る語第三十三 P.109）</p>	平安時代(1120年以降成立)	フィクション(三人称)	此レハ弟ノ思量ノ有リテ、射額カシタル也、	②	人→弟 不問 不問→男	⑤	なし	<p>此様ノ者ノ人謀ラムト為ル程ニ、由無キ命ヲ亡ス也。此レハ弟ノ思量ノ有リテ、射額カシタル也、トテゾ人讃ケル、トナム語り伝ヘタルトヤ。</p> <p>訳文：こういうやつが人を化かそうとするから、あたら命を失うのだ。これは、弟が思慮深く、それで正体を射現したのだと、人々はほめたたえた、とこう語り伝えているということだ。</p>
105	<p>作者未詳「今昔物語集」 （今昔物語集 巻第二十八 本朝 世俗に付く(扉)〔底本〕東京大学国語研究室蔵十五冊本 池尾の禪珍内供の鼻の語第二十 P.210）</p>	平安時代(1120年以降成立)	フィクション(三人称)	童ノ糸可咲ク云タル事ヲゾ、	③	聞ク人→童 対等 性別不明→男	⑤	なし	<p>此レヲ思フニ、実ニ何カナリケル鼻ニカ有ケム、糸可異カリケル鼻也。童ノ糸可咲ク云タル事ヲゾ、聞ク人讃ケル、トナム語り伝ヘタルトヤ。</p> <p>訳文：思うに、実際、どんな鼻だったのだろう。じつにあきれた鼻ではある。童のいとも痛烈に言った言葉を聞く人は、みなほめた、とこう語り伝えているということだ。</p>
106	<p>後白河法皇「梁塵秘抄」 （梁塵秘抄口伝集(扉) 梁塵秘抄口伝集 巻第十〔九〕乙前の死去前後と、没後の供養 P.359）</p>	平安時代(12世紀後半成立)	歌謡集(一人称)	足柄など、つねにも候はぬ。この節どものめでたさよ	②	五條尼(乙前)→私 下上 女→男	③	なし	<p>それをも知らで、里にある女房丹波、夢に見るやうは、法住寺の広所にて、我が歌をうたひけるを、五條尼、白き薄衣に、足を裏みて参りて、障子のうちに居て、さしむかひて、「この御歌を聞きに参りたる」とて、世に愛でて、我も付けうたひて、「足柄など、つねにも候はぬ。この節どものめでたさよ」と誓め入りて、長歌を聞きて、「これはいかがとおぼつかなく思ひ候ひつるに、めでたさよ。これを承り候へば、身もすずしく、うれしき」と見て、兩三日ありて、かく見え候ひつる由を、女房参りて申す。さは聞きけるにや。</p> <p>訳文：このことを知らずに、里に居た女房の丹波が、夢に見たことには、法住寺の広御所で、私(院)が歌を歌っていたのを、五条の尼(乙前)が白い薄衣に足をつつんでやって来て、障子の中に居て、こちらを向いて、「この御歌を聞きに参りました」と言って、この上なく賞美して、自分も声を添えて歌い、「足柄など、いつもお聞きしたのに比べて、またとないくらいみごとな出来ばえだこと」とほめにほめて、長歌を聞いて、「これはどうかと心もとなく思っていました、本当にすばらしいことよ。これをうけたまわりましたので、体もさわやかに、うれしい」と言ったら夢に見た。その後二、三日経って、このように見たことを、その女房が私のところへ来て報告した。この夢のように乙前は私の歌を聞いたのであらうか。</p>
107	<p>後白河法皇「梁塵秘抄」 （梁塵秘抄口伝集 巻第一〔一〕序―神楽・催馬楽・風俗と今様 P.341）</p>	平安時代(12世紀後半成立)	歌謡集(一人称)	なし	なし	御調物をさめける民→政治のこと 上下 不問→こと	⑥	なし	<p>巻第一〔一〕序―神楽・催馬楽・風俗と今様 いにしへより今にいたるまで、習ひ伝へたる歌あり。これを神楽・催馬楽・風俗といふ。神楽は、天照大神の、天の岩戸を押し開かせたまひける代にはじまり、催馬楽は、大蔵の省の、国々の御調物をさめける民のくちずさみにおこれり。これ、うちあることにはあらず。時のまつりごと、よくもあしくもあることをなん、誉め誇りける。催馬楽は、おほやけわたくの、うるはしきあそびの琴の音、琵琶の緒、笛の音に付けて、わが国のしらべともなせり。</p> <p>訳文：巻第一〔一〕昔から今まで、ずっと習い伝えた歌がある。その歌を神楽・催馬楽・風俗という。神楽は、天照大神が天の岩戸をお開けになった神代に始まったものであり、催馬楽は、大蔵省へ諸国から租税を納めた人民が口ずさんだ歌から始まった。これは並一通りのことではない。その時々の政治のよいことや悪いことを、誉めたりけなしたりしたのである。催馬楽は、公私の正式の音楽である雅楽の琴や琵琶や笛の音を伴奏としてつけ、わが国固有の曲調に編曲したものである。</p>
108	<p>後白河法皇「梁塵秘抄」 （梁塵秘抄口伝集 巻第十〔五〕乙前と、さはのあこ丸・小大進 P.352）</p>	平安時代(12世紀後半成立)	歌謡集(一人称)	また承らむ	③	季時→小大進 対等 男→男	③	なし	<p>「しにんし」が歌の、「ほととる行者」の句に、小大進ことにめでたくうたひて、「また承らむ」と申す。ある人、またうたふ。「それも、かくこの句をば、えうたひ候はぬものを」と申すを、季時、小大進がめでたさ、節のたがはぬさま、「また承らむ」と申してかく感じ申す由、色代して誉めものしる。この小大進、うたはする歌をば、ことに妙にうたはせて聞きしなり。</p> <p>訳文：「しにんし」の歌の「ほととる行者」の句についても、小大進が特に立派に歌って、「また、うけたまわりたいものです」と申す。ある人がまた歌う。「それも、このようにはこの句を歌うことができませんの」と言うのを、季時は、小大進のみことさや節の違わない様子、「またお聞きしたい」と言って、このように感心して言うことを、賛辞を呈して声高にほめちぎる。この小大進は、歌わせる歌を、自分は控えめにし、相手がひきたつようにし向けて、よく聞いたのであった。</p>

109	<p>作者未詳「とりかへばや物語」 （巻第二 梗概〔二四〕左大臣、中納言のいつにない不例を憂慮 P.300）</p>	平安時代末期	フィクション(三人称)	なし	なし	人→中納言 不問 不問→男	⑥	なし	<p>「いと恐ろしきこと。祈りをこそまた始むべかりけれ」とて、さるべき人々召して、御修法、祭、祓などすべき事のたまふを見聞くに、あはれ、かく思したるに、跡はかなく消え失せなばいかばかりの御思ひならん、と見たてまつるに、え念ぜずほろほろと涙のこぼれぬるを、もてまぎらはせど、「あやしう思はずなるさまどもを、身の厄と思ひしに、命も尽くる心地しき。今は官位きはめ、出で交じらひたまふ際になりては、公私、人にほめられ、面目あり。</p> <p>訳文：「何と恐ろしいこと。祈禱をまたあれこれ始めるべきであった」といつて、しかるべき人々を呼びになつて、御修法や祭や祓などを行なうようにお命じになるのを見聞きするにつけ、「ああ、これほど私のことを思っていてくださるのに、行方を絶つて姿を隠してしまつたら、どんなにお嘆きになることか」と拝見すると、こらえきれずにほろほろと涙が落ちるのを、紛らわしはするが、左大臣が、「思いも寄らない変わったお二人の様子を、わが身の災難と思つたので、命も尽きる気がしました。今はあなたは官位を極め、宮中に入出入りなさる身分になつてからは、公私につけて人にほめられ、私は面目をほどこしています。</p>
110	<p>作者未詳「堤中納言物語」 （虫めづる姫君（扉）〔三〕蛇に似せたいずらの懸想文騒動 P.413）</p>	平安時代後期～鎌倉時代中期	フィクション(三人称)	なし	①	大納言殿→虫を作る人 不問 男→不問	③	なし	<p>「いとあきましく、むくつけきことをも聞くわざかな。さるもののあるを見る見る、みな立ちぬらむことこそ、あやしきや」とて、大殿、太刀をひき上げて、もて走りたり。よく見たまへば、いみじうよく似せて作りたまへりければ、手に取り持ちて、「いみじう、物よくしける人かな」とて、「かしこがり、ほめたまふと聞きて、したるなめり。返事をして、はやくやりたまひてよ」とて、渡りたまひぬ。</p> <p>訳文：父の大納言は、「まったくあきればてだ、気味の悪いことを聞くものじゃ。そんな蛇などいるのを目にしながら、みな姫君を放つておいて逃げ出すとは言語道断！」と腹を立てて、大納言殿みずから、おっとり刀で駆けつけた。よくく覧になると、まったく本物そつりの巧妙な作り物だったので、手に取って、ためつすがめつ「ずいぶん上手に細工した人じゃわい」と感心し、「かしこぶつてお前が虫など愛玩していっしょうと聞いて、わるさをしたんだらう。返事を書いて早くやつておしまいなさい」と言い残して、父君は居室へお帰りになった。</p>
111	<p>作者未詳「平治物語」 （平治物語 中（扉）金王丸尾張より馳せ上る事 P.492）</p>	鎌倉時代初期～中期	フィクション(三人称)	いしうしたり	①	頭殿→頼朝 上下 男→男	③	なし	<p>一人をば、腕を打ち落とし候ひし。少々は蹴倒され候ひぬ。二人が討たるを見て、残る所の奴原は、ばつと退き候ひしかば、頭殿、実に御心地よげにて、「いしうしたり」と誉め進らせさせたまひ候ひき。</p> <p>訳文：いま一人は腕を打ち落し、少しは蹴倒されそうになりました。二人が討たれたのを見て、残りの者どもは、さつと後ろにさがつたので、その中を通り抜けて来たのです」と報告されたので、頭殿はたいそう御機嫌がよく、「よくやった」とお誉めになっていました。</p>
112	<p>作者未詳「平治物語」 （平治物語 上（扉）待賢門の軍の事 P.456）</p>	鎌倉時代初期～中期	フィクション(三人称)	あ、切りたり。いしう切りたり	①	見物の人→三河守 不問 不問→男	③⑤	なし	<p>三河、ちつとも傾かず、鎧踏んばり、つい立ち上がり、左の手にては鞍の前輪をかかへ、右の手にては拔丸と云ふ太刀を抜き、熊手の柄をぞ切りてける。熊手引きける男は、仰けに転ぶ。三河守は、つと延びにけり。熊手は甲に止まりけり。見物の上下、これを見て、「あ、切りたり。いしう切りたり」と、誉めぬ者こそなかりけれ。三河守も、既に討たれぬく見えけるに、通り合ひて、戦ふ者ども誰々。</p> <p>訳文：三河守頼盛は、中御門を東の方へ引き退いたのを、鎌田の下男が、腹巻姿で熊手を持っていたが、「これは手柄をたてるにはよさそうな敵」とばかり頼盛目がけて走り寄り、甲に熊手を投げ懸けて、かけ声かけながら引っぱった。しかし、三河守は少しも引きずられず、鎧ふんばり立ち上がつて、左の手で鞍の前輪をかかえこみ、右の手では拔丸という太刀を抜いて、熊手の柄を切った。熊手を引いていた男はおおむけにころんだ。三河守は素早く逃げのびた。熊手は甲にくっついたままであった。見物の人は皆、「あ、切ったぞ。みごとに切ったものよ」と、ほめぬ者はいなかった。</p>
113	<p>藤原定家「松浦宮物語」 （〔二一〕神助を得て敵将宇文会を斬殺 P.63）</p>	鎌倉時代初期	フィクション(三人称)	なし	なし	少将氏忠→母后 下上 男→女	③	なし	<p>ただいまは、知らぬ国の人と誇りし心どもにも、いかでかこれと思ひ喜ばざらん。心のうちにはまして、身の助かりぬるにつけて、恥ぢ思ふらめど、いささか我が身の力と思はず、ただ賢き御謀のむなしからぬを、褒めたてまつる。千余人の軍、宇文会が手にかかりつる二十人ばかりならで、傷つき痛めるものなし。</p> <p>訳文：現在のところは、異国の人と悪口を言っていた人々的心里にも、どうして弁の少将の抜群の戦功を思ひ喜ばずにいられようか。心中にはなおいっそう、我が身が命を失わず助かっただけに、弁の少将をあしざまに言っていたことを恥ずかしく思っているようだが、少将氏忠は少しも自身の働きとは考えず、ひたすら母後の賢明な御戦略が効果を挙げたことを称賛し申しあげる。千余人の軍勢も、宇文会の手で殺された二十人ぐらい以外には、負傷し、苦痛を感じる者はいない。</p>
114	<p>西行、源実朝、藤原定家ほか「中世和歌集」 （風雅和歌集（抄）（扉）〔参考資料〕風雅和歌集 仮名序 より P.347）</p>	鎌倉時代～江戸時代前期	和歌集(三人称)	なし	なし	和歌→一世 不問 もの→もの	なし	なし	<p>やまとうたは、あめつちいまだひらけざるより、そのことわりおのづからあり。人のしわざさだまりて後、この道つひにあらはれたり。世をほめ、時をそしる。雲風につけてこそざしをのぶ。</p> <p>訳文：和歌は、天地がまだ分れない時から、その原理は自然と存在していた。そして、人人の行いが定まった後、和歌の道としてははっきりとあらわれたのである。（和歌は）世上のことをも褒め、また時勢を諷刺もする。自然のさまざまな現象に応じて心の動くところを表現する。</p>
115	<p>西行、源実朝、藤原定家ほか「中世和歌集」 （続三十六番歌合（跋文）P.83）</p>	鎌倉時代～江戸時代前期	和歌集(三人称)	なし	なし	不問→和歌 上下 不問→もの	①	なし	<p>（跋文） 神風宮河の歌合、勝ち負け記しつくべき由侍りし事は、玉櫛箭二年あまりにもなりぬれど、かくれては道をまる神の深くみそなはさむことをおそれ、あらはれては家につたはらむ言の葉に、浅き色見えむ事をつつむのみにあらず、わづかに三十字あまりを連れぬれど、いまだ六つの姿のおもむきをだに知らず、おのづから難波津のあとをならへど、さらに出雲八雲の中へくらくのみ侍る上に、唐土の昔の時に、幾百年のうとかや、詞人才子の文体、三度改まりにければ、まして大和言葉の定まれる所なき心姿、いつれを悪し善しといひ、いかなるを深し浅しと思ひはかるべしとは、誰に従ひて何を実と知るべきにもあらず。時により所につけて、好み詠み褒め褒めるならひにぞあるべき、しるるを、此の歌合は、わざと沈み思ひて合せ番はれたるにもあらず。ただ多くの年来積もれる言の葉を拾ひて、並びぬべき節々、通へる所々を思ひ合せつづ、左右に立てられて侍れば、事の心幽かに歌の姿高くして、空よりも及びがたく、雲よりも測りがたし。</p> <p>訳文：（跋文）この宮河の歌合に勝負を記しつけるべき（上人からの）御沙汰がありましたのは、もう二年余り前にもなつてしまいましたが、（神・仏の）目に見えない世界のこととしては、道を守護する神が（私の判詞を）深いお考えで御覧になることを恐れ、目に見える（現世の）こととしては、家代々に伝わる和歌についての浅はかな言葉を覚えてしまうことを憚る気持があり、それだけではなく、また私もかろうじて和歌を詠んではおりますが、まだ六義の本質をさえ弁えず、たまたま和歌の道を学んでは来ましたが、全く道の進むべき方向も存じません。その上に、古代の中国でさえ、幾百年の内とかに優れた漢詩文の人たちの文体が三度改まったといえますので、まして和歌の、これと決った基準のない心や姿（内容や表現様式）は、どれを悪し、善しといひ、またどのようなものを深い、浅いと評価すべきか、ということについて、誰の考えに従つて何を真実とすべきか、知ることができないのであります。時と場合によつて好み詠んだ歌につき、褒めたり貶したりするのが習いになっているのが現状であります。しかしこの歌合は、（上人が）あえて沈思の上歌を審査られたものでもありません。ただ長い年月に詠まれたたくさんの歌から撰んで、審えるのにふさわしいさまざまな点や、共通している所々を見合せながら、左右に対置されてありますので、その趣旨が奥深く、歌の姿が高くして、空よりも及び難いほどであり、雲よりも測り難いものがあります。</p>
116	<p>阿仏尼「十六夜日記（中世日記紀行集）」 （二 東日記〔二二〕為守三十首とその返信 P.298）</p>	鎌倉時代～安土桃山時代	紀行(一人称)	なし	なし	評語→歌の姿 不問 不問	②	なし	<p>秋深き草の枕に我ぞなくふり捨てて来し鈴虫の音を又この五十首の奥に、言葉を書きそふ。大方の歌さまざまなを、ほめも、又詠むべきやうなど記しつけて、奥に、昔人の事を、これを見ばいかばかりとか思ひ出づる人にかはりて音こそ泣かれと書きつく。</p> <p>訳文：秋深き……（秋も深まった旅の草枕に虫ならぬ私が声をあげて泣く。故郷に振り捨てて来た、可憐な鈴虫にも似た子ら pensando）また、この五十首の後に、評語を書き添える。全体的な歌の姿などをほめもし、また今後の詠み方の注意なども書きつけて、最後に亡き夫、子らの父親のことを、これを見れば……（この詠草を見たらどんなに喜ばれることかと、思い出すあの方に代つて、声を出して泣かれることです）と書きつける。</p>
117	<p>藤原俊成女「無名草子」 （〔一〕序 P.180）</p>	鎌倉時代（1198～02ごろ成立）	評論(一人称)	なし	なし	女性たち→お経 上下 女→もの	①	なし	<p>一部読み果てて、「滅罪生善」など数珠おし擦りて、「今は休みはべりなむ」とて寄り臥しぬれど、この人々はぬて、さまざまのそぞろ言とも言ひ、経の、よき、悪しきなど褒めそしり、花、紅葉、月、雪につけても、心々とどりに言ひあへるも、いとをかしければ、つくづくと聞き臥したるに、三四人はなほみつづ、物語をしめじめとうちしつづ、「さてもさても、何事かこの世にとりて第一に捨ててたきふしある。</p> <p>訳文：一通り読み終つて、「滅罪生善」などと唱えながら数珠をおし擦つて、「もうやすみしよう」と言つて私は物に寄り臥したけれど、この女性たちは立ち去らず、さまざまとりとめないことどもを話して、お経の、よいの、悪いのなどほめたりけなしたりし、花、紅葉、月、雪につけても、それぞれ思い思いに言いあっているのも、私にはたいそう興味深く思われたので、じつと耳を傾けながら横になつていたところ、三四人はなお残つて、物語をしんみりとしながら、「ねえそれにしても、いったいどういうものがこの世で一番捨ててたいものかしら。</p>

118	藤原俊成女「無名草子」 （〔五九〕——紫式部 P.275）	鎌倉時代（1198～02年ごろ成立）	評論（一人称）	博雅三位だにかばかりの音は弾きたてたまはず	③	当時の人→琵琶を弾く女 不問 不問→女	③	なし	『博雅三位だにかばかりの音は弾きたてたまはず』と、時の人褒めはべりけるほどこそ、女の身にはありがたきことにはべれ。歌などを読み、すぐれて、人に褒めらるるためには、昔も今もいと多かり。これは、いとありがたくらやましきことにはべり」など言ふなり。 訳文：『あの博雅三位でさえこれほどの音色はお出しにならなかった』と、当時の人が褒めましたというあたりは、女の身としてはめったにないことに思われます。歌などを読み、すぐれていて、人に褒められる例は、昔も今もたいそう多くあります。こうした琵琶の話は、本当に珍しくうらやましいことです』などと言うようだ。
119	作者未詳「宇治拾遺物語」 （宇治拾遺物語（原） 宇治拾遺物語 序 宇治拾遺物語 巻第二 五 用経、荒巻の事 23 P.74）	鎌倉時代（1213～21年ごろ成立）	フィクション（三人称）	いとかしこく、あはれ、飛ぶがごと走りてまうで来たる童かな	②	用経→童 上下 男→男	⑤	なし	「遅し遅し」と言ひゐたる程に、やりつる童、木の枝に荒巻二つ結びつけて待て来たり。「いとかしこく、あはれ、飛ぶがごと走りてまうで来たる童かな」とほめて、取りてまな板の上にうち置きて、ことごとしく大鯉作らんやうに左右の袖つくりひ、くくりひき結び、片膝立て、今片膝伏せて、いみじくつきづきしくゐなして、 訳文：「遅い、遅い」と言っているうちに、使いにやった童が、木の枝に荒巻二つを結んで持って来た。「偉い、偉い、ほんとうに、飛ぶように走って行って来たなあ」とほめて、荒巻を受け取り、まな板の上に置いて、大げさに大鯉でも料理するように、左右の袖を取りつくり、括りのひもを引き締め、片膝を立て、もう一方の膝は伏せて、いかにも大鯉の料理に似合わしげな恰好をして、
120	作者未詳「宇治拾遺物語」 （宇治拾遺物語 巻第十五 三 賀茂祭の帰り武正、兼行、御覧の事 188 P.465）	鎌倉時代（1213～21年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なほずちなき者の心際なり	①	人々→武正 不問 不問→男	⑤	なし	殿御覧じて、「今一度北へ渡れ」と仰せありければ、また北へ渡りぬ。さてあるべきならねば、また南へ帰り渡るに、この度は兼行さきに南へ渡りぬ。「次に武正渡らんずらん」と人々待つ程に、「いかにいかに」と待ちけるに、幔の上より冠の巾子ばかり見えて南へ渡りけるを、人々、「なほずちなき者の心際なり」とほめけりとか。 訳文：殿が御覧になって、「もう一度北へ渡れ」と仰せがあったので、また北へと通って行った。そのままでいられないので、また南へ帰って来ると、今度は兼行が先に南へと通って行った。次に武正が通るだろうと人々が待っていると、武正はややしばらく現れない。「どうしたのか」と思ううちに、向こうに引いてあるまん幕よりも東の方を通るのであった。みなが「どうしたか、どうしたか」と待っていた時に、まん幕の上から冠の巾子だけが見えて南へ過ぎて行ったが、人々はそれを、「たぐいなく気の利いた心遣いである」とほめ合ったという。
121	作者未詳「宇治拾遺物語」 （宇治拾遺物語 巻第一 九 宇治殿倒れさせ給ひて、実相房僧正、駿者に召さるる事 9 P.43）	鎌倉時代（1213～21年ごろ成立）	フィクション（三人称）	よろしく詠みたり。ただし、けれ、けり、けるなどいふ事は、いとしもなきことばなり。それはさることにて、花こそといふ文字こそ女の童などの名にしつべけれ	②	通俊の卿→兼久の歌 上下 男→男（もの）	①	B	通俊の卿、「よろしく詠みたり。ただし、けれ、けり、けるなどいふ事は、いとしもなきことばなり。それはさることにて、花こそといふ文字こそ女の童などの名にしつべけれ」とて、いともほめられざりければ、言葉少なにて立ちて、侍どもありける所に、「この殿は大方歌の有様知り給はぬにこそ。かかる人の撰集承りておはするはあさましき事かな。四条大納言歌に、春来てぞ人も訪ひける山里は花こそ宿のあるじなりけれと詠み給へるは、めでたき歌とて世の人口にのりて申すめるは。 訳文：通俊卿は、「かなりよく詠めている。ただし、けれ、けり、けるなどということは、あまり感心できない言葉である。それはまあそれとして、『花こそ』という文字は、女の子などの名につけるような言葉だ」と言って、たいしてほめもなさなかったので、兼久は言葉少なにその座を立てて、侍たちのいる所に立ち寄って、「この殿は少しも歌のことをご存じない方ぞ。こんな未熟な人が撰集の勅命を承っておられるとは、あきれたことだ。四条大納言の歌に、春来てぞ……（春が来てから初めて人も訪れて来る山里では、桜の花こそ宿のあるじのようなものだ）と詠んでおられるのは、すぐれた歌として世の人にもてはやされているではないか。
122	作者未詳「宇治拾遺物語」 （宇治拾遺物語 巻第二 七 鼻長き僧の事 25 P.79）	鎌倉時代（1213～21年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	殿ばら→厚行 上下 男→男	⑤	なし	ただ物忌まぬは命も長く、子孫も栄ゆ。いたく物忌み、くすしきは人といはず。恩を思ひ知り、身を忘るるをこそ人はとはいへ。天道もこれをぞ恵み給ふらん。よしなき事なわびそ」とて、下人ども呼びて中の檜垣をただこぼちにこぼちて、それよりぞ出させける。さてその事世に聞えて、殿ばらもあさみほめ給ひけり。さてその後、九十ばかりまで保ちてぞ死にける。それが子どもにいたるまで、みな命長くて、下野氏の子孫は舍人の中にもおほくあるとぞ。 訳文：まったく物を忌まない人は命も長く、子孫も栄えるものだ。やたらに物を忌み、気に病む者は、まともな人間ではない。恩を思い知り、わが身を忘れて人のために尽す者こそ、本当の人間というものだ。天の神もこういう人に恵みをかけられる。つまらぬことにくよくよするな」と言って、下人たちを呼んで、境の檜垣をすっかりこわしてしまい、そこから死人を運び出させた。さて、そのことが世間に聞えて、上司の人々もあきれながらもおほめになった。その後厚行は九十ばかりまで生き長らえて死んだ。その子供にいたるまでみな長命で、下野氏の子孫は舍人の中にも大勢いるということだ。
123	作者未詳「宇治拾遺物語」 （宇治拾遺物語 巻第三 十六 雀報恩の事 48 P.135）	鎌倉時代（1213～21年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	子供→老女 下上 不問→女	③	なし	「一つが徳をだにこそ見れ、ましてあまたならばいかに頼もしからん。あの隣の女にはまさりて、子どもにほめられん」と思ひて、この内に米撒きて窺ひみたれば、雀ども集りて食ひに来たれば、また打ち打ちしければ、三つ打ち折りぬ。 訳文：「一羽を助けてさえ、あんなに得をするのだから、まして何羽もならんどんなにか大金持ちになれよう。あの隣の女よりももっと、子供たちにほめられるに違いない」と思って、裏口のあたりに米をまいてうかがっていると、雀どもが集まって食いに来たので、また何度も石を打ちつけると、三羽が腰を折った。
124	作者未詳「宇治拾遺物語」 （宇治拾遺物語 巻第七 二 播磨守為家の侍佐多の事 93 P.229）	鎌倉時代（1213～21年ごろ成立）	フィクション（三人称）	物縫はせ事さすと聞くが、げにとく縫ひておこせたる女人かな	②	佐多→女人 上下 男→女	③	なし	行き着きけるままだに、とかくの事もいはず、もとより見馴れなどしたらんにてだに、疎からん程はさやあるべき、従者などにせんやうに、着たりける水干のあやしげなりけるが、ほころび絶えたるを切懸の上より投げこして、高やかか、「これがほころひ縫ひておこせよ」といひければ、程もなく投げ返したりければ、「物縫はせ事さすと聞くが、げにとく縫ひておこせたる女人かな」と荒らかなる声してほめて、取りて見るに、ほころびは縫はで、みちのくに紙の文をそのほころひのもとに結びつけて、投げ返したるなりけり。 訳文：郡司の家に行き着いたが、そのまま女には何の挨拶の言葉もかけない。もとからよく知っているような間柄でさえ、まださほど打ち解けてもない間はそんなふうにしてよいはずはないのに、まるで従者などにでもさせるように、着ていた粗末な水干の縫目のほころびたのを、切懸堀の上から投げやって、声高に、「このほころびを縫ってよこせ」と言うと、まもなく投げ返してきた。「縫物をさせていると聞いていたが、なるほど手早く縫ってよこす、手の利く女かな」と、声高らかにほめたてて取り上げて見ると、ほころびは縫わず、陸奥国紙に書いた手紙を、そのほころびのもとに結びつけて、投げ返してきたのだった。
125	作者未詳「宇治拾遺物語」 （宇治拾遺物語 巻第七 六 小野宮大饗の事、西宮殿富小路大臣大饗の事 97 P.246）	鎌倉時代（1213～21年ごろ成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	客人→（富小路の大臣）の馬 下上 不問→男（動物）	①	なし	黒栗毛なる馬の、たけ八寸余りばかりなる、ひらに見ゆるまで身太く肥えたる、かいこみ髪なれば、額のもち月のやうにて白く見えければ、見てほめののしりける声、かしがましきまでなん聞えける。馬のふるまひ、面だち、尻さし、足つきなどの、ここはと見ゆる所なく、つきづきしかりければ、家のしつらひの見苦しかりつるも消えて、めでたうなんあけける。さて世の末までも語り伝ふるなりけり。 訳文：黒栗毛の馬で丈は四尺八寸以上ほどもあり、平たく見えるほどに太く肥えて、かいこみ髪のため額が満月のように白く見えしたので、これを見てやんやとほめそやす声が、やかましいまでに聞えた。馬のふるまい、顔だち、尻のさき、足つきなど、これという欠点もなく、いかにも臍物としてふさわしいものだったので、家の造作の見苦しかったことも忘れられて、まことに立派な大饗となった。そこで世の末までも語り伝えるのである。
126	作者未詳「宇治拾遺物語」 （宇治拾遺物語 巻第七 七 式成、満、則員等三人満口弓芸の事 98 P.247）	鎌倉時代（1213～21年ごろ成立）	フィクション（三人称）	これすでに養由がごとし	③	当時の人→道式成、源満、則員 不問 不問→男	③	なし	道式成、源満、則員、殊に的弓の上手なり。その時聞えありて、鳥羽院位の御時の滝口に、三人ながら召されぬ。試みあるに、大方一度もはずさず。これをもてなし興ぜさせ給ふ。ある時三尺五寸の的を賜ひて、「これが第二の黒み、射落して持て参れ」と仰せあり。巳の時に賜りて未の時に射落して参れり。いたつき三人の中に三手なり。矢取りて、矢取の帰らんを待たば、程経ぬべしとて、残りの輩、我と矢を走り立ちて取り取りして、立ちかはり立ちかはり射る程に、未の時の半らばかりに、第二の黒みを射めぐらして、射落して持て参れりけり。「これすでに養由がごとし」と時の人ほめののしりけるとかや。 訳文：宮道式成、源満、則員は、ことのほかに的弓の名手であると、そのころ評判が高かったので、鳥羽院御在位の御時の滝口の武士に三人とも召し出された。試射の際には、およそ一度もはずしたことがない。院はこの三人を相手にして興じられていた。ある時、三尺五寸の的を賜って、「この第二の輪の黒い部分を射落して持ってまいれ」と仰せられた。三人は午前十時に賜って、午後二時ごろに射落して参上した。すなわち練習用の矢は三人に対して三対であったので、「矢取りの者が矢を取って帰るのを待っていたら、時間がたってしまうだろうと、残りの者は自分で走り出して矢を取り、そうして順々に取って、入れ代り立ち代り射るうちに、ちょうど午後二時ごろに第二の黒い部分を射めぐらして、射落して持参したのであった。『これはまるで養由のようだと、当時の人はほめそやしたという。

127	<p>作者未詳「宇治拾遺物語」 (宇治拾遺物語 巻第十 四 淨蔵が八坂の坊に強盗入る事 117 P.310)</p>	鎌倉時代(1213～21年ごろ成立)	フィクション(三人称)	えせ牛ならましかば、引かれて落ちて、牛もそこなはれまし。いみじき牛の力かな	②	その辺の人→河内の前司 下上 不問→男(動物)	①	なし	<p>人も乗らぬ車なりければ、そこなはる人もなかりけり。「えせ牛ならましかば、引かれて落ちて、牛もそこなはれまし。いみじき牛の力かな」とて、その辺のいいひほめける。かくて、この牛をいたはり飼ふ程に、この牛、いかにして失せたるといふ事なくて失せにけり。</p> <p>訳文：人が乗っていない車であつたので、死傷者も出なかった。「へつぽこ牛だったら、引っぱられて落ちて牛も死んでいただろう。まったくすごい牛の力だ」と、そのあたりの人は言ってほめそやした。こうしてこの牛を大事にして飼っているうちに、どうしていなくなったのかははっきりしないままに、行方不明になってしまった。</p>
128	<p>作者未詳「宇治拾遺物語」 (宇治拾遺物語 巻第十二 十二 高忠の侍、歌詠む事 148 P.377)</p>	鎌倉時代(1213～21年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	守→侍 上下 男→男	③	なし	<p>今は昔、高忠といひける越前守の時に、いみじく不幸なりける侍の、夜屋まめなるが、冬なれど、帷をなん着たりける。雪のいみじく降る日、この侍、清めすとて、物の悪きたるやうに震ふを見て、守、「歌詠め。をかしう降る雪かな」といへば、この侍、「何を題にて仕るべき」と申せば、「裸なる由を詠め」といふに、程もなく震ふ声をささげて詠みあぐ。はだかなる我が身にかかる白雪はうちふるへども消えせざりけりと誦みければ、守いみじくほめて、着たりける衣を脱ぎて取らす。北の方も衰れがりて、薄色の衣のいみじう香ばしきを取らせたりければ、二つながら取りて、かいわぐみて、脇に挟みて立ち去りぬ。</p> <p>訳文：今は昔、高忠という人が越前守の時に、きわめて不遇で貧しかった侍がおり、夜屋まじめに勤めていたが、冬でも一重の着物を着ていた。雪のひどく降る日、この侍が掃除をするといつて、何か着き物でも悪いたようにふるぶる震えているのを見て、守が、「歌を詠め。みごとに降る雪よ」と言う、この侍が、「何を題にして詠みましょうか」と問う。「裸でいることを詠め」と言う、まもなく震える声を張りあげて詠み出した。はだかなる……(裸でいる自分の身に降りかかる白雪―白髪―は、いくら振り払っても消えないことず)こう詠んだので、守はたいそうほめて、着ていた着物を脱いで与えた。奥方も気の毒がつて薄紫色のよく香をたきしめた衣服を与えた。すると、侍は二つとも受け取って、くるくると丸め込んでわきにはさんで立ち去った。侍所に行く、と居並んでいた侍たちが見て驚き、不思議がつているいろと尋ねたが、これこれとわけを聞いて、みな感心した。</p>
129	<p>作者未詳「宇治拾遺物語」 (宇治拾遺物語 巻第十四 一 海雲比丘の弟子童の事 175 P.429)</p>	鎌倉時代(1213～21年ごろ成立)	フィクション(三人称)	いみじくしたり。その女は文殊の化して、汝が心を見給ふにこそあるなれ	②	比丘→童子 上下 男→男	⑤	なし	<p>我が師の、「女人の傍らへ寄る事なかれ」とのたまひしにと思ひて、五台山へ帰りと、女のありつるやうを比丘に語り申して、「されども、耳にも聞き入れずして帰りぬ」と申しければ、「いみじくしたり。その女は文殊の化して、汝が心を見給ふにこそあるなれ」とてほめ給ひける。さる程に、重は法華経を一部読み終へにけり。</p> <p>訳文：「自分の師が、『女人のそばへ寄るな』とおっしゃったのだから」と思つて、五台山へ帰つて、女の先ほどの様子を比丘に語つて、「それでも、耳を貸さずに帰りました」と申しあげると、比丘は、「よくやった。その女は文殊が身を愛えて、おまえの心を試して御覧になったのだ」と言つて、おほめになった。</p>
130	<p>作者未詳「宇治拾遺物語」 (宇治拾遺物語 巻第十五 十二 盗跖と孔子と問答の事 197 P.486)</p>	鎌倉時代(1213～21年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	ほめ手不問→わし 不問 不問→男	なし	なし	<p>我また悪しき事を好めども、災身に來たらず。ほめらるるもの、四五日に過ぎず。そしらるるもの、また四五日に過ぎず。悪しき事もよき事も、長くほめられ、長くそしられず。しかれば我が好みに随ひ振舞ふべきなり。</p> <p>訳文：わしはまた悪いことを好むが、災いは身にかからぬ。ほめられる者もせいぜい四、五日にすぎぬ。そしられる者もまたわずかに四、五日にすぎない。悪いこともよいことも、いつまでもほめられ、いつまでもそしられるわけではないのだ。だから自分の好みに従つてふるまうべきだ。</p>
131	<p>作者未詳「保元物語」 (保元物語 中(扉) 白河殿攻め落す事 P.295)</p>	鎌倉時代(1219～22年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	人々→兄弟の勇氣 不問 不問→男	⑤	なし	<p>「よしや、殿、日来はともあれかくもあれ、自今以後、和殿に過ぎたる奉公の人やはあるべき。何事なりといふとも、宣ふにこそ従はめ」と、怠状をしければ、「さらば」とて、また異き負ひて出でにけり。京中に置かんと思へども、落人として、打ちや殺されんずらん、白河にや置かましと思へども、物具に目を懸けて、盗人や打ち臥すらんと思ひ、また、兄が鎧も重代なり、我が着たるも相伝の鎧なり、命にかへても惜しく思ふ。兄を、ぬげと言はんもこころもなし。兄も弟も、鎧着ながら、大炊御門より山科まで行けるに、ただ二所にて休みけり。左右なき行き着きて、ある者の許に預け置き、則ち、走り帰りつつ、その夜の戦にあひけるを嘗めぬ者こそなかりけれ。</p> <p>訳文：「わかった。これまでのことはともかく、これからはお前以上に自分に尽くしてくれる者はいないこと、よくわかった。何でも仰せに従うから」とあやまったので、それではということになり、またかついでここを立ち去った。京中に隠しおこうとしたが、落人よと殺されるかもしれない、白河に隠しおこうかと考えたが、武具をかすめ取ろうとして盗人に倒されるだろうことを恐れた。兄の鎧も重代、自分の着けた鎧も相伝の大事な鎧、命以上に惜しんできた鎧よ。兄に鎧を脱ぎ捨てよというの気がひける。そこで、兄も弟も鎧を着たまま、大炊御門から山科まで逃げのびたが、途中二か所で休んだだけで、とがめられることなく行き着き、知り合いの者に兄を預けて、景親はただちに走り帰つて、その夜の合戦を戦つた。人は皆その勇氣を称えたことである。</p>
132	<p>作者未詳「平家物語」 (巻第三(扉) 大臣流罪 P.244)</p>	鎌倉時代(13世紀前半ごろ成立)	フィクション(三人称)	あなおそろし。入道のあれ程いかり給へるに、ちつとも恐れず、返事うちしてたたる事よ	②	人々→法印 不問 不問→男	④	なし	<p>よく / \ 御思惟候べし。詮ずるところ、此趣をこそ披露仕り候はめ」とて出でられければ、いくらもなみゐたる人々、「あなおそろし。入道のあれ程いかり給へるに、ちつとも恐れず、返事うちしてたたる事よ」とて、法印をほめぬ人こそなかりけれ。</p> <p>訳文：よくよくお考えになるべきです。あれこれ申しましたが、要するに、あなたのご意見を君にご披露いたしましう」といつて退出されたので、たくさん並んですわっていた人々は、「ああ、すごい。入道があんなに怒っておられたのに、ちつとも恐れず、返事をしてお行きになったことだ」と、法印をほめない人はなかった。</p>
133	<p>作者未詳「平家物語」 (巻第十二(扉) 土佐房被斬 P.453)</p>	鎌倉時代(13世紀前半ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	人々→昌俊 不問 不問→男	⑤	なし	<p>鎌倉殿の、『法師なれどもおのれぞねらはんずる者』とて、仰せかうぶしより、命をば鎌倉殿に奉りぬ。なじかはとり返し奉るべき。唯御恩にはとく / \ 頭を召され候へ」と申しければ、「さらばきれ」とて、六条河原にひきいだいてきつてンげり。ほめぬ人こそなかりけれ。</p> <p>訳文：鎌倉殿の、『法師だけれども、お前こそ義経の命を狙える者だ』という御ことばをいただいてより、命は鎌倉殿に差し上げたのだ。どうしてそれをお取り返し申すことができます。ただご恩には、さつさと首をお斬りくださいますよう」と申したので、「それならば斬れ」といつて、六条河原に引き出して斬つてしまった。昌俊を愛めない人はなかった。</p>
134	<p>作者未詳「平家物語」 (巻第十二(扉) 六代被斬 P.495)</p>	鎌倉時代(13世紀前半ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	人々→盛嗣 不問 不問→男	⑤	なし	<p>「勇士二主に仕へず。盛嗣程の者に御心ゆるし給ひては、かならず御後悔候べし。ただ御恩にはとくとく頭を召され候へ」と申しければ、「さらばきれ」とて、由井の浜にひきいだいて、きつてンげり。ほめぬ者こそなかりけれ。</p> <p>訳文：「勇士は二人の主になれない。盛嗣ほどの者にご油断なさつては、必ずご後悔なさいましょう。ただご恩としては、さつさと首をお取りください」と申したので、「それならば斬れ」といつて、由井の浜に引き出して、斬つてしまった。盛嗣の深いふるまいを愛めない者はなかった。</p>
135	<p>作者未詳「平家物語」 (巻第六(扉) 慈心房 P.458)</p>	鎌倉時代(13世紀前半ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	凡人→大極殿 上下 不問→もの	②	なし	<p>從僧等西北の方にむかつて、空をかけて程なく閻魔王宮にいたりぬ。王宮の体を見るに、外ニ渺々として、其内曠々たり。其内に七宝所成の大極殿あり。高広金色にして、凡夫のほむるところにあらず。其日の法会をばつて後、請僧みなかへる時、尊恵南方の中門に立つて、はるかに大極殿を見わたせば、冥官異衆みな、閻魔法王の御前にかしこまる。</p> <p>訳文：從僧らは西北の方に向つて、空を走らせて、まもなく閻魔王宮に到着した。王宮の様子を見ると、外囲いははるかに遠く続き、その内部は広々としている。その中央に七宝で造つた大極殿がある。高く広く金色に輝いて、凡人がほめてもほめきれないほどすばらしい。その日の法会が終つて後、招待された僧はみな帰つて行く時、尊恵は南方の中門に立つて、はるかに大極殿を見わたすと、冥界の官人などがみな閻魔法王の御前に畏まっている。</p>

136	孤雲懷奘「正法眼蔵随聞記」 (三ノ七 示して云はく、納子の用心、仏祖の行履を守 P.407)	鎌倉時代(1235～38年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	教相家→禪宗の貧しさ 上下 男→男	⑥	なし	我が門の祖師、皆、財宝を貯ふべからずとのみ勧むるなり。教家にも、この宗を讀するには、先づ貧を要め、伝来の書録にも、貧を記して褒むるなり。未だ、財宝に富み、豊かにして、仏法行ずることを聞かず。 訳文：我が禪門の祖師は、みな、財宝を貯えてはならぬとばかり勧ますのである。教相家でも、この禪宗を讀えるには、まず第一に、貧しい生活をほめ、代々伝えてきた記録にも、その貧しさを記してほめているのである。私は、まだ、財宝が充分にあり、豊かであって、しかも、仏法を修行した事実を聞いていない。
137	孤雲懷奘「正法眼蔵随聞記」 (三ノ十二 また云はく、学道の人、多く云はく、「もし P.414)	鎌倉時代(1235～38年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	世間の人→(自分の)行為 不問 不問→男	⑤	なし	世間の人いかに誇ずとも、仏祖の行履、聖教の道理にてだにあらば、依り行ずべし。たとひ、世人挙つて褒むるとも、聖教の道理ならず、祖師も行ぜざることならば、依り行ずべからず。その故に、世人の親・疎、我を要め、我を誹ればとて、かの人の心に随ひたりとも、我が命終の時、悪業に引かれ、悪道に趣かん時、いかで救ふべき。 訳文：世間の人がどのように悪く言っても、仏祖の示された行為や、聖典に記された道理でありさえすれば、それにもとづいて実行すべきである。その反対に、たとい、世間の人が皆そろってほめても、聖典に説く道理でなく、祖師の方々も実行しない事なら、それにもとづいて実行してはならない。それだから、世間の人で親しい者や疎い者が、自分をほめたり、また悪く言ったりしたからといって、その人の心に従つたにしても、自分の臨終の時に、生前になした悪い行為に引き込まれて、地獄に向て行く時に、どうして世間の人が自分を救うことができるか。
138	孤雲懷奘「正法眼蔵随聞記」 (五ノ五 僧問ひて云はく、「智者の無道心なると、無 P.451)	鎌倉時代(1235～38年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	不問→修行する人々 不問 不問	⑤	なし	当世、現証、これ多し。しかれば、先づ、道心の有・無を云はず、学道を勧むべきなり。道を学せば、ただ貧なるべし。内・外の書籍に、貧うして居所なく、或は滄浪の水に浮び、或は首陽の山に隠れ、或は樹下・露地に端坐し、或は塚間・深山に卓庵する人あり。また、富貴にして財多く、朱漆を塗り、金玉を磨き、宮殿等を造るもあり。俱に、典籍に載せたり。然りといへども、褒めて後代を薦むるには、皆、貧にして財なきを以て本とす。 訳文：今の世の中でも、実際の証拠が多いものだ。だから、求道心の有る・無しを問題にせず、まず第一に、仏道の修行に努力すべきである。仏道を修行するなら、ただただ、貧しく生きなくてはならぬ。仏教やそれ以外の書物には、貧しくて住居がなく、あるいは滄浪の水のほとりに浮んでさまよい、あるいは首陽山に隠れ、あるいは大木の下や露出した地面にきちんと坐禅し、あるいは墓地や深山に草庵を造って修行する人がある。あるいは富み栄えて身分が高くなり、財宝が豊かで、柱に朱や漆を塗り、磨いた金や玉を飾りつけ、宮殿などを造築する人もある。こういう貧富の人々のことが、どちらも、立派な書物に載せている。そうではあるが、ほめ讃えて後世の人々に推薦するには、すべて、貧しくて財産のない人々をもって手本とするのである。
139	孤雲懷奘「正法眼蔵随聞記」 (正法眼蔵随聞記 第三 三ノ十二 また云はく、学道の人、多く云はく、「もし P.414)	鎌倉時代(1235～38年ごろ成立)	随筆(一人称)	なし	なし	世間の人→行うこと 不問 不問→こと	⑤	なし	三ノ十二 また云はく、学道の人、多く云はく、「もし、この事をなさば、世人、これを誇ぜんか」と。この言、太だ非なり。世間の人いかに誇ずとも、仏祖の行履、聖教の道理にてだにあらば、依り行ずべし。たとひ、世人挙つて褒むるとも、聖教の道理ならず、祖師も行ぜざることならば、依り行ずべからず。 訳文：師は、また言われた。仏道修行者は、多くは、「もしこの事を行えば、世間の人はこれを悪く言うだろうか」と言っている。この言葉は非常に間違っている。世間の人がどのように悪く言っても、仏祖の示された行為や、聖典に記された道理でありさえすれば、それにもとづいて実行すべきである。その反対に、たとい、世間の人が皆そろってほめても、聖典に説く道理でなく、祖師の方々も実行しない事なら、それにもとづいて実行してはならない。
140	作者未詳「十訓抄」 (十訓抄 上(扉) 第十 才芸を庶幾すべき事 十ノ二十 博雅三位と朱雀門の鬼 P.409)	鎌倉時代(1252年成立)	フィクション(三人称)	なほ逸物かな	①	鬼→笛 不問 不問→(男)	③	なし	この笛を吹きけるに、かの門の樓上に、高く大きな音にて、「なほ逸物かな」とほめけるを、「かく」と奏しければ、はじめて鬼の笛と知ろしめしけり。名笛「葉二」「葉二」と名づけて、天下第一の笛なり。 訳文：すると、門の樓の上から、とてつもない大きな声で、「最高の優れ物だ」という喚声が聞えてきた。浄蔵は帝に、「こういう事がございました」と奏上した。こうして、初めてこの笛が朱雀門の鬼の物であったことがわかったのである。
141	作者未詳「十訓抄」 (十訓抄 上(扉) 第一 人に恵を施すべき事 第三 人倫を侮らざる事 三ノ十六 卑賤から出た日本の賢人 P.142)	鎌倉時代(1252年成立)	フィクション(三人称)	身の色は金山の如く端嚴其微妙 端嚴にして、それ微妙 浄瑠璃の中に内に真金の像を現すが如し	②	覚運→聖人 下上 男→男	②	なし	かやうの田舎には候はじとて、参り侍るなり」といはれければ、上人、「かやうの法門は普賢のおはしまして、まして、解説せしめ給ふなり」と答ふ。時に恵心、帰敬の思ひにたへず、礼拝して、檀那に「この聖、ほめ申させ給へ」と申されければ、身の色は金山の如く端嚴其微妙 端嚴にして、それ微妙 浄瑠璃の中に 内に真金の像を現すが如しと、伽陀を誦じて拝まれけり。 訳文：上人は、「そのような経文は普賢菩薩がいらっしゃって、お説き下さっております」と答えるのであった。この時、源信は帰依渴仰の思いにたえきれず、礼拝し、覚運に、「この聖人の讃嘆を申し上げて下さい」と申されたので、身の色は黄金の山のような端麗、そして微妙浄瑠璃の青い宝石の中に金色の身像を現すかのようだという偈を、覚運は口で唱えて、拝みなされたということである。
142	作者未詳「十訓抄」 (十訓抄 上(扉) 第一 人に恵を施すべき事 一ノ二十 藤原実方の雅な振舞 P.55)	鎌倉時代(1252年成立)	フィクション(三人称)	なし	①	人々→藤原実方中将 不問 不問→男	③	なし	藤原実方の雅な振舞 一条院、御位の時、実方中将、臨時祭の試案に遅く参りて、挿頭の花をたまはらで、おうて舞人に加はるとて、竹の台にすすみよりて、呉竹の枝を折りてさしたりける、めでたきよし、人々ほめあひけり。これよりのち、試案の挿頭には、竹の枝をさすとかや。 訳文：一条院の御在位の時、藤原実方中将が、臨時の祭の試案に遅参してしまった。そのため挿頭の花をいだけなかった。あとから舞人に加わろうとして、呉竹の竹台に近寄って、呉竹の枝を折り、挿頭にさして登場してきた。この実方の振舞を、人々は雅で素晴らしいかと、褒め合つたという話である。これよりのち、試案の挿頭には竹の枝をさすことになったという。
143	作者未詳「十訓抄」 (十訓抄 上(扉) 第一 人に恵を施すべき事 一ノ二十一 香炉峰の雪 P.62)	鎌倉時代(1252年成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	和漢の人→大江匡房の返書 不問 不問→男(もの)	①	なし	人々申すやう心々にて、定まりえざりけるに、帥民部卿経信卿、とばかり待たれて参りて、ことの次第聞きて、「唐の後の死なむ、日本になに苦し」と、ただ一言いはれたりければ、この意見に付きて、渡さるまじきに定まりにけり。さて、その返牒は、匡房承りてぞ書かれける。双魚難=達風池之浪双魚、風池の浪に達し難し鴈鵠豈入鷄林之雲= 鴈鵠、豈に鷄林の雲に入らむやこの句をば、和漢ともにほめかへりけるとぞ。 訳文：人々の意見はまままちで、決らなかつた。帥民部卿源経信卿は、少しばかり遅れてお見えになり、事のあらましを聞かれて、「中国の后が死んでも、日本にとって、何の差し支えがあろう」と一言いわれた。みんなこの意見に従い、派遣は見送りになった。さて、その返書を大江匡房が承り、書くことになった。双魚の書簡は、風風池の池水までは達しない鴈鵠の名医は、新羅の鷄林の雲にどうして入っていけようかこの句は、日本でも、中国でも、絶大な賞賛を浴びたという。
144	作者未詳「十訓抄」 (十訓抄 上(扉) 第一 人に恵を施すべき事 一ノ二十三 紫式部の博識 P.65)	鎌倉時代(1252年成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	紫式部→琴を弾く女房 上下 女→女	③	なし	上東門院の御方に、琴ひく人の今参りしたりけり。院、紫式部に、「この女房に、琴ひく由、離れぬ名付けよ」と仰せごとありけるに、「いはこす」と付けたりければ、ことにほめさせ給ひけり。琴柱のさきに、緒のあたる所は、「いはこす」と申すによりて、思ひ寄られけり。かの名をば知れる人、いとまれなり。 訳文：上東門院彰子さまの御所に、琴をひく人が新しくお仕えするようになった。彰子さまは紫式部に、「この女房に、琴をひくことに、ちなんだ名をお付け」とおっしゃられたので、「いわこす」と名付けたところ、とてもお褒めになったということである。琴柱の先端の、緒の当たるところを、「いわこす」というので、それから思い付かれたのだった。その名を知っている人は、ほとんどいない。

145	<p>作者未詳「十訓抄」 (十訓抄 上(扉) 第一 人に恵を施すべき事 一ノ五十七 伊家、知房の歌を賞賛 P.105)</p>	鎌倉時代(1252年成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	われ一人のしわざ 対等 不問	⑤	なし	<p>一ノ五十七 伊家、知房の歌を賞賛 われ、その能ありと思へども、人々にゆるされ、世に所置かるほどの身ならずして、人のしわざも、ほめむとせむことをも、いささか用意すべきものなり。</p> <p>訳文：自分では、それには能力も実力もあるのだと思っけていても、人から認められ、世間でも一目置かれるほどの立場に至っていないのならば、他人の行動を褒めたりすることは、いささか注意すべきである。</p>
146	<p>作者未詳「十訓抄」 (第三 人倫を侮らざる事 三ノ四 田舎兵士の歌 P.125)</p>	鎌倉時代(1252年成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	人々→田舎兵士の歌 上下 不問→男	①	なし	<p>田舎兵士の歌 伏見修理大夫俊綱の家にて、人々、「水上の月」といふことをよみて讀じけり。時に田舎より上りたる兵士、中門の辺にて聞きけるが、青侍をよびて、「今夜の題をこそ仕りて候へ」といふ。侍、「興あることなり。いかに」ととへば、水や空空や水とも見えわかずかよひてずめる秋の夜の月待来たりて、このよしを申す。人々驚きほめて、詠吟して、はちあへりけり。</p> <p>訳文：伏見修理大夫橋俊綱の家に、人々が集まり、「水上の月」という題で歌を作り、互いに読み上げ合っていた。その時、田舎から上京していた一人の兵士が、中門の辺りで聞いていて、下侍を呼び寄せてこう言った。「今夜の歌題で、私も歌をお作りいたしました。」「おもしろいな、どんな歌だ」と下侍が聞くと、水が空か、空が水か、見分けることは難しい。いず方へも、秋夜の月は澄み渡るという歌だった。下侍は歌会の席にやって来て、この歌を伝えたところ、臨席の人々は驚き、褒めちぎり、口々に詠吟して、自分たちの至らなさを恥ずかしく思ったという。</p>
147	<p>作者未詳「十訓抄」 (第七 思慮を専らにすべき事 七ノ二十六 張良の兵法 P.328)</p>	鎌倉時代(1252年成立)	フィクション(三人称)	はかりことを帷帳の中にめぐらして、 勝事を千里の外に決すること、われ、子房にはしかじ	②	高祖→子房 上下 男→男	③	なし	<p>漢の高祖の臣、張子房、黄石公が兵書伝へて、支度をなして、項羽をうちえたり。高祖ほめてのたまはく、「はかりことを帷帳の中にめぐらして、勝事を千里の外に決すること、われ、子房にはしかじ」となり。</p> <p>訳文：漢の高祖の臣下、張子房(張良)は、黄石公の兵法書を習い伝え、計略を練って、敵将項羽を討ち取った。高祖は、子房を褒めてこう言った。「計略を幕の内に施しめぐらし、勝利を遠い千里の外の地に決した。私は子房にはかなわない」と。</p>
148	<p>作者未詳「十訓抄」 (第十 才芸を庶幾すべき事 十ノ五十 大江玉淵の娘、遊女白女 P.441)</p>	鎌倉時代(1252年成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	帝→白女の歌 上下 男→女(もの)	①	なし	<p>深みどりかひある春にあふ時は霞ならねど立ちのぼりけりこの時、帝、ほめあはれみ給ひて、御桂一重をたまはせけり。そのほか上達部、四位、おのおの衣ぬぎてかけければ、二間ばかりに積みあまりにけりとなむ。</p> <p>訳文：深い緑の美しい、かいある春。そんな春にあえば、霞ならずとも、高き貴所にも昇りますと詠んだ。帝はたいそうお褒めあそばされて、御桂一組を賜せられた。ほかの公卿の方々、四位の人々も各々衣を脱いで、女に被き与えたので、褒美の品は二間の間にも積みきれないくらいであったという。</p>
149	<p>作者未詳「十訓抄」 (第十 才芸を庶幾すべき事 十ノ七十四 陸奥守師綱、信夫郡で合戦 P.479)</p>	鎌倉時代(1252年成立)	フィクション(三人称)	<p>季春が命を助けむために、国司に送るところのもの、一万両の金をさきとして、多くの財なり。ほとんど当国の一任の土貢にもすぐれたり。これを見入れ給はず、女にもかたさらずして、つひにためしを立て給へる国司の憲法、たとへを知らず</p>	③	国の者たち→国司 下上 不問→男	⑤	なし	<p>そののち、検非違所の書生を、実検使にさしつかはずによりて、基衡、力及ばず。泣く泣く季春ならびに子息、舍弟等、五人が頭を切りてけり。さてこそ、国司しつまりにけれ。国のものどもいひけるは、「季春が命を助けむために、国司に送るところのもの、一万両の金をさきとして、多くの財なり。ほとんど当国の一任の土貢にもすぐれたり。これを見入れ給はず、女にもかたさらずして、つひにためしを立て給へる国司の憲法、たとへを知らず」とぞ、ほめののしりける。かかりければ、国しかしながらなびきしたがひて、思ふさまに行ひけり。吏務の感応、前々の国司よりも、こよなおもかりけり。</p> <p>訳文：その後、検非違所の書生を実検の使者として差し向けてきたので、基衡はどうすることもできず、泣く泣く季春および子息、その弟たち五人の首を刎ねた。こうしてやっと、国司師綱の怒りはおさまったという。国の者たちが言うには、「季春の命を助けるために、国司の所に贈った品物は、一万両の金を始めとして、多数の財宝である。その数量は陸奥の国国司の全任期間のすべての貢納物をほとんど超えている。これだけの財宝にも見向きもされず、女の哀訴にも心を寄せず、最後まで範を立てられた国司の公正さは立派で、何と評してよいかわからない」と口々に褒めたたたえた。このようなことがあって、国中すべて靡き従い、思う通りの政を行った。国衛の庁務は、前々の国司の時よりもはるかに重々しく受けとめられていった。</p>
150	<p>作者未詳「十訓抄」 (第十 才芸を庶幾すべき事 十ノ七十七 法勝寺、九重塔の贋の金物 P.487)</p>	鎌倉時代(1252年成立)	フィクション(三人称)	こやつは必ず冥加あるべきものなり。人の罪蒙るべきことの、罪を知りて、みづから、をこのものとなれる、やんごとなき思ひはかりなり	②	顕隆卿→仏師某 上下 男→男	⑤	なし	<p>時人、いみじきをこのためしにいひけるを、顕隆卿聞きて、「こやつは必ず冥加あるべきものなり。人の罪蒙るべきことの、罪を知りて、みづから、をこのものとなれる、やんごとなき思ひはかりなり」とぞほめられける。まことに久しく君に仕へ奉りて、ことなかりけり。</p> <p>訳文：さて、その時、人々は仏師某のことを、どうしようもないろくでなしの話だと噂していたのだけれども、藤原(葉室)顕隆卿はそれを聞いて、「いやいや、こいつは必ず神仏の御加護のあるやつだぞ。誰かが罰を蒙りそうだと、処罰の件を聞き知って、自分からわざと間抜けのふりをしたのだ。見事な氣の回し方だ」と褒められたということだ。はたして、その言葉通りにこの者は、長く院に仕えてつつがなかったという。</p>

151	<p>作者未詳「十訓抄」 （十訓抄 上（扉） 第一 人に恵を施すべき事 ノ五十七 伊家、知房の歌を賞賛 P.105）</p>	鎌倉時代（1252年成立）	フィクション（三人称）	優によみ給へり	①	<p>右中井藤原伊家→三河守藤原知房 対等 男→男</p>	①	B	<p>ノ五十七 伊家、知房の歌を賞賛 われ、その能ありと思へども、人々にゆるされ、世に所置かるほどの身ならずして、人のしわざも、ほめむとせむことをも、いささか用意すべきものなり。三河守知房所詠の歌を、伊家并、感歎して、「優によみ給へり」といひけるを、知房、腹立して、「詩を作ることはかたきにあらず。和歌のかたは、すこぶるかれに劣れり。これによりて、かくのごとくいはるる。もつとも奇怪なり。今よりのち、和歌をよむべからず」といひけり。優の詞も、ことによりて斟酌すべきにや。これはまされるが、申しほむるにだに、かくとがめけり。いはむや、劣らむ身にて褒美、なかなか、かたはらいたかるべし。よく心得て、心操をもてしむべきなり。</p> <p>訳文：自分では、それには能力も実力もあるのだと思っいても、人から認められ、世間でも一目置かれるほどの立場に至っていないのならば、他人の行動を褒めたりすることは、いささか注意すべきである。三河守藤原知房の詠んだ歌を、右中井藤原伊家が感激して「本当に素晴らしい歌だ」と褒めたことがあった。ところが、知房はそれを聞いて腹を立てた。「漢詩を作ることは、あの男は私の敵では決してない。しかし、和歌については、たいそう私は後れをとっている。それだからあんなことを言われてしまうのだ。どう考えても我慢できないことだ。もうこれからは一切、和歌を詠むつもりはない」と言ったという。褒める言葉でも、事柄によっては氣をつけた方がよいようだ。この話のように、力の上の人が褒めたのでさえ、こんなふうに文句がつけられたのである。いわんや、力の未熟な者が褒めたりすることは、はたで聞いていても、とても心配になってくる。よくよこのことを心得て、心遣いを慎重にすべきである。</p>
152	<p>無住道暁「沙石集」 （沙石集 巻第五本（扉） 四 慈心ある者の鬼病を免る事 P.229）</p>	鎌倉時代（1283年成立）	フィクション（三人称）	南無純陀、身、人身なりと云へども、心は、仏心に同じ	②	<p>人天→仏 不問 不問→男</p>	⑤	なし	<p>その心を、仏説き給ひしかば、人天大会、異口同音に、「南無純陀、身、人身なりと云へども、心は、仏心に同じ」と讃めけり。</p> <p>訳文：釈迦が純陀の供養の志をお説きになったので、集まった天人も人々も声を揃えて、「南無純陀、身は人間だが、その気持は仏と同じだ」と賛嘆した。</p>
153	<p>無住道暁「沙石集」 （沙石集 巻第七（扉） 五 亡父夢に子に告げて借物返したる事 P.367）</p>	鎌倉時代（1283年成立）	フィクション（三人称）	かかる珍しく衰れる沙汰、未だ聞かず。至孝の志、世間の理も、深くわきまへ存するにこそ	③	<p>聞き及ぶ人→やりとりする二人 不問 不問→男</p>	⑤	なし	<p>度々問答往復して、事ゆかざりければ、鎌倉に上りて対決しけり。奉行人より始めて、上にも下にも、聞き及ぶ類、「かかる珍しく衰れる沙汰、未だ聞かず。至孝の志、世間の理も、深くわきまへ存するにこそ」と、誓めののしりけり。心有る人は、涙を流してぞ感じける。</p> <p>訳文：度々やりとりが行き来して、事が進まないのので、鎌倉に上って対決した。奉行人以下、身分の高い者も低い者も、聞き及んだ者はみな、「このような珍しく感動的なやりとりを、いまだかつて聞いたことがない。至孝の志、世間の道理も深くわきまえている二人なのだろう」とほめ称えた。心ある人は涙を流して感嘆したのであった。</p>
154	<p>無住道暁「沙石集」 （沙石集 巻第十本（扉） 三 宗春坊遁世の事 P.527）</p>	鎌倉時代（1283年成立）	フィクション（三人称）	なし	なし	<p>人→自分 不問 不問</p>	④	なし	<p>されば、恨みそねむ事なくして、善知識と思ふて、科を改むべし。無き事を云ふは、或いは人の云ひ付けて云ふか。ひがさまの推にてこそあらめ。我もさこそ推もすれ、無き事なれば、人の云ふによりてその咎あらじと思ひて、仇を結ばずは、自ら聞き直すべし。我を讃むとも慢すべからず。僅かに徳を美るによりて、慢を発すは、大きな失なり。美る下に諍りあるべしと知りて、驕る事なく、弥々身を慎むべし。かかる心なれば、ほむるとも諍るとも、心動かずして、道に入る志を堅くすべし。</p> <p>訳文：だから、怨んだり妬んだりすることなく、善知識と思って咎を改めるべきである。無い事を言うのは、あるいは他人が言いつけて言うのか。誤った推測であるに違いない。自分でもそのように考えるが、実際には無い事なので、他人が言っているだけで咎はないのであろうと考えて敵対しなければ、自然と真相が知られることになるだろう。人が自分を褒めたとしても慢心してはいけな。わずかな徳を褒められたことによって慢心を起こすのは、大きな咎である。褒める裏には諍りがあるはずと知って驕る事なく、いよいよ身を慎むべきである。このような心でいるならば、褒められたとしても諍られたとしても、心が動揺することなく、仏道に入る志を堅くすべきである。</p>
155	<p>ト部兼好（吉田兼好）「徒然草」 （徒然草 上 第一二五段 人におくれて P.178）</p>	鎌倉時代（1330～31年ごろ成立か）	随筆（一人称）	いつよりも、殊に今日は尊く覚え侍りつる	①	<p>説法を聞いていた人たち→導師 下上 不問→男</p>	⑥	なし	<p>導師帰りにて、聴聞の子ども、「いつよりも、殊に今日は尊く覚え侍りつる」と感じあへりし返事に、ある者の言はく、「何とも候へ、あれほど唐の狗に似候ひなんうへは」と言ひたりしに、あはれもさめてをかしかりけり。さる導師のほめやうやはあるべき。又、「人に酒勧むるとて、おのれまづたべて人に強ひ奉らんとするは、剣にて人を斬らんとするに似たる事なり。二方に、刃つきたるものなれば、もたぐる時、先づ我が頭を斬る故に、人をばえ斬らぬなり。おのれまづ酔ひて臥しなば、人はよも召さじ」と申しき。剣にて斬り試みたりけるにや。いとをかしかりき。</p> <p>訳文：導師を勧めたこの僧が帰ったあと、説法を聞いていた人たちが、「いつもより、特別今日は尊く思われました」と感じ合っていた、その返事に、ある者が言うことに、「何はともあれ、あれほど唐の犬に似ておいでのうえは」と言ったので、感動もさめて、おかしかった。そんな導師のほめようがあるだろうか。また、「人に酒を勧めるというので、自分がまずいただいて、それから人にむりじしいたそうとするのは、剣で人を斬ろうとするのに似ていることである。剣は両方に刃がついているものであるから、持ち上げるとき、まず自分の首を斬るので、相手の人を斬ることができないのである。自分がまず酔って寝てしまふならば、相手の人はよもや召しあがるまい」と申した。剣で斬ってためしてみたのであろうか。とてもおかしかった。</p>
156	<p>ト部兼好（吉田兼好）「徒然草」 （徒然草 下 第一四三段 人の終焉の有様の P.198）</p>	鎌倉時代（1330～31年ごろ成立か）	随筆（一人称）	なし	なし	<p>愚かなる人→故人の言葉と動作 不問 不問</p>	⑤	なし	<p>人の終焉の有様のいみじかりし事など、人の語るを聞くに、ただ、閑にして乱れずと言はば心にくかるべきを、愚かなる人は、あやしく異なる相を語りつけ、言ひし言葉も、ふるまひも、おのれが好むかたにほめなすこそ、その人の本来の本意にもあらずやと覚ゆれ。</p> <p>訳文：人の臨終の有様がrippでであったことなど、人が話すのを聞くと、ただ、「静かでとり乱さなかった」と言えば、奥ゆかしくあるはずなのに、愚かな人は、不思議で変った様相を語り添え、故人の言った言葉も動作も、自分の好きなようにほめそやすが、それこそ故人の日ごろの本心と違ってはいはないかと思われる。</p>
157	<p>ト部兼好（吉田兼好）「徒然草」 （徒然草 上 第一一二段 明日は遠き国へ赴くべしと聞かん人に P.169）</p>	鎌倉時代（1330～31年ごろ成立か）	随筆（一人称）	なし	なし	<p>不問→この心をも得ざらん人 不問 不問</p>	なし	なし	<p>日暮れ参蓮し。吾が生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ。礼義をも思はじ。この心をも得ざらん人は、物狂ひとも言へ、うつなし情なしとも思へ。毀るとも苦しまし。誓むとも聞き入れじ。</p> <p>訳文：日は暮れ、行く路は遠い。わが一生は、もはやつまずいて、思うように進むことができない。一切の俗縁を捨て去るべき時である。信義をも守るまい。礼儀をも思ふまい。この心さえ理解できないような人は、気が触れているとも言うがよい、正氣を失っている、人情がないとも思うがよい。非難されても苦しむまい。ほめられても聞き入れまい。</p>
158	<p>ト部兼好（吉田兼好）「徒然草」 （徒然草 上 第三八段 名利に使はれて P.111）</p>	鎌倉時代（1330～31年ごろ成立か）	随筆（一人称）	なし	なし	<p>人→不問 不問 不問</p>	⑥	なし	<p>いみじかりし賢人・聖人、自ら賤しき位にをり、時にあはずしてやみぬる。又多し。ひとへに高き官・位をのぞむも、次に愚かなり。智慧と心とこそ、世にすぐれたる誉も残さまほしきを、つらつら思へば、誉を愛するは人の聞よろこぶなり。ほむる人、ともに世にとどまらず、伝へ聞かん人、又々すみやかに去るべし。</p> <p>訳文：すぐれていた賢人や聖人が、自ら低い位にとどまってお、時運にめぐり合わないままで終ってしまった例も、またたくさんある。いちずに、高官・高位を望むのも、その次に愚かなことである。知恵と徳性においてこそ、世間一般よりもすぐれているという名声をも、残したいものであるが、よく考えてみると、名誉を愛するのは、世人の評判を喜ぶことである。ほめる人も悪く言う人も、どちらも、いつまでもこの世に生き残るものではないし、その噂を人づてに聞くような人も、同様にまた、速やかに世を去るであろう。</p>
159	<p>作者未詳「曾我物語」 （曾我物語 巻第七（扉） 巻第七 梗概 本朝報恩合戦謝徳關淨集并序 〔二〕母に呼び戻され、最後の対面をする P.247）</p>	鎌倉末期～南北朝時代	フィクション（三人称）	なし	②	<p>母・女房たち→五郎・十郎 下上 女→男</p>	②	なし	<p>五郎は、山寺にて育ちたれども、色黒く、くまみで見ゆる。十郎は、里育ちなれども、色白く、すはやかなり。我が子なればや、よき者かな。片端なる子も親は誉め合ふぞかし、女房たち」とうち笑ひ給ひければ、女房たちも皆、共にぞ誉め申しける。「その時こそ、最後の見果てにてはありけり」と後に思ひ合せられて哀れなり。</p> <p>訳文：五郎は、山寺で育ったけれども、色が黒く、老けて見える。十郎は、里で育ったけれども、色が白く、すらりとしている。我が子だからであろうか、よい男だ。欠点のある子供でも親は誉め合うものですよ、女房たち」とお笑いになったので、女房たちも皆、ともにお誉め申しあげた。「そのときが最後の見納めであった」と後には思い含されて哀れなことであった。</p>

160	作者未詳「曾我物語」 (曾我物語 巻第六(扉)〔三〕頼朝、宇都宮の女房を讃える P.209)	鎌倉末期～南北朝時代	フィクション(三人称)	あつばれ女房かな	①	侍ども→宇都宮の女房 下上 男→女	②	なし	この女房、本より美蓉の眸、丹花の唇、宿殖徳本の容、見る人、心も移りぬべく、衆人愛敬の装ひ、あたりも輝くばかりなり。装束を刷ひ、我に劣らぬ女房三十二人を引き具し、同じ色の装束にて御前に参りつつ、女房たちには酌取らせ、我が身は鎌倉殿の左の御座に直りつつ、酒を勧め奉る。御前伺候の侍どもも、「あつばれ女房かな」とぞ褒め合ひける。日も晩傾になりければ、女房は御暇申して御前を立つ。鎌倉殿、「男となりて国を持つべくは、これほどの女こそあらまほしけれ。頼朝が北条の御上をこそ男の詮の名誉の手本とは日本国の侍どもも申し合ひけるに、なほ立ちまさる者かな。心憎き宇都宮かな」と仰せられて、 訳文：この女房は、もともと蓮の花のように清らかで涼しげな目もと、赤い花のような唇、前世に善根を積んだことによる美貌を持ち、見る人は思いを寄せ、多くの人に愛される美しい装いは、あたりも輝くほどである。装束を整え、自分に見劣りしない女房三十二人を引き連れ、同じ色の装束で鎌倉殿の御前に参上し、女房たちには酌をさせ、我が身は鎌倉殿の左の席に座って、酒をお勧め申しあげる。お側に控えていた侍たちも、「立派な女房だ」と褒め合った。夕方になったので、女房はお暇を申しあげて御前を退く。鎌倉殿は、「男となって国を保とうとするならば、このような妻を持ちたいものよ。頼朝の北条の妻こそ男にとつての最高の名誉の手本と、日本国の侍たちは語り合っているが、政子にもまさる女房であることよ。ねたましいほどの宇都宮の幸せよ」とおっしゃって、
161	作者未詳「曾我物語」 (巻第一 梗概 本朝報恩合戦謝徳間諱集并序 〔一〇〕人々、相撲を取る 俣野景久勝ち誇る P.52)	鎌倉末期～南北朝時代	フィクション(三人称)	なし	なし	皆一同→山内 不問 不問→男	③⑤	なし	山内はこの詞どもに乗じつつ、「何事も今一つ仕りで誉められばや」と思ひて、その辺りを見回せば、二、三十人して働かさんと見える大石のありけるに目を懸けて、「御座席にこの石の候ふこそいぶせく覚えて候へ。取り除け候はん」とて、つつと寄るままに、右の肩を石に当て、力足を踏みつつ、えいや声を出だして押すままに、からりと起して谷底へどうど落しけり。上下一同に動揺して、誉めぬ人こそなかりけれ。 訳文：山内は、この言葉に調子に乗って、「何かもう一つやってみせて誉められよう」と思って、そのあたりを見回すと、二、三十人がかりで動かせるであろうとみえる大石があるのに目をつけて、「お座席にこの石がございますのは目障りに思われます。片付けましょう」と言って、ずいとい近寄るや、右の肩を石にあて、足に力を込めて、掛け声を出して押してからりと石を起して谷底へどっと落した。皆一同に歓声を揚げ、誉めないものはなかった。
162	作者未詳「曾我物語」 (巻第七 梗概 本朝報恩合戦謝徳間諱集并序 〔一〕序 P.246)	鎌倉末期～南北朝時代	フィクション(三人称)	善し	①	人→子供たち 不問 不問→男	③	なし	その外、冠者ばら三人。主従七人にてぞ出でにける。母も簾際まで立ち出で、子どもを見送りつつ、「あれ見給へ、女房たち。親の立ち添ひて教へねども、あれほどに物をも射ることよ。あはれ、故河津殿おはしまさば、いかに人も持たぬ物を持ちたるやうに思ひ給ふべし。善しと誓むる人もなく、悪しと教ふる者もなし。されば、明け暮れ物思ふ気色に見ゆるも理かな。 訳文：その外に召使いの若者三人。主従七人で出かけた。母も簾の近くまで出て来て、子供を見送りながら、「あれを御覧なさい、女房たち。父親が側にいて教えたわけではないが、あのように矢を射ることよ。ああ、河津殿が生きていらっしゃったならば、どれほどに人の持たないものを持ったように心強く思われたであろう。上手だとほめる人もなく、下手だと教える者もいない。だから、毎日物思いに耽っているように見えるのもっともなことだ。
163	作者未詳「室町物語草子集」 (長宝寺よみがへりの草紙 P.432)	南北朝時代前期～江戸時代初期	フィクション(三人称)	なし	なし	蛇→閻魔王 下上 動物→男	なし	なし	七筋の縄を付け、引き仰のけて、蛇を喉へ責め入れば、身の内へ入り、焔となり燃え焦がす。「これは、我が身をば褒め、人をは悪く言ひ、無き事を言ひ付けて、人を殺した者なり」。また、「出家にてありしが、髪を包み、在家の姿になりたる者」とて、鉄の鉢にて頭を、肉叢ともに、挟み捨つるなり。 訳文：七本の縄を付け、引っ張り仰向けにして、蛇を喉へ責め入れると、体の中に入って、蛇が炎となり体を燃え焦がす。「これは、我が身を褒め、人を悪く言い、ありもしない事を言ひ付けて、人を殺した者だ」と、閻魔王がおっしゃいます。また、「出家でありながら髪を包んで在家の姿になった者」と言って、鉄の鉢で頭を肉とともに挟み捨てるのだ。
164	作者未詳「室町物語草子集」 (酒伝童子絵(扉) 酒伝童子絵 P.321)	南北朝時代前期～江戸時代初期	フィクション(三人称)	今に始めぬことなれども、この度、国土の大事、万民の歎きをやめ、君の御憤をもやすめ奉るのみならず、その身の高名、誓へを取るに並びなし	③	人→頼光、保昌 不問 不問→男	③	なし	都には、頼光、保昌、鬼の頭持たせて上り給ふと聞えしかば、郎等どもは申すに及ばず、聞き及ぶ程の人々は、みな迎ひに参らぬはなし。大名たちは申すに及ばず、都入りは、一方騎とぞ聞えし。天子を始め参らせて、万民に至るまで、今に始めぬことなれども、この度、国土の大事、万民の歎きをやめ、君の御憤をもやすめ奉るのみならず、その身の高名、誓へを取るに並びなしと、誉めぬ人こそなかりけれ。 訳文：都では、頼光と保昌とが、鬼の首をもたせて上京されるとうわさされたので、家来どもはいうまでもなく、聞き知るかぎりの人々は、だれもみな迎えに参らない者はいない。大名たちはいうまでもなく、一行が都にはいるにあたって、一方騎の者が集まったということであった。天皇をはじめ奉り、多くの人民にいたるまで、今に始まったことではないが、このたびは、この一国の危機をすくい、多くの人々の悲しみを絶やして、帝のお怒りもおしずめ申しあげるだけではなく、自身の武功も、何かにたとえようとしても並ぶものがないというので、ほめぬ人はいなかった。
165	作者未詳「室町物語草子集」 (酒伝童子絵(扉) 酒伝童子絵 P.324)	南北朝時代前期～江戸時代初期	フィクション(三人称)	希代の相人ありがたし	③	上一人より下万民→頼光 不問 不問→男	③	なし	頼光、かねて宣旨を繋り給ひしに、氏神八幡宮に参り、このことを祈り申さる。余の人々も、「神明の加護ならでは、深く頼むことなしと、祈り申ししにより、高名の誓、末代に残れり。ありがたし」とぞ申しける。また、晴明がト笠正しきこと、昔より今に至るまで、希代の相人ありがたしと、上一人より下万民、誉め歎ばぬはなかりけり。ある人申しけるは、「一条院は、弥勒の化現にてましまし、頼光はまた、毘沙門の化身なり。帝は、仏法を広め、衆生を済度せんがため、頼光は、仏法怨敵を防ぎ、国家を守護せんために化現して、武家の棟梁たり。しかしながら、大悲の誓として、群生抜済のため、ありがたきことどもなり。酒伝童子は、第六天の魔王なり。明君の威法をおとしめ、仏法のために警敵となりて、鬼神の寿命を感じり。これらの次第、みな聖教に説くところなり。 訳文：頼光は、さきに天皇の仰せごとをお受けなさった時に、氏神の八幡宮に参って、このことをお祈り申しあげた。ほかの人々も、「神のお助けのほかには、深く頼りにするものはないと、お祈り申しあげたので、武功の名誉が、末の世まで伝えられる。めったにないことだ」と申していた。また、晴明の古いの正しいことも、昔から今に至るまで、世にもまれな人相見はめったにいないと、上は天皇から下は庶民まで、よくこんで誉めぬものはいなかった。ある人が、「一条天皇は、弥勒菩薩の姿を変えてあらわれたものでいっしや。頼光は、毘沙門天の姿を変えてあらわれたものである。天皇は、仏の教えをひろめ、多くの生物を救って悟りに導くために、頼光は、仏の教えをさまたげる敵を防いで、国家を守るために姿を変えてあらわれて、武家のかしらとなっている。ことごとく、仏のあわれみによる誓いとして、すべての生物の苦を去って難を救うためであって、めったにないことである。酒伝童子は、第六天の魔王である。賢明な君主のおごそかなおきてを見くだし、仏の教えにとつては敵となつて、恐ろしい鬼神の寿命の数を得ている。これらの事情は、すべて仏の教えに説くところである」と申した。
166	観阿弥、世阿弥、金春禅竹ほか「謡曲集」 (修羅物(扉) 八島 P.139)	南北朝時代～室町時代末期	韻文(三人称)	射たりや与一	①	平家→与一 上下 不問→男	③	なし	(以下、肩の海に入るさまや、源平の人々の様子を身ぶりで示す)過たず肩の要元一寸ばかり上を、ひつつつと射ちぎり、鎧は海に入れば、肩は空に上がり、春風に、一もみこもみもまれ海へ、さつと入る。皆紅の肩の日出したるが、白波の上に、浮いつ沈んづ、浮いつ沈んづ見えるは、さながら紅葉の散り浮きたるに異ならず。平家には船端を叩いて、射たりや与一とほめければ、源氏には艤を叩いて、仕つたりや、宗高と感ずる。 訳文：なし
167	観阿弥、世阿弥、金春禅竹ほか「謡曲集」「切能」 (切能(扉) 善界 P.528)	南北朝時代～室町時代末期	韻文(三人称)	われらごときの者の住むべき所には、これに上越すあるまじい	①	善界坊→愛宕山 不問 男→居場所	②	なし	太郎坊へ案内を申されければ、太郎坊出で合ひ申され候ふところに、まことに山の樸体森の木立、われらごときの者の住むべき所には、これに上越すあるまじいとして、いたく誉め申されて後、われ日本へ渡る事余の儀にあらず、われ大唐において、青王山青竜寺、般若台に至るまで、皆わが道へ引き入れ申すに、太郎坊は日本にありながら、何とてわがままには計らひ申されぬぞ。 訳文：なし
168	観阿弥、世阿弥、金春禅竹ほか「謡曲集」 (四番目物(二)(扉) 蟻通 P.133)	南北朝時代～室町時代末期	韻文(三人称)	なし	なし	人々→和歌を詠む 上下 不問→こと	⑤	なし	地謡＝(上歌)されば和歌のことわざは、神代よりも始まり、今人倫にあまねし、誰かこれを褒めざらん。なかにも貴之は、御書所を承りて、古今までの、歌の品を撰びて、喜びを延べし君が代の、直なる道を＊あらはせり。 訳文：地謡㊦さて 和歌を詠むということは、すでに神代から始まり、今 人々の間にゆきわたっていて、これをほめたたえない者はない。なかでも貴之は、御書所預をお勤め申して、昔から今までの、秀歌を選んで、みずからの喜びを申し述べ 延喜の君の代の、正しい政道と 和歌の正しい道とを示したのである。

169	二条良基「筑波問答(連歌論集)」 (筑波問答(扉) 概要 〔二〕昔語りの翁 P.14)	南北朝時代～室町時代	連歌(三人称)	水なるかなや	①	聖人→水 上下 男→もの	②	なし	まづ、水上に立ち寄りて、「あはれ、いさぎよき水の流れかな。水には、立ち水伏し水といふことのあるなり。これぞまことの立ち水にて待るらん。昔、仲尼といひし聖人の、『水なるかなや』と褒められたるも、げにことわりなるべし。 訳文: まず流れの上のほうに立ち寄って、「ああ、すがすがしい水の流れですね。水には、立ち水、伏し水というものがあります。これこそまことの立ち水でございましょう。昔、仲尼という名の聖人が、『美しきかな水』とほめられましたのも、なるほど道理と思います。
170	二条良基「筑波問答(連歌論集)」 (〔三〕我が国と連歌 P.19)	南北朝時代～室町時代	連歌(三人称)	なし	なし	尊→火をともし稚き童 上下 男→男	⑤	なし	また、連歌とて云ひ置きたるは、さきに申し侍りつるやうに、日本紀に、景行天皇の御代、日本武尊の東の夷しづめに向かひ給ひて、この翁がこの比住み侍る筑波を過ぎて、甲斐国・酒折宮にとどまり給ひし時、日本武尊御句に、珥比磨利菟玖波嶋須擬底異玖用加禰菟流すべて付け申す人のなかりしに、火をともし稚き童の付けて云はく、伽…と申し侍りければ、尊褒め給ひけるとなん。その後、万葉集に入りたる家持卿の、佐保川の水せき入れて植ゑし田をと云ふに、尼が、刈る早稲はひとりなるべしと付け侍る。 訳文: また、連歌として言い伝えられていますのは、さきに申しましたように、『日本書紀』に、景行天皇の御代、日本武尊が東国の異民族を鎮圧に向われまして、この翁が今、住んでおります筑波を過ぎて、甲斐国酒折宮に滞在なさった時、日本武尊の詠まれた句に、珥比磨利菟玖波嶋……(新治・筑波を過ぎていく夜寝たことであろうか)とありましたのに、この句に付けます人がまったくいなかったのですが、灯火をともしのが仕事の少年が付けて言うには、伽…奈倍底……(日数を重ねて、夜で九夜、日では十日を過しました)と申しましたので、尊がお褒めになったということです。その後、『万葉集』に入りましたが、大伴家持卿が、佐保川の……(佐保川をせき止めて水を入れて、稲を植えた田なの)にと言ったのに対して、尼が、刈る早稲は……(刈り取って早稲の飯として食べるのは一人なのです)と付けたものがあります。
171	二条良基「筑波問答(連歌論集)」 (〔三〕我が国と連歌 P.23)	南北朝時代～室町時代	連歌(三人称)	なし	なし	五条の三位入道殿→詠歌 上下 男→もの	①	なし	五条の三位入道の、歌のことを申されたるにも、ただ詠歌とてうちながむれば、などやらん面影添ひたるをこそ褒められけれ。「月やあらぬ春や昔」などいへる歌は、理を聞かざるより、うながむればまづ身にしむ心地ぞする。 訳文: 五条の三位入道殿が、歌のことを申されました場合にも、ただ詠歌として口ずさむと、なんとなく情景が浮んでくるような歌をお褒めになったものです。「月やあらぬ春や昔」などという歌は、理屈を聞かないでも、詠じてみますと、まず歌の心が身にしむ心地がします。
172	二条良基「筑波問答(連歌論集)」 (〔四〕連歌の起源と伝来 P.24)	南北朝時代～室町時代	連歌(三人称)	なし	なし	和歌→景気・風情 不問 不問→景色	なし	なし	春の花のあたりに霞のたなびき、垣根の梅に鶯の鳴きなどしたる景気・風情の添ひたるをぞ、歌にも褒められたれば、連歌の道もまたかくこそ侍らめ。 訳文: 春の花のあたりに霞がたなびき、垣根の梅に鶯が鳴きなどした景色・風情が添ったのを、和歌では褒められていますので、連歌の道もまたこのようにあるべきでしょう。
173	作者未詳「狂言集」 (小名狂言(扉) 素袍落 P.191)	南北朝時代～江戸時代	韻文(三人称)	まづ第一、お慈悲が深い、お人使ひはよし、いつ何時参っても、ご、御酒は下さる、あのやうな結構なお方は、おっつけ御立身をなされ、御加増を取らせられう	②	世上→伯父 不問 不問	④	A	伯父「とは心もとない。何と言ふぞ。太郎「イヤ、そ、そっともお氣遣ひなことではござらぬ。世上ではこなた様を、ほ、褒めます。伯父「何と云うて褒むるぞ。太郎「『まづ第一、お慈悲が深い、お人使ひはよし、いつ何時参っても、ご、御酒は下さる、あのやうな結構なお方は、おっつけ御立身をなされ、御加増を取らせられう』、な、などと申して褒めます。伯父「それはそしらるるやうになつて、喜ばしいことぢや。 訳文: なし
174	作者未詳「狂言集」 (小名狂言(扉) 素袍落 P.192)	南北朝時代～江戸時代	韻文(三人称)	なし	なし	太郎→真実 上下 男→こと	なし	なし	伯父「それは、そちに酒を振舞ふ追従でかなあらう。太郎「何、追従。伯父「なかなか。太郎「イヤ申し、この太郎冠者は賤しい御奉公は致せ、つひに御酒などがたべたいと申して追従申す太郎冠者めではござらぬ。し、真実、ほ、褒めます。伯父「真実とあらば喜ばしいことぢや。 訳文: なし
175	作者未詳「狂言集」 (小名狂言(扉) 素袍落 P.203)	南北朝時代～江戸時代	韻文(三人称)	面白い	①	皆→主 下上 男→男	⑤	B	主「何ごとぢや。太郎「あれあれ、道通りの衆が皆、氣遣ひぢやと言うて笑ひますぞ。主「いづれも、面白いと言つて褒めさせらる。太郎「何の面白からう。(また捜す)ハテ合点の行かぬ。たった今までこれにあったが、どれへ行たことぢや知らぬ。 訳文: なし
176	作者未詳「狂言集」 (聲女狂言(扉) 右近左近 P.316)	南北朝時代～江戸時代	韻文(三人称)	なし	なし	地下の衆や他郷の衆→女共 対等 不問→女	なし	なし	(烏帽子をかぶり脇差を差し、棒を手にして脇座前で葛桶に座り、右近を待ち受ける)右近(立ち、一の松まで出て)「さてもさても、こちの女共を地下の衆や他郷の衆が褒めさせらるるも尤もでござる。某が口無調法ぢやによつて、地頭殿へ公事に上ぐることを宿もとで稽古せよ、女共が地頭殿になり替はつて聞いて直いてやらう、と申す。 訳文: なし
177	作者未詳「狂言集」 (小名狂言(扉) 素袍落 P.193)	南北朝時代～江戸時代	韻文(三人称)	なし	なし	太郎→頼うだ者の取沙汰 上下 男→男	⑤	B	伯父「静かに飲め。太郎(飲み)「さて、こちの頼うだ者の取沙汰を聞かせられましたか。伯父「さだめて褒むるであらう。太郎「イヤ、叱ります。伯父「何と云うて叱るぞ。太郎「『まづ第一、吝い、人使ひは悪いし、よそへは呼ばれて行けど、つひに内へというては呼うだことがござらぬ、あのやうな吝い人は、どこぞでは仕落ちがあらう』などと言つて叱ります。 訳文: なし
178	作者未詳「狂言集」 (出家座頭狂言(扉) 宗論 囃子入り P.388)	南北朝時代～江戸時代	韻文(三人称)	なし	なし	不問→我が宗体 不問 不問→宗派	①	なし	(笠を脱ぎ)これは都六条、本国寺の出家でござる。我が宗体の水上なれば、この度甲斐の身延山へ参詣致し、只今がその下向道でござる。まづそりそりと参らう。(舞台一巡しながら)イヤまことに、我が宗体を褒むるではござらぬが、世に甲斐の身延山ほど有難い御寺はござらぬ。 訳文: なし

179	作者未詳「太平記」 (太平記 巻第十八(扉) 比叡山開闢の事 P.484)	南北朝時代(1368～75年ごろ成立)	フィクション(三人称)	十方大菩薩、愍衆故行道、応生恭敬心、是則我大師	③	三尊一大師 下上 不問一男	⑥	C	この三尊、あるいは僧形に現じ、あるいは俗体に変じて、大師を礼し奉りて、「十方大菩薩、愍衆故行道、応生恭敬心、是則我大師」と讃め玉ふ。大師大きに礼敬し玉ひて、「願はくはその御名を聞かん」と問ひ玉ふに、三尊答へて曰く、「豎の三点に横の一点を加へ、横の三点に豎の一点を添ふ。我内には円宗の教法を守り、外には済度の方便を助けんために、この山に来たれり」と答へ玉ふ。 訳文：この三尊は僧の形で現れたり、俗人の姿に身を変えたりして大師を礼拝なさせて、『求法者たちは世の人々を憐れんで十方に世間を遊行する。これらすべての人は私の先生であると、賢者は敬う心をもって師事すべきである』と、たたえられたのです。大師は三尊を大いに敬われ、『お名前を聞かせてください』と尋ねると、三尊は、『縦の三点に横の一点を加え、横の三点に縦の一点を足す。私は心には天台の教法を守り、外に対しては人々を救う手助けになろうと、この山に来たのです』とお答えになりました。
180	作者未詳「太平記」 (太平記 巻第二十五(扉) 山名時氏住吉合戦の事 P.232)	南北朝時代(1368～75年ごろ成立)	フィクション(三人称)	ありがたかりし行跡かな。危ふきを見てだにも命を至すは少なきに、適遇れたる命を、後の名を惜しんで命を棄てければ、類少なき勇志かな	②	人々一小林大炊亮 不問 不問一男	⑤	なし	「さては三川殿討たれ玉ひにけり。落ちては誰がために命を惜しむべき」とて、ただ一人天神松原より引き返し、敵の方へ箭二筋三筋射懸けつつ、追腹切って失せにけり。」「ありがたかりし行跡かな。危ふきを見てだにも命を至すは少なきに、適遇れたる命を、後の名を惜しんで命を棄てければ、類少なき勇志かな」と讃めぬ物こそなかりける。その外の兵どもは、親討たるけれども子は知らず、主討死すれども郎従は助けず、物具を棄て弓を杖に突き、夜中に京へ逃げ上る。見苦しかりし有様なり。 訳文：「すると、三河守殿は討たれなされたのだな。逃げ延びたとて、誰のために命を惜しむ必要があるか」と、たった一人で天神松原から引き返し、敵の方へ矢を二本三本と射けながらも、主人の後を追って腹を切って果てたのであった。「めったにない見事なふるまいだな。危険にさらされるのを見ていても、命を投げ出す者は少ないのに、運よく死を免れた命を、後世の名譽を重ねて命を捨てたのだから、類少ない勇士であるなあ」と、彼の死を褒めない者はいなかった。そのほかの武士たちは、親が討たれても子はかまわずに逃げ、主人が討死しても家来はこれを救うことをせず、鎧兜を捨て、弓を杖にを使って、夜中に京へ逃げ帰った。見るに堪えない有様であった。
181	作者未詳「太平記」 (太平記 巻第二十六(扉) 師直師泰奢修の事 P.297)	南北朝時代(1368～75年ごろ成立)	フィクション(三人称)	人間第一の水	①	東坡先生一泉 不問 男一もの	なし	なし	されば芳甘を酌みてたつる時、建溪の風味濃やかなりければ、かの東坡先生が人間第一の水と讃めたりしも、この中よりや出でたりけんと思はぬ物もなかりけり。 訳文：。だから、芳しい茶を汲んで飲む時、中国建溪産の茶のように味わいがすばらしかったので、あの蘇東坡先生が世界第一の水とほめたのも、この鍾子の中から出たものであろうかと思われた。
182	作者未詳「太平記」 (太平記 巻第三十九(扉) 鎌倉基氏と宇都宮と合戦の事 P.384)	南北朝時代(1368～75年ごろ成立)	フィクション(三人称)	主従ともに節を守り義を重んずる忠貞は、ありがたかりし翔かな	①	不問一岩松・金井 不問 不問一男	④	なし	去れば岩松礼部は左馬頭の命にかはらんと胃を着かへ、金井は岩松の命に代わって組んで落つ。主従ともに節を守り義を重んずる忠貞は、ありがたかりし翔かなと誉めぬ者こそなかりける。 訳文：だから、岩松礼部は左馬頭の命に替ろうとして鎧を着替え、金井は岩松の命に替って組み合い馬から落ちたのである。主従ともに節義を守り重んじた貞節な忠義のあり方は、稀有なふるまいであると賞讃しない人はいなかった。
183	作者未詳「太平記」 (太平記 巻第二(扉) 東坂本合戦の事 P.111)	南北朝時代(1368～75年ごろ成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	人一少年 不問 不問一男	③⑤	なし	見物の中に交りて候ひけるが、父が討たるを見て堪へかね、同じく打つて出で、とにもなき名を苔の下にぞ遺しける。哀れに艶しかりし振る舞ひなれば、誉めぬ者こそなかりけれ。海東が若党ども、「二人の主を目前に打たせ、あまつさへ敵に首を取られ、生きて帰る者やあるべき」とて、三十余騎の者どもは、主の死骸を枕として、打死せんとぞ争ひける。 訳文：この子は、父が留め置いたので合戦の供はしなかったのだが、やはり気がかりだったのか、見物衆の中に交っていたのだが、父が討たれたのを見て、我慢できなくなって、父と同様に合戦に打って出で、二人とも戦死者としての名を後世に残したのである。哀れにけなげなふるまいであったので、賞賛しない人はいなかった。海東の若党たちは、「二人の主人を目の前で討たれ、しかもその首級を敵に取られて、生きて帰る者がおらうか」と言って、三十余騎の者たちは主人の死骸を枕に討死しようと、先を争った。
184	作者未詳「太平記」 (太平記 巻第六(扉) 宇都宮天王寺発向の事 P.299)	南北朝時代(1368～75年ごろ成立)	フィクション(三人称)	宇都宮	①	両六波羅を始めとして、諸軍勢に至るまで一宇都宮の行動 不問 不問一男	⑤	なし	「これひとへに我が武力の致す所にあらず。ただ、しかしながら神明・仏陀の擁護に懸かれり」と、信心を傾けて、歓喜の思ひをなせり。やがて六波羅へ早馬を立てて、「天王寺の敵をば、即時に追ひ落し候ひぬ」と申したりければ、両六波羅を始めとして、諸軍勢に至るまで、宇都宮が今度の振る舞ひ抜群なりと、誉めぬ人こそなかりけれ。宇都宮、天王寺の敵を輒く追ひ落したる心治して、一面目はある体けれども、やがて次で敵陣へ責め入らん事も、無勢なれば叶はず。 訳文：「この勝利は決して我が武力のなせるわざではない、ひとえに神仏のご加護のためのものである」と、一心に祈りを捧げ、深い喜びにひたるのであった。宇都宮は、すぐに六波羅へ早馬の使者を送り、「天王寺の敵を即刻追い散らしました」と報告したので、両六波羅殿を始めとして、諸軍勢に至るまで、宇都宮の今回の行動は抜群であると、誉めない人はいなかった。宇都宮は、天王寺の敵を簡単に追い散らした氣分で、いったんの面目は保った様子ではあるけれども、すぐに続いて敵陣へ攻め込もうとすることも、無勢なのでできず、そうかといって本当の合戦を一度もせずに都へ引き返すこともやはりできかねるので、進退きわまって困っていた。
185	作者未詳「太平記」 (太平記 巻第十(扉) 関東氏族井びに家僕等打死の事 P.507)	南北朝時代(1368～75年ごろ成立)	フィクション(三人称)	誠に一騎当千の兵なり、この間執事の重恩を与へて、傍若無人に振る舞ひせられたるも理かな	②	数万の軍勢一嶋津四郎 不問 男一男	③⑤	なし	嶋津、門前よりこの馬にひたと打ち乗つて、動々路懸けに歩ませて、由井の浜の浦風に濃い紅の大笠注を吹きそらせて、三物・四物取り付けて、当りを払つて馳せ向ひければ、数万の軍勢これを見て、「誠に一騎当千の兵なり、この間執事の重恩を与へて、傍若無人に振る舞ひせられたるも理かな」と、私語きて、讃めぬ物こそなかりけれ。義貞の兵これを見て、「あはれ敵や」と旬りければ、栗生・篠塚・矢部・堀口・由良・長浜を始めとして、大力の覚え取つたる悪物ども、我先にかの武者と組んで勝負を決せんと、馬を進めて相近づく。 訳文：嶋津は、相模入道の館の門前からこの名馬にひらりと飛び乗り、馬蹄の音を荒々しく響かせ、由比が浜の浦風に真紅の大笠符をなびかせて、三つ物・四つ物の武具に身を固め、威風あたりを払う勢いで馳せ向ったので、数万の軍勢がこの様子を見て、「本当に一騎当千の兵だ。これまで執事殿がたいそう可愛がつて、わがまま勝手にふるまわせていたのも、もつともだなあ」とささやいて、褒めない者はいなかった。義貞方の兵たちもこれを見て、「あっぱれな敵よ」と騒ぎたてたので、栗生・篠塚・矢部・堀口・由良・長浜を始めとして、大力の評判をとっている荒武者たちが、我先にあの武者と組んで勝負をつけよう、馬を進めて近づいた。
186	作者未詳「太平記」 (太平記 巻第十七(扉) 金崎の城攻める事 P.416)	南北朝時代(1368～75年ごろ成立)	フィクション(三人称)	あはれ剛の者かな	①	人一貞国 不問 不問一男	③⑤	なし	城の兵どもこれを見て、「手負うて引きかねたる物は、如何様宗徒の人なればこそ、これを打たせじと、遥かに引きたる敵どもは、また返し合はすらん。下り合うて、首を取らん」とて、十二、三人が程、中村が後へ走り懸かりけるを、貞国少しも騒がず、長刀の石付取り延べ、向ふ敵一人もろ膝難ぎて切り居ゑ、その頭を取つて鋒に貫き、中村を肩に引きかけて、関かに舟に乗りければ、敵も御方もこれを見て、「あはれ剛の者かな」と、誉めぬ人こそなかりけれ。その後よりは、寄手大勢なりとも、敵手痛く防ぎければ、皆攻め屈して、ただかへり、逆木を引き、向櫓をかいて、いたづらに矢軍ばかりにて、延々と日数をぞ送りける。 訳文：このときに、播磨国の住人で野中八郎貞国という武士がこれを見て、「知らないでいるときは仕方がない。けれども味方の兵が船に乗り遅れて、敵に打たれようとしているのを目のあたりに見ながら、助けないという法があるのか。この船を潰さず。中村を助けよう」と言ったけれども、誰もまったく聞き入れなかった。貞国はたいそう怒って、人がさしていた櫓を無理やり奪って逆櫓に立てて、自分で船を押し戻し、遠浅の地点から海におり立って、たった一人で中村の前へ歩み寄った。城の中の兵たちはこれを見て、「傷を負って戻ることができなかつた者はきつと重要な人だからこそ、これを討たせまいと、ずっと彼方まで戻った敵たちがまた引き返して来たのだらう。浜へおりて行って首を取らうと、十二、三人ほど、中村の背後へ走りかかつてきたのを、貞国は少しも騒がず、長刀の石突きを伸ばして、向つてきた敵の一人を両膝横ざまに切つて、その首を取つて切っ先に貫き、中村に肩を貸して静かに船に乗り込んだので、敵も味方もこれを見て、「ああ、勇者よ」と、褒めぬ人はいなかった。その後は、寄せ手は大軍勢だといっても、敵軍が厳しく防戦したので、皆攻めあぐねてはただ帰り、逆茂木をめくらし、向櫓を築いて、むなしく矢戦ばかりで、いつまでも日数を送るのであった。

187	<p>作者未詳「太平記」 （太平記 巻第二十二（扉） 篠塚伊賀守振舞の事 P.119）</p>	南北朝時代（1368～75年ごろ成立）	フィクション（三人称）	懸かる事をば聞かず	③	<p>人→篠塚 不問 不問→男</p>	⑤	なし	<p>これより舟に乗って、隠岐嶋へ落ちばやと志し、「舟やある」と見るに、敵の乗り棄てて、水主ばかり残れる舟あまたあり。「これこそ我が物よ」と悦んで、背着ながら浪の上五町ばかりを游いで、ある舟にがばと飛び乗る。水主・楳取驚いて、「これはそもそも何物ぞ」と咎めければ、「さな讀ひそ。これは宮方の落人篠塚と云ふ物ぞ。急ぎこの舟出だして、我を隠岐嶋へ送れ」と云ひて、二十余人してくり立てける鍾を安々と引き挙げ、十四、五尋ありける櫓を軽々と推し立てて、屋形の内に高枕して、いびきかきてぞ臥したりける。水主・楳取ともこれを見て、「あな＝し、凡夫の態にはあらじと恐怖して、すなはち順風に帆を懸けて、隠岐嶋へ送つて後暇請うてぞ帰りにける。昔も今も勇士多しと云へども、懸かる事をば聞かずとて、篠塚を警めぬ物こそなかりけれ。</p> <p>訳文：ここから船に乗って隠岐島へ逃げようと考え、「船はあるだろうか」と見てみると、敵兵が乗り捨てて、船頭だけが残っていた船が多数あった。「この船こそ自分のものだ」と喜んで、篠塚は鍾を着たまま波の上を五町ほど泳いで、とある船にばっと飛び乗った。船頭・楳取りは驚いて、「あなたはいったい誰ですか」と問いただしたので、「そんなふうにとがめるな。わしは宮方の落人で篠塚という者だ。急いでこの船を出して、わしを隠岐島へ届けてくれ」と言って、二十数人がかりでたぐり上げた櫓をやすやすと引き上げ、長さ十四、五尋もある帆柱を軽々に船に押し立てて、屋形の中でぐっすりといびきをかいて寝てしまった。船頭や楳取りたちはこの様子を見て、「ああ、大変なことだ。凡人の仕業ではない」と恐ろしくなって、直ちに順風を帆に受けて、隠岐島へ送ったあとで、暇乞いをして帰国したのであった。昔も今も、勇士は多いとはいへ、このような所業は聞いたことがないと、篠塚を褒めたたえない者はいなかった。</p>
188	<p>作者未詳「太平記」 （太平記 巻第三十四（扉） 結城が陣夜討の事 P.180）</p>	南北朝時代（1368～75年ごろ成立）	フィクション（三人称）	天下一の剛の物	①	<p>人→四人の兵たち 不問 不問→男</p>	⑤	なし	<p>和田が兵、赤坂の城へ帰つて後、四方より続松を出だし、件の立ちすぐり・居すぐりをしけるに、紛れて入れる四人の兵ども、かつてかやうのことに馴れぬ物どもなれば、勤れもなく入り出されて、大勢の中に引き籠められ、四人ともひ打死して、名を留めけるこそあはれなれ。天下一の剛の物とは、これをぞ誠に云ふべきと、警めぬ人こそなかりけれ。</p> <p>訳文：和田の兵は、赤坂城へ帰った後で、四方から松明を掲げ、例の立ちすぐり・居すぐりをしたところ、紛れて入った四人の兵たちは、今までこのようなことに慣れていない者たちだったから、紛れようもなく和田方に見つけ出されて、大勢の中に取り囲まれ、四人とも討死して、世に名をとどめたのは哀れであった。天下一の剛の者とは、まことに彼らのことをいうのだと、褒めない人はいなかった。</p>
189	<p>作者未詳「太平記」 （太平記 巻第三十九（扉） 鎌倉基氏と宇都宮と合戦の事 P.381）</p>	南北朝時代（1368～75年ごろ成立）	フィクション（三人称）	あな＝しの只今の御翔候ふや。昔の和泉・朝夷もこれにはよも勝利候はじ	②	<p>大高左馬助重政→左馬頭 下上 男→男</p>	③	A	<p>かかるところに、左馬頭の敗軍の中より、大高左馬助重政、遙かにこれを見て馬を馳せ寄せ、弓手にゆらりと下り立つて、「あな修しの只今の御翔候ふや。昔の和泉・朝夷もこれにはよも勝利候はじ」と、観面に誓め奉つて、「早この馬に召され候へ」と申しければ、左馬頭放ち打蹄に飛び乗つて、鞍壺に直り様に、「平家重衡の侍に後藤兵衛が主の馬に乗つて逃げたりけんには替りたる御翔かな。今こ。今こそ誠に大高の名は相応じて候へ」と、互いに誓めぞ返されける。</p> <p>訳文：そうこうしているうちに、左馬頭の敗軍の兵の中から、大高左馬助重政が、はるか遠くから左馬頭の様子を見て、馬を駆って近づき、左側にゆらりと下りたつて、「ああ何というご立派な、ただ今のおふるまいでございましょう。昔の和泉小太郎・朝比奈三郎も、これ以上ではかつてありますまい」と、面と向つて褒め申しあげ、「早くこの馬にお乗りください」と申した。そこで左馬頭は、ばつとまたがるように飛び乗つて、鞍壺に座り直りながら、「平家の重衡の家来であった後藤兵衛が、主君の馬に乗つて逃げてしまったのとは、打つて変つたおふるまいだな。今のふるまいこそ、まさに大高という名にふさわしいものだ」と、互いに褒め返しなされたのである。</p>
190	<p>作者未詳「太平記」 （太平記 巻第三十九（扉） 鎌倉基氏と宇都宮と合戦の事 P.381）</p>	南北朝時代（1368～75年ごろ成立）	フィクション（三人称）	平家重衡の侍に後藤兵衛が主の馬に乗つて逃げたりけんには替りたる御翔かな。今こ。今こそ誠に大高の名は相応じて候へ	②	<p>左馬頭→大高左馬助重政 下上 男→男</p>	③	なし	<p>かかるところに、左馬頭の敗軍の中より、大高左馬助重政、遙かにこれを見て馬を馳せ寄せ、弓手にゆらりと下り立つて、「あな＝しの只今の御翔候ふや。昔の和泉・朝夷もこれにはよも勝利候はじ」と、観面に誓め奉つて、「早この馬に召され候へ」と申しければ、左馬頭放ち打蹄に飛び乗つて、鞍壺に直り様に、「平家重衡の侍に後藤兵衛が主の馬に乗つて逃げたりけんには替りたる御翔かな。今こ。今こそ誠に大高の名は相応じて候へ」と、互いに誓めぞ返されける。</p> <p>訳文：そうこうしているうちに、左馬頭の敗軍の兵の中から、大高左馬助重政が、はるか遠くから左馬頭の様子を見て、馬を駆って近づき、左側にゆらりと下りたつて、「ああ何というご立派な、ただ今のおふるまいでございましょう。昔の和泉小太郎・朝比奈三郎も、これ以上ではかつてありますまい」と、面と向つて褒め申しあげ、「早くこの馬にお乗りください」と申した。そこで左馬頭は、ばつとまたがるように飛び乗つて、鞍壺に座り直りながら、「平家の重衡の家来であった後藤兵衛が、主君の馬に乗つて逃げてしまったのとは、打つて変つたおふるまいだな。今のふるまいこそ、まさに大高という名にふさわしいものだ」と、互いに褒め返しなされたのである。</p>
191	<p>作者未詳「義経記」 （巻第七目録 梗概 如意の渡にて義経を弁慶打ち奉る事 P.421）</p>	室町時代前期～中期	フィクション（三人称）	さてもかしこく見覚えられたり。あら恐ろしの人や	②	<p>弁慶→中乗りしたる男 下上 男→男</p>	③	なし	<p>殊に十六人まで御入り候へば、尋ね申さでは渡し申すまじく候」由荒らかに申しければ、武蔵坊渡し守を睨みつつ、「さりとて、この北陸道にて、羽黒の旗岐阿闍梨見知らぬ者やあるべき」と言ひければ、中乗りしたる男、弁慶をつくつくとまぼり、「突に突に見参せたる様に候。一昨年も三十講の御幣とて、申し下し給ひし御坊にてましますや」と申しければ、弁慶力を得て、「さてもかしこく見覚えられたり。あら恐ろしの人や」と褒めける。渡し守の権頭、「小賢しき事申すかな。さ様に見知りたらば、御辺渡し候へ」と申せば、弁慶、「そもそも判官殿よと知りたらば、確かに指して宣へ」と言ひければ、「正しくあの客僧こそ判官殿にておはしけれ」と指してぞ申しける。</p> <p>訳文：とくに十六人もおいでということになれば、お尋ねしないではお渡しすることはできません」という旨を、荒々しく言った。そこで武蔵坊は渡し守を睨みつけながら、「それにしても、この北陸道で、羽黒の旗岐阿闍梨を見知っていない者があろうか」と言うと、船の真ん中に乗っていた男が弁慶の顔をじっと熟視し、「本当に、お見かけしたような気がする。一昨年も三十講の御幣というて、お授けくださった御坊でいらっしゃいますか」と言ったので、弁慶も元氣づき、「それはよくも覚えていてくださったものよ。あえらい人よ」と褒めあげた。渡し守の権頭が、「小生意気なことを言う奴よ。そんなに顔見知りなら、お前が渡してやれ」と言ったので、弁慶は、「いったい、判官殿だとわかつているのなら、はっきりと指さしてそう言われよ」と言うと、「間違ひなく、あの山伏が判官殿でおありだ」と指をさして言った。</p>
192	<p>作者未詳「義経記」 （巻第三目録 書写山炎上の事 P.120）</p>	室町時代前期～中期	フィクション（三人称）	初めの景気、今の風情相違したり。されば人には馴れて見るべかりけり。穩便の者にてありけるや	②	<p>衆徒→弁慶 下上 男→男</p>	⑤	なし	<p>一夏の間は丹誠を運びて、勤めを退転なく行ふてぞ居たりける。衆徒も「初めの景気、今の風情相違したり。されば人には馴れて見るべかりけり。穩便の者にてありけるや」とぞ褒めける。されども弁慶が心の中は測りがたし。かくて夏も過ぎ、秋の初めにもなりければ、稲葉もそよぎ、吹く風に萩の葉も靡きつつ、やうやう夜寒になりければ、書写の夏も果てにけり。</p> <p>訳文：弁慶は、一夏の間は真心をこめて修行し、仏前のお勤めも中断することなく、専心に勤んでいた。このため、衆徒たちも、「初めの気配と今の様子とは違っている。それだから、人には慣れ親しんでみるべきものよ。意外に穩やかな男であつたわい」と、弁慶を褒めた。けれども、弁慶の心の中は推測しがたいものがあつた。こうして夏も過ぎ、秋の初めにもなったので、稲の葉も風にそよぎ、吹く風に萩の葉も吹きなびくようになり、だんだんと夜が寒く感ぜられる時季になったので、書写山の夏行も終つた。</p>
193	<p>作者未詳「義経記」 （巻第六目録 静鎌倉へ下る事 P.342）</p>	室町時代前期～中期	フィクション（三人称）	勸学院の雀は蒙求を囀るという申したるものかな	①	<p>人々→禪師の答え 下上 不問→男</p>	⑤	なし	<p>* 清和天皇の御末裔、鎌倉殿の御弟にて渡らせ給へば、これこそ身にとりては面目と思ひ候ひしか。今かかるべしと予ては夢にも争でか知り候ふべき」と申しければ、人々これを聞きて、「勸学院の雀は蒙求を囀るという申したるものかな」とぞ褒めける。「さて九郎が子を妊じたる事はいかん」。それは世に隠れなき事にて候へば、陳じ申すに及ばず。来月には御座にて候ふべし」とぞ申しける。</p> <p>訳文：清和天皇の御末裔、鎌倉殿の御弟でいらっしゃることで、これこそ私どもにとっては名誉なことと思っております。それが今こんな身の上になろうなどは、以前はどうして夢にも知ることができたでございましょうか」と言つたので、人々はこれを聞いて、「勸学院の雀は『蒙求』を囀るとは、なるほどよくも言つたものよ」と言って、禪師の答えを褒めた。「ところで、九郎の子を懐妊したというが、それはどうなのか。」「それは世間でもよく知っていることでございますから、今さら隠し立て申し上げるまでもございません。来月には出産いたすことになりましょう」と言つた。</p>
194	<p>作者未詳「義経記」 （巻第六目録 静若宮八幡宮へ参詣の事 P.366）</p>	室町時代前期～中期	フィクション（三人称）	あはれ楽党や	①	<p>鎌倉殿→評判の美男 下上 男→男</p>	②	なし	<p>名を得たる美男なりければ、あはれ人やとぞ見えける。その歳廿三にぞなりける。鎌倉殿これを御覧じて、御簾の内より、「あはれ楽党や」とぞ褒めさせ給ひける。時にとりてはゆゆしくぞ見えける。</p> <p>訳文：評判の美男だけあって、ああ立派なお人よと見えた。その年は二十三歳であつた。鎌倉殿はこれをご覧になって、御簾の内から、「ああ見事な楽人仲間よ」とお褒めになった。その時にふさわしく奥床しく見えた。</p>

195	<p>作者未詳「義経記」 (巻第六目録 静若宮八幡宮へ参詣の事 P.369)</p>	室町時代前期～中期	フィクション(三人称)	なし	なし	二位殿→頼朝 上下 男→男	⑤	なし	<p>二位殿これを聞こし召して、「同じ道のものながらも、情けありてこそ舞ひて候へ。静ならざらん者はいかでか御前にて舞ひ候ふべき。たとひ如何なる不思議をも申し候へ、女ははかなき者なれば、思し召し許し候へ」と申させ給ひければ、御簾の方々を少し上げられたり。静悪しき御気色と思ひて、また立ち返り、吉野山峯の白雪踏み分けて入りにし人の跡絶えにけりと歎ひたりければ、御簾を高らかに上げさせ給ひて、「軽々しくも褒めさせ給ふものかな」と言ふが先もあり。二位殿より御引出物、広蓋に衣賜ひけり。</p> <p>訳文：二位殿はこれをお聞きになり、「同じ遊芸者とはいえ、風雅な心があればこそ舞ったのでございます。静でない余人なら、どうして殿の御前で舞ったりしましょうか。たとひどんな非常識なことを申しましたとしても、女はか弱い者でございますから、どうかそれをお考えくださってお許しなさいませ」とおっしゃったので、頼朝も御簾の一方のほうを少しお上げになった。静は、ご機嫌をそこんたと思って、また舞台に引き返し、吉野山……(吉野山の峯の白雪を踏み分けながら山中深く入って行ってしまわれたあの方の行方はわからなくなってしまいました)と歌い直したので、頼朝は御簾を高々とお上げになったがその対応に、「軽々しくお褒めになることよ」と先ず嘸ひた者もいた。二位殿から、引出物として広蓋に絹をお下げ渡しになった。</p>
196	<p>作者未詳「義経記」 (巻第七目録 判官北国落の事 P.386)</p>	室町時代前期～中期	フィクション(三人称)	君は鞍馬におはしまししかば、山伏にも馴れさせ給ふらんは申すに及ばず。北の御方は何時習はせ給はねども、少しも稚児に違はせ給ひ候はず	③	弁慶→殿 上下 男→男	④	なし	<p>か様に出で立ち給ひて、灯火をかかへて、武蔵坊をば傍らに置き、北の御方の手を取り給ひて、あなたこなたを歩ませ奉りて、「義経山伏に似たるや、人は稚児に似たるや」とぞ仰せられける。弁慶申しけるは、「君は鞍馬におはしまししかば、山伏にも馴れさせ給ふらんは申すに及ばず。北の御方は何時習はせ給はねども、少しも稚児に違はせ給ひ候はず」とぞ褒め感じ参らせたる。</p> <p>訳文：このように装束をお整えになると、判官は灯火をかき立てて、武蔵坊を側近くに控えさせ、北の方の手をお取りになって、あちらこちらお歩かせになりながら、「義経は山伏に似ているか、この人は稚児に似ているか」とおっしゃった。弁慶はこれを聞いて、「殿は鞍馬においでになりましたから、山伏にも慣れていらっしゃるのは当然のことござる。奥方様はいつお習いになったというのでもないのに、ちっとも稚児とお違いになりません」と、感嘆してお褒め申し上げた。</p>
197	<p>作者未詳「義経記」 (巻第八目録 判官御自害の事 P.460)</p>	室町時代前期～中期	フィクション(三人称)	なし	なし	人々→佐藤兵衛 下上 不問→男	⑤	なし	<p>「武蔵坊もはや討たれぬ。軍も早終はりぬ。やしやざうばかりこそ防矢仕り候へ」と高らかに申しければ、下郎なれども、やしやざうこそ故入道の申せし旨を違へじとて、留まりけるぞ不便なる。「自害の刻限になりたるやらん、自害はいか様にしてよきぞ」と言へば、「* 佐藤兵衛が京にて仕立て候ひしをこそ、人々後の世まで褒め候ひしか」と申しければ、「さては子細なし。疵の口の広きがよきござんなれ」とて、</p> <p>訳文：「武蔵坊もすでに討たれてしまった。軍ももう終りだ。夜叉蔵だけが防戦をしているぞ」と大声で叫んだ。下人だが、この夜叉蔵だけが亡き入道の遺言に背くまいとして、踏みとどまっていたことは、いとおしいことである。</p> <p>「自害をする時期になったらしい。自害はどのようにするのがよいのか」と判官がおっしゃったので、「佐藤兵衛が京都でやりましたのを、人々は後々まで褒めておりました」と兼房が答えると、「それならわけではない。斬った疵口が広いのがよいのだな」といって、</p>
198	<p>世阿弥「風姿花伝(能楽論集)」 (風姿花伝第一 年来稽古案々 三十四五 P.215)</p>	室町時代	評論(一人称)	なし	なし	人→役者 不問 不問→男	③	なし	<p>この頃の花こそ初心と申す頃なるを、極めたるやうに主の思ひて、はや申楽に側みたる輪説をし、至りたる風体をする事、あさましき事なり。たとひ、人も褒め、名人などに勝つとも、「これは一旦めづらしき花なり」と思ひ悟りて、いよいよ物まねをも直にしに定め、名を得たらん人に事を細かに問ひて、稽古をいや増しにすべし。</p> <p>訳文：この、若さの花の開く二十四五の頃こそ、「初心」と言うべき段階なのに、もう奥義を極めたかのように本人がうぬぼれて、早くも猿楽の正道からはずれた自分勝手な言動をし、大成した名手のような演じ方をするのは、まことにあきばれてたことだ。たとひ人が褒め、競演で名人級の人に勝つても、これは一時的な珍しきの花に過ぎないのだと思い悟って、基本の物まねをもいっそう確実に体得し、名声を得ている人に細かく指導を仰いで、以前に増して稽古に励まなければならぬ。</p>
199	<p>世阿弥「風姿花伝(能楽論集)」 (花伝第七 別紙口伝 住せぬための用心 P.284)</p>	室町時代	評論(一人称)	早く上がりがたる 功入りたる 若やぎたる	①	人々→若き為手 人々→一年寄り 不問 男→男	③	なし	<p>種あらば、年々時々この頃になどか会はざらん。ただ、かへすがへす、初心を忘るべからず。されば、常の批判にも、若き為手をば、「早く上がりがたる」「功入りたる」など褒め、年寄りたるをば、「若やぎたる」など批判するなり。これ、めづらしき理ならずや。</p> <p>訳文：種が残っていれば、その時節になれば年ごとに花が咲くように、何度でも花を咲かすことができるはずだ。したがって、年々去来の花を身につけるためには、くれぐれも初心時代の芸を忘れてはならない。また、常々耳にする批評でも、若い為手については「年のわりに能の位が上がっている」とか、「功の入った芸だ」とか褒め、年寄りの為手の場合には「若々しい」などと褒めるものである。それも、若者の老芸や老人の若い芸が珍しきの道理にかなっているからに外なるまい。</p>
200	<p>嵯峨天皇、義堂周信、荻生徂徠ほか「日本漢詩集」 (近世(四) 大観磐漢詩集に題す(広瀬旭荘) P.528)</p>	飛鳥時代～江戸時代	漢詩集	なし	なし	文人→文人 対等 不問→不問	なし	なし	<p>大観磐漢詩集に題す(題大観磐漢詩集)古来 文人 多く相忌む古来文人多相忌然らずんば 相誉め 互ひに諂媚す不然相誉互諂媚吾れ磐漢詩に題するに吾題磐漢詩敢て諛を貢せず 況んや敢て刺らんや不敢貢諛況敢刺嘗て諛す 吾が邦 支那に勝るは言論吾邦勝支那独り皇統万年替璧すること無きのみならず不独皇統万年無替璧富岳の白雪 蒼穹を柱へ富岳白雪柱蒼穹天橋 松島更奇異</p> <p>訳文：大観磐漢詩集に題する 古より文人は排斥しあうことが多く、さなければ互いに誉めあったり、媚びへつらったりする。私は磐漢詩集に題するに当り、しいておもねりもしないし、まして刺したりしようか。かつて論じたことには、我が国が唐土にまさっている点は、ただに皇統が万世すたれ滅びたことがないばかりではない。白雪をかぶった富士山が青空を支えており、天の橋立、松島はもっとすばらしい。</p>
201	<p>江島其磧、八文字自笑 「浮世親仁形氣(浮世草子集)」 (浮世親仁形氣 三之巻 (1) 踊を楽しむ子自慢の親父 P.493)</p>	江戸時代初期～中期	小説(三人称)	今文殊	①	旦那寺の宿坊→十助 上下 男→男	③	なし	<p>「あいつはかつかう大株にござれども、当年うそなしに十一に成りますれども、おとな役をいたし、帳相・算用万事引きういたすゆゑに、我等は表の事を構ひ申さず、参り下向にかゝつて居るが、見事見世商ひも仕り、その邊には、御宿老殿の裏座敷を借つてあるゝ、児医者の徳庵老方へ参り、四書を詠習ひ、論語・孟子を中ではやりますを、此の中も齋に参られた、旦那寺の宿坊聞かれて、肝をつぶされ、今文殊とほめられました。是から文選とやらいふ物をよむ程に、灸すゑた賃に、六臣註を貰うてくれよねだります」と、</p> <p>訳文：「あいつはからだは大柄ですけども、年は今年かけ値なしに十一歳にしかありません。そんな年でおとなの仕事をごなし、収支の点検・計算と万事を引き受けていたしますので、わたくしは店のことには関係せず、もっぱら寺参りが仕事というありさまですが、十助はりっぱに店の商売もいたしますし、そのあいまいには、御宿老殿の裏座敷を借りておられる、児医者の徳庵老のところへ参り、四書を読み習ひ、『論語』『孟子』を暗唱しますのを、先日も齋においで、旦那寺の宿坊が聞いて、驚かれ、今文殊とおほめでした。これから『文選』とかいう物を読むから、灸をすえさせた駄賃に、『六臣註』を買ってくれよねだります」と、</p>
202	<p>江島其磧、八文字自笑 「浮世親仁形氣(浮世草子集)」 (浮世親仁形氣 三之巻 (1) 踊を楽しむ子自慢の親父 P.496)</p>	江戸時代初期～中期	小説(三人称)	どうでも十助は器用な。第一声がよ うて	①	年寄→十助 上下 男→男	③	なし	<p>悴畏つて、四海浪を独吟にうたひおさむれば、年寄きげんよく、「どうでも十助は器用な。第一声がよて」とほめられければ、徳左衛門せいて来て、「徳三郎、十助に負けな。肴に鏈をどりして、町中の目をおどろかせ」と、みずから台所にかけてある櫛櫛帯取つて来て、我が子にかたげさせ、尻もつまげてとらし、「すいぶんあちをやつて、親の名まであげてくれよ」と、</p> <p>訳文：「十助よ、肴にめでたく小鯛をうたえ」と、浄閑のいつづけに、せがれは居すまいを正して、四海波を一人でうたい納めると、町年寄は機嫌よく、「何といつても十助は器用なことだ。第一に声がよくてたいしたものだ」とほめられた。そこで徳左衛門は負けまいとあせて、「徳三郎よ、十助に負けな。肴に槍踊りをして、町中の人をびっくりさせろ」と、自分で台所に掛けてあるしゆるぼうきを取って来て、わが子にかつがせ、尻はしょってやって、「精いっぱいうまくやって、親までほめられるほどにしてくれよ」と、</p>
203	<p>夜食時分「好色敗毒散(浮世草子集)」 (好色敗毒散 巻之三 第二 あそび散 P.74)</p>	江戸時代初期～中期	小説(三人称)	つよい人ぢや	①	吉野屋のから崎どの→平馬之丞 上下 男→男	③	なし	<p>二番に道楽の平馬之丞、飛騨鳥のきるものに、茶字のはかまのもんだちたかくかいとつて、流鼓枝の脇指に白押の長鞘、小尻あがりになすまゝに、面に腎相あらはれて、砲ばら / \ 玉さゝの、さゝしひられていつやらも、五升呑んでもゑひませぬ。つよい人ぢやと吉野屋のから崎どのにほめられし名は有明の月のわや熊谷笠を進上す。</p> <p>訳文：二番に道楽の平馬之丞、飛騨縞の着用に、茶字縞の袴の股立を高くとつて、輪鼓枝に脇押の長鞘の脇差を、鏝上がりにさし、顔にはにきびがばらばらと、腎張りの相が現れて、わたしはいつかも酒を無理じいされて、五升飲んでも酔いませんでした。強い人だと吉野屋の唐崎殿にほめられて有名でございますなどといつて、有明の月の形に似た熊谷笠を進上する。</p>

204	江島其碩、八文字自笑 「浮世親仁形氣(浮世草子集)」 (浮世親仁形氣 三之巻 (1) 踊を楽しむ子自慢の親父 P.493)	江戸時代初期～中期	小説(三人称)	あいつはかつかう大鉢にござれども、当年うそなしに十一に成りますれども、おとな役をいたし、帳相・算用万事引きうけたすゆゑに、我等は表の事を構ひ申さず、参り下向にかゝつて居るが、見事見世商ひも仕り、その透には、御宿老殿の裏座敷を借つてゐるゝ、児医者の徳庵老方へ参り、四書を読習ひ、論語・孟子を中々やりますを、此の中も齋に参られた、旦那寺旦那寺の宿坊聞かれて、肝をつぶされ、今文殊とほめられました。是から文選とやらいふ物をよむ程に、免すゑた貴に、六臣註を買つてくれよとねだります	②	親→自分の子 上下 男→男	③	なし	ある時町衆二日寄合に、借屋中の判をとりて仕舞ひ、組頭の立花やの浄閑隠居して、倅十助に向後町義をつとめさする。披露目の祝義に、樽肴を出され、さいはひにかるい夜食を拵へ、能い加減に酒のみ、座中打ちくつるいで、世間咄をせられし中に、亭主分の浄閑、少と舌も廻りて、心よいきげんにまかせ、倅十助が自慢咄。「あいつはかつかう大鉢にござれども、当年うそなしに十一に成りますれども、おとな役をいたし、帳相・算用万事引きうけたすゆゑに、我等は表の事を構ひ申さず、参り下向にかゝつて居るが、見事見世商ひも仕り、その透には、御宿老殿の裏座敷を借つてゐるゝ、児医者の徳庵老方へ参り、四書を読習ひ、論語・孟子を中々やりますを、此の中も齋に参られた、旦那寺旦那寺の宿坊聞かれて、肝をつぶされ、今文殊とほめられました。是から文選とやらいふ物をよむ程に、免すゑた貴に、六臣註を買つてくれよとねだります」と、涙をながして申さるれば、いづれも今宵の馳走にめでて、「ひとりもひとりからと、発明なる生れつき。子室と申すは御子息十助殿事。浄閑老にはあやかり物」と、座なりの挨拶を、ねてゐたる徳左衛門、聞くよりむつとし、むく／＼と起きなほり、「是浄閑老。いかに心安い出合なればとて、親の口から我が子をほめるはたはけの内也。 <p>訳文：ある時町内の二日寄合に、借家人全部の判を押させてしまい、組頭の立花屋の浄閑が隠居して、せがれの十助に今後は町内の義理づきあいさせざることを披露し、その祝いのしるしに、浄閑より酒と肴を出し、それをよいきかけにして人々は軽い夜食を作り、過度に酒を飲んで、みなくつろぎ、世間話をしておられた時に、亭主格の浄閑が、少し酒に酔い、よい機嫌になったのにまかせて、せがれの十助の自慢話を始めた。「あいつはからだは大柄ですけれども、年は今年かけ値なしに十一歳にしかありません。そんな年でおとなの仕事をごなし、収支の点検・計算と万事を引き受けていただきますので、わたしは店のことには関係せず、もっぱら寺参りが仕事というありさまですが、十助はりっぱに店の商売もいたしますし、そのあいまには、御宿老殿の裏座敷を借りておられる、児医者の徳庵老のところへ参り、四書を読み習ひ、『論語』『孟子』を唱暗しますので、先日も齋においての、旦那寺の宿坊が聞いて、驚かれ、今文殊とおほめでした。これから『文選』とかいう物を読むから、免すええさした駄賃に、『六臣註』を買ってくれよとねだります」と、子供に参つてしまつてたわいなくいわれるのを、みながら今夜の馳走に免じて、「ほんとに一人しかないお子さんだのに、利口な生れつきです。子室というのはお子さんの十助殿のこと。浄閑老はおしあわせだ」と、お座なりの挨拶をする。これを褒めていた徳左衛門が、聞くよりむつと腹を立て、むくむくと起き直つて、「これ浄閑老。いかに心安い会合の席だからといって、親の口から自分の子をほめるのはばかの同類だ。</p>
205	作者未詳「たきつけ草・もえくゐ・けしずみ(仮名草子集)」 (たきつけ草・もえくゐ・けしずみ(屏) 梗概 たきつけ草 P.377)	江戸時代初期	小説(三人称)	とどける物	③	翁→女 上下 男→女	⑥	なし	若人のいふ、「ただ今の一言は、さきほどより日ひしとは、事たがへり。『女郎は水くさからず、いつはりなし』などと、その方人めきたる言葉の花、色をあらそひ、男を『つまらず』としり、女を『とどける物』とほめそやし給ひし言の葉、又、玉をつねわたるには、はるかに変りて、今又『傾城を我が物とたのむな』などの、いましめらしき言葉は、いかに尻口のあはぬ事は日ふや」といふ。 <p>訳文：「ただ今の一言は、先ほどこからおつやつたことと違つていますね。『遊女は水くくくない、偽りもない』などと、遊女の味方のような言葉の花を飾つて巧みに話し、男を、『未熟で野暮』としり、女を、『行き届いたものだ』とほめそやして、言葉を玉のように連ねたのとはまったく違って、今はまた、『遊女を自分だけの物と思うな』などと教訓してみた言葉を発するとは。どうしてそんな辻褄の合わないことをおっしゃるのですか!』と言う。</p>
206	作者未詳「御伽物語(仮名草子集)」 (宿直草巻三目録 第八 湖に入武具をえし事 P.525)	江戸時代初期	フィクション(三人称)	天晴、她をころせる勇士かな	①	見物の者→侍 不問 不問→男	③	なし	保元寿永か、あるは建武延元の比の、しかるべき大将にやといへり。見物のものも「天晴、她をころせる勇士かな」とほめてかへりしと。 <p>訳文：保元、寿永か、または、建武、延元の頃の、名のある大将であらうと評判であつた。見物の者も、「さすがに、蛇を殺した勇者だ」と、ほめて帰つたということである。</p>
207	作者未詳「浮世物語(仮名草子集)」 (浮世物語巻第三目録 二 侍の善悪批判の事 P.154)	江戸時代初期	フィクション(三人称)	なし	なし	侍→よき人 不問 男→不問	なし	なし	とにもかくにも内外そろひたるまことの人はなきものなり。たま／＼まことの賢人あれども、虎を画がきて狗に類することく、つくろひ者也といひ立つれば、そをつからそれになるぞかし。をよそよき侍の生れつきは、まづ親に孝行なるをもつて、主君につかへて忠義あり。療倒れたる人をあはれみ、人の恩をわすれず、友にまじはりて誠あり、よき人をばほめ悪しき人をそしらず。かかる侍は、主君の落目を見とどけて、みづから艱難をかへりみず、正直にし信あつし。 <p>訳文：とにもかくにも内面・外面ともにすぐれた真の人物というのはいないものだ。たまたま真の賢人がいても、虎を描いて犬に似てしまうように、うわべを飾るだけの者だと世間で言いはやすから、自然、本物がにせ者になってしまうのだ。いったい、りっぱな侍の天性は、まず親孝行である点にあるが、親に尽すのと同じ態度で主君に仕えては忠義を尽し、不遇な人を哀れみ、人の恩を忘れず、友人との交わりには誠実を尽し、りっぱな人をほめ、悪い者でもそしったりはしない。こういう侍は、主君が落ち目になつても最後まで主君につき従ひ、自分の苦しみや苦勞は問題にもせず、正直で信義に厚いものだ。</p>
208	作者未詳「浮世物語(仮名草子集)」 (浮世物語巻第四目録 八 浮世房過去の世をさとりし事 P.201)	江戸時代初期	フィクション(三人称)	なし	②	通寄→主君 下上 男→男	③	B	されば蝦は、水の中にては伸びつ屈ふづして楽さうに見ゆるが、道ばたへ上りては、もはやつくばふて居る。跳んでも／＼つくばふてばかり居る。それがしも、部屋へはいりては、寝たり起きたり楽さうなれ共、部屋を出づれば、どこでもかしこでもひざまづき、手をつかへて居ぬ事が無いほどに、前の生は蝦であらうと覺えた」といふ。通寄聞きて、「まことによい悟道のしやうかな。禅宗は教外別段のすずめちや」と申した。「ほめてか、こは者ちや」とて、主君大いに笑ひ給ふ。 <p>訳文：蛙というのは、水の中では自由に伸びたりかがんだりして楽そうに見えますが、道端へ上がると、もうつくばつており、どんなにとんでもつくばつてばかりいるのです。私も、自分の部屋に入れば寝たり起きたりで楽そうですが、いったん部屋を出ますと、どこでもかしこでもひざまずいて、手をつきっぱなしですから、私の前世は蛙だったのだらうと悟つたのです」と言つた。通寄はこれに聞いて、「本当にりっぱな悟り方をしたものだ。禅宗は教外別伝の教えだというのが、さすがに別段(とりわけ)の教えだ」と言つた。それを聞いて、「それでほめたつもりかね。ひどいやつだ」と言つて、主君はさかんに大笑いなさつた。</p>
209	作者未詳「一休ばなし(仮名草子集)」 (一休ばなし巻之一目録 九 一休魚をくひて高札を立給ふ事 P.257)	江戸時代初期	フィクション(三人称)	なし	なし	人々→一休 下上 不問→男	なし	なし	上下万人きもをつぶし、「さてもおどけたる御坊」と興をさましてかへりけるが、其中に心ある者のいひけるは、「ただ今参りたる魚は、みないきて淵におどる也。有がたき一言かな。まことに正法にきどくなしとこそうけ給りしに、人のあまりいはんとて、ふしぎなることをいひて、一休をほめんがために、かへつてそしるなれば、其理にしめし給ふ。有がたし／＼」と感じければ、みな人足に氣がつきて、合点したも合点せんも、うなづきあへりて帰りと也。 <p>訳文：人々は驚いて、「さてもおどけたお坊さんよ」と、あきれ果てて帰つたが、その中で分別をわきまえた人が言うには、「ただいま召し上がった魚は、皆生きて淵に泳いでいるのだ。ありがたい言葉よ。確かに、正法に奇跡などない承つていたが、人々が一休をほめようとして、不思議なことを言つたため、一休をほめようとしてかえつて勝ることになるので、その道理をお示しなさつたのだ。ありがたいことだ。ありがたいことよ」と感心したので、人々は皆これに氣がついて、納得した人も、納得しない人も、うなづいて帰つたということです。</p>
210	作者未詳「一休ばなし(仮名草子集)」 (一休ばなし巻之三目録 二 新右衛門が女房の事 P.295)	江戸時代初期	フィクション(三人称)	女ばうのなされたぐひなく、いさぎよきふるまひは、かへりてまさりけり	②	ほめ手不問→女房 不問 不問→女	⑤	なし	しかれ共、あとかたもなきいつはりなれば、誠がつるにあらはれて、ざんげんのしわざとしりにける。新右衛門後悔して、又よびむかへんとて、わがあまりなるよいいひつかはしければ、女ばう返事に、秋風の人の心にたつならば実のらぬさきにいねといわざるとかやうによみおこせて、ふたたびかへらざりける。それより、「女ばうのなされたぐひなく、いさぎよきふるまひは、かへりてまさりけり」と、ほめぬものなかりしとなん。ある人かたり侍り。 <p>訳文：しかし、根も葉もない作り事なので、妻の誠がついに明らかになり、諷言のしわざと知つた。新右衛門は後悔して、また呼び返そうとして、自分の間違ひである旨を、女房に言い直したところ、女房の返事に、秋風の……(秋風があなたの心に立つたならば、実ならぬうちに、去ねと、なぜ言わないのか)と、このように詠んでよこして、二度と帰らなかつた。それから、「女房の情けは比べものがなく、いさぎよいふるまひは、かえつて新右衛門よりすぐれている」と、ほめない者はなかつたと、ある人が語りました。</p>
211	作者未詳「御伽物語(仮名草子集)」 (宿直草巻二目録 第六 せんなは天性きもふとき事 P.484)	江戸時代初期	フィクション(三人称)	なし	なし	男→女がやったこと 対等 男→女	⑤	なし	せんなさいはひと思ひ、かの死人を橋にたのみてわたるに、この死人女のすそをくはへてはなさず。ひきながりてとをるが、一町ばかりゆき過ぎておもふやう、「死人にころなし。いかでわがすそをくはん。いかさまにもいふかし」と。またものとどころへ帰りて、わざとのがうしろのすそを、死人の口に入、むないたをふまへわたりて見るに、もとのごとくはゆ。「さては」とおもひ、あしをあげてみれば、口あく、「案のごとく死人にころはなし。足にてふむとふまぬとに、くちをふさぎくちをあくなり」とがつてんして、男のかたへゆく。さてきたへの枕によりあて、右のことをほめられがほにはなす。男大きに仰天して、そののちはあはずなりにけり。 <p>訳文：女は幸いに思つて、その死人を橋として渡ると、この死人は女の着物の裾をくわえて放さない。裾をひたつてくつて通つたが、一町ばかり行き過ぎてから思うには、「死人に心はない。どうして私の裾をくわえようか。いずれにしても不思議だ」と、またものと所に戻つて、わざと自分の後ろの裾を死人の口に入れ、胸板を踏んで渡ってみると、前のようにくわえた。「さては」と思い、足を上げてみると、口を開ける。「思ったとおり、死人に心はない。足で踏むのと踏まないのとで、口を開じ、口を開けるのだ」と納得して、男の所に行く。そこで、敷き蓆の枕に寄りかかりながら、右のことを褒めてほしように話す。男はたいそう驚いて、その後は会わなくなつてしまつた。</p>

212	<p>作者未詳「御伽物語（仮名草子集）」 （宿直草巻二目録 第八 せいぐはんじにて鬼にせめらるる女の事 P.490）</p>	江戸時代初期	フィクション（三人称）	羽々女性にてかく修業けんごなる人こそなけれ。さだめて六十万人決定往生のひとにや	②	山伏→女対等男→女	⑤	なし	<p>第八 せいぐはんじにて鬼にせめらるる女の事 むかしうぢのさとより、京せいぐはんじへ隔夜にまいる山ぶし有。またそのころ五十あまりの女、これもおこたりなく、まいにち七つさがりに参る。山ぶし見て、「羽々女性にてかく修業けんごなる人こそなけれ。さだめて六十万人決定往生のひとにや」と殊勝のおもひをなす。さて御だうに通夜…つれなき命のきえもせで苦をうくる事、見るものひがたし。「さても又いかなるさいにんか」とたちよりて見れば、この比ほめそやしたる女ばうなり。「さて / \ 日ごとによくまいりて、かくる事もなき人の、あんに相違せし事かな。いかなるかくるつみのあるぞや」と見るに、あかつきつぐるかねの音に鬼も女もきえゆけば、「さては夢か」とうたがへば、袖かたしにもあらずれば、ありしをままのうつつなり。</p> <p>訳文：第八 誓願寺で鬼に責められる女の事 昔、宇治の里より京都誓願寺に一夜おきに来る山伏がいた。また、その頃五十余りの女が、これも欠かすことなく、毎日七つ下がり（夕方四時過ぎ）に参る。山伏は見て、「さてさて、女の方で、このように修行堅固な人はないことだ。きつと六十万人決定往生の人であろう」と、殊勝に思われた。さて、御堂に通夜して、心を澄している中、真夜中ばかりの頃、鬼四、五匹が女一人を連れてきた。何事かと恐ろしく思ったが、堂の庭に、たちまちに火炎が燃え上がった。五匹の鬼がその女の髪と四つの手足を取って引っ張り、打ち返し打ち返して火にあぶる。叫ぼうとするが、声も出ず、全身より血の流れるのが、油などを絞るかのようである。しかし、この女は、はかない命が消えもせず、苦を受けること、見るにも忍びがたい。「さてまた、どのような罪人であろうか」と、近寄って見ると、この頃、ほめちぎった女である。「さてさて、毎日よく参りて、欠けることもない人が、思いがけないことかな。どのような隠した罪があるのだろうか」と見ていると、暁を告げる鐘の音に、鬼も女も消えてしまったので、「さては夢か」と疑ったが、実際に寝ていたわけでもないで、ありのままの現実である。</p>
213	<p>作者未詳「御伽物語（仮名草子集）」 （宿直草巻三目録 第十 ゆうれいの方人の事 P.534）</p>	江戸時代初期	フィクション（三人称）	琴瑟の調	③	毛詩→夫婦中よき不問もの→男女	⑥	なし	<p>やがてをきみにあふ。「此もの幽霊のかたうどなるゆへ、かくのごとおこなふもの也」と礼に立たりとなん。またきく人のかがみならずや。夫婦中よきを、琴瑟の調と毛詩にはほめ、ふうふ不和なるを、易には反目ときらへり。</p> <p>訳文：すぐに仕置きを受けた。「この者、幽霊の味方であるゆえ、このように処罰するものである」と高礼に立てたということだ。これはまた、聞く人たちの戒めの手本ではないのか。夫婦の仲がよいのを、琴瑟の調と『毛詩』ではほめ、夫婦の仲が悪いのを、易では反目といって嫌う。</p>
214	<p>作者未詳「御伽物語（仮名草子集）」 （宿直草巻四目録 第二 年へしねこはばくる事 P.553）</p>	江戸時代初期	フィクション（三人称）	なし	なし	ほめ手不問→我が家の猫上下不問→動物	なし	なし	<p>またかたのごとく化粧では、つまどのもとにころびねを、ねずなきのほそ / \ と姫よ乙よとよばれても、身をあらはねばあかねこの、にやんとないたるむぐつけさ。くび玉のたまさに、人をまつ夜の伽にもならず。こたつをせばめて足をぬぶり、あたまたねの夢をさますぞ。ほめたけれどとうとましき。かの半部の翠簾ひく綱のつながる縁となりし袖は、げになかだちとも頼みつらん。</p> <p>訳文：また、例のごとく化粧しては、裏の戸口のそばで野合して、鼠鳴きの細々とした声で、姫よ乙よと呼ばれても、体を洗わないので、赤痢のにやんと鳴いた野暮ったさ。首玉のたまさに、人を待つ夜の伽にもならず。こたつを占めて足をなめ、せつかくの二度寝の夢を覚すことよ。ほめたいけれどもうるさい。あの半部の翠簾ひく綱のつながる縁となった人は、確かに猫を仲人と頼むことだろう。</p>
215	<p>作者未詳「浮世物語（仮名草子集）」 （浮世物語巻第三目録 四 茶の湯をいましめたる事 P.157）</p>	江戸時代初期	フィクション（三人称）	さても見事なる物かな	①	辺りの人→仲買いの男が持ってきた古い茶道具上下不問→男（もの）	①	なし	<p>今はむかし、浮世房、主君の御前に伺候せしに、折節取売の男まいりて、高麗茶碗・瀬戸の肩衝など、さま / \ 古き数奇道具を持参して、出頭人をもつて御目にかかる。主君すなはちねぢ直しひねりまし、遠く見近く見、下に置き手にとり御覧する。「さても見事なる物かな」と、まはりからは誉めそやす。「その直段は」といへば、ことの外に高直なり。</p> <p>訳文：今は昔、浮世房が主君の御前でご機嫌をうかがっていた時、ちょうど仲買いの男が参上して、高麗茶碗・瀬戸の肩衝などといったいろいろの古い茶道具を持って来て、出頭人の紹介で主君のお目にかけた。主君は、早速それらの道具を裏返しにしたりひねりまわしたり、遠くからながめたり近くから見たり、下に置いたかと思うとまた手に取ったりしてご覧になっていた。「さてみてみごとな物だ」と、辺りの者はほめそやした。「この直段は」と聞くと、とんでもないほど高かった。</p>
216	<p>作者未詳「浮世物語（仮名草子集）」 （浮世物語巻第三目録 二 侍の善悪批判の事 P.153）</p>	江戸時代初期	フィクション（三人称）	あの人は万事へつらひなく無欲なる賢人かな	①	世間→ある人不問不問	④	なし	<p>唐土漢の馬援が言葉に『虎を画きて狗に類す』といへり。まことなるかな、下手に描きたる虎は狗に似るごとく、つくろひ損へば悪くなる。今ほど世間にて、『あの人は万事へつらひなく無欲なる賢人かな』とほむる。その人柄を見れば、大方みな礼義をも知らず、よろづぶつつかなる緩急をいたし、きはめて人前に虚外をはたらき、わが言ひたきまに物言ひちらし、人を何とも思はぬあふれ者なり。</p> <p>訳文：中国の漢の馬援の言葉に『虎を描いたのに犬に似てしまう』というのがあるが、本当に、下手に描かれた虎が犬に似ているように、似せそこなうといっそう悪くなるものだ。現在、世間で『あの人は万事におべっかつかわず無欲な賢人だ』とほめられている人の人柄を見ると、大方の者はみな、礼儀も知らず、すべて下品で無作法なことをし、人前でとんでもない無礼をはたらき、自分の言いたいだけ勝手なことを言い散らし、人を人とも思わぬ無頼漢のような者どもだ。</p>
217	<p>作者未詳「浮世物語（仮名草子集）」 （浮世物語巻第三目録 二 侍の善悪批判の事 P.153）</p>	江戸時代初期	フィクション（三人称）	よく礼義を知りて慰慙をもつて人をうやまひ、心だてやはらかに結構人なり	①	世間→ある人不問不問	④	なし	<p>その人柄を見れば、大方みな礼義をも知らず、よろづぶつつかなる緩急をいたし、きはめて人前に虚外をはたらき、わが言ひたきまに物言ひちらし、人を何とも思はぬあふれ者なり。又、『よく礼義を知りて慰慙をもつて人をうやまひ、心だてやはらかに結構人なり』とほむる者は、みな馬鹿慰慙をつくし、表裡軽薄のへつらひ者なり。とにもかくにも内外そろひたるまことの人はなきものなり。たま / \ まことの賢人あれども、虎を画がきて狗に類するごとく、つくろひ者 also いひ立つれば、そのづからそれになるぞかし。</p> <p>訳文：その人の人柄を見ると、大方の者はみな、礼儀も知らず、すべて下品で無作法なことをし、人前でとんでもない無礼をはたらき、自分の言いたいだけ勝手なことを言い散らし、人を人とも思わぬ無頼漢のような者どもだ。また、『よく礼儀をわきまえ、丁寧な態度で人を敬い、気立ても温厚な好人物だ』と世間でほめる人は、みなばかり丁寧なうすのろで、陰ひなたのあるおっちょこちよいのおべっか使いだ。とにもかくにも内面・外面ともにすぐれた真の人物というのはいないものだ。たまたま真の賢人がいても、虎を描いて犬に似てしまうように、うわべを飾るだけの者だと世間で言いやすから、自然、本物がにせ者になってしまうのだ。</p>
218	<p>作者未詳「一休ばなし（仮名草子集）」 （一休ばなし巻之三目録 八 一休なぞきときて人にたづねあふ事 P.307） 付 齋旦那難問をかくる事</p>	江戸時代初期	フィクション（三人称）	よし	①	他人→父不問不問→男	④	なし	<p>男いよ / \ 肝をけし、おそれをなしてうやまひける。其時男いふやうは、「仰せのごとくそれがしは、ちちをうしなひ候て、三七日にたり侍る。仏果にやいたりけん。もしちごくにやおちぬらん、後生の事おぼつかなく候てかなしく候」ととひければ、一休仰せられけるは、「何事かあるべき。ただ存生のふるまひをば、他人はよしとほむるや、あしきとそしるや、いかがいふぞ」と宣ひける。「されば、平生はつねによこしまなる事候はず。ひとへに正直にて、まつたき性候ひければ、他人はほとけにてありつと、ほむるものおほく候」と申ければ、一休聞し召、「しかればきづかひなる事なし。是あみだにもあらず観音にもあらず、則正直仏なり。仏果を得る事疑ひなし」と、事もなげに仰せられける。</p> <p>訳文：男はいよいよ驚き、恐れをなして敬った。その時、男の言うには、「仰せのごとく、私は父を失って、三七日になります。父は極楽往生を遂げたでしょうか。もしや地獄に落ちたであろうか。死後の世界が心配で、悲しくございます」と尋ねたところ、一休がおっしゃるには、「何かあるはずです。ただし、生前のふるまいを、他人はよしとほめたか、悪いと謗ったか、どう言っていましたか」とお尋ねになった。「そうですね、普段はいつも、道理に外れたことはありません。ただ正直で、まともな性格でしたので、他人は、仏であつたとほめる人が多くございます」と申すと、一休はお聞きになり、「それならば心配はない。これは阿弥陀でもなく、観音でもない。すなわち、正直仏である。成仏することは疑いない」と、あっさりとおっしゃる。</p>
219	<p>作者未詳「一休ばなし（仮名草子集）」 （一休ばなし巻之三目録 八 一休なぞきときて人にたづねあふ事 P.308） 付 齋旦那難問をかくる事</p>	江戸時代初期	フィクション（三人称）	ほとけにてありつる	③	他人→父不問不問→男	④	なし	<p>「されば、平生はつねによこしまなる事候はず。ひとへに正直にて、まつたき性候ひければ、他人はほとけにてありつと、ほむるものおほく候」と申ければ、一休聞し召、「しかればきづかひなる事なし。是あみだにもあらず観音にもあらず、則正直仏なり。仏果を得る事疑ひなし」と、事もなげに仰せられける。</p> <p>訳文：「そうですね、普段はいつも、道理に外れたことはありません。ただ正直で、まともな性格でしたので、他人は、仏であつたとほめる人が多くございます」と申すと、一休はお聞きになり、「それならば心配はない。これは阿弥陀でもなく、観音でもない。すなわち、正直仏である。成仏することは疑いない」と、あっさりとおっしゃる。</p>
220	<p>作者未詳「御伽物語（仮名草子集）」 （宿直草巻一目録 第三 武州あさ草にばけものある事 P.444）</p>	江戸時代初期	フィクション（三人称）	なし	なし	不問→勇者は恐れない不問不問→男	⑤	なし	<p>かくて約束の下人、むかひに行て見るに、絶入てありしかば、くすりなどあたへ、かいしやくして、かへりしと也。後の評判いり / \ にして、始末よろしからざれば、無念にやおもひけん。おいとま申、ゆくゑしらすいでけり。粗、人人しりたる事なり。「智者はまどはず。勇者はおそれず」といへど、おそるべきをおそれざるは、ほむるにかないし。をよそ将の勇と兵の勇と、取捨各別なるをや、これなん、兵の勇にして、ばけものにむかふ、なんの手がらからあらんや。「霧虎瀧河して死すともくゆる事なきものには、くみせじ」と、夫子のいましめも、ひとりこの人のためにや。</p> <p>訳文：やがて、約束の下男が迎えに行つて見ると、主人が気絶していたので、薬などを与えて、介抱して帰ったということである。後の評判がいろいろあって、結果がよくなかったので、無念に思ったのであろうか、主家をお暇申して、行く先も告げずに家を出た。ほとんど人々の知っている話である。「知者は恐れない。勇者は恐れない」と言うが、恐れるべきものを恐れぬのは、妻め甲斐がない。およそ、大将の勇と兵卒の勇は用いどころが肝要だというが、これこそ兵卒の勇氣であつて、化け物に向つてしまった。どんな手柄があるのだろうか。「虎を素手で打つたり、大河を歩いて渡つて、死んでも後悔しない者には味方しまし」と、孔子の戒めも、ただこの人のためにあつた言葉か。</p>

221	<p>作者未詳「御伽物語(仮名草子集)」 (宿直草巻二目録 第四 甲州の辻堂にばけものある事 P.475)</p>	江戸時代初期	フィクション(三人称)	さて / \ よき御子や。玉にもたぐひ給ふ	①	女房→御子 上下 女→男	②	なし	<p>運のつくべきはかなさとは、後こそやくしと思ひけれ。ややしてかの女房。「まづ其御子これへつかはされよ。後朝まではわらはいだき申さん。との様もまづ御やすみ候へ」と、ねんごろに聞えければ、いかさまにははも退屈げにみえ給へば、「つかはされ候へ」といふにぞ、とりだしてやり給ふ。女かい / \ しくあつかひて、「さて / \ よき御子や。玉にもたぐひ給ふ」などいふてほむるにも、なを心をゆるさず侍りしが、夜まし日ましのたびつかれ、かたなをひさにぬきくつろげ、心にゆだんはなかりしかども、壁にそふてよりかかり、少いねむるともなきに、はは声たてて、「なふおそろし。あの女房のわが子をくふ」とよふ。</p> <p>訳文：運が尽きるであろうはない心のすきとは、後になって悔しく思ったことである。しばらくして、その女房が、「まずその子を私に預けなさい。明日の朝までは私が抱き申そう。ご主人もまずお休みなさい」と、親切に言うので、どうやら奥様も疲れて見えたゆえ、「こちらにお渡しください」と言うので、懷から取り出してやりなされる。女はてきばきと扱って、「さてさて、よいお子よ。玉のような」など言ってほめるのにも、なお心を許さずにいましたが、夜更重ねての旅疲れに、刀を腰に抜きはなして、心に油断はなかったが、壁にそって寄りかかり、少しうとうとしていると、奥様が声をあげて、「ああ、恐ろしい。あの女がわが子を食う」と呼ぶ。</p>
222	<p>作者未詳「御伽物語(仮名草子集)」 (宿直草巻三目録 第八 湖に入武具をえし事 P.524)</p>	江戸時代初期	フィクション(三人称)	なし	なし	人々→勇者 上下 不問→もの	⑤	なし	<p>あはやと見るにあがらず。しばししてうかめり。息をとくとつぎて、「扱々她やあると右往左往見るに、もとなきか、あれど出ぬ歟、她とおもふものもなし。然共ここなる岸の下に広さ三間四方ばかりのうつろあり。この嶋に水のうごくにうつろふて、光ものみえたり。さてこそとおもひ、やがて側により、二かたな三刀さすに、あへてはたらきもせず。いかさま合点ゆかぬものなり。今一度ゆきてとりてかへるべし」といひ、ながきはをとりよせ、其はしを下帯につけ、又いとみえしが、やがてあがり、「引あげよ」といふ。人々よりて、これをひくに、具足甲きたるもの引あげたり。其時見物一度にとつとほむる声やまず。さてよく見ればよろひ武者の入水したるとみえて、すぢほねの差別もなく凝たる躰にして、かぶと、具足、太刀、さしぞへも金作なり。</p> <p>訳文：手に汗を握って見守るに、上がってこない。しばらくして浮き上がった。息を深くついて、「さてさて、蛇はいるかと、あちこち見回したが、もともといないのか、いても出てこないのか、蛇と思われるものはいない。しかし、こちらの岸の下に、広さが三間四方ほどの洞窟がある。この洞の中に、水の動くにつれて光るものが見えた。さてはこれかと思い、すぐにそばに寄って、二刀、三刀刺したが、まったく動こうともしない。いかにも納得がいかない。もう一度行って、取つてこよう」と言い、長い綱を取り寄せ、その端をふんどしに結び、また水に入ったと見えたが、すぐに上がり、「引き上げよ」と言う。人々が集って、これを引くと、具足・兜を着たものを引き上げた。その時、見物の一度にとつとほめる声が起こってやまない。さて、よく見ると、鎧武者の入水したものと見えて、筋や骨の区別もないほど崩れて凝り固まった状態で、兜・具足・太刀・脇差も黄金作りである。</p>
223	<p>松尾芭蕉「連句編(松尾芭蕉集)」 (「空豆の」の巻 (炭俵)(扉) 作品・作者解説 空豆の花さきにけり麦の緑 P.538)</p>	江戸時代前期	連歌・俳諧(三人称)	年貢すんだ	なし	お上→農民 上下 男→不問	⑤	なし	<p>年貢すんだとほめられにけり 芭蕉</p> <p>訳文：年貢も滞りなく済んで、お上からおほめにあずかった、というのである。ほめられて喜ぶのは、もちろん農民である。</p>
224	<p>松尾芭蕉「全発句(松尾芭蕉集)」 (貞享四年(一六八七) 丁卯 (四十四歳) P.175)</p>	江戸時代前期	全紀行、日記、俳文、連句(一人称)	梅つばき早咲	なし	私→上皇様の御地 下上 男→男(場所)	①	なし	<p>梅つばき早咲ほめむ保美の里真蹟懷紙(猫の耳・鎌倉海道・伊良胡崎)</p> <p>訳文：昔、何某の上皇様の御感に与ったというこの保美の里だから、私もそのめでたい地名にあやかり、早咲きの梅・椿に恵まれたこの暖かい御地を褒めたたえましょう。失意の社国を励ますため、仮に地名に興を借りた一句。季語は「早咲きの梅」「椿」で冬。</p>
225	<p>松尾芭蕉「全発句(松尾芭蕉集)」 (元禄五年(一六九二) 壬申 (四十九歳) P.414)</p>	江戸時代前期	全紀行、日記、俳文、連句(一人称)	なし	なし	芭蕉→許六 上下 男→男	③	なし	<p>きりさめの空をふようの天氣かな真蹟画賛(顔塞・蕉翁句集)</p> <p>訳文：芭蕉は「柴門ノ辞」(元禄六年四月)の中に許六のことを「画はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす」と書いており、許六の江戸滞在中、二人はたびたび会って絵や俳諧を談じた。元禄五年十二月八日付許六宛書簡に「絵沢山に御書被成被下珍鋪慰に覚申候。愚筆御ほめ被成候にカラ得申候。何とぞ四色五色程覺置申度候」とある。</p>
226	<p>松尾芭蕉「全発句(松尾芭蕉集)」 (元禄七年(一六九四) 甲戌 (五十一歳) P.477)</p>	江戸時代前期	全紀行、日記、俳文、連句(一人称)	なし	なし	芭蕉が聞いた薫風の音→松・すぎ 上下 男(音)→植物	なし	なし	<p>小倉ノ山院 松すぎをほめてや風のかほ(を)る音笈日記(泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集)</p> <p>訳文：嵯峨、小倉山の山院、常寂光寺は松や杉が大きく森嚴なたたずまいである。その年を終た松・杉を称赞してのことであろうか、吹きわたっていく薫風が颯々と音をたてている。季語は「風かほる」で夏。</p>
227	<p>松尾芭蕉「俳文編(松尾芭蕉集)」 (三『常盤屋句合』跋 P.168)</p>	江戸時代前期	俳文(一人称)	なし	なし	常盤屋句合(杉風)→聖代 不問 男→時代	⑥	なし	<p>倭歌の風流、代とにあらたまり、俳諧、年とに变じ月とに新也。今こゝに青物の種とをあつめ、二十五番の句合となして、予に判をこふ。誠に句とたをやかに、作新敷、見るに幽也、思ふに玄也。是を今の風躰といはんか。且、是に名付て常盤屋といふは、時を祝し、代をほめての名なるべし。</p> <p>訳文：わが国の和歌の風流も、その御代御代によって姿を変えてきた。俳諧に至っては年々に趣向が変り、月々に流行が新しくなってゆく。いま、わが杉風は、ここにさまざまな野菜を詠んだ句ばかりを集め、それを二十五番の発句合にして、わたしにその勝負の判定をせよと言ってきた。読んでみると、その句はみなやさしく上品であり、作意は新しく、姿を見れば幽、心と思えば玄、まことに幽玄の趣がある。これこそ、いまの世の句風というべきであろうか。また、この句合を常盤屋と名付けたのは、この太平の時代を祝い、さかんなこの聖代をほめたたえてのことであろう。</p>
228	<p>松尾芭蕉「俳文編(松尾芭蕉集)」 (三七 保美の里 (「梅つばき」「いらこ崎」詞書) P.213)</p>	江戸時代前期	俳文(一人称)	なし	なし	院のみかど→梅つばき早咲畠村という所 上下 男→場所	なし	なし	<p>[青]此里をほびといふ事は、むかし院のみかどのほめさせ玉ふ地なるによりて、ほう美といふよし、里人のかたり侍るを、いづれのふみに書きとゞめたるともしらず侍れども、いともかしこく覺え侍るまゝに、梅つばき早咲ほめむ保美の里いらこさきほどこかければ、見にゆき侍りて、いらこ崎にる物もなし廬の声武陵芭蕉散人桃青。</p> <p>訳文：なし</p>
229	<p>服部土芳「三冊子(俳論集)」 (〔一八〕文章の諸体のこと P.562)</p>	江戸時代前期	俳論(一人称)	なし	なし	芭蕉先生→山吹 上下 男→もの	なし	なし	<p>銘はものに銘する心なり。格は前に同じ。本意の違ひのみ。賛はほむるの心なり。則ち山吹に句をする時は、山吹をほめて賛するなり。山吹を褒美の義理なり。忽して、文章に書く時、四文字四文字に書く、大かたの格なり。</p> <p>訳文：銘という文章の形式は、対象の名にかかわる内容のものである。書き方は、これも序・跋と同じである。内容の違いということである。賛という文章の形式は、褒めることを内容とするものである。すなわち、山吹の句を作るときには、山吹を褒めて賛を書くのである。山吹賛美という内容になる。一般的にいって、賛の文章を書く場合には、漢文では四文字、四文字に区切って書くのがきまりのようである」と述べられている。</p>
230	<p>服部土芳「三冊子(俳論集)」 (〔五三〕「かささぎの歌」に対する芭蕉の見解 P.644)</p>	江戸時代前期	俳論(一人称)	かささぎの歌は、夜をうば玉といふより、かささぎの橋と、夜くらき空の事をよめるなり。空の事をよめるなり。空の事をよめるなり。空の事を天の浮橋など、橋にひたる事多し。ただ夜のくらき空をよみたる趣向、この歌ばかりなり	③	芭蕉→貫之 対等 男→男	①	なし	<p>〔五三〕「かささぎの歌」に対する芭蕉の見解 「かささぎの歌は、夜をうば玉といふより、かささぎの橋と、夜くらき空の事をよめるなり。空の事をよめるなり。空の事をよめるなり。空の事を天の浮橋など、橋にひたる事多し。ただ夜のくらき空をよみたる趣向、この歌ばかりなり」</p> <p>訳文：〔五三〕芭蕉先生は「くかささぎの渡せる橋ににおく露の白きをみれば夜ぞふけにける」との歌における鳥鵲の橋とは、夜の枕詞を鳥羽玉の、というところからの連想で、夜の暗い空のことをいっただけのものである。天の浮橋の語もあるように、空のことを橋と表現した例は多い。かささぎを詠んだ歌で、ただ暗い空だけに注目して詠んだのは、この歌だけである」といわれた。かささぎの本意とは違った趣向で詠んでいるのを警めての、先生の言葉である。</p>

231	服部土芳「三冊子(俳論集)」 （[[五三]「かささぎの歌」に対する芭蕉の見解 P.646）	江戸時代前期	俳論（一人称）	なし	なし	梅翁「俳諧無言抄」→景色 上下 男→もの	なし	なし	(5)名所の海のこと 伊勢の海・駿河の海・石見の海など、国の名なれども、名所に取る。景をほめていへる故の事なり。 訳文：(5)伊勢の海・駿河の海・石見の海などは、単に海に国の名前を被らせただけであるが、和歌の世界では名所として扱う。その景色を賞賛する気持が込められているからである。
232	松尾芭蕉「全発句(松尾芭蕉集)」 （貞享三年（一六八六）丙寅（四十三歳） P.146）	江戸時代前期	全紀行、日記、俳文、連句（一人称）	なし	③	芭蕉→新しい作意・着想の句 上下 男→もの	①	なし	同書所収の去来の句「一蛙はしばし鳴やむ蛙哉」が、鳴く蛙ではあるものの、新しい作意・着想の句であることを褒めて、芭蕉は以下のように書き送っている。「此度蛙之御作意、爰元に而云尽したる様に存候処、又々珍数御さがし、是又人々驚入申候」（貞享三年閏三月十日付去来宛書簡）。 訳文：なし
233	松尾芭蕉「全発句(松尾芭蕉集)」 （貞享四年（一六八七）丁卯（四十四歳） P.163）	江戸時代前期	全紀行、日記、俳文、連句（一人称）	なし	③	芭蕉→門人李下の敏才 上下 男→男	③	なし	いなづまを手にとる間の紙燭哉芭蕉続虚栗（泊船集・三冊子・蕉翁句集） 訳文：闇夜を貫いて稲妻が一閃した。見るとあの暗闇には、その一瞬の電光を素手で奪い取ったかのごとく、紙燭が手にかかげられている。『三冊子』のいうところに従えば、門人李下が俳諧の機微を巧みにとらえて、不思議な句境を会得したことを称し、その敏才を褒めた句作。稲妻を手にとると言い立てたところが俳諧の工夫である。
234	松尾芭蕉「全発句(松尾芭蕉集)」 （貞享四年（一六八七）丁卯（四十四歳） P.175）	江戸時代前期	全紀行、日記、俳文、連句（一人称）	なし	なし	芭蕉→上皇様の御感に与った 暖かい御地 下上 男→（男）場所	①	なし	梅つばき早咲ほめむ保美の里真蹟懷紙(猫の耳・鎌倉海道・伊良胡崎) 訳文：昔、何某の上皇様の御感に与ったというこの保美の里だから、私もそのめでたい地名にあやかり、早咲きの梅・椿に恵まれたこの暖かい御地を褒めたえましよう。失意の杜国を励ますため、仮に地名に興を借りた一句。季語は「早咲きの梅」「椿」で冬。
235	松尾芭蕉「全発句(松尾芭蕉集)」 （元禄二年（一六八九）己巳（四十六歳） P.313）	江戸時代前期	全紀行、日記、俳文、連句（一人称）	なし	③	芭蕉→文鱗の連句 上下 男→男（もの）	①	なし	芭蕉は文鱗の「湖に高き去年の桐の実」の連句を評して「桐の実見付たる、新敷俳諧の本意、かゝる所に待る」と褒めている(初懷紙評註)。句の成立に関して、『芭蕉翁略伝』は芭蕉自筆の日記によるとして、元禄元年六月「七日赤坂に一宿、八日岐阜に到る」と記す。 訳文：なし
236	松尾芭蕉「全発句(松尾芭蕉集)」 （元禄四年（一六九一）辛未（四十八歳） P.389）	江戸時代前期	全紀行、日記、俳文、連句（一人称）	なし	③	芭蕉→(亭主の)畑の蕎麦の花 や野良の萩の美しさ 下上 男→（男）もの	①	なし	蕎麦もみてけなりがらせよ野良の萩 訳文：ばせを眺寒菊竜が岡のこの山姿亭は、まわりの畑には蕎麦の花が咲き、野良には一面萩が咲きこぼれている。蕎麦はとかく味だけが賞され、花の美しさは気づかれないものだが、どうか蕎麦の花も見てやって、野の萩に羨しがらせてやってもらいたいものだ。季語は「蕎麦の花」「萩」で秋。竜が岡の農家山姿亭に招かれた折の挨拶句。畑の蕎麦の花や野良の萩の美しさを褒めて亭主への挨拶としている。
237	松尾芭蕉「全発句(松尾芭蕉集)」 （貞享五年（一六八八）／元禄元年九月三十日改元 戊辰（四十五歳） P.228）	江戸時代前期	全紀行、日記、俳文、連句（一人称）	なし	③	芭蕉→「佛や」 上下 男→俳句	なし	なし	さらしなの三句とはこの句と、432「あの中に」、434「いざよひも」の三句をさすと思われる。其角はこの三句の勝負について意見を求められ、「佛や」を一番に推し、芭蕉のお誉めにあずかったという話である。この中で注目すべきことは、「佛や」の句のすぐれている理由が、芭蕉自身によって「其夜の月の天心にいたる所、人のしる事少なり」と解説されていることである。つまり、この句は月天心に至る夜更けの瑛捨山の旅情を詠んだ句と自注している。 訳文：なし
238	服部土芳「三冊子(俳論集)」 （白雙紙 [[一八]文章の諸体のこと P.562）	江戸時代前期	俳論（一人称）	なし	なし	芭蕉先生→山吹 上下 男→もの	なし	なし	詞書、その書様和にならひなし。漢にはその綾もあることなり。記はその物を記するの心なり。格は序・跋に同じ。心の違ひのみ。銘はものに銘する心なり。格は前に同じ。本意の違ひのみ。賛はほむるの心なり。則ち山吹に句をする時は、山吹をほめて賛するなり。山吹を褒美の義理なり。 訳文：漢文の詞書には書き方があるようである。記という文章の形式は、対象を記すという意味である。書き方は序・跋と同じである。内容の違いだけである。銘という文章の形式は、対象の名にかかわる内容のものである。書き方は、これも序・跋と同じである。内容の違いということである。賛という文章の形式は、褒めることを内容とするものである。すなわち、山吹の句を作るときには、山吹を褒めて賛を書くのである。山吹賛美という内容になる。
239	田舎老人多田爺、山東京伝、梅暮里谷峨(うめぼりこくが)ほか「洒落本」 （傾城貢二筋道 ○夏の床 P.153）	江戸時代中期～後期	フィクション(三人称)	いつそぬしの声はいきだよ	①	須磨衣→五郎 対等 女→男	③	なし	またにくらしいあの蚊の声と、こよりをとつて蚊帳の蚊を、焼つやかれつ、うわ気同し、とりどころなき夏の床チャン、ト引仕廻〔須磨衣]いつそぬしの声はいきだよ〔五郎]声斗ほめつと、きみやいもほめてくりやア。広小路の十哲のうちでは、がんへんといふものだぜ〔須磨)なんのこつたへ 訳文：なし
240	近路行者(都賀庭鐘)「英草紙」 （古今奇談英草紙第三巻（五）紀任重陰司に至り滞獄を断くる話 P.123）	江戸時代中期(1749年成立)	小説(三人称)	百年來の滞獄すまぬくじ、彼の者六時の間に決断し、天地私なく果報爽はざらしむ。誠に天下の奇才也。任重天を経にし地を緯にするの才、今生屈抑おしかがまるして、時に遇はず。来世彼を新田義貞の弟となし、脇屋義介と名乗り、兄の職を襲ひて、南朝礎の臣となり、志は得るべけれども、善事の報にあらず。才学を以て転生うまれかはるする者なれば、始終思ふ儘なる世は経さすべからず	②	玉帝→任重殿 上下 男→男	③	なし	任重殿を退き、冠服を卸し、旧の浪人姿となり、決断する所の案卷簿籍すみくちのまきひかへちやう、閻君に進看おめにかけるす。閻羅王嘆服して、此の由を上界に呈奏す。玉帝深く賛ほめるしての給ふ。「百年來の滞獄すまぬくじ、彼の者六時の間に決断し、天地私なく果報爽はざらしむ。誠に天下の奇才也。任重天を経にし地を緯にするの才、今生屈抑おしかがまるして、時に遇はず。来世彼を新田義貞の弟となし、脇屋義介と名乗り、兄の職を襲ひて、南朝礎の臣となり、志は得るべけれども、善事の報にあらず。才学を以て転生うまれかはるする者なれば、始終思ふ儘なる世は経さすべからず」と、玉帝の御旨おほせのむね下る。閻羅王開読ひらきよみし罷り、筵席しゆえんを備へて任重が行かどてを送る。 訳文：任重は閻魔庁から退出、閻魔の装束を脱いで、元の浪人姿に返り、判決文や帳簿を閻魔にお目にかけた。王は感服して、この次第を玉帝に奏上した。玉帝もひどくほめて言う、「百年間停滞の訴訟を、あの男は十二時間で判決し、しかも天地に私なきを示し、因果の理に少しも違わないようにした。誠に天下の奇才である。天を縦糸、地を横糸にするような偉大な才を持ちながら、今の世では、志を伸ばせず、時運に恵まれない。次の世では彼を新田義貞の弟にして、脇屋義介と名のり、兄の職を継いで、南朝の土台をなす臣となって、希望はかなえられるが、労多く、善い因の報いとはいえない。才学のゆえの生れ変りなので、生涯、思いのままの生活を経験さすべきでない」と、玉帝から賞讃のお言葉をくださった。閻魔は、そのお言葉を任重に読み聞かせてから、宴席の準備をして、送別の会を催した。
241	近路行者(都賀庭鐘)「英草紙」 （古今奇談英草紙第四巻（七）楠彈正左衛門不戦して敵を制する話 P.160）	江戸時代中期(1749年成立)	小説(三人称)	貴人なるかな	①	尊海→義氏 下上 男→男	②	なし	尊海先づ此の黄金をとり収めて、やうやう義氏の掌文てのすぢを相、眼耳鼻口こまかに相しをはり、称賛ほめことばして、「貴人なるかな」といふ。義氏の支干えとを問ひ、卦を設け、一算ひとうらなひするに至つて、大に驚き、面色をちがへ、ことばもなく座を立てて去らんとす。 訳文：尊海はおもむろにこの黄金を受け取って懐中し、ようやく義氏の手の筋を見、目・耳・鼻・口の相も詳細に見終って、さて褒めて言うには、「まことに貴人の相でございます」。次に義氏の出生の干支を聞き、やっと算木筮竹、易の卦を作つて占ひしたところで、大いに驚いて、顔色を変えて、言うべき言葉もなく、立ち去らうとする。

242	上田秋成「雨月物語」 (雨月物語 巻之三 仏法僧 P.337)	江戸時代中期(1768年成立)	フィクション(三人称)	玉水・玉の井・玉河	①	言葉→もの(清らか) 対等 もの→もの	⑥	なし	もとより此の玉河てふ川は国々にありて、いつれをよめる歌も其の流れのきよきを誉しなるを思へば、この玉川も毒ある流れにはあらで、歌の意も、かばかり名に負河の此の山にあるを、ここに詣づる人は忘るわするも、流れの清きに愛て手に抱びつらんとよませ給ふにやあらんを、後の人の毒ありといふ狂言より、此の端詞はつくりなせしものかとも思はるなり。又深く疑ふときには、此の歌の調、今の京の初の口風にもあらず。おほよそ此の国の古語に、玉穂・玉簾・珠衣の類は、形をほめ清きを賞る語なるから、清水をも玉水・玉の井・玉河ともほむるなり。毒ある流れをなど玉てふ語は冠らしめん。 訳文: もともとこの玉川という川は、諸方の国々にあって、いずれの玉川を詠んだ歌も、その流れの清らかさを讃えていることを思えば、この地の玉川も毒のある流れではなく、歌の心意も、これほど名高い川のこの山にあるのを、参詣の人々はまるで忘れてしまつて、ただ流れの清らかさにうたれて、思わず手にすくつて飲むであらうとお詠みになったものを、後の世の人の『毒がある』という語った説によつて、この詞書がこしらへられたと思われます。更にまた深く疑いますと、この歌の調べは弘法大師の在世された平安朝初期の歌風ではありません。おおよそわが国の古語で玉簾・玉簾・珠衣の類は、すべて形の美しさ清らかさを賞める言葉ですから、清らかな水をいうのに、玉水・玉の井・玉川と美称するのであります。毒のある流れにどうして『玉』という語を冠せましょう。
243	井原西鶴「好色一代女(井原西鶴集)」 (好色一代女(扉) 絵入 好色一代女 一(扉) 巻一 あらまし 淫婦の美形 P.422)	江戸時代中期	小説(三人称)	きのふの和布苅の脇は高安はだし	①	客→脇 上下 男→男	⑥	なし	うたうて引くを、それをも心をとめて聞かず、小歌の半ばに末社に咄し掛け、「きのふの和布苅の脇は高安はだし」とほめ、「この中の古歌を大納言殿におたづね申したが、拙者きいた通り、在原の元方に極まりた」など、いたり物語ふたつみつ、かしらにそそらずして、万事おとしつけて居たる客には、太夫気をのまれて、我と身にたしなみ心の出来て、その男する程の事かしくく見えておそろしく、位とる事は脇になりて、機嫌をとる事になりぬ。 訳文: 歌って弾くのを、氣を入れて聞こうとせず、小唄の途中で太鼓持に話をしかけ、「昨日の能の『和布苅』の脇役は脇師の高安はだしだ」とほめ、「この間の古歌を大納言殿にお尋ね申したが、やはりわしの聞いたとおり、在原元方のだった」などと気のきいた風流な話を二つ三つして、初めから落ち着きはらつて、万事どつしり構えているお客には、太夫も圧倒されて、我と我が身を憤む心が生れ、その客のすることは何でも賢く見えて、恐ろしくなり、太夫らしく構えることは二の次になって、男の機嫌をとるようになるものです。
244	井原西鶴「男色大鑑(井原西鶴集)」 (本朝若風俗 男色大鑑 絵入 六(扉) 巻六 あらまし P.500)	江戸時代中期	小説(三人称)	さても申したり	①	見物人→松本文左衛門 不問 不問→男	③	なし	「さても申したり」と讃めける詞の下より、色香のふかき桜は顔にあらはるる若女方、幕切つて見えそむるより、「いよう / \、千さま、千之助様、万人の中にも又とござるまい、今の世の人殺しめ、生きながら墓へやらるるは」と、舞台裏までひびきわたり、諸人の声やう / \ 囃方片扇をあげて静めければ、仕出し舞台なかば近く、鳥足の高木履、その身は紙子にさま / \ の切り接ぎ憎からぬ模様、 訳文: 「さてさて、見事な口上だ」と、見物人がほめていると、深い色香の顔にあらわれた若女方が、幕を押し分けて舞台に姿を見せた。「いよう、いよう、千様、千之助様、万人の中にも二人とござるまい、今の世の人殺しめ、生きたままで墓場へやられるわい」というほめ声が、舞台裏まで響き渡った。その見物の騒ぎを、囃方が半開きの扇を上げてしずめると、新趣向の付け舞台の真中近くに、千之助は鳥足の高下駄をはき、いろいろな紙を切り継ぎにしたおもしろい模様の紙子を着て進み出た。
245	井原西鶴「武道伝来記(井原西鶴集)」 (諸国敵討 武道伝来記 七 絵入(扉) 巻七 あらまし 第三 新田原藤太 P.265)	江戸時代中期	小説(三人称)	さても早業、古への田原藤太が、勢田の橋は磯なり。冲浪殿の今宵の御手柄、眼前に、これは / \	②	久四郎→大助 対等 男→男	③	A	折節、天井板に音ありて、黒き物落ちかかる所を、大助、脇差を抜き打ちに、何かはしらず少し手ごたへせしに、灯寄せてみれば、その長一尺四、五寸ばかりの百足を、二つに切り放ち、いまだ動くを取りあつて、塵塚に捨てさせける。久四久四郎、横手を打つて、「さても早業、古への田原藤太が、勢田の橋は磯なり。冲浪殿の今宵の御手柄、眼前に、これは / \」とほめければ、大助も興に乗り、「天晴れこの男、古今居合の名人なり。はいい所を御目にかけた」と、ざつと笑うてすましける。 訳文: 折から天井板に音がして、何か黒い物が落ちかかってくるのを、大助は脇差で抜き打ちに斬り払った。何かえたいは知れないが、少し手ごたえがあったので、灯火を引き寄せて見ると、その丈一尺四、五寸ほどの百足が二つに斬られていた。まだ動いているのを取り集めて、塵塚に捨てさせた。久四郎は横手を打って、「さても早業、古の田原藤太の瀬田の橋での働きも、これに比べては物の数ではない。冲浪殿の今宵のお手柄、目のあたりに拝見した、これはこれは」と言つて褒めた。大助も興に乗りて、「あっぱれ、この男、古今の居合の名人だ。素早いところをお目にかけた」と、あっさり笑つて済ました。
246	近松門左衛門「薩摩歌(近松門左衛門集)」 (源五兵衛 おまん 薩摩歌(扉) 梗概 上之巻 小まんの部屋の間 [四]津摩蔵の物語 P.281)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	筑紫一番、和泉式部か、小式部の化身、	②	不問→おまん 不問 不問→女	⑥	なし	また寺の旦那に、浜の町といふ所、芭蕉布屋のおまんと申すは、筑紫一番、和泉式部か、小式部の化身、と誉めた小娘。 訳文: また寺の檀家で、浜の町という所の芭蕉布屋のおまんというのは九州一番、和泉式部か小式部の化身とほめられた美少女。
247	近松門左衛門「用明天王職人鑑(近松門左衛門集)」 (第五 大江山麓土城の間 [四五]王子の最期 P.155)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	いつに変わぬ久馬殿、お手柄候	①	お侍衆→久馬平 下上 男→男	③	B	王子の最期 詞久馬平声を掛け、サアこれまではしふせたり、これからはお侍衆に振る舞ひ申す。一箸づゝあそばせと、どつと笑へば、勝舟、諸岩、藤太入道、百島大夫、然らばお辞儀申さぬと、地思ひ / \ に切り伏せ / \、づだ / \ に色切つて捨て、いつに変わぬ久馬殿、お手柄候とほめければ、あのおつしやますことわいのと、会釈してこそ入りにけれ。 訳文: 久馬平が声をかけ、「サアここまではやつけた。この後はお侍たちにお任せします。一箸ずつおつきなされ」と、どつと笑うと、勝舟、諸岩、藤太入道、百島大夫らは、「それならご遠慮なしに」と、思い思いに切り伏せ切り掛け、ずたずたに切り捨て、「いつも変りのない久馬平殿のお手柄ですぞ」とほめると、「あんなことおつしやますことよ」と、お辞儀して入っていった。
248	二代目竹田出雲、三好松洛、並木千柳(宗輔) 「仮名手本忠臣蔵(浄瑠璃集)」 (第三 恋歌の意趣(館騒動) [二四]お軽、勘平に意見 P.47)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	侍ぢや	③	不問→勘平 不問 不問→男	⑥	なし	もつともぢや道理ぢやが、そのうろたへ武士には誰がした。みんなわしが心から、死ぬる道なら、お前より私が先へ死なねばならぬ。今お前が死んだらば、誰が侍ぢやと褒めます。こゝをとつくりと聞き分けて、私が親里へひとまづ来て下さんせ。父様も母様も、在所でこそあれ頼もしい人、もうかうなつた地ハル因果ぢやと思うて、ウ女房の言ふことも、ウ聞いて下され、勘平殿、ウとスエわつとばかりに、中泣きしづむ。詞さうぢや、もつとも、そちは新参なれば、委細のことはえ知るまい、お家の執権大星由良之助殿、いまだ本国より帰られず、帰国を待つてお詫びせん、サア地色ハル一時なりとも急がんと、フシ身ごしらへするところへ。 訳文: もつともじゃ、道理じゃが、そのうろたえた武士には誰がした。みんなわしの心からしたこと、死ぬのが道理であるなら、お前より私が先に死なねばならぬ。今お前が死んだらば、誰が侍じゃと言つて褒めますか。ここをよく分別して、わたしの親里へひとまず来てくださいませ。父様も母様も、田舎者ではあるけれど頼もしい人。もうこうなった運命じゃと思うて、女房の言うことも聞いてください、勘平殿」と、わつとばかりに泣き沈む。勘平「そうじゃ、もつとも。そちは新参者なので、細々したことはようわかるまい。お家の家老、大星由良之助殿はまだ本国から帰られていない。帰国を待つてお詫びしよう。サア一刻でも早く急ごう」と、身支度するところへ。
249	紀上太郎、容楊葉、焉烏旭、烏亭斎馬、三津環 「基太平記白石断(浄瑠璃集)」 (第六 江戸浅草茶屋の間 [三一]親九郎、五町等に騙される P.552)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	巧いものぢや / \、	①	五町→金貨しの役 対等 男→男	③	なし	地ウ仕済したりと立ち出る五町、ハル付き添ふ金貨、以前の飛脚、詞五町様首尾は、シイ、胸欲な親九郎め、一ぱい喰つてよい気味 / \、ナント五町さん、飛脚の仕打ち、絞め殺さるゝ身振、何とあちをやつたでござんしょうが、ヤ、これからは元の飴売万八と、地ハル傍へのフシ荷箱取り出せば、詞オ、おれが金貨の役もちつと替めて下され、巧いものぢや / \、イヤ今の親九郎め、達うたなら喰しかろ。こちらは顔が合されぬ、どうぞ思案はあるまいかと、地ウいふ中來かゝる豆蔵のどぢやう。 訳文: うまくいったと、出てくる五町、付き添うのは金貨しと以前の飛脚。「五町様、首尾は」シイ、欲深な親九郎め、一杯食らっている気味、いい気味、「ナント、五町さん、飛脚のしぐさ、絞め殺される身振、たいそう上手に演じたでしょうが、ヤ、これからは元の飴売り万八」と、傍の荷箱を取り出すと、「オオ、俺の金貨しの役も少しは替めてください」「上手なものじゃ、上手なものじゃ。イヤ、今の親九郎めに達うたならば、うるさいことであろう」「我々は顔を合せることができない。うまい工夫ができないか」と言っている最中に來かかゝる豆蔵のどじようを見るやいなや。
250	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (川柳(扉) 凡例 元禄期 P.283)	江戸時代中期	韻文(三人称)	通男じや	①	母親→転ぶ子 上下 女→男	④	なし	転ぶ子に 道理を付て扣く石(前句)通男じやとほめに誉 訳文: 日常よく見かける母親などの所作。「坊やはつよい子だ」と褒め上げながら「この石がわるいのね。もうしないように痛い痛いしてやりましょう」など、泣く子の氣をそらすのである。
251	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (川柳(扉) 凡例 元禄期 P.289)	江戸時代中期	韻文(三人称)	花	③	男→女 対等 男→女	②	なし	玄宗も こそぐる貴妃が空寝入(前句)桜と詠又花と誉 訳文: 美女は花にたとえられるが、ここは貴妃様の名による付け。『長恨歌』でその死をいんだ玄宗と貴妃の間も、巷間の男女と同様に、狸寝をしてしらす女をくすぐり起すようなふざけ合いもあったであろう。

252	四方赤良(大田南畝)、唐衣橘州、朱楽菅江ほか 「狂歌」 (狂歌(扉) 凡例 鹿都部真顔 P.562)	江戸時代中期	韻文(三人称)	千両箱	①	不問→月・中村 不問 不問→男	③/⑥	なし	停午月誰人か千両箱とほめざらん秋は中村なかぞらの月 訳文:「千両箱」に「千両役者」の意を掛け、「秋は(最)中」に当代の人気役者「中村(仲蔵)」を、「仲蔵」に「中空」を掛ける。誰もが中村仲蔵を千両役者と褒め称えるように、昼日中、中天高くまん丸な形を宿す秋の最中の月を、千両の価値があるといつて誉めない者はいない、との意。
253	井原西鶴「好色一代男(井原西鶴集)」 (好色一代男 巻五 当流の男を見しらぬ P.157)	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	なし	皆→太夫の捌き 不問 不問→男	⑤	なし	『よくも見るやつかな。それに似せて作らせ侍る。この女郎をさる大名のしのびて、三人同じ立出にて、市左衛門座敷に『この内に思召しの方へ御盃を』と申せしに、すこしもせかずして、『神ならぬ身なれば、ゆるし給へ』と勝手へ立ちて、禿に私語き、手鍋の觥を取放させ、庭山にけはしく、『申し/\\』と声を立つる。三人一度に『何か』と障子をあけて立出る所を、様子見すまして、本大田さまへ盃をまあらせける。この首尾いづれもほめて、偏かに尋ねければ、『三人ながら桑染の木綿足袋はかれしに、独りはな緒ずれの跡なき御方あり。地地を踏み給はぬ御方さま、いかさまにも、と思ひざしせし』となり。 訳文:「よく氣のつくやつだ。あれに似せて作らせたのだ。この太夫にこんな話がある」と言つて世之介は、この太夫の逸話を語つた。「あるとき、この太夫のもとに、ある大名がお忍びで会いに来たことがあつた。二人の供にも同じ装をさせ、揚屋の市左衛門方の座敷で、『このうちで思召しの方へお盃を』と言つたが、太夫は少しも騒がず『神ならぬ身ですからお許しくださいませ』と勝手に立てて禿に耳うちし、手鍋の觥を放させ、築山のほうであわただしく、『もうし、もうし』と声をたてた。三人一度に、『何事か』と障子を開けて立ち出るところをとくと見澄まし、改めて本物の大尽様へ盃をさした。その鮮やかな捌きをいづれもほめて、あとでそつと子細をきくと、『お三人とも桑染めの木綿足袋を履いておられましたが、お一人だけ鼻緒ずれのあとのないお方がありました。いつも乗物に乗っていらっしゃる御方様、この御方こそと思ひざしをしたのでございます』といふことであつた」。
254	井原西鶴「好色一代女(井原西鶴集)」 (好色一代女 巻一 目録 舞ぎよくの遊興 P.405)	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	なし	人皆→私 不問 不問→女	③	なし	我としの若かりし時、これに身をなすにはあらずして、この子どもの風俗を好きて、宇治の里より通ひ、世のはやり事をならひしに、すぐれて踊る事を得たれば、人皆ほめやすにしがひ、つりのりておもしろさ、後無用との異見を聞かず、この道のかぶき者となり、たま/\\はさし出たる座敷に面影を見せける。 訳文: 私は若かつた時分、これで身を立てるのではなかつたのですが、舞子たちの風俗が好きで、宇治の里から都へ通つて、当世流行の莖事を習いましたが、人より上手に踊ることができたので、皆がほめたてるにつれ、つい深入りをしておもしろくなり、後々何の役にも立たないからという意見もきかず、とうとうこの専門の伊達者になり、時々は晴れがましい座敷にも姿を見せるようになりました。
255	井原西鶴「好色一代女(井原西鶴集)」 (好色一代女 巻一 淫婦の美形 P.416)	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	なし	遊女→町の太鼓持ちの紋所 下上 女→男(もの)	①	なし	情目づかひとて、近付きにもあらぬ人の立立にも見かへりて、すいた男のやうにおもはせ、揚屋の夕暮、はしあして、しる人あらば、それに遠くより目をやりて、思案なく腰掛けて、人さへ見ずは町の太鼓にも手に手をさし、その折を得て紋所をほめ、又は髪ゆつたるさま、あるいははやり扇、何にてもしをしき所に心を付け、「命をとる男め、誰にとうてこのあたまつき」と、びつしやりばんと、たたき立ちにして行ぐ事、いかなる帥もいやといはぬこしなり。いつぞの首尾にくどきかからば、我が物とおもひつより物もらふ欲を捨て、大じんの手前よしなに申しなし、世上のとおり沙汰の時も身に替へてひくぞかし。 訳文: 情け目づかいといつて、知り合いでもない人が辻で見物しているのにも振り返つて、好いた男のように思わせ、揚屋の夕暮れに見世口近くにいるとき、知った人が来ると、それに遠くから目をやつて、うっとり腰をかけ、人さえ見ていなければ、町方の太鼓持とも手を握りあい、よい機会をみて紋所をほめ、また髪形のや、あるいは流行の扇など、何でもよさそうなところに氣をつけて、「命取りの男め、誰に習うて、こんな粋な髪を結うてじや」と、びつしやりばんと背中をたたいてきつと立つていくなど、どんな粋な男でもいやとは言わぬ手筈です。何かの機会に口説きかかたら、自分のものだと思ひ込めば、物をもらう欲を捨てて、お大尽の脍をうまく取りなしてくれ、世間に悪い評判がつたときでも、自分を犠牲にしても味方してれます。
256	井原西鶴「西鶴諸国ばなし(井原西鶴集)」 (天下馬 巻五 目録 闇がりの手形 P.139)	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	なし	人々→女の知恵 不問 不問→女	③	なし	女罷り出、「この内に二三人も、背中に鍋炭の手形あるべし」と、肩を脱がして、せんさくするにあらはれて、この中間十八人、成敗あそばしける。さてもせはしき中に、女の知恵をほめける。これまでの因果と、夫婦指違へける。 訳文: 女が罷り出て、「この内に二、三人ほど背中に鍋炭のついた掌の形があるはずだ」と述べた。男たちの肩を脱がせて取調べをすると、女のように、犯人が判明したので、奉行はこの仲間十八人を死刑に処された。さてもさて、火急の時にこれだけの機転をきかせたと、女の知恵を人々は褒めた。このような目にあつたのも、これまでの悪因悪果だと、采女夫婦は刺し違えて二人共に死んだ。
257	井原西鶴「男色大鑑(井原西鶴集)」 (男色大鑑 本朝若風俗 第五巻 目録 泪の種は紙見世 P.459)	江戸時代中期	小説(三人称)	さりとはは落ちつきたる仕方なり	①	諸人→優男 不問 不問→男	⑤	なし	桜は初太夫へかへして、かの男とらへ、「申し分あれども、酔ひたる風情も見えつれば、かさねての日酒機嫌になき時、我を尋ねてこの意趣を晴らせよ」と、懷より石筆取り出し、所書たしかに、いろはの十郎右衛門と、名までしるしてわたしぬ。「さりとはは落ちつきたる仕方なり」と、見とめし諸人、これをほめざるはなし。かりそめの事ながら、初太夫身にしてはうれしさ忘れず、その夜より客の勤めもすてて、十郎右衛門宿は東の洞院までしのびて、「もしも最前の男達ども切り込まば、我さきに立つて身を捨てて、人に難儀は掛けじ」と思ひ定めし心ざし、自然と十郎右衛門に通じて、なほ見すてざり。かの馬鹿者も、その後はとがむる事なし。 訳文: 優男は桜を初太夫に返し、あばれ男をつかまえて、「言いたい事があるが、酔っているようだから、別な日の素面の時にわしを訪ねて来て、この恨みを晴らすがよい」と言つて、懷から石筆を取り出し、住所をはっきりと書き、いろはの十郎右衛門と名まで認めて渡した。「それにしても落ち着いたさばきだ」と、それを見ていた人々でほめぬ者はなかつた。行きずりの出来事であつたが、初太夫としてはこのうれしさが忘れられず、その夜から客勤めを捨て、東洞院の十郎右衛門の家をこっそりと訪れた。「もしも昼間の男伊達達が斬り込んで来たら、自分が先頭に立つて身を捨て、十郎右衛門に難儀はかけまい」と覚悟したその氣持が自然と通じて、十郎右衛門はいよいよ初太夫を見捨てられなくなった。例のばか者は、その後文句を言つてこなかつた。
258	井原西鶴「男色大鑑(井原西鶴集)」 (男色大鑑 本朝若風俗 第五巻 目録 思ひの焼付は火打石売り P.468)	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	なし	評判記→千之丞 不問 もの→男	③	なし	思ひの焼付は火打石売り 七玉川のほかに、小歌の名所に千之丞がむかし、風ふけば興津しら声にてうたひ出して、出して、家体の御簾を明けて、の面影、まことの女井筒も、何としてこれには立ちならぶべし。十四の春よりも都の舞台を踏みそめ、四十二の大扨まで振袖をきて、一日も見物にあかれぬ事、末の世の若女形これにあやかるべし。河内がよひの狂言ばかり、三年が間江戸の人をなびかせ、なほほめ草、野郎虫にもこの身の事あだには書かず。 訳文: 思ひの焼付は火打石売り 世に知られた七玉川のほかに、小唄の名所として玉川千之丞がある。昔その千之丞が、河内通いの狂言で、「風ふけばおきつ白波」と、甲ばつた声でうたいながら、舞台の家の御簾をあげて出て来る姿の美しさといつたら、本物の女井筒も、これにはとても及びそうにない。千之丞は十四歳の春から京都の舞台に立ち、男の大扨の四十二歳まで振袖を着て勤め、一日も見物に飽かれたことがなかつた。末の世の若女方は、これにあやかるがよい。河内通いの狂言だけを三年も続けて上演し、江戸の観客をうならせたが、評判記のほめ草や野郎虫にも、口をきわめてほめている。
259	井原西鶴「男色大鑑(井原西鶴集)」 (男色大鑑 本朝若風俗 第八巻 目録 小山の関守 P.584)	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	なし	人→山本左源太 不問 不問→男	⑤	なし	唐国にも身の血をしぼりて酒となし、世をわたれる伝へもある酒屋に、山本左源太、わけのよきあまりに心中あらはし指を切りしを、よろしく取沙汰して名を今に残しぬ。諸事を聞くに、右近源左衛門にありし時より情ふかく、世にかくれし人のむかしを尋ね、なるまじき事ども見し人涙をこぼし、聞くにほめぬはなし。勤めの若衆もかくまたあればたのもし、これさへ世間の噂にやん事なし。 訳文: 唐土にも体の血をしぼつて酒を作り、世を渡つたという言い伝えがある。酒といえはある酒屋の客と深間になつた山本左源太が、真心を示すために指を切つたのを、世間ではよろしく評判して、今でもその名が残っている。いろいろ聞いてみると、この左源太は、右近源左衛門の手元にいた時から情けが深く、おちふれて姿を隠した昔の客を訪ね、まねのできない事をしたといふことだが、それを見た人は涙をこぼし、聞いてほめないものとはなかつた。勤めの若衆も、こんなふうだと頼もしい。これさえ世間ではとかくの噂が絶えないのである。

260	井原西鶴「日本永代蔵(井原西鶴集)」 (日本永代蔵 巻四 目録 仕合せの種を蒔銭 P.125)	江戸時代中期	小説(三人称)	一たびは傾城をたらずといへど、これらは悪からぬ仕かた、その目利ぬからぬ男	②	世間皆一男 不問一男	④	なし	取りあへず暇乞ひなしに上方にのぼり、手筋を頼み大名衆へあげて、大分の金子申し請けて、又むかしにかはらぬ大商人となりて、眷属あまた召使ひ、その後長崎に行きて花鳥を請け出し、願ひの男豊前の浦里にあるなれば、その元へ金銀・諸道具、何に不足もなく格へ縁に付くれば、花鳥限りもなく悦び、「この御恩は忘れじ」と申しぬ。「一たびは傾城をたらずといへど、これらは悪からぬ仕かた、その目利ぬからぬ男」と、世間皆これをほめける。 訳文：とるものもとりあえず、暇乞いせず上方に上り、縁故を求めて大名方に差し上げ、だいぶんの金をいただいて、また昔に変わぬ大商人となり、奉公人を大勢使う身になった。その後、長崎に行つて花鳥を身請けし、そのころ花鳥の思う男が豊前の漁村にいたので、そこへ金銀・諸道具何に不足もなくこしらえて縁付けてやると、花鳥は限りもなく喜び、「このご恩は忘れません」と言った。「一度は遊女をだましたとはいへ、これは憎めないやり方だ。目利きにぬかりのない男だ」と、世間では皆、これをほめたものだった。
261	井原西鶴「日本永代蔵(井原西鶴集)」 (日本永代蔵 巻四 目録 茶の十徳も一度に皆 P.131)	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	なし	世間一男 不問一男	③	なし	町はづれに、小橋の利助とて、妻子も持たず口ひとつをその日過にして才覚男、荷ひ茶屋をしをらしき格へ、その身は玉だすきをあげて、くくり袴利根に烏帽子をかしげに被き、人よりはやく市町に出て、「えびすの朝茶」といへば、商人の移り気、咽のかわかぬ人までもこの茶を呑みて、大かた十二文づつなげ入れられ、日ごとの仕合せ、程なく元手出来して、葉茶見世を手広く、その後はあまたの手代をかかへ大問屋となれり。これまでは我がはたらきにて分限になり、人のほめ慕ひき、歴々の乞聲にも願ひしに、「一万両よりうちにて女房をよばず。四十まではおそからず」と、自分の物入りを算用して、銀の溜るを慰みに、淋しく年月を送っていた。 訳文：町はずれに、小橋の利助といって、妻子ももたず、わが身一人をその日暮しにしている、才覚のある男がいた。荷い茶屋をございいにこしらえ、その身はたすきをかけて、括り袴もかいがいしく、烏帽子をおかしげにかがって、人より早「朝市」の立つた町に出て、「えびすの朝茶」と触れ歩く。商人は移り気なもので、縁起をかついで、喉のかわかぬ人までもこの茶を飲み、たいい十二文ずつ投げ入れたから、日ごとに儲かり、ほどなく元手をこしらえて、葉茶店を手広く始め、その後は大勢の手代を抱えて大問屋となった。これまでは、自分の働きで分限になったので、世間の褒め者になり、一流の町家から婿にも望まれたが、「一万両たまらぬうちは女房をもたない。四十までは運くない」といって、結婚した時さあたりかかる、むだな費用を計算し、銀がたまのだけを慰みに、淋しく年月を送っていた。
262	井原西鶴「日本永代蔵(井原西鶴集)」 (日本永代蔵 巻四 目録 伊勢海老の高買 P.140)	江戸時代中期	小説(三人称)	さりとはやさしき心ざし	①	宗祇→生薬屋の主人 上下男→男	④	なし	むかし、連歌師の宗祇法師のこの所にまし／＼、歌道のはやりし時、貧しき木薬屋に好ける人ありて、各々を招き、二階座敷にて興行せられしに、そのあるじの句前の時、胡椒を買ひにくる人あり。座中へ断りを申して、一両懸けて三文請け取り、心静かに一句を思案して付けけるを、『さりとはやさしき心ざし』と、宗祇殊の外にほめ給ふとなり。人はみな、このごとの勤め誠ぞかし。 訳文：昔、連歌師の宗祇法師が堺においてになって、歌道がはやっていた時、貧しい生薬屋ながらも連歌好きの人がいて、人々を招待して、二階の座敷で連歌の会を催していたが、その主人が付くする番の時に、胡椒を買いに来た人があった。主人は、一座の人に断りを言つて立ち、四角の胡椒を量つて三文受け取り、その後、心静かに一句を案じて付けたところ、『さてて風雅なお心がけだ』と、宗祇がことのほか褒めたという。人は皆、このように家業を勤めるのが本当だ。
263	井原西鶴「世間胸算用(井原西鶴集)」 (胸算用 巻二 目録 一 銀一匁の請中 P.374)	江戸時代中期	小説(三人称)	かしこさなる眼ざし、こなたの御子息にしては、お心に掛けさしやるな、鶯が孔雀を産んだとはこの子の事、玉のやうなる美人。ちかごろ押付けたる所望なれども、わたくしらひまして聲にいたします。酒ひとつ過こしましていふでは御座らぬ。われらが子ながら、これ娘も十人並よ。そのうへ、親仁のひとり子なれば、五十貫目付けてやるとはつね／＼の覚悟。又われらがわたくしがね三百五十両、長堀の角屋敷、捨てうりにしても二十五貫目がもの、仕てから袖も通さぬ衣装六十五、ひとりの娘より外にやるものがござらぬ。これがこちの賀殿	②	親仁→先方の二番目の息子 上下男→男	④	なし	浜にかけたる機敷へ房どもをおこして見せたしと、二十五日にお内儀をやりて、さきの噂としみ／＼と内証をかたらせ、一日あそぶうちに、男子どもが馳走に出るはしれた事ぢや。時に二番目のむすこが生れつきをほめ出し、『かしこさなる眼ざし、こなたの御子息にしては、お心に掛けさしやるな、鶯が孔雀を産んだとはこの子の事、玉のやうなる美人。ちかごろ押付けたる所望なれども、わたくしらひまして聲にいたします。酒ひとつ過こしましていふでは御座らぬ。われらが子ながら、これ娘も十人並よ。そのうへ、親仁のひとり子なれば、五十貫目付けてやるとはつね／＼の覚悟。又われらがわたくしがね三百五十両、長堀の角屋敷、捨てうりにしても二十五貫目がもの、仕てから袖も通さぬ衣装六十五、ひとりの娘より外にやるものがござらぬ。これがこちの賀殿』と、思ひ入りたる顔つきして、これを言葉のはじめにして、その後、折ふし、すくづつ物をやれば返しを請け、これ以て損のいかぬ事。 訳文：「それなら、今までより懇ろにもちかけ、天満の船祭が近いのがさいわい、河岸にかけた機敷へ、女房を行かせて見物させたいと、二十五日に、あなたのお内儀を先方へ行かせ、向こひの女房としみじみと暮し向きのことを話させ、一日遊ぶうちに、息子たちがまてなしに出るのはわかつています。その時に、先方の二番目の息子の生れつきを褒めはじめ、『賢そうな目元、あなたのご子息にては、失礼ですが、鶯が孔雀を産んだとはこのこと、玉のような美男です。たいへんあつかましい所望ですが、私がもらい受けまして、婿にいたします。酒一つ飲んで言ううではございませぬ。わが子ながら、私の娘も十人並の器量ですよ。そのうえ親仁のひとり娘ですから、五十貫目の持参金を持たせてやるとは、常々、覚悟しています。また、私のへそくり金の三百五十両と私名義の長堀の角屋敷、これは捨て売りにしても二十五貫目の値打であります。仕立てから袖も通さない衣装六十五枚、ひとりの娘以外にやる者はございませぬ。この息子殿が、私の婿殿です』と、思い込んだ顔つきをして、これを言葉の初めにして、その後、折々は少しずつ贈物をし、お返しを受ける。これは損のつかないこと。
264	井原西鶴「西鶴置土産(井原西鶴集)」 (西鶴置土産 巻二 大目録 三 うきは餅屋つらきは碓ふみ P.531)	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	なし	庄屋→女郎 上下男→女	②	なし	この男魂なく、力にまかせあたりをつきのけ、この女郎ををどらせけるが、これぞ恋のはじめとなつて、石だたみのゆかたわすれず、わが前まはるたび／＼ほめて、踊り果つれば妾はさきへ帰し、太鼓の新九郎をたのみ、俄になつみ出し、これを女郎の買ひはしめ、「このいきち、とく知るは無念」と、妾はそのまま隙出して、借屋は三十日ぎりのおもひ出、釜の下の塵も灰もないやうもひ出、釜の下の塵も灰もないやうに仕違つて、毎日こさわぎで、いつの頃よりか太夫の越前に大飛びして、霧山にあへる木半にも一座して遊興、これでこそと、たがひにいひ合せて、二とせあまらずにつきりと、ないが定なり。 訳文：庄屋は夢中になり、力まかせにあたりの人を突きかけて、この女郎を踊らせてやったが、これが恋の始めとなって、その女郎の市松模様の踊り浴衣を忘れず、自分の前に踊つて来るたびにほめるのであつた。踊りが終ると妾は先に帰し、太鼓持の新九郎に取持ちを頼み、にわかにその女郎に打ち込んで、初めて女郎買いの味を知つた。「この張合いのある女郎買いのおもしろさを、早く知らなかつたのは残念だ」と、妾はさっそく隙を出し、借家はその月の晦日切りであけることにし、釜の下、の塵も灰もないやうに、すつぱりと片づけてしまつた。それから毎日新町で遊び始めたが、いつの頃からかこの庄屋は、一足飛びに太夫の越前と馴れあひになり、八木屋の霧山に逢つていた大尽の木半とも同座して遊ぶようになった。これでこそと互いに氣を揃えて、二年余りで二人ともさつぱりとつかひ果したが、そうなるのが当り前である。
265	井原西鶴「武道伝来記(井原西鶴集)」 (武道伝来記 巻一 目録 第一 心底を弾く琵琶の海 P.28)	江戸時代中期	小説(三人称)	若道にも格別の違ひあり	③	為右衛門→森坂采女 対等男→男	④	なし	ある時、森坂采女が弟、求馬といふ人の一座にて、為右衛門左京事を又噂して、「若道にも格別の違ひあり」と、その座なるに、采女事を言葉ある程尽くしてほめければ、求馬よく／＼聞き届け、「これは為右衛門殿には無用の御褒美左京・采女、いづれか相おとるべき心底にあらず。然も左京は采女にまされるの所ありて、少しも人におくる若衆にあらず。その上、そなたにも傍輩の事、今になつて由なき流布せらるる事、天命知らずなり。大勢の中にして露顔の上なれば、かきわて申さぬは言はせじ。 訳文：ある時、森坂采女の弟求馬が一座した席で、為右衛門はまた左京の噂をして、「同じ若衆道といっても格段に違いがあるものだ」と、采女のことを言葉を尽して褒め上げた。求馬はそれをつづくと聞き届けて、「これは、為右衛門殿には無用の褒め方をなさる。左京も采女も負けず劣らずの心底であつた。しかも左京は采女よりも優れたところがあつて、少しも人に後れを取るような若衆ではなかつた。その上貴殿とは同僚のことであるのに、今になつてつまらない噂をなさるのは、天命を知らないものです。大勢の中ではつきり言つたことでなので、後になつて申さぬとは言わせない。
266	井原西鶴「武道伝来記(井原西鶴集)」 (武道伝来記 巻一 目録 第三 ものもうどれといふ・俄正月 P.43)	江戸時代中期	小説(三人称)	いにしへの巴・山吹もかくあらん	③	人々→十太郎の母親 不問一男	②	なし	善太夫一家、はだし馬にて駆け集まり、十太郎方へ行くに、表の門をも閉らず、母の親一人、藤綱目の鎧を着て、くれなゐの鉢巻、長刀の鞘はづして、鞍掛に腰を置きて、一命をしまぬ眼色、「いにしへの巴・山吹もかくあらん」と、見し人、いさぎよくほめて、女なればかまはず、十太郎国を立ち退く事を聞き届けて、各々屋形に帰りて、内談・評議の所へ、横目役の兩人、大平主水・駒谷源右衛門参られ、「十太郎罷り出るまでは、一門のこらす閉門、仰せ付けられし。この方にも、御詮議とげらるるまでは、寄り会ひ遠慮有るべし」と、申し渡して帰る。 訳文：善太夫一家の者どもは、裸馬で急ぎ駆け集まり、十太郎方へ押しかけて行つてみると、表の門をも閉さず、十太郎の母親が一人、伏綱目の鎧を着て、紅の鉢巻をし、長刀の鞘をはずし、鞍掛に腰をおろして待ち受けていた。その一命をも惜まぬ眼色は、「古の巴・山吹もこうであつたらうか」と、押し寄せた人々も、いさぎよく褒めて、女のことであるから相手にせず、十太郎が國を立ち退いたことを聞き届け、上、人々は屋敷へ引き上げた。そして色々と内談や評議をしているところへ、横目役の大平主水・駒谷源右衛門の二人が使者として来られ、「十太郎が自首して来るまでは、その一族は残らず閉門を仰せつけられた。また、当岩国方においても、お取調べのすむまでは、寄合ひなどは見合わせるように」と、申し渡して帰つた。

267	井原西鶴「武道伝来記(井原西鶴集)」 (武道伝来記 巻一 目録 第三 ものうどれといふ俄正月 P.48)	江戸時代中期	小説(三人称)	後代にもためし有るまじ	①	人→男の自害のさま 不問 不問→男	⑤	A	さては流れの都の女、十太郎を思ひにこがれ、十四日の月見るまでは待たずして、身事書置したため、「心ざしは万里に通へ。これより女の追腹」と、男のするなやうに、この自害のさま、ほめぬ人なく、「後代にもためし有るまじ」と、聞き伝へて、袖をひたせり。 訳文:さて一方、都の遊女花の宴は、十太郎を恋いこがれて、十四日の月を見るまでは待たずに、身の上の書置きをしたため、「わが志は万里に通え。これより女の追腹を切る」と、男のするように自害した。その有様を褒めぬ人はなく、「後世にもこんな例はあるまい」と話を聞き伝えて、人々は涙に袖をひたした。
268	井原西鶴「武道伝来記(井原西鶴集)」 (武道伝来記 巻一 目録 第四 内儀の利発は替つた姿 P.51)	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	なし	人々→数馬 不問 不問→男	なし	なし	権之進、これを聞き付け、広間に来り、数馬を呼び出だし、「只今休林討たれけるは、元それがしが身の上なり。兎角の詮議に及ばず」と、互ひに抜き合せしが、数馬を縁より下に斬り落とし、手ばしかく止めを刺し、「まつたく命惜しむにあらず。存する子細あり」と、声をかけて立ち退くを、各々ほめこそすれ、討ち留むる人なく、裏の御門より駆け抜け、屋形町の野はづれて、家来の若党一人追つ付き、先づ我が草履をぬぎて旦那にはかせ、「さて奥様は何方へ退け参らせん」と言ふ。 訳文:安川権之進は、これを聞きつけて、広間に現れ、数馬を呼び出して、「只今休林が討たれたのは、元とはいえば自分から起こったことだ。今さらあれこれ吟味にも及ぶまい」と、互いに抜き合わせ、数馬を縁から下に斬り落とし、手早く止めを刺し、「まったく命が惜しくて逃げるのではない。思うところがある」と、人々に声をかけて、その場を立ち去った。人々はそれを褒めこそすれ、留めようとする者は一人もなかった。権之進は裏の御門を駆け抜け、屋敷町の野はすれにきた時、家来の若党が一人追いつき、まず自分の草履を脱いで主人にはかせ、「さて、奥様はどちらへお移し申しましょうか」と言った。
269	井原西鶴「武道伝来記(井原西鶴集)」 (武道伝来記 巻七 目録 P.247)	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	なし	世→勝之介 不問 不問→男	⑤	なし	目録[第一] 我が命の早使ひ灸居ゑても身のあつきを知らぬ事[第二] 若衆盛りは宮城野の花義理に身捨つるはほめ草の事 訳文:なし
270	近松門左衛門「心中刃は水の朔日(近松門左衛門集)」 (上之巻 備後町鍛冶屋の場 [九]親方の腹立ち P.257)	江戸時代中期	韻文(三人称)	オへでかしやつた、でかしやつた。それがそなたの身の果報	①	みな→平兵衛 不問 不問→男	⑤	なし	ウまたや再び悪性ごと、ふつゝと思ひウ切りましたと、フシ涙を流し言ひければ、地色中オへでかしやつた、ウでかしやつた。ハルそれがそなたの身の果報と、みな / \ 喜びほめにけり。親方も機嫌を色直し、詞さすが男ぢや、満足した。この上ながら、こちの心の落ち着くため、地色中地色中誓ウ文の証拠にと、ウ三尺ばかりのハル棒鉄の、夕日のごとく焼けたをを、ウ鉄鉢にて引き出し、ウ鉄床にどうと色直し、詞これはこの度禁中様、お内侍所の釘下地。 訳文:もう二度と女郎狂い、きっぱりと思い切りました」と、涙を流して言うので、内「オオでかしやつた、でかしやつた。それがそなたの身の仕合せ」と、皆々喜んでほめたのであった。親方も機嫌をなおし、「さすが男じゃ、満足した。この上ながら、こっちの心が落ち着くため、誓文の証拠に」と、三尺ばかりの棒鉄の、夕日のように焼けたのを鉄鉢で引き出し、鉄床にどんと移して、「これはこのたび禁中様、お内侍所の釘の下拵え。
271	近松門左衛門「けいせい反魂香(近松門左衛門集)」 (山科土佐将監閑居の場 [一五]大頭の舞による男み P.192)	江戸時代中期	韻文(三人称)	まことに諸人の地絵本ぞ	①	人々→又平殿 不問 不問→男	⑤	なし	カハリオへいしくもハル申されたり、身こそ墨絵の山水男、紙表具の体なりとも、朽ちて朽ちせぬ金砂子、極彩色に劣らじと、勇み進みし勢ひは、ゆゝし、頼もし、我ながら、あつぱれ絵筆のけなげさよ、唐絵の樊囿、張良を楯に突いたとおぼめせ。お暇してさらばとて、打つ立ち出づる勢ひは、まことに諸人の地絵本ぞと、オゝ、ほめぬ者こそ三重ゝなかりけれ。 訳文:「オオ、いみじくも申された。この身こそ墨絵のようなみずばらしい男で、紙表具のような粗末な身なりであっても、中身は朽ちても朽ちることのない金砂子や極彩色に劣るまい」と、勇み進む勢いは、すばらしく、頼もしく、「我ながら、あつぱれ絵筆の毛ならぬけなげさよ。唐絵の樊囿、張良を力と頼んだとお思いください。お暇して、さらば」といって、出発して行く勢いは、「まことに人々の手本だ」と、オオ、ほめない者はいなかった。
272	近松半二、松田ばく、栄善平、近松東南、三好松洛(後見)「妹背山婦女庭訓(浄瑠璃集)」 (芝六住家の場 [二五]芝六の義心と十三鐘 P.371)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	なし	なし	仙→夫の親への孝行心 上下 男→男	④	なし	何にもハル知らぬ悦び寝顔。上それと言うたら三作が、ウ心も無足に夫の命、ウそれも悲しう、ウ我が子も可愛し、ウ心は千々になる鐘を、キンハル早つき出す中キン合興福寺、詞ハア南無三宝、アノ鐘の地ハル数に縮まる子の寿命、ウ一つの命を二つに分け、ウ養ひ親への孝行心、ウほめてやつて下されと、ウ言ふも言はれぬ女房が、ウ心の苦痛三つ、色四つ、重ねて響く胸先は、ウ斧鉞に打たれる心地、上五体、五つにいつの世の、ウ報いの中こいに、キン修羅の合鐘、色打ち切る六つは、ヤア知死期か上とわつと叫ぶは一時に、ウ蒲団のうちもウ血の涙、ウ寝入り伏したる稚子の、咽笛置にぬうたる刃、詞ヤア杉松をむごたらしい、酔狂ひか、乱心かと、地上涙もいつぞ狼狽へて咽へ色流るゝ、スエデ呆れ中泣き。 訳文:何も知らぬ喜び寝顔を見ながら、そうだと言ったら、三作の心も無になり、夫の命がない、それも悲しい、我が子もかわいいと心はさまざま乱れ、鐘が鳴るように落ちて着かない折、早くも興福寺では鐘をつき始める。「ハア南無三宝、アノ鐘の数にしがたがい、縮まる子の寿命よ。一つの命を二つに分け、養ひ親への孝行心をほめてやってくだされ」と言うにも言えぬ女房の心は痛み、三つ、四つと重ねて鐘の音が響く胸先は斧鉞に打たれる心地で、五つの鐘に、いつの世の報いか、ここで修羅の苦患を受けるかのような、その鐘を打ち切る六つは、「ヤア知死期か」と言うのと同時に「わっ」と叫ぶ声もろとも蒲団の中も血の涙で、寝入った幼子の咽を畳まで突き刺した刃に、「ヤア杉松をむごたらしい、酔ったの狂気か、乱心か」と、涙もうろたえて、かえって咽へ流れる呆れ泣き。
273	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (元禄期 P.286)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	なし	不問→三つ目の噴鼻 不問 不問→こと	⑤	なし	徒になるな ふたつ続けて出る噴鼻 訳文:「一つそしられ、二惚れられ、三ほめられて、四つ風邪ひく」と言うか。
274	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (享保期 P.342)	江戸時代中期	韻文(三人称)	新敷 きれいな	なし	不問→親しい人の新築 対等 不問→もの	①	なし	新敷 きれいなと外ほめられぬ 訳文:親しい人の新築が成ったと聞いたら、やはりお祝いに樽でも下げて行くのが礼儀である。「どうか上がって見てくれ」などと誘われて一回りしたものの、粗末な出来栄で、普通なら、どこかに特色が出ていて褒めることもできるのに、これでは「新しくきれいで気持ちがいいでしょう」くらいしか言いようがない。
275	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (享保期 P.347)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	なし	店子→掛軸か置物か 下上 男→大家(もの)	①	なし	ほめたので 置けばよいのに直ぶみをし 訳文:掛軸か置物か。大家へ御機嫌伺いになどに行き、座敷に通された店子でもあろう。結構な物とお世辞を言ったまではよかったが、そこが下賤な胄の悲しさで、「これだけの物ですと、三両はお出しなされたでしょう」などと、見当はずれの値段をつけ、自分の無智と物を金高で見る卑しさを暴露する落語種の男。
276	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (宝暦後期(川柳時代) P.429)	江戸時代中期	韻文(三人称)	御氣こんが能い	①	石山寺の僧→著者 下上 男→女	⑤	なし	御氣こんが 能いと石山寺でほめ 訳文:女流の筆になった『源氏物語』は、やさしくとやかに綿々の情けを綴る。あの長さはまさに根気仕事である。読破するだけでも大変なのだから、著者への褒め言葉としては最適なのかも知れない。石山寺の僧は内容は見ていないだろうから、その執筆態度に敬服しているのである。
277	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (宝暦後期(川柳時代) P.449)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	なし	作者→笹屋の饅饨 下上 男→こと	①	なし	もみぢより ささをほめるげびたやつ 訳文:紅葉見物の話が出て、真間の紅葉は少し遠いがやはり一番よいなどと言う人を抑え、俺も行ったことがあるが、紅葉はともかく途中で食べた深川の笹屋の饅饨がうまかったと言う。花より団子とはいうが、風流な話の腰を折って食物話とは、その卑しい根性をみなに知らせるようなものだ。

278	<p>四方赤良（大田南畝）、唐衣橘州、朱楽菅江ほか 「狂歌」 （元木綱 P.520）</p>	江戸時代中期	韻文（三人称）	なし	なし	<p>万歳→柱数 上下 男→もの</p>	①	なし	<p>草庵むすびけるとし万歳のことがきけるをきゝて万歳にほめたてられてはづかしき草のいほりの柱数かな</p> <p>訳文：三河万歳の祝儀の語句「柱立て」を取る。万歳が柱数を数え立てて賞美の祝儀を述べているが、私の粗末な草庵にはそれほどの柱はないので恥ずかしい、というほどの意。</p>
279	<p>井原西鶴「武道伝来記（井原西鶴集）」 （武道伝来記 卷三 目録 第二 按摩とらする化物屋敷 P.104）</p>	江戸時代中期	小説（三人称）	なし	なし	<p>国中の人々→奥右衛門の武勇 不問 不問→男</p>	⑤	なし	<p>ある時、化物屋形の事を、奥右衛門承り届け、「この屋敷を申し受けたき」御訴訟申し上ぐる所に、「子細あれば無用」と、老中、お取り次ぎもなかりき。再三言上申せば、願ひの通り下し給はり、急に屋普請して移りぬ。この心底つよきに恐れてや、五、七日も別儀なく住み済まなければ、奥右衛門武勇沙汰して、国中の褒め者なり。</p> <p>訳文：ある時、この化物屋敷のことを、奥右衛門が聞いて心に留め、「この屋敷を頂戴したい」と、願ひ出たところ、「あれは子細があるからだめだ」と言って、家老もお取り次ぎをしなかった。再三お願いすると、願ひどおりに頂き、急に家普請をして、そこへ引越した。その心底の強いのに恐れてか、五、七日は何事もなくて済んだので、奥右衛門の武勇が噂にのぼり、国中の褒め者になった。</p>
280	<p>井原西鶴「武道伝来記（井原西鶴集）」 （武道伝来記 卷六 目録 第二 神木の咎めは弓矢八幡 P.217）</p>	江戸時代中期	小説（三人称）	先づは御手柄	①	<p>新四郎→与七郎 対等 男→男</p>	③	なし	<p>あれに見えたる松の葉隠れに、残る雪にまがひの白鷺、矢つぼ御望み次第に、射落として見せ申さん」と、引きしほりてはなつ矢、真た大中を射抜いて、先づは御手柄」と、褒めし言葉の下に、あまり矢、向ひの尾に遊びし、大石半九郎が右の肩骨より心もとまで、窺深に、たちまち絶入して倒れ、所あしければ、はや事切れける。</p> <p>訳文：あそこに見える松の葉隠れに、残雪に見まがうような白鷺がいる。あれを、ねらい所はお望み次第に、射落として見せよう」と言って、弓を引きしほって放つと、矢は見事に白鷺の真中を射通した。「まずはお手柄」と、新四郎が褒め終わらないうちに、白鷺を射た勢いのついた矢が、向こうの山裾に遊んでいた大石半九郎の右の肩骨から胸元まで、矢の柄も深く貫いた。半九郎はたちまち氣絶して倒れたが、その当たり所が悪かったので、はや死んでしまった。</p>
281	<p>井原西鶴「武道伝来記（井原西鶴集）」 （武道伝来記 卷八 目録 第三 橘州の浦波皆返り討ち P.299）</p>	江戸時代中期	小説（三人称）	これ程の馬、今では家中に、恐らくは並びあるまじ	③	<p>見る者→木工弥 上下 不問→男</p>	①	なし	<p>「旦那の御前は、我らに任せ給へ、いまだ金取りたるにてもなし」と、無理に引き出だし、木工弥方に行けば、喜ぶ事限りなく、代金三枚に極め、則ち「明朝渡すべし」と、約束して帰りぬ。木工弥、そのタベ梅の馬場に輪乗りまでしたるを、見る者手を打つて、「これ程の馬、今では家中に、恐らくは並びあるまじ」と、褒められて、なほ自慢して、私宅に帰りける。</p> <p>訳文：弥太夫は、「旦那の手前は私に任せて下さい。まだ代金を受け取ったわけでもないのだから」と、無理に馬を引き出して、木工弥方へ引いて行った。木工弥は大へん喜んで、大判三枚に決め、「代金は明朝渡そう」と約束して、弥太夫は帰った。木工弥は、その夕方、梅の馬場で、輪乗りまでしてみた。これを見る者は手を打って、「これほどの馬は、今では家中に並ぶものはあるまい」と褒められて、木工弥はなおさら得意になって、家に帰った。</p>
282	<p>井原西鶴「武家義理物語（井原西鶴集）」 （武家義理物語 卷三 目録 四 思ひも奇らぬ首途の婿入り P.385）</p>	江戸時代中期	フィクション（三人称）	なし	なし	<p>世間→縁組のこと 不問 不問→こと</p>	⑤	なし	<p>和州にありし隼人は、亀之進首尾事、明け暮れ心もとなく、夫婦言ひ出だし給ふ時、娘うれしげに笑みて、「先月二十九日の夜、敵討たれしに疑ひなし。その子細は、自ら一心に諸神を祈りしに、この恵みにや、夢ながらその場に行きて、後詰めて、残るところなく討ち止めさせ、喜び帰ると見しが、覚めての明けの日、寝巻の小袖段々に切れて血に染まりし」と、語りも果てず、それを二親に見せければ、快く亀之進を待ちかねしに、程なく立ち帰り、御前よろしく、数々の御褒美、先知に二百石の御加増ありて、隼人を召され、立ち出づる時の段々、至極に思し召され、縁組の事仰せ付けられ、世の褒め草をなびかせ、隼人が家風を吹かせける。</p> <p>訳文：大和の国元にいる隼人は、亀之進が心願していることを明け暮れ心配していた。ある日、隼人夫婦がそれを話題になさったとき、娘はうれしそうにほえんで、「先月二十九日の夜、亀之進様は敵を討たれたに相違ございません。と申しますのは、私が一心に諸神を祈りましたおかげでございましょうか、夢の中ながらその場に参りまして、後ろから助けて、一人残らず討ち止めさせまして、亀之進様が喜んで帰られると見ましたが、夢の覚めたそのあくる朝、寝巻の小袖がずたに切れて、血に染まっております」と話すや否や、その小袖を両親に見せた。隼人夫婦は安心して亀之進を待ち受けていると、まもなく帰って来た。御前の首尾もよろしく、いろいろと御褒美をいただき、亡父の知行のほかに二百石の御加増があった。また隼人を召し出されて、亀之進出発に際しての隼人の致し方の次第はもつとも至極に思し召され、改めて縁組みのことを仰せ付けられた。このことが世間の称赞の種となり、隼人はその家名をあげた。</p>
283	<p>井原西鶴「武家義理物語（井原西鶴集）」 （武家義理物語 卷六 目録 一 筋目を作り髭の男 P.443）</p>	江戸時代中期	フィクション（三人称）	蛭川新右衛門は文武の人	①	<p>ある人→蛭川新右衛門 下上 不問→男</p>	③	なし	<p>ある時、所の人が集まりて、「紫野の一休は名僧なりける」と、咄のついでに、「蛭川新右衛門は文武の人」と、聞き伝へて褒めぬれば、かの浪人少し歌学ありて、その身花車に育ちければ、ふと出来心にて、筋なき事を申し出だし、「某は蛭川新九郎とて、新右衛門が孫なり」と語りぬ。</p> <p>訳文：あるとき、土地の人たちが集まって、「京都紫野の一休和尚は名僧であった」という話が出たついでに、「一休に参禅した蛭川新右衛門は、文武両道の達人であったそうよ」と聞き伝えて褒める者がいた。その浪人は、少しばかり歌学の心得があって、その身も上品に育っていたので、ふとした出来心でてだらめを言い出し、「それがしは蛭川新九郎と申して、新右衛門の孫に当たります」と語った。</p>
284	<p>井原西鶴「武家義理物語（井原西鶴集）」 （武家義理物語 卷六 目録 四 形の花とは前髪の時 P.458）</p>	江戸時代中期	フィクション（三人称）	天晴神妙な心入れ	①	<p>国中の人々→藤五郎 下上 不問→男</p>	⑤	なし	<p>「その身の悪事、西の宮の首尾さりととは有難し。それゆゑ御親父様を討つたる所に罷りて、自害仕るなり。止めを刺して給はれ」と、心中のとほり、札に書き記して、思ひ切りたる最期。「藤五郎が討たざるは、討つに勝りし武道」と、理を責めて、「天晴神妙な心入れ」と、国中にこれを褒めける。</p> <p>訳文：「自分に悪事があるのに、西の宮でお世話になり、まことに有り難い。それゆゑ御親父様を闇討した所に行き、自害をいたします。どうかとどめを刺してください」と、思うとおりを札に書き記して、思い切った最期を遂げた。「藤五郎が敵を討たなかったのは、討つに勝った武士道である」と、道理になかった振る舞いに感じて、「あっぱれ殊勝な心構えである」と、国中の人々がこれを褒めた。</p>
285	<p>井原西鶴「新可笑記（井原西鶴集）」 （新可笑記 卷二 目録 三 胸を据ゑし連判の座 P.516）</p>	江戸時代中期	小説（三人称）	健気なる事ぞ	①	<p>軍中→小男 対等 男→男</p>	⑤	なし	<p>その頃関が原の陣立ちに、かねて武芸を励み、軍法を修練して、この家中残らず手柄比類もなし。歩行達の者までも相応の働きそなへ、外より美々しかりき。時に長柄持ちの中より小男槍をさげて一人進みて、迎ふを首尾よく六、七人突き留め、「健気なる事ぞ」と、軍中にこれを褒めける。かかる時、六十有余と見えて、頭は雪を乱し、陣笠の浅きをかぶり、素肌の出で立ち、その身軽く鎌槍取りのべ駆け寄り、槍合はせず逃げ帰る。</p> <p>訳文：そのころ、関が原の戦いがあったが、この家中はかねがね武芸を励み、軍法を修練していたので、一人残らず比類のない手柄を立てた。徒歩で戦う兵卒までも相応の働きをして、外の家中よりも見事であった。時に槍組の兵卒の中から、小男が槍をさげ、ただ一人進んで、刃向かう敵を首尾よく六、七人突いて仕留めたので、「健気なことだ」と、一軍こそってこれを褒めそやした。そのとき、六十余歳と見えて、頭は白髪を乱し、浅い陣笠をかぶり、鍔もつけない素肌の装いの侍が、身も軽々と鎌槍を手にとって駆け寄って来た。小男はそれを見て、槍も合わせないで逃げ帰って来た。</p>
286	<p>井原西鶴「新可笑記（井原西鶴集）」 （新可笑記 卷三 目録 三 掘れども尽きぬ仏石 P.553）</p>	江戸時代中期	小説（三人称）	なし	なし	<p>殿→侍 下上 男→男</p>	⑥	なし	<p>これほど発明なる大守なれども、世の費えを知らせ給はぬは、この家に生れさせ給ひ、何事も御心に叶ふゆゑぞかし。ここに諸役御免あそばされ、行年五十を過ぎ、善惡の境をもわきまへず、ただ正直を本とする男、一生無我なるを褒めさせられ、御咄の衆中にうち交はり、朝夕相勤めしが、御機嫌に任せ世の不審なる事ども御物語ありしに、かの男言ひ出だしけるは、「当国柏崎の町中に、自然石の地藏六体まで立たせ給ふ。この石金輪際より生ひ抜けたりと古人の伝へ」と申し上げる。</p> <p>訳文：これほど聡明な国主であったが、世の中の無駄なことをご存じなかった。それというのも、こういう立派な家にお生まれになって、何事も思うままになつたからである。ここに、諸役御免となり、年も五十歳を過ぎて、善惡の区別もわきまえず、ただ正直いらずに暮らしている侍がいた。殿はその男の私心のない生き方をお褒めになり、男は御伽衆の一人に交じって、いつもおそばに勤めていた。ある日殿が御機嫌良く、世の中の不思議なことなどをお話になっているとき、その男がこんなことを言い出した。「当国柏崎の町中に、自然石を彫った地藏が六体も立っておりになります。その石は大地の底の底から生え出たものと、昔から言い伝えられております」と申し上げた。</p>

287	井原西鶴「新可笑記(井原西鶴集)」 (新可笑記 巻四 目録 二 歌の姿の美女二人 P.575)	江戸時代中期	小説(三人称)	歌道は神主に似合ひたる心掛け	③	人皆→神主 下上 不問→男	③	なし	〔二〕 歌の姿の美女二人 古代、八重垣の歌の種、雲州大社の神主何某とかや、俗性は武家の末子なりしが、世は様々の家業、神職の名跡を継がれし。常に歌字を好み入り、二十一代集を残らずそらんずる程になりぬ。神書考へる程はなけれど、「歌道は神主に似合ひたる心掛け」とて、人皆これを褒める。 訳文:〔二〕 歌の姿の美女二人 昔、「出雲八重垣」という和歌の種となった出雲の国の大社の神主なにかいいう者は、素性は武家の末子であったが、世の中にはいろいろな家業があって、神職の家名をお継ぎになった。常に歌字を深く好み、二十一代集を残らず暗誦する程になった。神道書を考えるまでには至らなかったが、「歌道は神主に似合った心掛けだ」と、人々はみなこれを褒めた。
288	井原西鶴「新可笑記(井原西鶴集)」	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	なし	自分→物事 不問 男→こと	なし	なし	ただ願ふべきは、後世の一大事と、観念の窓に閉ぢこもり、あらゆる三千世界の書籍を見開き、尊僧となり給へり。これもまた諸人帰依をなす事のむつかしくて、ここを逃れ、入る日の丘の山深く、閑居の徳を身に覚えり。男女の境なれば、愛欲の心なし。雑言なれば、鬨諍の恐れなし。是非の友なれば、褒め誇りの誤りなし。人の失を見ざれば、他の過ちを談せず。 訳文:出家した総領は、ただ願うべきは後世の一大事であると、仏法を観念するたよりとなる窓の下に閉じこもり、あらゆる三千世界の書籍を見開いて、尊い僧になられた。しかしこれも人々が信奉して来るのが煩わしくて、その寺を逃れ出て、入る日の丘の山深く隠れ、閑居の徳を味わう身となった。男女の区別を越えているので愛欲の心は起こらない。悪口を聞くこともないので、争う恐れもない。是非善悪を言い合う友人もないので、褒め過ぎやよする誤りを犯すこともない。人の失策を見ないので、他人の過ちを談ずることもない。
289	近松門左衛門「異途の飛脚(近松門左衛門集)」 (下之巻 道行 忠兵衛 梅川 相合駕籠 新口村の場 〔二一〕孫右衛門の述懐 P.149)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	今ウにも捜し出され、細かゝつて引かるゝ時、よウい時に勘当して、孫右衛門は出かした、ウ仕合せぢや	②	不問→孫右衛門 不問 不問→男	⑥	なし	誰故なれば嫁御故。地色ちかごろウ愚痴なことなれども、ウ世の誓へにハルいふとほり。盗みする子は憎からで、縄かくる人が恨めしいとはこのことよ。中ウ久離切つた親子なれば、善ハルいゝに中つけ悪いにつけ、ウ構はぬこととはフシいひながら。中ウ大坂へ養子に行て、ウ利発で、器用で、ハル身を持つて、身代も仕上げたウあのやうな子を勘当した。ウ孫右衛門は戯気者、ウ阿呆者と上言はれても、その嬉しさはどうあらう。今ウにも捜し出され、細かゝつて引かるゝ時、よウい時に勘当して、孫右衛門は出かした、ウ仕合せぢやと、褒められても、ウその悲しさはどうあらう。今ウから思ひ過されて、一日も先にウ往生させてくだされと、拝み願ふは、今参るウ如来様、御開山。 訳文:だれゆえと言えばそれは嫁御のゆえ、まことに愚痴なことであれけれど、世の諺に言うとおり、盗みを働く子は憎くなく、縄をかける人が恨めしいというのは、このことよ。縁を切った親子であれば、善いにつけ悪いにつけ、聞わりないことはいふものの、大坂へ養子に行つて、利口で、器用で、身持ちもよくもつて、財産も築きあげた、あのような子を勘当した孫右衛門は愚か者、馬鹿者と言われても、その嬉しさはどんなであらう。今にも捜し出され、細にかかつて引かれていくとき、よいときに勘当して孫右衛門はでかした。しあわせじやとほめられても、その悲しさはいかがであらう。今からそのときのことが思いやられて、一日も先に死なせてくだされと、拝み願うのは、今から参る如来様、ご開山。
290	近松門左衛門「女殺油地獄(近松門左衛門集)」 (上之巻 〔三〕喧嘩 P.213)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	日本一の名人様、やつちや / \	①	田舎の客→甚左衛門、幸左衛門、 、四郎三 下上 男→男	③	なし	喧嘩 ハルフシかくとはいかでし中ろうとの、ウ田舎の客にウ揚げられて、ウキン連れてハルヲントあるじの後家まじり、替りちんつの国訛り。歌ウやつしは甚左衛門、幸左衛門が思案事、四郎三が愁ひ事。ちんつ。ちんつ。ちんちりつてつて、地ハル日本一の名人様、やつちや / \ と、褒める歌より褒めさする。フシ金ぞ諸芸の上手なる。 訳文:こんな事とはどうして知ろう、白人の小菊は素人の田舎の客に揚げられて、女主人の後家と一緒に連れ立ち、替りちんつ節を国訛りで、「やつしは甚左衛門、幸左衛門が思案事、四郎三が愁い事、ちんつ、ちんつ、ちんちりつてつて」と歌うと、「日本一の名人様。ようよう」とほめるが、ほめる歌よりも、ほめさせる金のあるのが諸芸の上手の基である。
291	近松門左衛門「丹波与作待夜のこむろぶし(近松門左衛門集)」 (中之巻 関の旅籠屋の場 〔一一〕与作の喧嘩 P.367)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	なし	なし	人→八蔵殿 不問 不問→男	⑤	なし	〔一一〕与作の喧嘩地ハルヤイ男だてはおいてくれ。銭济いて、したかせい。腕づくならサア来いと、打つてかゝれば、小まん取りつき色なウ八蔵殿。詞こなたは粋のやうにもない。そつちもこつちも親方持ち。馬を遣つてよからうか、取つてこなたを褒めうか。地色ハル声高に言はずとも、ウ了簡づくがよいわいの。情けなやと、泣きければ、ヤイ、とこな色引裂かれ。詞その涙は与作に泣け。こちや忝うないわい。 訳文:八「ヤイ、男だてはやめてくれ。銭を払ってから、やりたくばやれ。腕づくでなら、サア来い」と、打ちかかつていけば、小万は取り付いて、小万「のう、八蔵殿、お前は粋な人にも似合わないやり方。そつちもこつちも親方を持つ身。馬を人にやってよからうか、また、取ったとてお前を人が褒めようか。大声で言わなくても、納得するように話し合えばよい。情けない」と、泣きいれば、八「ヤイ、このとんでもない女め。その涙は与作のために泣け、俺には一向にありがとうはないわい。
292	近松門左衛門「夕霧阿波鳴旗(近松門左衛門集)」 (上之巻 吉田屋の場 〔七〕阿波の客の正体 P.414)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	なし	なし	藩中→夕霧殿と夫の子 不問 不問→男	③	なし	腹も痛まず、苦勞せず、産んでもらひし忝さ、あだにもせせず守り育て、手習ひ、読み物、弓、鎧までも器用にて、地色ウ国隣の土佐駒引かせ、乗つた姿は、ハルあつぱれ平岡左近が世継ぎ、ウ七百石の主なりと、御家中の褒め者。さぞウ見たからうし、見せ中たし、一つはあの子が冥加のため、ウ夕霧殿を請け出し、一所に伴ひフン暮さんと、中心根も聞かんだため、おウ齒黒落つ、あられぬさまで、詞只今聞けば、我が連合ひを認して、地色中伊左衛門の子を突き付けたと、ハル聞くよりはつと胸裏がり。夫の武士は魔つた、エ、ウ恨めしい夕霧。 訳文:腹も痛めず、苦勞もせずに産んでもらった有難さ。その恩をおろそかにせず、大切に養育して、手習い、読み物、弓、鎧までも器用にこなし、隣国産の土佐駒を家来に引かせて乗った姿は、あっぱれ平岡左近の跡取り、七百石取りの主であると、藩中の評判者。さぞ見たいだろうし、見せたい。一つにはあの子のしあわせのために夕霧殿を請け出し、一緒に連れ帰れ暮そうと思ひ、本心を聞くために、お齒黒を落したり、とんでもない身なりをしてやって来て、たつた今聞くと、私の夫を騙して、伊左衛門の子を押し付けたとの話、聞くやいなや、はつと胸がつまり、夫の武士の面目はずたつた。エエ恨めしい夕霧。
293	近松門左衛門「鐘の権三重帷子(近松門左衛門集)」 (上巻 浅香市之進屋敷の場 〔七〕恋婿権三 P.598)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	なし	なし	親→娘 上下 女→女	なし	なし	〔七〕恋婿権三 地親の子を褒めるは中いやらしけれど、詞このやうな娘をたいいの男に添はせるは妬ましい。常々つく / \ 思ふには、御家中で婿を取らば、表小姓の笹野権三様に添はせたい。い。器量はお国一番、武芸ようて茶の道も、弟子衆に続くはない。地色中そして気立といふものが、万人にもハル憎まれぬ。いとらしい形氣、男の生粋 / \ と言へば、おきくは童氣の。色申し母様。詞権三様は大人で小父様のやうにあらふ、地わしやフシいや / \ と頭振る。 訳文:「親が子を褒めるのはよくはないが、このようなよい娘をありきたりの男に添わせるのはくやしい。いつもつくづく思うことは、ご家中で婿を取るなら、表小姓の笹野権三様に添わせたい。顔だちはお国で一番、武芸もよく茶道も、弟子の中にこの人に次ぐものがない。そして気前というのがよく、万人に憎まれぬかわいらしい氣質で、男の中の男」と言うとおきくは子供っぽく、「もうし母様、権三様は大人で小父様のようにみえる。わたしはいやいや」と、頭を振る。
294	近松門左衛門「曾我会稽山(近松門左衛門集)」 (鎌倉御所の場 〔七〕範頼の扱い P.367)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	なし	なし	孔子→君子の争い 上下 男→男	③	なし	〔七〕範頼の扱い 地色中ウ程なく、蒲殿御入りと、廊下番衆ハル取り次げば、梶原始め犬坊、八幡出で迎ふ、蒲殿、しばらく庭に目を留め、につこと笑ひ、詞なう巴御前。宝を争ひ、地を争ふは、人間世の欲心。それとは変り、これは優しき弓矢の芸。その争ひは君子なりと、孔子もこれを褒め給ふ、争ひ、歌争ひ、春秋の詠めを争ひし。雲の上人の風骨にも劣るまじ。 訳文:「間もなく蒲殿の御入り」と、廊下の番衆が取りつくと、梶原を始め、犬坊丸、八幡三郎が出迎える。蒲殿はしばらくの間庭に目を止め、にっこりと笑ひ、「なあ巴御前。宝物を争ひ、土地を争うのは人間世界の欲心。それとは変り、これはやさしい弓矢の芸。その争いは君子の争い」と、孔子もこれをほめられている。位に着くことを争ひ、また歌作の優劣の争いで春秋のどちらの詠めがよいかを争った宮中の人の風骨にも劣るまい。
295	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (元禄期 P.281)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	なし	世の中→貞女 不問 不問→女	④	なし	片蟲履や 男に貞の名はなき世(前句)君思へかし我十分一 訳文:浮気男を持った女の嘆きである。貞女を褒める世の中なのに、男の浮気は、むしろ甲斐性があるとか、英雄は色を好むとか、肯定的に考えられている世間。女の気持などは問題にしていけない。せめて、十分の一でも、男に貞節の心があつたなら幸せなのにてである。下屋敷の妾などが。「君」とよぶのは遊女上がりの気味合いをもつ。

296	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (元禄期 P.283)	江戸時代中期	韻文(三人称)	通男じや	①	母親→泣く子 上下 女→男	④	なし	転ぶ子に道理を付て扣く石(前句)通男じやとほめに營 訳文: 日常よく見かける母親などの所作。「坊やはつよい子だ」と褒め上げながら「この石がわるいのね。もうしないように痛い痛いでやりましょう」など、泣く子の気をそらすのである。屁理屈だが筋は通っており、痛みも紛れるなら、これも一法である。
297	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (享保期 P.314)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	なし	『仮名手本忠臣蔵』の作者一大石の智謀 対等 男→男	③	なし	山科に 忠義のうらの作り馬鹿(前句)うかり / \ と / \ 訳文: 主君の仇討ちをするという忠義の心をひた隠しにして、山科に隠棲した大石は、吉良方を油断させるため、祇園へ乗り出し、酒色にうつつを抜かすばかり者の態を装い、味方をもあざむいて本懐を遂げたのだ。『仮名手本忠臣蔵』が脚色される素地になったような句で、智謀の深さを褒めている。
298	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (享保期 P.319)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	③	作者→美女 対等 男→女	②	なし	指櫛が無ば滝見の観世音(前句)命也けり / \ 訳文: 西行の「命なりけり小夜の中山」のような題を、美女を褒める言葉にとりなした付け。観音や弁天などが気高い美女にたとえられる。髪に挿した櫛がなければ、さながら滝見観音で、巖頭に櫛を引いてすらりと立った姿は、手を合せて拝みたいほどだの意。滝見に来た男の前に突然現れた感じもある。
299	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (享保期 P.342)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	①	作者→親しい人の新築 対等 男→不問(もの)	①	なし	新敷 きれいなと外ほめられぬ(前句)そさう也けり / \ 訳文: 親しい人の新築が成ったと聞いたら、やはりお祝いに櫛でも下げて行くのが礼儀である。「どうか上がって見てくれ」などと誘われて一回りしたものの、粗末な出来栄で、普通なら、どこかに特色が出ていて褒めることもできるのに、これでは「新しくきれいで気持ちがいいでしょう」くらいしか言いようがない。それでも本人はうれしいらしいが。
300	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (宝暦前期 P.361)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	なし	人→野暮な武士 不問 不問→男	⑥	なし	人は武士 花はくれずに懐ろに(前句)たしなみにけり / \ 訳文: 「人は武士花はくれなゐ茶屋おそれ」(柳多留・八五)ともある。野暮な武士はけちで軽蔑の対象。褒め言葉を逆手に取って祝儀を出す気配もない田舎武士を笑っているのだが、それを前句に付けて、金を懐に嗜む(出さぬように心がける)と洒落てからかったところがねらいであろう。「そのくせに花はくれなゐ人は武士」(川柳評宝十二信3)
301	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (宝暦前期 P.365)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	なし	私→不明な人から出した焼物 不明 男→不明(もの)	①	なし	焼物は いくたび客をしたのやら(前句)聞ぬが仏見ぬが花也 訳文: いまお膳の先に出された大鯛の焼物は、よく見ると干からびた感じで、何度も見せ肴として出された古いもののようなのである。さすがに立派で大きいので、誰も箸を付けずに眺めて帰ったのであろう。こんなのには最初に箸を付けるのには勇氣がいるのだ。わたしもそのまま褒めて帰ることにしよう。
302	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (宝暦前期 P.368)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	②	作者→立派な人 不問 男→不問	④	なし	よい人と 言はるゝものは金持ぬ(前句)野にも山にも / \ 訳文: 通り句「色男金と力は無かりけり」に似てはいるが、これは、人が良いと評判を取るような正直者を主題とし、ワルは金儲けにも抜け目はないが、慈悲を生活信条とする立派な人に金持はないと清貧を褒めたのである。前句によって、何となく草庵の隠者の姿が見え隠れするようである。
303	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (宝暦前期 P.375)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	①	作者→日和 上下 男→天候	なし	なし	先御慶 そして日和を嘗て行く(前句)かはり / \ に / \ 訳文: 年賀には主人筋や取引先から親類をまわったが、「明けて…」の挨拶だけで別れるのもしらけるので「よいお日和で。今年も良い年でしょう」などと空を見上げる。それが言い合せたようで面白いのである。天候を褒めるのが無難で、しかも縁起のよい挨拶になるものだからである。
304	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (宝暦後期(川柳時代) P.388)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	③	男→美人 対等 男→女	②	なし	女見て 誉ぬが直に女の気(前句)おし合にけり / \ 訳文: おつに澄した美女が通って行くのを見つけた女ども。肩を押し臂で突き合いながら、顔を見合せ、片目をつむって軽蔑のしぐさを見せ合う。男なら素直にきれいだと褒めるところでも、何とか欠点を見つけ出して美人と認めたくないのが先に立つ。
305	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (宝暦後期(川柳時代) P.409)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	①	作者→神経の図太さ 不問 男→不問	④	なし	かり傘にくろ田の紋を付てさく(前句)あつばれな事 / \ 訳文: 筑前黒田家の黒丸紋。番号と屋号を書いた貸し傘を返さずに、それでも気がひけるのか墨黒々と消して使う。その神経の図太さを普通ではできないことだと褒めたのである。あるいはケチのお手本として、江戸っ子にはない心がけだと呆れているとも。
306	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (宝暦後期(川柳時代) P.429)	江戸時代中期	韻文(三人称)	御氣こんが 能い	①	石山寺の僧→紫式部 下上 男→女	④⑤	なし	御氣こんが 能いと石山寺でほめ(前句)しほらしい事 / \ 訳文: 女流の筆になった『源氏物語』は、やさしくとやかに綿々の情けを綴る。あの長さはまさに根気仕事である。読破するだけでも大変なのだから、著者への褒め言葉としては最適なのかもしれない。石山寺の僧は内容は見ていないだろうから、その執筆態度に敬服しているのである。
307	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (宝暦後期(川柳時代) P.436)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	なし	杜甫→李太白 対等 男→男	②	なし	じやうふだん どつちらもので詩を作り(前句)はやい事かな / \ 訳文: 「李太白一合づつに詩を作り」(柳多留拾遺・四)である。酒一斗に詩百篇とあるのを割った句である。たしかにこれは速吟であり、酔いもひどいわけだから、あの世へ片足突っ込んだような状態で作ったはず。とすれば杜甫が褒めたように、まさに酒仙というのが適当な賛辞であろう。

308	立羽不角、収月(初代)ほか「川柳」 (宝暦後期(川柳時代) P.441)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	なし	不問→作者 不問 不問→男	②	なし	とし寄て はげぬあたまもけちなもの(前句)(同前) 訳文:何事も年相応ということがある。お若いと褒められるのがうれしいのはもちろんであり、自信の元にもなるものだが、いつまでも黒々とした髪の毛を持っているのは、ときに若輩と見損じられ軽く扱われることにもなる。とくに大切な商談や交渉事に臨み、初対面の挨拶のときなどには、亮げていたらと思うことである。
309	四方赤良(大田南畝)、唐衣橘州、朱楽菅江ほか 「狂歌」 (鹿都部真顔 P.562)	江戸時代中期	韻文(三人称)	誰人か千両箱	①	誰も→中村仲蔵 不問 不問→男	③	なし	停午月誰人か千両箱とほめざらん秋は中村なかぞらの月 訳文:「千両箱」に「千両役者」の意を掛け、「秋は(最)中」に当代の人気役者「中村(仲蔵)」を、「仲蔵」に「中空」を掛ける。誰もが中村仲蔵を千両役者と褒め称えるように、昼日中、中天高くまん丸な形を宿す秋の最中の月を、千両の価値があるといつて誉めない者はいない、との意。
310	井原西鶴「好色一代男(井原西鶴集)」 (好色一代男 巻六 目録 身は火にくばるとも P.171)	江戸時代中期	小説(三人称)	夕霧より外に、日本広しと申せども、 この君 / \	③	五人→夕霧 対等 男→女	①②③④	なし	朔日より晦日までの勤め、屋内繁昌の神代このかた、又類なき御傾城の鏡、姿をみるまでもなし、髪を結ふまでもなし、地顔素足の尋常、はづれゆたかにほそく、なり恰好しとやかに、ししのつて眠ざしぬからず、物こしよく、はだへ雪をあらそひ、床上手にして、名譽の好にて、命をとる所あつて、あかず酒飲みて、歌に声よく、琴の弾手、三味線は得もの、一座のこなし、文づらけ高く長ぶんの書きて、物をもらはず、物を惜します。情ふかくて手くだの名人。「これは誰が事」と申せば、五人一度に、「夕霧より外に、日本広しと申せども、この君 / \」と、口を揃へて誉めける。いづれも情にあづかりし過ぎにし事ども語るに、あるは命を捨つ程になれば、道理を詰めて遠ざかり、名の立ちかかれば了簡してやめさせ、つれば義理をつめて見ばなし、身おもふ人には世の事を異見し、女房ふ人には世の事を異見し、女房のある男にはうらむべき程を合点させ、魚屋の長兵衛にも手をにぎらせ、八百屋五郎八までも言葉をよくこ屋五郎八までも言葉をよくこばせ、ただこの女郎の人をすてずになことなるこそ思ひ合せ、はじめの程は高聲せしが、いつとなく静かになりて、いつれか泪をこぼさぬはなし。 訳文:さて朔日から晦日まで空日なく勤め、家内繁盛の福の神、神代この方また類もない女郎の鑑、姿を見るまでもない。髪も結うに及ばず、素顔、素足の尋常さ、爪はずれ豊かに、ほっそりとして、姿形はしとやかで肉づきも程よく、まなざしもぬかりがない。声もよく肌は雪のように白く、床上手で稀代の色好みで客を恍惚とさせるところがあり、酒も上手で琴・三味線はいわずもがな、一座の捌きにそつがなく、文章は上品で長文の書き手、物をねだらず、人には憎しみなく物をやり、情が深くて恋の駆引きの名人。「これは誰のこただ」と言うと、五人が一度に、「日本広しといえども、夕霧をおいてほかにない。この君この君」と口を揃えてほめたてた。めいめい情にあずかったときのことなど話し合ってみると、命を捨てるほどに思いつめた者には道理を言い聞かせて遠ざかり、浮名が立ちかかると納得させてやめさせ、のほせあがつた客があれば義理を説いて見放し、体面を重んずる人には世間体を憚るように意見し、女房のある男には格気の気持を合点させ、魚屋の長兵衛にも手を握らせ、八百屋の五郎八にまで愛想よく言葉をかけて喜ばせてやる。ただただ、この女郎の人を見捨てない真実な心意気を思い合わせ、初めのうちは高声に話していたが、いつとなくしんみりとしてしまつて、涙ぐまぬ者とはなかった。
311	井原西鶴「好色一代男(井原西鶴集)」 (好色一代男 巻六 目録 匂ひはかつげ物 P.187)	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	なし	皆→吉田のもの 不問 不問→女(もの)	①	なし	大じんわざと酔狂して、あたりあらく踏立て、燗鍋より連波たつていと見ぐるしく、小兵衛はな紙にてせけどもとまらず、よし田が上がへの棲まで流れよる時、禿の小林、我がぬぎ置きし黒茶宇のきる物にて残らずしたみ、かいやり捨てける。太夫につかはれし程の心根これぞと、いはずに誉めける。この有様、よし田もうれしかるべし。春宵一衣価千枚所なり。 訳文:大尽はわざと酔ったふりをして荒々しく歩きまわると、燗鍋が連を立てて見苦しくこぼれる酒を、小兵衛が鼻紙でせいたが止まらず、吉田の柙の棲まで流れていったとき、禿の小林が自分の脱いでおいた黒茶宇の着物で、残らず吸い取ってかたづけた。吉田に使われている者だけのことはあると、口にこそ出さなかったが一同は感心した。吉田もきつとうれしいことであろう。春宵一衣価千枚といいたいところだ。
312	井原西鶴「好色一代男(井原西鶴集)」 (好色一代男 巻七 目録 新町の夕暮島原の曙 P.226)	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	なし	西行→松島の曙、蛭湯のタベ 上下 男→景色	なし	なし	高橋様も『まちびさしき』ときのふも仰せられしに、まづきかしましてよろこばしませいと、門をたたきて出口の茶屋につたへて、はや三文字屋に入をやる。「この朝眺めのおもしろさ、西行は何しつて松島の曙、蛭湯のゆふべを誉めつるぞ。きのふは新町の暮を見捨て、その目をすぐにけふ島原の朝明、これが唐にもあるべきや。 訳文:高橋様も、『待ち久しい』と昨日もおっしゃってござりました。まずお知らせして喜ばしてさしあげませいと、門をたたいて出口の茶屋に伝え、はや三文字屋へ使いを出した。「この朝景色のおもしろさ、西行は何を知って、松島の曙、象湯の夕べをほめたのであろう。昨日は新町の暮れを見捨て、その目をすぐに今日は島原の朝眺め、これが唐にもあろうか。
313	井原西鶴「世間陶算用(井原西鶴集)」 (陶算用 巻五 目録 二 才覚の軸すだれ P.459)	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	①	師匠→親が話したこと 上下 男→男	⑤	なし	ある人のむすこ、九歳より十二のとしのくれまで、手習につかはしけるに、その間の筆のぢくをあつめ、その外人のすてたるをも取りためて、程なく十三の春、我が手細工にして軸すだれをこしらへ、一つを一匁五分づつの、三つまで売払ひ、はじめて銀四匁五分まうけし事、我が子ながら只ものにあらずと、親の身にしては嬉しいのあまりに、手習の師匠に語りければ、師の坊、この事をよしと誉め給はす。「我、この年まで、数百人子供を預かりて、指南いたして見およびしに、その方の一子のごとく、氣のはたらき過ぎたる子供の、末に、分限に世をくらしたるためしなし。又、乞食するほどの身代にもならぬもの、中分より下の渡世をするものなり。かかる事には、さまど \ の子細ある事なり。そなたの子ばかりを、かしこきやうにおぼしめすな。それよりは、手まはしのかしこき子供あり。 訳文:ある人が、息子を九歳から十二歳の年の暮まで手習に行かせたが、その期間に筆の軸をためて、そのほか人の捨てたものも集め、まもなく十三歳の正月には、自分の手細工で軸廉をこしらえ、一つを一匁五分づつの値段で、三つまで売り払い、初めて銀四匁五分を儲けた。わが子ながら只者ではないと、親の身にしては嬉しいのあまりに、手習の師匠に話したところ、師匠はこのことを良いこととは褒められない。「私はこの年になるまで、数百人の子供を預り、手習の指南をして見てきたところでは、あなたの一子のように、氣のつきすぎる子供で、後に金持として世間を暮している例はないものです。そうかといって、物乞をするほどの状態にもならないもので、中流より下の世渡りをするものです。このようなことには、いろいろな理由があることです。あなたの子供だけを、賢いようにお思いなさるな。それよりも、上手に立回る子供がいます。
314	井原西鶴「武道伝来記(井原西鶴集)」 (武道伝来記 巻一 目録 第二 毒薬は箱入りの命 P.32)	江戸時代中期	小説(三人称)	なし	なし	刑部→素人芸の物まね、弾き語りの浄瑠璃 上下 男→女	③	なし	それより亥子の夜になりて、この御家の作法を覚えたる老女、花餅のしほらしく作りなし、上へあげて下まで祝ひぬ。杯数めぐりて後、素人芸の物まね、弾き語りの浄瑠璃、何の面白き事もなかりけり。義理營めに夜をふかし、一人 / \ 座敷を立ち、男は旦那ばかりにして、女中は耳の役目に聞きぬれば、道行の中程よりしらけて、三味線捨ててやめける。 訳文:そのうちに、十月の亥子の祝いの夜になり、この家の作法を心得た老女が、花餅をきれいに作りたて、主人に差し上げて、自分たちも祝った。杯の数もめぐって、それから素人芸の物真似や弾き語りの浄瑠璃などが出たが、刑部は何を見ても面白くないとはなかった。ただおあいそで褒めていたが、夜もふけて、一人二人と座敷を立ち、後は男は主人の刑部だけであった。女中はたた耳の役目で聞いている有様であるから、浄瑠璃の道行の中ほどより座も白けて、弾き手は三味線を放り出してやめてしまった。
315	井原西鶴「武家義理物語(井原西鶴集)」 (武家義理物語 巻一 目録 四 神の咎めの榎木屋敷 P.339)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	天晴武士の一心とぞ、	①	世の人→金蔵 不問 不問→男	⑤⑥	なし	「物のあやかし、かやうの事ぞ」と、皆人に安堵させて、この屋敷にて八十余歳まで、堅固に勤めける。金蔵、人中の一言、その義理違へず、ここに済ましけるは、天晴武士の一心とぞ、世の人誉めにき。 訳文:「妖怪変化などというのは、およそこんなものだ」と、家来たちに安心させて、金蔵はこの屋敷で八十余歳まで達者に勤めた。金蔵が人中での一言を守り、武士の義理に背かず、道理を明らかにしたのは、あっぱれな武士の精神であると、世の人は褒めたたたえた。

316	近松門左衛門「薩摩歌(近松門左衛門集)」 (上之巻 但馬殿京屋敷の庭先の場 〔三〕薩摩者の口拍子 P.279)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	/ \ / \、よう / \ 言うたり、申したり、さても / \	①	人々→津摩蔵 不問 男→男	③	なし	<p>黒熊の片鐘は、高麗までも隠れなき、大隅、薩摩の御大将。下そのほか諸国のお大名、数もかぎりもあら慮外、申すもなが柄の地ウ御縫印、フシあましかくと述べければ、地色ハル御殿の内外ウさは / \ / \、よう / \ 言うたり、申したり、さても / \ と、ウやゝ暫し、フシ手を叩いてぞ誓めらるゝ。中ウやれ、ウ幸ひの奉公人、ウこの者にハル極めよと四十平を召し出され、おとな殿へ申して、ウ取替へわたし、吉日なれば、今日中に請判極め、今宵から、お屋敷に泊ら申せよ。ウ薩摩者とあるからは、さの字をのけて、ウ津摩蔵とお付けなされ、あれへ立つて休みませい、色ない、ハルない / \ と立ちければ、四十平色小隅へ招き、詞して切米は何程欲しい、半季に二両二分くだされ、四十平興さまし、それでは一年五両か、いかに / \、近年五両取ります。すればそなたはさねもちりや、地ハル道理で女中のウ氣に入つたと、連れて、いり日も三重＝短夜や、</p> <p>訳文：黒熊の片鐘は朝鮮までも隠れない、大隅薩摩のおん大将。そのほか諸国のお大名は数もかぎりもない。あら失敬、いもの長い長柄のお楯印、おおよそこのとおり」と述べると、廉の内も外もさわざわさわざわめきだつて、「よう言うた、よう言うた。見事見事」とややしばらく、手をたいて誓められる。林「やれさいわいの奉公人。この者に決めよ」と、四十平を呼び出され、林「家老殿へ言うて前金を渡し、吉日なので今日中に保証人の印をとり、今夜からお屋敷に泊らせよ。薩摩者というから、さの字を取って、津摩蔵と名前をつける。あらへ行って休みなされ」津「はい、はい、はい」と立つと、四十平は小隅に呼んで、四「それで切米はいかほど欲しい」津「半季に二両二分くだされ、四十平はびっくりして、「それでは一年に五両か」津「いかにもそのとおり。近ごろ五両とります」四「それではそなたは実盛じや。道理で女中の氣に入つた」と連れだつて入ると、入り日も早く、短い夜がくる。</p>
317	近松門左衛門「用明天王職人鑑(近松門左衛門集)」 (第三 播州尾上の浜辺の場 〔二三〕下女の参会 P.114)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	律儀者で達者で、心のまめなまめ者よ。	①	不問→女子 不問 不問→女	④	なし	<p>ウそれも恨みも昔中にて、今は鳴るとも響くとも、まゝよおのれがウ尾上の松、鐘の供養ハルに参るらん、詞これはこの国の傍らに、下衆奉公の勤めをいたす飯たきの女にて候ふ、下世はさま / \ の中にも宮仕へ程辛いものあらばこそ、主に売つたる身と思へば、昼は日がかり、手足の乾くひまもなく、働けば働く程、休めとも言ははこそ。嘗めそやされてあの子は、律儀者で達者で、心のまめなまめ者よ。豆腐売りが通るは、そりや夕飯を、地やう / \ しまうてハル洗足すりや、はや入相のかなつたる間もあるにこそ。</p> <p>訳文：それも恨めしいとは昔のこと、今は鳴るのも響くのも勝手におしよ、私は動じないよ。むしろ鐘の供養に参りましょ。これはこの国の隅っこで下女奉公の勤めを致します飯炊きの女でございます。世の中はいろいろ、中でも奉公ほど辛いものはありませんか。主人に売った体と思うと、昼は一日中手足の乾く間もないほど働き、働けば働くほど休めとも言わず、あの女子は義理固く丈夫で、よく氣のつく真面目な者と誉められ煽てられ、豆腐売りが通るぞ、それ夕飯の仕度を。夕飯が終わって洗足すれば、もはや夕暮の鐘が鳴り、御園黒をつける暇もなく、部屋隅に行つて眠ろうとすると、夜食の用意をしろと言う。</p>
318	二代目竹田出雲、三好松洛、並木千柳(宗輔)「双蝶蝶輪日記(浄瑠璃集)」 (第二 相撲の花扇に意見の観骨 〔一九〕濡髪に慰められる与五郎 P.192)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	なし	なし	郷左衛門めや有右衛門→放駒 上下 男→男	なし	なし	<p>後に、地色ハル濡髪ウ轟頂の色と与五郎、マゝ腰かきや、かゝつたことぢやない、今日の相撲おれは力がとんと落ちた。太夫も今までの客と舟にみたが、力落して今住んだ。郷左衛門めや有右衛門めが放駒を誉めくさる胸の悪さ、吾妻身請けの事埒明く吉左右と悦びくさる。おれも舟へ飛び込んで存分言はうと思へども、あつちは強し、おれは弱し、とかく吾妻が事が吉になる上、そなたは負ける。</p> <p>訳文：その後で濡髪の轟頂の与五郎は、「マア腰をおかけ。お話にならない。今日の相撲にはおれはがっかりした。太夫も今までの客と舟にいたが、落胆して今帰った。郷左衛門や有右衛門の奴らが放駒を誉める胸くその悪さ。吾妻の身請けのことがうまいく吉報だと喜んでいやる。おれも舟へ飛び込んで思う存分言つてやろうと思うけれども、あらちは強い。おれは弱い。とかく吾妻のことが心配な上、お前は負ける。</p>
319	近松半二、松田ばく、栄善平、近松東南、三好松洛(後見)「妹背山婦女庭訓(浄瑠璃集)」 (第一 蝦夷子館の場 〔七〕雪見の酒宴 P.326)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	これは / \ 御両所のいかい骨折り、ことにこの雪細工、兎の耳がきつい手際、オへしをり殿の言はしやる通り、東帯姿のこの人形、奇麗なことぢやないかいなう	②	女中たち→二人 下上 女→男	③	なし	<p>各々、フシ機嫌を伺ひける。地ハル女中たち色口々に、詞これは / \ 御両所のいかい骨折り、ことにこの雪細工、兎の耳がきつい手際、オへしをり殿の言はしやる通り、東帯姿のこの人形、奇麗なことぢやないかいなうと、地ハル嘗めそやされて二商人は、中おとなげフシななくも出かし顔、地ハル蝦夷子につこと色打ち笑み給ひ、詞ホゝ玄蕃、弥藤次、できた / \、地ウイザ酌取れと余念なくハルキン廻る盃、養老の、ウ尽きぬ泉のそ中とはかと、ウ案内もフシなく広庭伝ひ。</p> <p>訳文：後に荒巻弥藤次が台に乗せた雪人形を持ち、それぞれ機嫌を伺った。女中たちは口々に、「これはこれはお二人のたいそうなお働き。特にこの雪細工は、兎の耳がすばらしいできばえじや」「オオしをり殿の言われる通り、東帯姿のこの人形はきれいなことじやないかいのう」と嘗めそやされて、二人は大人げなくも自慢顔である。蝦夷子にはにっこり笑いなり、「ホホ玄蕃、弥藤次、でかした、でかした。イザ酌を取れ」と、一心に盃が回つていところへ、養老の尽きない泉の底ではないが、はっきりとした案内もなく、広庭を伝て。</p>
320	近松半二、松田ばく、栄善平、近松東南、三好松洛(後見)「妹背山婦女庭訓(浄瑠璃集)」 (第一 蝦夷子館の場 〔九〕久我之助の参上 P.331)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	蝦夷子公試しの切つ先を、受け留めた今の飛石地を放るゝと下がる鉄網、元のごとく石を置けば、網も隠れて、その体なし、ハテ難しい御要害	②	久我之助→蝦夷子 対等 男→男	③	なし	<p>中天井より、怪しく下がる鉄網に、ハル清舟きつと色眼を配り、詞コリヤ再三のお試し、真剣のお相手か、お望みならば、ともかくも、イヤモウ驚き入つたお手際、見届けましたと、地ウ双方の刀は鞘に、飛石も、ハル元へ直せば、御殿の網、ウ棟木遥かにフシ隠れけり、地ハル久我之助色さあらぬ体、詞蝦夷子公試しの切つ先を、受け留めた今の飛石地を放るゝと下がる鉄網、元のごとく石を置けば、網も隠れて、その体なし、ハテ難しい御要害と、地ウ嘗める一言ぎつくりと、ウ術の試み、毛を吹いて、ハル盃をくろめるしたり顔、詞大切のこの要害、其方は身内同前、見せておくも幸ひと、地ハル俄になつける言葉の艶、詞ハハこの清清舟も武士の端、たゞ今ごときのお手配り、決して他言は仕らぬ。お氣遣ひ地御無用と暇申して、久我之助、左右に目配り悠々と表を、フシして立ち帰る。</p> <p>訳文：御殿の天井より不思議に下がる鉄網に清舟はきびしく目を配り、「コリヤ再三のお試し。真剣のお相手をせよと言うのか。お望みならば、どうにでも」「イヤモウ驚き入つたお手際。見届けました」と、双方の刀は鞘に元のように収められ、飛石も元へ直すと、御殿の網は棟木の遥か上に隠れた。久我之助はなにげない様子で、「蝦夷子公がお試しの切つ先を受け留めた今の飛石は、地を離れると、鉄網が下がる。元のように石を置くと、網も隠れて、その氣配もない。ハテ手の込んだ御要害」と嘗める一言に蝦夷子はぎくりとし、術の試みが現れたことをとりくろう得意顔で、「大切なこの要害を、その方は身内同然なので、見せておくのもよいだろう」と、急に手なずける愛想の言葉に、「ハハこの清舟も武士の端くれ。ただいまほどのような手配りを決して他言はいたしません。お氣遣い御無用」と、暇を申して、久我之助は左右に目を配り、悠々と表をさして立ち帰る。</p>
321	紀上太郎、容楊黨、焉烏旭、烏亭焉馬、三津環 「基太平記白石噺(浄瑠璃集)」 (第七 新吉原楊屋の場 〔三九〕廊遊びの通人舞 P.584)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	オへ、イヤ素顔でも随分美しい	①	亭主→遊女 上下 男→女	②	なし	<p>ヤ、新参の在郷、そこにゐずと下へ行きや、アイヤ、あれが事も宮城野に、内でなと違つて貰おと、それを今頼みに来た、コレ宮城野、随分今の事を、ナ合点がいたか、オへ、それなればよい、サア / \ 早う行きや、アイ、ちよつと顔を直して、オへ、イヤ素顔でも随分美しいと、地ハル嘗めるも轟頂、売物に、ウ花も実もある亭主中が詞、ハルウアイと返事も泡沫の、ウ淀む隙なく行く水の、ウ流れは絶えぬ勤め中の身、上妹をこいにおく座敷、中ノル引き別、ハルれてぞ三重。</p> <p>訳文：ヤ、新参の田舎者。そこにおらずに下へ行きや」「アイヤ、あの子のことも宮城野に、内々で仕込んでもらおうと、それを今頼みに来た。コレ、宮城野、随分今の事を、ナ、分ったか。オオ、それならばよい。サアサア早く行きや」「アイ、ちよつと顔を直して」「オオ、イヤ素顔でも随分美しい」と、嘗めるも轟頂口だが、売物に対しては花も実もある亭主の言葉、「アイ」と返事も消えていって、泡沫が涙みに浮ぶ隙もなく、流れていくように、流れの絶えることのない遊女の身は、妹を置いて奥座敷へと別れて行く。</p>
322	紀上太郎、容楊黨、焉烏旭、烏亭焉馬、三津環 「基太平記白石噺(浄瑠璃集)」 (第七 新吉原楊屋の場 〔四三〕姉妹、廊から請け出される P.596)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	ホへ、常悦殿の宿所まで行き戻り二里余り、半時かゝらぬその内に、韋駄天走り聞き及ぶ、日に三十里行く道の達者、地色ウホゝ、熊川三平出かされたり / \	②	秋夜→熊川三平 上下 男→男	③	なし	<p>〔四三〕姉妹、廊から請け出される、詞秋夜様これに、最前作平が廣筆、邪智深き台七めず油断は致すまじと、兩人疾より申し合せ、互ひに争ふ狂言の殺陣、直に常悦様の御宿所へ参り則ち用金三百両、後金明日持参の上、宮城野殿は身請け致さん、金子はこれにござります、〔嶋〕ホゝ、常悦殿の宿所まで行き戻り二里余り、半時かゝらぬその内に、韋駄天走り聞き及ぶ、日に三十里行く道の達者、地色ウホゝ、熊川三平出かされたり / \ と、〔新〕〔喜〕ハル嘗める詞に色作平、多島、詞台七この場を逃げ帰りし上は、如何致し候はん。</p> <p>訳文：熊「秋夜様、ここにおられたか。最前の作平の廣筆のことは、邪智深い台七はけつて油断しないであらうと、二人で早くから申し合せて、互いに争う芝居の殺陣。その後すぐに常悦様の宿所へ参り、さっそう用金三百両を受け取り、後金は明日持参の上で宮城野殿は身請けいたしました。お金はここにございます」秋夜「ホホ、常悦殿の宿所まで往復二里余り、半時からならぬその間には、韋駄天走りとは聞いている、一日に三十里行く道中の達者、ホホ、熊川三平よくやられた、よくやられた」と、嘗める言葉に作平、多島は、「台七がこの場を逃げ帰ったからには、どのようにいたしましたでしょうか」</p>
323	紀上太郎、容楊黨、焉烏旭、烏亭焉馬、三津環 「基太平記白石噺(浄瑠璃集)」 (第八 宇治常悦屋敷の場 〔四八〕姉妹の幻術による敵討ち P.618)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	ア天晴 / \、ハテ教へたり覚えたり	②	秋夜→小娘 上下 男→女	③	なし	<p>なるまい、否なら地ウかうぢやと宮城野目がけ、ハルきりと手裏剣、すかさめ信夫、ウ露地下駄取つて色しつかと受け、詞コリヤ、姉様を何とすると、地ハル詰め寄る擬勢におせつが片唾、ウ秋夜覓とれて、詞ア天晴 / \、ハテ教へたり覚えたりと、地ウあたりきフシはらぬ詞の褒美、詞や、きつい嘗めやうナア、コリヤ小あまめ、れちやならぬ、その小柄これへ持て、</p> <p>訳文：「できまい。否ならばこうじや」と、宮城野を目がけてきりと手裏剣を投げると、油断のない信夫は露地下駄を取ってしつかと受け止めて、「コリヤ、姉様をどうする」と、詰め寄る意気込みにおせつは固唾を呑み、秋夜は見とれて、「ア、あつぱれ、あつぱれ。ハテ、教えたじ覚えたりと、当り障りのない言葉の褒美に、「ヤ、たいそうな嘗めようだナア。コリヤ、小娘め、盗み取られてはかなわぬ、その小柄をここへ持つてこい」</p>

324	紀上太郎、容楊黛、焉烏旭、烏亭焉馬、三津環 「基太平記白石噺(浄瑠璃集)」 (第八 宇治常悅屋敷の場〔四八〕姉妹の幻術による敵討ち P.619)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	なし	なし	秋夜とおせつ→宮城野の早業 上下 男→男	⑤	なし	アイ、早う持て、アイ、地ウ早うと大人気なく、ハル小柄に事寄せ差し出す手先、取らんず気色に宮城野が、弁ぱつしり黒右衛門、腕に当って払ふ間に、通れる信夫、悦ぶ秋夜、おせつは早業教へ方、心で營めるも、ハルフシ互ひの目遣ひ、地ハル膨れ返つて色黒右衛門、詞どいつもこいつも、よい気味さうな眠付き、見たくないぞ。 訳文:「アイ」「早く持て」「アイ」「早く」と大人気もなく、小柄に事寄せて差し出す信夫の手先を捕まえようとする気色に、宮城野が筭をばしりと打つと、黒右衛門の腕に当って、払う間に信夫は逃れる。喜ぶ秋夜と早業を教えたおせつは心で營めるが、二人の目遣いを察して、膨れかえって黒右衛門は、「どいつもこいつも気味よさうな眠付き、見たくないぞ」
325	紀上太郎、容楊黛、焉烏旭、烏亭焉馬、三津環 「基太平記白石噺(浄瑠璃集)」 (第八 扇が谷敵討ちの場〔五一〕姉妹、台七を討ち取る P.631)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	なし	なし	人々→小鷹、隼 上下 不問→動物	③	なし	詞親の敵志賀台七、宮城野、信夫が討ち取つたりと、地ウにつこと笑うて立つたる有様、ハル悦ぶ島田、同意の面々、ウ巢立ちの小鷹、隼が、ウ鶯を羽うつて当てる如く、ウ感じ入る声營める声、暫ウフシしは鳴りも止まざりし、地ウ息つぎあへず、色これ信夫、詞兼ねてそなたに言ひおくり、かく本望を達した上は。 訳文:「親の敵志賀台七を宮城野と信夫が討ち取った」と、にっこりと笑って立っている有様を見て、喜ぶ島田や同志の人々。巢立ちした小鷹と隼が鶯を羽ばたきして倒したようで、感心する声や營める声はしばしの間鳴り止まない。一息も置かずし、「これ、信夫。前よりそなたに言っていた通り、このように本望を達した上は」
326	四方赤良(大田南畝)、唐衣橘州、朱楽菅江ほか 「狂歌」 (唐衣橘州 P.499)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	③	本歌→江戸花火 不問 不問→もの	①	なし	寄花火恋物思へば川の花火も我が身よりぼんと出でたる玉やとぞ見る 訳文:和泉式部の「物おもへば沢のぼたるもわが身よりあくがれ出づる玉かとぞ見る」(後拾遺・雑六・神祇)を本歌とする。本歌が激しい恋の思いを螢の光に託したのに対し、橘洲はこれを江戸の夏の風物たる花火に置き換え、「ぼん」といった口語を用い、江戸花火の營め言葉「玉屋」の語で結ぶところが、いかにも橘洲が標榜した江戸狂歌らしい特徴だといえよう。
327	四方赤良(大田南畝)、唐衣橘州、朱楽菅江ほか 「狂歌」 (腹唐秋人 P.574)	江戸時代中期	韻文(三人称)	なし	なし	十露盤勘定→名月 不問 不問→もの	なし	なし	月ーりんもこよひは空にかけねなしこれぞ正礼つきの代物 訳文:「一輪」に「一厘」を掛け、「掛け値なし」に月の欠けることがない意を掛け、「(正礼)付き」に「月」を、「代物」に「月代」を掛ける。中秋の名月の今宵の月には僅かな欠もなく、これこそ一厘の掛け値もない真正正銘の名月で、まったく正礼付きの代物、月代の名に価する、との意。十露盤勘定で名月を營め称えるという不似合いさは、狂歌特有の技法といってもよいが、言語技巧の卓抜さが一首に腰の据わりよさを与えているのはさすがといつてよい。
328	井原西鶴「好色一代男(井原西鶴集)」 (好色一代男 巻八 目録 都のすがた人形 P.245)	江戸時代中期	小説(三人称)	我京にて、三十五両の鶉を焼鳥にして太夫の肴にせし事も、今この酒宴におどろき、風俗も替りてしをらし	②	世之介→大宴会 不問 男→こと	②	なし	折節初紅葉の陰に自在をおろし、金の大燗鍋、「もろこしの酒功讃を還す」とて、遊女三十五人おもひ／＼の出立、紅の網前だれ、より金の玉だすき、あや杉のおもひ葉をかざし、「岩井の水は千代ぞ」とて、乱れ遊びの大振舞。「我京にて、三十五両の鶉を焼鳥にして太夫の肴にせし事も、今この酒宴におどろき、風俗も替りてしをらし」と營むれば、「都の女郎さまがたの風情を知たい」といふ。「それこそわけ知りの世之介様に尋ねられ」といふ。「幸ひこのたび持たせたる物あり」とて知りの世之介様に尋ねられ」といふ。「幸ひこのたび持たせたる物あり」とて、長櫃十二さきを運ばせ。 訳文:折からの初紅葉の木陰に、自在鉤を下ろして、金の大燗鍋を掛け、唐土の酒功讃の心を還すのだといって、三十五人の遊女が思い思いのいでたち、紅の網前垂れ、鍍金のたすき、綾杉の思い葉をかざし、岩井の水は千代ぞ、とばかり、乱れ遊びの大宴会であった。「私も京で三十五両の鶉を焼鳥にして、太夫の肴にしたこともあるが、今この酒宴の豪勢さには驚きました。それに、女たちの風俗も変わっていて、しおらしい」とほめると、「都の女郎様方の様子が見たい」と女郎たちが言う。「それこそ粋人の世之介様にかがけないさい」と言う。世之介は、「幸い、このたび持ってこさせたものがある」と長櫃十二棹を運び込ませた。
329	井原西鶴「日本永代蔵(井原西鶴集)」 (日本永代蔵 巻一 目録 世は欲の入札に仕合せ P.44)	江戸時代中期	小説(三人称)	一座の公儀ぶりよき人	①	人→男 不問 不問→男	③	なし	或は又、娘持ちたる親は、おのれが分限より過分に先の家が好き、身代の外、望の生れ付、諸芸ありて人の目立つ程なるを聞き合せけるに、小敷うてば博奕うち、若い者ぶりすれば傾城ぐるひ止まず、一座の公儀ぶりよき人との營むれば、野郎あそびに金銀をつひやしめ、これを思ふに、男よくて身過にかしこく、世間にくとからず親に孝ありて、人にくまれず世のためになる人、望に取りたきとて尋ねてもあるべきや。 訳文:あるいはまた、娘をもった親は、自分の資産よりいっそう立派な相手を望んで選好みし、財産のほかは、婿の男振りがよく、諸芸の嗜みがあったり、人の目に立つほどなのを聞き合せて、縁組しようとするが、小戯を打つほどの者は博奕をうつし、実直な手代らしく見えるかと思えば遊女狂いがやまない男だったり、一座の社交が上手と人がほめる男は、野郎遊びに金銀をつかう者だったりする。これを思うに、男振りがよくて商売上手で、世事に通じて親孝行で、人に憎まれず世のためになる人を、婿に取りたいと尋ねまわっても、いるはずはない。
330	紀上太郎、容楊黛、焉烏旭、烏亭焉馬、三津環 「基太平記白石噺(浄瑠璃集)」 (第七 新吉原揚屋の場〔三五〕大福屋二階の身仕舞部屋 P.569)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	一人はよい	①	新造→客衆 不問 男→男	②	なし	したが知つた顔でもあるかや、イ・エ、どれも／＼侍衆さ。一人はよいが外に独りは嫌くろしい髻の、目の大きな花魁の客衆だと、吉野屋の兄様が言ひなんした。もいやな客人でござんすと、地ハル悪く言ふのも營むるのも、フシにべなき新造の後生衆、詞コレ／＼、またそんな事言うて、遣手衆に叱られようぞえ、お前方はマア座敷へ行きなんせ。 訳文:ところで、知った顔でもおられるのか」「イイエ、どなたもどなたも侍衆さ。一人はよいが、もう一人はむき苦しい髻の、目の大きな人で、それが花魁の客だと、吉野屋の若い衆が言われてた。モ、好かない客人でございます」と悪く言うのも營めるのも、愛想のない新造の気楽さである。「コレコレ、またそんなことを言って、遣手衆に叱られるぞえ。おまえ方はマア、座敷へ行きなさい」
331	近松門左衛門「鍵の権三重帷子(近松門左衛門集)」 (上巻 浅香市之進屋敷の場〔六〕髪梳き P.597)	江戸時代中期	フィクション(三人称)	これは／＼、地中奥様いかいお上手。額付、ウ髪付で、下地のよいお顔が、ウなほ美しううならしやんして、女子でさへ心気が湧く。裸身をウむつくりと、抱いて寝たい	②	女中→奥様、子 下上 女→女	③	なし	詞それの、格別よい子になりやつた。嘘ならその鏡を見や、親の目は蟲眞目、他人が証拠。万来いよ、飯炊きの杉も、ちやつと来て、おきくが髪付見てくれい、あい／＼と走り出で、これは／＼、奥様いかいお上手。額付、髪付で、下地のよいお顔が、なほ美しうならしやんして、女子でさへ心気が湧く。裸身をむつくりと、抱いて寝たいと褒むるもあり。杉がはたと手を色打つて、詞アへさうちや、日頃の不審が今晴れた。わしが鏡で顔を見て、生地は随分よけれども、人が惚れぬ、異なことと思うたが、髪を結びやうばつかりで、あつたらこの身が埋れ木ちや。 訳文:「それぞれ、特別よい子になった。嘘と思うなら、その鏡を見てごらん。親の目は蟲眞目、他人が証人、万来いよ、飯炊きの杉も、早く来て、おきくの髪かたちを見ておくれ」「あいあい」と、走り来て、「これはこれは、奥様たいへんお上手、額つき髪かたちで、もともとよいお顔が、いっそう美しくなられて、女でさえ心がひかれる。裸の体をむつくりと抱いて寝たい」と褒める者もいる。杉ははたと手を打って、「アアそうだ、日ごろの疑問がいまわかった。わたしが鏡で顔を見て、下地はずいぶんよいのだが人が惚れぬは変ななことと思っていたが、髪を結い方ばかりで、もったいないこの身を埋れ木にしていた。
332	井原西鶴「好色一代男(井原西鶴集)」 (好色一代男 巻一 目録 袖の時雨は懸るがさいはひ P.30)	江戸時代中期	小説(三人称)	よき	①	人→世之介 不問 不問→男	②	なし	袖の時雨は懸るがさいはひ、浮世の介魅しき事、十歳の翁と申すべきか。もと生れつきうらはしく、若道のたしなみ、その頃下坂小八がかりとて、賢切してたて懸けに結ふ事時花りけるに、その面影情らしく、「よきとほむる人のあらば、ただは通らじ」と、常々ところをみがきつれども、まだ差別あるべきと思はず、世の人、雪の梅をまつがごとし。 訳文:袖の時雨はかかるが幸い、世之介の生意気なことといったら、十歳の翁ともいうべきであろうか。もともと生れつきが美しく、若衆としての身嗜みもわかまへ。そのころ下坂小八風といって、鬘を短く切て耳の後ろに垂らし、髻を立てかけたように結うことが流行っていたが、そのように結った世之介の様子が、いかにもあだっぽく、自分でも「ほめてくれる人があつたら、そのままに見過ごしはせぬ」つもりで、かねて衆道の意気地を磨いていたが、よそ目にはまだ世之介に情の道のわかまへがあらうとも思われず、ちょうど雪中に梅花の開くのを待ち望んでいるような状態であった。
333	十返舎一九「東海道中膝栗毛」 (東海道中 膝栗毛四編 上・下(扉) 道中膝栗毛四編 下 P.224)	江戸時代後期(1802～09年成立)	戯作(三人称)	やんやア	①	あんま→北八 対等 男→男	③	なし	北八「やるはやろうが、ほめてもらはにやアはりやいがねへから、こうしやせう。わしがおどりました所で、おめへのつむりをちよいとなでよふから、それをきつかけに、やんやアとほめてくんな。よしか／＼。ソレおどるぞ」とりのうた「とけぬおもひはふたつ箱みつづいづともり舟、それがくがいのゆきちがひ、ハリサ、コリヤサ、ト三味せんにあはせて北八手をたゞきをどるまねをして、北八「よい／＼／＼よいやア、トおどりしまい、ざとうのあたまをちよいとあしにてなでると、あんま」ときに旦那がたは、ちと当宿のおつてもおよびなされ 訳文:なし

334	十返舎一九「東海道中膝栗毛」 (膝栗毛六編 上・下(扉) 道中膝栗毛六編 下編 P.372)	江戸時代後期(1802～09年成立)	戯作(三人称)	むしやうにやすい	①	北八→店 上下 男→不問	①	なし	北八「四百にはやすいもんだ 卜此ふたりは、さけもさかなもあげ代の四百のうちだとおもひ むしやうにやすいとほめる 金五「サアひとつあがりなされ 北八「はじめよふ。ヲト~~~~ひらはなんだ。ハハア窓にはんべいはきこへたが、こつちでははんべいをやくと見て、まつくろにこげてあらア 訳文:なし
335	十返舎一九「東海道中膝栗毛」 (道中膝栗毛四編 下 P.225)	江戸時代後期(1802～09年成立)	戯作(三人称)	ヤンヤアゑらい / \ ハ~~~~	①	あまんさん→北八 対等 男→男	③	A	北八「よい / \ / \ よいやさア トおどりしまい、ざとうのあたまをちよいとああしにてなでると あんま「ヤンヤアゑらい / \ ハ~~~~ 北八「なんとおもしろかるふ。もひとつやろふか 又となりのうた「さす手ひく手にわしやどこまでも、浪のうきねの梶まくら 北八「よい / \ / \ よいやなアト又あしにてざとうのあたまをなでる あんま「ヤンヤ / \ 北八「ハ~~~~おもしろへ / \ ト此うちやどのおんな「おゆにおめしなされませ 北八「弥次さんもふしめへか。しめへなら湯にいらせへ。あんまさんが、おどりをほめてくれたかばかりに、是からわつちももんでもらふ。 訳文:なし
336	十返舎一九「東海道中膝栗毛」 (道中膝栗毛七編 上 P.395)	江戸時代後期(1802～09年成立)	戯作(三人称)	なし	なし	北八→役者 上下 男→男	③	なし	北八「ナニ大根とは、アノ役者のことか。何のこつた 見物「ヨウでけますの 北八「ありがてへと申やす ト此きたハいたつてしばゐずきゆへ、まくがあくともちうとなり、何もかもうちわすれて、むしやうに大きなこへしてほめるゆへ、見物みな / \ おかしがり、きたハのほうを見ていると 北八「ヨウ / \ 大根め / \ 此大根といふ事は、上がたにては、役者の下手なものを大根といふ。 訳文:なし
337	十返舎一九「東海道中膝栗毛」 (道中膝栗毛四編 下 P.225)	江戸時代後期(1802～09年成立)	戯作(三人称)	ヤンヤ / \	①	あまんさん→北八のおどり 対等 男→男	③	A	北八「よい / \ / \ よいやさア トおどりしまい、ざとうのあたまをちよいとああしにてなでると あんま「ヤンヤアゑらい / \ ハ~~~~ 北八「なんとおもしろかるふ。もひとつやろふか 又となりのうた「さす手ひく手にわしやどこまでも、浪のうきねの梶まくら 北八「よい / \ / \ よいやなアト又あしにてざとうのあたまをなでる あんま「ヤンヤ / \ 北八「ハ~~~~おもしろへ / \ ト此うちやどのおんな「おゆにおめしなされませ 北八「弥次さんもふしめへか。しめへなら湯にいらせへ。あんまさんが、おどりをほめてくれたかばかりに、是からわつちももんでもらふ。 訳文:なし
338	上田秋成「春雨物語」 (樊かい 上 P.524)	江戸時代後期(1808年成立)	フィクション(三人称)	なし	なし	母と兄嫁→大蔵 上下 女→男	③	なし	こののちは心あらたまりて、兄がしりに立ちて、木こり、柴荷ひかへりて、親の心をとるほどに、大かなれば兄とは刈りまさり、銭多にかふるを、母と嫁とはほめごととして喜ぶ。年も暮れぬ。いつの年よりは、大蔵がかせぎするに、銭三十貫文を積みて、「此のとしよし」と、父も兄も心よくいふに、母とよめとは、「まことに」とて、大蔵に布子ひとへ新しくうじて着す。 訳文:このことがあってから、大蔵心を入れ替え、兄の後について木を伐り柴を担いで帰っては親の機嫌を取り結んだが、力量者だったので、兄に比べて働きも多く、銭もたくさん稼いできた。母親と兄嫁、これに氣をよくして、大蔵を褒めては喜んだ。その年も暮れた。いつもの年よりも、大蔵が稼いだせいで突入りも多く、銭も三十貫も溜って、父も兄も「今年は景氣がいい」と上機嫌というので、母親と兄嫁、「本当にそうじゃ」と喜んで、大蔵に綿入れ一枚を新調して着せた。
339	曲亭(滝沢)馬琴「近世説美少年録」 (近世説美少年録(扉) 新局玉石童子訓 第三版(扉) 新局玉石童子訓 卷十一 第四十一回 観音寺の城に衆少年武芸を呈す 弓馬槍棒主僕朱之介を懲す P.43)	江戸時代後期(1829～32年成立)	小説(三人称)	射たり / \	①	老党近習→大江 上下 男→男	③	なし	其盾約莫十隻あまり、架屋の辺を過る時、箭を搔抓みて投上れば、是にぞ驚く一行の、盾は乱れて降り来る。箭程を量りし末大江、克爾固めてひょうと射る。修練達はず二隻の盾、地上に轟と壁しかば、架屋に待る老党近習、慄はずも声を合して、「射たり / \」と誓みにけり。 訳文:その雁は約十羽あまりで、仮屋の上を通過する折、矢をつかみ持って放り投げると、これに驚いて一列の雁は乱れ散って降りて来る。射程を測って、朱之介・社四郎がよく引きしぼって、ひょうと射ると、その腕前に背かず、二羽の雁が地面にはたと落ちたので、仮屋に控えていた家来一同は、思わず声を揃えて、「射当てた射当てた」と誓めそやした。
340	曲亭(滝沢)馬琴「近世説美少年録」 (近世説美少年録 第一輯 式 第三回 賊巢を突て弘元連盈を捕ふ、蛇穴を焼て義興禍胎を遣す P.74)	江戸時代後期(1829～32年成立)	小説(三人称)	なし	なし	弘元→功績のある部下 上下 男→男	⑥	なし	されば寄手の雑兵も、疲負ふたるものなきにあらねど、彼鳥銃にて撃れしものだに、幸ひにして死に至らず。却説弘元は、洞の前門を攻めしたる、隊兵をもこゝに聚合て、功あるを誉め、疲勞したるを勞ひ、且被傷者等を勦るに、薬の準備あらざれば、はやくも心つくよしありて、きのふ素陀六夫婦が贈りたる、草葉を推揉て、その瘡口に布させしに、愈立地に疼痛去て、幾程もなく愈にけり。 訳文:一方、寄手では、雑兵も負傷した者がいないではなかったが、例の鉄砲で撃たれた者でさえ、幸いにして死なないですんだ。さて、弘元は、洞窟の正面を攻めさせた部下をもこの場に集めて、功績のある者は褒め、疲れた者をねぎらい、また負傷者を介抱しようとしたが、薬の用意がないので、即座に思い当ることがあって、昨日、素它六夫婦が贈った草の葉を押しもんで、その傷口につけさせると、みなたちまち痛みが消えて、まもなく治癒した。
341	曲亭(滝沢)馬琴「近世説美少年録」 (近世説美少年録 第一輯 式 第四回 御廟野に興房阿夏に遭ふ 鴨河原に両情春夢を結ぶ P.100)	江戸時代後期(1829～32年成立)	小説(三人称)	なし	なし	人→瀬十郎 不問 男→男	③	なし	扱も這瀬十郎は、今茲廿一になりぬ。女子にして見まく欲しき、相貌いと美しく、心ざま亦風流を好みて、詩を賦し歌をよむに疎鹵ならず。且雑楽艶曲の技をすら、愛軟ずといふことなければ、いとはやくより多芸の聞えあり。さばれ周防に在りし程こそ、人も誉めわれも亦、こゝろ得真なりけるに、今茲皇城の地を踏初て、京師の手ぶりを見てしより、心裏恥しき事多かり。 訳文:ところで、この瀬十郎は、今年二十一歳になった。女性にしてみたいような美貌の持ち主で、性質もまた文雅なことを好み、漢詩を作り唱歌を詠むことに長けていた。そのうえ、雑楽や艶曲といった芸能さえ何でも愛好するので、たいそう早い時期から多芸という評判があった。とはいってもの、周防という地方にいた時分こそ人も褒め自分もまた得意顔であったが、今年京都に初めてやって来て、都の流儀を見聞してみると、心中に慢心していたことを恥じることが多かった。
342	曲亭(滝沢)馬琴「近世説美少年録」 (近世説美少年録 第一輯 五 第十回 関帝廟に少年義を結ぶ 福富村に幼女別を惜む P.242)	江戸時代後期(1829～32年成立)	小説(三人称)	なし	なし	屯倉阿鍵→珠之介 上下 男→男	③	なし	阿鍵は既に二十の上を、五ツ六ツにやなるべからん、容止は尋常なるに、そが女兒の黄金のみ、肌膚清らかにして玉のごとく、眉目容貌の母に優れる、卵の中なる春の唐鳥、尚二葉なる花もみちの、後の色香を思ひやられて、人の子ながら愛々しさに、ものいひかけて慰れば、屯倉阿鍵も珠之介が泛々ならぬ細致を誉めて、その身の側に招き近づけ、名を問ひ、又年才を問て、壺なる菓子を取らすれば、黄金も亦珠之介を愛軟べる面色にて、岩齧架の下に措れし、絵巻の箱をうち披きて、珠之介に見せしかば、珠之介ははやくも押て、黄金と傾し燈燭の、下によりつゝ遊びけり。 訳文:お鍵は、もはや二十を五、六歳上回っていようか、容姿は普通であるが、その娘の黄金だけは、肌が美しく玉のようで、容貌・容姿は母にまさって、卵の中の春の唐鳥が、まだ二葉の桜や紅葉のように、将来の色香が推し量られる。他人の子ではあるが愛くるしいので、お夏が黄金に言葉をかけて機嫌を取ると、屯倉・お鍵も珠之介の並々ならぬ器量を褒めて、自分の傍らに招き寄せ、名を聞いたり、また年齢を問うたりして、壺の菓子を与える。黄金もまた珠之介を気に入った様子で、違い棚の下に置かれた絵巻の箱を開いて、絵巻を珠之介に見せると、珠之介は早くも黄金になれ親しくなり、一緒に灯火のもとに寄って遊んでいる。
343	曲亭(滝沢)馬琴「近世説美少年録」 (新局玉石童子訓 卷二十四 第五十四回 渾不似を弁じて防守宿を移す 小雪太名を窮て巧に悪を資く P.435)	江戸時代後期(1829～32年成立)	小説(三人称)	彼仙丹の神妙なる、己等が身に取 りて、起死再生といひつべし。角力白 打を嗜者、貯禄て身を放さずば、人 を救ひ己を救ふ、神仏の擁護にも、 優て悪しかりぬべし	②	季彦と八重作→両賢兄の仙丹 対等 男→男(もの)	①	なし	「爾らんには安堵たり。就きて亦情願あり、両賢兄の仙丹は、効験己も知る所、いかで少許賜らば、白打角力の上に就きて、未然の怪我を防ぐべし。いかで / \」と乞求れば、季彦と八重作も、共に称赞賀メソヤして、「彼仙丹の神妙なる、己等が身に取って、起死再生といひつべし。角力白打を嗜者、貯禄て身を放さずば、人を救ひ己を救ふ、神仏の擁護にも、優て悪しかりぬべし」と誓れば樫二郎「然なり」と答て、「己彼仙丹を、聊なりとも得たらんには、不断この身を放つことなく、角力の場に迄日は、裸体ハダカミの準備に最小なる、貝に移して髻の裏に、藏めてもて急用に充ん。両賢兄饒し給はずや」 訳文:「それならば安心した。それにつき、別に願ひがある。お二方の仙薬は、効き目は私も知るとおりだが、どうか少々なりとも下さるならば、柔術・相撲の場合において、あらかじめけがを防ぐだろう。どうか、どうか」と頼み求めると、季彦も八重作も、揃って褒めそやして、「あの仙薬がよく効くことは、私たちの体にとっても、起死回生のものと言えます。相撲・柔術を好む者が、持っていて身から離さなければ、人をも自分をも救ひ、神仏の守護にも優って、頼もしいことでしょう」と褒める。樫二郎は、「そうだ」と答えて、「私があの仙薬を、些少でも手に入れたならば、平生、身から離すことはなく、相撲の土俵に出る日には、裸身の時の用意として、小さな貝に入れて、髻の中に入れて、危急の際に用いよう。お二方、お許し下さらないか」

344	<p>為永春水「人情本」「春告鳥」 （風月花情 春告鳥 三編 風月花情 春告鳥 卷之八 P.490）</p>	江戸時代後期（1836年成立）	小説（三人称）	なし	なし	おはな・お清・理介→梅里 下上 女→男	④	B	<p>梅「なんぼ才物なおまへでも当なかつたネ くま「ヲヤ才智が否でございますヨ。おまへさんこそ御才物とやらでござゐますは。人の嬉しがる様なことばツかりおつしやつて。そしてマアおせじがよくツて、下女にまで叮嚀に物をおつしやつて。それだからあの子や おはなのことをさしていふ お清までか理介でも誰でも不躰ながらお賞申て居ますは 梅「イエまたおまへのお口前はその通りだものを。それだから私なんぞは行届ねへから、帰つた跡ではさぞ / \ うるさい奴が何時までも居て怠屈だといはれなひうち、帰らふと思つても、ツイ長くなって後ではどふも氣の毒でならなひから、言解ながら參つてなんぞと思つて、やつぱり来たいからだねへ。さぞげすんでお出なさるだらふ。</p> <p>訳文：なし</p>
345	<p>式亭三馬「滑稽本」 （滑稽本（扉） 凡例 酩酊氣質（扉） 酩酊氣質 下 さわぎ上戸 P.236）</p>	江戸時代後期	戯作（三人称）	どつ	なし	皆さん→芸人の洒落 対等 性別不明→男（もの）	③	なし	<p>是が腹の一献過。達磨大師の座禅豆では吞ませぬ。ハリトウ / \ / \ ところで皆さんどつとほめたり。アへくたびれたくたびれたサア / \ 酒 / \ むしやうやたらと面白い。</p> <p>訳文：なし</p>
346	<p>式亭三馬「滑稽本」 （柳髮新話 浮世床 二編 序 P.311）</p>	江戸時代後期	戯作（三人称）	どつ	なし	読者→作者の原稿 対等 性別不明→男（もの）	③	なし	<p>前編さきに発市より頻に二編を俟給へり。僥倖にして喝采のお声は、偏に先生の筆の輕業。どつと誉めたり、訕つたり、さま / \ に責められても無いものは金と趣向なり。</p> <p>訳文：なし</p>
347	<p>周滑平「しりうごと（近世随想集）」 （皇朝学者妙々奇談 しりうごと中之巻 第三 祐天大僧正、小山田与清を呵す 〔三〕京伝の恨みP.437）</p>	江戸時代	随筆（一人称）	醒が学風考据を専らとして、世のなま著述家の類に似ず。そのあらはせる『骨董集』に、孫引の一ふしだになきを見ても思ふべし	②	『漫筆』の作者→山東京伝 対等 男→男	①	なし	<p>〔三〕京伝の恨み 「また『漫筆』に、山東京伝がことを論じて、『醒が学風考据を専らとして、世のなま著述家の類に似ず。そのあらはせる『骨董集』に、孫引の一ふしだになきを見ても思ふべし』などと誉めておきながら、ひそかに京伝が説を奪ひしは何事ぞ。その説をいひ聞かすべきなれども、旁に門人どもも居る故、その方身を容るるに地無からんかと思へば、忍辱意を以て、その非はつつみてつかはずなり。</p> <p>訳文：「また『拙書漫筆』に、山東京伝のことを論じて、『山東京伝の学風は考証をもつぱらとして、世にある未熟な著述家とは異なる。その著書『骨董集』には、たった一節の孫引きさえないことから推量される』などと誉めておきながら、ひそかに、その京伝の説を奪つたのは何事か。その説をもうい聞かすべきであるけれども、傍らに門人たちもいるゆえに、その方も身の置き所がないかと思うので、寛容の心をもつて、その非は見逃してやるのである。</p>
348	<p>北村季吟、上嶋鬼貴、横井也有ほか「近世俳文集」 （豆腐ノ弁（許六） P.495）</p>	江戸時代	俳文（一人称）	なし	なし	耳垢の汚れた者ども→巢父（許由の耳の汚れたるをにくむこと） 対等 男→男	⑤	なし	<p>天下国家のたくはへは輕うして棄つるにやすく、耳中の瓢の蓄は重うして捨つるに難し。巢父が牛をあらはざるは、元来許由が耳の汚れたるをにくむなるべし。和漢同じ耳垢等がほめししたるこそ口をしけれ。されば前後なき事をみつからしらは、すたりたる田舎豆腐も、開關一丁の豆腐に異る事はなかるまじかし。</p> <p>訳文：天下国家の蓄えは輕くて、捨てるに簡単で、耳の中に残っている瓢の蓄えは重くて捨てるにむずかしい。巢父が牛を洗わなかったのは、もともと許由の耳の汚れを憎むためであろう。和漢ともに耳垢の汚れた者どもがそのことをほめししたるは残念なことである。だから古今優劣がないということのみずから知るならば、すたっている田舎豆腐も、国がひらけてからこのかた一丁の豆腐に異なることはないだろうよ。</p>
349	<p>後水尾院、冷泉為村、香川景樹ほか「近世和歌集」 （近世中期（扉） 賀茂真淵 P.247）</p>	江戸時代	和歌集（三人称）	なし	なし	飛驒たくみ→真木柱 上下 男→もの	なし	なし	<p>出居をいにしへぎまにつくりけるころ人々つどひて歌よみけるにおのれもよめる 飛驒たくみほめてつくれる真木柱たてしころはうごかましやも〔賀茂翁家集〕賀・三六七〕</p> <p>訳文：応接間を古風に造った頃、人々が集って歌を詠んだので、自分も詠んだ歌 飛驒の大工が祝福して作った横の柱を立てるように、我々が立てた志は微動だにしようか、いやしない。</p>
350	<p>松永定徳「貞徳翁の記（近世随想集）」 （慶長十年六月 P.26）</p>	江戸時代	随筆（一人称）	見事。けつかう。うつくし。うやうやしなり。くすみたり。	①	備中屋一増→五色 上下 男→もの	①	なし	<p>今も先例なき国所の名なりとも、よろしくは、やはらげつ、いはでかなはぬ時は申すべきか如何。くるしからず。一 五色のほめやう。青、見事。黄、けつかう。赤、うつくし。白、うやうやしなり。黒、くすみたり。備中屋一増かたりけりて、其の門弟、笛吹矢野道九申せし。</p> <p>訳文：今も先例のない国所の名であっても、よろしく、やわらげて、言わなければならない時は言った方がよいでしょうか、そうではないでしょうか。言ってもよろしい。一 五色のほめ方。青は見事、黄色は結構、赤は美しい、白はうやうやしい、黒はくすんでいる。と備中屋一増が語った、といってその門弟の笛吹矢野道九が申された。</p>
351	<p>周滑平「しりうごと（近世随想集）」 （皇朝学者妙々奇談 しりうごと上之巻 第一 聖徳太子、平田篤胤を罵る 〔二〕聖徳太子、平田篤胤を罵る P.418）</p>	江戸時代	随筆（一人称）	上宮太子全依＝経史之例＝、能勞＝文筆之体＝	①	中古の者→聖徳太子 下上 不問→男	①	なし	<p>神代字用ふべくは、今こころみに用ひて見よ。誰も一人として読み得るもの有るべからず。余ももとより皇子なり。皇朝の古事実伝を、よく後世にも伝へたき故に天皇記、国記を作りて、日本紀などの嚆矢となりしなれば、『上宮太子全依＝経史之例＝、能勞＝文筆之体＝』（上宮太子全く経史の例に依り、能く文筆の体に勞す）などと、中古の者もほめたるなり。余は用明の御子、崇峻の御甥、推古の太子。尊き事天子に垂ぎ、神道を起復し、儒道を再興し、仏法を張行し、その余百千の技術諸工、大方まろが巧夫を離れたるはなきに、汝一介の凡下、卑賤の匹夫にして、口ひろく余を罵ること、僭上無礼、孔子のいはゆる『その国に居ては、その太夫をだも譲らず』という義にもととり、はなはだ以て不埒なり。</p> <p>訳文：神代字を用いるのなら、今試しに用いてみなさい。誰一人として読むことができる者はいるはずがない。私ももとより皇子である。皇朝の故実や実伝を後世にもよく伝えたいために、天皇記、国記を作って日本紀などのはじめとなつたので『聖徳太子は経書と歴史書の例に則り、よく文筆の労をとった』と、中古の者もほめたのである。私は用明天皇の御子で崇峻天皇の甥、推古天皇の摂政である。尊いことは天皇に次ぎ、神道を起こし、儒教を再興し、仏法を広め、その他百千の技術の中で、おおよそ私が工夫を加えていないものはないのに、汝のような一介の男で身分も低い者が口はばったくも私を罵ることは、僭越であり無礼なことであり、孔子がいう、『その国においては、位の高くない大夫のことさえそしらない』という義にもととり、はなはだ不埒なことである。</p>
352	<p>戸田茂睡「紫の一本（近世随想集）」 （紫の一もと 巻一 御城廻り P.43）</p>	江戸時代	随筆（一人称）	なし	なし	唐人→飯田町（むかし飯田某の屋敷） 上下 不問→場所	①	なし	<p>田安の御門前より下る坂の町を飯田丁と云ふ。昔飯田の某が屋敷ありし故なり。それより御堀に付きて行けば、清水御門なり。この門へ入りて左の方へつきて坂をのぼる。冬は暖かにして、夏むきの涼しさ、こぬ秋のいつ暮れ果てぬらんと疑はる。昔唐人、この御門へ入りて、景地を褒めたるといふ事あり。</p> <p>訳文：田安の御門前から下る坂の町を飯田町という。むかし飯田某の屋敷があったための名である。そこから御堀に沿って行くと、清水御門である。この門の中に入って左の方を向いて坂を登る。冬は暖かく、夏に適した涼しさは、まだ来ていない秋がいつのまに暮れてしまったのだらうか、と疑われるほどである。昔、外国人がこの御門に入って、景色をほめたということがあった。</p>
353	<p>戸田茂睡「紫の一本（近世随想集）」 （野 〔二〕手向野 P.170）</p>	江戸時代	随筆（一人称）	なし	③	世の人→何右衛門 不問 不問→男	④	なし	<p>壱人の子あり。名を何右衛門と云ふ。父には遙かに生まれまさりて、心賢く器量すぐれければ、世の人もとぐひなき様に影もなく褒めぬれば、まして親の心の内には手の内の真尼珠、掌の如意宝珠と思ひたりしに、天和二年中の冬の三十日、年十八にて世を去りぬ。</p> <p>訳文：一人の子供がいた。名前を何右衛門という。父よりはるかに天性に恵まれ、心賢く容姿も勝れていたので、世間の人も比類ないように表立って褒めたので、まして親の心には手の内の真尼珠、掌中の如意宝珠と思っていたところ、天和二年十一月三十日、年十八にて世を去った。</p>

354	戸田茂睡「紫の一本(近世随想集)」 (祭礼 〔五〕市谷八幡 P.228)	江戸時代	随筆(一人称)	なし	なし	江戸者→通りかかる人 不問 不問	②	なし	それを堺丁、木挽丁にてまねて、諸人に見せてから遠国までも知るなり。江戸者はいかほど美しき女、見事なる若衆、結構なる小袖を着て通れども、悪口をいはず、褒めもせず。道をもよけて通す。 訳文：それを堺町、木挽町でまねて、諸人に見せてから遠国までも知られるのである。江戸者は、どれほど美しい女や見事な若衆が、立派な小袖を着て通っても、悪口をもしわず、褒めもしない。道をよけて通す。
355	本居宣長「排蘆小船(近世随想集)」 (〔五一〕倭文章 P.346)	江戸時代	随筆(一人称)	なし	③	みな→中納言殿 下上 不問→男	③	なし	笑ふべきことのみなり。それを見て善悪を弁へる人もなければ、みなよきことぞと心得居るなり。「某の中納言殿の書きたまひし」などいへば、妄りに褒め敬ふ。さてその文章を見れば、一向に訳もなきことのみなり。これをよきことと思ひて、書くものを見るものもみな盲人なり。 訳文：笑うべきことばかりである。それを見て善悪を心得る人もないので、みなよいことだと心得ているのである。「なにがしの中納言様がお書きになった」などと言えは、むやみに褒め敬う。そしてその文章を見ると、まったく意味もないことばかりである。これをよいことと思って、書くもの見る者もみな盲人である。
356	周滑平「しりうごと(近世随想集)」 (皇朝学者妙々奇談 しりうごと中之巻 第三 祐天大僧正、小山田与清を呵す 〔四〕学問の評価 P.439)	江戸時代	随筆(一人称)	なし	なし	『漫筆』→清水浜臣と仲良かったこと 不問 不問→男	⑥	なし	かつ清水浜臣と中よりかしなどは、『漫筆』にもとところどころに營めて置きながら、『竺志舟』かの序文に左右のことより論おこり、乱酒の上とはいひながら、つかみ合同様の喧嘩をなし、のちに太田羣らがとりもちにて、やうやく仲直りとなりしとき、学問よみうたの甲乙をもて伯仲をさだめんには、おのおの不足のころあるべし。 訳文：かつ、清水浜臣と仲が良かったことなどは、『撫書漫筆』にも、ところどころで營めておきながら、『竺志舟』だったかの序文に、左右のことから論争がおこり、乱酒の上とはいひながらも、つかみあい同然の喧嘩をして、後の太田羣らのとりもちで、ようやく仲直りとなったとき、学問や詠歌の甲乙をもって実力の優劣を定めることには、それぞれ不満があるであろう。
357	周滑平「しりうごと(近世随想集)」 (皇朝学者妙々奇談 しりうごと下之巻 第六 弘法大師、屋代輪池翁を論す 〔二〕空海の屋代輪池翁批判1 P.469)	江戸時代	随筆(一人称)	なし	なし	嵯峨天皇→空海の書きもの 上下 男→男(もの)	①	なし	さて単鉤をよしと、空海の定めたるは、『古今著聞集』に、嵯峨天皇つねに空海と筆跡を争ひ給ひしに、ある時、空海が唐土にて書きたる一卷を、天皇しろしめさずして營め給ひしもの、つゝかみ空海がつかうまつりしなり』とて、巻軸をはなして、宋に某の年月沙門空海、と書きたるを見せ奉りしかば、天皇大きにおどろかせろの異なるを不審し給ひしかば、空海こたへて『それは国によりて書きかへて候なり』といひしことあり。 訳文：さて、単鉤をよしと、空海が定めたのは『古今著聞集』に、嵯峨天皇がつねに空海と筆跡の優劣を争っていたところ、ある時、空海が中国で書いた一卷を、天皇は御存じなく、お營めになった後、『実は空海が書いたものである』と、巻軸をはなして、巻末に某年月沙門空海、と書いたのをお見せしたので、天皇は大変驚かれて、その書体と、当時空海が書いた書体とが異なることを不審がられたので、空海が『それは、国によって、書体を変えたのでございます』と申し上げたことがある。
358	戸田茂睡「紫の一本(近世随想集)」 (船 〔三〕熊一丸 P.165)	江戸時代	随筆(一人称)	天下一、あつちやあ、あつちやあ	①	人→花火船 上下 不問→もの	①	なし	花火舟をば呼びかけて、一艘切りなたてさする。枝垂柳に大桜、天下太平文字うつり、流星、玉火に牡丹や蝶や葡萄に車火や、これにて仕出しの大からくり、挑灯、立笠御覧ぜよ。火うつりのあちはひは仕たり。「天下一、あつちやあ、あつちやあ」と誓むるもあり。北も南も西東、ここかしこにて立て上ぐれば、ただ日中のごとくなるに、玉火の出づる簡音、流星の上がる響き、人のわめく声にて、心静かに漕ぐ舟なし。 訳文：花火船を呼び求めて、一艘だけで出させた。枝垂れ柳に大桜、天下太平文字移り、流星、玉火に牡丹や蝶や葡萄に車火、これより仕掛けた大からくり、挑灯、立笠を御覧ください。火移りの妙味は尽くしました。「天下一、ありやあ、ありやあ」と誓めるものもいた。東西南北、あちこちで打ち上げるので、ほとんど日中のようであり、玉火が発射する時の大音、流星が上がる時の響き、人のわめく声によって、心静かに漕ぐ舟もない。
359	戸田茂睡「紫の一本(近世随想集)」 (むらさきの一もと 巻四 花 〔七〕柏木 P.204)	江戸時代	随筆(一人称)	史記の晋文公が狄の妻に契りし古事か。よう思ひ付きたる	③	陶々子→遺佚 不問 男→男	③	なし	匂ひは面香に似たり。花を折らせじとの事に、桜の廻りに竹の垣を囲ふ。その脇にて酒呑み、遺佚がよむ。柏木のふりたる塚は見えねども昔を残す桜花かなといへば、「史記の晋文公が狄の妻に契りし古事か。よう思ひ付きたる」とて、陶々子が誓むる。 訳文：匂いはういきように似ている。花を折らずまいとして、桜の回りを竹垣で囲ってある。その脇で酒を飲み、遺佚が詠んだ。柏木の……(あの柏木の古い塚は見えないが、その昔の跡を伝える桜花であることだ) ということ、「史記の晋文公が夷狄の妻に契った故事のことか。よく思い付いたことだ」といって陶々子がほめた。
360	戸田茂睡「紫の一本(近世随想集)」 (祭礼 〔五〕市谷八幡 P.228)	江戸時代	随筆(一人称)	なし	なし	田舎者→江戸 不問 不問→こと	⑥	なし	江戸者はいかほど美しき女、見事なる若衆、結構なる小袖を着て通れども、悪口をいはず、褒めもせず。道をもよけて通す。田舎者は江戸珍らしく思ふ故か、悪口をいひ褒むるなり。ただし江戸者にてても日用取、馬方などは悪口をいふ。 訳文：江戸者は、どれほど美しい女や見事な若衆が、立派な小袖を着て通っても、悪口をもしわず、褒めもしない。道をよけて通す。田舎者は江戸を珍しく思うためか、悪口をいいまた褒めるのである。ただし江戸者でも日雇いや馬方などは悪口をいう。
361	北村季吟、上嶋鬼貫、横井也有ほか「近世俳文集」 (おらが春(一茶) 添乳 P.587)	江戸時代	俳文(一人称)	よくした / \	①	父親→娘 上下 男→女	⑤	なし	ぼた餅や藪の仏も春の風一茶 添乳 こぞの夏、竹植うる日のころ、うき節茂きうき世に生れたる娘、おろかにしてもものにさとかれ逆、名をさととよぶ。ことし誕生日祝ふころほひより、てうち / \ あはゝ、天窓てん / \、かぶり / \ ふりながら、おなじ子どもの風車といふものをもてをを、しきりにほしがりてむづかれは、とみにとらせけるを、やがてむしや / \ しやぶつて捨て、露程の執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それまたどちに捲きて、障子のうす紙をめり / \ むしるに、「よくした / \ 」とほむれば誠と思ひ、きやら / \ と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。 訳文：ぼた餅や藪の仏も春の風一茶 添乳 去年の夏、五月の半ば、竹酔日に近いころ、憂きことの多いこの世に生まれた娘に、生まれつきは悪かでもやがてりこうになってくれと、名をさととつけた。今年誕生日を祝うころから、ちよううちようちあわわ、おつむてんてん、かぶりがぶり振りながら、同じ年のころの子供が風車というものを持っているのを、しきりに欲しがってむするので、すぐに持たせてやると、まもなくむしやむしやとしゃぶって捨て、少しの執着心もなく、すでにほかのものに心が移って、そこらにある茶碗を打ちこわしているかと思うと、それもすぐあきてしまい、障子の薄紙をめりめりとむしってしまうので、「よくした、よくした」とほめると、本当にほめられたと思って、きゃっきやっと笑って、一所懸命にむしってしまう。

参考資料Ⅱ

『青空文庫』

番号	出典	成立/発行年	文章の種類(小説(一人称・三人称)／ノンフィクション等)	表現	①肯定的評価語のみ使用 ②肯定的評価語の使用+他の情報 ③肯定的評価語の不使用	人間関係 関係(不特定の人がほめる場合、人が物をほめる場合は、「不問」とした) 性別(特定できない場合は、「不明」または「不問」とした。ものごとは明示せず)	対象 ①所持物 ②外見 ③能力 ④性格人柄 ⑤行動態度 ⑥状態	返答 A肯定的返答 B否定的返答 C回避的返答	本文
1	佐々木直次郎訳 エドガー・アラン・ポー「モルグ街の殺人事件」	1841(天保12)年4月号	小説(一人称)	明敏だ	①	世間の人→バリの警察 不問 不問	③	なし	「こんな見せかけだけの調査で、手段を判断してはならない」とデュパンが言った。「バリの警察は明敏だと褒められているが、ただ小利口なだけなんだよ。彼らのやり方には、ゆきあたりばったりの方法以上に、方法というものが無い。
2	幸田露伴「風流仏」	1889(明治22)年9月	小説(三人称)	能く仕付た	①	父→子供 上下 男→男	⑤	なし	遂に三歳の秋より引き取って膝下に育れば、少しは紛れて貧家に温き太陽のあたる如く淋しき中にも貴き笑の唇に動きしが、さりとては此子の愛らしきを見様とも仕玉わざるか帰家れざるつれなさ、子供心にも親は恋しければこそ、父様御帰りになった時は斯して為る者ぞと教えし御辞誼の仕様能く覚えて、起居動作のしとやかさ、能く仕付たと誉らるゝ日を待て居るに、何処の宦宮へ行かれて乙姫の傍にでも居らるゝ事ぞと、少しは邪推の怪気萌すも我を忘れられしより子を忘れられし所には起る事、正しき女にも切なき情なるに、天道怪しくも是を思はず。
3	黒岩涙香「無惨」	1889(明治22)年9月	小説(一人称)	愛嬌ある顔	①	世間の人→探偵 不問 不問→男	②	なし	五日の朝八時頃の事最寄警察署の刑事巡査詰所に二人の探偵打語らえり一人は年四十頃デブリと太りて顔には絶えず笑を含めり此笑見る人に由りて評を異にし愛嬌ある顔と褒めるも有り人を茶かした顔と貶るも有り公平の判断は上向けば愛嬌顔、下へ向ては茶かし顔なる可し、名前は谷間田と人と呼ばれる紺飛白の単物に博多の角帯、数寄屋の羽織は脱ぎて鴨居の帽子掛に釣しあり無論官吏とは見えねど商人とも受取り難し、
4	幸田露伴「五重塔」	1891(明治24)年11月～1892(明治25)年4月	小説(三人称)	好いは好いは、嗚呼気味のよい男児ぢやな、	①	上人→源太 上下 男→男	②	A	十兵衛も先刻に来て同じ事を云ふて帰つたは、彼も可愛い男ではないか、のう源太、可愛がつて連れ可愛がつて連れ、と心あり氣に云はるゝ言葉を源太早くも合点して、あゝ可愛がつて遣りますとも、といと清しげに答れば、上人満面皺にして悦び玉ひつ、好いは好いは、嗚呼気味のよい男児ぢやな、と真から底から褒美られて、勿体なさはありながら源太おもはず頭をあげ、お蔭で男児になりましたか、と一語に無限の感慨を含めて喜ぶ男泣き。既此時に十兵衛が仕事に助力せん心の、世に美しく湧たるなるべし。
5	黒岩涙香「血の文字」	1892(明治25)年8月刊	小説(三人称)	操堅固	①	不問→貴婦人 不問 不問→女	④	なし	茲まで考え来るときは倉子に密夫あるぞとは何人にも知るゝならん、密夫にあらで誰が又倉子が身に我所天よりも大切ならんや、唯だ近辺の噂にては倉子の操正しきは何人も疑わぬ如くなれど此辺の人情は上等社会の人情と同じからず上等の社会にては一般に道徳最と堅固にして少しの廉あるも直に噂の種と為り厳しく世間より咎めらるれど此辺にては人の妻たる者が若き男に情談口を開く位は当前の事にして見る人も之を怪と思わねば操が操に遭らぬなり、殊に又美人の操ほど当に成らぬ者は無く厳重なる貴族社会に於てすらも幾百人の目を偷みて不義の快楽に耽りながら生涯人に知れずして操堅固と褒らるゝ貴婦人も少なからず、物を隠すには男子も遙に及ばぬほど巧なるが凡て女の常なれば倉子も人知れず如何なる情夫を蓄うや図られず、若し情夫ありとせば其情夫誰なるや、如何にして見破るべきや。
6	内田魯庵「為文学者経」	1894(明治27)年4月	随筆(一人称)	ヤレオ子ぢやや伶俐者ぢや	①	不問→鮎男 不問 不問→男	③	なし	トベの結局が博物館に乾物の標本を残すか左なくば路頭の犬の腹を肥すが世に学者としての功名手柄なりと愚痴を覆す似而非ナツシユは勿論白痴のドン詰りなれど、さるにても笑止なるは世の是沙汰、飯粒に釣らるゝ鮎男がヤレオ子ぢやや伶俐者ぢやと褒めそやされ、偶さか活きた精神を有つ者あれば却て木偶のあしらひせらるゝ事沙汰の限りなり。騙詐が世渡り上手で正直が無氣力漢、無法が活潑で謹直が愚図、泥亀は天に舞ひ鳶は淵に躍る、さりととは不思議づくめの世の中ぞかし。
7	樋口一葉「大つごもり」	1894(明治27)年12月号	小説(三人称)	感心なもの、美事の心がけ	①	不問→山村の下女 不問 男→女	④	なし	世間に下女つかふ人も多けれど、山村ほど下女の替る家は有るまじ、月に二人は平常の事、三日四日に帰りしもあれば一夜居て逃出しもあらん、開闢以来を尋ねたらば折る指にあの内儀さまが袖口おもはるる。思へばお峯は辛棒もの、あれに酷く当たたらば天罰たちどころに、この後は東京広しといへども、山村の下女に成る物はあるまじ、感心なもの、美事の心がけと賞めるもあれば、第一容貌が申分なしだと、男は直きにこれを言ひけり。
8	樋口一葉「大つごもり」	1894(明治27)年12月号	小説(三人称)	第一容貌が申分なしだ	①	不問→山村の下女 不問 男→女	②	なし	世間に下女つかふ人も多けれど、山村ほど下女の替る家は有るまじ、月に二人は平常の事、三日四日に帰りしもあれば一夜居て逃出しもあらん、開闢以来を尋ねたらば折る指にあの内儀さまが袖口おもはるる。思へばお峯は辛棒もの、あれに酷く当たたらば天罰たちどころに、この後は東京広しといへども、山村の下女に成る物はあるまじ、感心なもの、美事の心がけと賞めるもあれば、第一容貌が申分なしだと、男は直きにこれを言ひけり。
9	樋口一葉「たけくらべ」	1895(明治28)年1～3、8、11、12月、1896(明治29)年1月	小説(三人称)	うまい	①	不問→子供 不問 不問	③	なし	孟子の母やおどろかん上達の速やかさ、うまいと褒められて今宵も一廻りと生意氣は七つ八つよりつのりて、やがては肩に置手ぬぐひ、鼻歌のそゝり節、十五の少年がませかた恐ろし、学校の唱歌にもぎつちよんちよんと拍子を取りて、運動會に木やり音頭もなしかねまじき風情。
10	樋口一葉「たけくらべ」	1895(明治28)年1～3、8、11、12月、1896(明治29)年1月	小説(三人称)	女らしい温順しう成つた	①	不問→美登利 不問 不問→女	④	なし	知らぬ者には何の事とも思はれず、女らしい温順しう成つたと褒めるもあれば折角の面白い子を種なしにしたと誅るもあり、表町は俄に火の消えしやう淋しく成りて正太が美音も聞く事まれに、唯夜な／＼の弓張提燈、あれは日がけの集めとしるく土手を行く影そゞろ寒げに、折ふし供する三五郎の聲のみ何時に變らず滑稽では聞えぬ。
11	樋口一葉「たけくらべ」	1895(明治28)年1～3、8、11、12月、1896(明治29)年1月	小説(三人称)	うまい	①	不問→信如 上下 女→男	③	なし	十五六の小癪なるが酸漿ふくんでこの姿はと目をふさぐ人もあるべし、所がら是非もなや、昨日河岸店に何紫の源氏名耳に残れど、けふは地廻りの吉と手馴れぬ焼鳥の夜店を出して、身代たたき骨になれば再び古巣への内儀姿、どこやら素人よりは見よげに覺えて、これに染まらぬ子供もなし、秋は九月仁和賀の頃の大路を見給へ、さりとはい宜くも学びし露八が物真似、榮喜が処作、孟子の母やおどろかん上達の速やかさ、うまいと褒められて今宵も一廻りと生意氣は七つ八つよりつのりて、やがては肩に置手ぬぐひ、鼻歌のそそり節、十五の少年がませかた恐ろし、学校の唱歌にもぎつちよんちよんと拍子を取りて

12	樋口一葉「たけくらべ」	1895(明治28)年1～3、8、11、12月、 1896(明治29)年1月	小説(三人称)	お前の祭の姿は大層よく似合つて浦山しかつた、私も男だとあんな風がして見たい、誰れよりも宜く見えた	②	美登利→信如 対等 女→男	⑤	なし	お前の祭の姿は大層よく似合つて浦山しかつた、私も男だとあんな風がして見たい、誰れよりも宜く見えたと賞められて、何だ己れなんぞ、お前こそ美しいや、廊内の大巻さんよりも奇麗だと皆がいふよ、お前が姉であつたら己れはどんなに肩身が広かろう、何処へゆくにも追従て行つて大威張りに威張るがな、一人も兄弟が無いから仕方が無い、ねへ美登利さん今度一处に写真を取らないか、我れは祭りの時の姿で、お前は透綾のあら縞で意気な形をして、水道尻の加藤でうつさう、龍華寺の奴が浦山しがるやうに、本当だぜ彼奴はきつと怒るよ、真青に成つて怒るよ、にゑ肝だからね、赤くはならない、それとも笑ふかしら、笑はれても構はない、大きく取つて看板に出たら宜いな、お前は嫌やかへ、嫌やのやうな顔だものと恨めるもをかしく、変な顔にうつるとお前に嫌はられるからとて美登利ふき出して、高笑ひの美音に御機嫌や直りし。
13	樋口一葉「たけくらべ」	1895(明治28)年1～3、8、11、12月、 1896(明治29)年1月	小説(三人称)	女らしい温順しう成つた	①	不問→美登利さん 不問 不問→女	④	なし	美登利はかの日を始めにして生れかはりし様の身の振舞、用ある折は廊の姉のもとにこそ通へ、かけても町に遊ぶ事をせず、友達さびしがりて誘ひにと行けば今に今にと空約束はてし無く、さしもに中よし成けれど正太とさへに親しまず、いつも耻かし氣に顔のみ赤めて筆やの店に手踊の活潑さは再び見るに難く成ける、人は怪しがりて病ひの故かと危ぶむも有れども母親一人ほほ笑みては、今にお侠の本性は現れまする、これは中休みと子細あげけに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はず、女らしい温順しう成つたと褒めるもあれば折角の面白い子を種なしにしたと誂るもあり、表町は俄に火の消えしやう淋しく成りて正太が美音も聞く事まれに、唯夜な夜なの弓張提燈、あれは日がけの集めとするく土手を行く影そぞろ寒げに、折ふし供する三五郎の声のみ何時に変わらず滑稽ては聞えぬ。
14	清水紫琴「野路の菊」	1896(明治29)年10月25日、12月10日	小説(三人称)	天晴れ切れ離れよきお妾さま	①	お吉→お艶 下上 女→女	⑤	なし	私が髪結風情ならずば、身上打込んでも大事な男と、櫛取る手さへ止めて、心底丸三郎最負のやうに夢中になりてのはなし振り氣に叶ひ、さんざん人をたらしし覺あるお艶も、これにはふいと釣込まれて、下女下男よりは吝嗇と譏らるる身が、お吉よりは天晴れ切れ離れよきお妾さまと誉められぬ。
15	田沢稲舟「五大堂」	1896(明治29)年11月	小説(三人称)	女らしい	③	世人→女の小説家 不問 不問→女	④	なし	それをおそてかきたい事もかゝずにあるのは、つまり女らしいのなんのとほめられたい慾心と、世人の評には屈しないといふ勇氣のないよりおこるんですが、この花園女史は決してそんな臆病ではないやうですね」
16	田沢稲舟「五大堂」	1896(明治29)年11月	小説(三人称)	うまい	①	人→烏瓜 不問 不問	なし	なし	放蕩山人は鼻のさきにて聞きあしが、何のこいつ人まねか、鵜のまねの烏瓜買ふてうまいとほめる人もあるまじきは、いかに花族のひまでこまるかしらないが、くだらぬ寝言をかきならべて、小説で候法律否のと、著作三昧かたはらいたしと、心のうちではあざ笑ひしが、色には更にいさずして、さも感心したるらしく「ハハアさうですか、そりや何より結構です、失礼ですがおできになつたところを少し拝見ねがひたいんですけど」、といひつゝ、実に不作法にも青貝蒔絵の机の上に、何やらかきらした草稿を全釈もなく引つたくれば、房雄はあはて「アそれをみてはいけません、あなたまだそれはいけないのですから」といきなり山人の手からもぎとつて、無残折角書きし物をめちや／＼に押丸めて、袂のなかにかくしたるを山人は笑つてあらそひもせず、無言でながめてあたりしが稍ありて「いや、おできにならないものを拝見すると言たのは失礼いでした、しかしマアどんな御趣向です」房雄は少し見られたかと、猶顔をあからめながら「趣向……ナニ大したものなんぞとでもできませんから、ほんのやき直しです、ごく古代めいた人情小説です」「ハハア人情小説……イヤそれほどむづかしいものはありませんよ、失礼ですがあなたなんぞまだお年もお若いから、実験なさつた事も少いですが、さういふものをおかきになるとは、実に敬服のいたりです」とあんに軽蔑の意をほめかす。
17	清水紫琴「誰が罪」	1897(明治30)年7月	小説(三人称)	ゑらもの	①	郷里の親族→大村一郎 不問 不問→男	⑤	なし	敵味方入り乱れの戦場に、三百の椅子のその一ツを、占しが因果同志との、悪縁これに尽くる期を失ひて、なほも丹心国に許す、殊勝なる心掛を、新聞屋の京童は嘲りて、田舎議員の口真似を、傍聴筆記の御愛嬌に売る心外さ。その新聞の伝はりては、ゑらものと誉めし郷里の親族までも、酔狂ものと指弾する。表裏反覆頼みなの、世の人心を警醒の、木鐸となる大任は我が双肩に、かかる奴等を驚かさむは、政党内閣の世となして、乃公は少なくとも次官の椅子を占むる時にこそあれと、力めば力むほど要る費用、なかなか八百の歳費では、月費にも足らぬ月のあるを、国許より御随行の奥方は危ぶみたまひ、形の通りの御諫言もありしかど、婦女幼童の知る事ならずと、豪傑の旦那殿、一口に叱り飛ばしたまふに、返さむ詞もなげなの、家道の衰へ見るに忍びず。
18	檜崎龍、川田雪山「千里駒後日譚」	1899(明治32)年11月4、5、7～10日	伝記(一人称)	お龍よ橋本の仕事は実に潔ひ、己れの抱へる者は皆なコンな者だ	②	龍馬→橋本久太夫 上下 男→男	⑤	なし	下るには棧橋もなし困つて居ると久太夫が碇を向の岸へ投げ上げ綱を伝つて岸へ上り、荷物など皆な一人で世話して仕舞ひました。龍馬が大さう喜んで、お龍よ橋本の仕事は実に潔ひ、己れの抱へる者は皆なコンな者だと褒めて居りました。
19	黒岩涙香「幽霊塔」	1901(明治34)年	小説(一人称)	確かに美人	①	世間の人→お浦 不問 不問→女	②	なし	「道さん」などと馴々しく而も幼名を以て余を呼ぶ者は外に無い、幼い時から叔父の家で余と一緒に育てられた乳母の連れ子で、お浦と云う美人で有る、世間の人は確かに美人と褒め、当人も余ほど美人の積りでは居るけれど、余の目には爾は見えぬ、併し悲しい事には此の女が余の妻と云う約束に成つて居る。
20	黒岩涙香「幽霊塔」	1901(明治34)年	小説(一人称)	流石は素人——イヤ流石	①	不問→朝倉男爵 不問 不問→男	③	なし	イヤサ黒人の幻燈なら此の通り手際好く終る所で有ろうが、流石は素人——イヤ流石などと褒めるには及ばぬ——其所は素人の悲しさで、幻燈の影を美人と差し替える事は出来るが、其の美人を逆戻しに段々小さくして元の幻燈の影にする事は出来ぬ、実は音楽の終ると共に手取り早くバツと燈光を消して満堂を元の暗にして結局を附けた、寧ろ此の方が厭味が無くて好いと客の半分ほどは止むを得ずお世辞を云つた、仲々お世辞の言い方は有る者だ。
21	黒岩涙香「幽霊塔」	1901(明治34)年	小説(一人称)	極めて明瞭な答えだ	①	検査官→高輪田 上下 男→男	③	なし	証人として第一に呼び出されたのが余の叔父だ、叔父は堀の底を探つては何うだと言ひ出した発頭人である為、何故に堀の底へ目を附けたかとの廉を問われるのだ、次が高輪田、次が根西夫人、次が秀子、最後が余と云う順序である、余は是等の人々が検査官の問いに対し、何の様に答えたか勿論知る事は出来ぬけれど、後で聞いた所に由れば、叔父は「此の死骸を誰と見るや」との問いに「先の養女お浦と認める」と答え高輪田は「首のない屍骸ゆゑ誰とも認める事は出来ません」と少し理窟つぽく答え、「然らば此の死骸に附いて居る衣服其の他の品物に見覚えはないか」と問われ、「品物は悉く見覚えがあります」とお浦が失踪の当日身に着けて居た品だと答えたので、極めて明瞭な答えだと褒められた相だ、根西夫人も、秀子も、余の叔父と同様に、死骸は勿論お浦の死骸だと云ひ、品物にも覚えがあるとして有りの儘を答えたが、検査官は殊に秀子には目を付けて、猶彼の異様な手袋の事を問うた、秀子は少しも隠さずに、其の手袋は自分の物で、お浦が失踪の当日自分の手から取つたのだと云ひ、お浦が此の家の書斎で消滅する様に居なくなつた次第も云ひ、猶問われて自分とお浦と喧嘩した事も云つた、唯、喧嘩の原因だけは、何と問われても云わず、単に「お認めに任せます」と云うたので、検査官は多分嫉妬の為だろうと云ひ、全く秀子を嫌疑者とするに足ると思ひ詰め、陪審員なども、殆ど最早此の上を詮索するに及ばぬとまで細語いたと云う事だ。

22	黒岩涙香「幽霊塔」	1901(明治34)年	小説(一人称)	イヤ姿を変えるのは私の不得手では有りますが、けれど素人に見現わされたは二十年来初めてです。貴方の眼力には驚きました	②	探偵森主水→余 对等 男→男	③	なし	姿は異って居るけれど確かに此の看護人は先にお浦の事件にも関係した探偵森主水である。余は彼の目の底に一種の慧敏な光が有るので見て取った。彼は名を指されて痛く驚いたが強いて空とぼけさせぬ。忽ち笑って「イヤ姿を変えるのは私の不得手では有りますが、けれど素人に見現わされたは二十年来初めてです。貴方の眼力には驚きました」と褒める様に云い、直ぐに調子を変えて「所で私へのお話とは何事です」と軽く問うた。余は何事も腹藏なく打ち明け呉れと頼んで置いて、爾して何故に秀子へ恐ろしい嫌疑が掛かったかと詳しく聞いたが、成るほど仔細を聞けば尤もな所も有る。
23	黒岩涙香「幽霊塔」	1901(明治34)年	小説(一人称)	感心する	①	お浦→お酉 上下 女→女	⑤	なし	「エ貴女の仰有る事は、何だか私には」お浦「お分りに成りませんか、私は又仲働きとさえ云えば直ぐにお紺婆の仲働きとお悟り成さって何も詳しく申して貴女に赤面させずに済むだろうと思いましたがの、お分りがないなら詮方なく分る様申しましよう、婆あ殺し詮議の時に色男と共に法廷へ引き出された古山お酉と云う仲働きの事です、ハイ下女の事です、其のお酉が下女の癖に盲く令嬢に化け果せたから夫で呆れる、イヤ感心すると褒めたのです」余は此の言葉を聞きお浦を擲倒して遣り度い程に思ったが爾も成らず、且は此の美人が果してお酉で有るか否やを見極め度いと云う心も少しは有る、何も自分だけは好い児に成ってお浦が確かめて呉れるのを待つと云う猜い丁見ではないけれど、唯其の心が少し許りある為に、お浦を擲り倒すのを聊か猶予した、聊か猶予の間に争いは恐しく亢じて仕舞った。
24	島崎藤村「旧主人」	1902(明治35)年11月	小説(一人称)	小器用な	①	不問→殿方 不問 不問→男	③	なし	島屋の若旦那、越後屋の御総領、三浦屋の御次男、荒町の亀惣様、本町の藤勘様——いずれ優劣のない当世の殿方ですけど、成程奥様の御話を伺って見れば、たとえ男が好くて持物等の嗜も深く、何をさせても小器用なと褒められる程の方でも、物事に迷易くて毎も愚痴ばかりでは頼甲斐のない様にも有、世智賢くて痺いところまで手の届く方は又た女を馬鹿にしたように此方の欠点まで見透されるかと恐しくもあるし、氣前が面白ければ錢遣が荒く、凝性なれば悟過ぎ、優しければ遠慮が深し、この方ならばと思うような御人は弱々しくて、さて難の無い御方というのは、見当らないのでした。
25	国木田独歩「女難」	1903(明治36)年12月	小説(一人称)	おとなしい方だよい方だ、珍しい堅人だ	①	皆→私 不問 不問→男	④	なし	それに長屋中、皆な私を可愛がってくれまして、おとなしい方だよい方だ、珍しい堅人だと褒めてくれるのでございます。ですからお俊ばかりでなくお神さんたちが頼みもせぬ用を達してくれるのでございます。ところがおかしいのはお俊がこれを焼いて、何を私がついているによけいなお世話だと、お神さんたちの目の前でいやな顔をする、それをお神さんたちはなお面白半分私に私の世話を焼いたこともありましたが、けれども、それでもってお俊と私の仲を長屋の者が疑ぐるかというに決してそうでなく、てんで私をば木か金で作ったもののように無類の堅人だと信じていたのでございます。けれどもお俊の方はそれほどの信用はないのです。ですからお俊さんは少し怪しいが、とても物にはならぬなど、明らさまに私に向って言った山の神さえいたのでございます。
26	夏目漱石「吾輩は猫である」	1905(明治38)年1月～8月	小説(三人称)	えらい	①	鈴木君→迷亭 对等 男→男	②	A	相変らず元気がいいね。結構だ。君は十年前と容子が少しも変っていないからえらい」と鈴木君は柳に受けて、胡麻化そうとする。「えらいと褒めるなら、もう少し博学なところを御目にかけろがね。昔しの希臘人は非常に体育を重んじたものであらゆる競技に貴重なる懸賞を出して百方奨励の策を講じたものだ。しかるに不思議な事には学者の智識に対してのみは何等の褒美も与えたと云う記録がなかったの、今日まで実は大に怪しんでいたところさ」「なるほど少し妙だね」と鈴木君はどこまでも調子合せを。「しかるについ兩三日前に至って、美学研究の際ふとその理由を発見したので多年の疑團は一度に氷解。漆桶を抜くがごとく痛快なる悟りを得て歎天喜地の至境に達したのさ」
27	夏目漱石「吾輩は猫である」	1905(明治38)年1月～8月	小説(三人称)	事実はどうでも言語が詩的で感じがいい	①	東風君→寒月君 对等 男→男	⑤	なし	「人迹の稀なはんまり大袈裟だね」と主人が抗議を申し込むと「蝸牛の庵も仰山だよ。床の間なしの四畳半くらいにしておく方が写生的で面白い」と迷亭君も苦情を持ち出した。東風君だけは「事実はどうでも言語が詩的で感じがいい」と褒めた。独仙君は真面目な顔で「そんな所に住んでは学校へ通うのが大変だろう。何里くらいあるんですか」と聞いた。「学校まではたった四五丁です。元来学校からして寒村にあるんですから……」「それじゃ学生はその辺にだいが宿をとってるんでしょう」と独仙君はなかなか承知しない。「ええ、たいていな百姓家には一人や二人は必ずいます」「それで人迹稀なんです」と正面攻撃を喰わせる。
28	泉鏡花「婦系図」	1907(明治40)年1～4月	小説(三人称)	豪い、	①	親→婿 上下 不問→男	⑤	なし	娘が惚れた男に添わせりゃ、たとい味噌漉を揚げたって、玉の冠を被ったよりは嬉しがるのが知らねえのか。傍の目からは筵と見えても、当人には綾錦だ。亭主は、おい、親のものじゃねえんだよ。己が言うのが嘘だと思ったら、お道さんに聞いて見ねえ。病院長の奥様より、馬小屋へ入っても、早瀬と世帯が持ちたいとよ。お菅さんにも聞いて見ねえ。」「不埒な奴だ？」と揺いた英臣の髯の色、口を開いて、黒煙に似た。「不埒は承知よ。不埒を承知でした事を、不埒と言ったって忤然としねえ。豪い、と讃めりや吃驚するがね。今更慌てる事はないさ、はじめから知れていら。お前さんの許のような家風で、婿を持たした娘たちと、情事をするくらい、下女を演劇に連出すより、もっと容易いのは通相場よ。こう、もう威張ったって仕ようがねえ。恐怖くはないと言えは、」と微笑みながら、「そんな野暮な顔をしねえで、よく言うことを聞け、と云うに。——おい、まだ驚く事があるぜ。もう一枝、河野の幹を栄さそうと、お前さんが頼みにしている、四番目の娘だがね、つい、この間、暑中休暇で、東京から帰って来た、手入らずの嬢さんは、医学士にけがされたぜ。
29	夏目漱石「入社の辞」	1907(明治40)年5月3日	随筆(一人称)	大決断だ	①	不問→私 不問 不問→男	⑤	なし	大学を辞して朝日新聞に這入ったら逢う人が皆驚いた顔をして居る。中には何故だと聞くものがある。大決断だと褒めるものがある。大学をやめて新聞屋になる事が左程に不思議な現象とは思わなかった。余が新聞屋として成功するかせぬかは固より疑問である。成功せぬ事を予期して十余年の徑路を一朝に転じたのを無謀だと云って驚くなら尤である。かく申す本人すら其の点に就ては驚いて居る。然しながら大学の様な榮譽ある位置を抛って、新聞屋になったから驚くと云うならば、やめて貰いたい。大学は名誉ある学者の巢を喰っている所かも知れない。
30	伊藤左千夫「箸」	1909(明治42)年10月1日	小説(三人称)	おまえは、とくな性だ	①	主人→細君 对等 男→女	④	B	主人は細君をそれほど重んじてはいないが、ただ以上の点をおおいに敬している。「おまえは、とくな性だ」とほめてる。細君も笑って、「とくな性ではありませんよ、はじめから損をあきらめてるから、とくのように見えるのでしょうか」という。

31	伊藤左千夫「箸」	1909(明治42)年10月1日	小説(三人称)	なるほど、花前はしぼるのがじょうずだ	①	細君→花前 上下 女→男	③	なし	乳を受け取って遽しにかけた細君も、きれの上にほこりがないのにおどろいて、「なるほど、花前はしぼるのがじょうずだ」と主人のところへ顔をだしてほめる。花前は色も動きはしない。もとより一言ものをいうのでない。主人や細君とはなんらの交渉もないふうで、つぎの黒白まだらの牛にかかった。主人は兼吉をよんで、いましぼるからこの牛に飼い葉をやれと命じた。花前はしぼりバケツを左に持ちながら、右手で乳牛の肩のへんをなでて、バアバアとやさしく二、三度声をかける。
32	森林太郎訳「クサンチス XANTHIS アルベエル・サマン Albert Samain」	1911(明治44)年7月1日	小説(三人称)	大した女だ	①	公爵→クサンチス 不問 男→女	②	なし	此頃からクサンチスは、ひどく機嫌が好くなった。故郷の詩人の賞讃する、晴れた日の快活な光を、クサンチスは体中のから吸ひ込んだ。此頃ほど顔色が輝き、髪の毛が金色に光り、体の輪廓が純粹になつてゐた事は、これまで無かつたのである。「大した女だ」と、公爵が唱へる。「無類だ」と、音楽家が和する。「神々しい。」「理想的だ。」こんな風に二人は醜ごっこをして寝めちぎる。それをファウヌスは傍の柱に寄り掛かつて、非常に落ち着いた態度で、右から左へと見比べて、少し伸びた髭を燃つてゐる。
33	森林太郎訳「クサンチス XANTHIS アルベエル・サマン Albert Samain」	1911(明治44)年7月1日	小説(三人称)	無類だ	①	音楽家→クサンチス 不問 男→女	②	なし	此頃からクサンチスは、ひどく機嫌が好くなった。故郷の詩人の賞讃する、晴れた日の快活な光を、クサンチスは体中のから吸ひ込んだ。此頃ほど顔色が輝き、髪の毛が金色に光り、体の輪廓が純粹になつてゐた事は、これまで無かつたのである。「大した女だ」と、公爵が唱へる。「無類だ」と、音楽家が和する。「神々しい。」「理想的だ。」こんな風に二人は醜ごっこをして寝めちぎる。それをファウヌスは傍の柱に寄り掛かつて、非常に落ち着いた態度で、右から左へと見比べて、少し伸びた髭を燃つてゐる。
34	森林太郎訳「クサンチス XANTHIS アルベエル・サマン Albert Samain」	1911(明治44)年7月1日	小説(三人称)	神々しい。理想的だ。	①	公爵と音楽家→クサンチス 不問 男→女	②	なし	此頃からクサンチスは、ひどく機嫌が好くなった。故郷の詩人の賞讃する、晴れた日の快活な光を、クサンチスは体中のから吸ひ込んだ。此頃ほど顔色が輝き、髪の毛が金色に光り、体の輪廓が純粹になつてゐた事は、これまで無かつたのである。「大した女だ」と、公爵が唱へる。「無類だ」と、音楽家が和する。「神々しい。」「理想的だ。」こんな風に二人は醜ごっこをして寝めちぎる。それをファウヌスは傍の柱に寄り掛かつて、非常に落ち着いた態度で、右から左へと見比べて、少し伸びた髭を燃つてゐる。
35	竹久夢二「どんたく 絵入り小唄集」	1913(大正2)年11月	詩歌(一人称)	よいお子たち	①	山賊→私と姉 対等 男→男・女	⑤	なし	もう殺すかとおもふたら 殺しもせいでたちとまり 「どこへおじやる」ときくゆゑに つつみかくさずいひますと 「よいお子たち」とほめながら 峠をおりてゆきました。 乳母はきいて大笑ひ 「なんの賊などでませうぞ」 それは木樵でありました。
36	伊藤野枝「遺書の一部より」	1914(大正3)年10月1日	小説(一人称)	おとなしい、やさしい	①	人→私 不問 不問→男	④	なし	私は本当に弱いのです。私は反抗と云ふことを全まるで知りません。私のすべては唯屈従です。人は私をおとなしいとほめてくれます。やさしいとほめます。私がどんなに苦しんでゐるかも知らないでね。私はそれを聞くといやな気持です。ですけど不思議にも私はます／＼をとなく成らざるを得ません。やさしくならずにはゐられません。
37	伊藤野枝「遺書の一部より」	1914(大正3)年10月1日	小説(一人称)	立派な篤信者だ。美しい人格だ	①	牧師や伝道師たち→私 上下 男→男	④	なし	私はもうすべての情実や何かを細かく考へる煩はしさに堪えられません。私は曾て少しは、自身の慰さめにもと思つて基督教と云ふものを信じて見ました。私は牧師や伝道師たちからのほめられ者でした。立派な篤信者だ。美しい人格だと讃められましたけれども自分には矢張り苦しくてたまりませんでした。矢張り虚偽の教へと云ふことを感じました。私は遠ざかりました。
38	内田魯庵「淡島椿岳——過渡期の文化が産出した画界のハイブリッド——」	1916(大正5)年3月	伝記(三人称)	家の旦那さんぐらいお世辞の上手な人はない	①	奉公人→旦那さん 下上 不問→男	③	なし	椿岳は奇才縦横円転滑脱で、誰にでもお愛想をいつた。決して人を外らさなかつた。召使いの奉公人にまでも如才なくお世辞を振播いて、「家の旦那さんぐらいお世辞の上手な人はない」と奉公人から褒められたそうだ。伊藤八兵衛に用いられたのはこの円転滑脱な奇才で、油金所の外交役となつてから益々練磨された。晩年変態生活を送つた頃は年と共にいよいよ益々老熟して誰とでも如才なく交際し、初対面の人に対してすらも百年の友のように打解けて、苟にも不快の感を与えるような顔を決してしなかつたそうだ。
39	内田魯庵「淡島椿岳——過渡期の文化が産出した画界のハイブリッド——」	1916(大正5)年3月	伝記(三人称)	内の旦那さんは好い旦那	①	奉公人→旦那さん 下上 不問→男	④	なし	淡島家の養子となつても、後生大事に家付き娘の女房の御機嫌ばかり取る入贅形氣は微塵もなかつた。随分内を外の勝手氣儘に振舞っていたから、奉公人には内の旦那さんは好い旦那と褒められたが、細君には余り信用されもせず大切にられもしなかつた。

40	内田魯庵「二葉亭余談」	1916(大正5)年3月5日	随筆(三人称)	大分渋いものを肴えたネ、	③	私→二葉亭 対等 男→男	①	A	衣服にもやはり無頓着であった。煙草が好きで、いつでも煙管の羅宇の破れたのに紙を巻いてジウジウ吸っていたが、いよいよ胭脂が溜って吸口まで滲み出して来ると、締めてるメレンスの帯を引裂いて掃除するのが癖で、段々引裂かれて半分近くまでも斜に削掛のように総が下ってる帯を平気で締めていた。実業熱が長じて待合入りを初めてから俄かにめかし出したが、或る時羽織を新調したから見てくれと斜子の紋付を出して見せた。かなり目方のある斜子であったが、絵甲斐機の胴裏が如何にも貧弱で見窄らしかつたので、「この胴裏じゃ表が泣く、最少し気張れば宜かった」というと「何故、昔から羽織の裏は甲斐機に定ってるじゃないか、」と澄ました顔をしていた。それから、「この頃は二子の裏にさえ甲斐機を付ける。斜子の羽織の胴裏が絵甲斐機じゃア郡役所の書記か小学校の先生染みていて、待合入りをする旦那の估券に触る。思切って緞子か繻珍に換え給え、」(その頃羽二重はマダ流行らなかつた。)という、「緞子か繻珍?——そりゃア華族様の事ッた、」と頗る不平な顔をして取合わなかつた。丁度同じ頃、その頃流行った黒無地のセルに三紋を平縫いにした単羽織を能く着ていたので、「大分渋いものを肴えたネ、」と褒めると、「この位なものは知ってるサ、」と頗る得々としていた。
41	水上淹太郎「貝殻追放 012 向不見の強味」	1918(大正7)年	随筆(一人称)	極上々	①	感激したがる一派→芝居 不問 不問	③	なし	近頃流行の感激したがる一派といへども、子供の習字を極上々とほめはやす手なのだらうと推察される。ところが吾々と違つて新しい戯曲の發達に特別の關係の無い人、換言すれば所謂文壇の人でない人には、下手な芝居は單純に下手な芝居で、遠慮會釋もなければ強ひておだてたりほめたりする心持も起らない。
42	薄田泣菫「茶話 大正七(一九一八)年」	1918(大正7)年2月16日～12月20日	随筆(一人称)	よう言つた。芝芸雀、その心持々々。その心持を忘れるんぢやないぞ。	②	延若→芝芸雀 上下 男→男	⑤	なし	「親方、かんにんしくなはれや、小便仕たのは延宝さんやおまへん、私だすよつてな。」芝芸雀は主従で勤めた舞台の心持を忘れないで、部屋にかへつてもまだ主人の身代りにならうとしてゐるのだ。それを聞くと、延若は両手を拍つて感心した。「よう言つた。芝芸雀、その心持々々。その心持を忘れるんぢやないぞ。」お蔭で芝芸雀は両目を施して帰つたが、延若は今一人褒めなければならぬ子役のある事を忘れてはならない。それは粗相をした延宝で、小便がしたくなくつても、じつと坐を立たないで、その儘袴のなかに洩してそ知らぬ顔をしてゐたところに、確に五十郡部の太守たる眞目がある。せい／＼粗相をする事／＼。
43	芥川龍之介「地獄変」	1918(大正7)年7月8日	小説(一人称)	…流石に天下第一の絵師ぢや。褒めてとらす。おゝ、褒めてとらすぞ。	①	大殿様→良秀 上下 男→男	③	A	私はその御言を伺ひますと、虫の知らせか、何となく凄じい氣が致しました。實際又大殿様の御容子も、御口の端には白く泡がたまつて居りますし、御眉のあたりにはびく／＼と電が走つて居りますし、まるで良秀のもの狂ひに御染みなすつたのかと思ふ程、唯ならなかつたのでございます。それがちよいと言を御切りになると、すぐ又何かが爆ぜたやうな勢ひで、止め度なく喉を鳴らして御笑ひになりながら、「檜榔毛の車にも火をかけよう。又その中にはあでやかな女を一人、上の装をさせて乗せて遣はさう。炎と黒煙とに攻められて、車の中の女が、悶え死をする——それを描かうと思ひついたのは、流石に天下第一の絵師ぢや。褒めてとらす。おゝ、褒めてとらすぞ。」大殿様の御言葉を聞きますと、良秀は急に色を失つて喘ぐやうに唯、唇ばかり動いて居りましたが、やがて体中の筋が緩んだやうに、べたりと畳へ両手をつくと、「難有い仕合でございます。」と、聞えるか聞えないかわからない程低い声で、丁寧に御礼を申し上げました。
44	岡本綺堂「小坂部姫」	1920(大正9)年10月号～	小説(三人称)	それにつけてもお身もあつぱれの才女じゃ。武蔵守殿は武勇一遍の人じゃと思うていたに、息女に対する日ごろの仕付け方も思いやらる。起き臥しわぶる恋ぞくるしき——さすがにようぞ説き当てられた。	②	兼好→小坂部 上下 男→女	③	なし	その声に兼好は思わず見返つた。彼の窪んだ眼が小坂部のさかしげな眼と出逢うと、二人は無言で会心の笑みを洩らした。「塩冶の内室は殿上に生い立って、上手の歌よみという噂がある。なまじいの文など書こうよりはと思案して、その古歌を書き申した。それも上のただ一句、その方がなかなか奥ゆかしゅう見ゆるであらうと存じて……。それにつけてもお身もあつぱれの才女じゃ。武蔵守殿は武勇一遍の人じゃと思うていたに、息女に対する日ごろの仕付け方も思いやらる。起き臥しわぶる恋ぞくるしき——さすがにようぞ説き当てられた。」当代の歌人、日本人の文者と呼ばれる兼好に、正面からこう褒められて、小坂部はさすがに晴れがましいような顔をうつむけた。その昔、なにがしの君が大堰川のほとりで蹴鞠の遊びを催されたときに、見物のうちに眼にとまるような姫女があつた。
45	岡本綺堂「小坂部姫」	1920(大正9)年10月号～	小説(三人称)	忠義	①	主家→権右衛門 上下 不問→男	④	なし	しかし相手はまだ半信半疑であるらしく、そう安々とは彼に釣り出されそうもないので、権右衛門はまた思案を変えた。彼はすり寄つて嚇すようにささやいた。「ありようは権右衛門、きょうの午すぎに若殿のお館へ伺候すると、大殿と塩冶の奥方との一条、誰の口から洩れたか知らぬが、もう若殿の耳にも聞こえて、さりとて怪しからぬ儀じゃと、かの殿にも胸を痛めておられた。それにつけても憎いは侍従という女め、由ないことを父上の前で吹聴して、あまつさえ忍びの文使いの役目までも引き受くる。あのような者がお側にあつては、父上のためには勿論、わが家のためにも良くない。かれめを早う追い払えと、以つてのほかの御氣色であつたを、それがしがいろいろに押しなだめて、まずは沙汰止みにいたしてまいつた。先きほどお身にゆき逢うたはその戻りがけじゃ。諺にもいう犬も朋輩、鷹も朋輩、一つお館に奉公するお身の難儀をそれがしもむなしく眺めてはいられぬ。それがしの訴訟で、一旦は沙汰止みになったものの、日頃から癪癖の強い若殿じゃ。また重ねて何事を申し出さりようも知れまい。それもこれも根もとは塩冶の奥の一条じゃで、その成り行きが案じらる。またそれがために大殿と若殿とが御親子不和の種を播くように相成つては猶々大事じゃ。のう、大きく申せばお家の大事、また二つにはお身の大事、いずれにしてもただ安閑と眺めてはいられぬ時節じゃで、それがしもこうして密々に訊ぬるのじゃが、どうじゃ、お身。これでも正直に明かしてはくれぬか。」主家に忠義、朋輩に親切、あつぱれの武士じやと褒められたいような彼の口ぶりを、侍従はもちろん相当の割引きをもつて聴いていた。しかし三河守師冬が養父の不義を憎んで、その媒介をするかれを追い払えというのは、なにさま、さもありような話であつた。追い払われて何処へゆく。それを思うと、侍従も少し途方にくれた。
46	岡本綺堂「小坂部姫」	1920(大正9)年10月号～	小説(三人称)	親切、あつぱれの武士じや	①	朋輩→権右衛門 対等 不問→男	⑤	なし	しかし相手はまだ半信半疑であるらしく、そう安々とは彼に釣り出されそうもないので、権右衛門はまた思案を変えた。彼はすり寄つて嚇すようにささやいた。「ありようは権右衛門、きょうの午すぎに若殿のお館へ伺候すると、大殿と塩冶の奥方との一条、誰の口から洩れたか知らぬが、もう若殿の耳にも聞こえて、さりとて怪しからぬ儀じゃと、かの殿にも胸を痛めておられた。それにつけても憎いは侍従という女め、由ないことを父上の前で吹聴して、あまつさえ忍びの文使いの役目までも引き受くる。あのような者がお側にあつては、父上のためには勿論、わが家のためにも良くない。かれめを早う追い払えと、以つてのほかの御氣色であつたを、それがしがいろいろに押しなだめて、まずは沙汰止みにいたしてまいつた。先きほどお身にゆき逢うたはその戻りがけじゃ。諺にもいう犬も朋輩、鷹も朋輩、一つお館に奉公するお身の難儀をそれがしもむなしく眺めてはいられぬ。それがしの訴訟で、一旦は沙汰止みになったものの、日頃から癪癖の強い若殿じゃ。また重ねて何事を申し出さりようも知れまい。それもこれも根もとは塩冶の奥の一条じゃで、その成り行きが案じらる。またそれがために大殿と若殿とが御親子不和の種を播くように相成つては猶々大事じゃ。のう、大きく申せばお家の大事、また二つにはお身の大事、いずれにしてもただ安閑と眺めてはいられぬ時節じゃで、それがしもこうして密々に訊ぬるのじゃが、どうじゃ、お身。これでも正直に明かしてはくれぬか。」主家に忠義、朋輩に親切、あつぱれの武士じやと褒められたいような彼の口ぶりを、侍従はもちろん相当の割引きをもつて聴いていた。しかし三河守師冬が養父の不義を憎んで、その媒介をするかれを追い払えというのは、なにさま、さもありような話であつた。追い払われて何処へゆく。それを思うと、侍従も少し途方にくれた。

47	牧野信一「泣き笑ひ」	1920(大正9)年2月8日	小説(三人称)	面白い面白い。秀ちやんだよ。上手だ。上手だ。	①	見物人→秀ちやん 上下 不問→男	③	なし	戦争の真最中に、たつたひとり馬鹿面をかぶつた小さな児がヒヨロ／＼と出て来ました。それは勿論秀ちやんだつたのです。秀ちやんだつて強い軍人のお面をかぶりたかつたには異ひなかつたでせうが、あひにくその時にはもう強いお面は一つも残つてゐなかつたのです。軍人の中に馬鹿面をかぶつた小さな児が出て来たので——見物人の視線は一樣にその方にそゝがれました。「面白い面白い。秀ちやんだよ。上手だ。上手だ。」と云つて見物人は皆秀ちやんのお手柄を誉めたてました。甲冑に身をかためた厳めしい武士も、毛鞘の刀をさした立派な大将も、すつかりてれてしまひました。
48	小川未明「葉と幹」	1920(大正9)年5月7～8日	童話(三人称)	なんといういいかえでの木だろう。	①	みな→かえでの木 上下 不問→植物	なし	なし	ある山に一本のかえでの木がありました。もう長いことその山に生きていました。春になると、美しい若葉を出し、秋になるとみごとに紅葉しました。町から山に遊びにゆくものは、その木をほめないものはなかつたのであります。「なんといういいかえでの木だろう。」と、子供も年寄りも、みなほめたのであります。けれど、木はがけの辺に立っていましたので、みなは欲しいと思つても、取ることができませんでした。
49	小川未明「時計のない村」	1921(大正10)年1月	童話(三人称)	やあ、これは珍しい。	①	村のものたち→男 不問 不問→男(もの)	①	なし	男は、そういつてくるだろうと思つていたところへ、みんながやってきましたから、得意になつて、「さあ上がつて見なさい。なかなか機械のいい時計なんだから、この時間ばかりは安心していいのだ。」と、男はいいました。村のものたちは、時計の形が変わっていましたので、「やあ、これは珍しい。」といつて、その時計の前に頭を集めてほめそやしました。しかるに、不思議なことには、村に二つ時計がありましたが、どうしたことか、二つの時計は約三十分ばかり時間が違つていました。どちらが違つているのか、だれもそれを知ることができないのであります。
50	豊島与志雄「子を奪う」	1921(大正10)年5月	小説(三人称)	いい子だ	①	幾代→彼 上下 女→男	④	なし	家の中には急に種々なものが増えてきた。幾代と兼子との夢想は実現されていった。兼子の身体も肥つてきたようだった。彼女の膝の前には、美しい友禅模様の布が並んだ。彼女と幾代とは、新しい玩具をいじつては微笑んでいた。彼も時々その仲間にはいった。幾代は二度ばかり三田へ行つた。その度毎にいい子だとほめていた。
51	小川未明「つばきの下のすみれ」	1922(大正11)年4月	童話(三人称)	まあ、なんというみごとな花だろう。	①	みんな→花 不問 不問→植物	なし	なし	一本のつばきの木の下に、かわいらしいすみれがありました。そのつばきの木は、大きかつたばかりでなくて、それは真紅な美しい花を開きました。この花を見た人は、だれでも、きれいなのをほめないものはなかつたほどであります。「まあ、なんというみごとな花だろう。」といつて、みんなは、そのつばきの木の周囲をまわり、火のもえたつような花に見とれました。すみれは、やはり、そのころ、紫色のかわいらしい花を咲いたのです。しかし、この大きなみごとなつばきの木の下にあっては、人の目に入るにはあまりに小さかつた。あわれなすみれは、それで、心なしに歩く人々から、頭をふまれたのです。
52	小川未明「つばきの下のすみれ」	1922(大正11)年4月	童話(三人称)	なんというつくい花はなだろう。	①	みんな→花 不問 不問→植物	なし	なし	それは、すみれにとって、どんなに悲かなしいことでありましてでしょう。つぎの年としも、またつばきの木きには、真紅まっかな大おおきな花はなが、たくさんに咲きました。人々ひとびとは、みなその近ちかくに寄よつて、これをながめて、「なんというつくい花はなだろう。」といつて、ほめないものはなかつたのです。ちょうど、そのとき、すみれがやっと、小ちいさなつぼみを破やぶつて紫色むらさきいろの花はなを開ひらいたのです。
53	薄田泣菫「茶話 大正十一(一九二二)年」	1922(大正11)年4月23日～8月27日	随筆(一人称)	あざやかだ。あざやかだ。	①	皆→久米氏 不問 不問→男	⑤	なし	誰かが戯談半分に傍から嗅いたものだ。すると、酔つたまぎれの久米氏はいきなり梶指をもつて蜜柑をむりやりに口の中に押し込んでしまつた。「あざやかだ。あざやかだ。」 皆がやんやと褒めそやすと、それにつれて久米氏は二三度手をふつて踊るやうな真似をしたが、急に息づまりさうになつたと見えて、両手の指先を口の中に突つ込んで蜜柑を取り出さうとするらしくつたが、ローばい飯つた蜜柑はどうしても取り出しやうがなかつた。
54	室生犀星「童子」	1922(大正11)年10月号	小説(一人称)	うちの子は色が黒くて、てんで話にならない、これは傑作だ。	②	杉原→赤児 上下 男→不問	②	なし	田舎にいる杉原という詩人も、もう父親になつていたが、やつて来ると、すぐ赤児の綺麗をほめた。「うちの子は色が黒くて、てんで話にならない、これは傑作だ。」杉原が、そういうと私は、赤児が私似であるか、それとも女に似ているかと尋ねて見た。「奥さんに似ている。」と言つた。「しかし半分くらい似ていないか。」「そういうば少し似ている。」とも言つた。
55	内藤鳴雪「鳴雪自叙伝」	1922(大正11)年刊	詩歌(一人称)	私のカタが一番よい	①	先生→私 上下 男→男	②	なし	私は撃剣へ入門をしたが、試合は頗る下手で、同輩と勝負しても常に負けた。頭をドンドン叩かれるのも痛いものであつた。強く叩かれると土臭い匂いがする。それに反して、カタはうまかつた。その頃カタのことをオモテといつた。入門すると或るカタを習つて、進むに従つて段式というを買つて、段式相当のカタを習うことであつたが、私のカタが一番よいといつて、先生がいつも誉めてくれた。
56	内藤鳴雪「鳴雪自叙伝」	1922(大正11)年刊	詩歌(一人称)	なかなか好い	①	子規氏→私 上下 男→男	①	なし	しかるに廿五年の年始に私は二つばかり俳句が出来て、それを子規氏に見せたら、これはなかなか好いといつて誉めてくれた。それから私も暇ではあるし、いよいよ俳句を遣つて見ようという氣になつて、作れば作るほど熱心の度を増した。この夏子規氏は松山へ帰省して、彼地でも俳句を宣伝して段々と同好者を生ずるに至つた。

57	大杉栄、伊藤野枝訳「科学の不思議 STORY-BOOK OF SCIENCE アンリイ・ファブル Jean-Henri Fabre」	1923(大正12)年8月1日	評論(一人称)	外側は煤で汚れてゐて、真黒で見つともないけれど、内側の方はまあ何んて綺麗なんだらう！	②	不問 上下 男→もの	なし	なし	其の日、アムプロアジヌお婆あさんは、大変に疲れてゐました。お婆あさんは、湯沸しだの、ソオス鍋だの、ラムブだの、燭台だの、シチュウ鍋だののいろんな鍋と蓋とを棚から取り下ろしました。そして、其をきれいな砂や灰で磨いて、其からよく洗つて、それをすつかり乾かすのに、其の台所道具を日向に持ち出しました。それはみんな鏡のやうにぴか／＼光つてゐました。湯沸しは薔薇色の反影で、特別に立派に思はれました。それは火の舌がその内側を輝かせてゐると云つてもいい位でした。燭台は、まぶしい黄色でした。エミルとジュウルは感心してほめるのに夢中になりました。『僕、此の湯沸しをどうして作るのか知りたいな、あんなに光つてる』とエミルは注目しました。『外側は煤で汚れてゐて、真黒で見つともないけれど、内側の方はまあ何んて綺麗なんだらう！』『叔父さんに尋ねなければならぬね』兄さんが答へました。『さうね』とエミルは賛成しました。
58	大杉栄、伊藤野枝訳「科学の不思議 STORY-BOOK OF SCIENCE アンリイ・ファブル Jean-Henri Fabre」	1923(大正12)年8月1日	評論(一人称)	お前の年頃としては大出来だよ。	①	叔父さん→ジュウル 上下 男→男	③	B	『それぢや、僕直ぐ五行程かいてみよう。』とジュウルは云つて、次ぎのやうに読みあげました。『綿は棉の木といふ草の円莢に入つてゐる毛房であります。人は此の毛房で糸を造り、其の糸で布を造ります。布が着られなくなりますと、機械がそれを小さく裂いて、挽臼でそれを挽いてバルブにしてアひます。このバルブは薄い層に引き伸ばされて、压榨してから乾かします。それが紙になるのです。さあ、叔父さんこれでございますか。』『お前の年頃としては大出来だよ。』と叔父さんはほめてくれました。『ですが、これでは本に組めませんね。』『どうして出来ない？ いつかはそれが本の中にはいるやうになるのだ。私達の話はお前のやうにやはり物を知りたがる沢山の余所よその子供にも有益なのだから。出来るだけそれを簡単なものにして集めて叔父さんはそれを本にしようと思つてゐるんだ。』
59	柳田国男「木綿以前の事」	1924(大正13)年10月	ノンフィクション(一人称)	威勢がよいの進取的だの	①	不問→無謀な積極政策 不問 男→男(もの)	なし	なし	これらの弊害はいずれも国民経済学の問題であるが、男子は多くこれを考究しようとしない。日本の男子には妙な習癖があつて、不景氣な考え方だ引込思案だと言われると、随分尤もな意見を持っていてもすぐへこたれ、明らかに無謀な積極政策を提案しても、大抵は威勢がよいの進取的だのと言って営められる。全体に日本は消費機關ばかり無暗に発達した国である。昔から由良千軒とか福良千軒とか謂つて、千軒の人家があれば友食いで立つて行けると言っていたが、そんな道理のあるべきものでない。故に千軒あつたという昔の湊などは、今は多くは荒浜の砂の中である。
60	中谷宇吉郎「九谷焼」	1924(大正13)年11月21日	随筆(一人称)	大きくなった	①	おばあさん→私 上下 女→男	②	なし	一毫さんは、私の中学時代に死んだ。先年国へ帰つた時、三方硝子戸の室には、中学の先生とかいう、若夫婦が間借りをしていた。おばあさんが、久しぶりなので喜んで、大きくなったと褒めてくれた。秋塘さんはまだ元氣だった。関羽嬢がちつとも白くなつていなかった。そして、玉質焼は益々進歩して、渋味のある立派なものになっていた。まだ改良と工夫とを怠つていないのだと見える。
61	国枝史郎「北斎と幽霊」	1925(大正14)年1月1日号	小説(三人称)	おおこれでこそ立派な出来。名画でござる、名画でござる	②	豊後守→融川の絵 不問 男→(男)	①	なし	「おおこれでこそ立派な出来。名画でござる、名画でござる」などと褒めないものでもない。「オホン」とそんな時は大いに氣取つて空の咳でもせいて置いてさて引つ込むのが策の上なるものだ。その出来ない融川はいわゆる悲劇の主人公なのでもあろう。
62	小川未明「青いボタン」	1925(大正14)年1月	童話(三人称)	まあ、きれいなボタンだこと。	①	このボタンを見た人→正雄 不問 不問→男(もの)	①	なし	正雄は、彼女からもらった、三個のボタンを取り出してながめていました。はじめは、それほどとも思わなかったのが、だれでも、このボタンを見た人は、「まあ、きれいなボタンだこと。」といつて、ほめぬものはなかったのです。
63	国枝史郎「赤格子九郎右衛門の娘」	1925(大正14)年2月～3月	小説(三人称)	いい度胸だ	①	お菊→忠蔵 上下 女→男	④	なし	「もう数えるには及ばねえ。とうに決心は付いてるのだ。そも悪党には情はねえ。肉親の愛に溺れた日にや、一刻も泥棒はしていらねえ。今更姐御に背かれようか」 「おおそれでこそ妾の片腕。いい度胸だと褒めてもやろうよ。……変心しないその証拠に今夜お袖をしとめておしまい！」 「え！ 罪もねえ妹を？！」 「妾もト翁をばらすからさ」 「そのト翁は姐御の敵。ばらすというのも解わかつているが、妹には罪も咎もねえ」 「それでは厭だと云うのかい？」 お菊はキリリと眉を上げた。 「……………」 忠蔵は齒を噛むばかりである。
64	岡本綺堂「くろん坊」	1925(大正14)年7月	小説(三人称)	これは結構	①	叔父→橡の実 不問 男→もの	①	なし	彼は木の実を盆に盛って出した。それは橡の実で、そのまま食つてはすこぶるにがいが、灰汁にしばらく漬けておいて、さらにそれを清水にさらして食うのであると説明した。空腹の叔父はこころみに一つ二つを取って口に入れると、その味は甘く軽く、案外に風味のよいものであつたので、これは結構と褒めた上で、遠慮なしにむさぼり食っているのを、僧はやさしい眼をして興あるように眺めていた。 「おまえはお江戸でございますか。」と、僧は訊いた。 「さようございます。」 「わたしもお江戸へは三度出たことがありますが、実に繁昌の地でございますな。」 「三度も江戸へお下りになつたのでございますか。」 「はい。しばらく鎌倉にありましたので……。」と、僧はむかしを偲び顔に答えた。 「道理で、あなたのお言葉の様子がここの人たちとは違つていると思いました。」と、叔父はうなずいた。 「そうかも知れませぬ。しかし、わたしはこの土地の生れでございます。しかもこの家で生れたのでございます。」 彼はうつむいて、そのやさしい眼を薄くとじた。その顔には一種の暗い影を宿しているようにも見られた。

65	国枝史郎「名人地獄」	1925(大正14)年7月5日～10月25日	小説(三人称)	うまい	①	若い侍→水夫 上下 男→男	③	A	<p>続けて咽う追分が、長い尾をひいて消えた時。 「うまい」という声が聞こえて来た。で、ヒョイと振り返って見た。若い侍が立っていた。 「かこなかなか上手だな」至極しごく早速な性質と見えて、その侍は話しかけた。 「どこでそれほど仕込んだな？」 「これはこれはお武家様、お褒めくだされ有難い合わせ」かこは剽軽ひょうきんに会釈したが、「自然に覚えましてございますよ」 「自然に覚えた？ それは器用だな」こういいいい侍は、帆綱の上へ腰を掛けたが、「実はなわしにはその追分が、特になつかしく思われるのだよ」 「おやさようございますか」 「というのは他でもない。その文句なりその節なり、それとそっくりの追分を、わしは信州の追分宿で聞いた」 するとかこは笑い出したが、「甚三の追分でございましょうが」</p>
66	国枝史郎「名人地獄」	1925(大正14)年7月5日～10月25日	小説(三人称)	「かこなかなか上手だな」	①	若い侍→水夫 上下 男→男	③	A	<p>続けて咽う追分が、長い尾をひいて消えた時。 「うまい」という声が聞こえて来た。で、ヒョイと振り返って見た。若い侍が立っていた。 「かこなかなか上手だな」至極しごく早速な性質と見えて、その侍は話しかけた。 「どこでそれほど仕込んだな？」 「これはこれはお武家様、お褒めくだされ有難い合わせ」かこは剽軽ひょうきんに会釈したが、「自然に覚えましてございますよ」 「自然に覚えた？ それは器用だな」こういいいい侍は、帆綱の上へ腰を掛けたが、「実はなわしにはその追分が、特になつかしく思われるのだよ」 「おやさようございますか」 「というのは他でもない。その文句なりその節なり、それとそっくりの追分を、わしは信州の追分宿で聞いた」 するとかこは笑い出したが、「甚三の追分でございましょうが」</p>
67	伊藤野枝「内気な娘とお転婆娘」	1925(大正14)年8月1日	随筆(一人称)	おとなしい淑やかだ	①	世間の人達→女の方 不問 不問→女	④	なし	<p>世間の人達は、よくお転婆だおきやんだと攻撃しますが、私はそれよりも、おとなしい淑やかだとほめられる女の方が、どの位多く攻撃される価値があるか知れないと思ひます。そして、私はさう云ふ人を意久地いくじなしと云ひます。</p>
68	村山篤子「トントンピービ」	1925(大正14)年9月	詩歌(三人称)	これはきれいだ、きれいだ	①	トントンピービのわるとび →あかいぐみの実 不問 不問	②	なし	<p>「あかいぐみの実をみせとくれ。みせとくれ。」 まつくろくろ蟻ありがきいたらば 「トントンピービのわるとびが、これはきれいだ、きれいだと、ほめほめちぎつて、またほめて、ほめほめちぎつてとんでつた。」あをい葉ばかりのぐみの木は、あをい葉ばかりのぐみの木は。</p>
69	鈴木行三校訂編集「闇夜の梅 三遊亭圓朝」	1925(大正15)年9月3日	小説(三人称)	どうも玉子を剥いたような綺麗なお嬢様だ、可愛いお児だ	①	往來の者→お嬢様 上下 不問→女	②	なし	<p>鳶「いえ、何うも御気象な事で、まアどうもお嬢様がお小さい時分、確か七歳のお祝の時、私がお供を致しまして、鎮守様から浅草の観音様へ参りましたが、いまだに能く覚えております、往來の者が皆振返って見て、まアどうも玉子を剥いたような綺麗なお嬢様だ、可愛いお児だって誰でも誉めねえものは無えくれえでけしたがる、幼少せい時分からのお馴染ゆえ、此の頃になつてお嬢様が高慢なことを仰しやいまして、あなた其様な事をいつたてていけませぬ、わたしの膝の上で小便をした事がありますぜと、あら鳶頭幼少せい時分の事をいつちゃア厭だよなんて、真紅におなりでしたが、何とも申そうようはござえませぬ」</p>
70	水上瀧太郎「大阪の宿」	1925(大正14)年10月～1926(大正15)年6月	小説(三人称)	作中に用ひた大阪言葉が存外うまい	①	讀者→三田の作品 不問 不問→男(もの)	①	なし	<p>今度も亦新しい讀者から、新聞社宛の投書がしきりだつた。作中に用ひた大阪言葉が存外うまいとほめて來るものもある。甚しくまづいと云つて、一々叮嚀に訂正して來るものもある。作者の大阪觀が間違つてゐるといつて、堂々と反對して來るものもある。贅六根性を痛罵したところが氣に入つたと稱讃して來るものもある。三田としては作品に人氣があるといふ事も悪い氣持はしなかつたが、それよりも作品に對する藝術的批評が聞き度かつた。しかし、新聞社としては、讀者うけのいゝといふ事が第一だから、その爲めに三田は少なからず感謝された。</p>
71	佐々木邦「朝起の人達」	1925(大正14)年11月	小説(一人称)	お早い散歩ですな	①	巡查→私 上下 男→男	⑤	なし	<p>長年八時に起きて九時過ぎにアタフタと役所へ駈けつける私には、暗い中に起きることは全く新しい経験だつた。屋敷町は人っ子一人通らない。坂を下りた時巡查に行き会つたばかりだつた。 「もし」と呼び止められたのは意外だつたが、 「何です？」と訊くと、 「あゝ、あなたですか、お早い散歩ですな」と褒めてくれた。電車通りへ出ても店は未だ皆閉まていて、看板ばかりが目につく。御註文通り芝公園へ行つて丸山へ登つたけれど、日の出には少し間があつた。矢張り早い人もあるもので、老人が一人やつて來た。 「お早いことでございますな」 と私の太いステッキにお辞儀をして直ぐに下りて行つてしまつた。</p>
72	佐々木邦「朝起の人達」	1925(大正14)年11月	小説(一人称)	あなたは精が出ますね	①	中老→青年 上下 男→男	⑤	B	<p>「二三日見えませんでしたね。お天氣が好かつたのにいけなかつたんですか？」と問われて、 「又少し腫れましてね、歩くのが億劫で」と天氣の加減でなくて疝氣の都合を訴える中老もあれば、「あなたは精が出ますね」と褒められて、「私は不眠症ですから夜の明けるのが待ち切れないんです」と啣かこつ青年もある。彼等は皆朝起をして仕健になつたのではない。</p>

73	豊島与志雄「不肖の兄」	1925(大正14)年12月	小説(一人称)	いい詩だ	①	敏子→僕 下上 女→男(もの)	①	なし	僕が「幼き愛」という変な詩を書いて見せた時のことを、お前は覚えていだろう。あの時お前は僕の様子を不思議がったね。だがこれで分ったろう。僕は一体、詩を書くといつもお前に見せていた。それは女の感受性に敬意を表するからだ、と云えば立派だが、実は自分の詩についての自信がなかったからさ。それだもの、「幼き愛」などというあんな成心あって拵えた詩なんか、何の価値もありやしない。それをお前はほめてくれた。いつも僕の詩を無遠慮にやつつけるお前が、いい詩だと云ってほめてくれた。僕はお前の顔色や眼付を窺いながら、ははん……と思った。それから、なおも一度読み返して、考えてる風をしてみると、お前はこう云ったね。「兄さん、それは誰との思い出なの。」 「馬鹿な。」 僕は思わず口走って、それから詩の原稿を引裂いてしまった。 「あら。」 その時のお前の、喫驚した顔つたらなかったよ。だが瞬間に、お前の黒い睫毛は、眼の色に現われた感情を隠してしまった。
74	正宗白鳥「見て過ぎた女」	1926(大正15)年2月1日	小説(三人称)	あの方は氣象のさつぱりしたい娘さんですね。	①	老婢→妻君の妹 下上 女→女	④	なし	しかし、彼れは親しい態度を執ることはなかったが、ある日の晚餐の座で、老婢は、「あの方は氣象のさつぱりしたい娘さんですね。」と褒めて、縁談を求めてゐるやうなことをも話した。 「しかし、あのくらゐな女はいくらでもあるだらう。」日比野は、老婢の心を察して簡単にさう答へた。
75	佐々木邦「或良人の惨敗」	1926(大正15)年2月	小説(三人称)	お前もナカ／＼隅へは置けないんだね	①	鳥居氏→夫人 対等 男→女	③	B	「私は腹が立ちましたわ。こんなことをしているならと思って直ぐ羽織を拵えたんですが、未だ虫が治まりませんから、帯も一本買いましたわ。両方で丁度甚盤ぐらいです。あなたが白状なすったから、私も白状致しますわ」 「お前もナカ／＼隅へは置けないんだね」 と鳥居氏は廻ろなく夫人の手腕を褒めた。 「でも、私は良心がありますわ。始終気が咎めていたんですもの」 「何うだか？」 「それはあなたが御自分のお心に引き較べて仰有ることよ。あなたぐらい図々しい人はありませんわ」
76	中谷宇吉郎「由布院行」	1926(大正15)年5月20日	日記(一人称)	道理で大分物の分った人だと思った	①	伯父→KKさん 下上 男→男	④	なし	私が行っている間にも、KKさんが来た。雨上りの田の畔をいい気持になって散歩をして帰って来たら、「今帰らったところじゃがKKという人が来たが、東京の人だそうだがお前知ってるか」という。「それは大分有名な小説家ですよ。会ったことはないが、名前はよく聞いています」というと、伯父は道理で大分物の分った人だと思ったと褒めながら、画帳を開いて見ている。見ると、何やら歌が書いてある。
77	中谷宇吉郎「由布院行」	1926(大正15)年5月20日	日記(一人称)	大変簡素でいい	①	KKさん→伯父 上下 男→男	①	なし	何でも、伯父の作った胡瓜の漬けたのを、美味い美味いといって随分沢山食って行ったことと、それからこれも伯父の趣味であろうが、ここの浴室は、全然離れた庭の端の金鱗湖のすぐ畔の所に、亭のように一棟立っているのであるが、その浴室のことを大変簡素でいいと褒めて行ったのだそうである。それで伯父が大分物の分った人だと感心した次第なのである。
78	岸田國士「ゼンマイの戯れ(映画脚本)」	1926(大正15)年7月1日	戯曲(三人称)	発明の才がある	①	上役→平造の作ったカレンダー 上下 男→男	③	なし	つましく箸を運んでゐる娘の姿が、華やかな婚礼姿になつて眼の前に浮ぶ。そして、その傍に並んで坐つてゐる新郎の姿、これはまた、役所の同僚、安田なのである。すると、何時の間にか、平造の眼の前には、今日、上役がカレンダーを見て、発明の才があると褒めた、あの時の光景がありありと浮んで来る。平造は、はつと、我に帰る。誇らしげに、一同を眺めまわす。——おれが、今に、どんなえらいことをしでかすか、まあ、見とれ。妻と娘とは、あつけに取られて、平造の顔を見る。
79	鈴木行三校訂「真景累ヶ淵 三遊亭圓朝」	1926(大正15)年9月3日	小説(三人称)	若いにしては強い、此の間は三段目の角力を投げた	②	不問→花車重吉 不問 不問→男	③	なし	此の相撲場は細川越中守様御免の相撲場ということで、木村權六という人が只今以て住んで居ります、縮緬の幕張りを致して、田舎相撲でも立派な者で近郷からも随分見物が参ります、此処に参っている関取は花車重吉という、先達私古い番附を見ましたが、成程西の二段目の末から二番目に居ります。是は信州飯山の人で十一の時初めて羽生村へ来て、名主方に二年ばかり奉公している其の中に、力もあり体格もいゝので、自分も好きの処から、法恩寺村の場所へ飛入りに這入ると、若いにしては強い、此の間は三段目の角力を投げたなど賞められましたから、自分も一層相撲に成ろうと、其の頃の源氏山という年寄の弟子となつたが、是より花車が来たといえど土地の者が最眞に見物に来る。
80	鈴木行三校訂「松の操美人の生埋 俠骨今に馨く 賊胆猶お腥し 三遊亭圓朝」	1926(大正15)年	小説(三人称)	お前は感心だ。あゝいう芸者などには似合わぬ者	①	旦那様→兼 上下 男→女	⑥	なし	母「まだお前が十五六の時分に逢った切りで、それから三年振で今日逢うと、一寸見ては話も出来ない位見忘れる様に大きく成ったのう、人の噂に大層働きの好い芸者になったとは聞いたが、お前は一体親孝行で母を大事にしたが、旦那様もお前は感心だ、あゝいう芸者などには似合わぬ者とお誉めなすつたが、是も孝行の徳だ、私は又斯んな姿になるまで零落しました」 兼「もう唯今お嬢様に左様申すので、何うかして何処に入らっしゃるか知れ無い訳もあるまいと尋ねまして何うしても知れませんので、慥か何時そや三田に入らっしゃる様子を聞きましたが」
81	竹久夢二「街の子」	1926(大正15)年12月	童話(三人称)	うまい、うまい。ジャッキイは、今に大音楽家になるぞ	②	お爺さん→ジャッキイ 上下 男→男	③	なし	春太郎は、学校へゆく道で考えました。早く雪が降ってくれるといいな。そしてクリスマスの晩になるといいな。だけど、ジャッキイはどうしたろう。あれからすっかり幸福になったかしら。まだあの大きなズボンをはいて、ロンドンの街を歩いているのじゃないかしら。ぼくもロンドンへゆきたいな。お姉さんが死んでしまったら、ぼくお姉様のヴァイオリンを貰おうや。そして、クリスマスの晩、ロンドンの街を歩くんだ。そうすると大きな、玩具屋があって、そこの飾窓に、テディ熊がいるだろう。「おい危い」で、空には星が、きらきら光っていて、袋を持たないサンタクロスのお爺さんがやってくる。ジャッキイがヴァイオリンをひいているのを、お爺さんがききながら、「うまい、うまい。ジャッキイは、今に大音楽家になるぞ」そう言つてほめました。きつと、ぼくは大音楽家になるだろう。そして、ぼくのお父様も大音楽家なんだ。おや、おや。ぼくのお父様は、会社へ出ているんだつて、「カン、カン、カン」「カン、カン、カン」その時、春太郎は、いつの間にか、学校の前へ来ていました。

82	小熊秀雄「裸婦」	1927(昭和2)年1月18日～23日	小説(一人称)	上でき	①	大人達→子供の私 上下 不問→男	③	なし	かうしたことで小さな頭の中がいつぱいになつてゐた。 私の答弁は、確に不満であつたらしい、しかし、子供達の答として上できとほめてやらねばなるまい。 それに子供達は、妹や弟が生れる時にかぎつて、必ず追ひ出すやうに遊びにやられる。
83	岡本綺堂「正雪の二代目」	1927(昭和2)年5月	戯曲(三人称)	お前や刀屋の長七は町人ながらも頼 もしい奴だ	①	先生→義平や刀屋の長七 上下 男→男	④	B	平九郎 今も噂をしてゐたところで、おまへの腕の強いことは、おれ達もよく知つてゐる。お前や刀屋の長七は町人な がらも頼もしい奴だと、先生が褒めてゐられるくらゐで、それだけに又餘計の小言もおつしやるのだ。有難いと云はな ければならないぞ。 義平 さう仰しやられるといよ／＼痛み入ります。町人ながらも何かのお役に立ちますやうにと、せい／＼ 勉強い たす積りでございますから、何分よろしく願ひます。
84	岡本綺堂「正雪の二代目」	1927(昭和2)年5月	戯曲(三人称)	あつぱれ攘夷家の最後だ	①	世間→平九郎 不問 不問→男	⑤	なし	伴左衛 おれは書置をかいて切腹する。おまへ達も一緒に腹を切れ。 平九郎 はあ。 伴左衛 さうすれば世間でもあつぱれ攘夷家の最後だと褒めてくれるだらう。 平九郎 (迷惑さうに。)承知いたしました。では、これから一同にその趣を觸れてまゐりませう。
85	三遊亭円朝「業平文治漂流奇談」	1927(昭和2)年6月28日	落語(一人称)	お前(めえ)さんは感心だ、裙捌(すそ さば)きが違う	②	旦那→お嬢さん 上下 男→女	②	C	森「知ってる、これは思掛けねえ、知ってるとも、お前さんの処のお父さんが目が悪くつて、お前さんが天神様でお百 度をふみ、雪に悩んで倒れている処へ家の旦那が通り掛け、薬を服ませて立花屋で薬をやった時、旦那がお前さん は感心だ、裙捌きが違つて云つて大変褒めた、そうして金をやった時、あなたは受けねえと云うと、旦那が満腹だと 云つた」 國「満腹は腹のくちくなった時のことだ」 森「何とか云つたねえ」 國「感服だろう」
86	三遊亭円朝「業平文治漂流奇談」	1927(昭和2)年6月28日	落語(一人称)	感服だ、感服だ	①	旦那→お嬢さん 上下 男→女	⑤	なし	森「感服だ、感服だと褒めた、旦那が女を褒めたことはねえが、この嬢ちゃんばかりは褒めた、お父さんはどうしまし たえ」 國「お亡れになった」 森「お亡れになってどうしたね」 國「死んだのだ」 森「死んだえ、死んだ時は何とか云うのだね」
87	三遊亭円朝「根岸お行の松 因果塚の由来」	1927(昭和2)年6月28日	落語(三人称)	飛んだ良い人間	①	お内儀さん→伊之助 上下 女→男	④	なし	勝「そりゃア何うも先生の前でげすが、アへやってお嬢さんもぶらぶら塩梅が悪くツてお在なさるし、何うかお気の紛れ るやうにと思つて、私ア身許から知ってる堅え芸人でげすから、私が勤めて堺屋のお店へ出入をするようになると、あ んな優しい男だもんだから、皆さんにも可愛がられ、お内儀さんも飛んだ良い人間だと誉めて居らしたから、お世話 効があつたと思つて居ました、処がアへ云う訳になつたもんですから、お内儀さんが、此金で堺屋の關を跨がせない様 にして呉れと仰しやつて、金子をお出しなすつたから、ナニ金子なんざア要りませぬ、私が行くなと云えばよる氣遣い はござえませんと云うのに、何でもと仰しやるから、金子を請取つて伊之助に渡し、因果を含めて証文を取り、お嬢さ んのお供をしてお宅へ出ましたッ切で、何うも大きに御無沙汰になってますので」 主人「ナニ無沙汰の事は何うでも宜い、が、其の大金を取つて横山町の横と云う字にも足は踏掛けまいと誓つた伊之 助が、若の許へ来て逢引をしては済むまいナ」
88	幸田露伴「華厳滝」	1927(昭和2)年8月1日～8日	紀行文(一人称)	好い／＼	①	皆→魚どめ、左鞠、寒凄 橋等 上下 不問→もの	なし	なし	魚どめ、左鞠、寒凄橋、一々列舉していふまでもない、皆好い／＼とほめちぎつて、福渡戸の柵屋に投宿した。日は まだ高かつたが、雨ははら／＼と降つてゐた。
89	三遊亭円朝「名人長二」	1927(昭和2)年8月12日	小説(三人称)	当時無類	①	世間の人→長二郎 不問 不問→男	③	なし	さて此の長二郎と申す指物師は無学文盲の職人ではありますが、仕事にかけては当時無類と誉められ、江戸町々の 豪商はいうまでもなく、大名方の鼯鼠を蒙つたほどの名人で、其の拵えました指物も御維新前までは諸方に伝つて 珍重されて居りましたが、瓦解の時二東三文で古道具屋の手に渡つて、何うかなつてしまいましたものと見えて、昨今 は長二の作というものを頼と見かけません。
90	鈴木行三校訂・編集「菊模様皿山奇談 三遊亭圓 朝」	1927(昭和2)年8月12日	小説(三人称)	本当にえらいお人で、手も能く書く、力 も強く、他は否に陥うなどと申すが、 然うでない、真実愛敬のある人で、私 が此の間会つた時にこれ／＼云つ て、彼は誠の侍でどうも忠義一途の 人であります	②	老女や中老→男 不問 不問→男	④	なし	此の前次様は前申し述べました通り、武張つたお方で武芸に達した者を手許に置きたいというので、御当主へお願い 立でお貰い受けになりましたので、お上邸と違つてお長家も広いのを頂戴致す事になり、重役の氣受けも宜しく、男が 好つて程が善いから老女や中老までも誉めそやし、「本当にえらいお人で、手も能く書く、力も強く、他は否に陥うなど と申すが、然うでない、真実愛敬のある人で、私が此の間会つた時にこれ／＼云つて、彼は誠の侍でどうも忠義一途 の人であります」と勤務が堅いから忽ち評判が高くなりました。乃で有助という、根岸にいた時分に使つた者を下男に 致しまして、新規に林蔵という男を置きました。
91	佐々木邦「苦心の学友」	1927(昭和2)年10月号～1929(昭和 4)年12月号	小説(三人称)	よくおできでございます。照彦とはまっ たく違います	②	奥様→正三君 上下 女→男	③	B	照彦様が再三直されて国語の読み方をおわつた時、「有本さん、ご苦勞でございます。頭のわるい子ですから、特別 にお骨が折れましょう」と奥様は先生をねぎらうつもりでおつしやつた。「エヘン」と安斉先生が咳ばらいをした。「どう いたしまして。内藤君、今のところ読んでごらんなさい」と有本先生が命じた。正三君がスラスラと読みおわるのを 待っていたように、奥様は、「よくおできでございます。照彦とはまったく違います」とほめた。「どういたしまして」「いい え。照彦や、おまえは内藤さんの二倍も三倍もやらなければだめですよ。頭のわるい分を勉強で取りかえすのです」 「エヘン」「ゆだんをしてはなりませんよ。人よりも頭のわるいことを始終わすれないようにしましてね」「エヘンエヘン エヘン」と安斉先生は続けさまだった。

92	内田魯庵「露伴の出世咄」	1927(昭和2)年11月5日号	随筆(三人称)	エライ男です、エライ男です	①	学海翁→露伴 上下 男→男	③	なし	翁は漢学者に似気ない開けた人で、才能を認める年年齢を忘れて少しも先輩ぶらずに対等に遇したから、さらぬだに初対面の無礼を悔いていたから早速寒月と同道して露伴を訪問した。老人、君の如き異才を見るの明がなくて意外の失礼をしたと心から深く詫びつつ、さてこの傑作をお世話したいが出版先に御希望があるかと懇切に談合して、直ぐその足で金港堂へ原稿を持って来た。「イヤ、実に面白い作で、真に奇想天来です。」と美妙も心から喜ぶように満面笑い頼れて、「近來の大収穫です。学海翁も褒めちぎって褒め切れないのです。天才でものは何時どこから現われて来るか解らんもんで、まるで彗星のようなもんですナ……」と美妙は御来迎でも拝んだように話した。それから十日ほど過ぎて学海翁を尋ねると、翁からも同じ話を聴かされたが、エライ男です、エライ男ですと何遍となく繰返した。
93	正岡子規「墨汁一滴」	1927(昭和2)年12月15日	随筆(一人称)	君はなかなか男らしくて頼もしい奴だ、僕が女ならとうから君に惚れちよるよ	②	側の男→男 対等 男→男	④	なし	この身もし女なりせでわがせことたのみてましを男らしき君「せで」は「せば」の誤植なるべし。「女にて見たてまつらまし」など『源氏物語』にあるより翻案したるか。されどそれは男の形のうつくしきを他の男よりかく評せるなり。しかるにこの歌は男の男らしきを側の男よりほめて「君はなかなか男らしくて頼もしい奴だ、僕が女ならとうから君に惚れちよるよ」怀いふのであるから殺風景にして少しも情の写りやうなし。前者は女的男を他の男が評する事故至極尤と思はるれど、この歌の如きは男的男を他の男が評する事故余り変にして何だかいやな氣味の悪い心持になるなり。畢竟この歌にて「男らしき」といふ形容詞を用ゐたるが悪きにて、かかる形容詞はなくてもすむべく、また他の詞を置けてもよかりしならん。
94	小泉節子「思い出の記」	1927(昭和2)年12月20日発行	手記(一人称)	利口と、親切と、よく事を知る、少しも卑怯者の心ありません、私の悪い事、皆云ってくれます、本当の男の心、お世辞ありません、と可愛らしいの男です	②	ヘルン→西田さん 対等 男→男	④	なし	学校は中学と師範の両方を兼ねていました。中学の教頭の西田と申す方に大層御世話になりました。二人は互に好き合って非常に親密になりました。ヘルンは西田さんを全く信用してほめていました。『利口と、親切と、よく事を知る、少しも卑怯者の心ありません、私の悪い事、皆云ってくれます、本当の男の心、お世辞ありません。と可愛らしいの男です』お気の毒な事にはこの方は御病身で始終苦しんでいらっしやいました。『唯あの病氣、如何に神様悪いですね——私立腹』などと云っていました。
95	鈴木行三校訂・編集「怪談牡丹灯籠 怪談牡丹灯籠 三遊亭圓朝」	1927(昭和2)年12月25日	小説(三人称)	御亭主、お前は流石に御渡世柄だけあって此の店を一寸も動かず、自若としてござるは感心な者だな	②	侍→亭主 上下 男→男	④	B	侍「御亭主、お前は流石に御渡世柄だけあって此の店を一寸も動かず、自若としてござるは感心な者だな」事「いえナニお誉めで恐入ります、先程から早腰が抜けて立てないので」侍「硯箱はお前の側にあるじゃアないか」と云われてよう／＼心付き、硯箱を彼の侍の前に差出すと、侍は硯箱の蓋を推開きて筆を取り、すら／＼と名前を飯島平太郎と書きおわり、自身番に届け置き、牛込のお邸へお帰りに成りまして、此の始末を、御親父飯島平左衛門様にお話を申上げましたれば、平左衛門様は宜く斬ったと仰せありて、それから直にお頭たる小林權太夫殿へお届けに及びましたが、させるお咎めもなく切り徳切れ損となりました。
96	鈴木行三校訂・編集「怪談牡丹灯籠 怪談牡丹灯籠 三遊亭圓朝」	1927(昭和2)年12月25日	小説(三人称)	感心な奴だ	①	兄上→相助 上下 男→男	⑤	B	源次郎は屋敷に帰ると直に男部屋へ参ると、相助は少し愚者で、鼻歌でデロレンなどを唄っている所へ源次郎が来て、源「相助、大層精が出るのう」相「オヤ御二男様、誠に日々お熱い事でございます、当年は別してお熱いことで」源「熱いのう、其方は感心な奴だと常々兄上も褒めていらっしやる、主用がなければ自用を足し、少しも身体に隙のない男だと仰しやっている、それに手前は国に別段親族もない事だから、当家が里になり、大した所ではないが相応な侍の家へ養子にやる積りだよ」相「恐れ入ります、何ともはや誠にどうも恐れ入りますナア、殿様と申し貴方と申し、不束な私をそれ程までに、これははや口ではおれが述べきれましねえ、何ともヘイ分らなく有難うございます、それだが武士に成るにやア私もいるのはいの字も知んねえもんだから誠に困るんで」
97	鈴木行三校訂・編集「怪談牡丹灯籠 怪談牡丹灯籠 三遊亭圓朝」	1927(昭和2)年12月25日	小説(三人称)	志は親孝行のものだ、可愛いものだ	①	殿様→孝助殿 上下 男→男	④	なし	相「実は殿様が日頃お誉めなさる此方の孝助殿、あれは忠義な者で、以前は然るべき侍の胤でござろう、今は零落て草履取をしていても、志は親孝行のものだ、可愛いものだと殿様がお誉めなされ、あれには兄弟も親族もない者だから、行々は己が里方に成って他へ養子にやり、相応な侍にしてやろうと仰しやいますから、私も折々は宅の家来善藏などに、飯島様の孝助殿を見習えと叱り付けますものだから、台所のおさんまでが孝助さんは男振もよし人柄もよし、優しいと誉め、乳母までが彼是と誉めはやすものだから、娘も、殿様お笑い下さるな、私は汗の出るほど耻入ります、実は疾くより娘があゝの孝助殿を見染め、恋煩いをして居ります、誠に面目ない、それをサ婆アにもいわないで、漸く昨夜になって申しましたから、なぜ早く云わん、一合取っても武士の娘という事が浄瑠璃本にもあるではないか、
98	鈴木行三校訂・編集「怪談牡丹灯籠 怪談牡丹灯籠 三遊亭圓朝」	1927(昭和2)年12月25日	小説(三人称)	男振おとこぶりもよし人柄もよし、優しい	①	台所のおさん→孝助さん 下上 女→男	④	なし	相「実は殿様が日頃お誉めなさる此方の孝助殿、あれは忠義な者で、以前は然るべき侍の胤でござろう、今は零落て草履取をしていても、志は親孝行のものだ、可愛いものだと殿様がお誉めなされ、あれには兄弟も親族もない者だから、行々は己が里方に成って他へ養子にやり、相応な侍にしてやろうと仰しやいますから、私も折々は宅の家来善藏などに、飯島様の孝助殿を見習えと叱り付けますものだから、台所のおさんまでが孝助さんは男振もよし人柄もよし、優しいと誉め、乳母までが彼是と誉めはやすものだから、娘も、殿様お笑い下さるな、私は汗の出るほど耻入ります、実は疾くより娘があゝの孝助殿を見染め、恋煩いをして居ります、誠に面目ない、それをサ婆アにもいわないで、漸く昨夜になって申しましたから、なぜ早く云わん、一合取っても武士の娘という事が浄瑠璃本にもあるではないか、
99	宮本百合子「毛の指環」	1927(昭和2)年12月号	小説(三人称)	質素でよい	①	新聞→お千代ちゃん 不問 不問→女	②	なし	小学校を最優等でお千代ちゃんは卒業し、日比谷公園へ行って市長の褒美ほうびを貰った。その時、お千代ちゃんはやっぱり地味な紡績の元禄を着て海老茶袴をつけて出た。新聞が、それを質素でよいと褒めめた。由子は、そうは思わなかった。いい着物をお千代ちゃんに着せたかった。あって着ないのではない。お千代ちゃんの家は貧しいのを、由子は知っていた。
100	和田萬吉「竹取物語」	1928(昭和3)年3月5日	童話(三人称)	龍は雷のようなものと見えた。あれを殺してもしたら、この方の命はあるまい。お前たちはよく龍を捕らずに来た。うい奴どもちや	②	大納言→家来ども 上下 男→男	③	なし	そこへ家来どもが駆けつけて、お見舞ひを申し上げると、大納言は杏のように赤くなつた眼を開いて、「龍は雷のようなものと見えた。あれを殺してもしたら、この方の命はあるまい。お前たちはよく龍を捕らずに来た。うい奴どもちや」とおほめになつて、うちに少々残つてゐた物を褒美に取らせました。もちろん姫の難題には怖じ氣を振り、「赫映姫の大きがりめ」と叫んで、またと近寄らうとしませんでした。

101	海野十三「空中墳墓」	1928(昭和3)年10月	小説(一人称)	一番調子がよい	①	指導者→相良十吉 上下 男→男(もの)	③	C	「なるほど、風間氏が生きていたら、甚だ事面倒になるわけですな」 「そのことについては私はもう決心をしています。だが風間は生きていましょうか。すま子には、まだ何事も話をしていないのです」 「よく調べて見ましょう。——それからもう一つ伺いたいのです。あなたは松風号のどの部分を御設計でしたか」 「プロペラです」 と十吉は、はき出すように答えた。 「プロペラの試験は、一番調子がよいとほめられた位です。あの設計は丸一年かかりました」 「それで只今のお仕事は」 「今は航空研究所の依頼品を監督して組立中です。何ものであるかは一寸申し上げられませんが、航空機であることはたしかです」 私のききたいことは終わった。相良は松風号の行方不明に関する切抜記事帳を、参考にまでと言って私に差ししたが、私は書棚の奥から、その三倍もある松風号事件参考簿を見せてそれを断った。相良は一寸いやな顔をした。
102	高村光雲「幕末維新懐古談 27 引き続き作に苦心したこと」	1929(昭和4)年1月	小説(一人称)	なかなか出来栄だ	①	師匠→私 上下 男→男	③	なし	出来上がると、師匠も、なかなか出来栄だとほめてくれられ、公使館の人が検分に来た時は大変な気に入りで、よろこんで持って帰りました。これは本国へ送り、さらに大作を注文するということではあったが、いかなる都合であったか、大きい方はそのままになってしまいました。とにかく、こういう風な西洋人の仕事が段々と殖えて来まして、その都度私が関係したのであった。
103	高村光雲「幕末維新懐古談 75 不動の像が縁になったはなし」	1929(昭和4)年1月刊	自伝(一人称)	あの不動さまは実に好い	①	後藤氏→不動さま 不問 男→不問	④	なし	初めの中は後藤氏も、あの不動さまは実に好いと褒めていた位でしたが、いかにも心が惹かれたと見えて、「高村さん、どうか、私に、あの不動さまを譲ってくれませんか。私は一目あれを見てから、どうも欲しくてしょうがありません」という言葉つき。いかにも余念なく見えたが、「あれは私の彫刻の参考ですからお譲りするわけに行きません」私は一応お断わりしました。
104	高村光雲「幕末維新懐古談 06 高村東雲の生い立ち」	1929(昭和4)年1月刊	自伝(一人称)	よく知っていたな、感心々々	①	師匠→私 上下 男→男	③	B	師匠はニッコリ笑い、「よく知っていたな、感心々々」と褒められたのでした。師匠はさらに、「手習いをしたか」という。私は母から少しばかり手解きされて、まだ手習いというほどのこともしていないので、「手習いはしません」というと、「そうか。手習いはしなくとも好い。字はいらない。職人はそれで好いのだ」といわれました。「算盤は習ったか」と次の質問に「ソロバンもまだ知りません」と答えました。「算盤もいらない。職人が銭勘定するようじゃ駄目だ。彫刻師として豪くなれば、字でも算盤でも出来る人を使うことも出来る。ただ、一生懸命に彫刻を勉強しろ」というようなことで、極簡短な口頭試験に私は及第したのであった。
105	野村胡堂「禁断の死針」	1929(昭和4)年9月	小説(三人称)	盲の其方が、妹と心を合せて、親の讐を討ったのは殊勝な心掛け、	①	裁判→佐の市と妹 上下 男→男・女	⑤	A	佐の市は見えぬ眼をしばたき乍ら、白洲の砂利を掴んで斯う申します。 「これこれ佐の市、何を申す、師匠漆検校の言葉を嘘にしてすむと思うか、其方の打ったのは、禁断の針では無い、あれは肩の凝を散らす鍼じゃ」 「御奉行様」 「黙って聞け佐の市、鍼は禁断の死針ではないが、盲の其方が、妹と心を合せて、親の讐を討ったのは殊勝な心掛け、褒めつかわずぞ」 「ハッ」 佐の市は思わず、白洲の砂利に額を埋めて嬉し涙に咽び入りました。昔の裁判はズボラなようで誠に味のあったもの、時は嘉永二年秋、桜の文身をして居たという名奉行、遠山左衛門尉景元の逸話、按摩の仇討という話はこれです。
106	三上於菟吉訳「グロリア・スコット号 コナンドイル」	1930(昭和5)年2月5日	小説(三人称)	ホームズ君、私は君がどうしてこれを推論されたのか知らんのじゃが、しかし君にはこんな事の探偵は、なんでもないことのように私には見えるのう。 ——あなたはその方面をおやりなさるがよい。そうすればきっとあなたは何かを発見なすって、世界的な人物になれますぞ——	②	彼→ホームズ 対等 男→男	③	なし	彼は無理に笑いながら云った。「もう大丈夫だから安心して下さい。——私は強そうに見えて、心に弱い所があるのですな。でも、私の命をとるほどではないのです。——ホームズ君、私は君がどうしてこれを推論されたのか知らんのじゃが、しかし君にはこんな事の探偵は、なんでもないことのように私には見えるのう。——あなたはその方面をおやりなさるがよい。そうすればきっとあなたは何かを発見なすって、世界的な人物になれますぞ——」そうして実に、ワトソン、この時彼に無暗に私の才能をほめ上げられたことが、それまでは道楽にやっていた仕事を、これは商売になるかなと思わせられるようになった、そもそも最初の原因だったのさ。けれど無論その時は、私はその家の主人の急病で夢中だったから、そんな他のことなどは考える所じゃなかったのだ。
107	横本楠郎「赤い旗」	1930(昭和5)年5月5日	詩歌(三人称)	見事見事	①	猿→蟹 対等 不問	①	なし	から貰った柿の種 だまされたとは知らぬ蟹 ねぢ鉢巻で肥料やる 二葉に芽が出て花が咲く 果がなりやどこから出て来たか ひよつくり山猿・赤い顔 見事見事とほめそやし つる／＼登つて山猿め ムシヤ／＼頬張る赤い柿 氣のよい蟹はだまされて 下から見上げて待つてれば 甲羅にはぢける青い柿
108	宮本百合子「子供・子供・子供のモスクワ」	1930(昭和5)年10月	小説(三人称)	非常にいい	①	彼女→本の印刷 上下 女→もの	①	なし	彼女は快活に笑った。階段を二階へのぼりながら、彼女は日本の児童のための雑誌、本の印刷が非常にいいと褒めた。 ——技術的に実に進歩してます。でも、露骨に内容に歴史的要素を沢山とり入れていますね、この頁に、すっかりヨーロッパ風のよそおいをした日本の子供がラジオ組立てで遊んでいる画があると、直ぐ次に、封建時代のサムライが出て来る。日本の子供はひんぱんにそうやって封建時代へ逆転させられることを何とも感じないんでしょうか。まだ……。

109	谷崎潤一郎「盲目物語」	1931(昭和6)年9月	小説(三人称)	あの児はだまっているけれども腹に しっかりしたところがある、きつと利発 ものにちがいない	②	義理の伯母御→お兄 上下 女→男	③	なし	それで万ぶく丸どのゝことをしのばれるにつけても此のお児をいとしがられまして、「わたしが母御のかわりになって上げますよ、用のないときはいつでもここへあそびにおいで」と仰っしゃって、なさけをかけてお上げなされ、「あの児はだまっているけれども腹にしっかりしたところがある、きつと利発ものにちがいない」とおほめになっていらっしゃいました。さようでございます、おはつ御料人と御えんぐみをなされましたのは、それよりずっとのち、七八ねんもさきのことでござりまして、当時は姫ぎみもおちいそうござりましたから、そんなおはなしはござりませなんだ。
110	岡本綺堂「鰻に呪われた男」	1931(昭和6)年10月	小説(一人称)	人品のいい人だ	①	母→浅井さん 上下 女→男	④	なし	父はなかなかしっかりしている人物だと言っていました。母は人品のいい人だなど褒めていました。それにつけても、生きた鰻を食べたなどという話をして置かないでよかったと、わたくしは心のうちで思いました。
111	鲁迅「狂人日記」	1932(昭和7)年11月18日	小説(一人称)	翻天妙手、衆と同じからず	②	大アニキ→私 上下 男→男	③	なし	どう考えても乃公は悪人ではないが、古久先生の古帳面に蹶躓いてからとても六ツかしくなつて来た。彼等は何か意見を持っているようだが、わたしは全く推測が出来ない。まして彼等が顔をそむけて乃公を悪人と言ひ布らすんだからサッパリわからない。それで想ひ出したが、大アニキが乃公に論文を書かせてみたことがある。人物評論でいかなる好人物でもちよっとくさした句があると、彼はすぐに圈点をつける。人の悪口を書くのがいいと思つていたので、そういう句があると「翻天妙手、衆と同じからず」と誉め立てる。だから乃公には彼等の心が解るはずがない。まして彼等が人を食おうと思う時なんかは。
112	太宰治「思ひ出」	1933(昭和8)年4月1日	小説(一人称)	美しい	①	皆→兄弟 不問 不問→男	②	なし	それに、末の兄と私の弟とは、顔のつくりが似て皆から美しいとほめられてゐたし、私は此のふたりに上下から壓迫されるやうな氣がしてたまなかつたのである。その兄が東京の中學に行つて、私はやうやくほつとした。
113	徳富蘆花「みみずのたはこと」	1933(昭和8)年5月8日	随筆(一人称)	花車の様だね	③	辰爺さん→庭内 不問 男→もの	①	なし	たま／＼屋敷下を荷車挽いて通りかゝつた辰爺さんが、 「花車の様だね」 とほめて通つた。 庭内も、芙蓉、萩、蓮華つゞじは下葉から色づき、梅桜は大抵落葉し、ドウダン先ず紅に照り初め、落霜紅は赤く、木瓜の実は黄に、松はます／＼緑に、山茶花は香を、コスモスは色を庭に満たして、実に何と云えぬ好い時候だ。
114	中原中也訳「ランボオ詩集《学校時代の詩》」 VERS DE COLLEGE ジャン・ニコラ・アルチュール・ランボーJean Nicolas Arthur Rimbaud」	1933(昭和8)年12月10日	詩歌(三人称)	あの子はなんだらう、と彼等は云つた。 綺麗にも綺麗だが、由々しい顔をしてゐるよ。力は腕から進つてゐる。 若いのに、杉の木を、上手にこなしてゐるところなぞ、まるでもう一人前だ。 昔イラムがソロモンの前で、大きな杉やお寺の梁を、上手に挽いたといふ時も、此の子程熱心はなかつただらう。 それに此の子のからだときたら、葦よりまつたくよくまがる。鉞使ふ手許ときたら、狂ひつこなし。	②	牛飼達→イエス 下上 男→男	⑤	なし	その頃イエスはナザレに棲んでゐた。成長に従つて徳も亦漸く成長した。或る朝、村の家々の、屋根が薔薇色になり初める頃、父ジョゼフが目覚める迄に、父の仕事を仕上げやらうと思ひ立ち、まだ誰も、起きる者としてなかつたが、彼は寢床を抜け出した。早くも彼は仕事に向ひ、その面容もほがらかに、大きな鋸を押したり引いたり、その幼い手で、多くの板を挽いたのだつた。遅く、高い山の上に、やがて太陽は現れて、その眩しい光は、貧相な窓に射し込んでゐた。牛飼達は牛を牽き、牧場の方に歩みながら、その幼い働き手を、その朝の仕事の物音を、てんでに褒めそやしてゐた。「あの子はなんだらう、と彼等は云つた。綺麗にも綺麗だが、由々しい顔をしてゐるよ。力は腕から進つてゐる。若いのに、杉の木を、上手にこなしてゐるところなぞ、まるでもう一人前だ。昔イラムがソロモンの前で、大きな杉やお寺の梁を、上手に挽いたといふ時も、此の子程熱心はなかつただらう。それに此の子のからだときたら、葦よりまつたくよくまがる。鉞使ふ手許ときたら、狂ひつこなし。」此の時イエスの母親は、鋸切の音に目を覚まし、起き出でて、静かにイエスの傍に来て、黙つて、大きな板を扱ひ兼ねた様子をば、さも不安げに目に留めた。唇をキツト結んで、その眼眸で底ふやうに、暫くその子を眺めてゐたが、やがて何かをその唇は咬いた。
115	田中貢太郎「死人の手」	1934(昭和9)年	小説(三人称)	そう、そう、そうだ	①	老人→私 上下 男→男	⑤	なし	此の話は、私が少年の時、隣家の老人から聞いた話であります。其の老人は、壮い時師匠について棒術を稽古しておりましたので、夏の夜など私に教えてくれると云つて、洗染にした麻の帷子の両肌を脱いで、型を見せてくれました。ちつぽけな私は、老人の云うなりに、長い太い檜の棒を持って前へ出て、かちかちと老人の棒に当てました。棒は敵の頭と股間を狙つて打ち込むのであります。「もっと、力を入れて、もっと、力を入れて」と、老人は云いました。私が顔を真紅にして、一生懸命に打ち込んでまいりますと、「そう、そう、そうだ」と、云つて老人は褒めてくれました。そんな老人でありますから、旅行するには竹の中へ末込銃のすやを仕込んだ杖などを持って往きました。其の老人が某日物置の庭で、縄を綱いながら話してくれた話は、老人が己で知っている話か、それとも何か書物にでもあつた話か其処は私には判りません。
116	林不忘「丹下左膳 日光の巻」	1934(昭和9)年1月30日～9月20日	小説(三人称)	さすがは柳生じゃ。世を捨てた名人を探しだして、一世一代の作を残させるとは、このたびの日光造営は、おおいに有意義であつた。その作阿弥の神馬とともに、柳生の名も、ながく残るであらう……	②	上様→柳生 上下 男→男	⑤	なし	「さすがは柳生じゃ。世を捨てた名人を探しだして、一世一代の作を残させるとは、このたびの日光造営は、おおいに有意義であつた。その作阿弥の神馬とともに、柳生の名も、ながく残るであらう……と上様からおほめ言葉のひとつも、いただくというもので」ここを先途と主水正は口説きにかかる。作阿弥はじつと眼をつぶつたまま、身動ぎもしない。
117	宮本百合子「鏡餅」	1934(昭和9)年4月	小説(三人称)	よく似合う	①	サエ→順坊 上下 女→男	①	なし	両方とも飾編を終つて、まさか紐に白テープをとおしはじめると、佐太郎がちよつとせきこんだやうな持前の喋りぐせで、「そりや、黒いテープの方がいい」と云つた。 「——本当にね」素直にまさか同感し、手をやめて眺めていたが、やがて、「いいよ、どうせじきに黒くなつちゃうから」そして、さつさとすっかり白テープをとおし、結んで、手のひらの上に両方揃えてのせた。 「いいじゃないの？」可愛い、むく犬の仔のような靴下である。サエは、順坊によく似合うとほめながら、「何て、あんたがた夫婦らしいやりとりなんだろう！」と愉快そうに笑つた。 去年佐太郎がやられたとき、まさは臨月であつた。生れた赤ん坊の順子という名は、佐太郎が警察の中からつけてよこしたのであつた。

118	横瀬夜雨「五葉の松」	1934(昭和9)年6月27日	ノンフィクション	そりや偉い。糸子姉ちゃんは雨具なしで下館から来るのだからね。妹が姉を迎へに行くつて、立派な事だ	②	私→百合子 上下 男→女	⑤	なし	百合子に『レーンコートを持つて、停車場まで姉ちゃんを迎へに行けるか』と聞いてみる。行けるといふ。尤毎日學校へ通つてゐる道だ。『そりや偉い。糸子姉ちゃんは雨具なしで下館から来るのだからね。妹が姉を迎へに行くつて、立派な事だ』とほめると、レーンコートを頭からすっぽり被つて、姉のを脇にかかへて、雨の中を出て行つた。あとから妻を見にやる。『もう半分道行きましたよ、せつせと、勇んで』夜、電燈の下で三人の子と遊ぶ。
119	阪井久良伎「眞間名所」	1934(昭和9)年9月号	詩歌(三人称)	美事なる松よ	①	明治大帝→市川町の名物 三本松 上下 男→植物	なし	なし	明治六年習志野の演習へ行幸遊ばされた明治大帝が、その樹下を御通行の際「美事なる松よ」とお褒めになつた市川町の名物三本松も、其一本が盤屈して街道を横斷してゐるのを、下をコンクリートにし、その樹腹をトラツクの荷物で皮をむいて了つた故、とう／＼責め殺されて枯れて了つた。
120	三上於菟吉「雪之丞変化」	1934(昭和9)年11月～1935(昭和10)年8月	小説(三人称)	大そう美しゅうなった——	①	老人→雪之丞 上下 男→男	②	なし	老人は、笑みつつづけて、青年俳優をしげしげと見たが、 「中村菊之丞一座花形の雪之丞、津々浦々に聴えただけ、美しゅうなりおつたの」 雪之丞と呼ばれる役者は、大そう美しゅうなった——と、讃められて、小娘のように、ポツと頬を染めたが、つくづく相手を見上げて、「でも、先生も、ちっともお愛りなさいません——それは、お髪や、お髯は、めつきり白うお成りなさいましたけれど——」 「わしの方は、もう寄る年波じやよ。が、兎に角、生きていることは悪うない。そなたに、こうして邂逅えたのも、いのちがあつたればこそじゃ」と孤軒先生なる老人は笑ましくいったが、いくらか、眉をしかめるようにして、 「わしはそなたも知つての通り、風々来々の暢氣坊、世事一切に氣にかかることも無いのだが雨の日、風の日、そなたの事だけは、妙に思い出されてならなんだ——もしや、若氣のいたりで、力及ばずと知りながら、野望に向つて突進し、累卵を巖壁になげうつような真似をして、身を亡ぼしてくれねばよいが——と、思うての——」
121	和辻哲郎「文楽座の人形芝居」	1935(昭和10)年8月号	演劇(一人称)	うまい	①	師匠→吉田文五郎氏 上下 男→男	③	なし	ある日彼はついに苦心の結果一つのやり方を考案し、それでもなお師匠が彼を叱責するようであれば、思い切り師匠を撲り飛ばして逃亡しようと決心した。そうしてそのきわどい瞬間に達したときに、師匠は初めてうまいとほめた。自分の運命をその瞬間にかけるといふほどに己れが緊張したとき、初めて師匠との息が合ったのである。それまでの叱責は自分の非力に起因していた。そこで文五郎氏も初めて師匠の偉さ、ありがたさを覺つたというのである。
122	太宰治「地球図」	1935(昭和10)年12月1日	小説(三人称)	これは七十余年まえに作られたものであつて、いまでは、むこうの国でも得がたい好地図である	②	シロオテ→地図 不問 男→もの	①	なし	きょうは、だいいちばんに、あのオオランド鑛版の地図を板縁いっぱいにひろげて、かの地方のことを問ひだしたのである。地図のここかしこは破れて、虫に食われた孔がそちこちにちらばっていた。シロオテはその図を暫く眺めてから、これは七十余年まえに作られたものであつて、いまでは、むこうの国でも得がたい好地図である、とほめた。ロオマンはどこであるか、と白石も膝をすすめて尋ねた。
123	長谷川時雨「旧聞日本橋 19 明治座今昔」	1935(昭和10)年	随筆(一人称)	よくおぼえてきたよくおぼえてきた	①	母→私 上下 女→女	③	なし	譬ば、丸橋忠弥の堀ばたとか、立廻りの見得とか、せまい台所でほんものの雨傘をひろげるのだから、じきに破いてしまふが、一方ならない高島屋びいきは、小言どころではない。よくおぼえてきたよくおぼえてきたとほめる。ここの立廻りは、いくつ踏んで、トントントンとこうきまると、棒をふりまわして櫛のものを破しても叱らない。
124	長谷川時雨「チンコツきり」	1935(昭和10)年刊	随筆(一人称)	おあさは孝行ものだ、親孝行だ。	①	不問→おあさ 不問 不問→女	⑤	なし	おあさのために御馳走がならべられて、口々に褒めた。 「おあさは孝行ものだ、親孝行だ。」 父までが藤木さんに杯口を与えながらいった。 「おれの家でも女の子が多いから、芸妓やははじめると資金入らずだが——」
125	長谷川時雨「源泉小学校」	1935(昭和10)年刊行	小説(三人称)	傑い、傑い。その武士も傑いが、ヤッちゃんも負ずに傑いぞ。小錦関だ、やがて日の下開山の小錦関だ。	②	先生→小錦 上下 男→男	⑤	なし	子供は率直だ、あたしの家ではあまり金銭の顔を見せない、あたしに金銭の貴さを知らせるには無理だった。だからこの場合、あたしはその武士がお金をならべて楽しむのは、あたしが姐様を飾るのとおなじ位にしか見えなかった。だから皆が考えかねているのが不思議でかえて自分の考えが間違つてのかも知れないとさえおそれた。それでも言った、「ふだんはお金が好きだが、人を助けるためには……」そこだ！ と先生は飛上つて卓を打つた。堪えかねるほど待兼ねた答を、予期しないアンポンタンから得たので、先生の褒めかたは氣狂いじみてたほどだった。「傑い、傑い。その武士も傑いが、ヤッちゃんも負ずに傑いぞ。小錦関だ、やがて日の下開山の小錦関だ。」小錦という力士は後に横綱になったが、まだそうならないうち、新進氣鋭で売出しかけててもいいのであろう。そういつて褒めあげた末に、人間は大将を望んでやっとな兵卒位にししか出世をしないものだという事や、恐らく〇〇先生も世が世であれば大名を志望てお出だつたであらうがなぞと、呆れ顔に佇んでいた、例の助教師の方へ嫌味をふりかけて、そのくせ人の好い笑顔をむけたりするのだった。
126	長谷川時雨「旧聞日本橋 05 大丸呉服店」	1935(昭和10)年	随筆(一人称)	オシイー、オシイー、	①	みんな→お金ちゃんのお父さん 不問 不問→男	⑤	なし	学校友達の古帳面屋のお金ちゃんのお父さんだった。その人は背の高いキレイナ人で、清元のお凧の時に山台に乗つて、二、三人で唄っていたことがあつて、みんなにオシイー、オシイー、とほめられた人だった。その時はじめて清元とは首を振つて唄つてしまうと、おしいーと長くひっぱつてほめられるものだということを知つたのだった。
127	横本楠郎「原つばの子供会」	1936(昭和11)年	小説(三人称)	お前は大へんよいことをしたのです。その心がけさへなくさなければ、きつと立派な人になれるでせう……	②	お母さん→孫叔倣 上下 女→男	⑥	なし	するとお母さんは大そう喜んで、お前は大へんよいことをしたのです。その心がけさへなくさなければ、きつと立派な人になれるでせう……と、ほめました。が、そのとほり、後に名高い学者になつたといふことです——話が終つた時、突然、デブさんの友一君が立ち上りました。そして大根のやうな短い腕をふり／＼、元氣にかう云ひました。「おい、みんな。おれたちもみんなでおしかけて行つて、松男君をさした毛虫の野郎を、一匹だつて殺して来ようや！ ひよつと、おれたちの中にだつて、今聞いた支那の學者みたいな人間の卵があるかも知れんのだぞ。それに一匹殺せば、一匹だけ毛虫が少くなることだけは間違ひのねえこつたから……」 「デブさん、うまいぞッ！」 「異議なアし——さんせいだア！」 みんなパチ／＼と手を叩たたきました。

128	太宰治「碧眼托鉢 馬をさへ眺むる雪の朝かな」	1936(昭和11)年1月1日	随筆(一人称)	太宰治は、そのまま『自然。』だ。	③	読者→太宰治 不問 不問→男	④	なし	太宰治は簡単である。ほめればいい。『太宰治は、そのまま『自然。』だ。』とほめてやれ。以上三項目、入院の前夜したためた。このたびの入院は私の生涯を決定した。
129	江戸川乱歩「怪人二十面相」	1936(昭和11)年1月号～12月号	小説(三人称)	ぼくは賊の手なみに感心しているのですよ。彼はやっぱりえらいですなあ。ちゃんと約束を守ったじゃありませんか。十重二十重の警戒を、もののみごとに突破したじゃありませんか。	②	壮一君→賊 上下 男→男	③	なし	「ぼくは賊の手なみに感心しているのですよ。彼はやっぱりえらいですなあ。ちゃんと約束を守ったじゃありませんか。十重二十重の警戒を、もののみごとに突破したじゃありませんか。」「こら、よさんか。おまえはまた賊をほめあげている。つまり、賊に出しぬかれたわしの顔がおかしいとでもいうのか。」「そうですよ。あなたがそうして、うろたえているようですが、じつにゆかいなんですよ。」
130	江戸川乱歩「怪人二十面相」	1936(昭和11)年1月号～12月号	小説(三人称)	この二十面相をこんなめにあわせるやつがあらうとは、おれも意外だったよ。	③	賊→一寸法師の観音さま 下上 男→男	③	A	一寸法師の観音さまは、左手をのばして、それを受けると、老人のようなしわがれ声で、笑いました。「ハハハハ……、感心、感心、さすがの二十面相も、やっぱり命はおいしいとみえるね。」「ウム、さんねんながら、かぶとをぬいだよ。」賊は、くやしそうにくちびるをかみながら、「ところで、いったいきみは何者だね。この二十面相をこんなめにあわせるやつがあらうとは、おれも意外だったよ。後学のために名まえを教えてくださいませんか。」「ハハハハ……、おほめにあずかって、光栄のいたりだね。名まえかい。それはきみが牢屋へはいつてからのおたのしみに残しておこう。おまわりさんが教えてくれることだろうよ。」
131	江戸川乱歩「怪人二十面相」	1936(昭和11)年1月号～12月号	小説(三人称)	二十面相との一騎うちはみごとでしたねえ。きみの人気はたいしたものですよ。わたしのうちの子どもたちも大の小林ファンです。	②	辻野氏→小林君 上下 男→男	⑥	C	「ああ、そうですか。ぼく、先生の助手の小林っていうんです。」帽子をとって、おじぎをしますと、辻野氏はいっそうにこやかな顔になって、「ああ、きみの名は聞いていますよ。じつは、いつか新聞に出た写真で、きみの顔を見おぼえていたものだから、こうして声をかけたのですよ。二十面相との一騎うちはみごとでしたねえ。きみの人気はたいしたものですよ。わたしのうちの子どもたちも大の小林ファンです。ハハハハ……。」と、しきりにほめたて得るのです。小林君は少しはずかしくなって、パツと顔を赤くしないではいられませんでした。「二十面相といえば、修善寺では明智さんの名まえをかたったりして、ずいぶん思いきったまねをするね。それに、けさの新聞では、いよいよ国立博物館をおそうのだっていうじゃないか。じつに警察をばかにしきった、あきれた態度だ。けつてうっちゃってはおけませんよ。あいつをたたきつぶすためだけでも、明智さんが帰ってこられるのを、ぼくは待ちかねていたんだ。」「ええ、ぼくもそうなんです。ぼく、いっしょうけんめいやってみましたけれど、とても、ぼくの力にはおよばないのです。先生にかたき討うちをしてほしいと思って、待ちかねていたんです。」「きみが持っている新聞は、けさの?」「ええ、そうです。博物館をおそうっていう予告状ののっている新聞です。」小林君はそういいながら、その記事ののっている個所をひろげて見せました。
132	江戸川乱歩「怪人二十面相」	1936(昭和11)年1月号～12月号	小説(三人称)	みなさん、これが二十面相のやり口ですよ。人間わざではできそうもないことを、ちょっとした頭のはたらきで、やすやすとやっのけるのです。」	③	明智探偵→二十面相 上下 男→男	③	なし	「きのうの夕方、三人がそれぞれ夜勤をつとめるために、自宅を出たところをです。」「え、え、きのうの夕方ですって? じゃあ、ゆうべここにいた三人は……。」「二十面相の部下でした。ほんとうの宿直員は賊の巣くつへおしこめておいて、そのかわりに賊の部下が博物館の宿直をつとめたのです。なんてわけのない話でしょう。賊が見はり番をつとめたんですから、にせものの美術品のおきかえなんて、じつに造作もないことだったのです。みなさん、これが二十面相のやり口ですよ。人間わざではできそうもないことを、ちょっとした頭のはたらきで、やすやすとやっのけるのです。」「明智探偵は、二十面相の頭のよさをほめあげるようにいって、ずっと手をつないでいた館長北小路老博士の手首を痛いほど、ギュツとにぎりしめました。「ウーン、あれが賊の手下だったのか。うかつじゃった。わしがうかつじゃった。」老博士は白髭をふるわせて、さもなくやしそうにうめきました。両眼がつりあがって、顔がまっさおになって、見るも恐ろしい憤怒の形相です。しかし、老博士は、三人のにせ者をどうして見やぶることができなかったのでしょうか。二十面相なら知らぬこと、手下の三人が、館長にもわからないほどじょうずに変装していたなんて、考えられないことです。北小路博士ともあらう人が、そんなにやすやすとだまされるなんて、少しおかしくはないでしょうか。
133	海野十三「深夜の市長」	1936(昭和11)年2月～6月	小説(一人称)	なかなか頑張り屋だのう。悪いことするだけあって……	②	老人→僕 上下 男→男	⑤	なし	僕はホツとした。危い瀬戸際であつた。もうやられたかと思つた刹那に救われたのだった。途端に関節から急に力が抜けてしまつて、あれよという間もなく、こんどは自分の身体がツーと下に動きだすと、呀っという間もなくドーンと大きな音をたて、いやというほど額と腰骨とを固いものにぶつつけた。骨がビーンと音をたてて震え、暫くは起き上ることもできなかつた。「なかなか頑張り屋だのう。悪いことするだけあって……」老人は褒めたのか冷かしたのか分らないような云い方をした。そのころ僕はようやくのことで、「深夜の市長」と呼ばれる老人に礼を述べる氣力を取りかえた。
134	国枝史郎「剣侠」	1936(昭和11)年3月～8月18日	小説(三人称)	天晴れ	①	要助→陣十郎 对等 男→男	⑤	なし	「それが無い、こいつが業じゃ。……分解して云えば今のようではあるが、分解も何も差し許さず、講釈も何も超越して、序破急を一時に行なうと云おうか、天地人三才を同時にやると云おうか、疾風迅雷無二無三、敵ながら天晴れと褒めたくなるほどの、真に神妙な早業で、しかも充分のネバリをもって、石火の如くに行なわれては、ほとんど防ぐに術が無い」「はあ」と浪之助は溜息をした。「恐ろしい業でござりますな」「恐ろしい業じゃ、恐ろしい悪剣じゃ。……爾来拙者苦心に苦しし、あの悪剣を破ろうものと、考案工夫をいたしおるが……」「考案おつきになりませぬか?」「彼のあの時の太刀さばきが、いまだに眼先にチラツいていて、退きませぬよ、消えませぬよ」「はあ」とまたも浪之助は、溜息せざるを得なかつた。
135	岸田國士「風俗時評」	1936(昭和11)年3月1日	戯曲(三人称)	大の親日家だ	①	新聞→某外人のこと 不問 不問	⑤	なし	それはさうと、死んだ傭人の遺族に特別な厚意を示した某外人のことを、大の親日家だとしてぢやんぢやん褒め立てて新聞が書いたね。国家的見地もいゝが、これぢや、日本といふ国を、自分自身でこきおろすやうなものだ。こんなことを、こんなに珍しがける日本人は、それほど外国人を人間扱いにすることを忘れてゐる国民であらうかと疑はせるに過ぎんのだ。富士山や桜を自慢するやうな国威発揚がなになる。自分の力で作つたもんぢやあるまいし。それより日本人のこれからの仕事は、世界に向つて、おれたちはお前等と違つたこれこれの文化をもつてゐるぞなんて見栄を切ることぢやない。

136	島崎藤村「夜明け前 第二部下」	1936(昭和11)年7月	小説(三人称)	剃刀を持たせてはまず名人だ	①	多吉→柳床の亭主 対等 男→男	③	なし	午後から、半蔵は宿のかみさんに自分の出先を断わって置いて、柳原の方にある床屋をさして髭剃りに出かけた。そこは多吉がひいきにする床屋で、老練な職人のいることを半蔵にも教えてくれたところである。多吉が親しくする俳諧友だちのいずれもは皆その床屋の定連である。柳床と言って、わざわざ芝の増上寺あたりから頭を剃らせに来る和尚もあるというほど、剃刀を持たせてはまず名人だと日ごろ多吉が半蔵にほめて聞かせるのも、そこに働いている亭主のことである。「これは、いらっしゃい。」その柳床の亭主が声を聞いて、半蔵は二、三の先着の客のそばに腰掛けた。
137	宮本百合子「マクシム・ゴーリキイの発展の特質」	1936(昭和11)年8月	評論(一人称)	生えぬきだ！」「まったくの民衆の子だ！	③	学生達→ゴーリキイ 上下 男→男	④	C	更に彼等は、ゴーリキイを「生えぬきだ！」「まったくの民衆の子だ！」と褒める。これもゴーリキイの気を重く考えぶかくさせた。学生達は民衆を歓知と、精神美と善良との化身のように話すのであったが、ゴーリキイが物心つく時からその日までその中に揉まれ、それと闘って来た現実生活の下で、彼は「このような民衆を知らなかった」のである。
138	宮本百合子「マクシム・ゴーリキイによって描かれた婦人」	1936(昭和11)年8月号	評論(一人称)	時宜に適った	①	レーニン→ゴーリキイ 上下 男→男	①	なし	「母」は知られている通り、ロシアの民衆の歴史にとって忘れることの出来ない一九〇五年に書き始められたものであって、この作品に於てゴーリキイは始めて、確固とした階級性を自身の作品に導き入れた。そしてその後続いた苦しい反動時代を通して民衆に刺戟と鼓舞を与えた。作品としていろいろ批判されるべき点もあるが、ゴーリキイがその時代に「母」をロシアの大衆に贈ったということは、全く、レーニンを簡単で含蓄のあるほめ言葉を与えた通り「時宜に適った」功績であった。
139	新美南吉「木の祭り」	1936(昭和11)年11月15日	童話(三人称)	美しいなあ	①	人→木 不問 不問	なし	なし	木に白い美しい花がいっぱいきました。木は自分のすがたがこんなに美しくなったので、うれしくてたまりません。けれどだれひとり、「美しいなあ」とほめてくれるものがないのでつまらないと思いました。木はめったに人のとおらない緑の野原のまんなかになぼんと立っていたのであります。
140	岡本かの子「母子叙情」	1937(昭和12)年3月号	小説(三人称)	なるほど、ひとり息子さんだからな、それも無理はない	③	老紳士→かの女 上下 男→女	③	なし	この老紳士は、中学教育に余程力点を置いているらしい。そして逸作からむす子の学歴の説明を聴いてほっとしたように、「中学も立派に卒業されて、美術学校へ入られた……ほほう、そして美術学校の途中から外国へ出られたというんですな。しかし、何しろ洋画はあちらが本場だから仕方がない」「学校の先生方も、基礎教育だけは日本でしるすといふん止められたんですが、どうにもこれ(かの女を指して)が置いて行けなかったんで」すると老紳士は、好人物の顔を丸出しにして褒めそやすようにいった。「なるほど、ひとり息子さんだからな、それも無理はない」
141	小川未明「小さな年ちゃん」	1937(昭和12)年3月	童話(三人称)	まあ、坊ちゃん、お一人で、えらいですこと。	①	おばさん→年ちゃん 上下 女→男	⑤	なし	お豆腐屋の前に、大きな赤犬がいました。年ちゃんは、その前を通るのが、なんだかこわかったのです。けれど、赤犬は、あちらを向いていました。年ちゃんは、その間に前を過ぎて、お菓子屋へ着きました。「まあ、坊ちゃん、お一人で、えらいですこと。」とお菓子屋のおばさんは、ほめて、お菓子をふろしきに包んでくれました。
142	佐藤垢石「櫓の若葉」	1938(昭和13)年	随筆(一人称)	おいしい	①	人→はやという魚 不問 不問	なし	なし	はやという魚は、おいしいとほめるほどでもないが、産卵期が近づくと、にわかに活動が盛んになってきて、頭から横腹、尾の端まで紅殻を刷いたように薄紅の彩が浮かひ、美装を誇るかに似て麗艶となるのである。そして腹の小粒の卵に、ある一種の風味を求めて、私の村の人々は毎年春になると、遠く下総国の方から遡ってくるはやを、飛沫をあげて流れる利根川へ釣りに行った。
143	海野十三「怪塔王」	1938(昭和13)年4月8日～12月4日	小説(三人称)	おい青江。貴様、とうとうがんばったな。えらいぞ	②	兵曹長→青江 上下 男→男	③	B	七千メートルの高空！ いまや偵察機は、怪塔ロケットにおいつきそうです。 霧はもちろんのこと、雲もなくなりました。ひろびろとした空です。地球はどこかへいってしまいました。下には蒲団の綿のような密雲が、どこまでもひろがっています。 「おい青江。貴様、とうとうがんばったな。えらいぞ」 と、兵曹長がはじめてちよっとほめた。 「ま、まだであります」 青江三空曹は、どなりかえました。
144	岡本かの子「東海道五十三次」	1938(昭和13)年8月	小説(一人称)	近頃、珍らしい感心な青年だ	①	父→主人 上下 男→男	④	なし	主人は父の邸へ出入りする唯一の青年といつてよかった。他に父が交際している人も無いことはなかったが、みな中年以上か老人であった。その頃は「成功」などという言葉が特に取出されて流行し、娘たちはハイカラ髷という洋髪を結っている時代で虫食いの図書遺品を漁るというのはよくよく向きの変わった青年に違いなかった。けれども父は「近頃、珍らしい感心な青年だ」と褒めた。
145	太宰治「一步前進二歩退却」	1938(昭和13)年8月1日	小説(一人称)	態度がいい	①	警察官→私 上下 男→男	⑤	なし	私が夜おそく通りがかりの交番に呼びとめられ、いろいろうさく聞かれるから、すこし高めの声で、自分は、自分は、何々であります、というあの軍隊式の言葉で答えたら、態度がいいとほめられた。
146	中谷宇吉郎「ツーン湖のほとり」	1938(昭和13)年8月5日	随筆(一人称)	巧い	①	モード氏→私 上下 男→男	③	なし	愈々明日倫敦へ帰るといふ日の夕方、ポーター先生は、私を村の小さい喫茶店へ連れて行つてくれた。ポーター先生は毎夏此のホテルの常客で、まだ後一月位は居るといふのであるが、私は実験を急いでゐたので、到頭残り惜しいながらに、此の生活を切り上げることにしたのである。 倫敦へ帰つて暫くしたら、知らぬ本屋から本が一冊届けられた。ファウラーの King's English である。同時にモード氏から手紙が来て、「貴君の英語は、英国へ来て半年位とするとなか／＼巧い。然し時々教養のある英国人だと決して使はぬ言葉を使ふやうだ。例へば I will といふやうなことは減多に云はぬものだ。本屋から良い本を一冊届けさせたから、それで勉強なさい」と云つて来た。半年英語を勉強した割には巧いと褒められたのは少々恐縮した。

147	吉川英治「新書太閤記 第六分冊」	1939(昭和14)年1月1日～1945(昭和20)年8月23日	小説(三人称)	極暑の頃からこの極寒にいたるまで、因幡、伯耆の僻地において長々の苦労。病みもしつらん、老いもしつらん、などと案じていたが、思いのほか、却って、若やぎて見ゆる。筑前、ひと頃よりは若うなったのう」若くなくなったぞ	②	信長→秀吉 上下 男→男	②	B	やがて、信長はいった。「極暑の頃からこの極寒にいたるまで、因幡、伯耆の僻地において長々の苦労。病みもしつらん、老いもしつらん、などと案じていたが、思いのほか、却って、若やぎて見ゆる。筑前、ひと頃よりは若うなったのう」若くなくなったぞと、自分のみ賞められては、相すまいと思ったのか、秀吉は、「いや、わが君にも、年ごとにお若くなるやに仰がれます」と、これへ来る前に刺ったばかりの髻痕を撫して、初めて、笑った。
148	吉川英治「新書太閤記 第六分冊」	1939(昭和14)年1月1日～1945(昭和20)年8月23日	小説(三人称)	いやいや、筑前どの中には、それが結構茶の精神に適っているものでしょう。無法の法です。無規格の中の大規格です。ちょっと寸法にははまらないかのように見うけられるが、御辺には御辺の寸法というものをちゃんとお備えになっておられる。むしろお羨ましいほどである	②	五郎左衛門長秀→秀吉 対等 男→男	⑥	A	炉のまえに在る彼のすがたは、そこに懸けられてある焙口の霰釜とともに破綻なくひとと坐っていた。話しぶりにも幾ぶん亭主という心もちが加わって、丁寧なうちになお親しみをも示している。それは臣下との語らいというよりは茶友を迎えているすがただった。 「いや、どうも、それがです……」と、秀吉もここでは暢々とくつろいで、「ふと、致してみたり、また、とんと忘れ果てたり。また茶というものと私とがいつこう一つになりません。たまたま、服むにしても、相かわらず不精なことのみしておりまして、かように清々とお茶室のうちにいただくことなどは」 相客の五郎左衛門長秀がわらい出して、「いやいや、筑前どの中には、それが結構茶の精神に適っているものでしょう。無法の法です。無規格の中の大規格です。ちょっと寸法にははまらないかのように見うけられるが、御辺には御辺の寸法というものをちゃんとお備えになっておられる。むしろお羨ましいほどである」 「これはたいへんなお褒めにあずかりましたな。茶の精神とやらも、いつかどまだ弁えんので、折角のお褒めも、どこをどう買っていたいだいたのやら分らぬが」
149	吉川英治「新書太閤記 第六分冊」	1939(昭和14)年1月1日～1945(昭和20)年8月23日	小説(三人称)	御年十六歳、さすが歴々の事なれば、容顔麗はしく、肌は白雪に似たり、潔さ、余人に優れ、家の名を惜み、父の最期まで心に懸け、比類なきの働き、感ぜぬはなかりけり	②	「信長公記」の筆者→太郎 信勝 下上 男→男	②	なし	太郎信勝は、よほど美しかったとみえ、武田一門の死を諒すに少しの同情もない「信長公記」の筆者すら、御年十六歳、さすが歴々の事なれば、容顔麗はしく、肌は白雪に似たり、潔さ、余人に優れ、家の名を惜み、父の最期まで心に懸け、比類なきの働き、感ぜぬはなかりけり と、極力、そのきれいな死に際をほめ称えている。 勝頼父子、土屋兄弟以下、討死相伴の衆としては、次の人々の名を列記している。
150	太宰治「富嶽百景」	1939(昭和14)年2、3月	小説(一人称)	いいね。	①	私→富士山 不問 男→もの	なし	なし	娘さんは、興奮して頬をまづかにしてゐた。だまつて空を指さした。見ると、雪。はつと思つた。富士に雪が降つたのだ。山頂が、まづしろに、光りかがやいてゐた。御坂の富士も、ばかにできないぞと思つた。 「いいね。」 とほめてやると、娘さんは得意さうに、「すばらしいでせう？」といい言葉使つて、「御坂の富士は、これでも、だめ？」としやがんで言つた。私が、かねがね、こんな富士は俗でだめだ、と教へてゐたので、娘さんは、内心しよげてゐたのかも知れない。
151	槇本楠郎「かぶと虫」	1939(昭和14)年3月	童話(三人称)	ねえやはえらいんだねえ、お父さんよりもえらいや！	①	有一君→女中のお君 上下 男→女	③	なし	すると真奈ちやんが、すぐお君のそばへとんで行つて、お君の袖をひいて、指環のブラ下つてゐる真下へつれて行つていひました。 「ほら、見えるでせう。あんな高いところへ、逃げて行つちやつたんだけど、とれる？ ねえやにとれる？」 「とれますとも。登つて行けば、すぐとれますよ。」 さういつて、ねえやはニコ／＼笑つて、 「でも、みんな見てゐらつしやると恥かしいわ。わたし一人なら、すぐ登つて取るんだけど。」と、いひました。 「あら、ねえやにとれるッて！ お母さん、お父さん、ねえやは木登りが出来るんだつて！ あの指環ぐらゐ、すぐ取つてくれるんですつて！」 真奈ちやんがさわぐので、お君はまつ赤な顔をしてしまひました。 「さうを。おまへ、ほんとなの？」お母様がさうおつしやると、お父様も有一君も、ねえやをほめました。 「さうかねえ、木登りが出来るのかねえ？ だが、あれを取つて来られるのかア？」 「ねえやはえらいんだねえ、お父さんよりもえらいや！」
152	槇本楠郎「かぶと虫」	1939(昭和14)年3月	童話(三人称)	えらい娘だね、お君は。さうですわ。だまつてゐますけど、あの娘はしつかりしたところがありますね。 さうさ。お父さんなんかよりえらいや。女の子のくせに、あんなとこまで登れるんだもの。	②	みんな→お君 上下 不問→女	⑤	なし	下におりると、お君はさういつて、指環のついてゐる甲虫を、真奈ちやんに渡しました。そしてみんなが感心して、ほめるのを聞かうともせず、に、すぐ、だまつて裏口の井戸端の方へ行つてしまひました。みんなは、それを見ると、またほめました。 「えらい娘だね、お君は。」 「さうですわ。だまつてゐますけど、あの娘はしつかりしたところがありますね。」 「さうさ。お父さんなんかよりえらいや。女の子のくせに、あんなとこまで登れるんだもの。」 「ねえやは、ゴウケツね。」 真奈ちやんがさう言つたので、みんな笑ひ出しました。笑ひながら、みんなお縁から座敷へあがつて来ました。
153	槇本楠郎「かぶと虫」	1939(昭和14)年3月	童話(三人称)	ねえやは、ゴウケツね。	①	真奈ちやん→お君 上下 女→女	⑤	なし	下におりると、お君はさういつて、指環のついてゐる甲虫を、真奈ちやんに渡しました。そしてみんなが感心して、ほめるのを聞かうともせず、に、すぐ、だまつて裏口の井戸端の方へ行つてしまひました。みんなは、それを見ると、またほめました。 「えらい娘だね、お君は。」 「さうですわ。だまつてゐますけど、あの娘はしつかりしたところがありますね。」 「さうさ。お父さんなんかよりえらいや。女の子のくせに、あんなとこまで登れるんだもの。」 「ねえやは、ゴウケツね。」 真奈ちやんがさう言つたので、みんな笑ひ出しました。笑ひながら、みんなお縁から座敷へあがつて来ました。
154	新美南吉「最後の胡弓弾き」	1939(昭和14)年5月17日～5月27日	童話(三人称)	木之助の胡弓は大層うまい	①	主人→木之助の胡弓 上下 男→男	③	A	木之助たちが喰へ終つて、「ご馳走さん」と頭をさげると、主人はなおも、いろんなことを二人に話しかけ、訊ねた。これから行く先だとか、家の職業だとか、大きくなったら何になるのだとか。木之助の胡弓は大層うまいとほめてくれた。木之助はうれしかった。「こんど来るときはもっと仰山弾けるようにして来て、いろんな曲をきかしてくれや」といったので木之助は「ああ」といった。すると主人は袂の底をさがそと探していて紙の燃ったのを二つ取り出し、一つずつ二人にくれた。

155	神西清「翻訳遅疑の説」	1939(昭和14)年5月2日	随筆(一人称)	ぎっくりしゃっくりしてるから感心だ	②	読者→私 不問 不問→男(もの)	①	なし	が、僕ごとき凡庸の凡なる者の翻訳——締切に追われ、米櫃に責められ、脱稿の目あても立たぬうちから校正が山を積み、君いくら苦労したって誰も君の作とは思っちゃ呉れんよと友人に笑われ、すらすら読めるから不可んと叱られ、ぎっくりしゃっくりしてるから感心だと褒められ——無我無中のうちに高速度印刷機から吐き出されて万事休する、世の常の翻訳にしたところで、所詮は道は一つである。
156	宮本百合子「婦人と文学」	1939(昭和14)年7月号	評論(一人称)	圧巻	①	坪内逍遙→小説 上下 男→(男)	①	なし	第六回女塾の場面を、逍遙は序のなかで圧巻とほめているのであるが、明治二十年というその時分の女学生の喋り工合が活々としているばかりでなく、云われていることが、今日の私たちの心に、一かたならぬ様々の感想をよびおこすものをもっている。
157	宮本百合子「列のころ」	1940(昭和15)年10月号	小説(三人称)	あっちでは市民の訓練がよくゆき渡っていて、何かあると誰云うとなく皆整然と列をつくって事を運ぶ、	③	外国がえりの人たち→あっちの市民 不問 不問	⑤	なし	今までもよく外国がえりの人たちが、あっちでは市民の訓練がよくゆき渡っていて、何かあると誰云うとなく皆整然と列をつくって事を運ぶ、と褒めた。しかし市民が自分たちですぐ列をつくってゆく心理や習慣を持っているということは彼等にとって決してなま容易い生活経験から身につけられたものではないにちがいない。
158	太宰治「このごろ」	1940(昭和15)年1月30日～2月1日	随筆(一人称)	大いに面白かった	①	二、三の知人→私 対等 男→男(もの)	①	なし	昨年の秋に、私が或る雑誌に犬のことを書いたら、二、三の知人から大いに面白かったと褒められて、その作品は、實に粗末なものでしたので、私は愈々恥ぢて、それ以来、犬の話は努めて避けてみました。いままた犬の話などを持ち出しては、調子に乗っていい氣になつてゐるやうで、まるで見つともないのですが、私の家の小さい庭は日當りのよいせゐか、毎日いろんな犬が集まつて来て、たのみせぬのに、きやんきやんごうごう、色んな形の格闘の稽古をして見せるので實に閉口してゐます。
159	吉川英治「日本名婦伝 大楠公夫人」	1940(昭和15)年1月号	小説(三人称)	小綱は、一の武者よ。親まさり、主まさりよ	①	足利勢のうち→漆間小四郎綱高 上下 男→男	③	なし	漆間小四郎綱高は、こんど十七歳での出陣だった。初陣ではなく、何度かの合戦で、いつも敵の強豪を打ち、足利勢のうちでも、「小綱は、一の武者よ。親まさり、主まさりよ」と、褒められ者であった。その小綱は、漆間蔵六の子息であった。自慢息子なのである。男の子三人のうちの次男であった。ところが、この秋、浪華附近の激戦の折、乱軍の中で、楠木勢の手に、捕虜になったと伝えられた。
160	織田作之助「夫婦善哉」	1940(昭和15)年4月	小説(三人称)	上達した	①	蝶子→柳吉 下上 女→男	③	なし	客が来なければ仕様がなといった顔で、店番をするときも稽古本をひらいて、ぼそぼそなる、その声がいかにも情けなく、上達したと褒めるのもなんとなく気が引けるくらいであった。
161	織田作之助「夫婦善哉」	1940(昭和15)年4月	小説(三人称)	ええ奥さんを持つてはる	①	娼妓達→柳吉 対等 女→男	①	なし	「姐ちゃんは……？」ええ奥さんを持つてはると褒められるのを、ひと事のように聴き流して、柳吉は洪い顔であった。むしろ、むっとりして、これで遊べば減茶苦茶に羽目を外す男だとは見えなかった。
162	織田作之助「夫婦善哉」	1940(昭和15)年4月	小説(三人称)	えらい女だ	①	柳吉の父親→蝶子 上下 男→女	③	なし	こんど二階借りをやめて一戸構え、ちゃんとした商売をするようになれば、柳吉の父親もえらい女だと褒めてくれ、天下晴れての夫婦になれるだろうとはげみを出した。その父親はもう十年以上も中風で寝ていて、普通ならとつくに死んでいるところを持ちこたえているだけに、いつ死なぬとも限らず、眼の黒いうちにと蝶子は焦った。が、柳吉はまだ病後の体で、滋養剤を飲んだり、注射を打ったりして、そのためきびしい物入りだったから、半年経っても三十円と纏まった金はたまらなかった。
163	岡本かの子「宝永噴火」	1940(昭和15)年7月号	小説(一人称)	立つ鳥は勇むのう	①	馬翁→慧鶴 上下 男→男	⑤	なし	その気持ちちが馬翁にも通じたものか、ある日慧鶴が雨がぼつぼつ降り出した井戸端で屑大根を洗っていると大垣へ遊びに行つて帰つて来た馬翁がしばらく傍に立つて眺めていたが慧鶴の背中を叩いて云つた「立つ鳥は勇むのう」これは望みを持つ人間は努力精励するという褒めた言葉であつて、この位でも馬翁が人を褒めた事は無し、また、その語氣からこのくらい馬翁が人と親しみを露骨に出して囁いたことも無かつた。慧鶴は憐れな氣がして、そつと暗涙を袖で押えた。
164	田中英光「オリンポスの果実」	1940(昭和15)年9月号	小説(一人称)	みんな、坂本君位、身体があれば大したものだなア	①	西博士→ぼく 上下 男→男	②	A	そんな時、監督に廻つて来た総監督の西博士が、コオチャアの黒井さんに、「みんな、坂本君位、身体があれば大したものだなア」と褒めて下さるのを聞くと、いつもクルウの先輩連からは、「大きな身体を、持てあましていやがつて——」など言われているだけに、思わず、ハツとあがつてしまい、又、普段の地金が出るのではないかと固くなるのでした。
165	宮本百合子「今日の生活と文化の問題」	1941(昭和16)年5月	評論(一人称)	美しい	①	楽屋でふれた人々→彼女の黒い皮膚 不問 不問→女	②	なし	コティをうしろだてにしていた彼女がムーランの舞台や楽屋でふれた人々は、彼女の黒い皮膚を美しいとほめこそすれ、その肌の色のために彼女に出入り出来なくさせた宴会場はなかったらう。

166	中谷宇吉郎「南画を描く話」	1941(昭和16)年7月1日	随筆(一人称)	ふうん、およそ油絵というものを少しでも習った人ならば、こうは描くまいという風な工合に描いてあるね。なかなか面白い	②	先生→私 上下 男→男	①	なし	十枚目くらいになって、やっと自信のある作品が出来たので、先生の御宅へ持って行って御目にかけた。そしたら先生から「ふうん、およそ油絵というものを少しでも習った人ならば、こうは描くまいという風な工合に描いてあるね。なかなか面白い」と褒められた。それに勇気を得て、その後益々精進することになったわけである。ところで、今度の南画にも、もう亡くなられた先生との直接的機縁があるのには、自分でも少し驚いている。
167	中谷宇吉郎「南画を描く話」	1941(昭和16)年7月1日	随筆(一人称)	実は私もこの方は近來にない出来だと思っていたんです。この判の味が分るようなら、先生もなかなか眼があります	②	平井さん→私 対等 男→男	③	なし	さすがに少し恥かしい気もしたが、度胸をきめて、一組頼むことにした。大分経ってから、平井さんがやっと出来ましたと言って、その判を持って来てくれた。早速拝見すると、大変よい出来で、特にそのうちの一つがひどく気に入ったので、御礼を言った。そうしたら平井さんが大変喜んで「実は私もこの方は近來にない出来だと思っていたんです。この判の味が分るようなら、先生もなかなか眼があります」と褒めてくれた。そして「僕は滅多に人に頼まないのだが、一つ何か絵を描いて、この判を押してもらいたいが」ということになった。それではと、速座に雪の絵を描いた。
168	中谷宇吉郎「南画を描く話」	1941(昭和16)年7月1日	随筆(一人称)	全体としては、進歩の傾向にある	①	吉田洋一さん→私 上下 男→男	③	なし	もっとも説明をきくともっともなので、要するに墨色が余り良いので、花が紫色に見えたというのである。しかし全体としては、進歩の傾向にあると褒めてくれた。もう一日もう一日と思っているうちに、一月近く経ってしまった。どうしても墨を返さなくてはならない。
169	中谷宇吉郎「南画を描く話」	1941(昭和16)年7月1日	随筆(一人称)	こういう墨は珍しい	①	表装屋さん→私 不問 不問	①	C	それを送ってから一月くらいして、上京のついでに武見さんの家を訪ねた。そしたらその絵がちゃんと表装されて、床の間にかかっていた。大変よい表装なので、大いに感謝の意をこめて、一体何処でこういう表装をしたのかと聞いて見た。そしたら「博物館でいつも国宝の修理をしている表装屋に頼んだんだよ」という答であった。そして「なかなか良い墨だそうだね。その表装屋さんが、こういう墨は珍しいと大変褒めていたよ」ということであった。大いに力を得て、「それだけですか」と聞いたのであるが、「うんそれだけさ」という返事で、聊か物足らなかった。
170	矢田津世子「鴻ノ巣女房」	1941(昭和16)年10月号	小説(三人称)	綺麗だ	①	捨吉→ぎん 対等 男→女	②	なし	この捨吉が、ぎんへはこっそりと並ならぬ優しさを見せるのである。毛ピンやネットのようなものを負けてくれたりハイカラな文化草履を御直で分けてくれたりする。ぎんの手足を綺麗だとほめて顔が火照るほど嬉しがらせたりした。
171	海野十三「地軸作戦——金博士シリーズ・9——」	1942(昭和17)年1月	小説(三人称)	あっ、そうか。いや、早いものじゃ。燐製の効果が、こうも早く出てくとは思わなかった。いや偉大なものじゃ、豪いものじゃ	②	ネルスキー→莫迦 上下 男→男	③	B	ネルスキーは、このとき初めて、或ることに気がついた。夙くに気がつくべかりしことを、今になってやっと気がついたのであった。彼は思わず指の腹をこすって、ばちんという音をたて、「あっ、そうか。いや、早いものじゃ。燐製の効果が、こうも早く出てくとは思わなかった。いや偉大なものじゃ、豪いものじゃ」「これはこれは過分なる御褒めの言葉で恐れ入ります。本員といたしましては……」「莫迦、今のはお前を褒めたのではない。はきちがえるな」「はあ。それは御卑怯というものです。私と電話でお話になっていて、御褒めになったのですから、これはどうしても私の取得です。そうではありませんか、宰相閣下」
172	豊島与志雄「木曾の一平」	1942(昭和17)年9月	童話(三人称)	えらい、えらい。こんな鯉を手づかみにするとは、日本一の若者だ。	①	一助→一平 上下 男→男	③	なし	一平は、お祖父さんの一助に、たいへん孝行です。一平は川へ出かけて行きました。ところが、大きな鯉を手づかみでとることは、なかなかよいではありません。川の中を歩きますはり、深いところは泳いだり水にもぐつたりして、大きな鯉をさがしました。そして見つかると、手であつかまへようしますが、鯉はすると逃げてしまひます。一平は、毎日毎日、川へ出かけて行きました。たうとう、ある日、大きな鯉を、手づかみでとることができました。一助は山から帰つて来て、一平の肩をたたいてほめました。「えらい、えらい。こんな鯉を手づかみにするとは、日本一の若者だ。」一助はその鯉を料理して、一平といつしよにたべました。
173	豊島与志雄「木曾の一平」	1942(昭和17)年9月	童話(三人称)	えらい、えらい。兎を手づかみでとらへるとは、日本一の若者だ。	①	一助→一平 上下 男→男	⑤	なし	それでも一平は、毎日毎日、野や山へ出かけて行き、兎を見つけては追つかけました。ころんだり、崖からおちたりして、怪我をすることもありました。たうとう、ある日、兎を一匹、手でとらへることができました。一助は、一平の肩をたたいてほめました。「えらい、えらい。兎を手づかみでとらへるとは、日本一の若者だ。」
174	中谷宇吉郎「千里眼その他」	1943(昭和18)年5月1日	随筆(一人称)	君の千里眼も大分役に立ったよ	①	H教授→私 上下 男→男	③	なし	すっかり問題が片付いてから、H教授に「君の千里眼も大分役に立ったよ」と褒められたので、時局をわきまえないという批評家の御叱りは、十分償われたわけである。
175	牧野富太郎「植物記」	1943(昭和18)年8月15日	ノンフィクション(一人称)	花之君子者也世間花卉無踰蓮花者	③	古人→ハスの花 上下 不問→植物	なし	なし	ハスの花は古人は花之君子者也とか世間花卉無踰蓮花者とか言って誉めそやして居ます。いわゆるくの時をかく言うともいう)は長き花梗を有し、葉と共に一個ずつ根莖すなわち地下茎の節より出ています。

176	新美南吉「鳥右エ門諸国をめぐる」	1943(昭和18)年9月	小説(三人称)	お見事なうでまへでございます。	①	平次→主人 下上 男→男	⑤	なし	平次は、だまつて犬をひいて来て、主人の矢の先で、首から縄なはを放すのですが、主人の矢が、みごとに犬の急所をつらぬいても、ほかのしもべどものやうに、「お見事なうでまへでございます。」とほめたりませんでした。犬のむくろから矢をひきぬくと、自分の赤ん坊でもかかへこむやうにして、犬を持ち、主人の方に冷たい眼をちらつとむけて、いつてしまふのでした。
177	新美南吉「鳥右エ門諸国をめぐる」	1943(昭和18)年9月	小説(三人称)	珍しくお立派な腕前である	①	船の中の人々→武士 下上 不問→男	③	なし	「お、お。」と、船の中の人々は、感嘆の声をもらしました。そして一本の矢で二羽しとめることは珍しくお立派な腕前であるといつて、ほめました。すると武士についてゐたしもべが、鼻をおごめかせながら、御主人にとつては鳥を二羽一度にしとめるくらゐ何でもない、魚をとつて飛んでいく水鳥を射て、その水鳥の放した魚が、地に落ちる前に、その魚を射てしまふことも出来る、とか、牛のやうな大きい動物でもただの一矢でころりと参らせてしまふ、などとふいちやうするのですでした。
178	辻村もと子「早春箋」	1944(昭和19)年	随筆(一人称)	お料理が上手なのですね	①	私→旦那さん 下上 女→男	③	なし	病気のあひだは、自分でわざわざお粥をたき、いり玉子など上手にこしらへてくれました。お料理が上手なのですね、とほめましたら、開墾中はいつでも男世帯で、なんでもやつてゐたのだから、料理ならなんでもお前よりは上手かもしれないと笑つてをりました。
179	太宰治「パンドラの匣」	1945(昭和20)年10月22日～1946(昭和21)年1月7日	小説(一人称)	マア坊なんかより、竹さんのほうが十倍もいいと言つてた。	①	誰か→竹さん 上下 男→女	④	B	喧嘩の事に就いては、これくらいにして、ついでにもう一つ簡単な御報告がある。きょうの午後の摩擦は、竹さんだった。僕は、竹さんに君のことを少し言つた。「竹さんを、とても好きだと言っている人があるんだけど。」竹さんは、摩擦の時には、ほとんど口をきかない。いつも黙つて涼しく微笑んでいる。「マア坊なんかより、竹さんのほうが十倍もいいと言つてた。」「誰や。」沈黙女史も、つい小声で言つた。マア坊よりもいい、というほめ方が、いたく氣にいった様子である。女つて、あさはかなものだ。「うれしいかい?」「好かん。」竹さんはそう一言つたきりで、シャツシャツと少し手荒く摩擦をつづける。眉をひそめて、不機嫌そうな顔だ。
180	太宰治「パンドラの匣」	1945(昭和20)年10月22日～1946(昭和21)年1月7日	小説(一人称)	いいえ、とてもわかり易い文章で、こんなのを名文というんじゃないでしょうか。	①	僕→固パン氏 対等 男→男(もの)	①	B	「まるでもうこれは、重大な外交文書みたいですね。堂々たるものです。」と僕は、笑いを噛み殺して言つた。「ひやかしちゃいけない。」と固パンは苦笑して僕からその便箋をひつたり、「どこか、ミステークがなかったですか?」「いいえ、とてもわかり易い文章で、こんなのを名文というんじゃないでしょうか。」「迷うほうのメイプンでしょう?」と、つまらぬ洒落を言い、それでも、ほめられて悪い氣はしないらしく、ちよつと得意げな、もつともらしい顔つきになり、「通訳となると、やはり責任がね、重くなりますから、僕は、それはごめんこうむつて筆談にしようと思つているんですよ。どうも僕は英語の知識をひけらかしすぎたので、或いは、通訳として引つぱり出されるかも知れないんです。いまさら逃げかくれも出来ず、やっかいな事になつちやいましたよ。」と、いやにシンミリした口調で言つて、わざとらしい小さい溜息を吐いた。
181	太宰治「パンドラの匣」	1945(昭和20)年10月22日～1946(昭和21)年1月7日	小説(一人称)	これは、日本のいま世界に誇り得る唯一の宝だ。	①	僕→竹さん 上下 男→もの	なし	なし	どうだい、君。僕は、あらためて君に、当道場の訪問をすすめる。ここには、尊敬するに足る女性がひとりいる。これは、僕のものでもなければ、君のものでもない。これは、日本のいま世界に誇り得る唯一の宝だ。なんという少し大袈裟なほめ方になつてしまつて、われながら閉口だが、とにかく、色氣無しに親愛の情を抱かせる若い女は少いものではあるまいか。君も、もう竹さんに対しては、色氣なんてそんなものは持つていない筈である。
182	太宰治「パンドラの匣」	1945(昭和20)年10月22日～1946(昭和21)年1月7日	小説(一人称)	まあ、綺麗。	①	娘さん→親友 下上 女→男(もの)	①	なし	娘さんは弁当箱をもとの戸棚に収めて立ち上り、「まあ、綺麗。」と君が減茶苦茶に投げ入れて行つたあの菊の花をほめたのだ。君があの時、竹さんに直してもらえ、なんて要らない事を言つたので、なんだか竹さんに頼むのも、てれくさくなって、また、マア坊に頼むのも、わざとらしいし、あの花は、ついあのままになっていたのだ。
183	海野十三「大脳手術」	1945(昭和20)年11月	小説(一人称)	艶々してきた	①	珠子→私 対等 女→男	②	なし	珠子は、果して大悦びだった。私の予期した以上の悦び方だった。私の両手を握つて見較べ、以前よりも艶々してきたと褒めた。それから私達は、ヨットに乗つて、瀬戸内海の遊覧列島へ出発した。
184	蒲原有明「夢は呼び交す——黙子覚書——」	1946(昭和21)年6月～1947(昭和22)年5月	小説(一人称)	氣性がすぐれていた	①	姉→鶴見 上下 女→男	④	なし	明治二十年に小学の業を終え、直に府立の中学へ入校したのだが、この年に父は後妻として村山氏を家に納れた。鶴見はここに継母を持つことになつたのである。鶴見がな小供で意氣地のないことを諷して、後年に至るまで、姉は氣性がすぐれていたといつてよく嘗めていた。それで見ると、姉が国に歸つたのはこの年も晚いころであつたろうか。

185	宮本百合子「行為の価値」	1946(昭和21)年8月30日号	評論(一人称)	腹が大きい	①	不問→三宅雪嶺 不問 不問→男	⑤	なし	漱石は、今日の歴史から顧みれば、多くの限界の見える作家であるが、知識人の独立性、自主性を主張することにおいては、なかなか強情であった。官僚にこびたりすることは、文学者のすべきことでないという態度をもっていた。東京帝大教授として、文部省の愚劣さを知りぬいていたから、そういうところからくれる博士号などは欲しくないと云って、こたわった。同じ時、三宅雪嶺という哲学者が博士号をもらってうけた。ことわるほどのものでもなからう、と笑って受けて、腹が大きいとかほめたものもあった。この雪嶺は、国粹主義者で、中野正剛を婿にした。これもことわるほどの者でもなからう、というわけだったのかもしれない。誰かから、立派な邸宅をおくられた。ことわるほどのものでもなかったと見えて、それもうけとった。
186	宮本百合子「二つの庭」	1947(昭和22)年1、3～9月号	小説(三人称)	偉い、偉い、	①	先生→子供 上下 不明→男	⑤	B	ハア、ハア息をはずませながら男の子たちは先生！ 先生！ 僕たち電車とかけっこして来たんですよ、と叫んだ。そしたら先生が偉い、偉い、とほめた。「でもお母様、僕、ほめるなんて変だと思ふなア。そうでしょう？ 人間より早いにきまっているから電車を発明したんでしょ。心臓わるくしちゃうだけだと思ふ、ね、そうじゃない？」子供の保はそう考えたのであった。
187	宮本百合子「二つの庭」	1947(昭和22)年1、3～9月号	小説(三人称)	家庭的なときの伸子は美しい	①	佃→伸子 対等 男→女	②	なし	家庭生活らしい。そして家庭的なときの伸子は美しい、とほめた。ほめことばは、編みものの上に伸子の涙をおとさせた。
188	釣十二ヶ月「正木不如丘」	1947(昭和22)年4月	小説(一人称)	これはすばらしい、全く日本ばなれがして居る、	②	彼氏→小海線 不問 男→景色	⑤	なし	その後私の友人で、わがスイスが居るので、彼氏をだまして一度この線へつれて来た。彼氏曰く、これはすばらしい、全く日本ばなれがして居る、と。ほめ方に日本ばなれと云ふのは不屈ふとどこであるが、とにかく世界一と日本人には思はれと確信して居る。
189	釣十二ヶ月「正木不如丘」	1947(昭和22)年4月	小説(一人称)	理想的です、背がかりです	①	先達→私が釣れた鮎 上下 男→男	①	なし	「助けてくれ」先達がかけつけて来て、道糸を下流の岸で握ってくれた。竿をかついで上陸してかけつけて見ると、釣りも釣つたり、いや釣れも釣れたり罎にまさる尺鮎であつた。「理想的です、背がかりです」ほめられて恥かしい。その日は五尾あげたが罎ごと二度道糸をさられたので、買った罎迄入れて六尾眼にして漁果計二尾、買ったのを引くと腕で釣つた土産は一尾であつた。鮎の友釣は性に合はず。
190	吉本明光編 三浦環「お蝶夫人」	1947(昭和22)年5月10日	伝説(三人称)	あなたの声は非常に美しい、	①	お客様たち→私 不問 不問→女	③	なし	私も早速リリー・レーマンに歌を教えて頂こうと思ってお訪ねしましたところ、ちょうど夏のお休みでリリー・レーマンは田舎へ避暑に行っていてお留守なので、秋にお帰りになるまで待つことにして、下宿で自分でピアノを弾きながら歌の勉強をしておりましたが、このお宅にお茶に来るお客様たちが、あなたの声は非常に美しい、と褒めてくれますし、また、道を歩いているととても素晴らしい歌が聴こえて来るので、窓ぎわへ行って立ち止って聴き惚れたが、その声の持主はフラウ・ミウラ、あなただったのか、と褒めて下さる方もあって、外国へ来て、まだ先生について勉強をしない前から、大勢の方に褒められて本当に嬉しゅうございました。
191	吉本明光編 三浦環「お蝶夫人」	1947(昭和22)年5月10日	伝説(三人称)	日本の歌は非常に美しい、	①	ヘンリー・ウッド卿→私 上下 男→女	③	なし	そこで私は持っていた楽譜艸の中から「さくらさくら」と「ほたる」の楽譜を取出しまして、ここに日本の歌の楽譜を持っていますがとお目にかけますと、ウッド卿が自分がピアノの伴奏をするからうたって聴かせて下さい、とおっしゃいました。私は早速うたいました。すると日本の歌は非常に美しい、と褒めてくださいました。そしてアルバート・ホールで是非これをうたって下さい、というお話でした。その上そのアルバート・ホールの音楽会には、アドリナ・パティもおうたいになるということもお話になりました。アドリナ・パティが私と同じステージで歌をうたう。私はびっくりしてしまいました。
192	吉本明光編 三浦環「お蝶夫人」	1947(昭和22)年5月10日	伝説(三人称)	ヨーロッパ一流のプリマドンナにひけをとらない	③	ヘンリー・ウッド→私 上下 男→女	③	なし	大使の奥様は、私がうたうんです、うたうんですのといって泣いているので、音楽の勉強がうまくゆかないので頭がへんになったのではないかと心配されたそうですが、そのうち私もだんだん落ちついて来たので、クインス・ホールでサー・ヘンリー・ウッドに歌のテストをして頂いたところ、意外にもヨーロッパ一流のプリマドンナにひけをとらないと褒められてびっくりした上に、チャーチルのお母さんから、私がまだ見たこともないアルバート・ホールの音楽会に出演することを依頼されて夢中になった、またその上に、歴史の人物になっているとばかり思い込んでいた、十九世紀の歌の女王、アドリナ・パティと同じステージでうたえることを聴かされて、気持ちがよいようになって喜んでしまったので、この私の夢にも考えなかった幸運を、一刻も早く大使の奥様にお知らせしようと思って駆け込んで来たことを詳しくお話し上げました。
193	吉本明光編 三浦環「お蝶夫人」	1947(昭和22)年5月10日	伝説(三人称)	ワンダフル・シンガーだ	①	ロンドン・タイムス→私 不問 不問→女	③	なし	しかし私の「お蝶夫人」は大変な評判をとり、イギリス中の新聞に書きたてられ、特にロンドン・タイムスは「ワンダフル・シンガー」だと褒めて下さったので、私の「お蝶夫人」は海を渡ってニューヨークの新聞までが書きたてる騒ぎになり、ロンドン・オペラハウスの出演も五回の約束が十五回も出てロンドンでのレコードを作りました。
194	吉本明光編 三浦環「お蝶夫人」	1947(昭和22)年5月10日	伝説(三人称)	世界一の名女優サラベルナールに匹敵するドラマティック、アビリティを持つ素晴らしいプリマドンナである、	②	ニューヨーク・タイムス→私 不問 不問→女	③	なし	またシカゴでの私の「お蝶夫人」の批評が遠くニューヨーク・タイムスに掲載されました。それには、三浦環は世界一の名女優サラベルナールに匹敵するドラマティック、アビリティを持つ素晴らしいプリマドンナである、と褒めちぎって下さいました。数年後のことですが、矢張りニューヨーク・タイムスに「シャリアピン」の『ボリスゴドノフ』と、アンナ・パヴロヴァの『瀕死の白鳥』とマダム・ミウラの『お蝶夫人』は[#『「お蝶夫人」』は]は底本では「「お蝶夫人」』は]世界無比の、優れた特徴を持った芸術である」という批評が outcome、私は非常に嬉しくなり、この批評に応えるために更に勉強しようと、一生懸命にうたい続けました。

195	吉本明光編 三浦環「お蝶夫人」	1947(昭和22)年5月10日	伝説(三人称)	素晴らしい音楽の贈物をして下さって非常に感激しました。『バターフライ』のマダム・ミウラはまるで日本のお人形さんのように美しく、その歌は天使の声のようにうるわしく聴こえました	②	ある士官(お手紙)→私 不問 男→女	③	なし	私がベーカー家のお客様になった翌日の午後と夜の二回、私はベーカー夫人と一緒に兵隊さんを慰めるコンサートをいたしました。アメリカの兵隊さんですから、その中には黒ン坊の兵隊さんもありました。そして皆から非常に喜ばれました。このコンサートの後で私はある士官からお手紙を頂きました。「素晴らしい音楽の贈物をして下さって非常に感激しました。『バターフライ』のマダム・ミウラはまるで日本のお人形さんのように美しく、その歌は天使の声のようにうるわしく聴こえました」と褒めて下さいました。私はこの兵隊さんを慰めるコンサートで感激したのは黒ン坊の兵隊さんの前でうたった時で、私がうたいますと、黒ン坊の兵隊さんが大勢でハミングのコーラスで私の歌に合わせてうたい出すのです。
196	吉本明光編 三浦環「お蝶夫人」	1947(昭和22)年5月10日	伝説(三人称)	マダム三浦、ワンダフルな『バターフライ』でした。私は感激の涙をもってききました	②	見知らぬ紳士(ウイルソン大統領)→私 上下 男→女	③	なし	私がうたい始めますと、どうでしょう、お客様がみんなサロンから、私のうたっているお部屋においてになり、椅子が足りないので、私のまわりに輪を描いて、立ったまま、私の歌をおききになり、一曲すむと大変な拍手です。私が「お蝶夫人」の有名な詠唱「或る晴れた日に」をうたい終わりますと、私の背中の方から「マダム三浦、ワンダフルな『バターフライ』でした。私は感激の涙をもってききました」と褒めて下さるので、私がその声の方に、ぐるりとふりむきますと、見知らぬ紳士が、膝を折って、私の手を頂いて、手にキッスを贈って下さいました。どなたかしらと、私がけげんな顔をしていますと、傍らにいたレディが「マダム三浦、ウイルソン大統領ですよ」と教えて下さいました。えッ、大統領？ 大統領が私の手にキッスを？ そして失礼にも大統領にお尻を向けてうたっていた。まあどう詫言をしらないだろう、私が恐縮してどきまぎしていると、ウイルソン大統領はニコニコして「マダム三浦、私のお願いをきいて頂けませんか。どうぞアメリカの国歌をうたって下さい」「ハイ喜んで、大統領に敬意を捧げてうたいます」
197	吉本明光編 三浦環「お蝶夫人」	1947(昭和22)年5月10日	伝説(三人称)	あなたの『お蝶夫人』は私が観た『お蝶夫人』のうち最も理想的な蝶々さんでした。イタリアはもちろん、アメリカ、スペイン等のプリマドンナが大勢毎晩のように日傘を持ってステージを歩き、そしてうたいますが、みんな私の理想とする『お蝶夫人』はやってくれませんでした。プリマドンナはみんな自尊心を持って自分の歌だけを聴かせようとして、一向に私の蝶々さんの本当の気持ちを現わしてはくれませんでした。中には無闇に大きな声を出して驚かすものもありました。だがマダム三浦、あなたの蝶々さんは第一幕では十五才の子供らしい蝶々さんを素晴らしい見事に現わしてくれました。第二幕第一場では母の愛と、夫の帰りを待つ若き妻の愛情を完全に表現しました。第二幕第二場では子供と別れて自殺する日本婦人の貞淑の悲劇を驚嘆するばかりにドラマティックにやりました。あなたの『お蝶夫人』を観て、私はマダム三浦がうたっているのではない。私が心の中で描く、幻のマダム・バタフライが舞台に現われたと思いました。本当にマダム三浦、あなたの『お蝶夫人』は私の夢を実現して呉れました。あなたには他のプリマドンナのように、自惚れと自尊心のために蝶々さんの性格を現わすことを忘れていた欠点がないばかりか、あなたが日本のプリマドンナであるため、日本婦人の貞淑さと日本情緒も完全に現わしてくれました。あなたは世界にたった一人しかない、最も理想的な蝶々さんです	②	ブッチーニ→私 上下 男→女	③	なし	そして昨日観た私の「お蝶夫人」について「あなたの『お蝶夫人』は私が観た『お蝶夫人』のうち最も理想的な蝶々さんでした。イタリアはもちろん、アメリカ、スペイン等のプリマドンナが大勢毎晩のように日傘を持ってステージを歩き、そしてうたいますが、みんな私の理想とする『お蝶夫人』はやってくれませんでした。プリマドンナはみんな自尊心を持って自分の歌だけを聴かせようとして、一向に私の蝶々さんの本当の気持ちを現わしてはくれませんでした。中には無闇に大きな声を出して驚かすものもありました。だがマダム三浦、あなたの蝶々さんは第一幕では十五才の子供らしい蝶々さんを素晴らしい見事に現わしてくれました。第二幕第一場では母の愛と、夫の帰りを待つ若き妻の愛情を完全に表現しました。第二幕第二場では子供と別れて自殺する日本婦人の貞淑の悲劇を驚嘆するばかりにドラマティックにやりました。あなたの『お蝶夫人』を観て、私はマダム三浦がうたっているのではない。私が心の中で描く、幻のマダム・バタフライが舞台に現われたと思いました。本当にマダム三浦、あなたの『お蝶夫人』は私の夢を実現して呉れました。あなたには他のプリマドンナのように、自惚れと自尊心のために蝶々さんの性格を現わすことを忘れていた欠点がないばかりか、あなたが日本のプリマドンナであるため、日本婦人の貞淑さと日本情緒も完全に現わしてくれました。あなたは世界にたった一人しかない、最も理想的な蝶々さんです」と褒めて下さいました。私はこのお言葉を伺いまして、ロンドンで「お蝶夫人」を初演した時からアメリカからヨーロッパ、南米と千何百回と「お蝶夫人」をうたうたびごとにどうしたら蝶々さんの性格描写が出来るか、苦心をして来た苦労が始めて「お蝶夫人」の作曲家ブッチーニに認めて頂いて、嬉しくて嬉しくて泣けて来ました。
198	吉本明光編 三浦環「お蝶夫人」	1947(昭和22)年5月10日	吉本明光編 三浦環「お蝶夫人」	マダム三浦、あなたはメルバやカルヴェ——有名なカルメン歌手——に劣らないコリティを持っている	②	ヘンリー・ウッド卿→私 上下 男→女	③	なし	だから私がロンドンで大指揮者ヘンリー・ウッド卿に歌のテストを受けた時に、ウッド卿が「マダム三浦、あなたはメルバやカルヴェ——有名なカルメン歌手——に劣らないコリティを持っている」と褒めて下さった。そういう風に当時ロンドンで楽壇の代表的プリマドンナといえぱすぐメルバを引合いに出すほどの名声を持っていたのです。
199	吉本明光編 三浦環「お蝶夫人」	1947(昭和22)年5月10日	伝説(三人称)	「まあ、環ちゃんは何んて可愛い、美しい声でお上手にうたうんでしょう」	①	植村くに子先生→私 上下 女→女	③	なし	六歳の時、幼稚園に入りました。幼稚園で「君が代」をうたいましたら、植村くに子先生が「まあ、環ちゃんはなんて可愛い、美しい声でお上手にうたうんでしょう」と大変褒めて下さいまして、特別にいろいろの唱歌を教えて下さって、御自分でヴァイオリンで伴奏をして、私を方々へつれて行っでは唱歌をうたわせました。
200	吉本明光編 三浦環「お蝶夫人」	1947(昭和22)年5月10日	伝説(三人称)	声が綺麗でその上「間」のとりかたがうまい	①	お師匠さん→私 上下 不問→女	③	なし	また、この年、私は長唄を吉住というお師匠さんに教わりました。手ほどきの「宵やあ待ち」から始めたのですが、このお師匠さんにも、声が綺麗でその上「間」のとりかたがうまいと褒められて、すぐ「鶴亀」を教え、おさらいの時にうたって大変褒められました。長唄のほかにお琴も山田流の先生のところに通い、これはずっと後、女学校時代のことですが、奥許しを頂きました。
201	吉本明光編 三浦環「お蝶夫人」	1947(昭和22)年5月10日	伝説(三人称)	柴田さんはなんて綺麗な声でしょう。そして音程がしっかりしている。あなたは生れつき音楽の才能を身につけています。あなたは上野の音楽学校に入って勉強なさい、きっと日本で一流の音楽家になれる	②	吉沢先生→私 上下 不問→女	③	なし	その憧れの吉沢先生が私のうたうのをお聴きになって「柴田さんはなんて綺麗な声でしょう。そして音程がしっかりしている。あなたは生れつき音楽の才能を身につけています。あなたは上野の音楽学校に入って勉強なさい、きっと日本で一流の音楽家になれる」と褒めて下さいました。幼稚園の時に植村くに子先生に褒められて以来、褒められることには馴れっ子になっていたし、私の声が美しいことも自分でも自信を持っていましたが、音楽家になろうとは思っていませんでした。
202	太宰治「斜陽」	1947(昭和22)年7月1日～1947(昭和22)年10月1日	小説(一人称)	何か	③	あの方→私 対等 男→女	なし	B	「そんな事だけは、覚えているのね」 「少しでもほめられた事は、一生わすれません。覚えていたほうが、たのしいもの」 「こないだ、あの方からも、何かとほめられたのでしょう」 「そうよ。それで、べつたりになっちゃったの。私と一緒にいると靈感が、ああ、たまらない。私、芸術家はきらいじゃないんですけど、あんな、人格者みたい、もったいぶってるひととは、とても、ダメなの」
203	寺田寅彦「備忘録」	1947(昭和22)年9月10日	随筆(一人称)	きれい	①	多くの人→三毛 不問 不問	②	なし	「三毛」はいろいろの点において「玉」とはまさに対蹠的の性質をもった雌猫であった。だからからもきれいとほめられる容貌と毛皮をもって、敏捷で典雅な举止を示すと同時に、神経質な気むずかしさをもっていた。もちろん家族の皆からかわいがられ、あらゆる猫へのごちそう言えばこの三毛のためにのみ設けられた。せつかく与える魚肉でも少し古ければ香をかいたままで口をつけない。そのお流れをみんな健啖な道化師の玉が頂戴するのであった。

204	宮本百合子「道標」	1947(昭和22)年10月号～ 1948(昭和23)年8月号	小説(三人称)	コーカサスの美女は、日本美人そっくりだ、	③	秋山宇一→コーカサスの美女 対等 男→女	②	なし	秋山宇一が、コーカサスの美女は、日本美人そっくりだ、とほめたとき、伸子はその言葉から受けた感じは、暗く、苦しかった。エスベラントで講演するひとでさえも、女というものについては、ひっくるめて顔たちから云い出すような感覚をもっているという事実は、それにつれて、伸子に苦しく佃を思い浮ばせもすることだった。駒沢の奥の家で一時的にげつき合いそうになった竹村の感情も思い出させた。竹村も佃も、それが男の云い分であるかのように、編みものをしているような女と生活するのは嬉しい、と云った。編みものをしたりするより、もっと生きているらしく生きたがって、そのために心も身も休まらずにいる伸子にむかって。
205	宮本百合子「道標」	1947(昭和22)年10月号～ 1948(昭和23)年8月号	小説(三人称)	見事にできました	①	マリア・グレゴリーエヴナ →イリーナ 上下 女→女	③	なし	マリア・グレゴリーエヴナが、「見事にできました」とほめた。低い椅子にかけたまま、立っている娘を見上げる女主人、立ったまま母親の顔を見ている娘とは、マリア・グレゴリーエヴナの褒め言葉で、互に、満足の笑顔を交しあった。娘は、ドアのむこうに引こんだ。
206	宮本百合子「道標」	1947(昭和22)年10月号～ 1948(昭和23)年8月号	小説(三人称)	日本の聴衆は静肅で、まじめでいい	①	ジンバリストのような偉い 方→日本の聴衆 上下 不問	④	なし	「こちらにこうしておりますとね、ウィーンへ音楽の勉強にいらっしゃる日本の方々の御評判のいいことも嬉しゅうございますが、ジンバリストのような偉い方が日本へいらして、お帰りになると、きっと、日本の聴衆は静肅で、まじめでいいとほめて下さるときぐらい、うれしいことはございませんよ。そのときは、ほんとに肩身のひろい思いをいたします」
207	宮本百合子「道標」	1947(昭和22)年10月号～ 1948(昭和23)年8月号	小説(三人称)	かわいくて、いいこと	①	伸子→多計代の寝間着 上下 女→(女)	①	なし	昼間のいろいろなことであんなに伸子を傷つけた、そのひとは思えないうれしさのあふれた眠つきで、多計代は大きい白い枕の上で、頭をあっちに動かして、いくらか汗っぼい下の娘の十三歳の顔を眺め、こんどは頭をこっちに向けて、さっぱりしたうちにも、表情の成熟して来ている三十歳の伸子の顔を見た。そして、伸子がきかえた薄黄色地に小花模様の両腕の出る寝間着を、「かわいくて、いいこと」とほめた。「それにしても、よく吉見さんが伸ちゃんを一人でよこしたね」そんなことを云っている多計代はほとんどあどけないようで、一つ枕の上に並んだ多計代の髪が前髪をつめられ、八分どおり白くなっていることも、そこに不手際に黒チェックが塗られていることも、伸子の心を動かすのだった。
208	宮本百合子「道標」	1947(昭和22)年10月号～ 1948(昭和23)年8月号	小説(三人称)	立派な英語だ	①	泰造→ミセス・ステッソン 対等 男→女	③	なし	黒い絹服を上品に身につけて、泰造が立派な英語だとほめた言葉づかいのミセス・ステッソンが、淑女らしい権式で門限のことや日曜日の冷い料理のことを云いわたしながら、佐々たちが借りようとする室を見に二階へ行ったとき、その部屋にガスをつかっているということについては、ひとこともふれなかった。
209	石川三四郎「浪」	1948(昭和23)年5月24日～ 12月27日	自伝(一人称)	素晴らしい名文だ	①	松井柏軒氏→私 上下 男→男	①	なし	萬朝報の編集局長松井柏軒氏などは素晴らしい名文だと褒めてくれたのですが、今日では、私自身でさへ、別世界の人の言葉としか思へないから、他人さまはさぞ不可解に感じられるであります。しかし、よくよく咀嚼して見ると、耶蘇教でもなく社會主義でもない私自身のその時の心情がにじみ出ていると思ひます。おそろしく古風な、しかも可なりにはひねくれた心の持ち方が現はれてゐます。これは恐らく少年時代の古い型の先輩達から受けた感化と、有爲轉變のはげしい浪に飄弄されて來た生活環境から育成された性格であります。
210	水谷まさる訳 ルイーザ・メイ・オルコット「若草物語」	1948(昭和23)年6月1日	物語(三人称)	いい声だ	①	みんな→メグ 不問 不問→女	③	なし	メグは、その夜、心ゆくまでダンスをしました。みんなが親切にしてくれ、歌をうたえばいい声だとほめ、リンカーン少佐は、あの目の美しい令嬢はどなたと尋ねましたし、マフォット氏は、メグの身体にばねみtainいものがある、ぜひメグとダンスするといいました。
211	水谷まさる訳 ルイーザ・メイ・オルコット「若草物語」	1948(昭和23)年6月1日	物語(三人称)	一人前の婦人みたいになりっぱな態度だ	①	ローリー→エミイ 対等 男→女	⑤	なし	ローリーは、エミイにおかあさんの帰ったことを知らせにきましたが、エミイは一刻も早くあいたいの、す早く涙をかわかしてその気持をおさえたので、ローリーは一人前の婦人みたいになりっぱな態度だとほめ、マーチおばさんも心から同意しました。そして、エミイは、ローリーに散歩につれていってほしく思いましたが、たいへん疲れているようなので、それもがまんして、ローリーをソファにかけさせて休ませじぶんはおかあさんに手紙を書きました。
212	長谷健「天草の春」	1948(昭和23)年9月15日	小説(一人称)	うまくやつた、	①	乗込んでいる男→天草の女 対等 男→女	⑤	なし	心臓のつよい女だな、と、ささやく乗客の声も聞えぬものの如く、女はすでに乗込んでいる男から、うまくやつた、と、ほめられ、いかにも得意そうに、人込みの中におし分けてはいるのであつた。やはり天草の女に違いなかった。
213	宮本百合子「偽りのない文化を」	1948(昭和23)年9月号	ノンフィクション(一人称)	あなたがたの双肩に日本の勝利はゆだねられています、第一線の花形です、	①	不問→彼女たち 不問 不問→女	⑤	なし	売笑婦が、電車に乗るのは生意氣だといつてののしられる国が、日本のほかのどこにあるだろう。なるだけ歩くけれど、遠いところは乗りたいという、いじらしい答えをする夜の女が日本のほかのどこにいるだろう。こういう娘たちの大部分は戦争中、徴用で軍需工場に働いていた。そのときの彼女たちは、断髪に日の丸はちまきをしめて、日本の誇る産業戦士であつた——寮でしらみにくわれながらも。彼女たちの働く姿は新聞に映画にうつされた。あなたがたの双肩に日本の勝利はゆだねられています、第一線の花形です、というほめ言葉を、そのころはじめてきいたのだった。

214	江戸川乱歩「青銅の魔人」	1949(昭和24)年1月号～12月号	小説(三人称)	うちの昌一とは二つ三つしか年がちがわないううだが、そんな小さいなりをして、えらいものですなあ。	②	手塚君のおとうさん→小林さん 上下 男→男	③	なし	明智探偵と小林君が応接間へは行って行きますと、四十歳余りのりっぱな紳士と、学生服のかわいらしい少年がイスから立ちあがってあいさつしました。ひととおりあいさつがすんだあとで、手塚君のおとうさんは、小林少年のリンゴのような頬をながめながら、「このかたが小林さんですか。篠崎君からいろいろあんたの手がら話を聞きましたよ。うちの昌一とは二つ三つしか年がちがわないううだが、そんな小さいなりをして、えらいものですなあ。」とほめあげるのでした。昌一君も、尊敬のまなざしで小林少年を見つめています。小林君の頬はまたしてもいっそう赤くなりました。
215	平野万里「晶子鑑賞」	1949(昭和24)年7月25日	詩歌(一人称)	まあ綺麗なこと	①	晶子→若い女 上下 女→女	①	なし	若い女が紫好みの春着を着て新年の挨拶にでも来たのであらう。それを晶子さんがまあ綺麗なこととほめながら自分の前へ立たせ魚が鰭を振る形に袖をふらせて見る。先づそんな場合の歌でもあらうか。
216	坂口安吾「勝負師」	1949(昭和24)年8月20日	小説(一人称)	塚田名人、強い	①	木村→塚田 対等 男→男	③	なし	まさしく原田の読んだところ。そして又、他の八段も今しもそれに気付いたところだ。控室に、ワッと、どよめきが、あがつた。木村はそれをノータイムで、同歩、ととつてゐるのである。「塚田名人、強い」升田が我が意を得たりと、ギロリと大目玉をむいて、首をふつた。それだけでも、ほめ足りなくて、「ウム、強いもんやなア。この線、読みきつたんや」と、指で盤を指して、すぐ引っこめた。つまり、塚田が読み切つたといふ、この線、を指し示したわけだが、四筋だか、七筋だか、六筋だか、人垣に距てられてゐた私には分らなかつた。
217	坂口安吾「勝負師」	1949(昭和24)年8月20日	小説(一人称)	ウム、強いもんやなア。この線、読みきつたんや	②	升田→塚田 対等 男→男	③	なし	まさしく原田の読んだところ。そして又、他の八段も今しもそれに気付いたところだ。控室に、ワッと、どよめきが、あがつた。木村はそれをノータイムで、同歩、ととつてゐるのである。「塚田名人、強い」升田が我が意を得たりと、ギロリと大目玉をむいて、首をふつた。それだけでも、ほめ足りなくて、「ウム、強いもんやなア。この線、読みきつたんや」と、指で盤を指して、すぐ引っこめた。つまり、塚田が読み切つたといふ、この線、を指し示したわけだが、四筋だか、七筋だか、六筋だか、人垣に距てられてゐた私には分らなかつた。
218	楠山正雄訳 ガブリエル=シュザンヌ・バルボ・ド・ヴィルヌーヴ 「ラ・ベルとラ・ペート(美し姫と怪獣)」	1950(昭和25)年5月1日	物語(三人称)	美しい美しい	①	みんな→妹 不問 不問→女	②	なし	顔かたちの美しいばかりでなく、心のすなおで善いこのむすめとはうらはらで、ふたりの姉たちは、あいにく、いじわるでねじけていて、妹の美しい美しいとほめられるのがにくらしくてなりませんでした。
219	有島武郎「或る女 1(前編)」	1950(昭和25)年5月5日	小説(三人称)	非常に有為多望な青年だ	①	葉子の母→木部 上下 女→男	③	なし	その感傷的な、同時にどこか大望に燃え立ったようなこの青年の活気は、家じゅうの人々の心を描えないでは置かなかつた。ことに葉子の母が前から木部を知っていて、非常に有為多望な青年だとほめそやしたり、公衆の前で自分の子とも弟ともつかぬ態度で木部をもてあつかつたりするのを見ると、葉子は胸の中でせせら笑つた。そして心を許して木部に好意を見せ始めた。木部の熱意が見る見る抑えがたく募り出したのはもちろんの事である。
220	倉田百三「愛と認識との出発」	1950(昭和25)年6月30日	エッセイ(一人称)	善し	①	私たち→愛 不問 不問	なし	なし	そして私たちの最大の苦痛である。愛されないようにする力が私たちの生命のなかにある。そして愛を善しとほめる心がある。その二つのものの乖反はけつて一致してはいない。恋愛や骨肉の愛のごとく意志より発する愛のときはこの乖反はない。
221	倉田百三「愛と認識との出発」	1950(昭和25)年6月30日	エッセイ(一人称)	偉大なる人間	①	私→その人 下上 男→不問	④	なし	世には才能に向かつて崇拜しようとする人々があるが、私はかの英雄や天才をただ as such に崇拜する気にはなれないものである。もし聖人といわるべきほどの者がいるとすれば、私ははじめてその人を偉大なる人間とほめよう。けれど、はたして人間に(ことに今の世に)聖人と呼ばれるに値するものがあるであろうか。M氏はいないと思うのであらう。
222	坂口安吾「安吾巷談 07 熱海復興」	1950(昭和25)年7月1日	評論(一人称)	檻の中に残った方が適役	①	小林秀雄→お光り様 対等 男→男	⑥	なし	これ実に彼のヤジウマ根性だ。精神病院へとじこめられた文士という動物を見物しておきたかつたにすぎないのである。一しよに檻の中で酒をのみ、はじめはお光り様の悪口を云っていたが、酔いが廻るとほめはじめて、どうしても私と入れ代りに檻の中に残った方が適役のような言辞を喋りまくって戻っていった。
223	坂口安吾「巷談師」	1950(昭和25)年8月3日	小説(一人称)	あれはいいぞ。安吾巷談。な。よく見ている。初心者の甘さもあるが、よく見ている。みんな、ほめてるぞ。あれで行けよ	②	友人→私 対等 男→男(もの)	①	なし	私にビールをつがせてグッと呷り、再び握手を交した。「あれはいいぞ。安吾巷談。な。よく見えている。初心者の甘さもあるが、よく見えている。みんな、ほめてるぞ。あれで行けよ」と、ほめて、はげましてくれた。損をした日は、ほめてくれないように見えたが、私のヒガミかも知れない。
224	有島武郎「或る女 2(後編)」	1950(昭和25)年9月5日	小説(三人称)	じっくり似合う	①	倉地→葉子 対等 男→女	①	なし	葉子はちょっと当惑した。あつらえておいた衣類がまだできないのと、着具合がよくって、倉地からもしっくり似合うとほめられるので、その朝も芸者のちよいちよい着らしい、黒繻子の襟の着いた、伝法な棒縞の身幅の狭い着物に、黒繻子と水色匹田の昼夜帯をしめて、どてらを引っかけていたばかりでなく、髪までやはり櫛巻きにしていたのだった。えい、いい構うものか、どうせ鼻をあかさせるならのつけからあかせてやろう、そう思って葉子はそのままの姿で古藤を待ち構えた。
225	豊島与志雄 「無法者」	1951(昭和26)年1月	小説(三人称)	先生はやさしいよいおかただ	①	女中→志村 下上 女→男	④	なし	その女中さんが、あとで、先生はやさしいよいおかただとほめておりましたそうですよ。そして、よいおかただけれど……と言葉尻を濁すので、よく聞いてみますと、たった一ついやなことがある、と申したそうです。先生がいつまでもお酒をあがつていらっしゃるので、部屋に引っこんでいると、いきなり部屋の襖をあけて、もう寝たのかいと中をお覗きなさることがあるし、それから、酔つ払って肩をお揉ませなさることがある。それが、とてもいやだった。そう申したそうですよ。
226	和辻哲郎「埋もれた日本——キリシタン渡来文化前後における日本の思想的状況——」	1951(昭和26)年3月号	評論(一人称)	無双不思議	①	心敬→猿楽の世阿弥 下上 男→男	③	なし	しかし心敬のあげた証拠だけを見ても、この時代が延喜時代に劣るとは考えられない。心敬は猿楽の世阿弥(一三六三——一四四三)を無双不思議とほめているが、我々から見ても無双不思議である。能楽が今でも日本文化の一つの代表的な産物として世界に提供し得られるものであるとすれば、その内の少なからぬ部分の創作者である世阿弥ぜあみは、世界的な作家として認められなくてはなるまい。

227	和辻哲郎「埋もれた日本——キリシタン渡来文化前後における日本の思想的状況——」	1951(昭和26)年3月号	評論(一人称)	行儀、心地ともに独得の人	①	心敬→一休和尚 下上 男→男	④	なし	禅においては、一休和尚(一三九四—一四八八)がこの時にまだ生きていた。心敬はこの人を、行儀、心地ともに独得の人としてほめている。よほど個性の顕著な人であったのであろう。そうしてこの禅の体得ということも、日本文化の一つの特徴として、今でも世界に向かって披露せられている点である。
228	和辻哲郎「埋もれた日本——キリシタン渡来文化前後における日本の思想的状況——」	1951(昭和26)年3月号	評論(一人称)	分別者利発人	①	家中の人→たわけ者 下上 不問→男	③	なし	大將がばかであるゆえに起こってくる結果は、同じようなばか者を重用するということである。そのばか者がまた同じようなばか者に諸役を言いつける。したがって家中で「馳はしり廻るほどの人」は、皆たわけがそろってしまう。そのたわけを家中の人が分別者利発人とほめる。ついに家中の十人の内九人までが軽薄なへつらい者になり、互いに利害相結んで、仲間ほめと正直者の排除に努める。
229	中谷宇吉郎「私の履歴書」	1951(昭和26)年11月1日	随筆(一人称)	そうか、それはよい経験をしたものだ。落第をしたことのない人間には、落第の価値は分らない	②	先生→私 上下 男→男	⑥	なし	実は大学を出て寺田寅彦先生の助手になって、理化学研究所で働いていた頃、ある晩自宅へ遊びに行っていて、この落第の話をしたことがある。そうしたら先生が「そうか、それはよい経験をしたものだ。落第をしたことのない人間には、落第の価値は分らない」と褒められてちょっと驚いた。それから先生は「僕も落第したことがある。中学校の入学試験に落第をしたんだが、あれはいい経験だった。夏目(漱石)先生も、たしか小学校で一度落第されたはずだ。人世というものは非常に深いもので、何が本当の勉強になるかなかなか簡単には分らないものだ」という話をされた。これで大いに安心した。
230	南方熊楠「十二支考鼠に関する民俗と信念」	1951(昭和26)年11月25日	伝説(三人称)	わがかづく多くの鍋を施して、万治この方になる者ぞなき	③	不問→黨 不問 不問→女	⑤	なし	四壁庵の『忘れ残り』上巻に、吉原江戸町三丁目佐野榎屋の抱え遊女黨、美貌無双孝心篤く、父母の年忌に廊中そのほか出入りの者まで行平鍋を一つずつ施したり、「わがかづく多くの鍋を施して、万治この方になる者ぞなき」とほめある。これらよりもずっと著われたは安永二年菅専助作『傾城恋飛脚』で全国に知れ渡り、「忠兵衛は上方者で二分残し」とよまれた亀屋の亭主をしくじらせた北の新地榎屋の抱え梅川じや。
231	相馬愛蔵「私の小売商道」	1952(昭和27)年11月25日	随筆(一人称)	非常に行儀がよかった	①	不問→店員一同 不問 不問	⑤	なし	物故した店員のために、この間も芝の増上寺で大島法主をはじめ、導師の方二十三人に出て頂いて法要を盛大に行い、店員一同店を休んでこれに出席したが、非常に行儀がよかったと褒められ嬉しく思った。店員は一人二人、特に振舞はせぬ方針である。これは入店の際に厳選が利いているから、その必要を認めないばかりでなく、家族的の朗さのためでもある。
232	梅崎春生「Sの背中」	1952(昭和27)年1月	小説(三人称)	お見事お見事	①	猿沢→久美子 上下 男→女	⑥	なし	猿沢夫妻は、ことに猿沢佐介は、久美子にたいして大層親切でした。久美子がトップになると、猿沢は愉快そうに笑ったり、お見事お見事とほめたりするのです。ところが、螢江がまぐれ当りして一位になっても、猿沢は決してほめたり笑ったりしない。ふん、といった顔をするだけなのです
233	平山千代子「転校」	1954(昭和29)年3月30日	小説(一人称)	おゝ、よく出来ました	①	先生→私 上下 男→女	③	なし	「どこかわからん所はないか」の「教へてやる」のと云ひ、皆にノートを出させて、私のだけ「おゝ、よく出来ました」と、ほめたり……そして、皆にいふのはいつも「いゝところの家の子でないと、どうしてもダメだ」とか、「いゝ家の子は家庭教師をつけるから、よく出来る」とか、そんなことばつかりだ。あんないやしい、先生らしくない先生には、始めてお目にかかった。思ひ出してもゾツとする。
234	内田魯庵「犬物語」	1954(昭和29)年9月	随筆(三人称)	壮んなり	①	旦那→大洞福弥 上下 男→男	⑥	なし	処で俺の旦那がお世辞半分に新聞記者の天職を壮んなりと褒めて娘も新聞記者に嫁る意だと戯謔面に煽動てたから、先生グツト乗気になって早や聶君に成済したやうな気で毎日入浸つてゐる。
235	坂口安吾「心霊殺人事件」	1954(昭和29)年10月15日	小説(三人称)	日本一だ。ビルマの孫の所や名を言い当てるのは不可能でない	②	伊勢崎九太夫→吉田八十松 対等 男→男	③	なし	——伊勢崎九太夫は吉田八十松の心霊術をほめてるぞ。日本一だと云ってる。ビルマの孫の所や名を言い当てるのは不可能でないとはめちぎっているのだ ——ぼくはそんなことは初耳ですよ。伊勢崎さんが心霊術のインチキをあばいて下さるものと確信していたのです
236	鈴木三重吉「古事記物語」	1955(昭和30)年1月20日	小説(三人称)	そちは大事な場所をよく見届けておいでくれた	①	天皇→老婆 上下 男→女	⑤	なし	天皇はそれからご還御の後、さきの老婆をおめしのぼせになりまして、「そちは大事な場所をよく見届けておいでくれた」とおほめになり、置目老嫗という名をおくだしになりました。そして、とうぶんそのまま宮中へおとどめになって、おてあつくおもてなしになった後、改めてお宮の近くの村へお住ませになり、毎日一度はかならずおそばへめて、やさしくお言葉をかけておやりになりました。天皇はそのためにわざわざお宮の戸のところへ大きな鈴をおかけになり、置目をおめしになるときは、その鈴をお鳴らしになりました。

237	中谷宇吉郎『日本石器時代提要』のこと	1955(昭和30)年7月19日	随筆(一人称)	年齢わずか三十歳の著者が	①	『朝日新聞』の書評→治宇二郎 不問もの→男	③	なし	弟治宇二郎が書いた本というのは、表題の『日本石器時代提要』であって、菊判三百ページくらいの堂々たる体裁であった。評判も大分良かったらしく、『朝日新聞』の書評でも「年齢わずか三十歳の著者が」と、大いに褒めてあった。しかし本当は、当時二十七歳くらいだったので、ひどく早熟な方であった。
238	ハンス・クリスチャン・アンデルセン「人魚のひいさま」	1955(昭和30)年7月20日	物語(三人称)	たん	③	ほめ手不明→おかあさま 下上 性別不明→女	なし	なし	このおかあさまは、りこうな方でしたけれど、いちだんたかい身分をほこりたさに、しっぽにつける飾りのかきをごじぶんだけは十二もつけて、そのほかはどんな家柄のものでも、六つから上つけることをおゆるしにしませんでした。——そんなことをべつにすれば、たんとはほめられてよい方でした。とりわけ、お孫さんにあたるひいさまたちのおせわをよくなさいました。それはみんなで六人、そろってきれいなひいさんたちでしたが、なかでもいちばん下のひいさまが、たれよりもきりょうよしで、はだはばらの花びらのようにすぎとおって、きめがこまかく、目はふかいふかい海のようにまっ青でした。ただほかのひいさまたちとおなじように、足というものがなくて、そこがおさかなの尾になっていました。
239	浅沼稻次郎「私の履歴書」	1956(昭和31)年	伝記(一人称)	あれは沼さんの声だと誰でも分るようになれば大したものだ	①	徳川夢声氏→私 上下 男→男	③	なし	徳川夢声氏と対談したとき『あれは沼さんの声だと誰でも分るようになれば大したものだ』とほめられたことがある。しかし私の声ははじめてからこんなガラガラ声ではなかった。学生時代から江戸川の土手や三宅島の海岸で怒濤を相手にし、あるいは寒中、深夜、野原に出て寒げいこを行い、また謡曲がよいというので観世流を習ったりして声を練った結果、現在の声となった。
240	宮本百合子「マクシム・ゴーリキイの伝記」	1956(昭和31)年2～9月号	伝記(一人称)	生えぬきだ！まったくの民衆の子だ！	③	学生たち→ゴーリキイ 上下 男→男	④	なし	同時に、これまで経験したことのない妙なばつわるさ、居心地のわるい瞬間が、ゴーリキイの生活に混りこんで来た。これらの学生達は目の前へ彼を置いて「まるで指物師が並々ならぬものを作ることの出来る木の一片でも見るよう」な眼付でゴーリキイを眺めた。「子供が道傍でひろった大きい銅貨でも見せ合うように、誇りをもって」彼を皆に紹介し合った。これは、ゴーリキイの淡白な氣質にとって工合わるかった。更に彼等は、ゴーリキイを「生えぬきだ！」「まったくの民衆の子だ！」と褒める。これもゴーリキイの気を重く、また考えぶかくさせた。ナロードニキである学生達は民衆を睿智と精神美と善良との化身、「すべての美なるもの、正義あるもの、崇厳なものの原理の所有者」のように話すのであったが、ゴーリキイが物心つく時からその中に揉まれ、それと闘って来た現実生活の下で、彼は「このような民衆を知らなかった。」
241	織田作之助「わが町」	1956(昭和31)年10月31日	小説(三人称)	上達した	①	蝶子→柳吉 下上 女→男	③	なし	柳吉は近くの下寺町で稽古場をひらいている竹本組昇に月謝五円で弟子入りし、二ツ井戸の天牛書店で稽古本の古いのを漁って、毎日ぶらりと出掛けた。柳吉は商売に身を入れるといっても、客が来なければ仕様がなといった顔で店番をするときも稽古本をひらいて、ぼそぼそうなった。その声がいかににも情けなく、蝶子は上達したと褒めるのもなんとなく気が引けた。
242	織田作之助「わが町」	1956(昭和31)年10月31日	小説(三人称)	えらい女だ	①	柳吉の父親→蝶子 上下 男→女	③	なし	柳吉と一緒に湯崎から大阪へ帰ると、蝶子は松坂屋の裏に二階借りした。相変らずヤトナに出た。こんど二階借りをやめて一戸構え、ちゃんとした商売をするようになれば、柳吉の父親もえらい女だと褒めてくれ、天下晴れて夫婦(めおと)になれるだろうとはげみを出した。その父親はもう十年以上も中風で寝ていて、普通ならとつくに死んでいるところを持ちこたえているだけに、いつ死なぬとも限らず、生きているうちに蝶子は焦った。が、柳吉はまだ病後の身体で、滋養剤を飲んだり、注射を打ったりして、それがきびしい物入りだったから、半年経っても三十円と経った金はたまらなかった。
243	牧野富太郎「牧野富太郎自叙伝 第二部 混混録」	1956(昭和31)年12月	伝記(一人称)	先生の身体は檜造りで何処も何等の異条がない	②	ある医学博士→私 不問 不問→男	⑥	なし	数年前に本郷の大学の真鍋物療科で健康診断をして貰った事があったが、その時血圧は低く脈は柔かで若い者の脈と同じだ、これなら今後三十年の生命は大丈夫だと、串戯交りにいわれた事があり、そしてこの血圧の低い事と脈の柔かい事から推しますと、まず私は脳溢血に罹る事はないように思われます。またある医学博士は、先生の身体は檜造りで何処も何等の異条がないと褒められた事もありました。
244	吉川英治「押入れ随筆」	1957(昭和32)年	随筆(一人称)	おたくでは、シツケがいいとみえて、みなさんお行儀がいいですね	①	客→私 対等 不問	⑤	なし	『おたくでは、シツケがいいとみえて、みなさんお行儀がいいですね』などと、どうかすると、客から、おほめにあずかることがある。ほめられて、ぎよっとするようなものだった。家のキャプテンとしての私は、家族たちへ、シツケなどという意識で、何ひとつ、小やかましいことを日常に強いている覚えはないからである。
245	岡本綺堂「番町血屋敷」	1957(昭和32)年	小説(三人称)	二人ともに揃ってよい奉公人を置き当てた	①	洪川の伯母→お仙とお菊 上下 女→女	⑤	なし	台所働きのお仙も正直者であったが、腰元のお菊も甲斐甲斐しく働いた。二人ともに揃ってよい奉公人を置き当てたと、洪川の伯母も時々見廻りに来て褒めていた。実際、お菊が初めて目見得に来た時に比べると、屋敷の内も余ほど綺麗になった。
246	岡本綺堂「番町血屋敷」	1957(昭和32)年	小説(三人称)	宝蔵院流の槍も能く使わるる	①	お頭の水野様→殿様 上下 男→男	③	なし	「何の、お前が取越し苦勞。殿様は白柄組の中でも指折りの剣術の名人、宝蔵院流の槍も能く使わるると、お頭の水野様も日頃から褒めていられます。ほほ、なみなみの者を五人十人相手になされたとして、何のあやまちがござりましょうぞ。喧嘩といえは穩かならぬようにも聞えますが、それも太平の世に武を磨く一つの方便、斬取り強盗とは筋合が違うて、お上でもむずかしゅういわるる筈がござりませぬ」

247	林芙美子「淪落」	1957(昭和32)年3月20日	小説(一人称)	随分いゝ脚をしている	①	ダンス教師→生徒 上下 女→女	②	なし	皓い大きい前歯と、人並はずれて大きい乳房、ほんの少し通つたホールの女達よりもわたしは何だか、自分の方がきれいなように思えた。ダンス教師は、わたしの足をみて、随分いゝ脚をしているとほめてくれた。志願した女達のなかでも、わたしは背が高い方だった。
248	福田英子「妾の半生涯」	1958(昭和33)年4月25日	自伝(一人称)	伶俐なる娘	①	屋敷内の人→私 不問 不問→女	③	なし	妾は八、九歳の時、屋敷内にて伶俐なる娘と誉めそやされ、学校の先生たちには、活発なる無邪気なる子と可愛がられ、十一、二歳の時には、県令学務委員等の臨める試験場にて、特に撰拔せられて『十八史略』や、『日本外史』の講義をなし、これを無上の光栄と喜びつつ、世に妾ほど伶俐なる者はあるまじなど、心私かに郷党に誇りたりき。
249	野村胡堂「胡堂百話」	1959(昭和34)年11月	随筆(一人称)	キミは、実に、思う通りの自由な生活をしてきたらしい	③	金田一京助博士→私 対等 男→男	⑥	なし	中学以来の親友、金田一京助博士は何時だったかラジオの対談で「キミは、実に、思う通りの自由な生活をしてきたらしい」と、ほめるのか、非難するのか、分らぬことをいったことがある。謹直無比の金田一君から見れば、私の生活などは、すべてが、驚くべきケタはずれかも知れないが、この時の言葉は、私のレコード収集を指したもののらしい。全くの話が、まずしい新聞記者の生活の中で、一万枚のレコードを集めるには、他のあらゆる欲望を犠牲にして、ずいぶんと、無茶苦茶な半生ではあった。
250	野村胡堂「胡堂百話」	1959(昭和34)年11月	随筆(一人称)	鼻うたまじりで書くというのは、何と、大したものではないか	②	作家の某氏→私 不問 不問→男	③	なし	それからのちに、作家の某氏が私を訪ねて、「鼻うたまじりで書くというのは、何と、大したものではないか」と、まじめに、ほめ上げてくれたのには、キモをつぶした。
251	野村胡堂「胡堂百話」	1959(昭和34)年11月	随筆(一人称)	みんな駄目だ。咲いた桜……に及ぶものは一つもないじゃないか	③	博士→歌人 不問 男→不問	①	なし	そこで、いくつも、都々逸どどいつをきかせた。けれど、博士は首を横に振って、「みんな駄目だ。咲いた桜……に及ぶものは一つもないじゃないか」と、読み人知らずの、咲いた桜を、いつまでも、いつまでも、ほめていた。
252	野村胡堂「胡堂百話」	1959(昭和34)年11月	随筆(一人称)	あれだけ書いていて、よくも深夜業なしに済まされるものだ	③	不問→私 不問 不問→男	③	なし	あえて小説家とは限らないが、原稿を職業にする人には、深夜型と、早朝型とがある。私は、原則として、夜は書かない。もちろん、徹夜なんかない。ある時期には、月刊雑誌だけで、九つくらい書いていたが、それでも、夜業はやらなかった。「あれだけ書いていて、よくも深夜業なしに済まされるものだ」と、ほめるのだから、馬鹿にするのだから分らぬようなことをいう者があったが、私としては、別にむずかしいことではない。
253	野村胡堂「胡堂百話」	1959(昭和34)年11月	随筆(一人称)	いい買物だ	①	下宿の女将→私の買い物 対等 女→男	①	なし	しゃくり上げるような眼付きで、私の方を振り向いた。どういう、いわくの女だか、そんなことは構わないが一体、あのころ私たちは、どのくらいの小遣いを持っていただろう。私の下宿が、三食で一カ月三円也。六畳の部屋代が一円五十銭。布団は、郷里の妹が手織りで作ったのを送って来たが、机は夜店で一閑張りを買った。言い値が八十銭か八十五銭だったのを、大分ねばって六十銭で買って帰ると、いい買物だと下宿の女将にほめられた。だから、十二階下をうろついたりって、大した金額ではないのだが、金高よりも何よりも、私は無暗にこわかった。なんとなく立ちずくんでいるうちに、芳助はトントンと上って行ってしまった。
254	三遊亭円朝「にゆう」	1964(昭和39)年6月	随筆(一人称)	あゝ結構なお道具だ	①	不問→不茶人が飾った偽物 不問 不問→もの	①	なし	長「茶も何もやつた事のねえ奴が、変に捻つたことを云つたり、不茶人が偽物を飾つて置くのを見て、これは震でございますとも謂へんから、あゝ結構なお道具だと誉めなければならん、それが厭だから己の代りに彼の弥吉の馬鹿野郎を遣つて、一度でこり／＼するやうにしてやらう。女房「お止し遊ばせよ、あなたは彼を伶俐と思召して目を掛けていらつしやいますが、今朝も合羽屋の乳母さんが店でお坊さんを遊ばして居る傍で、弥吉が自分の踵の皮を剥いて喰べさせたりして、お気の毒な、子供衆だもんですから、何も知らずむしや／＼喰べて居ましたが、本当に汚い事をするぢやア有りませんか、それに此頃では生意氣になつて、大人に腹を立たせますよ。
255	三遊亭円朝「にゆう」	1964(昭和39)年6月	随筆(一人称)	誠に結構なお品でございます	①	半田屋長兵衛→お客さまの腰の物 不問 男→男(もの)	①	なし	長「何うかすると、お客さまに腰の物を出されるかも知れねえ、然うしたら私は小道具の方とは違ひますゆゑ刀剣の類は流連ひでございますから心得ませんが、拝見だけ仰せ付けられて下さいましと云つて、先頭から先へ眼を付け、それから縁を見て、目貫から何うも誠にござへんに、定めし御中身は結構な事でございませう、当季斯やうな物は誠に少なくなりましたがと云つて、服紗を刀柄へ巻いて抜くんだよ、先方へ刃を向けないやうに、此方へ刃を向けて鉋子先まで出た処でチョンと鞘に収め、誠に結構なお品でございますと、誉めながら瑾を附けるんだ、惜しい事には揚物でございますつて。 弥「へえ天麴羅かい。 長「解らんのう、長い刀を揚げて短くしたのを揚身という。 弥「矢張あなごなぞは長いのを二つに切りますよ。
256	河上肇「閉戸閑詠」	1965(昭和40)年	詩歌(一人称)	日本一ぞ	①	不問→パン屋のパン 不問 不問→もの	①	なし	ひとやにて八年まへより聞きゐたる浸々堂のパンをけふ食むわが友の日本一ぞと褒めゐたるパン屋のパンも今あはれなり列なしてただ一きれのパン食むと街にあふれて待ちゐる人々

257	下村湖人「現代訳論語」	1965(昭和40)年5月15日	経書訳文(三人称)	孝行者だ	①	一家親族→士たる者 不問 不問→男	⑤	なし	<p>子貢がたずねた。―― 「士たる者の資格についておうかがいしたいと存じます。」 先師がこたえられた。―― 「自分の行動について恥を知り責任を負い、使節となって外国に赴いたら君命を辱しめない、というほどの人であつたら、士といえるだろう。」 子貢がまたたずねた。―― 「もう一段さがったところで申しますと？」 先師―― 「一家親族から孝行者だとほめられ、土地の人から兄弟の情誼に厚いと評判されるような人だろう。」 子貢―― 「更にもう一段さがったところで申しますと？」 先師―― 「口に出したことは必ず実行する、やり出したことはあくまでやりとげる、といったような人は、石ころ見たようにこちこちしていて、融通がきかないところがあり、人物の型は小さいが、それでも第三流ぐらいのねうちはあるだろう。」 子貢が最後にたずねた。―― 「現在政務に当たっている人たちをご覧になって、どうお考えになりますか。」 すると先師はこたえられた。―― 「だめ、だめ。樹ではかるような小人物ばかりで、まるで問題にはならない。」</p>
258	下村湖人「次郎物語 第二部」	1965(昭和40)年7月10日	小説(三人称)	くずすのは惜しい	③	下男や婢たち→源次の文房具 下上 男・女→男(もの)	①	なし	<p>源次はさっさと包の紐を解いた。中は文房具の組合わせだった。赤、黄、青、金、緑などの色が眩ゆくみんなの顔を射た。「いいなあ。」誠吉が、心から羨ましそうに、まず言った。それから、下男や婢たちまでがいつしよになって、「くずすのは惜しい」とか「そのまま飾物にしてもいい」とか、「これだけあつたら何年もつかえるだろう」とか、口々にほめそやした。次郎も嬉しくないことはなかった。しかし、はしゃぐ気にはなれなかった。彼は、お延と何度も視線をぶっつけあっては、顔を伏せた。そして、お芳がほとんど自分の方に注意を向けていないのを、不思議にも思い、気安くも感じた。</p>
259	下村湖人「次郎物語 第二部」	1965(昭和40)年7月10日	小説(三人称)	そのまま飾物にしてもいい	③	下男や婢たち→源次の文房具 下上 男・女→男(もの)	①	なし	<p>源次はさっさと包の紐を解いた。中は文房具の組合わせだった。赤、黄、青、金、緑などの色が眩ゆくみんなの顔を射た。「いいなあ。」誠吉が、心から羨ましそうに、まず言った。それから、下男や婢たちまでがいつしよになって、「くずすのは惜しい」とか「そのまま飾物にしてもいい」とか、「これだけあつたら何年もつかえるだろう」とか、口々にほめそやした。次郎も嬉しくないことはなかった。しかし、はしゃぐ気にはなれなかった。彼は、お延と何度も視線をぶっつけあっては、顔を伏せた。そして、お芳がほとんど自分の方に注意を向けていないのを、不思議にも思い、気安くも感じた。</p>
260	下村湖人「次郎物語 第二部」	1965(昭和40)年7月10日	小説(三人称)	これだけあつたら何年もつかえるだろう	③	下男や婢たち→源次の文房具 下上 男・女→男(もの)	①	なし	<p>源次はさっさと包の紐を解いた。中は文房具の組合わせだった。赤、黄、青、金、緑などの色が眩ゆくみんなの顔を射た。「いいなあ。」誠吉が、心から羨ましそうに、まず言った。それから、下男や婢たちまでがいつしよになって、「くずすのは惜しい」とか「そのまま飾物にしてもいい」とか、「これだけあつたら何年もつかえるだろう」とか、口々にほめそやした。次郎も嬉しくないことはなかった。しかし、はしゃぐ気にはなれなかった。彼は、お延と何度も視線をぶっつけあっては、顔を伏せた。そして、お芳がほとんど自分の方に注意を向けていないのを、不思議にも思い、気安くも感じた。</p>
261	下村湖人「次郎物語 第二部」	1965(昭和40)年7月10日	小説(三人称)	いいや、素直な心があればわかるんじゃない。恭一君のような素直な心で、少し絵になれてさえ来ると、わしの話など聞かなくても、おのずとわかるようになるものじゃ。	②	運平老→恭一 下上 男→男	④	B	<p>「そうれ、どうじゃ。」と、運平老は得意そうに、 「恭一君は素直じゃから、話せばわかるんじゃない。」 「話せばわかるんで、話さなかったらわかりますまい。」 「いいや、素直な心があればわかるんじゃない。恭一君のような素直な心で、少し絵になれてさえ来ると、わしの話など聞かなくても、おのずとわかるようになるものじゃ。そこはお前のようなあまのじゃくとはわけがちがう。」 「今度は、あまのじゃくか。いよいよ僕の敗北らしいな。」 徹太郎はにやにや笑いながら、次郎を見て、 「どうだい、次郎君は。君もお祖父さんの話でわかった方なのかい。」 次郎には返事が出来なかった。彼は最初のうちは、徹太郎が運平老を冷やかしているのがばかに面白かった。むろん、彼自身も、蘭が断崖の高いところに生えているというふうには、少しも感じていなかったのである。しかし、運平老が恭一をほめ出してから、彼の気持は急に変った。そして自分の感じを率直に言うことが、何か自分のねうちを落し、運平老から離れて行く結果になりそうな気がしてならないのだった。</p>
262	下村湖人「次郎物語 第二部」	1965(昭和40)年7月10日	小説(三人称)	大人になった	①	正木一家の人たち→次郎 下上 不問→男	⑤	なし	<p>「大人になった」という言葉が、自然彼の耳にじかに聞えて来ることも、決してまれではなかった。そんな時には、彼は、自分が、いかにもしっかりした人間になった、と言われたような気がして、心の底でいくぶんの誇りを感じた。しかし、同時に、何か淋しい気もした。また、ほめられて喜ぶ自分の心をあざけるような気持にもなると。彼はそうした複雑な気持をかくすために、人々のまえて、つとめて平気を装うのだった。</p>
263	下村湖人「次郎物語 第三部」	1965(昭和40)年7月30日	小説(三人称)	<p>先生が御在任中、ただの一時間も授業を休まれないで、諸君の教育に当って下すったことは感謝にたえない。これは、先生の御健康のためものであるが、また私事をもって公事をおろそかにされない先生の御精神が然らしめたものだと思う。私は、それを先生が本校に遺された最大の教訓として、諸君と共に有りがたくおうけしたいと思う。</p>	②	校長→宝鏡先生 下上 男→男	⑤	なし	<p>校長の言葉は、ほんの二三分で終った。そうした場合、事実とちがった月並の讃辞をのべたてるようなことは、これまで校長の決してやらないことだったが、宝鏡先生についても、校長は、ただ次のようなことを述べたきりだった。「先生が御在任中、ただの一時間も授業を休まれないで、諸君の教育に当って下すったことは感謝にたえない。これは、先生の御健康のためものであるが、また私事をもって公事をおろそかにされない先生の御精神が然らしめたものだと思う。私は、それを先生が本校に遺された最大の教訓として、諸君と共に有りがたくおうけしたいと思う。」次郎は、宝鏡先生がそれだけでも校長にほめてもらったことが、何かうれしかった。しかし、とりわけ彼の心にしみたのは、校長がそのあとにのべた言葉だった。「諸君は、今後、いつ先生と再会の期があるかわからないが、一たび結ばれた師弟の縁は永久に消えるものではない。それは親子の縁が永久であるのと同様である。諸君が将来、社会的にどんな高い地位につつと、或はその反対に、どんな逆境に沈もうと、宝鏡先生はやはり諸君の先生として、諸君を見て下さるだろう。私は、諸君が将来どこかで先生の膝下に参じ、過去の思い出を語りあい、更に何かとお教を乞う機会があることを確信する。」次郎は、変に悲しいような気持になって、首を垂れた。</p>

264	下村湖人「次郎物語 第三部」	1965(昭和40)年7月30日	小説(三人称)	授業を一時間も休まなかった	③	校長→宝鏡先生 上下 男→男	⑤	なし	やがて宝鏡先生が校長に代って壇に立ったが、その顔はいくぶん蒼ざめて硬ばっていた。先生は、先ず手巾で顔の汗をふき、どこを見てもなく、その大きな眼をきよきよろさせた。それから、だしぬけにどのような声で挨拶をはじめたが、それには順序も何もなかった。ただ、不思議に言葉だけは滔々とつづき、しかも「授業を一時間も休まなかった」とか、「私事をもって公事をおろそかにしなかった」とかというような、校長のほめ言葉を何度も自分でくりかえしては、やたらに謙遜したり、感激したりした。
265	下村湖人「次郎物語 第三部」	1965(昭和40)年7月30日	小説(三人称)	私事をもって公事をおろそかにしなかった	③	校長→宝鏡先生 上下 男→男	⑤	なし	やがて宝鏡先生が校長に代って壇に立ったが、その顔はいくぶん蒼ざめて硬ばっていた。先生は、先ず手巾で顔の汗をふき、どこを見てもなく、その大きな眼をきよきよろさせた。それから、だしぬけにどのような声で挨拶をはじめたが、それには順序も何もなかった。ただ、不思議に言葉だけは滔々とつづき、しかも「授業を一時間も休まなかった」とか、「私事をもって公事をおろそかにしなかった」とかというような、校長のほめ言葉を何度も自分でくりかえしては、やたらに謙遜したり、感激したりした。
266	下村湖人「次郎物語 第三部」	1965(昭和40)年7月30日	小説(三人称)	すなおな子	①	本田や大巻の人たち→彼女 上下 不問→女	④	なし	彼女には、これといって目立った特徴はなかった。「すなおな子」というのが、彼女に対する本田や大巻の人たちの一致したほめ言葉であった。それにはお祖母さんも心から同意していたらしく、俊亮にむかって、おりおり「年頃も恭一にちょうどいいようだね。」などと言ったりした。
267	武田麟太郎「釜ヶ崎」	1967(昭和42)年	小説(三人称)	そやけど、あすこの芋粥はほんまにうまい	①	外套→芋粥 不問 男→もの	①	なし	「そやけど、あすこの芋粥はほんまにうまい」とほめて、そんな店を潰すに忍びないと云ふやうな顔をした。話が終わると、突然、外套は「おほきに、御馳走さん」と云ふなり、眠った低い家々の間を、そこには雨の中に傘をさして淫売婦たちが辻々に立つてゐるのであつたが――駈出したのである。
268	豊島与志雄「交遊断片」	1967(昭和42)年11月10日	随筆(一人称)	大変いい	①	山本有三君→酒 不問 男→もの	なし	なし	私は苦笑した。そこへ、註文の食物が来た。そして彼は、釜揚げ鰻と茶碗蒸と鰻の刺身と、妻の手料理の小鯛の塩蒸とを、みんなうまいと云ってくれたし、酒まで大変いいとほめてくれた。私は心外だった。美食家の彼にそんなものがうまからう筈はない。然し彼はそれをみなうまいうまいとほめ立てて、一切残らず平らげてしまい、私の戯曲の方は、感服出来ないから書き直せというのだ。私は不平の余り、彼の審美眼と彼の味覚とに疑問を懐こうかと思った……がそれは止めた。
269	豊島与志雄「交遊断片」	1967(昭和42)年11月10日	随筆(一人称)	うまいうまい	①	山本有三君→註文の食物 不問 男→もの	なし	なし	私は苦笑した。そこへ、註文の食物が来た。そして彼は、釜揚げ鰻と茶碗蒸と鰻の刺身と、妻の手料理の小鯛の塩蒸とを、みんなうまいと云ってくれたし、酒まで大変いいとほめてくれた。私は心外だった。美食家の彼にそんなものがうまからう筈はない。然し彼はそれをみなうまいうまいとほめ立てて、一切残らず平らげてしまい、私の戯曲の方は、感服出来ないから書き直せというのだ。私は不平の余り、彼の審美眼と彼の味覚とに疑問を懐こうかと思った……がそれは止めた。
270	久生十蘭「顎十郎捕物帳 小鰭の鰐」	1970(昭和45)年3月31日	小説(三人称)	若いのに熱心なことだ	①	不問→役者 不問 不問→男	④	なし	「お前さんがこんど新作の所作事を出すについて、その稽古に、小鰭の鰐売になって町をふれ売りして歩いているそうだが、役者というものはなかなかたいへん。そうまでして鰐売の型を取ってじぶんのものにする。こりやア並みたいいていの苦労じゃあるまい。……じつは、今日さるところでお前さんの噂が出て、若いのに熱心なことだと、その座にいたものがひとり残らず口を揃えて褒めていた。このごろは役者のがらが落ち、女子供の人気をとるのに一生懸命で、肝腎の芸のほうはまるっきりお留守。そういう中でじぶんから鰐売になって町をふれて歩くなんてえのはまことに感に堪えたはなし。
271	久生十蘭「顎十郎捕物帳 捨公方」	1970(昭和45)年3月31日	小説(三人称)	……なるほど、見れば見るほど賢達理才の相。……睡鳳にして眼底に白光あるは遇変不といつて万人に一人というめずらしい眼相。……天庭に清色あって、地府に敦厚の気促がある。これこそは、稀有の異才。……さればこそ、こうして待ちおった甲斐があったというものじゃ	②	老僧→顎十郎 上下 男→男	②	B	老僧は、会心の体でいくども顔いてから、「……なるほど、見れば見るほど賢達理才の相。……睡鳳にして眼底に白光あるは遇変不といつて万人に一人というめずらしい眼相。……天庭に清色あって、地府に敦厚の気促がある。これこそは、稀有の異才。……さればこそ、こうして待ちおった甲斐があったというものじゃ」顎十郎は、すっかり照れて、首筋を撫でながら、「こりやどうも……。せつかくのお褒めですが、それほどのことはない。……生れつき、ほんつくてしてね、いつも失敗ばかりやりおります。……今度もね、甲府金を幸領して江戸へ送るとちゅう、何だか急に嫌気がさし、笹子峠へ金をつけた馬を放りだしたまま、上総まで遊びに行つて来たという次第。……とても、賢達の理才のというだんじゃありません」のっそりと颯んで、
272	久生十蘭「顎十郎捕物帳 初春狸合戦」	1970(昭和45)年3月31日	小説(三人称)	雷さん、なかなか大したお腕前ですな。『貨幣職能論』などをかつぎ出して煙に巻いたところなんぞ、天晴れなお手のうち、見なおしましたよ	②	顎十郎→ど助の土々呂進 対等 男→男	⑤	B	おもてへ出ると、顎十郎は大笑い、「雷さん、なかなか大したお腕前ですな。『貨幣職能論』などをかつぎ出して煙に巻いたところなんぞ、天晴れなお手のうち、見なおしましたよ」どど助の土々呂進は、やあ、と額に手をやって、「褒めてくれては困る。ああいうテをいつも用いるように思われては、いささか赤面いたす」「褒めてくれたものではあります。軍略は武士のたしなみ。こういうのを泥鰌鯨の戦法とでも言うのでしょうか」「はッはッは、まあそんなところでしよう。……これで、腹もくちくなくなったし、身体も煖まった。では、そろそろ戻ることにいたそうかな」

273	久生十蘭「顎十郎捕物帳 初春狸合戦」	1970(昭和45)年3月31日	小説(三人称)	なるほど、うまく化けるもんだ。ざっと見ても、素ッ堅気の若旦那。どうしたって、狸になんぞ見えやしない	②	アコ長→小男 上下 男→男(動物)	②	B	<p>眼のキョロリとした小柄な男は、なにか言い憎そうにもじもじしていたが、やがて思い切ったように、「お連れくださるというんでしたら、打ちあげたところをお話しますが、……実は、わたしは、狸なんです」</p> <p>アコ長も、とど助も驚いて、</p> <p>「えッ、狸！」</p> <p>「これは珍だ。かつぐのではなからうな」</p> <p>「なんの、本当の話です」</p> <p>アコ長は、小男を見あげ見おろしながら、</p> <p>「なるほど、うまく化けるもんだ。ざっと見ても、素ッ堅気の若旦那。どうしたって、狸になんぞ見えやしない」</p> <p>「お褒めくださなくてもようございます、このくらいのことなら雑作ないんです」</p> <p>「器用なものだの。……それで、どんな用件があって、豊島が岡へなぞ行くのだ。狸の寄りあいでもあるというわけなのか」</p> <p>狸は首をふって、</p> <p>「いいえ、寄りあいというわけじゃありません。実は、所変えをしようと思ひまして……」</p> <p>「なるほど、宿変えをするというのだな」</p>
274	夏目漱石「倫敦消息」	1971(昭和46)年4月～ 1972(昭和47)年1月	随筆(一人称)	賢なるかな	①	不問→我輩 不問 不問→男	⑤	なし	我輩も時には禪坊主みたような変哲学者のような悟りました事も云って見るが、やはり大体のところが御存じのごとき俗物だからこんな窮屈な暮らしをして回やその楽をあらためず賢なるかなと褒められる権利は毛頭ないのだよ。そんならなぜもっと愉快な所へ移らないかと言うかも知れないが、そこに大に理由の存するあり焉さ。まず聞きたまえ。なるほど留学生の学資は御話しにならないくらい少ない。
275	与謝野晶子「舞姫」	1971(昭和46)年4月5日	歌集(一人称)	能う化けし狐	③	不明→不明 上下 不明→不明	なし	なし	戸に隠れわと啼く声の能う化けし狐と誉めぬ春の夜の家
276	与謝野晶子「舞姫」	1971(昭和46)年4月5日	歌集(一人称)	少女	③	母→われ 上下 女→女	⑥	なし	炉にむかひ鼓あぶりてもいのふを少女と誉めぬわれいつく母
277	与謝野晶子「舞姫」	1971(昭和46)年4月5日	歌集(一人称)	舞姫のかたち	③	不問→女 不問 不問→女	②	なし	舞姫のかたちと誉めよむかしの絵そへ髪たかく結ひたる人を
278	芥川竜之介「澄江堂雑記」	1971(昭和46)年6月5日	小説(一人称)	一転機を来した	③	批評家→小説 不問 不問	⑥	なし	第一に僕はもの見高い諸君に僕の暮しの奥底をお目にかけるのは不快である。第二にさう云ふ告白を種に必要以上の金と名とを着服するの也不快である。たとへば僕も一茶のやうに交合記録を書いたとする。それを又中央公論か何かの新年号に載せたとする。読者は皆面白がる。批評家は一転機を来したなどと褒める。友だちは、愈裸になつたなどと、——考へただけでも鳥肌になる。
279	海野十三「海野十三敗戦日記」	1971(昭和46)年7月24日	日記(一人称)	鋭敏なり	①	作者→人間 不問 男→不問	③	なし	連日天候わるく、雨の降らぬことなし。敵機もいっこうにやって来ない。電車に乗っても、防空頭巾を持っているのがまず三割程度。人間というものは、鋭敏なりとほめるべきか、それとも面倒くさがりやだとけなすべきか、それとも、油断をするな、と声をかけるべきか。
280	與謝野晶子訳 紫式部「源氏物語 04 夕顔」	1971(昭和46)年8月10日	小説(三人称)	そら聞いてごらん。現世利益だけが目的じゃなかった	③	源氏→優婆塞 対等 男→男	⑥	なし	「そら聞いてごらん。現世利益だけが目的じゃなかった」とほめて、優婆塞が行なふ道をしるべにて来ん世も深き契りたがふなとも言った。玄宗と楊貴妃の七月七日の長生殿の誓いは実現されない空想であつたが、五十六億七千万年後の弥勒菩薩出現の世までも変わらぬ誓いを源氏はしたのである。
281	與謝野晶子訳 紫式部「源氏物語 21 乙女」	1971(昭和46)年8月10日	小説(三人称)	何というかわいいいたずらだらう。おまえなどは同い年でまだまったくの子供じゃないか	②	惟光→姉と弟 上下 男→女・男	⑤	なし	「何というかわいいいたずらだらう。おまえなどは同い年でまだまったくの子供じゃないか」とほめた。妻にもその手紙を見せるのであつた。「こうした貴公子に愛してもらえば、ただの女官のお勤めをさせるより私はそのほうへ上げてしまいたいくらいだ。殿様の御性格を見ると恋愛関係をお作りになつた以上、御自身のほうから相手をお捨てになることは絶対にないようだ。私も明石の入道になるかな」などと惟光は言っていたが、子供たちは皆立って行ってしまった。
282	與謝野晶子訳 紫式部「源氏物語 02 帯木」	1971(昭和46)年8月10日	小説(三人称)	りっぱな態度だ	①	世間→女 不問 不問→女	⑤	なし	自分を愛していた男を捨てて置いて、その際にちょっとした恨めしいことがあっても、男の愛を信じないように家を出たりなどして、無用の心配をかけて、そうして男をためそうとしているうちに取り返しのならぬはめに至ります。いやなことです。りっぱな態度だなどとほめられてみると、図に乗ってどうかすると尼なんかにもなります。その時はきたない未練は持たずに、すっかり恋愛を清算した気でいますが、まあ悲しい、こんなにまであきらめておしまいになってなどと、知った人が訪問して言い、真底から憎くはなっていない男が、それを聞いて泣いたという話などが聞こえてくると、召使や古い女房などが、殿様はあんなにあなたを思っていらいっしやいますのに、若いおからだを尼になどしておしまいになって惜しい。

283	與謝野晶子訳 紫式部「源氏物語 05 若紫」	1971(昭和46)年8月10日	小説(三人称)	宮様よりも御様子がごりっぱね	①	僧都→姫君 上下 男→女	②	なし	兵部卿の宮の姫君は子供心に美しい人であると思って、「宮様よりも御様子がごりっぱね」などとほめていた。「ではあの方のお子様におなりなさいまし」と女房が言うとうなずいて、そうなってもよいと思う顔をしていた。
284	與謝野晶子訳 紫式部「源氏物語 15 蓬生」	1971(昭和46)年8月10日	小説(三人称)	脱俗した	①	不問→兄の禪師 不問 不問→男	⑥	なし	兄の禪師だけは稀に山から京へ出た時に訪ねて来るが、その人も昔風な人で、同じ僧といっても生活する能力が全然ない、脱俗したとほめて言えば言えるような男であったから、庭の雑草を払わせればきれいになるものとも気がつかない。
285	與謝野晶子訳 紫式部「源氏物語 霽標」	1971(昭和46)年8月10日	小説(三人称)	なし	①	世間→東宮 下上 不問→女	②	なし	翌年の二月に東宮の御元服があった。十二でおありになるのであるが、御年齢のわりには御大人らしくて、おきれいで、ただ源氏の大納言の顔が二つできたようにお見えになった。まぶしいほどの美を備えておいでになるのを、世間ではおほめしているが、母宮はそれを人知れず苦勞にしておいでになった。帝も東宮のごりっぱでおありになることに御満足をあそばして御即位後のことをなつかしい御様子でお教えあそばした。
286	與謝野晶子訳 紫式部「源氏物語 霽標」	1971(昭和46)年8月10日	小説(三人称)	ほんとうの聖人だ	①	人々→隠者 不問 不問→男	⑤	なし	「支那でも政界の混沌こんとんとしている時代は退ぞいて隠者になっている人も治世の君がお決まりになれば、白髪も恥じずお仕えに出て来るような人をほんとうの聖人だと言ってほめています。御病気で御辞退になった位を次の天子の御代に改めて頂戴ちようだいすることはさしつかえがありませんよ」と源氏も、公人として私人として忠告した。大臣も断わり切れずに太政大臣になった。年は六十三であった。事實は先朝に権力をふるった人たちに飽き足りないところがあって引きこもっていたのであるから、この人に栄えの春がまわってきたわけである。
287	中里介山「法然行伝」	1971(昭和46)年8月30日	ノンフィクション(三人称)	何事も自分の心に染みっていると才覚が出て来るものである。阿波介は性質は極めて愚鈍の人間だが往生の一大事が心にしみているからこそ斯様な工夫も考えだすのだ	②	法然→阿波介 上下 男→男	④	なし	「暇なく上下すればその緒が疲れ易い。一連では念仏を申し、一連では数をとって積る処の数を弟子にとれば緒が休まって疲れません」と答えたので法然がそれを聞いて、「何事も自分の心に染みていると才覚が出て来るものである。阿波介は性質は極めて愚鈍の人間だが往生の一大事が心にしみているからこそ斯様な工夫も考えだすのだ」とほめたということである。或修行者が浄土教の教義は分っていたが、まだ信心が起らないので嘆いていた。
288	岡本綺堂「三浦老人昔話」	1971(昭和46)年10月20日	小説(三人称)	おとなしい	①	市川さん→どっちにも係り 合わなかった者 上下 男→男	④	なし	どっちにも係り合わなかった者は、おとなしいと褒められて帰る。壁にかけてあるたんぼ槍は単に嚇しの為だと思っていたら、今日はほんとうに突かれたので、子供たちも内々驚いていました。
289	岡本綺堂「三浦老人昔話」	1971(昭和46)年10月20日	小説(三人称)	可愛い役者だ	①	奥様→照之助 上下 女→男	②	なし	余り目立った役も付きませんで、いつもお腰元が茶屋娘ぐらいが関の山でしたが、この盆芝居の時にどうしてか、おなじお腰元でも少し性根のある役が付きまして、その美しい舞台顔がわたくしどもの眼に初めてはっきりと映りました。奥様も可愛い役者だと褒めておいでになりました。今になって考えますと、この御下屋敷へ御引移りになりましたのも、コロリの為ばかりではなかったのかも知れません。全くその照之助と申しますのは、少し下彫れの、眼つきの美しい、まるでほんとうの女かと思われるような可愛い男でございました。
290	與謝野晶子訳「源氏物語 若菜(上) 紫式部」	1971(昭和46)年11月30日	小説(三人称)	そのとおりだよ。あの人の美は普通の美の標準にはあてはまらないものだった。近ごろはまたいっそうりっぱになられて光彩そのもののような気がする。正しくしていられれば端麗であるし、打ち解けて冗談でも言われる時には愛嬌があふれて、二人とないつかしさが出てくる。何事にもどうした前生の大きな報いを得ておられる人かとすぐれた点から想像させられる人だ。宮廷で育って、帝王の愛を一身に集めるような幸福さがあって、まったくだよ。故院は御自身の命にも代えたいほど御大切にあそばしたものだが、それで慢心せず謙遜で、二十歳までには納言にもならなかった。二十一になって参議で大将を兼ねたかと思う。それに比べると中納言の官等の上がり方は早い。子になり孫になりして威福の盛んになる家らしい。実際に中納言は秀才であり、確かな教養を受けている点で昔の光源氏にあまり劣るまい。父君の昔に越えて幸福な道を踏んでもそれが不当とも思えない偉さが彼にある	②	院→御甥 上下 男→男	③	なし	「そのとおりだよ。あの人の美は普通の美の標準にはあてはまらないものだった。近ごろはまたいっそうりっぱになられて光彩そのもののような気がする。正しくしていられれば端麗であるし、打ち解けて冗談でも言われる時には愛嬌があふれて、二人とないつかしさが出てくる。何事にもどうした前生の大きな報いを得ておられる人かとすぐれた点から想像させられる人だ。宮廷で育って、帝王の愛を一身に集めるような幸福さがあって、まったくだよ。故院は御自身の命にも代えたいほど御大切にあそばしたものだが、それで慢心せず謙遜で、二十歳までには納言にもならなかった。二十一になって参議で大将を兼ねたかと思う。それに比べると中納言の官等の上がり方は早い。子になり孫になりして威福の盛んになる家らしい。実際に中納言は秀才であり、確かな教養を受けている点で昔の光源氏にあまり劣るまい。父君の昔に越えて幸福な道を踏んでもそれが不当とも思えない偉さが彼にある」と御甥をほめておいでになった。可憐な姫宮の美しく無邪気な御様子を御覧になっては、「十分愛してくれて、足りない所は陸で教育してくれるような、そして安心して託せるような人を婿に選びたい気がする」などと仰せられた。

291	正岡容「初看板」	1971(昭和46)年12月刊	小説(一人称)	なし	③	仲間→私 対等 不問→男	なし	なし	どういうふうになっちゃなかったか、それはワザともうしばらく申し上げないでおくとして、なにしろ私は仲間からほめられるほめられる、やたらこたらとほめられるのですが、さてほめられるばかりで一向にバツとしません。お客様にてんで受けず、その結果がどこの席亭でもちっともつかっちゃくれないうという始末なんです。
292	與謝野晶子訳 紫式部「源氏物語 56 夢の浮橋」	1972(昭和47)年2月25日	小説(三人称)	愛らしい	①	僧都→ひたちの子 上下 男→女	④	なし	僧都も道理であるとなずき、尊い心がけであることをほめなどするうちに日も暮れたため、中宿りに小野へ寄ることはふさわしい道順であると薫は思ったが、突然に行くのはやはりよろしくなろうと考え、帰ることにきめた時、この常陸の子を僧都は愛らしいとほめた。「この少年に持たせてやります手紙に彼女の昔の知人のことをほめかしておいてください」と薫が言ったので、僧都はさっそく手紙を書いた。「ときどきは山へも登って来て遊んで行きなさい。私にあなたは縁がないのでもないからね」などとも言った。少年は縁のあるという理由がわからないのであるが、手紙を受け取ってすぐに供の中へまじった。
293	與謝野晶子訳 「源氏物語 竹河 紫式部」	1972(昭和47)年2月25日	小説(三人称)	こちらのお姫様にはこの方を並べて みないでは	③	女房たち→源侍従の薫 下上 女→男	②	なし	夕方になって源侍従の薫がこの家へ来た。屋間玉鬘夫人の前へ現われたこの人よりもやや年長の公達も、それぞれの特色が備わっていて悪いところもなく皆きれいであったが、あとに来たこの人にはそれらを越えた美があって、だれの目も引きつけられるのであった。美しい物好きな若い女房たちなどは、「やっぱり違っておいでになる」などと言った。「こちらのお姫様にはこの方を並べてみないでは」こんなことを聞きにくいまでに言ってほめる。そう騒がれるのにたるほどの優雅な举止を源侍従は見せていて、身から放つ香も清かった。貴族の姫君といわれるような人でも頭のよい人はこの人をすぐれた人と言うのはもっともなことだとくらい認めるかと思われた。尚侍は念誦堂にいたのであったが、「こちらへ」と言わせるので、東の階から上がって、妻戸の口の御簾の前へ薫はすわった。
294	太宰治「新釈諸国噺」	1972(昭和47)年3月21日	小説(一人称)	氣前がいい、正直だ、たのしい	①	遊び仲間たち→私 対等 男→男	④	なし	九郎助に限らず、以前あんなに私を氣前がいいの、正直だの、たのしいだのと褒めていた遊び仲間たちも、どうした事でしょう、私が出家したら、ぱったり何もお便りを下さらず、もう私が何もあの人たちのお役に立たない身の上になったから、それでくると背を向けたというわけなのでしょうか、それにしても、あまり露骨でむごいじゃありませんか。こんなに皆から爪はじきされるとは心外です。
295	太宰治「正義と微笑」	1973(昭和48)年10月30日	小説(一人称)	お利巧者だ	①	お母さんや、兄さん、姉さんたち→僕 上下 男・女→男	③	なし	よく考えてみると、いやしくも男子たるものが、たかが一家内のいざこざの為に、その全力を尽して奔走し、何か大事業でもやっているような氣持で、いささか得意になっているというのは、恥ずかしい事である。家庭の平和も大切ではあるが、理想に邁進している男子にとっては、もっともっと外部に対しても強くならなければならぬ。きょう、学校へ行って、つくづくその事を痛感した。家の中で、お母さんや、兄さん、姉さんたちに甘やかされ、お利巧者だとほめられて、たいへん偉いような氣がして、一歩そとへ出ると、たちまちひどい目に逢ってしまう。みじめなものだ。有頂天の直後に、かならずどん底の失意に襲われるのは、これは、どうやら僕の宿命らしい。世の中というものは、どうしてこんなにケチくさく、お互いに不必要な敵意に燃えているのか、いやになってしまう。
296	岡本かの子「かの女の朝」	1974(昭和49)年12月10日	小説(三人称)	たん	③	戸崎夫人→かの女 上下 女→女	なし	B	——あなたの噂も出ましたよ。あなたをたんと褒めて居たが、おしまいが好いや、——だけどあの方あんなに息子ばかり思ってたのが氣が知れないって。かの女はぶっと吹き出してしまった。かの女は子を持たない戸崎夫人が、猫、犬、小鳥、豆猿と、おおよそ小面倒な飼いを体を周りにまつわり付けて暮らして居る姿を思い出したからである。
297	太宰治「惜別」	1975(昭和50)年6月～ 1976(昭和51)年6月	手記(一人称)	八百八島つらなれる風景画にかける 西湖の図に基だ似たり遙かに眼をめぐ らせば東洋限りもなく誠に天下第一 の絶景	②	橘氏→景色 不問 男→もの	なし	なし	これくらいの景色を、あの橘氏が「八百八島つらなれる風景画にかける西湖の図に基だ似たり遙かに眼をめぐらせば東洋限りもなく誠に天下第一の絶景」などと褒めるわけはない、橘氏はずっと高いところから眺め渡したのに違いない、登ろう、とまた氣を取りなおして、山の奥深くわけいるのであるが、そのうちに、どうやら道を踏み違えたらしく、鬱蒼たる木立の中に迷い込み、眺望どころでなくなつて、あわてて逡二無二木立を通り抜け、見ると、私は山の裏側にでてしまつたらしく、眼下の風景は、へんてつも無い田畑である。東北線を汽車が走って行くのが見える。私は、山を登りすぎたのである。まことにつまらない思いで、芝生の上に腰をおろし、空腹を感じて來たので、宿で作ってもらつたおにぎりを食べ、ぐったりとなつて、そのまま寝ころび、うとうと眠つた。
298	太宰治「おさん」	1975(昭和50)年6月～1976(昭和51)年6月	小説(一人称)	ふとつていまちねえ、べっぴんちゃん でちねえ。	②	夫→一ばん下の女の子 上下 男→女	②	なし	二夜くらいつづけて外泊すると、さすがに夫も、一夜は自分のうちに寝ます。夕食がすんでから夫は、子供たちと縁側で遊び、子供たちにさえ卑屈なおあいそみたいな事を言い、こし生れた一ばん下の女の子をへたな手つきで抱き上げて、「ふとつていまちねえ、べっぴんちゃんでちねえ。」とほめて、私がつい何の氣なしに、「可愛いでしょう？ 子供を見ると、ながいきたいとお思いにならない？」
299	太宰治「ろまん燈籠」	1975(昭和50)年6月～1976(昭和51)年6月	小説(三人称)	稀に見る頑強の肺臓である	①	医者→長女 上下 男→女	⑥	なし	けれどもいちど、同じ課に勤務している若い官吏に夢中になり、そうして、やはり捨てられた時には、その時だけは、流石に、しんからげっそりして、間の悪さもあり、肺が悪くなったと嘘をついて、一週間も寝て、それから頭に繻帯を巻いて、やたらに咳をしながら、お医者に見せに行ったら、レントゲンで精細にしらべられ、稀に見る頑強の肺臓であるといつて医者にはめられた。文学鑑賞は、本格的であつた。実によく読む。洋の東西を問わない。ちから余つて自分でも何やら、こっそり書いている。それは本箱の右の引き出しに隠して在る。
300	太宰治「風の便り」	1975(昭和50)年6月から1976(昭和51)年6月	小説(一人称)	銃後の女性性は皆、君のようにしっかり してなければいけないね。	②	私→女中 上下 男→女	⑤	B	女中は、「何しるでえ！」と大声で叫んで立ち上り、けもののような醜いまずい表情をして私を睨み、「あてにならねえ。非常時だに。」と言いました。私は肝のつぶれるほどに驚倒し、それから、不愉快になりました。「自惚れちゃいけない。誰が君なんかに本気で恋をするものか。」と私も、がらりと態度を改めて言つてやりました。「ためてみたのだ。むかし坂田藤十郎という偉い役者がいてね、」と説明しかけたら、また大きな声で、「いい加減言うじゃあ。寄るな！ 寄るな！」とわめいて両手を胸に当て、ひとりで身悶えするのですが、なんとも、まずい形でした。私は酔いも醒め、すっかりまじめな氣持になつてしまつて、「誰も君に寄りやしないじゃないか。坐り給え。僕が悪かつたよ。銃後の女性性は皆、君のようにしっかりしていなければいけないね。」などと言つてほめてやりましたが、女中は、いかに私も軽蔑し果てたというように、フンと言つて、襟を掻き合せ、澄まして部屋から出て行きました。私は残つたお酒をぐいぐい呑み、ひとりでごはんをよそつて食べましたが、実にばからしい氣持でした。

301	太宰治「花燭」	1975(昭和50)年6月～1976(昭和51)年6月刊	小説(三人称)	よく思い切って訪ねて来て呉れましたね、	③	お茶を注いでやる男→ 通りがかりの者 不問 不問→男	⑤	なし	そんな場合、さあ、さあ、と気軽に座蒲団をすすめる男は、男爵でなかった。よく思い切って訪ねて来て呉れましたね、とほめながらお茶を注いでやる別の男は、これも男爵でなかった。君の眼は、嘘つきの眼ですね、と突然言ってその新来の客を驚愕させる瘦せた男は、これも男爵でなかった。
302	国枝史郎「神州瀛纒城」	1976(昭和51)年3月12日	小説(三人称)	庄八郎は勇士であつたぞ。また思料にも富んでいた。思案に余った折々は、俺はいつも思い出すぞよ	②	信玄→庄八郎 上下 男→男	④	なし	「庄三郎」と、信玄は、深味のある声でふと呼んだ。 「はっ」と云って手を仕える。 「そなたの父を思い出すぞよ」太い眉を動かしたが、「庄八郎は勇士であつたぞ。また思料にも富んでいた。思案に余った折々は、俺はいつも思い出すぞよ」 「有難いお言葉に存じます」 「そなたも父に肖らずばなるまい」 「努めてはおりますなれど……」 「不肖の子と云われるなよ」 「恐れ入ってございます」 「浮世の事、一切力だ！ 力を養わずばなるまいぞ」 「お言葉有難く存じます」 「よいよい」と云って信玄は、素絹の袖を左右に張ると、トンと軍扇を膝に突いた。再び軍議に入ったのである。衆人の前で父の事をこうあからさまに褒められて、庄三郎は嬉しくもありまた晴れがましくも思われたかポツと顔を上気させ、恍惚とした眼使いで地図の面を無心に見た。と、その地図の真中へ、ポタリ、ポタリ、ポタリ、ポタリと、上の方から血が滴って来た。驚いて天井を見上げると、桧の板を深紅に染めて生血が四角に染み出している。
303	織田作之助「青春の逆説」	1976(昭和51)年4月25日	小説(三人称)	そら早い。商売人なみや	①	社長→豹一 上下 男→男	③	A	「お昼飯にしとおくれやんす」奥座敷から妻君の声がしたので、豹一はほっとして表へ出た。勝山通八丁目まで行って、飯屋で労働者にまじって十二銭の昼食をたべたあと、喫茶店の長椅子の上で死んだようになって横たわっていた。一時になると、帰って再び帯封を書き出した。西日が射し込んで来て、じつりと額に汗がにじんだ。右の手がまるで自分のものとも思えぬ程痛んだ。中指に桃色のペンだこが出来たのを、情けない気持ちで見ながら、年中帯封を書かされるのなら、やり切れぬなと思った。 (働くとはこんなに辛いものか)とすっかり驚いた気持ちで、しきりに無味乾燥なその仕事を続けていると、三時が来て、社長の妻君がお茶をいれてくれた。食るように囁いていると、社長が禪一つの裸で二階から降りて来て、「こない日が射し込んで来よったら、毛利君かなわんやろ。もう直き簾をはりこむぜ。——どないや、帯封何枚ぐらい書けた？」 「六百枚位でしょう」 「そら早い。商売人なみや」 褒められたと思ったので、「帯封書きはえらいですね」と、微笑しながらお愛想にそう言っていると、「明日からほかの仕事してもらうぜ。月給はろて帯封書いて貰てたらうちの損や。商売人に頼んだら千枚なんぼで安う書いてくれよなやから」 豹一はむっとしたが、同時に助かったという気持ちもした。その日一日中带封を書いて、五時過ぎ、台所で手を洗って、「そんなら、帰らせていただきます」くたくたになって帰った。
304	中里介山「大菩薩峠 24 流転の巻」	1976(昭和51)年6月20日	小説(三人称)	お雪ちゃんには似合っている	①	人→お雪ちゃん 不問 不問→女	②	なし	ここまで筆を運んで、お雪はほつれかかる髪の毛を撫でました。お雪はこのごろ、髪を洗い髪にして後ろへ下げて軽く結んでいる。自分もこの洗い髪がさっぱりしていると思うし、人もまた、お雪ちゃんには似合っていると褒めめする。山中、外出の機会もなし、慣れてしまえば誰も、それを新しい女だといって誹るものもありません。
305	中里介山「大菩薩峠 恐山の巻」	1976(昭和51)年6月20日	小説(三人称)	いい人相だ	①	お婆さん→郁太郎 上下 女→男	②	なし	前に感心したのは、その人相がいいということでありました。しかし、今の返答ぶりで見ると与八は、この饕餮たるお婆さんから、自分の人相がいいといってお感心されたことをお感じがなかったように見える。何となれば、改めて年齢を聞かれた時に、数え年の四つだと答えました。してみると、いい人相だと賞められたのは自分でなく、自分の抱えているこの郁太郎のこどだとばかり考えていたのに相違ない。与八としては、今までのすいぶん、自分の体格がいいということとは、人からほめられるに慣れている。かっぶくががいいということだけは、子供の時分から賞められているから、これは今では人も称し、自らも称すことになっている。それから次に、力がある。力量が非凡であるということも、それを発揮した時に人から認められもし、驚歎されもすることに慣れきっているけれども、特にこうして「人相がいい」ということを頭から感歎されたことは、あまり例がないのです。
306	中里介山「大菩薩峠 恐山の巻」	1976(昭和51)年6月20日	小説(三人称)	得も言われない	①	翁→夕暮の風景 不問 男→風景	なし	なし	「米友さんや、わたくしは一昨晩——胆吹山へ参詣をいたしましたのです、その時に、あの一本松のところで、山住みの翁に逢いました。たいへん、あそこは景色のよいところだそうでございますね、翁は隙があるとあの一本松のところへ来ては、湖の面をながめることを何よりの楽しみといたしまして、ことに夕暮の風景などは、得も言われないと賞めておりましたが、その時にわたくしが、わたくしの眼ではその美しい風景も見ることができませんが、そんな美しい琵琶の湖にも、波風の立つことがございますかと聞きますと、それはあるとも、ここは胆吹の山だが、湖をさし挟んであらに比良ヶ岳というのが聳えている
307	国枝史郎「一枚絵の女」	1976(昭和51)年11月12日	小説(三人称)	襦袢の襟に鹿の子をかけ、着物の襟へ黒縹子をかけ、斜めに揃えた膝の上へ、狎を一匹のつけたところを描いた、栄之の一枚絵もよかったが、今度のはいっそサラリとしていい	②	来る客来る客→おきた 不問 不問→女	②	なし	今日も浅草隨身門内の、水茶屋難波屋の店に立って、おきたは客あしらいに余念なかった。 白飛白を着たおきたの姿が、豊国によって描かれて、それが市中へ売り出されたのは、ほんの最近のことであり、飛ぶように売れて大評判であった。 来る客来る客がぞぞと褒めた。 「左の手に団扇を掲げ、右手に茶盆を捧げた、歌麿の描いた絵もよかったが、今度のはまた一段とねえ」 などと言うものがあるかと思うと、 「襦袢の襟に鹿の子をかけ、着物の襟へ黒縹子をかけ、斜めに揃えた膝の上へ、狎を一匹のつけたところを描いた、栄之の一枚絵もよかったが、今度のはいっそサラリとしていい」 こう云って褒めるものもあった。 ——容色極メテ美麗ニシテ愛嬌アフルルバカリナリ。茶代ノ少キ客トイエドモ軽ク取り扱ワズ、況ンヤ多ク惠ム者ニオイテヲヤ。 と書かれたおきたであつた。どの客にも愛想よく接した。今日はわけても褒められるので、心うれしく立ち振る舞った。と店先を人々と混って、網代の笠を冠った新発意が、その笠をかたむけおきたを見ながら、足を早めて通って行った。

308	小川未明「駄馬と百姓」	1977(昭和52)年1月10日	童話(三人称)	よく働く、強い馬だ	①	人々→馬 不問 不問→動物	なし	なし	馬は、なんといわれても、下を向いて黙っていました。ある日のこと、甲は、その馬にたくさんの荷物を積んだ重い車を引かして町へゆきました。途中その馬を見た人々は、みんな驚いて、口々に、馬をかわいそうだといい、また、よく働く、強い馬だといってほめたのであります。甲の百姓は、荷を下ろしてから、馬を引いて自分の村に帰ってきました。その途中、乙の百姓に出あったのです。
309	小川未明「獵師と薬屋の話」	1977(昭和52)年8月10日	童話(三人称)	感心な人だ	①	村むらの人たち→薬屋さん 不問 不問→男	⑤	なし	だまってきていた薬屋さんが、いくたびもうなずいて、「いや、やさしいお心がけです。それでこそ、ほんとうの人間です。私は、こうして真正のくまのいをさがしていますのも、人の命を助けたいためからで、ただ金もうけのためばかりではありません。きけばお困りになって、商売道具をお売りなさるとか、とんだことです。私は、ここに金を置いてゆきますから、このつききますまでに、そんなかわいそうなくまでない、もっと恐ろしい大ぐまをしとめて、きもをとっておいてください。」といって、金を渡してゆきました。あとで、この話きいた村の人たちは、獵師をほめれば、また薬屋さんを感じな人だといって、ほめたのであります。
310	小川未明「おじいさんが捨てたら」	1977(昭和52)年8月10日	童話(三人称)	たいそうみごとだ	①	お医者さま→おじいさん 不問 男→男(もの)	①	なし	そのとき、診てもらったお医者さまが、またしんせつな人であって、たとえ、夜中でも、熱が高くなって、迎えにゆけば、いやな顔をせずに、すぐにきてくださったから、家じゅうのものが、みんなありがたく思いました。それで、正坊の病氣もだんだんとよくなりました。ある日、このお医者さまが、この南天を見て、たいそうみごとだといってほめられたので、おじいさんは、だいじにしていたのだけれど、お礼の志にお医者さまにあげたのであります。そして、そのあとで、「あの人なら、だいじょうぶ枯らすことはない。」といって、おじいさんは、安心していました。
311	小川未明「僕は兄さんだ」	1977(昭和52)年8月10日	童話(三人称)	なんて、義ちゃんは、いいお兄さんでしょう。	①	お母さん→義ちゃん 上下 女→男	⑤	A	それから、町へ出て、電車を見ました。「チンチン、ゴーゴー。」といって、赤ちゃんは、いつまでも帰ろうとはしませんでした。義ちゃんは、早くお家へ帰ってご本が見たくなりました。やがて、帰ってから、赤ちゃんが、義ちゃんの大事なおもちゃや、ご本をいじっても、いままでのように怒らずに、笑って見ていましたから、「なんて、義ちゃんは、いいお兄さんでしょう。」と、お母さんは、おほめになりました。「そうだ、僕は兄さんだもの。」と、義ちゃんは、はじめて強く心に思いました。
312	小川未明「片目のごあいさつ」	1977(昭和52)年8月10日	童話(三人称)	ほんとにかわいい、おもしろい、いい子なんだよ。	①	お父さん→小田くん 上下 男→男	④	なし	「新ちゃんは、そんな子とばかりあそんでいるのでしょうか。」と、お母さんがおっしゃいました。「話をきくとおもしろい子だね。きつと、その子も、きかんぼうだろう。」と、お父さんがいわれました。「お父さんは、小田くん見た？」「お父さんは見なくたって知っているさ。」「ほんとにかわいい、おもしろい、いい子なんだよ。」そういつて、新ちゃんは、自分のすきなお友だちがほめられたので、大よろこびです。「自分が小さいくせに、かわいらしいなんて。」と、兄さんがわらいました。「こんど、小田くんのうち、田舎へいくかもしれないよ。」「どうして？」「こないだ、小田くん、そんなことをいっていた。そうしたら、ぼく、さみしくて困るなあ。」
313	小川未明「つめたい メロン」	1978(昭和53)年2月10日	童話(三人称)	まあ、かんしんなこと。	①	おばさん→二郎さん 上下 女→男	⑤	なし	「メロンを きりましたから、いらっしやい。」と、おかあさんが およびに になりました。ふたりは とんで きました。「このつめたいのを、にいさんに やりたいなあ。」と、二郎さんが いうと、「まあ、かんしんなこと。」と、おばさんが おほめに になりました。おかあさんは、メロンを バスケットに いれて くださいました。「わたしも いっしょに。」と、きみ子さんは、ニりん車の うしろに のりました。
314	幸田露伴「連環記」	1978(昭和53)年7月18日	小説(三人称)	唐の韓愈、柳宗元の後三百年にして始めて此作あり、	③	王禹偁→丁謂の文 上下 男→(男)	①	なし	丁謂は蘇州長州の人、少時孫何と同じく文を袖にして王禹偁に謁したら、王は其文を見て大に驚き、唐の韓愈、柳宗元の後三百年にして始めて此作あり、と褒めたという。当時孫・丁と称されたということだが、孫、丁の名は少し後に出た歐陽修・王安石・三蘇の名に掩われて、今は知る者も少い。
315	久坂葉子「灰色の記憶」	1978(昭和53)年12月31日	小説(一人称)	(私の似顔が)上手だ	①	母→私 上下 女→女	③	なし	そう云って、皆に出むかえを禁じた。父が帰って来て、それに立腹し、母は、私の似顔が上手だとほめてくれた。しかし、翌日からは、元通り、量に手をついて御挨拶し、父の帽子を帽子掛に飛び上ってかけた。
316	久坂葉子「華々しき瞬間」	1978(昭和53)年12月31日	小説(三人称)	あなたは素晴らしい人だ	①	蓬萊和子→南原杉子 対等 女→女	④	なし	蓬萊和子は、南原杉子を案外深みのない女だと内心軽蔑した。だが、やはり、あなたは素晴らしい人だとほめそやす。あなたに対しては真実なのよと云う。仁科六郎のことが度々話題にのぼった。
317	宮本百合子「獄中への手紙 05 一九三八年(昭和十三年)」	1979(昭和54)年2月20日	日記(一人称)	元氣そうになった	①	皆→私 不問 不問→女	②	なし	この頃の暮しを利用して体を丈夫にしようとしてお客でもないときは必ず十二時前に寝るようにして居ります。朝もしたがって早く徹夜は今こそ全廃です。熱川からかえってから皆元氣そうになったとほめてくれます。大家さんが垣根と門の腐ったのを修繕させている、大工の音。あした、ではお目にかかって、又いろいろ。よく風邪をおひきになりませんでしたね。

318	実吉捷郎訳「神の剣 GLADIUS DEI トオマス・マン Thomas Mann」	1979(昭和54)年3月16日	小説(三人称)	ミュンヘン芸術でございまして。誠にどうも愛らしくできております。充分人をひきつけますな。優雅そのものでございますよ、へい。まったくすこぶるきれいでかわいくて、感嘆に値するものでございます。	②	ブリュウテンツワイク氏→少女の裸像 上下 男→もの	なし	なし	ブリュウテンツワイク氏は短かい鶯色の鬚髯しゅぜんと、同じ色の鋭く光る眼とを持った男で、もみ手をしながら、イギリス人のまわりをぐるぐる廻っては、思いつく限りの語彙で、その少女をほめ上げている。「百五十マルクで、へい。」と彼は英語でいった。「ミュンヘン芸術でございまして。誠にどうも愛らしくできております。充分人をひきつけますな。優雅そのものでございますよ、へい。まったくすこぶるきれいでかわいくて、感嘆に値するものでございます。」といつてから、まだなにか思いついてこういった。「この上なく魅力に富んだ蠱惑的な作でございますな。」それから今度は、また初めからやり直すのであった。
319	実吉捷郎訳「神の剣 GLADIUS DEI トオマス・マン Thomas Mann」	1979(昭和54)年3月16日	小説(三人称)	この上なく魅力に富んだ蠱惑的な作でございますな。	①	ブリュウテンツワイク氏→少女の裸像 上下 男→もの	なし	なし	ブリュウテンツワイク氏は短かい鶯色の鬚髯しゅぜんと、同じ色の鋭く光る眼とを持った男で、もみ手をしながら、イギリス人のまわりをぐるぐる廻っては、思いつく限りの語彙で、その少女をほめ上げている。「百五十マルクで、へい。」と彼は英語でいった。「ミュンヘン芸術でございまして。誠にどうも愛らしくできております。充分人をひきつけますな。優雅そのものでございますよ、へい。まったくすこぶるきれいでかわいくて、感嘆に値するものでございます。」といつてから、まだなにか思いついてこういった。「この上なく魅力に富んだ蠱惑的な作でございますな。」それから今度は、また初めからやり直すのであった。
320	宮沢賢治「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」	1979(昭和54)年7月15日	童話(三人称)	ああ実にペンネンネンネンネン・ネネムさまは名判官だ、ダニーさまの再来だ、いやダニーさまの発達だ	①	みんなーペンネンネンネン・ネネムさま 下上 不問→男	③	なし	ばけもの世界裁判長、ペンネンネンネンネン・ネネムの評判は、今はもう非常なものになりました。この世界が、はじめ一疋のみじんこから、だんだん枝がついたり、足が出来たりして発達しはじめて以来、こんな名判官は実にはじめてだとみんなが申しました。シャアロンというばけものの高利貸でさえ、ああ実にペンネンネンネンネン・ネネムさまは名判官だ、ダニーさまの再来だ、いやダニーさまの発達だとほめた位です。
321	宮本百合子「獄中への手紙 06 一九三九年(昭和十四年)」	1979(昭和54)年10月20日	日記(一人称)	お母さん上出来	①	私→お母さん 下上 女→女	③	なし	あなたから手紙も来て安心した、とその前のおたよりでしたが。その三味線のことはお母さん上出来、とほめてさしあげるつもりです。私がよく「お母さんは出来ないことがないが、たった一つまだ出来ないのは、気をゆっくりお持ちになること」と云って笑っていたから、きっとそのことも出来ることになさろうというのね。
322	宮本百合子「獄中への手紙 06 一九三九年(昭和十四年)」	1979(昭和54)年10月20日	日記(一人称)	彼女の目が社会性をもっている	①	批評家→紫式部 対等 女→女	③	なし	そして、どうも日本の作家が十分参加する特権がありそうです、というのはね、この批評家紫式部をあげて彼女の目が社会性をもっているとほめているのですから。でもクスクス笑える。どこの批評家も、余りひとの知らない人物をひっぱって来るのは癖だと思って。あちらで式部、こちらでジイドというのかと思うと大笑いね。
323	宮本百合子「獄中への手紙 06 一九三九年(昭和十四年)」	1979(昭和54)年10月20日	日記(一人称)	こんどは真実味が云々	③	武麟さん→私 対等 女→女	⑤	なし	明日は図書館です。まさか休みではないでしょうね。武麟さん、この前妙なわるくちを云って、こんどは真実味が云々とほめている。(『朝日』)しかしいづれにしろ、俳諧の宗匠の点つけみたいな月評は下らない。木村という人の訳のブルージェを春陽堂がよこし、マフ(手を入れるもの、女の)それをハンケチとかき手套とかき、又もう一つにかいている。
324	宮本百合子「獄中への手紙 07」	1979(昭和54)年10月20日	日記(一人称)	「よりよい娘となって」	①	お母さん→多賀ちゃん 上下 女→女	④	なし	多賀ちゃんの方も、よくきませんが、Kという人に、はっきりといきさつを切った手紙、島田のお母さん宛の手紙と同封して送ったようです。サバサバしていると云われると、何だか却って私の方が苦しいようでもあります。でも、生活のひろい視野が出来て、考えかたがちがつたところもあるでしょうし、それでいいところもある。余り狭いなかで反撥しての選択でもあったでしょうから。しかし、何だかやはり私は苦しいところがあります、その手紙貰った男のひとの心を見ると。この人生に持っているいろいろの可能的相異(外部的なものとしての)を考えると、気の毒です。お母さんはおよろこびのようで、「よりよい娘となって」云々とほめたお手紙がありました。でも多賀ちゃんは面白い娘です、内へ内へと吸収してゆく性質です。そのために考えきれないほどで、初めはひどく疲れたと云って居ります。
325	宮本百合子「獄中への手紙 07」	1979(昭和54)年10月20日	日記(一人称)	トルストイの作品に匹敵する	①	房雄→平田 対等 男→男	①	なし	平田は、北京で頭一つ叩かれては五円借りて歩いている由。この平田がナウカのあった頃かいた「囚われた大地」という小説を、房雄はトルストイの作品に匹敵するとほめました。木星社に居た人。ですから私は評論集のときから知っていたから、「あなたもわるい時世に生れて、あんな小説をトルストイの云々ともち上げられる大不幸にめぐり合うのだから、しっかりしなさい」と云ったことがありました。
326	宮本百合子「獄中への手紙 07」	1979(昭和54)年10月20日	日記(一人称)	アラア何てお可愛いんでしょう	①	おひさ君→達ちゃん 対等 男→女	②	なし	そのうちに、おひさ君が久しぶりで水瓜をもって現れました。洋装でね、ずっとつとめて居ります。呉々よろしくとのことでした、お休いかがでしよう。達ちゃんの御婚礼の写真みせてやったら「アラア何てお可愛いんでしょう」とほめて居りました。自分たちのときはとらなかつたのですって。

327	宮本百合子「五〇年代の文学とそこにある問題」	1979(昭和54)年11月20日	評論(一人称)	文士も偉くなった	①	世間→文士 不問 不問	⑥	なし	「芸術家の方も自重しませんと……。終戦後のわれわれの恥を云えば、作家の態度が、一種のセンセーションナリズムをねらうみたいになってしまつてね。人の魂に小さな声で囁きかけてゆくのでは駄目で、往來の真ン中で、わあッと大声をあげる式でないと、声が聴えないのです。そのかわり大きな声をたくさん出せばいいわけです。明治以來こんなことは、はじめてでしょう。こんなに作家が大声をあげれば、あぶく銭がとれるのも、初めてのことでしょう。」「菊池寛と大臣の台所の費用が同じだと云つて、文士も偉くなったとほめられたものでしたが、今は大臣以上ですからね、大きな声を出しさえすれば……。」
328	会津八一「一片の石」	1980(昭和55)年1月	随筆(一人称)	貞女孝子	①	世間の人→大きい墓石に する人 不問 不問	⑥	なし	御参りをするといへば、まるでそれが故人であるやうに、その石を拝む。そして、その石が大きいほど貞女孝子と褒められる。貧乏ものは、こんな点でも孝行がむづかしい。
329	宮本百合子「獄中への手紙 09 一九四二年(昭和十七年)」	1980(昭和55)年3月20日	日記(一人称)	極楽極楽	①	私→土曜の夜 上下 女→(男)	⑥	なし	昨夜は新しく買ったベートーヴェンの「第九」を三人で聴いていると、太郎は大きいテーブルの下にもぐり込んでふとんにくるまり、コーラスの声々を聞きながら半分眠つてみかんを食べていました。大きくなってこんな土曜の夜を思い出したらどんなに懐かしいでしょうね。私はひどく感興を覚え、こっち側からのぞいて「極楽極楽」とほめてやりました。
330	宮本百合子「獄中への手紙 10 一九四三年(昭和十八年)」	1981(昭和56)年1月20日	日記(一人称)	みんなは、生れかわって一つの人に しては発育が良い	①	みんな→私 不問 不問→女	⑥	なし	でも、私が涙をこぼしたら、みんなはきっとそんなに私が喜ぶことをかえつて気の毒に思うだろうと思って、あんまりうれしくて恥しい恥しいと云つて気持を自分で持かえました。みんなは、生れかわって一つの人にしては発育が良いとほめて、お杯をあげてくれました。その杯のひとつくみの中の一つが、私達御秘蔵の真丸のもので、そのつれの杯をあげながら、私は、あのまん丸の杯が、矢張りキラキラ光りながら私のために上げられているのを感じました。
331	永井荷風「桑中喜話」	1981(昭和56)年11月～1982(昭和57)年3月	随筆(一人称)	旦那はほんとにいいお声だよ。すみ には置けませんよ	②	芸者→旦那 不問 女→男	③	なし	あたかも大正の今日西洋料理の宴会に臨むもの、何処でおぼえて来るものやら知らねど、大抵テーブルスピーチとかいふものを心得あるが如し。往時宴会の隠芸は愚劣なれども滑稽にして罪はなし。旦那はほんとにいいお声だよ。すみには置けませんよと芸者にほめらるるを生涯の面目とはなせしなり。今日青年諸君の好んで為さるるテーブルスピーチに至つては弁巧と才氣とをこれ見よがしの振舞さてもさても片腹痛し。
332	高山毅「福沢諭吉 ペンは剣よりも強し」	1981(昭和56)年11月19日	伝記(三人称)	ほほう。本場の長崎で勉強しただけ あつて、きみは、よみかたがうまい。	②	先生→諭吉 上下 男→男	③	なし	先生がさしだした本を、諭吉はしばらくみていましたが、やがてよみはじめました。これまでに勉強したことをおもいだしながら、日本語にほんやくしていきました。「ほほう。本場の長崎で勉強しただけあつて、きみは、よみかたがうまい。」とほめてくれたので、諭吉がおもわずにっこりしますと、「だが、どうも、きみは正式な勉強をしてないようだね。土台がしっかりしていない。外国語のいみをたたくみとるには、文法、つまりことばのきまり、やくそくだね、それをよくしつていなければいけない。文法は文章の土台だ。きみは、文法を、あたらしく第一歩からやりなおすひつようがあるね。」といわれ、がっかりしてしまいました。
333	高山毅「福沢諭吉 ペンは剣よりも強し」	1981(昭和56)年11月19日	伝記(三人称)	いや、これは、まったくすばらしい本です。それを二十三両でお買いになったなんて、ほんとうにほりだしものです。オランダ語の勉強がうんとすすまれたから、こういうほりだしものをみつづられたんですね、きっと。わたしなどには、一年や二年でよみとおせるものではございません。	②	諭吉→壺岐 下上 男→男	①	A	諭吉は、大阪の適塾で、医学や物理の本をみたことはありますが、まだ築城書をみたことはありません。それに、ペリーがきてからは、日本国じゅうで、海のまもりや、陸の城づくりの話で大さわぎをしているときでしたから、諭吉は、いっそうこの本をよんでみたくになりました。しかし、かせといったところで、かしてくるはずはありません。でも、うまくおだてたら、ひよっとしたら、という考えがうかんだので、「いや、これは、まったくすばらしい本です。それを二十三両でお買いになったなんて、ほんとうにほりだしものです。オランダ語の勉強がうんとすすまれたから、こういうほりだしものをみつづられたんですね、きっと。わたしなどには、一年や二年でよみとおせるものではございません。けれども、せめて、絵圖ともくじだけでも、一とおりはいけんしたいものですが、いかがでしょう、四、五日、かしていただけませんか。」おもいきつて、こう、きいてみました。すると、壺岐は、ほめられたのが、よほどうれしかったとみえて、「ああ、いいとも。四、五日でよいなら、もつていきなさい。」といいました。よろこんだ諭吉は、壺岐の気持ちがかわらぬうちにと、原書をだいににかかえて、いそいで家にかえってきました。
334	高山毅「福沢諭吉 ペンは剣よりも強し」	1981(昭和56)年11月19日	伝記(三人称)	なるほど、そうか。やはり、大阪じこみ はたいしたものだ。	①	島村→諭吉 上下 男→男	③	なし	そこで諭吉は、三十分ばかりかんがえているうちに、ちゃんとわかつてきたので、島村にせつめいしてやりますと、「なるほど、そうか。やはり、大阪じこみはたいしたものだ。」と、諭吉の力をほめてくれました。これで、蘭学は大阪のほうがすすんでいたことがわかり、諭吉は、心の中でほんととあんしんしました。
335	高山毅「福沢諭吉 ペンは剣よりも強し」	1981(昭和56)年11月19日	伝記(三人称)	自分のわかったことに気がついて、 あらためるというのは、りっぱなこと だ。	②	諭吉→二人 上下 男→男	⑤	なし	これをきいて、宋太郎は、「朝吹はけしからんやつだ。」と、はらをたてましたが、その宋太郎も、自分のわかったことをさとして、諭吉にあやまり、やがて慶応義塾にはいってきました。「自分のわかったことに気がついて、あらためるというのは、りっぱなことだ。」と、諭吉は、二人をほめました。

336	高山毅「福沢諭吉 ペンは剣よりも強し」	1981(昭和56)年11月19日	伝記(三人称)	それはえなかったね。では、ごほうびをあげよう。	①	福沢→子供 上下 不問→男	⑤	なし	それよりも、小さな子どもが、「きょうは、遠足があつて、とてもとおかつたけれど、がんばつてあるいて、先生にほめられました。」とか、その上の子が、「きょうは、たいそうがあつて、走りきょうそうで一ばんになりました。」とかいうと、「それはえなかったね。では、ごほうびをあげよう。」 こういったちょうしで、勉強よりも、うんどうができたほうが、ほめられるのです。
337	宮本百合子「芽生」	1981(昭和56)年11月25日	小説(一人称)	泳ぎ出しの姿がいい	①	あの娘→己 対等 女→男	②	なし	「あの沼に居た頃は、マアどんなに嬉しい事ばかりだったか——己は、あのしおらしいな姿をして居た娘を、どれほど可愛がつて居たんだか——あの娘も己を思つて居て呉れたんだ。己達はいつも二人並んで歩いたり泳いだりして居たっけが人様よりも美しい毛色をもつた己はいつも仲間からうらやまれて居た。泳ぎ出しの姿がいいとほめたのもあの娘だったし、好い事があるときつと自分をよんだのもあの娘だった。別れてからこんなに時が立つても己には忘れないほどあの娘は私の心に喜びを与えて呉れたんだつた。けれ共——あの娘は今どこに居るか、生きて居るか、死んで居るかという事さえ分らないじゃあないか……」
338	佐々木味津三「右門捕物帖 28 お蘭しごきの秘密」	1982(昭和57)年9月15日	小説(三人称)	ちつと	③	伝六→不問 不問 男→不問	なし	なし	さっそくことばどおり手踊り見物でもやるかと思ひのほかに、名人はそのままくりと背を向けて寝そべると、伝六などにはさらにおかまいもなく、もぞりもぞりとあごの下をではじめました。「くやしいね。なんてまた色消しなまねするんでしょうね。ちつとほめると、じきにその手を出すんだからね。え！　ちよいと！　起きなせえよ！」 「……………」 「ね！　だんな！　——むかむかするね。酒の味が変わるじゃござんせんかよ、ゆうべ夜中までかかつて、せっかくあつしがこせえたごちそうなんだ。せめてひと口くれえ、義理にもつまんでおくんせえよ」
339	幸田露伴「東西伊呂波短歌評釈」	1983(昭和58)年4月	随筆(一人称)	よめ	①	西→不問 不問 不問	なし	なし	東　よしのずゐから天を覗く 西　よめとほめ 葎管より天を窺ふは、管小に過ぎ天大に過ぎて尽す可きにあらず、夜眼遠眼、凡を過つて美となすことあり信ず可からず、二者意相似て聊か異なり。
340	横村浩「小犬と太郎さん」	1984(昭和59)年1月20日	小説(三人称)	何、可愛い小犬だナア	①	お父さん→犬 不問 男→動物	なし	なし	「そんなら銭を出すが売ってくれまいか」「ホウ銭を出すといふのか、では三十銭おいて行け」「高い二十銭にせぬか」「よしハハハハうまいもうけだ」とかけ舌を出した。太郎は家へ帰ると、「お父さんコレ、コノ犬を買つて来たよ」「何、可愛い小犬だナア」お父さんはしきりにその犬をほめて居ました。小犬はかはいらしい目をバチ／＼させながらお父さんにじゃれつきました。「アハさうだ、お父さん馬に草をやらねばならないのだから」「アハさうだ、それではやってくるがい」」「ではうらへ行つて来ます」と出かけると、二匹の犬は其の後をなつかしさうに尾をふり乍らついて行つた。
341	佐左木俊郎「骨を削りつつ歩む——文壇苦行記——」	1984(昭和59)年4月14日	随筆(一人称)	佐々木にしてはうまいものだ	①	今村先生→私 上下 男→男(もの)	①	なし	それに私は、前に学郎さんと一緒に甲州の方へ十日間ばかり旅行して、その時のことを学郎さんと二人で「甲斐の旅」という紀行文を作って、今村先生からほめられた事があつた。それから、この年の二月、未だ病気をしなかつた頃に、今村家を中心として拵えた「流汗主義」という論文的な文章を雑誌「樹蔭」に書いて、この時も今村先生からほめて頂いた。そうで無くてさえ、文学には有頂天だったのだから、佐々木にしてはうまいものだと言う今村先生のおほめを、自分で全かり佐々木はうまいものだ！　にしてしまつて、下手の横好きという俗諺の通りに、私は到頭、文章家として立とうと決心したのであつた。大正九年の初秋、玉蜀黍の葉末に、秋らしい微風の音を聞く頃……。
342	岡本綺堂「半七捕物帳 61 吉良の脇指」	1986(昭和61)年10月20日	小説(一人称)	見事見事	①	わたくし→鶴吉 上下 男→男	③	なし	芝居ならば、わたくしが座頭役で、白扇でも開いて見事見事と褒め立てようと云うところです。わたくしもまあ、これで重荷をおろしたような氣になりました。
343	岡本綺堂「半七捕物帳 63 川越次郎兵衛」	1986(昭和61)年12月20日	小説(三人称)	大出来	①	みんな→三八 上下 不問→男	③	なし	その芝居が万事とどこおりなく運んで、みんなからも大出来と褒められて、約束の五十両を貰つて、三八はいい心持で引き退つたのですが、ここに又一つの面倒が起りました。
344	下村湖人「次郎物語 05 第五部」	1987(昭和62)年5月30日	小説(三人称)	正直だ	①	大河無門→塾生 上下 男→男	④	なし	「その意味で、銀座に行くのは、正直でいいじゃありませんか。少なくとも、うそを本気でやるよりはいいことでしょう。」 「かといって、正直だとほめてやるほどのこともなさそうですね。」 二人は声をたてて笑つた。次郎は、しかし、笑いながら、道江のことでなやんでいる自分が何かあわれなもののように感じられて、いやにさびしかった。

345	長塚節「長塚節歌集 1 上」	1987(昭和62)年8月20日	詩歌	しぎつき人つき網もち	③	なし	なし	なし	※(「禾＋魯」、第3水準1-89-48)田におり居の鳴、しぎつき人つき網もち、とほめぐりいや近めぐり、めぐれども羽叩もせず、鳴はをらずや、鳴は居れどかくれて居りと、おのれ見ゆらくを知らに、稲莖に嘴をさしいれ、さし入れてかくれて居りと、網でとられきや、
346	中島敦「弟子」	1987(昭和62)年9月	小説(三人称)	仁人	①	不問→比干 不問	④	なし	「それは何も一身の保全ばかりが大切とは言わない。それならば比干を仁人と褒めはしないはずだ。但、生命は道のために捨てるとしても捨て時・捨て処がある。それを察するに智をもってするのは、別に私の利のためではない。急いで死ぬるばかりが能ではないのだ。」
347	菊池寛「恩を返す話」	1988(昭和63)年3月25日	小説(三人称)	良い兜でござる	①	惣八郎→甚兵衛 対等 男→男	③	なし	三月の二日、細川の軍勢は熊本に引き上げた。翌上巳の日に、従軍の将士は忠利侯から御盃を頂戴した。甚兵衛も惣八郎も、百石の加増を賜った。その日、殿中の廊下で甚兵衛は惣八郎に会った。惣八郎は晴々しい笑顔を見せながら、「御同様に、おめでたいことでござる」といった。甚兵衛は、戦場で「良い兜でござる」と褒められた時と同じ程度の侮辱を味わった。太平の日が始まる。
348	菊池寛「忠直卿行状記」	1988(昭和63)年3月25日	小説(三人称)	天晴仕出かした。今日の一番功ありてこそ誠にわが孫じゃぞ。御身の武勇唐の樊にも右わ勝りに見ゆるぞ。まことに日本樊 とは御身のことじゃ	②	家康→忠直卿 上下 男→男	⑤	なし	家康は牀几に倚って諸大名の祝儀を受けていたが、忠直卿が着到すると、わざわざ牀几を離れ、手を取って引き寄せながら、「天晴仕出かした。今日の一番功ありてこそ誠にわが孫じゃぞ。御身の武勇唐の樊にも右わ勝りに見ゆるぞ。まことに日本樊 とは御身のことじゃ」と、向う様に褒め立てた。一本気な忠直卿は、こう褒められると涙が出るほど嬉しかった。彼は同じ人から昨日叱責された恨みなどは、もう微塵も残っていなかった。
349	菊池寛「忠直卿行状記」	1988(昭和63)年3月25日	小説(三人称)	さすがは武士じゃ。見事な最期じゃ	①	家中の者→二人の武士 不問 不問→男	⑤	なし	横目付からその届出があると、忠直卿は手にしていた杯を、ぐっと飲み干されてから、微かな苦笑を洩されたまま、なんとも言葉はなかった。家中一同の同情は、翕然として死んだ二人の武士の上に注がれた。「さすがは武士じゃ。見事な最期じゃ」と、褒めそやす者さえあった。が、人々はこの二人を死せしめた原因を、ただ不可抗力な天災だと考えていた。一種の避くべからざる運命のように思っていた。
350	小熊秀雄「小熊秀雄全集-15 小説」	1990(平成2)年11月15日	小説(三人称)	勇士だ	①	人々→望楼の男 不問 不問→男	⑤	なし	間もなく洪水は収まり、人々は果樹園に帰ってきた、人々はこのお喋り男の、英雄的な勇敢な行為と、果樹園への奉仕ぶりに感動して、勇士だと褒めた。
351	小熊秀雄「小熊秀雄全集-15 小説」	1990(平成2)年11月15日	小説(一人称)	上でき	①	大人達→子供の私 上下 不問→男	③	なし	かうしたことで小さな頭の中がいつぱいになつてゐた。私の答弁は、確に不満であつたらしい、しかし、子供達の答として上できとほめてやらねばなるまい。それに子供達は、妹や弟が生れる時にかぎつて、必ず追ひ出すやうに遊びにやられる。
352	海野十三「宇宙戦隊」	1991(平成3)年5月31日	小説(三人称)	貴重な資料だ	①	帆村荘六→資料 上下 男→男(もの)	①	なし	児玉法学士は、例の怪物が水蒸気のように消え去るところを目撃した、貴重な人物であるが、室戸博士はそれを信じてくれない。しかるに帆村荘六だけは、たいへんに真面目に、その話を聞いてくれ、そしてそれは貴重な資料だとほめてくれるのである。そこで児玉法学士は、帆村荘六が好きになったが、その他見ていると、帆村の熱心なこと、普通の人が考えていないようなことを考えていることなどに、だんだん尊敬の念を抱くようになった。
353	幸田露伴「野道」	1992(平成4)年3月20日	小説(一人称)	春の景色だ	③	自分→馬糞 不問 男→もの	なし	なし	今はじまったことでは無いが、自分は先輩のいかにも先輩だけあるのに感服させられて、ハイなるほどそうですネ、ハイなるほどそうですネ、と云っていると、東坡巾の先生は飄然として笑出して、君そんなに感服ばかりしていると、今に馬糞の道傍に盛上がつているのまで春の景色だなぞと褒めさせられるよ、と戯れたので一同哄然と笑声を挙げた。
354	岡本綺堂「玉藻の前」	1992(平成4)年3月20日	小説(三人称)	お身も大事の使いを果たしてくれて、いこう大儀であった	②	泰親→千枝太郎 上下 男→男	⑤	なし	閑白の屋形の門前で二人は別れた。千枝太郎が師匠の家へ戻り着いた頃には、夜もよほど更けていた。泰親はまだ眠らずに待っていたので、千枝太郎はすぐに師匠の前へ出て、今夜の使いの結果を報告すると、泰親は笑まげにうなずいた。「少納言の御芳志は海山じゃ。泰親もよみがえったような心地がする。お身も大事の使いを果たしてくれて、いこう大儀であった」こう言ううちに、泰親の眉がだんだん陰ってきたのを、若い弟子はちっとも気がつかなかった。彼は師匠に褒められたのを誇りとして、自分の部屋へしずかに引き退がった。玉藻に就いて考えたいことがたくさんあったが、今夜の彼はあまりに疲れていたので、枕に就くとすぐに安らかに眠ってしまった。

355	夢野久作「豚吉とヒヨロ子」	1992(平成4)年5月22日	小説(三人称)	それはよいことをなさいました	①	ヒヨロ子→豚吉 対等 女→男	⑤	なし	豚吉も嬉し泣きに泣きながら、脱いだ着物を着て、最前のめしやに帰って来て、ヒヨロ子に今までのことをお話ししますと、ヒヨロ子も涙を流して喜んで、「それはよいことをなさいました」とほめました。ところが、いよいよ御飯の代金を払おうとしますと、豚吉のお金入れが見当りません。これはきっと最前の井戸のところに落して来たに違いないと思って、又探しに行ってみましたが、そこにもありません。
356	岡本綺堂「中国怪奇小説集 07 白猿伝・其他(唐)」	1994(平成6)年4月20日	小説(三人称)	感心な女だ	①	世間→三娘子 不問 不問→女	⑤	なし	そんな店に似合わず、家は甚だ富裕であるらしく、驢馬のたぐいを多く飼っていて、往来の役人や旅びとの車に故障を生じた場合には、それを牽く馬匹を廉く売ってやるので、世間でも感心な女だと褒めていた。そんなわけで、旅をする者は多くここに休んだり、泊まったりして、店はすこぶる繁昌した。
357	岡本綺堂「中国怪奇小説集 05 酉陽雜俎(唐)」	1994(平成6)年4月20日	小説(三人称)	君はかの悪僧らをうまく処置してくれた	①	帝→寧王 上下 男→男	③	なし	帝はその奏聞を得て大いに笑った。すぐに寧王のもとへその事を知らせてやって、君はかの悪僧らをうまく処置してくれたと褒めた。少女は新しい唄を歌うのが上手で、莫才人囀と言いはやされた。
358	與謝野晶子訳 紫式部「源氏物語 梅が枝」	1994(平成6)年6月15日	小説(三人称)	このごろの微風に焚き混ぜる物としてはこれに越したにおいはないでしょう	③	宮→源氏 下上 女→男(もの)	①	なし	紫の女王のは三種あった中で、梅花香ははなやかで若々しく、その上珍しく冴えた気の添っているものであった。「このごろの微風に焚き混ぜる物としてはこれに越したにおいはないでしょう」と宮はおほめになる。花散里夫人は皆の競争している中へはいることなどは無理であると、こんなことにまで遺憾なく内気を見せて、荷葉香を一種だけ作って来た。
359	與謝野晶子訳 紫式部「源氏物語 梅が枝」	1994(平成6)年6月15日	小説(三人称)	よくこんないろいろなふうにお書きになれたものですね。近ごろの人はほんのこの一部分の仕事をするのに骨を折っているという形ですね	②	源氏→左衛門督 下上 男→男(もの)	③	なし	台を短くした灯ひを置いて二人で見ておいでになったが、「よくこんないろいろなふうにお書きになれたものですね。近ごろの人はほんのこの一部分の仕事をするのに骨を折っているという形ですね」などと源氏はおほめていた。この二種の物は宮から源氏へ御寄贈になった。「女の子を持っていたとしても、たいしてこうした物の価値のわからないような子には残してやりたくない気のする物ですからね。それに私には娘もありませんから、お手もとへ置いていただいたほうがよい」などと宮はお言いになったのである。源氏は侍従へ唐本のりっぱなのを沈じんの木の箱に入れたものへ高麗こま笛を添えて贈った。
360	岡本綺堂「綺堂むかし語り」	1995(平成7)年8月20日	小説(一人称)	健気な娘だ	①	私→象潟の商人の娘 不問 男→女	④	なし	哀れとも無残とも云いようがない。私はこんな話を聞くと、身震いするほどに怖ろしく感じられてならない。わたしは決してこの娘を非難しようとは思わない。むしろ世間の人並に健気な娘だと褒めてやりたい。しかもこの可憐の娘を駆っていわゆる「健気な娘」たらしめた其の時代の教えというものが怖ろしい。
361	森鷗外訳「ファウスト FAUST. EINE TRAGODIE ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe」	1996(平成8)年2月22日	戯曲(三人称)	お美しい	①	不問→お后様 下上 不問→女(もの)	②	なし	どうぞお后様、お持になっっていらっしゃる一番尊い物をお嫌なさいますな。一番大きい為合はあなたお一人でお受になりました。誰よりもお美しいと云うお誉でございます。英雄は名を轟かして、息張って歩いて行きますが、その強情も、あらゆる物に打ち勝つ美の前には意を曲げてしまいます。
362	森鷗外訳「ファウスト FAUST. EINE TRAGODIE ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe」	1996(平成8)年2月22日	戯曲(三人称)	そを功あり	①	われ等→殿さま 下上 男→男(もの)	①	なし	なぞとや仰する。われ等はそを功ありとし、褒めます値ありと思へり。わら等が造りなせる、このかどやく花は四つの時絶間なく咲きへり。
363	知里幸恵「日記」	1996(平成8)年10月1日	日記(一人称)	うん	③	商人らしいりっぱな人→自分の妻 対等 男→女	⑥	なし	夜本郷キリスト教会の祈祷会に奥様のお許しを得て出席した。男は牧師を入れて七人、女は私と八人、女の子が二人ゐた。ちっとも熱のない会のように思はれた。私は何故こんな心になったのだらう……。兵隊さんあがりの商人らしいりっぱな人の信仰の証言があった。それは自分の妻をうんとほめそやしたものであった。

364	大久保ゆう訳「赤毛連盟 THE RED-HEADED LEAGUE アーサー・コナン・ドイル Arthur Conan Doyle」	1999(平成11)年4月	小説(三人称)	おや、へえ。貴様らにしてはよくやったもんだ。	①	ジョン・クレイ→ホームズ 上下 男→男	⑥	C	「無駄だ、ジョン・クレイ。」ホームズの穏やかな声。「君に反撃の余地はない。」 「どうやらそうらしい。」相手は極めて冷静に答えた。「だが、俺の仲間はずまく逃げおおせたようだ。服の端だけを貴様の手みやげにしてな。」 「表には三人の警官が待ちかまえている。」ホームズは告げた。 「おや、へえ。貴様らにしてはよくやったもんだ。お褒めの言葉を掛けてやろう。」 「それをそっくり君に返そう。」ホームズは答える。「君の赤毛連盟、斬新で効果的だった。」 「お前もすぐ仲間に会わせてやるよ。」ジョーンズが横から口を挟む。「あいつ、穴潜りにかけては俺よりもうまいようだ。手を差し出せ、手錠をはめてやる。」「貴様の不潔な手で、俺に触れてくれるな。」我々に包囲された犯人は言葉を吐き捨てたが、すぐに手錠をはめられた。
365	大久保ゆう訳 「はだかの王さま THE EMPEROR'S NEW SUIT ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen」	1999(平成11)年12月24日	童話(三人称)	これは王さまにふさわしい美しさだ！	①	みんな→王様の服 下上 不問→男(もの)	①	なし	「王さま、この布で作ったりっぱな服を、ちかぢか行われる行進パレードのときにおめしになってはどうでしょう。」と、誰かが王さまに言いました。そのあと、みんなが「これは王さまにふさわしい美しさだ！」とほめるものですから、王さまも役人たちもうれしくなって、大さんせいでした。そして王さまは、二人のさぎ師を「王国とくべつはた織り士」と呼ばせることにしました。
366	大久保ゆう訳 「はだかの王さま THE EMPEROR'S NEW SUIT ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen」	1999(平成11)年12月24日	童話(三人称)	この世のものとは思えなく美しい柄、言いあらわしようのない色合い、すばらしい、りっぱな服だ！	①	みんな→王様の服 下上 不問→男(もの)	①	なし	「何と美しい！ ……よくおにあいです！」 その場にいただれもがそう言いました。 「この世のものとは思えなく美しい柄、言いあらわしようのない色合い、すばらしい、りっぱな服だ！」と、みんなほめたたえるのでした。 そのとき、パレードの進行役がやって来て、王さまに言いました。「行進パレードに使うてんがい(王さませんようの大きな日がさ)が準備できました。かつぐ者たちも外でいまやいまと待っております。」
367	西府章「対州風聞書」	2000年3月24日	小説(三人称)	さすが専門家だけのことはあるね	①	阿紗子→専門家 不問 女→男(もの)	③	なし	そう言って馬場はもう一度まわりを見渡した。「このあたり一帯は新旧とり混ぜ、廃坑だらけじゃないかなあ」「『はいこう』って？」「廃止された鉱山や使われなくなった坑道のこと——学校で習わなかったか？」「習わなかった」自信をもって阿紗子が答えた。「さすが専門家だけのことはあるね」すこしおさなりに阿紗子が褒める。「宿舎まで行きましよう。すぐ近くですから」頃合いをみて、山上が先を促す。
368	竹内浩三「愚の旗」	2001(平成13)年11月30日	詩歌(三人称)	印象派だ	①	人→彼 不問 不問→男(もの)	①	なし	人は、彼の画を印象派だと言ってほめそやした。 彼は、モデルなしで、それにデッサンの勉強をなんにもせずに、女の画をかいていたからであった。
369	神西清「水と砂」	2008(平成20)年10月5日	小説(三人称)	すごいわね。五郎さん。	①	真弓→五郎 対等 女→男	③	なし	五郎はニヤリと笑つて、悠容とギターを傍に置いた。一座は再びたくみに転換されようとした。「すごいわね。五郎さん。」真弓がお世辞つきのない褒め方をした。五郎は瞬間の仮面を手際よく脱ぐために、敷島に火を点じたが、すかさず庭さきの光代に話を向けた。「ね、光代さん。うまくなつたでせう。」所が案外にもすなをに、「よかつたわ。」と答へられたので、いささか虚を衝かれた形だつたが、英子がそばから、「兄さんはあれつきりなのよ。朝から晩までセヴァストポールなの。」とまぜつ返したのを機会に、一座は華やかに笑ひ崩れた。糸は見事元の通りにほぐされてしまつた。
370	中島英之訳「ゴリオ爺さん Le Pere Goriot バルザック Honore de Balzac」	2015(平成27)年3月1日	小説(三人称)	私がこの若者に惹かれ、私が感動するのは、彼の魂の美しさが彼の姿の美しさによく調和しているからなんですよ。見て下さい、天使ケルビムが、こちらの天使の肩の上に休んでいるんじゃないですか？ 彼は愛されるに相応しい、天使ケルビムです！ もしも私が女だったら、私は死んでもいい、いや、そんな馬鹿は嫌だ！ 彼のために生きたい。	②	ヴォートルン→ウージェーヌ 上下 男→男	④	なし	ちょうどこの時、ヴォートルンが至極上機嫌で入ってきた。そしてランプの光が柔らかに照らす二人の子供によって構成された絵の様な光景を目にした。「よーし」彼は腕を組みながら言った。「そうら“ポールとヴィルジニー”を書いたあの善良なベルナダン・ド・サンビエールの美しい頁によって鼓舞されたのか、ともかく、ここにそういった場面が展開している。若さとは実に美しいもんですな、クチュール夫人」彼はウージェーヌをじっと見つめながら言った。「ねえ君、眠るんだ。果報は寝て待てだ。奥さん」彼は寡婦の方に向いて言った。「私がこの若者に惹かれ、私が感動するのは、彼の魂の美しさが彼の姿の美しさによく調和しているからなんですよ。見て下さい、天使ケルビムが、こちらの天使の肩の上に休んでいるんじゃないですか？ 彼は愛されるに相応しい、天使ケルビムです！ もしも私が女だったら、私は死んでもいい、いや、そんな馬鹿は嫌だ！ 彼のために生きたい。こんな風に彼のことを褒め称えていると、奥さん」彼は声を低くして寡婦の耳許にかがみこみながら言った。「私は神様が彼等をお互いに惹かれあうようにお作りになったんだと、どうしても考えてしまうんですよ。神は上手く隠された方法を知っておられる。神は腎臓や心臓まで検査される」彼は声を高くして叫んだ。